宗典部

第三巻

BL 1411 T8J3 1929 v.27

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 27

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第三卷

淨土宗聖典 目次

選擇本願念佛集……法然上人撰……一
第一章……一
第二章……七
第三章……一五
第四章……二四
第五章……二九
第六章……三二
第七章……三四
第八章……三六
第九章……四九

第十章……五三
第十一章……五四
第十二章……五九
第十三章……六八
第十四章……六九
第十五章……七二
第十六章……七三
和語燈錄……法然上人撰……八一
卷第一……八一
三部經釋……八一
御誓言の書……九四
往生大要抄……九五
卷第二……一一五
念佛往生要義抄……一一五
三心義……一二三

七箇條起請文……一二五
念佛大意……一三二
淨土宗略抄……一四二

卷第三……一五八
九條殿下の北政所へ進ずる御返事……一五八
鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事……一五九
要義問答……一六四
大胡太郎實秀へつかはす御返事……一八〇

卷第四……一九一
大胡の太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事……一九一
熊谷入道へつかはす御返事……一九六
津戸三郎入道へつかはす御返事……一九七
黑田の聖人へつかはす御文……二〇一
越中國光明房へつかはす御返事……二〇二
正如房へつかはす御文……二〇三

禪勝房にしめす御詞……二一〇
十二問答……二一一
十二箇條問答……二二六
卷第五……二三五
一百四十五箇條問答……二三五
上人と明遍との問答……二四七
諸人傳說の詞……二四九
拾遺和語燈錄……法然上人撰……二六一
卷上……二六一
登山狀……二六一
或人に示されける詞……二七七
津戶三郎へつかはす御返事……二七九
或女房に示されける法語……二八五
卷下……二八七
念佛往生義……二八七

東大寺十問答……二九一
御消息……二九五
ある人のもとへつかはす御消息……三〇四
熊谷の入道へつかはす御返事……三〇四
ある時の御返事……三〇六
往生淨土用心……三〇七
末代念佛授手印……辨阿上人撰……三一九
歸命本願鈔……向阿上人撰……三三五
西要鈔……向阿上人撰……三七〇
父子相迎……向阿上人撰……四〇一
來迎和讃……四二七
圓光大師和讃……四三一
愚要鈔……明秀上人撰……四三七

淨土宗聖典

宗典部
第三卷

選擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

往生の業には
念佛を先とす

第一章　道綽禪師聖道淨土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文。

第一　『安樂集』の上に云はく、「問うて云はく、(一)一切衆生、皆佛性あり。遠劫よりこのかた多佛に値ふべし。何によりてか今に到るまで、なほ自ら生死に輪廻して、火宅を出でざる。」答へて云はく、「大乘の聖教に依るに、良に二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何をか二とす。一には謂はく聖道、二には謂はく往生淨土なり。

(二)その聖道の一種は、今時證し難し。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理深く解微なるによる。この故に『大集月藏經』に云はく、「わが末法時中に、億々の衆生、行を起し道を修せんに、未だ一人も得るものあらじ」と。當今は末法、現に是れ五濁惡世なり。ただ淨土の一門のみありて、通入すべき路なり。この故に『大經』に云はく、「もし衆生ありて、たとひ一生惡を造るとも、命終の時に臨みて、十念相續して、我が名字を稱せ

【第一章】聖道淨土二門篇。

【道綽禪師】支那幷州汶水の人、姓は衛氏。十四歳にして出家し、專ら涅槃經を講ぜしが、後曇鸞の碑文を見て感ずる處あり、涅槃宗をすて、淨土教を奉ず。時に歳四十八。爾來稱名日課七萬遍、貞觀十九年四月廿四日汶水巖谷の玄中寺に寂す。壽八十四。著安樂集二卷あり。

【安樂集】道綽禪師の著。上下二卷淨土往生の思想を宣ぶ。內容は十二門に分てり。

【一切衆生皆佛性あり】一切の生けるものは皆眞如實相たる佛となるべき本性を有すること。涅槃經に一切衆生悉有佛性の語あり。

【生死】生き替り死に替る迷の世界

【輪廻】迷の世界たる三界六道をめぐり廻ること。

【火宅】苦熱を斷えざる迷の世界を譬へて云ふ。法華經に「三界は安きことなし猶火宅の如し」の文あり。

【大聖】大聖釋尊の意。

【末法】佛教がこの世に行はる期間を正法、像法、末法の三時に分つ。中の第三にして佛滅一千五百年以後一萬年間を云ふ。此期間は佛教次第に衰微する時代なり。

【五濁】世に流るる五種のいまはしきこと。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

【大經】無量壽經の異稱。第十八願の文を引く。

【眞如實相第一義空】眞如も實相も第一義空も共に眞理の別稱。前の佛性に同じ。

ん に、若し生ぜずば正覺をとらじ」と。

(三)又復一切の衆生、すべて自ら量らず。もし大乘に據らば、眞如實相第一義空、曾て未だ心に措かず。若し小乘を論ぜば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢に、五下を斷じ五上を除くこと、道俗を問ふことなく、未だ其の分あらず。縱ひ人天の果報あれども、皆五戒十善によりて、能くこの報を招く。然るに持ち得るもの甚だ稀なり。もし起惡造罪を論ぜば、なんぞ暴風駛雨に異らん。ここをもって諸佛の大慈、勸めて淨土に歸せしめたまふ。たとひ一形惡を造るとも、ただ能く意を繫けて、專精に常に能く念佛すれば、一切の諸障自然に消除して、定めて往生することを得。何ぞ思量せずして、すべて去る心なきや。」

私釋　私に云はく、【一】竊におもんみれば、立教の多少は宗に隨って同じからず。且く有相宗の如きは、三時教を立てて一代の聖教を判ず。いはゆる有、空、中これなり。無相宗の如きは、二藏教を立てて以て一代の聖教を判ず。所謂菩薩藏、聲聞藏これなり。華嚴宗の如きは、五教を立てて一切の佛教を攝す。所謂小乘教、始教、終教、頓教、圓教、これなり。法華宗の如きは、四教、五味を立てて以て一切の佛教を攝す。四教とは所謂藏、通、別、圓是なり。五味とは所謂乳、酪、生、熟、醍醐これなり。眞言宗の如きは、二教を立てて一切を攝す。所謂顯教密教これなり。

(二)今この淨土宗は、若し道綽禪師の意に依らば、二門を立てて一切を攝す。所謂聖道門、淨土門これなり。

【見諦修道】以下小乘の修行をあぐ。小乘は三道四果を經て三界の惑を斷ず。三道とは見道、修道、無學道の三。四果とは須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果の四。今見諦修道とは見道修道をさし、乃至那含羅漢とは阿那含果、阿羅漢果を指し、之に依つて小乘の三道四果をあらはせり。

【那含羅漢】那含は阿那含の略。アナーガーミン(Anāgāmin)不還不來等と譯す。欲界の修惑を斷盡したる聖者再び欲界に還らざるを以て不還果と稱す。羅漢は阿羅漢の略。アルハーン(Arhan)應供、殺賊、無生等と譯す。三界の煩惱を斷盡して世間の供養をうくるに堪ゆる聖者を云ふ。

(三)問うて云はく、「夫れ宗名を立つることはもと華嚴天台等の八宗九宗にあり。未だ淨土の家において、その宗名を立つることを聞かず。然るに今、淨土宗と號すること何の證據ありや。」答へて曰はく、「淨土の宗名、その證一にあらず。元曉の『遊心安樂道』に云はく、「淨土宗の意はもと凡夫の爲にし兼ては聖人の爲にす」と。又慈恩の『西方要決』に云はく「此の一宗竊に要路とす」と。その證かくの如し。疑端とするに足らず。

【二】但し諸宗の立教は今の正意にあらず。しばらく淨土宗につきて、略して二門を明さば、一には聖道門、二には淨土門なり。

(一)初に聖道門とは、これにつきて二あり。一には大乘、二には小乘なり。大乘の中に就いて、顯密、權實等の不同ありと雖も、今此の集の意、ただ顯大および權大を存す。故に歷劫迂廻の行に當る。是に準じて之を思ふに、密大および實大を存すべし。然れば則ち今眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論。此れらの八家の意、正しくこれにあり。知るべし。次に小乘とは、總てこれ小乘の經律論の中に明す所の、聲聞、緣覺の斷惑證理、入聖得果の道なり。上に準へてこれを思ふに、また倶舍、成實、諸部の律宗を攝すべきのみ。凡この聖道門の大意は、大乘および小乘を論ぜず、この娑婆世界の中において、四乘の道を修して、四乘の果を得るなり。四乘とは、三乘の外に佛乘を加ふ。

【五下】具には五下分結と云ふ。欲界の煩惱なり。身見、戒禁取見、疑、欲貪、瞋恚の五。この煩惱は衆生を下欲界に結縛して解脱せしめざるを以て五下分結と云ふ。

【五上】具には五上分結と云ふ。色界無色界の煩惱なり。色愛、無色愛、掉擧、慢、無明の五。この煩惱は衆生を上二界に結縛して解脱せしめざるを以て五上分結と云ふ。

【五戒十善】五戒は不殺生戒、不偸盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒。十善は十善戒とも云ひ不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十。

【一形】一期と云ふに同じ。一生涯のこと。

（二）次に往生淨土門とは、これに就いて二あり。一には正しく往生淨土を明せる教、二には傍に往生淨土を明せるの教なり。

初に正しく往生淨土を明せる教とは、謂はく三經一論これなり。三經とは、一には『無量壽經』、二には『觀無量壽經』、三には『阿彌陀經』なり。一論とは、天親の『往生論』これなり。或はこの三經をさして淨土の三部經と號す。問うて曰はく、三部經の名、またその例ありや。答へて曰はく、三部經の名その例一にあらず。一には法華の三部。謂はく『無量義經』、『法華經』、『普賢觀經』これなり。二には大日の三部。謂はく『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』これなり。三には鎭護國家の三部。謂はく『法華經』、『仁王經』、『金光明經』これなり。四には彌勒の三部。謂はく『上生經』、『下生經』、『成佛經』これなり。今はただこれ彌陀の三部なり。故に淨土の三部經と名く。彌陀の三部とは、これ淨土正依の經なり。

次に傍に往生淨土を明せる教とは、華嚴、法華、隨求、尊勝等の、もろ／＼の往生淨土を明せる諸經これなり。又『起信論』、『寶性論』、『十住毘婆沙論』、『攝大乘論』等の、もろ／＼の往生淨土の行を明せる諸論これなり。

（三）凡この集の中に、聖道、淨土の二門を立つる意は、聖道を捨てて、淨土門に入らしめんが爲なり。これに就いて二つの由あり。一には大聖をさること遙遠なるによる。二には理深く解微なるによる。

【私云】以下私釋段と云ひ法然上人の註釋なり。章毎に存す。

【一】廣く諸教立宗の不同を明す。

【有相宗】法相宗をさす。

【無相宗】三論宗をさす。

【元曉】新羅國湘州の人。唐の總章年間に入唐して玄奘の慈恩に學び、華嚴の教を至相より承けて歸國す。晩年淨土教に歸す。寂年不詳。

【慈恩】慈恩大師窺基のこと。支那京兆長安の人。貞觀廿二年十七歳にして出家し、玄奘の門に入る。法相宗の碩德、永淳元年十一月慈恩寺に寂す。壽五十一。

【迦才】唐の太宗高宗時代の人、長安弘法寺に住し淨土の業を修む。寂年不詳、淨大師と號す。

【二】この宗の中に二門を立つることは、獨道綽のみにあらず。曇鸞、天台、迦才、慈恩等の諸師、皆この意あり。

(二)且らく、曇鸞法師の『往生論註』に云はく、「謹んで案ずるに、龍樹菩薩の『十住毘婆沙』に云はく、菩薩阿毗跋致をもとむるに、二種の道あり。一には難行道、二には易行道なり。難行道とは、謂はく五濁の世無佛の時において、阿毗跋致を求むるを難とす。この難に乃ち多途あり。粗五三を言ひて、もつて義竟を示さん。一には外道の相善、菩薩の法を亂る。二には聲聞の自利、大慈悲を障ふ。三には無顧の惡人、他の勝德を破す。四には顚倒の善果、能く梵行を壞す。五にはただこれ自力にして、他力の持なし。かくの如き等の事、目に觸れてみな是なり。譬へば陸路の歩行は則ち苦しきが如し。易行道とは、謂はく但信佛の因緣をもつて、淨土に生ぜんと願ずれば、佛の願力に乘じて、便ち彼の清淨の土に往生することを得。佛力住持して、即ち大乘正定の聚に入らしむ。正定は即ちこれ阿毘跋致なり。譬へば水路の乘船は則ち樂しきが如し已上。」此のなかに難行道とは即ちこれ聖道門なり。易行道とは、即ちこれ淨土門なり。難行易行と、聖道淨土と、その言異りと雖も、その意これ同じ。天台、迦才これに同じ。知るべし。

(二)又『西方要決』に云はく、「仰ぎ惟みれば、釋迦、運を啓きて、弘く有緣を益す。教闡、因方に隨つて、并に法潤に霑ふ。親り聖化に逢へるは、道、三乘を悟りき。福薄く、因

【隨求】隨求陀羅尼經を云ふ。
【尊勝】尊勝陀羅尼經を云ふ。
【二】淨土宗二門の教相を明す。
【顯密權實】顯教密教權教實教を云ふ。
【顯大】顯大乘の略、密大乘即ち眞言宗以外の他の大乘教を云ふ。
【權大】權大乘の略、實大乘即ち天台宗、華嚴宗等に對す。三論宗法相宗等を云ふ。
【天親】世親とも云ふ。ヴスヴンズ(Vasuvandhu)の譯。北天竺健陀羅國富婁沙の人。初め小乘を學せしが後大乘に歸して大に弘通す。俱舍論、唯識論等著述極めて多く世に千部の論主と稱す。
【三】淨土門先德の二門教相を明す。

疎なるは、勸めて淨土に歸せしむ。此の業を作すものは、專ら彌陀を念じ、一切の善根、廻して彼の國に生ず。彌陀の本願、誓つて娑婆を度したまふ。上現生の一形を盡し、下、臨終の十念に至るまで、俱に能く決定して皆往生を得。已上」

(三)又同じき後序に云はく「夫れ以れば、生れて像季に居して、聖を去ることこれ遙なり。道、三乘に預かれども、契悟するに方なし。人天の兩位は、躁動にして安からず。智博く、情弘きは、能く久しく處るに堪へたり。若し識癡に、行淺きは、恐くは幽途に溺れなん。必ず須く跡を娑婆に遠け、心を淨域に栖ましむべし。已上」この中に三乘とは即ちこれ聖道門の意なり。淨土とは即ちこれ淨土門の意なり。三乘、淨土と、聖道、淨土と、その名異りと雖も、其の意また同じ。淨土宗の學者、先づ須く此の旨を知るべし。

(四)設ひ先に聖道門を學せる人と雖も、若し淨土門において、その志あらば、須く聖道を棄てて、淨土に歸すべし。例せば彼の曇鸞法師、四論の講説を捨てて、一向に淨土に歸し、道綽禪師、涅槃の廣業を閣て、偏に西方の行を弘めしが如し。上古の賢哲猶もつてかくの如し。末代の愚魯、寧ろこれに遵はざらんや。

【四】問うて曰はく「聖道家の諸宗、各〻師資相承あり。謂はく、天台宗の如きは惠文、南嶽、天台、章安、智威、慧威、玄朗、湛然、次第相承す。眞言宗の如きは、大日如來、金剛薩埵、龍樹、龍智、金智、不空、次第相承す。自餘の諸宗、又各〻相承の血

【曇鸞】支那雁門の人。五台山に於て僧となる。初め四論宗を學し、後仙經をうけて外教を學ぼんとせしが、偶菩提流支より觀經を得て釋然として仙經をすてて淨土教に歸す。汾州玄中寺に住す。魏の興和四年遙山寺に寂す。壽六十七。

【天台】天台大師智顗。天台宗の開祖、支那梁の大同四年新州華容縣に生る。十八歳にして出家し、三十二歳にして法華玄義を講ず。三十八歳にして天台山に登り、專ら法華經を宜說す。開皇十七年寂、壽六十。

【龍樹】大乘教の大成者、八宗の祖師と仰がる。梵名ナーガルジユナー（Nagarjuna）大智度論、十住毘婆沙論、中論、十二門論等著書極めて多し。

脈あり。しかるに今言ふ所の淨土宗に師資相承血脈の譜ありや。」答へて曰はく、「聖道家の血脈の如く、淨土宗にもまた血脈あり。但し淨土一宗において、諸家同じからず。所謂盧山の惠遠法師と、慈愍三藏と、道綽、善導等とこれなり。今且く道綽、善導の一家に依りて、師資相承の血脈を論ぜば、これにまた兩說あり。一には菩提流支三藏、惠寵法師、道場法師、曇鸞法師、大海禪師、法上法師なり。已上安樂集に出づ 一には菩提流支三藏、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感法師、少康法師なり。已上唐宋兩傳に出づ」

第二章　善導和尚正雜二行を立てて、しかも雜行を捨てて正行に歸するの文

第二『觀經の疏』の第四に云はく、「行に就いて信を立つとは、然るに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。

（一）正行と言ふは、專ら往生經に依つて行を行ずるもの、これを正行と名く。何者か是なる。一心に專らこの『觀經』『彌陀經』『無量壽經』等を讀誦し、一心に專注して、彼の國の二報莊嚴を、思想し觀察し憶念し、若し禮するには即ち一心に專ら彼の佛を禮し、若し口に稱するには、即ち一心に專ら彼の佛を稱し、若し讃歎供養するには、即ち一心に專ら讃歎し供養す。これを名けて正となす。

（二）又この正の中に就いてまた二種あり。一には一心に專ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名く。彼の佛の願に順ずる

【正定業】菩薩の修行に於て退轉することなく必ず涅槃に至るべき位。
【阿毘跋致】アヸニヴルタ（Avinivartya）不退、不退轉等と譯す。佛に成る可き位にすすみて退墮なき菩薩の位をいふ。
【四論】中論、百論、十二門論、智度論をいふ。四論宗の根本聖典。
【四】淨土門の師資相承を明す。
【慧文】北齊の人鄉關年壽共に不詳支那天台の基を開きし高僧。
【南嶽】支那豫州武津の人。慧思禪師と云ふ。梁承聖三年慧文につきて法華三昧を悟る。大建二年南嶽に入り住すること八年、大建九年寂。壽六十三。

が故に、若し禮讚等に依るをば即ち名けて助業とす。(三)この正助二行を除いて已外、自餘の諸善を悉く雜行と名く。若し前の正助二行を修すれば、心常に親近して、憶念斷えざれば、名けて無間とす。若し後の雜行を行ずれば、即ち心常に間斷す。廻向して生ずることを得べしと雖も、すべて疎雜の行と名く。」

私釋 私に云はく、【一】此の文に就いて二つの意あり。一には往生の行相を明し、二には二行の得失を判ず。

【二】初に往生の行相をあかすとは、善導和尚の意に依るに往生の行多しと雖も、大に分つて二とす。一には正行、二には雜行なり。初に正行とは、これに就いて開合の二義あり。初には開して五種とし、後には合して二種とす。

(三)初に開して五種とすとは、一には讀誦正行、二には觀察正行、三には禮拜正行、四には稱名正行、五には讚歎供養正行なり。第一に讀誦正行とは專ら觀經等を讀誦す。即ち文に「一心に專らこの觀經、彌陀經、無量壽經等を讀誦す」と云へるこれなり。第二に觀察正行とは、專ら彼の國の依正二報を觀察す。即ち文に「一心に專注して彼の國の二報莊嚴を思想し觀察し憶念す」と云へる是なり。第三に禮拜正行とは、專ら彌陀を禮す。即ち文に「若し禮するには即ち一心に專ら彼の佛を禮す」と云へるこれなり。第四に稱名正行とは、專ら彌陀の名號を稱す。即ち文に「若し口に稱するには即ち一心に專ら彼の佛を稱す」と云へるこれなり。第五に讚歎供養正

【章安】支那臨海縣章安の人。七歳にして出家、二十五歳にして智者大師の門に入り高弟となる。唐の貞觀六年八月七日寂。壽七十二。

【智威】支那處州縉雲の人、十八歳にして出家、國淸寺に入り、章安に嗣ぐ。永隆元年十一月寂。

【慧威】支那浙江省金華府東陽縣治の人。智威の門に入る。

【玄朗】支那婺州東陽の人。慧威に師事す。天寶十三年寂。壽八十二。

【湛然】支那常州の人。荊溪に居りしを以て、荊溪大師と呼び、又妙樂大師の諡號あり。大に天台の祖義を宣述し、著書多し。唐興元元年寂。壽七十二。

【龍猛】龍樹に同じ。

行とは、専ら彌陀を讃歎供養す。即ち文に「若し讃歎供養するには、即ち一心に専ら讃歎供養す。是を名けて正とす」と云へるこれなり。若し讃歎と供養とを開して二とせば、六種正行と名くべし。今合の義に依る。故に五種と云ふ。

(三)次に合して二種とすとは、一には正業、二には助業なり。初に正業とは、上の五種の中の第四の稱名を以て正定の業とす。即ち文に「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念念に捨てざるもの、これを正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に」と云へるこれなり。次に助業とは、第四の口稱を除きて外、讀誦等の四種をもつて助業とす。即ち文に「若し禮誦等に依るをば、即ち名けて助業とす」と云へるこれなり。

(四)問うて曰はく「何が故ぞ、五種の中に獨り稱名念佛をもつて、正定業とするや」。答へて曰はく「彼の佛の願に順ずるが故に。」意に云はく、稱名念佛はこれ彼の佛の本願の行なり。故にこれを修するものは、彼の佛願に乗じて必ず往生を得。その本願の義は下に至りて知るべし。

(五)次に雜行とは、即ち文に「この正助二行を除きて已外、自餘の諸善を悉く雜行と名く」と云へるこれなり。意に云はく、「雜行無量なれば、具に述ぶるに遑あらず」と。但し今且く五種正行に翻對して、もつて五種の雜行を明さん。一には讀誦雜行。二には觀察雜行、三には禮拜雜行、四には稱名雜行、五には讃歎供養雜行なり。第一に

【龍智】錫崙の人、龍樹の高弟、密教を傳へた第二祖となる。壽七百に及びしと云ふ。
【金智】金剛智の略、ヴジラボデイ(Vajrabodhi)南印度摩羅耶國の人、三十一歳にして龍智につき密教を傳へ、唐開元八年支那に入り密教を弘む。同二十九年寂。壽七十一。
【不空】梵名アマガヴジラ(Amaghavajra)不空金剛と譯す。錫崙島の人。金剛智と共に支那に渡り金剛智の寂後大に密教を弘通す。太曆九年長安に寂。壽七十。
【慧遠】支那念佛の始祖。鴈門樓煩の人、本姓賈氏。年二十一にして道安に隨ひて出家し、五十一にして廬山に入り、念佛を修めに百二十三人と共に白蓮社を結ぶ。

讀誦雜行とは、上の「觀經」等の往生淨土の經を除きて已外、大小乘顯密の諸經において、受持し讀誦するを、悉く讀誦雜行と名く。第二に觀察雜行とは、上の極樂の依正を除きて已外、大小、顯密、事理の觀行を、皆悉く觀察雜行と名く。第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するを除きて已外、一切諸餘の佛菩薩等、をよびもろ〳〵の世天等において、禮拜恭敬するを、こと〴〵く禮拜雜行となづく。第四に稱名雜行とは、上の彌陀の名號を稱するを除きて已外、自餘の一切の佛菩薩等、及びもろ〳〵の世天等の名號を稱するを、悉く稱名雜行と名く。第五に讚歎供養雜行とは、上の彌陀佛を除きて已外、一切の諸餘の佛菩薩等、及びもろ〳〵の世天等において、讚歎供養するを、悉く讚歎供養雜行と名く。この外にまた布施持戒等の無量の行あり。みな雜行の言に攝盡すべし。

【二】次に二行の得失を判ずとは、(一)若し前の正助二行を修すれば、心常に親近して、憶念斷えざるを名けて無間とす。若し後の雜行を行ずれば、即ち心常に間斷す。廻向して生ずることを得べしと雖も、すべて疎雜の行と名く」と、即ちその文なり。この文の意を案ずるに、正雜二行に就て、五番の相對あり。一には親疎對、二には近遠對、三には有間無間對、四には不廻向廻向對、五には純雜對なり。

(三)第一に親疎對とは、先づ親とは正助二行を修する者は、阿彌陀佛において甚だ親眤とす。故に「疏」の上の文に云はく、「衆生、行を起して、口常に佛を稱すれば、佛

義熙十二年寂。壽八十三。

【慈愍】本名、慧日、支那青州東萊郡の人。姓は辛氏。海路入竺し法を聞くこと十三年。開元七年長安に歸り、天寶七年洛陽に寂す。壽六十九。

【善導】支那臨淄の人。隋の大業九年生る。道綽の後をうけて、專ら淨土教を大成し、念佛をひろむ。永隆二年三月二十七日寂。壽六十九。觀經疏、往生禮讃、觀法事讃、般舟讃、觀念法門等あり。

【菩提流支】ボーデルチ(Bodhiruci)覺希と譯す。北印度の人。遍く三藏に精通せるを以て此名あり。魏の永平年中東夏に來り、宣武帝の勅を奉じ譯經に從事せり。

【道場】盧山東林寺、菩提流支の法流、惠龍につぐ。

卽ちこれを聞きたまふ。身常に佛を禮敬すれば、佛卽ちこれを見たまふ。心常に佛を念ずれば、佛卽ちこれを知りたまふ。衆生佛を憶念すれば、佛また衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨離せず。故に親緣と名くるなり。次に疎とは雜行なり。衆生口佛を稱せざれば、佛卽ちこれを聞きたまはず。身佛を禮せざれば、佛卽ちこれを見たまはず。心佛を念ぜざれば、佛卽ちこれを知りたまはず。衆生佛を憶念せざれば、佛衆生を憶念し給はず。彼此の三業、常にあひ捨離す。故に疎行となづく。

(三)第二に近遠對とは、先づ近とは、正助二行を修する者は、阿彌陀佛において甚だ隣近たり。故に『疏』の上の文に云はく、「衆生佛を見んと願ずれば、佛卽ち念に應じて、目前に現在す。故に近緣と名く」と。次に遠とは雜行なり。衆生佛を見んと願ぜざれば、佛卽ち念に應ぜず。目前に現ぜず、故に遠と名く。但し親近の義これ一なるに似たりと雖も善導の意分ちて二とす。その旨『疏』の文に見えたり。故に今引釋する所なり。

(四)第三に無間有間對とは、「先づ無間とは、正助二行を修する者は、彌陀佛において憶念間斷せず。故に名けて無間とす」と云へるこれなり。次に有間とは、雜行を修するものは、阿彌陀佛において、憶念常に間斷す。故に「心常に間斷す」と云へる是なり。

(五)第四に不回向回向對とは正助二行を修する者は、たとひ別に廻向を用ひざれども、自然に往生の業となる。故に『疏』の上の文に云はく、「今この『觀經』の中の十聲稱佛は

【懷感】支那長安千福寺に住す。初め法相宗になりしが善導大師に謁して淨土門に歸し、釋淨土群疑論を著す。寂年不詳。

【少康】支那縉雲の人。善導大師に付て淨土教をうけ、睦州烏龍山に居る。唐の永貞元年寂。

【第二章】雜行を捨てて正行に歸する篇。

【觀經疏】善導大師著、四卷あり。觀無量壽經を疏釋せるもの。

【一】初に大意を明す。

【二】往生の行相を明す。

【三】二行の得失を明す。

【八藏】大乘教を八種に類攝せるもの。菩薩處胎經に出づ。胎化藏、中陰藏、摩訶衍藏、方等藏、戒律藏、十住藏、金剛藏、

即ち十願十行ありて具足す。いかんが具足する。南無と言ふは即ちこれ歸命、亦是發願回向の義、阿彌陀佛と言ふは即ちこれその行たり。この義をもつての故に必ず往生を得已上。次に回向とは、雜行を修する者は必ず回向を用ふる時、往生の因となる。若し回向を用ひざるの時は、往生の因とならず。故に回向して、生ずることを得べしと雖も」と云へるこれなり。

(六)第五に純雜對とは、先づ純には正助二行を修する者は、これ純極樂の行なり。次に雜とは、これ純極樂の行にあらず。人天および三乘に通じ、また十方の淨土に通ず。故に雜と云ふなり。然れば西方の行者、須く雜行を捨てて、正行を修すべし。問うて曰はく、「この純雜の義、經論の中において、その證據ありや」。答へて曰はく、「大小乘の經、律、論の中において、純雜二門を立つること、その例一にあらず。大乘には即ち八藏の中において、雜藏を立つ。當に知るべし。七藏はこれ純、一藏はこれ雜なることを。小乘には即ち四含の中において、雜含を立つ。まさに知るべし、三含はこれ純、一含はこれ雜なることを。律には即ち二十犍度を立てて、もつて戒行を明す。その中に前の十九はこれ純、後の一はこれ雜犍度なり。論には即ち八犍度を立てて、諸法の性相を明す。前の七犍度はこれ純、後の一はこれ雜犍度なり。『賢聖集』の中に、唐宋の兩傳に、十科の法を立てて、高僧の行德を明す。その中に前の九はこれ純、後の一はこれ雜科なり。乃至『大乘義章』に五聚の法門あり。前の四聚はこれ純、後の

佛藏の八。

【四含】四阿含の略、增一阿含、長阿含、中阿含、雜阿含の四。

【二十犍度】二十聚、二十部等と云ふに同じ。犍度とは梵音クハンダ(Khaṇḍa)の音譯。受戒、說戒、安居自恣、皮革、衣、藥、迦絺那衣、鳩睒彌、瞻婆、呵責、人、覆藏、遮、破僧、滅諍、尼、法、房舍、雜の二十種。

【八犍度】業、使、智、定、根、大、見、雜の八種。

【十科】譯經、義解、習禪、明律、護法、感通、遺身、讀誦、興福、雜の十。

【五聚法門】教聚、義聚、染聚、淨聚、雜聚の五。

【山家】支那天台宗に於ける正系を云ふ。山外に對す。

一はこれ雜聚なり。また啻に顯教のみにあらず。密教の中にも純雜の法あり。謂はく山家の『佛法血脈譜』に云はく、「一に胎藏界の曼陀羅。血脈の譜一首。二に金剛界の曼陀羅、血脈の譜一首。三に雜曼陀羅、血脈の譜一首」と。前の二首はこれ純、後の一首はこれ雜なり。純雜の例多しと雖も、今略して小分を擧ぐるのみ。當に知るべし。純雜の義法に隨つて不定なることを。これに依つて今善導和尙の意、且く淨土の行において、純雜を論ずるなり。またこの純雜の名、內典にかぎらず。外典の中に、その例甚だ多し。繁きを恐れて出ださず。

(七)但し往生の行において、二行を分つこと善導一師に限らず。若し道綽禪師の意に依らば、往生の行多しと雖も、束ねて二とす。一には謂はく念佛往生、二には謂はく萬行往生なり。若し懷感禪師の意に依らば、往生の行多しと雖も、束ねて二とす。一には謂はく念佛往生、二には謂はく諸行往生なり。惠心これに同じ かくの如く三師各二行を立てて往生の行を攝すること、甚だその旨を得たり。自餘の諸師は然らず。行者これを思ふべし。」

【第三】『往生禮讃』に云はく、(一)『若し能く上の如く念念に相續して、畢命を期とする者は、十は卽ち十生じ、百は卽ち百生ず。何をもつての故に。外の雜緣なく、正念を得るが故に。佛の本願と相應することを得るが故に。教に違せざるが故に。佛語に隨順するが故に。(二)若し專を捨てて、雜業を修せんと欲する者は、百時希に一二を得。千時希に五三を得。

何をもつての故に、乃ち雜緣亂動して、正念を失するに依るが故に、佛の本願と相應せざるが故に。教と相違するが故に。佛語に順ぜざるが故に。係念相續せざるが故に。憶想間斷するが故に。廻願慇重眞實ならざるが故に。貪瞋諸見の煩惱、來りて間斷するが故に。慚愧懺悔の心あることなきが故に。又相續して彼の佛恩を念報せざるが故に。心に輕慢を生じて、業行をなすと雖も、常に名利と相應するが故に。人我自ら覆うて、同行善知識に親近せざるが故に。樂ひて雜緣に近づき、往生の正行を自障障他するが故なり。何をもつての故に。

(三)余このごろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行同じからざれば、專雜異ることあり。但意を專らにして、作さしむるものは、十は即ち十生ず。雜を修して至心ならざる者は、千が中に一もなし。この二行の得失前に已に辨ずるが如し。

(四)仰ぎ願はくば一切の往生人等、善く自ら思量せよ。已に能く今身に彼の國に生ぜんと願ぜん者は、行住坐臥必ず須く心を勵まし己を剋めて、晝夜廢することなく、畢命を期とすべし。上一形にあるは、少しく苦なるに似たれども、前念に命終して、後念に即ち彼の國に生じ、長時永劫常に無爲の法樂を受け、乃至成佛まで生死を經ざるは、豈快きにあらずや。知るべし。」

【私釋】私に云はく、「この文を見るに、いよ〳〵須く雜を捨てて專を修すべし。豈百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者能くこれ

【往生禮讃】善導大師撰述。無量壽經及び龍樹天親等の禮讃偈によりて六時禮讃の行法と功德とをときたるもの。

【貪瞋諸見】總じて煩惱を表はす。貪欲、瞋恚、愚癡、及び身見、邊見、邪見、見取見、戒取見等の煩惱を云ふ。

【善知識】善き指導者。人をして佛道に入らしむる高德の人。

【第三章】念佛往生本願篇。

【一】總別二願を明す。

【四弘誓願】四種の廣大なる誓願。すべての菩薩の起すべき大願。衆生無邊誓願度、煩惱無數誓願斷、法門無盡誓願知、佛道無上誓願證。

【釋迦】釋迦牟尼シャーカムニ(Śākyamuni)の音譯

【藥師】佛名ブヘーシャヂュヤグル(Bhesajyaguru)藥師瑠璃光如來と云ふ。東方淨瑠璃國に在す佛。

【二】彌陀の別願を明す。

【壽經】無量壽經

を思量せよ。』

第三章

彌陀如來餘行を以て往生の本願としたまはず。唯念佛をもつて往生の本願としたまへるの文。

第一『無量壽經』の上に云はく、『設し我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂し、我國に生ぜんと欲し乃至十念せんに、若生ぜずば正覺をとらじ』と。

第二『觀念法門』に上の文を引いて云はく、『若し我成佛せんに、十方の衆生、我國に生ぜんと願じて、我名字を稱すること、下十聲に至るまで、我願力に乘じて、若し生ぜずば正覺を取じ』と。

第三『往生禮讃』に、同じく上の文を引いて云はく、『若し我成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱すること、下十聲に至るまで、若し生ぜずば、正覺を取らじ。彼の佛今現に世にまし／＼て成佛したまへり。當に知べし。本誓の重願虚しからざることを、衆生稱念すれば必ず往生を得』と。

私釋　私に云はく、『【一】一切の諸佛に、各惣別二種の願あり。惣とは四弘誓願これなり。別とは釋迦の五百の大願、藥師の十二の上願等のごときこれなり。今この四十八願はこれ彌陀の別願なり。

【二】問うて曰はく、『彌陀如來、何れの時、何れの佛の所において、この願を發し給へ

ふや。」答へて曰はく、「『大經』に云はく、「佛阿難に告げたまはく、乃往過去、久遠無量、不可思議、無央數劫に錠光如來、世に興出して、無量の衆生を教化し度脱して、これ皆得道せしめて、乃ち滅度を取りたまふ。次に如來います。名けて光遠と曰ひき乃至次をば處世と名く。かくの如きの諸佛、五十三佛なり皆悉く已に過ぎたまへり。その時、次に佛います。世自在王如來と名く、時に國王あり。佛の說法を聞いて、心に悅豫を懷きて、尋いで無上正眞の道意を發し、國を棄て王を捐てて、行じて沙門となる。號して法藏といふ。高才勇哲にして、世と超異せり。世自在王如來の所に詣る乃至ここにおいて世自在王佛、即ち爲に廣く、二百一十億の、諸佛刹土の、天人の善惡、國土の麤妙を說き、その心願に應じて、悉く現じてこれを與へたまふ。時に彼の比丘、佛の所說の嚴淨の國土を聞き、皆悉く覩見して、無上殊勝の願を超發す。その心寂靜にして、志所著なし。一切の世間に、能く及ぶものなし。五劫を具足して、莊嚴佛國淸淨の行を思惟し攝取す。阿難佛に白さく、「彼の佛の國土の壽量幾何ぞや。」佛の言はく、「その佛の壽命四十二劫たり。」時に法藏比丘、二百一十億の、諸佛の妙土、淸淨の行を攝取す。」已上

又『大阿彌陀經』に云はく、「その佛、即ち二百一十億の、佛國土の中の、諸天人民の善惡、國土の好醜を選擇し、爲に心中所欲の願を選擇す。樓夷亘羅佛。こゝには世自在王佛といふ經を說き畢りて、曇摩迦こゝには法藏といふ便ちその心を一にして、即ち天眼を得、徹視して、

い殊に。【阿難】釋尊の十大弟子の一。多聞第一の德ありし、釋尊の從弟にして梵名アーナンダ（Ānanda）といふ。【錠光如來】ディーパムカラ（Dīpaṃkara）錠燈と譯す。過去世に出現せる佛。【世自在王如來】ローケーシュヴァララージャ（Lokeśvara-rāja）の譯。一切の法に於て自在を得、世間を利すること自在にして無上尊なるを以て此名あり。【法藏】ダルマーカラ（Dharmākara）の譯。阿彌陀佛の未だ佛とならざりし時の比丘名。【刹土】刹は梵語クシェートラ（Kṣetra）の音譯、土、田等と譯す。土は漢音。梵漢並びあぐ。國土の意。

【三】選擇の義を明す。
【大阿彌陀經】無量壽經の異譯。
【雙卷經】無量壽經の別稱。上下二卷より成るを以て此名あり。
【三惡趣】三種の惡道、地獄、餓鬼、畜生の三。

悉く自ら二百一十億の諸佛の國土の中の諸天人民の善惡、國土の好醜を見て、即ち心中の所願を選擇して、便ちこの二十四願の經を結得す」と。『平等覺經』亦復これに同じ。

【三】この中に選擇といふは、即ちこれ取捨の義なり。(一)謂はく二百一十億の諸佛の淨土の中において、人天の惡を捨てて人天の善を取り、國土の醜きを捨てて國土の好きを取る。『大阿彌陀經』の選擇の義かくの如し。『雙卷經』の意、また選擇の義あり。謂はく二百一十億の諸佛の妙土、淸淨の行を攝取すと云へるこれなり。選擇と攝取と、その言異りと雖も、その意これ同じ。然れば則ち不淸淨の行を捨てて、淸淨の行を取れり。上の天人の善惡、國土の麤妙その義また然なり。これに準へて知るべし。

(二)夫れ四十八願に約して、一往各選擇攝取の義を論ぜば、第一に無三惡趣の願とは、覩見する所の、二百一十億の土の中において、或は三惡趣ある國土あり。或は三惡趣なき國土あり。即ちその三惡趣ある麤惡の國土を選捨して、その三惡趣なき善妙の國土を選取す。故に選擇と云ふなり。第二に不更惡趣の願とは、彼の諸佛の土の中において、或は國中に、三惡道なしと雖も、その國の人天、壽終の後、その國より去りて、また三惡趣に更る土あり。或は惡道に更らざるの土あり。即ちその惡道に更る麤惡の國土を選捨して、その惡道に更らざる善妙の國土を選取す。故に選擇といふなり。第三に悉皆金色の願とは、かの諸佛の土の中において、或は一土の中に黄白二類の人天ある國土あり。或は純黄金色の國土あり。即ち黄白二類の麤惡の國

【六念】念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天の六。

土を選捨して、黄金一色の善妙の國土を選取す。故に選擇といふなり。第四に無有好醜の願といふは、その諸佛の土の中において、或は人天の形色、好醜不同なる國土あり。或は形色一類にして、好醜あることなき國土あり。即ち好醜不同なる麤惡の國土を選捨して、好醜あることなき善妙の國土を選取す。故に選擇といふなり。

乃至第十八の、念佛往生の願とは、その諸佛の土の中において、或は布施をもつて往生の行とする土あり。或は持戒をもつて、往生の行とする土あり。或は忍辱をもつて、往生の行とする土あり。或は精進をもつて、往生の行とする土あり。或は禪定をもつて、往生の行とする土あり。或は般若をもつて、（第一義を信ずる等これなり）往生の行とする土あり。或は菩提心をもつて、往生の行とする土あり。或は六念をもつて、往生の行とする土あり。或は持經をもつて、往生の行とする土あり。或は持咒をもつて、往生の行とする土あり。或は起立塔像、飯食沙門、および、孝養父母、奉事師長等の種種の行をもつて、各往生の行とするの國土等あり。或は專らその國の佛の名を稱して、往生の行とする土あり。かくの如く一行をもつて、一佛土に配するは且くこれ一往の義なり。再往これを論ぜばその義不定なり。或は一佛土の中に、多行をもつて、往生の行とする土あり。或は多佛土の中に、一行をもつて、通じて往生の行とする土あり。かくの如く往生の行種種不同なり。具に述ぶべからず。即ち今前の布施、持戒、乃至孝養父母等の諸行を選捨して、專ら佛號を稱するを選取す。故に選擇と云ふなり。

【四】第十八願は念佛一行を選取することを明す。
【四智】佛の具する四種の智慧。一道慧智、一道種智、一切智、一切種智。
【三身】佛の具する三種の身。法身、報身、應身。
【十力】佛の具する十種の智力。處非處智力、業異熟智力、靜慮解脫等持等至智力。根上下智力。種種勝解智力、種種界智力、徧處行智力、宿往隨念智力、宿往生死智力、漏盡智力。
【四無畏】佛の具する四種の德。佛は說法のとき畏怖の相なし。四無所畏とも云ふ。一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏。

且く五願に約して、略して選擇を論ずるに、その義かくの如し。自餘の諸願、これに準へて知るべし。

【四】問うて曰はく、「普く諸願に約するに、麤惡を選捨して善妙を選取すること、その理然るべし。何が故ぞ第十八願は一切の諸行を選捨し、唯偏に念佛の一行を選取して、往生の本願とするや」。答へて曰はく、「(一)聖意測り難し、輙く解すること能はず。然りと雖も、今試に二義をもつて、これを解せん。一には勝劣の義、二には難易の義なり。

(二)初に勝劣とは、念佛はこれ勝れ餘行はこれ劣れり。何となれば、名號はこれ萬德の歸する所なればなり。然れば則ち彌陀一佛に、あらゆる四智、三身、十力、四無畏等の、一切の內證の功德、相好、光明、說法、利生等の、一切の外用の功德、皆悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在す。故に名號の功德、最も勝れたりとす。餘行は然らず。各一隅を守る。ここを以て劣れりとす。譬へば世間の屋舍の名字の中には、棟、梁、椽、柱等の、一切の家具を攝すれども、棟梁等の、一一の名字の中には、一切を攝すること能はざるが如し。これをもつて知るべし。然れば則ち佛の名號の功德は、餘の一切の功德に勝れたり。故に劣を捨てて勝を取りて、もつて本願とし給ふ歟。

(三)次に難易の義とは、念佛は修し易く諸行は修し難し。この故に『往生禮讚』に云はく「問うて曰はく、何が故ぞ觀を作さしめず、直專ら名字を稱せしむるは何の意ありや。答へて曰はく、乃ち衆生障重く、境細に心麁なるによりて、識颺り神飛びて、觀成

【相好】三十二相八十隨形好の略。佛の具する身體の德相。
【往生要集】惠心僧都撰述。三卷あり。往生極樂の敎行を明す。

就しがたし。ここをもつて、大聖悲憐して、直に勸めて專ら名字を稱せしむ。正しく稱名は易きによるが故に相續して即ち生ず」と。

又『往生要集』に問うて曰はく、「一切の善業各利益ありて、各往生を得。何が故ぞ唯念佛の一門のみを勸むるや。答へて云はく、今念佛を勸むることは、是れ餘の種種の妙行を遮せんとにはあらず。只これ男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時處諸緣を論ぜず、これを修するに難からず、乃至臨終に、往生を願求する、その便宜を得ること、念佛に如かず」と。故に知んぬ。念佛は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取りて、もつて本願としたまふか。若し夫れ造像起塔をもて、本願としたまはば、すなはち貧窮困乏の類は、定めて往生の望を絶たん。然るに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し智惠高才をもつて、本願としたまはば、則ち愚鈍下智の者は、定めて往生の望を絶たん。然るに智惠あるものは少く、愚癡なるものは甚だ多し。若し多聞多見をもつて、本願としたまはば、則ち少聞少見の輩は、定めて往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律をもつて、本願としたまはば、則ち破戒無戒の人は、定めて往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。自餘の諸行、これに準じて知るべし。

(四)當に知るべし。上の諸行等をもつて本願としたまはば、則ち往生を得るものは少く、

【法照禪師】支那唐代の僧、大歴二年衡州の雲峯寺に住し、四年湖東寺に在りて五會念佛の道場を開く。五會法事讃等の著あり。寂年不詳。

【五】願成就を明す。

往生せざる者は甚だ多からん。然れば則ち彌陀如來、法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行をもつて、往生の本願としたまはず。唯稱名念佛の一行をもつて、その本願としたまへり。

(五)故に法照禪師の『五會法事讃』に云はく、「この佛、因中に弘誓を立つ。名を聞きて我を念ぜば總て迎來せんと。貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、但回心して多く念佛せしめば、よく瓦礫をして變じて金とならしむ」已上と。

【五】問うて曰はく、「一切の菩薩、その願を立つと雖も、或は已に成就せるあり。また未だ成就せざるあり。いぶかし、法藏菩薩の四十八願は、已に成就したまふとやせん。將未だ成就したまはずとやせん。」答へて曰はく、「(一)法藏の誓願、一々に成就したまへり。いかんとなれば、極樂界中すでに三惡趣なし。當に知るべし。これ則ち無三惡趣の願を成就せることを。何をもつてか知ることを得たる。即ち願成就の文に、また地獄餓鬼畜生、諸難の趣なしと云へるこれなり。

(二)又かの國の人天壽終の後、三惡趣に更ることなし。當に知るべし。これ則ち不更惡趣の願を成就せることを。何を以てか知ることを得たる。即ち願成就の文に、又彼の菩薩、乃至成佛まで惡趣に更らずと云へるこれなり。

(三)又極樂の人天、一人として三十二相を具せざることとあることなし。當に知るべし。

【三法忍】音響忍、柔順忍、無生法忍の三。

【六八】念聲是一を明す。

【觀經】觀無量壽經の略稱。

これ則ち其三十二相の願を成就せることを。何をもつてか知ることを得たる。即ち願成就の文に、彼の國に生ずるものは、皆悉く三十二相を具足すと云へるこれなり。

(四)かくの如く初め無三惡趣の願より終り得三法忍の願に至るまで、一一の誓願、皆悉く成就せり。第十八念佛往生の願、豈獨り成就したまはざらんや。然れば則ち念佛の人、皆當に往生すべし。何をもつてか知ることを得たる。即ち念佛往生の願成就の文に、あらゆる衆生その名號を聞きて、信心歡喜し、乃至一念も至心に廻向し、かの國に生ぜんと願ずれば、すなはち往生を得て、不退轉に住すと云へるこれなり。

(五)凡そ四十八願は淨土を莊嚴す。華池寶閣、願力にあらずといふことなし。何ぞその中において、獨り念佛往生の願を疑惑すべきや。加之一一の願の終に、若しからずば、正覺を取らじといへり。しかるに阿彌陀佛、成佛したまひてよりこのかた、今において十劫なり。成佛の誓既にもつて成就せり。

(六)當に知るべし。一一の願虛しく設くべからず。故に、善導の云はく、「彼の佛今現に世にましまして成佛したまへり。當に知るべし。本誓の重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得已」と。

【六八】問うて曰はく、「經に十念と云ひ、釋に十聲と云ふ。念、聲の義如何。」答へて曰はく、「念、聲これ一なり。何をもつてか知ることを得たる。「觀經」の下品下生に云はく、聲をして絕えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが

【感師】懷感禪師をさす。

【七】乃至下至の義を明す。

【宿命通】五神通の一。自他一切の過去世のことを明かに知る神祕力。

【五神通】宿命通、天耳通、天眼通、他心通、神足通。

故に、念念の中において八十億劫の生死の罪を除くと。今この文に依るに、聲即ち是れ念、念即ち是れ聲なること、その意明けし。加之、『大集月藏經』に云はく、大念は大佛を見、小念は小佛を見ると。感師釋して云はく、大念とは、大聲の念佛、小念とは小聲の念佛なりと。故に知りぬ。念即ち是れ唱なりと。」

【七】問うて曰はく「經に乃至と云ひ、釋に下至と云ふ。その意如何。」答へて曰はく、「乃至と下至と、その意是れ一なり。經に乃至と云へるは、多より少に向ふ言なり。多とは上盡一形なり。少とは下至十聲一聲等なり。釋に下至と云へるは、下とは上に對する言なり。下とは下至十聲一聲等なり。上とは上盡一形なり。上下相對の文、その例これ多し。宿命通の願に云はく、設し我佛を得たらんに、國中の人天、宿命を識らず。下百千億那由他諸劫の事を、知らざるに至らば、正覺を取らじと。かくの如く五神通、および光明壽命等の願の中に、一一に下至の言を置く。これ則ち多より少に至る。下をもつて上に對するの義なり。上の八種の願に例するに、今この願の乃至とは、即ち是れ下至なり。この故に今善導の引釋する所の下至の言、その意相違せず。但し善導と諸師と、その意同じからず。諸師の釋は別して十念往生の願と云ひ、總じて念佛往生の願と云へり。諸師の別して十念往生の願と云へるは、その意即ち周からず。然る所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるが故なり。善導の總じて念佛往生の願と云へるは、其意即ち周し。然る所以は、上一形を取り、下一念

【第四章】三輩念佛往生篇。

【沙門】桑門とも書く。出家して佛道を修むる人。シユラマナ（Sramana）勤息等と譯す。

【無量壽佛】阿彌陀佛の譯名。アミターユス（Amitāyus）無量壽と譯す。

【七寶】金銀瑠璃頗梨硨磲赤珠瑪瑙。

を取りたまへるがゆへなり。」

第四章　三輩念佛往生の文

【第一】『無量壽經』の下に云はく、「(一)佛、阿難に告げたまはく「十方世界の諸天人民、それ至心ありてかの國に生ぜんと願ずるに、凡そ三輩あり。(二)その上輩とは、家を捨て欲を棄ててしかも沙門となり、菩提心を發し、一向に專ら無量壽佛を念じ、もろ〳〵の功德を修してかの國に生ぜんと願ずれば、これらの衆生壽終る時に臨みて、無量壽佛、もろもろの大衆と與に、その人の前に現じたまふ。即ち彼の佛に隨ひてその國に往生し、便ち七寶の華の中において自然に化生して不退轉に住す。智惠勇猛にして神通自在なり。この故に阿難、それ衆生ありて、今世において無量壽佛を見たてまつらんと欲せば、無上菩提の心を發し、功德を修行して、かの國に生ぜんと願ずべし」と。

(三)佛、阿難に語りたまはく「その中輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心ありて、彼の國に生ぜんと願ぜば、行じて沙門となり、大に功德を修すること能はずと雖も、當に無上菩提の心を發し、一向に專ら無量壽佛を念じ、多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食し、繒を懸け、燈を然し、花を散らし、香を燒き、これをもつて廻向して彼國に生ぜんと願ずべし。その人終に臨みて、無量壽佛その身を化現して、光明相好、具に眞佛の如く、もろ〳〵の大衆と與にその人の前に現じたまふ。即ち化佛に隨つ

【一】三輩念佛往生を明す。

【二】念佛諸行に就て廢立、助正、傍正の三義を明す。

てその國に往生して、不退轉に住し、功德智慧次で上輩の者の如し。」

（四）佛、阿難に告げたまはく、「その下輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心ありて、かの國に生ぜんと欲せんに、たとひもろ〳〵の功德を作すこと能はずとも、當に無上菩提の心を發し、一向に心を專らにして、乃至十念、無量壽佛を念じて、その國に生ぜんと願ずべし。若し深法を聞き歡喜信樂して、疑惑を生ぜず、乃至一念彼の佛を念じ、至誠心をもつて、その國に生ぜんと願ずれば、此人終に臨みて、夢に彼の佛を見たてまつりて、また往生を得。功德智慧、次で中輩の者の如し」と。』

私釋　私に問うて曰はく、『【一】上輩の文の中に、念佛の外にまた「家を捨て欲を棄て」等の餘行あり。中輩の文の中に、亦「塔像を起立し」等の餘行あり。下輩の文の中に、また菩提心等の餘行あり。何が故ぞ唯念佛往生といふや。』答へて曰はく、『善導和尚の觀念法門に云はく、「又この經の下卷の初に云はく、「佛說きたまはく、一切衆生の根性不同にして上中下あり。その根性に隨ひて、佛皆勸めて專ら無量壽佛の名を念ぜしむ。その人命終らんと欲する時、佛と聖衆と自ら來り、迎接して、盡く往生を得せしむ」と。この釋の意に依りて、三輩俱に念佛往生と云ふなり。』

【二】問うて曰はく、『此釋未だ前難を遮せず。何ぞ餘行を棄てて、唯念佛と云ふや。』答へて曰はく、『これに三の意あり。一には諸行を廢して、念佛に歸せんが爲に、しかも諸行を說く。二には念佛を助成せんがために、しかも諸行を說く。三には念佛諸行の

【定散兩門】定善散善のこと。善導の觀經疏に出づ。極樂往生の行業を二種に分ちたるもの、定善は慮を息め心を凝して所謂禪定による行法。之に十三觀あり。散善は散動の心を以て善業を修する行法。之に三種あり。

【五竺】五天竺の略稱。東、西、南、北及び中の稱。

二門に約して、各三品を立てんが爲に、しかも諸行を說く。

(一)一には諸行を廢して念佛に歸せんが爲に、しかも諸行を說くとは、善導は『觀經疏』の中に、「上來定散兩門の益を說くと雖も、佛の本願に望むれば、意衆生をして、一向に專ら彌陀佛の名を稱せしむるに在り」と云へる釋の意に準へて、且くこれを解せば、上輩の中に、菩提心等の餘行を說くといへども、上の本願に望むれば、意唯衆生をして、專ら彌陀の名を稱せしむるに在り。しかるに本願の中には、更に餘行なし、三輩俱に上の本願に依る。故に「一向に專ら無量壽佛を念ず」と云ふなり。一向とは、二向三向等に對する言なり。例せばかの五竺に、三種の寺あるが如し。一には一向大乘寺、この寺の中には小乘を學することなし。二には一向小乘寺、此の寺の中には大乘を學することなし。三には大小兼行寺、この寺の中には大小兼學す。故に兼行寺と云ふ。當に知るべし。大小の兩寺には一向の言あり。兼行の寺には一向の言なし。今この經の中の一向もまた然なり。若し念佛の外にまた餘行を加ふればすなはち一向にあらず。若し寺に準ぜば、兼行と云ふべし。既に一向と云ふ、餘を兼ねざること明けし。先に餘行を說くといへども、後に一向專念と云ふ。明かに知りぬ。諸行を廢して唯念佛を用ふ故に一向といふことを。若し然らずんば一向の言、最もつて消しがたきか。

(二)二には念佛を助成せんがために、この諸行を說くとは、これにまた二の意あり。一には同類の善根をもつて念佛を助成し、二には異類の善根をもつて念佛を助成す。初

に同類の助成とは、善導和尚の『觀經疏』の中に、五種の助行を擧げて念佛の一行を助成する是なり。具には上の正雜二行の中に說くが如し。次に異類の助成とは、先づ上輩につきて、正助を論ぜば、「一向に專ら無量壽佛を念ず」とは、これ正行なり。また是れ所助なり。「家を捨て欲を棄てて沙門と作り、菩提心を發す」等とは、これ助行なり。また是れ能助なり。謂はく往生の業には、念佛を本とす。故に一向に念佛を修せんがために、家を捨て欲を棄てて沙門となり、又菩提心を發す等なり。就中出家發心等とは、且く初出および初發をさす。念佛はこれ長時不退の行なり。寧ろ念佛を妨礙すべけんや。中輩の中に、また「塔像を起立し繒を懸け燈を然し、花を散し香を燒く」等の諸行あり。これ則ち念佛を助成す。その旨『往生要集』に見えたり。いはく助念方法の中の、方處供具等これなり。下輩の中に、また發心ありまた念佛あり。助正の義前に準じて知るべし。

(二)三に念佛諸行に約して、各三品を立てんがために、しかも諸行を說くとは、先づ念佛に約して三品を立つとは、謂はくこの三輩の中に、通じて皆「一向に專ら無量壽佛を念ず」と云ふ。これ則ち念佛門に約して、その三品を立つるなり。故に『往生要集』の念佛證據門に云はく、「『雙卷經』の三輩の業、淺深ありと雖も、しかも通じて皆「一向に專ら無量壽佛を念ず」と云ふと。感師これに同じ　次に諸行門に約して、三品を立つとは、謂はくこの三輩の中に、通じて皆菩提心等の諸行あり。これ則ち諸行に約して、その三品を立つる

【三】三輩九品は開合の異なりなることを明す。
【九品】往生する人について九種の階位を定めたるもの、無量壽經の三輩と、開合の異にして事實は同様なり。

上輩	中輩	下輩
上品上生	中品上生	下品上生
上品中生	中品中生	下品中生
上品下生	中品下生	下品下生

たり。故に『往生要集』の諸行往生門に云はく、「『雙卷經』の三輩も、またこれを出ず。」と已上

凡そかくの如き三義、不同ありと雖も、倶にこれ一向念佛の爲にする所以なり。初めの義は則ちこれ廢立のために説く。謂はく諸行は、廢の爲に説き、念佛は立の爲に説き、次の義は則ちこれ助正の爲に説く。謂はく念佛の正業を、助けんが爲にしかも諸行の助業を説く。後の義は即ちこれ傍正の爲に説く。謂はく念佛、諸行の二門を説くと雖も、念佛をもつて正とし、諸行をもつて傍とす。故に三義に通じて、皆念佛なりと云ふ。但しこれらの三義、殿最、知り難し。請ふもろ〳〵の學者、取捨心に在るべし。今若し善導に依らば、初をもつて正とするのみ。

【三】問うて曰はく、「三輩の業皆念佛と云ふこと、その義然るべし。但し『觀經』の九品と『壽經』の三輩とは、本これ開合の異なり。若ししからば何ぞ『壽經』の三輩の中には皆念佛と云ひ、『觀經』の九品に至つては上、中二品に念佛を説かず、下品に至りて始めて念佛を説くや。」答へて曰はく、「これに二義あり。一には問端に云ふが如く、『雙卷』の三輩と『觀經』の九品とは開合の異なること、これをもつて知るべし。九品の中に、皆念佛あるべし。いかんが知ることを得たる。三輩の中に皆念佛あり。九品の中、何ぞ念佛なからんや。故に『往生要集』に云はく、問ふ念佛の行は、九品の中において、これ何れの品の攝ぞや。答ふ若し説の如く行ぜば、理、上上に當れり。かくの如くその勝劣に隨ひて、九品を分つべし。然るに經に説く所の九品の行業

は、これ一端を示す、理實には無量なり」と上。故に知んぬ。念佛また九品に通ずべきことを。二には『觀經』の意、初には廣く定散の行を說きて普く衆機に逗し、後には定散二善を廢して、念佛の一行に歸せしむ。所謂「汝好く是の語を持て」等の文これなり。その義下に具に述ぶるが如し。故に知んぬ。九品の行、唯念佛にあることを』

第五章　念佛利益の文

【第一】『無量壽經』の下に云はく『佛、彌勒に語りたまはく「それ彼の佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、當に知るべし。この人は大利を得たりとす。則ちこれ無上功德を具足す」と』

【第二】善導の『禮讃』に云はく『それ彼の阿彌陀佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜して一念するに至るまで、みなまさに彼に生ずることを得べし』と。

【私釋】私に問うて曰く『上の三輩の文に準ずるに、念佛の外に菩提心等の功德を擧ぐ。何ぞかれ等の功德を歎ぜずして、唯獨り念佛の功德をのみ讃ずるや。』答へて曰はく、『聖意測り難し。定めて深き意あらん。且く善導の一意に依りてこれを謂はば、原ぬるに夫れ佛意は唯正直に、念佛の行を說かんと欲すといへども、一往機に隨ひて、菩提心等の諸行を說きて、三輩の淺深不同を分別せり。然るに今諸行においては、既に捨てて歎ぜず。置いて論ずべからざるものなり。ただ念佛の一行につきて、既に選

【汝好く是の語を持て】無量壽經に出づ。

【第五章】念佛利益篇。

【彌勒】マイトレーヤ(Maitreya)慈氏と譯す。菩薩の名。

【禮讃】往生禮讃のこと。

【觀念法門】善導大師選述。一卷。

びてしかも讃歎したまふ。思うて分別すべきものなり。

(三)もし念佛に約して、三輩を分別せば、これに二意あり。一には觀念の淺深に隨ひて、しかもこれを分別し、二には念佛の多少をもつて、しかもこれを分別す。淺深とは、上の所引の如く「若し說の如く行ぜば、理、上上に當る」といふこれなり。次に多少とは、下輩の文の中に、既に十念乃至一念の數あり。上、中の兩輩、これに準じて隨つて增すべし。『觀念法門』に云はく、「日別に一萬遍の佛を念じ、また須く時に依りて、淨土の莊嚴の事を禮讃すべし。大に精進を須ひて、或は三萬六萬十萬を得るもの、皆これ上品上生の人なり」と。當に知るべし。三萬已上はこれ上品上生の業、三萬已去はこれ上品已下の業なることを。既に念數の多少に隨つて、品位を分別することこれ明けし。

(三)今ここに一念と言ふは、これ上の念佛の願成就の中に言ふ所の一念と、下輩の中に明す所の一念とを指すなり。願成就の文の中に、一念と云ふと雖も、未だ功德大利を說かず。又下輩の文の中に、一念と云ふと雖も、また功德大利を說かず。この一念に至つて、說いて大利とし、歎じて無上とす。當に知るべし、これ上の一念を指すことを。この大利とは、是れ小利に對する言なり。然れば則ち菩提心等の諸行をもつて、小利とし、乃至一念をもつてしかも大利とするなり。

(四)又無上功德とは、これ有上に對する言なり。餘行をもつて、有上とし、念佛をもつて無上とす。すでに一念をもつて、一の無上とす。當に知るべし。十念をもつて十の無

【第六章】末法萬年特留念佛篇。

【一】特留念佛止住百歳を明す。

上とし、又百念をもつて百の無上とし、又千念を以て千の無上とすることを。かくの如く展轉して、少より多に至つて、念佛恆沙ならば、無上功德もまた恆沙なるべし。かくの如く知るべし。然れば則ちもろ〳〵の往生を願求せん人、何ぞ無上大利の念佛を廢して、强ひて有上小利の、餘行を修せんや。』

第六章　末法萬年の後餘行悉く滅し特り念佛を留むるの文

【第一】『無量壽經』の下卷に云はく、『當來の世に經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍をもつて、ひとり此の經を留めて、止住すること百歳ならん。それ衆生ありて、この經に値はんものは意の所願に隨ひて、皆得度すべし』と。

【私釋】私に問うて曰はく、【一】『經に唯「特り此經を留て、止住すること百歳」と云ひて、全く「特り念佛を留て、止住すること百歳」と云はず。然るに今なんぞ、「特り念佛を留む」と云ふや。』答へて曰はく、『(二)この經の所詮、全く念佛にあり。その旨前に見えたり。再び出だすこと能はず。善導、懷感、惠心等の意、また〳〵かくの如し。然れば則ちこの經の止住は、卽ち念佛の止住なり。然る所以はこの經に、菩提心の言ありと雖も、未だ菩提心の行相を說かず。また持戒の言ありと雖も、未だ持戒の行相を說かず。しかるに菩提心の行相を說くことは、廣く菩提心經等にあり。彼の經先づ滅しなば、菩提心の行、何によりてか、これを修せん。又持戒の行相を說くことは、廣く大小の戒律にあ

【都率西方】都率は彌勒の淨土、西方は彌陀の淨土。

【上生心地】彌勒の教をとく上生經と心地經のこと。

り。かの教律まづ滅しなば、持戒の行、なにによりてかこれを修せん。自餘の諸行これに準じて知るべし。

(二)故に善導和尚の『往生禮讃』に、この文を釋して云はく、「萬年に三寶滅せんに、この經、住すること百年ならん。その時聞きて一念せば、皆當に彼に生ずることを得べし」と。

(三)又この文を釋するに、略して四の意あり。一には聖道、淨土の二教住滅の前後。二には十方、西方の二教住滅の前後。三には都率、西方の二教住滅の前後。四には念佛諸行の二行住滅の前後なり。

(四)一に聖道、淨土の二教住滅の前後とは、謂はく聖道門の諸經、先づ滅す。故に經道滅盡と云ひ、淨土門のこの經ひとり留まる。故に止住百歳と云ふ。當に知るべし。聖道は機緣淺薄に、淨土は機緣深厚なることを。

(五)二に十方、西方の二教住滅の前後とは、謂はく十方淨土の往生の諸教先づ滅す。故に「經道滅盡せんに」といひ、西方淨土往生の此經特り留まる。故に「止住すること百歳」と云ふ。當に知るべし。十方の淨土は機緣淺薄に西方淨土は機緣深厚なることを。

(六)三に兜率、西方の二教住滅の前後とは、謂はく上生、心地等の上生都率の諸經、先づ滅す。故に「經道滅盡せんに」と云ひ、往生西方のこの經ひとり留まる。故に「止住百歳」と云ふ。當に知るべし。兜率は近しと雖も緣淺く、極樂は遠しと雖も緣深きことを。

【二】特留此經を明す。

（七）四に念佛、諸行の二行住滅の前後とは、謂はく諸行往生の諸教先づ滅す。故に「經道滅盡せんに」と云ひ、念佛往生のこの經ひとり留まる。故に「止住すること百歳」と云ふ。當に知るべし。諸行往生は、機緣最も淺く、念佛往生は、機緣甚だ深きことを。加之、諸行往生は緣少く、念佛往生は緣多し。また諸行往生は、近く末法萬年の時にかぎり、念佛往生は、遠く法滅百歳の代を霑すことを。

【二】問うて曰はく、「既に我慈悲哀愍をもつて、特りこの經を留めて、止住すること百歳ならんと云ふ。若ししからば釋尊慈悲をもつて、經教を留め給はば、何の經、何の教か留らざらん。しかるに何ぞ餘經を留めず、唯この經を留め給ふや。」答へて曰はく、「たとひ何れの經を留むとも、別して一經を指すときは、またこの難を避けず。但し特りこの經を留めたまふこと、その深き意あらんか。若し善導和尚の意に依らば、この經の中に、已に彌陀如來の、念佛往生の、本願を說きたまへり。釋迦の慈悲、念佛を留めんが爲に、殊にこの經を留めたまふ。餘經の中には、未だ彌陀如來の、念佛往生の本願を說かず。故に釋尊の慈悲、しかもこれを留めたまはず。凡そ四十八願、皆本願なりと雖も、殊に念佛をもつて、往生の規とす。故に善導の釋に云はく、「弘誓多門にして四十八、偏に念佛を標して、最も親しとす。人能く佛を念ずれば、佛還つて念じたまふ。專心に佛を想へば、佛人を知りたまふ」と。已上故に知んぬ。四十八願の中に、既に念佛往生の願をもつて、本願の中の王とするなり。ここをもつて釋迦の慈

【三】念佛は正像末の三に通ずべきことを明す。
【正像末】佛教の此世に行はるる期間を分類せるもの、正法五百年、像法千年、末法萬年。
【第七章】光明は唯念佛の行者を攝取するの篇。

悲、ひとりこの經をもつて、止住すること百歲なり。例せば彼の『觀無量壽經』の中に、定散の行を付屬せずして、唯獨り念佛の行を付屬したまふが如し。これ卽ち彼の佛願に順ずるが故に、念佛の一行を付屬したまふ。』

【三】問うて曰はく、『百歲の間、念佛を留むべきこと、その理然るべし。これ念佛の行は、唯彼の時機に被るとやせん。將た正像末法の機に通ずとやせん。』答へて曰はく、『ひろく正像末法に通ずべし。後を擧げて今を勸む。その義知るべし。』

第七章　彌陀の光明餘行の者を照らさず唯念佛の行者を攝取したまふの文

【第一】『觀無量壽經』に云はく、『無量壽佛に八萬四千の相あり。一一の相に、各八萬四千の隨形好あり。一一の好に、また八萬四千の光明あり。一一の光明、徧く十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず』と。

【第二】『同經疏』に云はく、『「無量壽佛」より下、「攝取不捨」にいたる已來は、正しく身の別相を觀ずるに、光有緣を益することを明すに、卽ちその五あり。一には相の多少を明し、二には好の多少を明し、三には光の多少を明し、四には光照の遠近を明し、五には光の及ぼさるる處、偏に攝益を蒙ることを明す。

【三】問うて曰はく、『備に衆行を修して、ただ能く廻向すれば、皆往生を得。何をもつてか、佛光普く照らすに、唯念佛の者のみを攝すること何の意ありや。』答へて曰はく、『これに

【一】佛の光明は念佛のもののみを照らすことを明す。

三義あり。一に親縁を明す。衆生、行を起して口常に佛を稱すれば、佛卽ちこれを聞きたまふ。身常に佛を禮敬すれば、佛卽ちこれを見たまふ。心常に佛を念ずれば、佛卽ちこれを知りたまふ。衆生佛を憶念すれば、佛また衆生を憶念したまふ。彼此の三業あひ捨離せず。故に親縁と名く。二に近縁を明す。衆生佛を見たてまつらんと願ずれば、佛卽ち念に應じて、目前に現在したまふ。故に近縁と名く。三に增上縁を明す。衆生稱念すれば、卽ち多劫の罪を除き、命終らんと欲する時、佛聖衆と與に、自ら來りて、迎接したまふ。諸邪業繫、能く礙ふる者なし。故に增上縁と名く。自餘の衆行も、これ善と名くと雖も、若し念佛に比すれば、全く比挍にあらず。この故に諸經の中、處處に廣く念佛の功能を讃ず。『無量壽經』の四十八願の中の如き、唯專ら彌陀の名號を念じて、生ずることを得ることを明せり。又『彌陀經』の中の如き、一日七日專ら彌陀の名號を念じて生ずることを得。また十方恒沙の諸佛、不虛を證誠したまふ。又この經の定散の文の中に、唯專ら名號を念じて、生ずることを得ることを標す。この例一にあらず。廣く念佛三昧を顯し竟んぬ』と。

【第二】『觀念法門』に云はく、『又前の如く、身相等の光、一一徧く十方世界を照らす。ただ專ら阿彌陀佛を念ずる衆生のみありて、彼の佛の心光常にこの人を照して、攝護して捨てたまはず。總て餘の雜業の行者を、照攝することを論ぜず』と。

【私釋】私に問うて曰はく、『【一】「佛の光明、唯念佛の者のみを照らして、餘行の

【六時禮讃】往生禮讃に同じ。

【二】念佛諸善の比校を明す。

【第八章】三心篇。

【一】至誠心を明す。

者を照らさゞるは、何の意ありや。答へて曰はく「解するに二義あり。一には親縁等の三義、文のごとし。二には本願の義、謂はく餘行は本願にあらず。故にこれを照攝せず。念佛はこれ本願なり。故にこれを照攝す。故に善導和尚の『六時禮讃』に云はく、彌陀の身色は金山の如し。相好の光明十方を照らす。唯念佛のもののみありて、光攝を蒙る。當に知るべし。本願最も強しとす。」已上

【二】又所引の文の中に、自餘の衆善は、これ善と名くと雖も、若し念佛に比すれば、全く比挍にあらずと言ふは、意に云はく、これ淨土門の、諸行に約して、しかも比論する所なり。念佛は、これ既に二百一十億の中に、選取する所の妙行なり。諸行はこれ既に二百一十億の中に、選捨する所の麤行なり。故に全く比挍にあらずと云ふ。又念佛はこれ本願の行、諸行は本願にあらず。故に全く比挍にあらずといふなり。』

第八章　念佛の行者必ず三心を具足すべきの文

【第一】『觀無量壽經』に云はく、「若し衆生ありて、彼の國に生ぜんと願ぜば、三種の心を發して、すなはち往生す。何等をか三とす。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具するものは、必ず彼の國に生ず』と。

【第二】『同經疏』に云はく、『經に云はく、「【一】一には至誠心」、至とは眞なり。誠とは實なり。一切衆生の、身、口、意業に修する所の解行、必ず須く眞實心の中に作すべきこ

【依正二報】依報と正報、正報は肉體と精神を云ふ。自己の精業因によりて與へられたる正しき果報、之に對して山河、大地、衣服、飯食等有情の所依となる果報を依報と云ふ。

とを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現じて、內に虛假を懷く事を得ざれ。貪瞋邪僞、姧詐百端にして、惡性侵め難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起すと雖も、名けて雜毒の善とす。また虛假の行と名く。眞實の業と名けず。若しかくの如き安心起行を作す者は、たとひ身心を苦勵して、日夜十二時急に走り急に作すこと、頭然をはらふ如くなるも、すべて雜毒の善と名く。此の雜毒の行を廻して、彼の佛の淨土に、生ぜんことを求めんと欲せば、これ必ず不可なり。何をもつての故に、正しく彼の阿彌陀佛の因中に、菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も、三業に修する所、みなこれ眞實心中に作し、凡そ施爲趣求したまふ所、またみな眞實なるによつてなり。

(二)又眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。

(三)自利眞實といふは、また二種あり。一には眞實心中に、自他の諸惡、及び穢國等を制捨して、行住坐臥に、一切の菩薩の諸惡を制捨したまふに同じく、我もまたかくの如くならんと想ふなり。二には眞實心中に、自他凡聖等の善を勤修し、眞實心中に、口業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を讚歎し、又眞實心中に、口業に三界六道等の自他の依正二報、苦惡の事を毀厭し、また一切衆生の三業になす所の善を讚歎す。若し善業にあらざるをば敬ひてこれを遠ざけ、また隨喜せざれ。又眞實心中に、身業に合掌禮敬して、四事等をもつて、彼の阿彌陀佛及び依正二報を供養す。又眞實心中に、身業にこの生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨す。又眞實心中に、意業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を思想し、觀

【二】深心を明す。

察し、憶念して、目前に現ずるが如くす。又眞實心中に、意業にこの生死三界等の自他の依正二報を、輕賤し厭捨す。不善の三業をば必ず須く、眞實心中に捨すべし。又若し善の三業を起さば、必ず須く眞實心中になすべし。内外明闇を簡ばず、皆須く眞實なるべし。故に至誠心と名く。

【二】二には深心。(一)深心と言ふは即ちこれ深く信ずるの心なり。又二種あり。

(二)一には決定して深く信ず。自身は現に是れ、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に沒し、常に流轉して、出離の緣あることなしと。

(三)二には決定して深く信ず。彼の阿彌陀佛、四十八願をもつて衆生を攝受し給ふ。疑なく慮なく、彼の願力に乘じて、定めて往生を得と又決定して深く信ず。釋迦佛、この「觀經」の三福、九品、定、散二善を說いて、彼の佛の依、正二報を證讃して、人をして欣慕せしめたまふことを、又決定して深く信ず「彌陀經」の中に、十方恒沙の諸佛一切の凡夫決定して、生ずることを得ることを證勸したまふことを。

(四)又深信とは、仰ぎ願はくば、一切の行者等、一心に唯佛語を信じて、身命を顧みず、決定して依行せよ。佛の捨てしめたまふものをば即ち捨て、佛の行ぜしめたまふものをば即ち行じ、佛の去らしめたまふ處をばすなはち去れ。これを佛敎に隨順し、佛意に隨順すと名け、是れを佛願に隨順すと名け、これを眞の佛弟子と名く。

(五)又一切の行者、但能くこの經に依つて深く信じて、行ずるものは、必ず衆生を悞らず。

何をもつての故に。佛はこれ大悲を滿足せる人なるが故に。實語したまふが故に。佛を除きて已還は、智行未だ滿ぜず。その學地にありて、なほ正と習との二の障ありて未だ除かず。果も願も未だ圓ならず、これらの凡聖は、たとひ諸佛の敎意を測量するも、未だ決了すること能はず。平章することありと雖も、かならず須く、佛の證を請ひて、定とすべきなり。若し佛意に稱へば、卽ち印可して如是如是との給ふ。もし佛意にかなはざれば、すなはち汝等がとくところ、この義不如是と言ふ。印せざるものは、卽ち無記、無利、無益の語に同じく、佛の印可したまふものは、卽ち佛の正敎に隨順す。若し佛のあらゆる言說は、卽ちこれ正敎、正義、正行、正解、正業、正智なり。若しは多、若しは少、すべて菩薩人天等に問うて、その是非を定めたまはず。若し佛の所說は卽ちこれ了敎なり。菩薩等の說をば、盡く不了敎と名くるなり。知るべし、この故に、今時仰いで勸む、一切有緣の往生人等、唯深く佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相應の敎を信用して、もつて疑礙をなし、抱惑自迷して往生の大益を廢失すべからず。

(六)又深心は、深信とは、決定して自心を建立して、敎に順じて修行して、永く疑錯を除きて、一切の別解、別行、異學、異見、異執の爲に、退失し傾動せられざれ。

(七)問うて曰はく、「凡夫智淺く、惑障ことはり深し、若し解行不同の人、おほく經論を引き來りて、相妨難し、證して、一切罪障の凡夫、往生を得ずと云ふに逢はば、いかんが彼の難を對治して、信心を成就し、決定して直ちに進んで、怯退を生ぜざらん。」答へて曰はく、

【韋提】韋提希の略。ヴァイデーヒー(Vaidehī)摩揭陀國頻婆娑羅王の后妃、觀無量壽經の中心人物。

【五苦】人生の五種の苦痛、生老病死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦。

【地前の菩薩】菩薩の階位たる十地に至らざる未熟の修行者。

【羅漢辟支】阿羅漢と辟支佛、共に小乘の聖者にして究竟圓滿の佛に非ず。阿羅漢(Arhan)は聲聞四果の一。世間の供養をうくるに足る聖者。辟支佛(Pratyekabuddha)は獨覺、緣覺と譯し、單獨にて佛敎の眞理を覺得する聖者。

一若し人ありて、多く經論を引いて、證して生ぜずと云はば、行者即ちこたへて云へ、仁者經論を持ち來りて、證して生ぜずといふと雖も、我が意の如きは、決定して汝が破を受けず。何をもつての故に。然るに我またこれ、かの諸經論を信ぜざるにはあらず。盡く皆仰いで信ず。然れども佛、彼の經を說きたまふ時は、處も別に、時も別に、對機も別に、利益も別なり。又彼の經をときたまふ時は、すなはち『觀經』『彌陀經』等を說きたまふ時にあらず。然るに佛、敎を說きて機に備へたまふこと、時また同じからず。彼は即ち通じて、人天菩薩の解行を說き、今は『觀經』の定散二善を說きて、『唯韋提及び佛滅後の五濁、五苦等の一切の凡夫の爲に、證して生ずることを得』とのたまへり。この因緣によりて、我今一心に、この佛敎に依りて決定して奉行す。たとひ汝等、百千萬億ありて生ぜずといふとも、唯我が往生の信心を增長し成就せんと。

又行者更に向ひて說きて言へ、仁者善く聽け、我れ今汝が爲に、更に決定の信相を說かん。たとひ地前の菩薩、羅漢辟支等、若しは一、若しは多、乃至十方に徧滿して、皆經論を引きて、證して生ぜずといふとも、我また未だ一念の疑心も起さじ。唯我が淸淨の信心を增長し成就せん。何をもつての故に。佛語は決定成就の了義にして、一切の爲に破壞せられざるによるが故なり。

又行者善く聽け。たとひ初地已上、十地已來、若しは一、若しは多、乃至十方に徧滿して、異口同音に、皆釋迦佛の、彌陀を指讚し、三界六道を毀呰し、衆生を勸勵して、專心

【三界六道】三界は欲界色界無色界の三。六道は地獄餓鬼畜生阿修羅人天の六。共に迷者の世界を云ふ。前者は器世間(世界)に約し、後者は有情世間(衆生)に約して云へるもの。義同じ。

【化佛報佛】化佛は衆生救濟の爲めに應現せる佛。報佛は修行の因に酬いられたる果報の佛。

に念佛し、及び餘善を修すれば、この一身を畢つて後、必定して、彼の國に生ずといふは、これ必ず虛妄なり、依信すべからずと云はんに、我これ等の所說を聞くと雖も、また一念の疑心を生ぜず。唯我が決定上上の信心を增長し成就せん。何をもつての故に。乃ち佛語は、眞實決了の義なるによるが故に。佛はこれ實知、實解、實見、實證にして、これ疑惑の心中の語にあらざるが故に。又一切菩薩の異見、異解の爲に破壞せられず、若し實にこれ菩薩ならば、すべて佛敎に違せじ。

又この事をば置く。行者當に知るべし。たとひ化佛、報佛、若しは一、若しは多、乃至十方に徧滿して、各光を輝かし、舌を吐きて、徧く十方に覆ひて、一一に說きて、釋迦の所說、相讚じて、一切の凡夫を勸發して、專心に念佛し、及び餘善を修して廻願すれば、かの淨土に生ずることを得といふ。これは是虛妄なり。定めてこの事なしと言ふとも、我これらの諸佛の所說を聞くと雖も、畢竟じて、一念疑退の心を起して、彼の佛國に生ずることを得ざらんかと畏れじ。何をもつての故に。一佛は一切佛なり。あらゆる知見、解行、證悟、果位、大悲等同にして、少も差別なし。この故に一佛の制するところは、即ち一切佛同じく制したまふ。前佛の殺生十惡等の罪を制斷したまふに、畢竟じて犯ぜず、行ぜざるを、すなはち十善、十行、隨順六度の義と名くるがごとき、もし後佛出世したまふことあらんに、豈前の十善を改めて、十惡を行ぜしむべけんや。此の道理をもつて、推驗するに明かに知んぬ。諸佛の言行、相違失せざることを。たとひ釋迦一切の凡夫を指勸し

て、この一身を盡すまで、専念専修すれば、命を捨てて已後、定めて彼の國に生ずとのたまはば、即ち十方の諸佛も、悉く皆同じく讃じ、同じく勸め、同じく證したまはん。何をもつての故に。同體の大悲なるが故に。一佛の所化は、即ちこれ一切佛の化。一切佛の化は、即ちこれ一佛の所化なり。即ち『彌陀經』の中に、説きたまはく「釋迦極樂の種種の莊嚴を讃歎して、又一切の凡夫、一日七日、一心に專ら、彌陀の名號を念ずれば、定めて往生を得」と勸めたまへば、次下の文に「十方に各、恒河沙等の諸佛ありて、同じく釋迦能く、五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信の、盛なる時において、彌陀の名號を指讃して、衆生稱念すれば、必ず往生を得」と勸勵したまふことを讃じたまふといへる、即ちその證なり。

又十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらんことをおそれて、即ち共に、同心同時に、各舌相を出だして、徧く三千世界に覆ひて、誠實の言を説きたまふ。汝等衆生、皆まさにこの釋迦の、所説、所讃、所證を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問はず。ただ能く上百年を盡し、下一日七日に至るまで、一心に專ら、彌陀の名號を念ずれば、定めて往生を得、必ず疑ふことなかれと。この故に一佛の所説は、即ち一切佛、同じく其事を證誠したまふ。これを人に就いて信を立つと名く。

(八)次に行に就きて信を立つとは、然るに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。」云々。前の二行の中に引所の如し。繁を恐れて載せず。見ん人、意を得よ。

【三】廻向發願心を明す。

【十惡】十惡業とも云ふ。殺生、偸盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴の十。

【五逆】五逆罪五無間業とも云ふ。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

【三】三には廻向發願心。廻向發願心と言ふは、過去及び今生の身、口、意業に修する所の、世出世の善根及び他の一切の凡聖の身、口、意業に、修する所の世出世の善根、及び他の一切の凡聖の身、口、意業に修する所の世出世の善根を隨喜せず。この自他の、所修の善根をもつて、悉く皆、眞實深心の心中に廻向して、かの國に生ぜんと願ず。故に廻向發願心と名づく。

(二)又廻向し發願して、生ぜんと願ずる者は、必ず須く、決定して眞實心中に廻向し願じて、得生の想を作すべし。この心深く信ずること、なほし金剛のごとく、一切の異見、異學、別解、別行の人等の爲に動亂破壞せられず。唯これ決定して、一心に投じ正直に進んで、かの人の語を聞きて、即ち進退し、心に怯弱を生ずることありて、廻顧落道して、即ち往生の大益を、失ふことを得ざれ。

(三)問うて曰はく、「若し解行同じからざる邪雜の人等ありて、來りて相惑亂し、或は種種の疑難を說きて往生を得ずといひ、或は云はん、汝等衆生、曠劫よりこのかた、および今生の身、口、意業に、一切凡聖の身上において、具に十惡、五逆、四重、謗法、闡提、破戒、破見等の罪を造りて、未だ除き盡すこと能はず。然るにこれらの罪は、三界の惡道に繫屬す。いかんぞ一生の修福念佛をもつて、即ち彼の無漏無生の國に入つて、永く不退の位を證悟することを得んや。」答へて曰はく、「諸佛の教行、數塵沙に越え稟識の機緣、隨情一にあらず。譬へば世間の人の、眼に見つべく信ずべきが如きは、明よく闇を破り空能く有を含み地よく載養ひ水能く生潤し、火よく成壞するが如し。かくの如き等の事、悉く

【四重】四重禁とも云ひ、四波羅夷をも云ふ。殺生、偸盗、婬、妄語の極重罪。
【謗法】因果の理を毀ち、佛教を誹謗するもの。
【闡提】具には一闡提と云ふ。イッチャンテカ(Icchantika)断善根信不具足等と譯す。本来解脱の性を缺き永遠に成佛し得ざるもの。
【破戒】戒律を破り罪を犯すこと。
【破見】正見即ち正しき教を破りて邪見を懐くこと。
【無漏無生の國】無漏即ち煩惱なく、永久に生滅變化なき國。
【一の譬喩】以下有名なる二河白道の章節なり。

待對の法と名く。目に即れて見つべし。千差萬別なり。いかに況や佛法不思議の力、豈種種の益なからんや。隨つて一門を出れば、即ち一煩惱門を出で、隨つて一門に入れば、即ち一解脱智慧門に入るなり。これによつて緣に隨つて、行を起して、各解脱を求む。汝なにをもつてか、乃ち有緣にあらざる要行をもつて、我を障惑するや。しかるに我が愛する所は、すなはちこれ我が有緣の行なり。即ち汝が求むる所にあらず。汝が愛する所は、即ちこれ汝が有緣の行なり。また我が求むる所にあらず。この故に各樂ふ所に隨つて、しかもその行を修すれば、必ず疾く解脱を得。行者當に知るべし。若し解を學せんと欲せば、凡より聖に至り、乃至佛果まで、一切無礙に、皆學することを得よ。若し行を學せんと欲せば、必ず有緣の法によれ。少しく功勞を用ふるに、多く益を得。

(四)又一切の往生の人等にまをす。今更に行者の爲に、一の譬喩を說きて、信心を守護して、もつて外邪異見の難を防がん。何者か是なる。譬へば人ありて、西に向ひて百千の里を、行かんと欲するが如き、忽然として、中路に二河あるを見る。一はこれ火の河、南にあり。二はこれ水の河、北にあり。二河各廣さ百歩、各深くして底なく、南北邊なし。水火の中間にあたりて、一の白道あり。闊さ四五寸ばかり。この道東の岸より、西の岸に至るまで、また長さ百歩なり。その水の波浪交過ぎて、道を溼し、その火の焰、また來りて道を燒く。水火相交りて、常に休息ことなし。この人既に空曠の、はるかなるところに至るに、更に人物なし。多く群賊惡獸ありて、此人の單獨なるを見て、競ひ來りて、殺さんと欲す。

此の人死を怖れて、直ちに走りて西に向へば、忽然として此の大河を見る。即ち自ら念言すらく、此の河南北、邊畔を見ず。中間に一つの白道を見れども極めてこれ狹小なり。二つの岸相去ること近しと雖も、何によりてか行くべき。今日定めて死せんこと疑はず。正に到り廻らんと欲すれば、群賊惡獸漸漸に來り逼む。正に南北に避り走らんと欲すれば、惡獸毒蟲、競ひ來りて我に向ふ。正に西に向ひて道を尋ねて去らんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河に墮せんことを。その時の惶怖くこと復言ふべからず。即ち自ら思念すらく、我今廻るともまた死なん。住まるともまた死なん。去るともまた死なん。一種として死を免れず。我寧ろ此道を尋ねて、前に向ひて去らん。既に此の道あり。かならずわたるべし。この念を作す時、東の岸に忽ちに、人の勸むる聲をきく。「なんぢただ決定して、此の道を尋ねて行け。必ず死の難なけん。若し住まらば卽ち死なん」と。又西の岸の上に人ありて、喚びて言はく、「汝一心正念にして、直に來れ。我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。この人既にここに遣り、かしこに喚ぶを聞きて、卽ち自ら身心を正當にして、決定して道を尋ねて、直に進みて、疑怯退の心を生ぜず。或は行くこと一分二分するに、東岸の群賊等、喚びて言はく、「なんぢ廻り來れ。この道嶮しく惡し。過ぐることを得じ。必ず死なんこと疑はず。我等すべて惡心をもつて、相向ふことなし」と。此の人喚ぶ聲を聞くと雖も、またかへりみず。一心に直に進みて、道を念じて行けば、須臾に卽ち西岸に到りて、永く諸の難を離る。善友相見て慶樂やむことなし。是はこれ喩なり。

【六根】根は增上の義。強き作用をなすもの。身體に於ける六種の重要なる機能を云ふ。即ち眼、耳、鼻、舌、身、意の六根

【六識】六根の作用を司る心。眼根を司る眼識、耳根を司る耳識乃至鼻識舌識身識意識の六。

【六塵】六境とも云ふ。六識(主觀)の對象となる客觀色境、聲境、香境、味境、觸境、法境の六。

【五陰】五蘊とも書く。物質精神及その關係等の總稱。色陰、受陰、想陰、行陰、識陰の五。

【四大】物質を構成する四種の原素地大、水大、火大、風大の四。

次に喩を合せば、東岸と言ふは、即ち此の娑婆の火宅に喩ふ。西岸と言ふは、即ち極樂の寶國に喩ふるなり。群賊惡獸許り親しむと言ふは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩ふ。人なき空迥の澤といふは、即ち常に惡友に隨つて、眞の善知識に、値はざるに喩ふ。水火の二河と言ふは、即ち衆生の貪愛は水の如く、瞋憎は火の如くなるに喩ふ。中間の白道四五寸と言ふは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く淸淨なる願往生の心を生ずるに喩ふ。即ち貪瞋强きによるが故に即ち喩ふるに水火の如し。善心微なるが故に喩ふるに白道の如し。又水波常に道を濕すとは、即ち愛心常に起りて、能く善心を染汚するに喩ふ。又火焔常に道を燒くとは、即ち瞋嫌の心能く功德の法財を燒くに喩ふ。人道の上を行きて、直に西に向ふと言ふは、即ち諸の行業を廻して、直に西方に向ふに喩ふ。東岸に人の聲ありて、勸め遣るを聞いて、道を尋ねて直に西に進むと言ふは、即ち釋迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらざれども、なほ敎法の尋ぬべきあるにたとふ。即ち是をたとふるに聲の如し。或は行くこと一分二分するに、群賊等喚び廻すと言ふは、即ち別解、別行、惡見人等、妄に見解を說きて、たがひにあひ惑亂し、及び自ら罪を造りて、退失するに喩ふ。西岸の上に人ありて喚ぶといふは、即ち彌陀の願意に喩ふ。須臾に西岸に到れば、善友相見て喜ぶと言ふは、即ち衆生久しく、生死に沈みて、曠劫に輪廻し、迷倒自纒して、解脫するによしなし。仰ぎて、釋迦發遣して指して西方に向はしむることを蒙り、又彌陀悲心をもつて、招喚したまふによつて、今二尊の意に信順して、水火の二

【四】具足三心を明す。

河を顧みず。念念にわするることなく、彼の願力の道に乘じて、捨命已後、彼の國に生ずることを得て、佛と相見せば、慶喜なんぞ極まらんといふに喩ふ。又一切の行者、行住坐臥、三業に修する所、晝夜時節を問ふことなく、常に此の解を作し、常にこの想を作す。故に廻向發願心と名く。

(六)又廻向と言ふは、彼の國に生じをはりて、還つて大悲を起して、生死に廻入して、衆生を教化するをまた廻向と名く。

【四】三心既に具すれば、行として成ぜずといふ事なし。願行すでに成じて、もし生ぜずといはば、此の處ある事なし。又この三心、また通じて定善を攝するの義知るべし。』

第三　『往生禮讃』に云はく、『問うて曰はく、「今人を勸めて、往生せしめんと欲するもの、未だ知らずいかんが安心し、起行し、作業して、定めて彼の國土に往生を得んや。」答へて曰はく、「必ず彼の國土に生ぜんと欲せば、『觀經』に說くが如きは、三心を具すれば必ず往生を得。何等をか三とす。一には至誠心、所謂身業に彼の佛を禮拜し、口業に彼の佛を讃歎稱揚し、意業に彼の佛を專念觀察す。凡そ三業を起すに、必ず眞實をもちふ。故に至誠心と名く。二には深心、即ちこれ眞實の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉し、火宅を出でずと信知し、今彌陀の本弘誓願及び名號を稱すること、十聲一聲等に至るまで、定めて往生を得と信知して、乃至一念も、疑心あることなし。故に深心と名く。三には廻向發願心、作す所の一切の善根、悉く皆廻して、

【二】具三心者必得往生を明す。

往生を願ず。故に廻向發願心と名く。この三心を具すれば、必ず生ずることを得。若し一心をもかきぬれば、すなはち生ずることを得ず」と。觀經に具に說くが如し。知るべし』と。

【私釋】私に云はく、【一】引く所の三心は是れ行者の至要なり。ゆゑいかんとなれば、經には「則ち三心を具する者は、必ず彼の國に生ず」といふ。明かに知んぬ。三を具すれば必ず生ずることを得べし。釋には「則ち若し一心をもかきぬれば即ち生ずることを得ず」といふ。明かに知んぬ。一もかきぬれば、これまた不可なることを。これによつて極樂に生ぜんと欲せん人は、まして三心を具足すべし。

【三】その中に至誠心とはこれ眞實心なり。その相彼の文の如し。但し外には賢善精進の相を現じ、內に虛假を懷くとは、外は內に對するの辭なり。謂はく外相と內心と調はざる意なり。即ち是れ外は智にして內は愚なり。賢は愚に對する言なり。謂はく外はこれ賢にして、內は即ち愚なり。善は惡に對するの辭なり。謂はく外はこれ善にして、內は即ち惡なり。精進は懈怠に對するの辭なり。謂はく外には精進の相を示し、內には即ち懈怠の心を懷く。若し夫れ外を飜して、內に蓄へば、祇に出要に備ふべし。內懷虛假等とは、內は外に對する辭なり。謂はく內心と外相と、調はざる意なり。即ちこれ內虛外實なり。虛は實に對する辭なり。謂はく內虛外實の者なり。假は眞に對する辭なり。謂はく內假外眞なり。若しそれ內を飜じて外に播さば、また出要に足りぬべし。

【二】行者の用心を勸發す。

【第九章】修法篇

(三)次に深心とは、謂はく深く信ずる心なり。當に知るべし、生死の家には、疑をもつて所止とし、涅槃の城には、信をもつて能入とす。故に今二種の信心を建立して、九品の往生を決定するものなり。又此の中に、一切の別解、別行、異學、異見等と言ふは、これ聖道門の、解行學見を指すなり。その餘は卽ち是淨土門の意なり。文にあつて見つべし。明かに知んぬ。善導の意、またこの二門を出ざることを。

(四)廻向發願心の義、別釋を俟つべからず。行者知るべし。

【二】此の三心は總じてこれを言はゞ、諸の行法に通じ、別してこれを言はば、往生の行にあり。いま通を擧げて別を攝す。意卽ちあまねし。行者能く用心して、敢へて忽緒にすることなかれ。

第九章　念佛の行者四修の法を行用すべきの文

【第一】善導の『往生禮讃』に云はく、(一)又勸めて四修の法を行ぜしむ。何者をか四とす。

(二)一には恭敬修。所謂彼の佛、及び彼の一切の聖衆等を恭敬禮拜す、故に恭敬修と名く。畢命を期とし、誓つて中止せざる、卽ちこれ長時修なり。

(三)二には無餘修。所謂專ら彼の佛名を稱して、彼の佛及び一切の聖衆等を、專念、專想、專禮、專讃して、餘業を雜へず。故に無餘修と名く。畢命を期とし誓つて中止せざる、卽ちこれ長時修なり。

【西方要決】一卷。慈恩大師の撰述。

【一】總じて四修を明す。

【二】長時修を明す。

【三】恭敬修を明す。

三には無間修。所謂相續して、恭敬禮拜し、稱名讚歎し、憶念觀察し、廻向發願し、心心相續して、餘業をもつて來し間てず。故に無間修と名く。又貪瞋煩惱をもつて來し間てず、隨犯隨懺して、念を隔て、時を隔て、日を隔てしめず。常に清淨ならしむるをまた無間修と名く。畢命を期とし、誓つて中止せざる、即ちこれ長時修なり』と。

第三　『西方要決』に云はく、『【一】たゞ四修を修するをもつて、正業とす。

【二】一には長時修。初發心より乃ち菩提に至るまで、恆に淨因をなして、終に退轉することなし。

【三】二には恭敬修。これにまた五あり、一には有緣の聖人を敬ふ。謂はく行住坐臥、西方に背かず、涕唾便利、西方に向はず。

二には有緣の像教を敬ふ。謂はく西方の彌陀の像變を造る。廣く作ること能はずば、たゞ一佛二菩薩を作るもまた得たり。教とは『彌陀經』等を、五色の袋に盛れて、自ら讀み他に教へて、此の經像を室中に安置して、六時に禮懺し、香華供養して、特に尊重を生ずべし。

三には有緣の善知識を敬ふ。謂はく淨土の教を宣ぶる者をば、もしは千由旬、十由旬よりこのかた、並びに須く敬重し親近し供養すべし。別學の者にも、總て敬心を起し、己と同じからざるをも、たゞ深く敬ふことを知れ。若し輕慢を生ずれば、罪を得ること窮なし。故に須く總て敬ふべし。即ち行の障を除く。

【四】無間修を明す。

(四)四には同縁の伴を敬ふ。謂はく同修業の者なり。自ら障重うして、獨業成ぜずと雖も、かならず良朋によりて、方に能く行をなす。危を扶け、厄を救ひ、力を助けて相資く。同伴の善縁、深く相保重せよ。

(五)五には三寶を敬ふ。同體別相、並びに深く敬ふべし。具に録することあたはず。淺行の者の、依修することを、果さざるによりてなり。住持の三寶とは、今の淺識のために大因縁となる。今粗料簡せん。佛寶と言ふは、いはく檀を雕り、綺に繡ひ、素質金容玉を鏤め、綃に圖し、石を磨き、土を削り、この靈像特に尊承すべし。しばらくも形を觀れば、罪消え福をます。若し少慢を生ずれば、惡を長じ善を亡ぼす。たゞ尊容を想ふこと、當に眞佛を見るがごとくすべし。法寶と言ふは、三乘の敎旨、法界所流の、名句の所詮なり。能く解を生ずるの縁なり。故に須く珍仰すべし。惠を發するの基なるをもつてなり。尊經を鈔寫して、恆に淨室に安じ、箱篋に盛れ貯へて、並びに嚴に敬ふべし。讀誦せん時は、身手淸潔にせよ。僧寶と言ふは、聖僧と菩薩と、破戒とのたぐひ、等心に敬を起して、慢想を生ずることなかれ。

【四】三には無間修。謂はく常に念佛して、往生の心をなす。一切の時において、心に恆に想巧すべし。譬へば若し人ありて、他に抄掠せられて、身下賤となりて、備に艱辛を受く。忽ち父母を思ひて、走りて國に歸らんと欲すれども、行裝未だ辨ぜず。なほ他鄕にあつて、日夜思惟して、苦しみ堪へ忍びず。時として暫も捨てて、耶孃を念ぜざることなし。

【五】無餘修を明す。

計をなすこと直に成りて、便ち歸りて、達ることを得て、父母に親近し、ほしいままに歡娯す。行者もまた然なり。むかし煩惱によりて、善心を壞亂し、福智珍財、並びに皆散失す。久しく生死に流れて、制すること自由ならず。恆に魔王のために、しかも僕使となつて、六道に驅馳せられて、身心を苦切す。今善縁に遇ひて、忽ち彌陀慈父の弘願に違せず、群生を濟拔し給ふを聞きて、日夜に驚忙し、發心して往くことを願ふ。所以に精勤して倦まず、當に佛恩を念じて、報の盡くるを期として、心恆に計念すべし。

【五】四には無餘修。謂はく專ら極樂を求めて、彌陀を禮念す。ただ諸餘の業行を雜起せしめず。所作の業には、日別に須く念佛誦經を修して、餘課を留めざるべきのみ」と。

私釋　私に云はく「四修の文見つべし。繁を恐れて解せず。但し前の文の中に、すでに四修といひて、唯三修あり。若しその文を脱せるか。若しその意ありや。更に脱文にあらず、その深意あり。何をもつてか知ることを得る。四修とは、一には長時修、二には慇重修、三には無餘修、四には無間修なり。しかるに初の長時は、只これ後の三修に、通用するをもつてなり。謂はく慇重若し退せば、慇重の行、即ち成ずべからず。無餘若し退せば、無餘の行、即ち成ずべからず。無間若し退せば、無間の行、即ち成ずべからず。この三修の行を成就せしめんがために、みな長時をもつて、三修に屬して、通じて修せしむる所なり。故に三修の下に、皆結して畢命を期とし、誓つて中止せざる、即ちこれ長時修なりといへる、これなり。例せば彼の精進、餘の五度に

【第十章】　化佛讃歎篇。

【十二部經】　釋尊所說の聖典をその内容により十二に區分したるもの。一、修多羅(Sūtra)契經と譯す。二、伽陀(Gāthā)孤起頌と譯す。三、祇夜(Geya)重頌と譯す。四、和伽羅(Vyakarana)授記と譯す。五、優陀那(Udāna)無問自說と譯す。六、尼陀那(Nidāna)因緣と譯す。七、阿波陀那(Avadāna)譬喩と譯す。八、毘佛略(Vaipulya)方廣と譯す。九、闍多伽(Jātaka)本生と譯す。十、伊多帝日(Itimuttaka)本事と譯す。十一、阿浮達磨(Adbhuttaka)未曾有と譯す。十二、優婆提舍(Upadesa)論義と譯す。

通ずるが如くなるのみ。』

第十章

彌陀化佛の來迎聞經の善を讃歎せず、唯念佛の行を讃歎したまふの文

【第一】『觀無量壽經』に云はく、『或は衆生ありて、諸の惡業を作らん。方等經典を誹謗せずと雖も、かくの如き愚人、多く衆惡を造りて、慚愧あることなし。命終らんと欲する時、善知識、爲に、大乘十二部經の首題名字を讃ずるに遇へり。かくの如き諸經の名を聞くをもつての故に、千劫極重の惡業を除却す。智者また教へて、合掌叉手して、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に、五十億劫生死の罪を除く。その時彼の佛、即ち化佛化觀世音化大勢至を遣はし、行者の前に至らしめて、讃じて宣はく、『善男子、汝佛名を稱するが故に、諸罪消滅すれば、我來りて汝を迎ふ』』と。

【第二】『同經疏』に云はく、『聞く所の化讃、ただ稱佛の功を述べて、我來り汝を迎ふといひて、聞經の事を論ぜず。然るに佛の願意に望めば、唯正念に、名を稱ふることを勸む。往生の義、疾きこと雜散の業に同じからず。この經及び諸部の中の如き處處に廣く歎じ、勸めて名を稱せしむるを、將に要益とす、知るべし』と。

【私釋】　私に云はく、『聞經の善は、これ本願にあらず。雜業なるが故に、化佛讃ぜず。念佛の行は、これ本願の正業なるが故に、化佛讃歎す。加之、聞經と念佛とは滅罪の多少同じからず。『觀經の疏』に云はく、『問うて曰はく、何故ぞ聞經は十二部なるに、

ただ罪を除くこと千劫、稱佛は一聲なるに、即ち罪を除くこと、五百萬劫なるは、何の意ぞや。答へて曰はく、「造罪の人、障重く、加ふるに死苦來逼をもつてす。善人多經を説くと雖も、餐受の心浮散す。心散するによるが故に、罪を除くこと稍輕し。又佛名はこれ一なり。すなはちよく散を攝して、もつて心を住せしむ。また教へて正念に名を稱せしむ。心重きによるが故に、即ち能く罪を除くこと多劫なり」と。』

第十一章　雜善に約對して念佛を讃歎したまふの文

【第一】「觀無量壽經」に云はく、「若し念佛せん者は、當に知るべし。此の人はこれ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、その勝友となる。當に道場に坐すべきをもつて、諸佛の家に生ずべし」と。

【第二】「同經の疏」に云はく、「『若し念佛せん者』より下、『諸佛の家に生ずべし』にいたる已來は、正しく念佛三昧の功能超絶して、實に雜善をもつて、比類とすることを得るにあらざることをあらはす。即ちその五あり。一には專ら彌陀佛の名を念ずることを明し、二には能念の人を指して讃ずることを明し、三には若し能く相續して念佛するものは、此の人甚だ希有なりとす。更に物のもつてこれにくらぶべきなし。故に芬陀利を引いて喩とすることを明す。芬陀利と言ふは人中好華と名け、また希有華と名け、また人中上上華と名け、また人中妙好華と名く。此の華相傳ふ。蔡華と名くるこれなりと。若し念佛するものは、即

【觀世音】觀自在とも云ふ。アヴァローキテイシュヴァラ（Avalokiteśvara）の譯。阿彌陀佛の左の脇士。慈悲を表示す。

【大勢至】マハースターナプラープタ（Mahāsthāmaprāpta）大精進と譯す。阿彌陀如來の右の脇士。智慧を表示す。

【第十一章】雜善に約對して念佛を讃歎する意。

【芬陀利】プンダリーカ（Puṇḍarīka）白蓮華と譯す。

【一】念佛行者は人中の芬陀利華なることを明す。

【二】念佛の妙功徳を明す。

ちこれ人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり。四には專ら彌陀の名を念ずるものは、即ち觀音勢至常に隨ひて影護したまふ。また親友知識のごとくなることを明す。五には今生すでに此の益を蒙る。命をすてゝすなはち諸佛の家に入る。すなはち淨土是なり。かしこにいたれば長時に法を聞いて歷事供養す。因圓に、果滿ず。道場の座、豈賒ならんやといふことを明す。」と。

【私釋】私に問うて曰はく、【一】『經に「若し念佛する者は、當に知るべし、此の人は」等と云ふは、唯念佛の者に約して、しかも是を讃嘆す。釋家何の意ありて、實に雜善をもつて、此類とすることを得るにあらずと云つて、雜善に相對して、獨り念佛を歎ずるや。』答へて曰はく、『文の中に隱れたりと雖も、義意これ明なり。知る所以は、此の經既に、定散の諸善、竝びに念佛の行を說く。しかるにその中において、獨り念佛を標して、分陀利に喩ふ。雜善に待するにあらずば、云何ぞ能く念佛の功、餘善諸行に、超ゆることを顯さんや。然れば則ち念佛する者は、即ちこれ人中の好人とは、これ惡に待して美る所なり。人中の妙好人と言ふは、これ麤惡に待して、稱する所なり。人中の上上人といふは、これ下下に待して、讃ずる所なり。人中の希有人といふは、これ常有に待して、歎ずる所なり。人中の最勝人といふは是最劣に待して、褒むる所なり。』

【二】問うて曰はく、『既に念佛をもつて、上上と名けば、何が故ぞ、上上品の中に說かずして、下下品に至りて、しかも念佛を說くや。』答へて曰はく、『豈前に云はずや。念

【二教論】弘法大師の撰述。具には『顯密二教論』と云ふ。二卷。

【素呾纜】修多羅とも書く。スートラ(Sūtra)。契經等と譯す。散文にて說き示されたる經文にして茲には經藏をさす。

【毘奈耶】ヴナヤ(Vinaya)調伏、滅等と譯す。律藏を云ふ。

【阿毘達磨】アビダルマ(Abhidharma)無比法、對法と譯す、論藏を云ふ。

佛の行は廣く九品に亘ると、すなはち前に引く所の『往生要集』に、「その勝劣に隨つて、九品を分つべし」と云ふこれなり。加之、下品下生はこれ五逆重罪の人なり。しかるに能く逆罪を除滅すること、餘行の堪へざる所なり。唯念佛の力のみありて、能く重罪を滅するに堪へたり。故に極惡最下の人の爲に、しかも極善最上の法を說く。例せば彼の無始淵源の病は、中道府藏の藥にあらざれば、卽ち治すること能はざるが如し。今この五逆は重病の淵源なり。またこの念佛は靈藥の府藏なり。この藥にあらずんば何ぞ此の病を治せん。故に弘法大師の『二教論』に、『六波羅蜜經』を引いて云はく、「第三に法寶とは、所謂過去無量の諸佛所說の正法と、及び我が今の所說となり。所謂八萬四千の諸の妙法蘊なり。乃至有緣の衆生を調伏し純熟す。しかも阿難陀等の諸大弟子をして、一たび耳に聞いて皆悉く憶持せしむ。攝して五分とす。一には素呾纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。この五種の藏をもつて有情を敎化し、度すべき所に隨つて、しかも爲にこれを說く。若し彼の有情、山林に處し、すでに閑寂に居して、靜慮を修せんとねがふ者には、しかも彼が爲に素呾纜藏を說き、若しかの有情威儀を習ひ、正法を護持し、一味和合して、久住することを得しめんとねがふには、しかも彼が爲に毘奈耶藏を說く。若し彼の有情正法を說き、性相を分別し、循環硏覈して、甚深を究竟せんとねがふには、しかも彼が爲に阿毘達磨藏を說く。若し彼の有情大乘眞實の智慧を習ひて、我法執

著の分別を離れんとねがふには、しかも彼が爲に般若波羅蜜多藏を說く。若し彼の有情、契經、調伏、對法、般若を、受持すること能はず。或はまた有情ありて、諸の惡業たる四重、八重、五無間罪、謗方等經、一闡提等の種々の重罪を造らんに、銷滅することを得、速疾に解脫し、頓に涅槃を悟らしめんには、しかも彼が爲に諸の陀羅尼藏を說く。この五法藏は、譬へば乳、酪、生酥、熟酥及び妙醍醐の如し。契經は乳の如く、調伏は酪の如く、對法敎は彼の生酥の如く、大乘般若はなほ熟酥の如く、總持門は譬へば醍醐の如し。醍醐の味は、乳酪酥の中に微妙第一なり。能く諸病を除いて、諸の有情をして身心安樂ならしむ。總持門は、契經等の中に最も第一とす。能く重罪を除き、諸の衆生をして、生死を解脫して、速かに涅槃安樂の法身を證せしむ。」已上この中に五無間罪とはこれ五逆罪なり。即ち醍醐の妙藥にあらずんば、五無間の病、甚だこれ療し難し。念佛もまた然なり。往生敎の中には、念佛三昧はこれ總持の如く、また醍醐の如し。若し念佛三昧、醍醐の藥にあらずんば、五逆深重の病、甚だこれ治し難し。知るべし。」

【三】問うて曰はく、「若ししからば、下品上生は、この十惡輕罪の人なり。何が故ぞ念佛を說くや。」答へて曰はく、「念佛三昧は、重罪尙滅す。何に況や輕罪をや。餘行は然らず。或は輕を滅して、しかも重を滅せざるあり。或は一を消して、二を消せざるあり。念佛は然らず、輕重かね滅し、一切徧く治す。譬へば阿伽陀藥の、徧く一切の

【般若波羅蜜多】プラジニャーパーラミター（Prajñāpāramitā）智度と譯す。五藏の一。慧藏とも云ふ。

【陀羅尼門】ダーラニイ（Dhāraṇī）總持と譯す。支那の禁呪に似たるを以て呪とも云ふ。五藏の一。又祕藏とも云ふ。

【四重八重】四重は四波羅夷にして比丘の爲めに制し、八重は比丘尼の爲に制す。四重は婬盜殺妄の四。八重は之に摩觸、八事、覆尼、隨擧苾芻を加ふ。

【五無間業】五逆罪に同じ。究竟じて無間地獄に墮する惡業なれば此名あり。

【三】念佛は重罪輕罪を滅することを明す。

【阿伽陀藥】アガダ（五三三）無病、無價等と譯す。藥の名。不死藥とも云ふ。

【四】現當二世の功德を明す。

病を治するが如し。故に念佛をもつて王三昧とす。およそ九品の配當は、これ一往の義なり。五逆の廻心、上上に通じ、讀誦の妙行、下下に通ず。十惡輕罪、破戒次罪、各上下に通じ、解第一義、發菩提心、また上下に通ず。一法に各九品あり。もし品に約せば、すなはち九九八十一品なり。加之、迦才の云はく、「衆生の起行既に千殊あり。往生して土を見ること、また萬別あり」と。一往の文を見て封執を起すことなかれ。その中に、念佛はこれ即ち勝行なり。故に分陀利を引いて、もつてその喩とす。譬の意知るべし。

【四】加之念佛の行者には、觀音勢至、影と形との如く、暫くも捨離したまはず。餘行はしからず、又念佛する者は、命を捨てて已後、決定して極樂世界に往生す。餘行は不定なり。凡そ五種の嘉譽をつたへ、二尊の影護を蒙る、これはこれ現益なり。また淨土に往生して、乃至成佛す。これはこれ當益なり。又道綽禪師、念佛の一行において、始終の兩益を立つ「安樂集」に云はく、「念佛の衆生をば、攝取して捨てたまはず。壽盡くれば必ず生ず。これを始の益と名く。終益といふは、「觀音授記經」に云ふに依るに阿彌陀佛の、住世長久、兆載永劫にして、また滅度したまふことあり。般涅槃の時、唯觀音勢至ありて、安樂を住持して、十方を接引す。その佛の滅度、また住世の時節と、等同なり。然るにかの國の衆生、一切佛を覩見したてまつるものあることなし。ただ一向に專ら阿彌陀佛を念じて、往生するもののみありて、常に彌陀

【第十二章】付屬佛名篇。

【一】定散二善を明す。

【日想觀】以下十三觀。觀無量壽經に出づ。極樂の依正二報を觀ずるなり。

現在して、滅したまはざるを見たてまつる。これすなはちその終の益なり。」已上當に知るべし。念佛はかくの如き等の、現當二世、始終の兩益あり。知るべし』と。

第十二章　釋尊定散の諸行を付屬せず、唯念佛をもつて阿難に付屬したまふの文

【第一】『觀無量壽經』に云はく、『佛阿難に告げたまはく、汝よくこの語を持て、この語を持てとは、卽ちこれ無量壽佛の名を持つなり。』

【第二】『同經疏』に云はく、『佛阿難に告げたまはく、汝好く是の語を持て」より以下は、正しく彌陀の名號を付屬して、遐代に流通したまふことを明す。上來定散兩門の益を說くと雖も、佛の本願に望めば、意衆生をして一向に專ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり』と。

【私釋】私に云はく、『疏の文を案ずるに二行あり。一には定散、二には念佛なり。

【一】初に定散と言ふは、又分ちて二とす。一には定善、二には散善なり。(一)初に定善に就いて、その十三あり。一には日想觀、二には水想觀、三には地想觀、四には寶樹觀、五には寶池觀、六には寶樓閣觀、七には華座觀、八には像想觀、九には阿彌陀佛觀、十には觀音觀、十一には勢至觀、十二には普往生觀、十三には雜想觀、具には經に說きたまふが如し。たとひ餘の行なくとも、或は一、或は多、その堪ふる所に隨つて、十三觀を修して、往生を得べし。其の旨經に見えたり。敢て疑慮することなかれ。(二)次に散善に就いて二あり。一には三福、二には九品なり。初に三福とは『經』に曰

【三歸】佛法僧の三寶に歸依すること。

【四無量心】慈悲喜捨の四。菩薩の利他の廣大心。

はく、「一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯せず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。已上經文」

「父母に孝養し」とは、これに就いて二あり。一には世間の孝養、二には出世の孝養なり。世間の孝養とは、孝經等の說の如し。出世の孝養とは、律の中の生緣奉仕の法の如し。「師長に奉事し」とは、これについて又二あり。一には世間の師長、二には出世の師長なり。世間の師とは、仁義禮智信等を敎ふる師なり。出世の師とは、聖道、淨土の二門等を敎ふる師なり。たとひ餘の行なくとも、孝養奉事をもつて、往生の業とするなり。「慈心にして殺さず、十善業を修す」とは、これに就いて二義あり。一には初に「慈心にして殺さず」とは、これ四無量心の中の初の慈無量なり。卽ち初の一を擧げて、後の三を攝す。たとひ餘の行なくとも、四無量心をもつて、往生の業とするなり。次に「十善業を修す」とは、一には不殺生、二には不偸盜、三には不邪婬、四には不妄語、五には不綺語、六には不惡口、七には不兩舌、八には不貪、九には不瞋、十には不邪見なり。二には「慈心にして殺さず。十善業を修す。」の二句を合して一句とす。謂はく初に「慈心にして殺さず」とは、これ四無量の中の、慈無量にはあらず。これ十善の初の不殺を指す。故に知んぬ。正しくこれ十善の一句なることを。たとひ餘の行なくとも、十善業をもつて、往生の業とするなり。「三歸を受持し」とは、佛法僧に歸依するなり。これに就いて二あり。一には

【藏通別圓】天台の教判に出づ。教法の淺深によりて四種に分ちたるもの。

【止觀】天台大師撰述摩訶止觀のこと。二十卷あり。天台三大部の一。

【行願】眞言宗に於ける三種菩提心の一。一切衆生を利益して成佛せしめんとの願を起すこと。

【勝義】眞言三種菩提心の一。劣法を止息し勝法を觀じ顯はすこと。

【三摩地】眞言三種菩提心の一、三摩地は三昧耶とも云ふ。三密相應の五部の祕觀を修し、普ねく衆生界に至りて平等に攝受すること。

大乘の三歸、二には小乘の三歸なり。「衆戒を具足し」とは、これにまた二あり。一には大乘戒、二には小乘戒なり。「威儀を犯ぜず」とは、これにまた二あり。一には大乘、謂はく八萬あり。二には小乘、謂はく三千あり。「菩提心を發し」とは、諸師の意不同なり。天台には即ち四教の菩提心あり。謂はく藏通別圓これなり。具には『止觀』に說くが如し。眞言には、即ち三種の菩提心あり。謂はく行願と、勝義と、三摩地とこれなり。具には『菩提心論』に說くが如し。華嚴にまた菩提心あり。かの『菩提心義』及び『遊心安樂道』等に說くが如し。三論法相、各菩提心あり。具には彼の宗の、章疏等に說くが如し。又善導所釋の菩提心あり。具には『疏』に述ぶるが如し。發菩提心その言一なりといへども、各その宗に隨つて、その義同じからず。然れば則ち菩提心の一句、廣く諸經に亙りて、徧く顯密をかぬ。意氣博遠にして、詮測沖邈なり。願はくは諸の行者、一を執して、萬を遮することなかれ。諸の往生を求めん人、各須く自宗の菩提心を發すべし。たとひ餘行なくとも、菩提心をもつて、往生の業とするなり。「深く因果を信じ」とは、これに就いて二あり。一には世間の因果、二には出世の因果なり。世間の因果とは即ち六道の因果なり。『正法念經』に說くが如し。出世の因果とは、即ち四聖の因果なり。諸の大小乘經に說くが如し。若しこの因果の二法をもつて、徧く諸經を攝せば、諸家同じからず。且く天台に依らば、謂はく華嚴には、佛菩薩二種の因果を說き、阿含には、聲聞、緣覺、二乘の因果を說く。

【五種法師】經典に對する五種の法をなすもの。受持、讀、誦、解說、書寫の五。法華經に出づ。

【十種法行】書寫、供養、流通、諦聽、自讀、憶持、廣說、口誦、思惟、修行の十。

【貞元入藏錄】具には貞元新定釋教目錄と云ふ。三十卷あり。貞元十六年圓照勅を奉じて撰定す。永平十年より此年迄七百三十四年間に於ける傳譯を錄せるもの。

方等の諸經には、四乘の因果を說きたり。般若の諸經には、通、別、圓の因果を說き、法華には、佛因佛果を說き、涅槃には、また四乘の因果を說くなり。然れば則ち、深信因果の言、あまねく一代を該羅せり。諸の往生を求めん人、たとひ餘の行なくとも、深信因果をもつて、往生の業とするなり。「大乘を讀誦し」とは、分ちて二つとす。一には讀誦、二には大乘なり。讀誦とは、即ちこれ五種法師の中に、轉讀、諷誦の二師を擧げて、受持等の三師を顯す。若し十種法行に約せば、即ちこれ披讀、諷誦の二種の法行を擧げて、書寫供養等の、八種の法行を顯すなり。大乘とは小乘を簡ぶ言なり。別に一經を指すにあらず。一切の諸大乘經に通ず。謂はく一切とは、佛意廣く一代所說の、諸大乘經を指す。しかるに一代の所說において、已結集の經あり。未結集の經あり。又已結集の經において或は龍宮に隱れて、人間に流布せざる經あり、或は天竺に留まりて、未だ漢地に來到せざる經あり。しかるに今翻譯將來の經に就いて、しかもこれを論ぜば、『貞元入藏錄』の中に、始め『大般若經』六百卷より、『法常住經』に終るまで、顯密の大乘經、總て六百三十七部、二千八百八十三卷なり。皆須く讀誦大乘の一句に攝すべし。願はくは西方の行者、各その意樂に隨つて、或は法華を讀誦して、もつて往生の業とし、或は華嚴を讀誦して、もつて往生の業とし、或は遮那教王、及び諸尊法等を受持讀誦して、もつて往生の業とし、或は般若、方等、および『涅槃經』等を解說し、書寫してもつて、往生の業とすべし。是則ち淨土宗の

【遮那教王】毘盧遮那（ヴイローチヤナVairocana）佛のこと。光明遍照と譯す。大日如來のこと。大日如來は密教の教主なるを以て教王と云ふ

【權實偏圓】權教實教偏教圓教の意。權教は未究竟の教、實教は眞實究竟の教、偏教は一方に偏して平等圓滿ならざる教、圓教は圓滿至極の教。

『觀無量壽經』の意なり。問うて曰はく、「顯密旨異り。何ぞ顯の中に密を攝するや。」答へて曰はく、「これ顯密の旨を攝すと云ふにはあらず。『貞元入藏錄』の中に、同じくこれを編みて、盡く大乘經の限に入る。故に「大乘を讀誦し」の一句に攝するなり。」問うて曰はく、「爾前の經の中に、何ぞ法花を攝せんや。」答へて曰はく、「今言ふ所の攝とは、權實偏圓等の義を論ずるにあらず。「大乘を讀誦し」の言は普く前後大乘の諸經に通ず。前とは『觀經』已前の諸大乘經これなり。後とは王宮已後の諸大乘經是なり。唯大乘と云ひて、而も權實を選ぶことなし。然れば則ち正しく華嚴、方等、般若、法華、涅槃等の諸大乘經に當れり。」「行者を勸進し」とは、謂はく定散の諸善及び念佛三昧等を勸進するなり。

（三）次に九品とは、前の三福を開して九品の業とす。謂はく上品上生の中に、「慈心にして殺さず」と言ふは即ち上の世福の中の第三の句に當れり。次に「諸の戒行を具す」とは即ち上の戒福の中の第二の句の「衆戒を具足し」に當れり。次に「大乘を讀誦し」とは即ち上の行福の中の第三の句の「大乘を讀誦し」に當れり。次に「六念を修行し」とは、即ち上の第三福の中の第三の句の意なり。上品中生の中に「善く義趣を解し」等と言ふは、即ちこれ上の第三の福の中の第二第三の意なり。上品下生の中に、「深く因果を信じ、道心を發す」等と言ふは、即ちこれ上の第三の福の第一第二の意なり。中品上生の中に、「五戒を受持し」等と言ふは、即ち上の第二の福の中の第一の句の意なり。中品

【八齋戒】不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語、不飲酒、不坐高廣大牀、不著花鬘瓔珞、不習歌舞戯樂。

【二】念佛を明す

中生の中に、「或は一日一夜、八戒齋を受持し」等と言ふは、又上の第二の福の意に同じ。中品下生の中に、「父母に孝養し、世の仁慈を行ふ」等と言ふは、即ち上の初の福の第一第二の句の意なり。下品上生は、是れ十惡の罪人なり。臨終の一念に、罪滅して生ずることを得。下品中生はこれ破戒の罪人なり。臨終に佛の依正の功德を聞いて、罪滅して生ずることを得。下品下生はこれ五逆の罪人なり。臨終の十念に、罪滅して生ずることを得。此の三品は尋常の時、唯惡業を造りて往生を求めずと雖も、臨終の時、始て善知識に遇ひて即ち往生を得。若し上の三福に准ぜば、第三福の、大乘の意なり。定善、散善、大概かくの如し。文に即ち「上来定散兩門の益を說くと雖も」と云ふこれなり。

【二】次に、「念佛」とは、專ら彌陀佛の名を稱するこれなり。念佛の義常の如し。

しかるに今「正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通する」ことを明すと言ふは、凡そこの經の中に、既に廣く定散の諸行を說くと雖も、即ち定散をもつて阿難に付屬して、後世に流通せしめず。唯念佛三昧の一行をもつて、即ち阿難に付屬して、遐代に流通せしむるなり。

問うて曰はく、「何が故ぞ定散の諸行をもつて、付屬し流通せざるや。」若し夫れ業の淺深に依つて、嫌ひて付屬せずば、三福の業の中に、淺あり深あり、その淺業は「父母に孝養し、師長に奉事し」なり。その深業は「衆戒を具足し、菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦す」なり。須く淺業を捨てて、深業を付屬すべし。若し觀の淺深に依りて、

嫌ひて付屬せずば、十三觀の中に、淺あり深あり、その淺觀は、日想水想これなり。その深觀は、始、地觀より雜想觀の終まで、總て十一觀これなり。須く淺觀を捨てて、深觀を付屬すべし。就中第九の觀は、これ阿彌陀佛觀なり。即ちこれ觀佛三昧なり。須く十二觀を捨てて、觀佛三昧を付屬すべし。就中同『疏』の玄義分の中に云はく、「この經は觀佛三昧を宗とし、また念佛三昧を宗とす」と。既に二行をもつて一經の宗とす。何ぞ觀佛三昧を廢して、念佛三昧を付屬せんや。」答へて曰はく、「既に佛の本願に望むに、意衆生をして、一向に專ら彌陀佛の名を、稱せしむるにありといふ。定散の諸行は本願にあらず。故に付屬せず。またその中において、觀佛三昧は殊勝の行なりと雖も、佛の本願にあらず。故に付屬せず。念佛三昧は、これ佛の本願なり。故にもつて付屬す。望佛本願と言ふは、『雙卷經』の四十八願の中の、第十八の願を指すなり。一向專稱と言ふは、同經の三輩の中の、一向專念を指すなり。本願の義、具には前に辨ずるが如し。」

(三)問うて曰はく、「若ししからば何が故ぞ直に本願念佛の行を說かず、煩はしく非本願の定散の諸善を說くや。」答へて曰はく、「本願念佛の行は『雙卷經』の中に、委しく既にこれを說く。故に重ねて說かざるのみ。又定散を說くことは、念佛、餘善に超過することを顯さんが爲なり。若し定散なくんば、何ぞ念佛ひとり秀でたることを顯さん。例せば法華の三說の上に秀でたるが如し。若し三說なくんば、何ぞ法華第一

なることを顯さん。故に今、定散は廢の爲に說き、念佛三昧は立の爲に說く。但し定散の諸善、皆もって測り難し。凡そ定善とは、夫れ依正の觀、鏡を懸けて照臨し、往生の願、掌を指して速疾なり。或は一觀の力、能く多劫の罪愆を除け、或は具憶の功、終に三昧の勝利を得。然れば則ち往生を求めん人、宜しく定觀を修行すべし。就中第九の眞身觀は、これ觀佛三昧の法なり。行者若し成就すれば、卽ち彌陀の身を見たてまつる。彌陀を見たてまつるが故に、諸佛を見ることを得。諸佛を見るが故に、現前に授記せらる。この觀の利益最も甚深なり。然るに今『觀經』の流通分に、釋迦如來、阿難に告命して、往生の要法を付屬し、流通せしむるに至って、觀佛の法を嫌いて、阿難に付屬せず、念佛の法を選んで、卽ちもって、阿難に付屬す。觀佛三昧の法、尚もって付屬せず。いかに況や、日想水想等の觀においてをや。然れば則ち、十三定觀は、みなこれ付屬せざる所の行なり。然るに世人若し觀佛等を樂ひて、念佛を修せざるは、これ唯遠く彌陀の本願に乖くのみにあらず。またこれ近く釋尊の付屬に違ふ。行者宜しく商量すべし。次に散善の中に、大小の持戒の行あり。世皆おもへらく、持戒の行はこれ入眞の要なり。破戒の者は往生すべからずと。又菩提心の行あり。人皆おもへらく、菩提心はこれ淨土の綱要なり。もし菩提心なきものは、すなはち往生すべからずと。又解第一義の行あり。これはこれ理觀なり。人またおもへらく、理はこれ佛の源なり。理を離れては佛土を求むべからず。若し理觀なきも

【隨求】隨求陀羅尼。衆生の求願に隨つて成就する陀羅尼。

【尊勝】尊勝陀羅尼。これを誦持すれば增壽無病にして心身安穩なりと云ふ。

【光明】光明眞言のこと。

【阿彌陀】阿彌陀大呪のこと。又阿彌陀根本陀羅尼とも云ふ。

【神呪】陀羅尼をさす。

のは、往生すべからずと。又讀誦大乘の行あり。人皆おもへらく、若し大乘經を讀誦せば即ち往生すべし。若し讀誦の行なき者は、往生すべからずと。これに就いて二あり。一には持經、二には持咒なり。持經とは般若、法華等の、諸の大乘經を持するなり。持咒とは隨求、尊勝、光明、阿彌陀等の諸の神咒を持するなり。凡そ散善の十一人、皆これ貴しと雖も、而もその中において、この四箇の行は、當世の人殊に、欲する所の行なり。これ等の行をもつて、殆ど念佛を抑ふ。つらつら經の意を尋ぬれば、この諸行をもつて付屬し流通せず。唯念佛の一行をもつて、即ち後世に、付屬し流通せしむ。知るべし、釋尊諸行を付屬したまはざる所以は、即ちこれ彌陀の本願にあらざるが故なり。また念佛を、付屬したまふ所以は、即ちこれ彌陀の本願なるが故なり。今又善導和尚、諸行を廢して、念佛に歸せしむる所以は、啻彌陀本願の行たるのみにあらず。またこれ釋尊付屬の行なればなり。故に知んぬ。諸行は機にあらず、時を失へり。念佛往生は、機に當り、時を得たり。感應豈唐捐ならんや。當に知るべし。隨他の前には、暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後は、還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後、永く閉ぢざるは、唯これ念佛の一門なり。彌陀の本願、釋尊の付屬、意ここにあり、行者知るべし。またこの中に遐代とは、『雙卷經』の意によるに、遠く末法萬年の、後の百歲の時を指すなり。これすなはち遐をあげて、邇を攝するなり。然れば則ち法滅の後、猶もつて然なり。いかに況や末法をや。末法已に然なり。い

【第十三章】念佛多善根篇。

【無生忍】無生法忍の略。不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位を云ふ。

かに況や正法像法をや。故に知んぬ。念佛往生の道は、正、像、末の、三時及び、法滅百歳の時に通ずることを。」と。

第十三章　念佛をもつて多善根とし雜善をもつて少善根としたまふの文

【第一】「阿彌陀經」に云はく、「少善根福德の因緣をもつて、彼の國に生ずることを得べからず。舍利弗、若し善男子、善女人ありて、阿彌陀佛を說くを聞きて、名號を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心不亂なれば、其人命終る時に臨みて、阿彌陀佛、諸の聖衆とともに、その前に現在したまふ。この人終る時、心顚倒せず。即ち阿彌陀佛の、極樂國土に往生する事を得」と。

【第二】善導この文を釋して云はく、「極樂は無爲涅槃の界なれば、隨緣の雜善にては恐らくは生れがたし。故に如來要法を選びて、敎へて彌陀を念ずること、專にして復專ならしめ、七日七夜心をして無間にせしむ。長時の起行もますます皆然なり。臨終に聖衆、花を持ちて現じたまひぬれば、身心踊躍して金蓮に坐す。座する時即ち無生忍を得。一念に迎へ將きて、佛前に至る。法侶衣を將ちて競ひ來りて著せたまふ。不退を證り得て、三賢に入る」と。

【私釋】私に云はく、「少善根福德の因緣をもつて、彼の國に生ずることを得べからず

とは、諸餘の雜行の者は、かの國に生じ難し。故に隨緣の雜善にては恐らくは生れ難しと云ふ。少善根とは、多善根に對するの言なり。然れば則ち雜善はこれ少善根なり。念佛はこれ多善根なり。故に龍舒の淨土文に云はく「襄陽の石に刻む『阿彌陀經』は、乃ち隋の陳仁稜が書ける所なり。字畫淸婉にして人多く慕ひ玩ぶ。一心不亂より下、『專持名號、以稱名故、諸罪消滅、卽是多善根、福德因緣』と云へり。今世に傳ふる本、この二十一字を脫すと。」已上 啻多少の義あるのみにあらず。また大小の義あり。いはく雜善はこれ小善根なり。念佛はこれ大善根なり。また勝劣の義あり。いはく雜善はこれ劣善根なり。念佛はこれ勝善根なり。その義知るべし』と。

第十四章 六方恆沙の諸佛餘行を證誠せずただ念佛を證誠したまふの文

善導の『觀念法門』に云はく、又『彌陀經』に云ふが如き六方に各恆沙等の諸佛ましまして、皆舌を舒べて、徧く三千世界に覆ひて、誠實の言を說きたまふ。若しは佛の在世、若しは佛の滅後の一切の罪を造れる凡夫、ただ廻心して、阿彌陀佛を念じて、淨土に生ぜんと願へば、上百年を盡し、下七日一日、十聲三聲、一聲等に至るまで、命終らんと欲する時、佛聖衆とともに、自ら來りて迎接して、卽ち往生を得しむ。上の如き六方等の佛の舒べたまふ舌は、定めて凡夫の爲に證を作し、罪滅びて生るゝことを得せしむ。若しこの證によつて生ずることをえずば、六方諸佛の舒べたまふ舌、一たび口を出でて已

【龍舒】王日休のこと。形は在家なれども心は出家として出離を求めしと云ふ。

【陳仁稜】梁代の人。

【十地の願行】十地は菩薩修道の階位五十二位の中第四十一より第五十に至るもの。極めて進みたる位にしてその願と修行とを云ふ。

【本師金口】本師は釋尊をさす。金口はその教をさす。

【第十四章】六方諸佛唯念佛を證誠する篇。

後、終に口に還り入らずして、自然に壊れ爛れなん』と。

第二　同じく『往生禮讃』に、『阿彌陀經』を引いて云はく、『東方の恒河沙の如き等の諸佛、南西北方及び上下一一の方の恒河の如き等の諸佛、各本國において、その舌相を出して、徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説きたまふ。汝等衆生、皆まさにこの一切諸佛の、護念したまふ所の經を信ずべし。いかんが護念と名く。若し衆生ありて、阿彌陀佛を稱念すること、若しは七日、及び一日、下十聲、乃至一聲、一念等に至るまで、かならず往生を得て此の事を證誠す。故に『護念經』と名く』と。

第三　又云はく『六方の如來、舌を舒べて證したまふ。專ら名號を稱ふれば、西方に至る。彼しこにいたりて華開けて、妙法を聞けば、十地の願行自然に彰る』と。

第四　同じく『觀經疏』に、『阿彌陀經』を引いて云はく、『又十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信せざらんことを恐畏れて、即ち共に同心同時に、各舌相を出だして、徧く三千世界に覆ひて、誠實の言を説きたまふ。汝等衆生、皆是の釋迦の所説と、所讃と、所證とを信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問はず、ただ能く上百年を盡し、下一日七日に至るまで、一心に專ら、彌陀の名號を念ずれば、定めて往生することを得。必ず疑なきなり』と。

第五　同じく『法事讃』に云はく、『心心念佛して疑を生ずることなかれ。六方の如來、不虚を證す。三業專心にして、雑亂なければ、百寶の蓮華、時に應じて見る』と。

【第六】法照禪師の『淨土五會法事讚』に云はく、「萬行の中に、急要たり迅速なること、淨土門に過ぎたるはなし。ただ本師金口の說のみにあらず。十方の諸佛、共に傳へて證し給ふ」と。

【私釋】私に問うて曰はく、「何が故ぞ六方の諸佛の證誠、唯念佛の一行にかぎるや。」答へて曰はく、「若し善導の意に依らば、念佛はこれ彌陀の本願なり。故にこれを證誠す。餘行はしからず、故にこれなし。」問うて曰はく、「若し本願に依りて、念佛を證誠せば、『雙卷』、『觀經』等に、念佛を說く時、何ぞ證誠せざるや。」答へて曰はく、「解するに二義あり。一に解して云はく、『雙卷』『觀經』等の中に、本願念佛を說くと雖も、兼ねて餘行を明す。故に、證誠せず。この經は一向に純ら念佛を說く。故に、これを證誠す。二に解して云はく、彼の『雙卷』等の中に、證誠の言なしと雖も、この經已に證誠あり。これに例して彼を思ふに、彼等の經の中において、說く所の念佛、又證誠の義なるべし。文は此の經にありて、義は彼の經に通ず。故に、天台の『十疑論』に云はく、又『阿彌陀經』、『大無量壽經』、『鼓音聲陀羅尼經』等に云はく、釋迦佛、この經を說きたまふとき、十方世界に、各恆河沙の諸佛ましまして、その舌相を舒べて、徧く三千世界に覆ひ、一切衆生、阿彌陀佛を念ずれば、佛の本願、大悲の願力に乘ずるが故に、決定して、極樂世界に、生ずることを得ることを證誠す』と。

【第十五章】六方
諸佛護念行

第十五章　六方の諸佛念佛の行者を護念したまふの文

【聖典】『觀念法門』に云はく、「又『彌陀經』に説きたまふが如き、若し男子女人ありて、七日七夜及び一生を盡して、一心に專ら阿彌陀佛を念じて、往生を願ずれば、この人つねに、六方恒河沙等の佛、共に來りて護念したまふことを得。故に護念經と名く。護念經といふ意は、又諸の惡鬼神をして、便を得しめず。また横病横死、横に厄難あることなく、一切の災障、自然に消散す。不至心を除く」と。

【聖典】『往生禮讃』に云はく、「若し佛を稱して、往生する者は、常に六方恒河沙等の諸佛に護念せらるることをかうむる。故に護念經と名く。今既にこの增上の誓願の憑むべきあり。諸の佛子等、何ぞ意を勵まして去かざるや」と。

【私釋】私に問うて曰はく、「唯六方の如來のみありて、行者を護念するや如何。」答へて曰はく、「六方の如來に限らず、彌陀、觀音等、又來りて護念したまふ。故に『往生禮讃』に云はく、『若し衆生ありて、阿彌陀佛を念じて、往生を願ずれば、彼の佛即ち、二十五の菩薩を遣して、行者を擁護せしむ。若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥、若しは晝、若しは夜、一切の時、一切の所、惡鬼惡神をして、その便を得しめず』。又『觀經』に云ふが如き、若し阿彌陀佛を、稱禮念じて、彼の國に往生せんと願ずれば、彼の佛即ち、無數の化佛、無數の化觀音、勢至

【四天大王】四天王に同じ。四王天に居り佛法を守護する神。東方持國天、南方增長天、西方廣目天、北方多聞天。

【八部】八部衆とも云ふ。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

【第十六章】名號付屬舍利弗篇。

菩薩を遣はして、行者を護念す。復前の二十五の菩薩等と、百重千重に、行者を圍繞して、行住坐臥、一切の時處を問はず、若しは晝、若しは夜、常に行者を離れたまはず。今既にこの勝益の憑むべきあり。願はくば諸の行者、各須く至心に往くことを求むべし。

(二)又『觀念法門』に云はく、又『觀經』の下の文の如きは、もし人ありて、至心に常に、阿彌陀佛、及び二菩薩を念ずれば、觀音勢至、常に行人のために、勝友知識と作りて、隨逐影護したまふと。

(三)又云はく、「『般舟三昧經』の、行品の中に說きて云ふが如き、佛の言はく、若し人專らこの念彌陀佛三昧を行ずれば、常に一切の諸天、及び四天大王、龍神八部、隨逐影護し、愛樂相見することを得て、永く諸の惡鬼神、災障厄難、橫に惱亂を加ふることなし。」具には護持品の中に說くが如し。又云はく「三昧の道場に入らんを除きて、日別に彌陀佛を念ずること一萬して、命を畢るまで、相續する者は、即ち彌陀の加念を蒙り、罪障を除くことを得。又佛と聖衆と、常に來りて護念し給ふことをかうむる。既に護念を蒙れば、即ち延年轉壽を得」と。』

第十六章　釋迦如來彌陀の名號をもつて慇懃に舍利弗等に付屬したまふの文

第一　『阿彌陀經』に云はく「佛この經を說きをはりたまふ。舍利弗、及び諸の比丘、一

【阿修羅】アスラ(Asura)六道の一。爭鬪を事とする有情。
【頓教】漸教に對す。速頓に證りを開き得る教。
【三途】三惡趣に同じ地獄は火途、餓鬼は刀途、畜生は血途。
【一】選擇の義を明す。

一切世間の天人阿修羅等、佛の所說を聞きて歡喜し信受し、禮をなして去りぬ」と。

【第十六】善導の『法事讃』に、この文を釋して云はく、「世尊の說法の時將に了らんとす。慇懃に彌陀の名を付屬したまふ。五濁增の時、疑謗多く、道俗相嫌ひて、聞くことを用ひず。修行することあるを見ては、瞋毒を起し、方便破壞して、競つて怨を生ぜん。かくの如き生盲闡提の輩、頓教を毀滅して、永く沈淪せん。大地微塵劫を超過すとも、未だ三途の身を離るることを得べからず。大衆同心に、皆あらゆる破法罪の因緣を懺悔せよ」と。

【私釋】私に云はく、【一】凡そ三經の意を案ずるに、諸行の中に念佛を選擇してもつて旨歸とす。

(一)先づ『雙卷經』の中に三の選擇あり。一に選擇本願、二に選擇讃歎、三に選擇留教なり。一に選擇本願とは、念佛はこれ法藏比丘、二百一十億の土の中において、選擇したまふ所の往生の行なり。細き旨は上に見えたり。故に選擇本願といふなり。二に選擇讃歎とは、上の三輩の中に、菩提心等の餘行を擧ぐと雖も、釋迦即ち、餘行を讃歎せず。唯念佛において、而も讃歎して、「當に知るべし、一念無上の功德なるを」と云ふ。故に選擇讃歎と云ふなり。三に選擇留教とは、又上に餘行諸善を擧ぐと雖も、釋迦選擇して、唯念佛の一法を留む。故に選擇留教と云ふなり。

(二)次に『觀經』の中に、又三の選擇あり。一に選擇攝取、二に選擇化讃、三に選擇付屬なり。一に選擇攝取とは、『觀經』の中に、定散の諸行を明すといへども、彌陀の

【二】選擇念佛を明す。

光明はただ念佛の衆生を照らして、攝取して捨てたまはず。故に選擇攝取といふなり。二に選擇化讃とは、下品上生の人、聞經と稱佛との二行ありと雖も、彌陀の化佛、念佛を選擇して「汝、佛の名を稱するが故に、諸の罪消滅し、我來りて汝を迎ふ」と云ふ。故に選擇化讃といふなり。三に選擇付屬とは、又定散の諸行を明すと雖も、唯獨り念佛の一行を付屬す。故に選擇付屬といふなり。

(三)次に『阿彌陀經』の中に、一の選擇あり。所謂選擇證誠なり。已に諸經の中において、多く往生の諸行を說くと雖も、六方の諸佛、彼の諸行において、證誠せず。この經の中に、念佛往生を說きたまふに至りて、六方恆沙の諸佛、各舌を舒べて、大千に覆ひ、誠實の語を說きて、これを證誠したまふ。故に選擇證誠といふなり。加之『般舟三昧經』の中に、又一の選擇あり。所謂選擇我名なり。彌陀みづから說きて言はく、「我が國に來生せんと欲せんものは、常に我が名を念じて、休息あることなかれ」と。故に選擇我名と云ふなり。本願と攝取と我名と化讃と、この四はこれ彌陀の選擇なり。讃歎と留敎と付屬とこの三はこれ釋迦の選擇なり。證誠は六方恆沙諸佛の選擇なり。然らばすなはち、釋迦、彌陀、及び十方各恆沙等の諸佛、心を同じくして念佛の一行を選擇したまふ。餘行はしからず。故に知んぬ。三經ともに、念佛を選びて、もつて宗致とするのみ。

【二】計れば、夫速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且らく聖道門

【三】偏依善導を明す。

【四】再び偏依善導を明す。

【五】三度偏依善導を明す。

【六】四度偏依善導を明す。

を閣きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行の中に、且く諸の雑行を抛ちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、猶助業を傍にし、選んで正定を専らにすべし。正定の業とは、即ち是れ仏名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり。」

【三】問うて曰はく、「華厳、天台、真言、禅門、三論、法相の諸師、各浄土法門の章疏を造る。何ぞ彼等の師に依らずして、唯善導一師を用ふるや。」答へて曰はく、「かれ等の諸師、各皆浄土の章疏を造ると雖も、而も浄土をもつて宗とせず唯聖道をもつてその宗とす。故に彼等の諸師に依らざるなり。善導和尚は偏に浄土をもつて宗とし、しかも聖道をもつて宗としたまはず。故に偏に善導一師に依るなり。」

【四】問うて曰はく、「浄土の祖師その数又多し。謂はく弘法寺の迦才、慈愍三蔵等是なり。何ぞ彼等の諸師に依らず、唯善導一師を用ふるや。」答へて曰はく、「此等の諸師、浄土を宗とすと雖も、未だ三昧を発せず。善導和尚はこれ三昧発得の人なり。道においてすでに其証あり。故に且くこれを用ふ。」

【五】問うて曰はく、「若し三昧発得に依らば懐感禅師もまた是れ三昧発得の人なり。何ぞこれを用ひざる。」答へて曰はく、「善導はこれ師なり。懐感はこれ弟子なり。故に師に依りて弟子に依らざるなり。況や師資の釈其の相違甚だ多し。故にこれ用ひず。」

【六】問うて曰はく、「若し師に依りて弟子に依らずば、道綽禅師は、これ善導和尚の師

なり。抑又淨土の祖師なり。何ぞこれを用ひざる。」答へて曰はく、「道綽禪師はこれ師なりと雖も、未だ三昧を發せず。故に自ら往生の得否を知らず。善導に問うて曰はく、「道綽念佛す往生を得んや否や。」導一莖の蓮花を辨じて、これを佛前に置かしめ、「行道七日せんに萎悴まずば、卽ち往生を得たまはん」と。これに依りて七日するに、果然として華萎黃まず。綽その深詣を嘆ず。因に入定して、當に生ずることを得べきや否を觀んことを請ふ。導卽ち定に入て、須臾に報じて曰はく、「師まさに三罪を懺して方に往生すべし。一には師嘗て佛の尊像を安じて、簷牖の下に置き、自らは深房に處れり。二には出家の人を駈使し策役す。三には屋宇を營造して蟲命を損傷す。師宜しく十方佛の前において、第一の罪を懺し、四方僧の前において、第二の罪を懺し、一切衆生の前において、第三の罪を懺すべし。」綽公靜に往咎を思ふに、皆曰ふこと虛しからず。ここにおいて洗心悔謝し訖つて、導に見ゆ。卽ち曰はく、「師の罪滅しぬ。後當に白光ありて照燭すべし。これ師の往生の相なり。」已上新修往生傳に出づ爰に知んぬ、善導和尙は行、三昧を發し、力、師位に堪たり。解行、凡にあらざること、將に是れ曉けし。況や又時の人の諺に曰はく、「佛法東行よりこのかた、いまだ禪師の如き盛德あらず」と。絕倫の譽、得て稱すべからざるものか。加之、『觀經』の、文義を條錄するの刻、頗る靈瑞を感じ、屢聖化に預れり。既に聖の冥加を蒙りて、然して經の科文を造る。世擧つて證定の疏と稱し、人これを貴ぶこと、佛の經法の如し。卽ち彼の

疏の第四卷の奥に云はく「敬つて一切有緣の知識等に白す。余は既にこれ、生死の凡夫、智惠淺短なり。然るに佛敎幽微なれば、敢て輒く異解を生ぜず。遂に即ち心を標し、願を結して、靈驗を請求して、方に心を造すべし。南無歸命、盡虛空遍法界の一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至、かの土の諸菩薩、大海衆、及び一切の莊嚴相等。某今この『觀經』の要義を出して、古今を楷定せんと欲す。若し三世の諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の、大悲の願意に稱はば、願はくば夢中において、上の所願の如き、一切境界の諸相を見ることを得せしめたまへ」と。佛像の前において、願を結し已つて、日別に『阿彌陀經』を誦すること三遍、阿彌陀佛を、念ずること三萬遍、至心に發願す。即ち當夜において見らく、西方の空中に、上の如き諸相の境界、悉く皆顯現す。雜色の寶山、百重千重、種種の光明、下、地を照らして、地金色の如し。中に諸佛菩薩ましませり。或は坐し、或は立し、或は語し、或は默し、或は身手を動し、或は住して動ぜざるものあり。既に此の相を見て、合掌立觀す。やや久くして乃ち覺む。覺め已つて欣喜に勝ず。ここに即ち義門を條錄す。これより已後、毎夜夢中に、常に一僧あり。來りて玄義の科文を指授す。既に了りぬれば、更にまた見えたまはず。後時脫本し竟つて、復ここに至心に七日を要期して、日別に『阿彌陀經』を誦すること十遍、阿彌陀佛を念ずること三萬遍、初夜、後夜に、かの佛の國土の、莊嚴等の相を觀相し、誠心に歸命すること、もつぱら上の法の如くす。當夜に即

【七】西方の指南行者の目足を明して本書を結ぶ。

ち見る。三具の磑輪道の邊に獨り轉ず。忽ち一人の白き駱駝に乘ずるあり、來りすすんで勸めらる。「師當に努力めて、決定往生すべし。退轉を作すことなかれ。この界は穢惡にして、苦多し貪樂を勞せざれ」と。答へて言はく、「大に賢者好心の視誨を蒙る。某畢命を期として、敢て懈慢の心を生ぜじ」と。云云第二の夜に見らく、阿彌陀佛の身、眞金色にして、七寶樹の下、金蓮華の上に、ましまして坐したまふ。十僧圍繞して、また各一の寶樹の下に坐せり。佛樹の上に、乃ち天衣ありて挂り遶れり。面を正し西に向つて、合掌して、坐して觀る。第三の夜に見らく、兩の幢杆、極めて大に高く顯れ、幡懸りて五色なり。道路縱橫にして、人觀るに礙ふることなし。既に此の相を得已りて、すなはち休止みて、七日に至らず。上來のあらゆる靈相は、本心物の爲にして、己身の爲にせず。既にこの相を蒙れり。敢て隱藏せず。謹みてもつて義の後に申呈して、聞を末代に被らしむ。願はくば含靈、これを聞きて信を生じ、有識覩ん者をして、西に歸せしめんことを。この功德をもつて、衆生に廻施す。悉く菩提心を發して、慈心をもつて相向ひ、佛眼をもつて相看て、菩提まで眷屬し、眞の善知識となり、同じく淨國に歸して、共に佛道を成ぜん。この義已に、證を請うて定め竟んぬ。一句一字、加減すべからず。寫さんと欲せん者、もつぱら經法のごとくせよ。知るべし。」已上

【七】靜に以れば、善導の『觀經疏』は、これ西方の指南、行者の目足なり。然れば、則ち、西方の行人、必ず須く珍敬すべし。就中每夜夢中に僧ありて、玄義を指

【化身】衆生救濟の爲に佛菩薩が假に此世に示現せるを云ふ。

【十劫正覺】阿彌陀佛が今より十劫の昔正覺を得給へることを云ふ。

【垂迹】佛菩薩が衆生救濟の爲に本體をかくして此土に現はれて衆生を導くもの。本地に對す。

【本迹】本地と垂迹の意。

【三昧正受】三昧はサマーディ(Samādhi)等持と譯す。心を一境に住して動かざる定に名づく。正受はシヤマタ(Samatha)の譯。心を外境に動かされず一切の亂想をやめて寂靜にすること。

授す。僧は恐くはこれ彌陀の應現ならん。しかれば謂つべし、この疏はこれ、彌陀の傳說なりと。いかにいはんや、大唐相傳へて云はく「善導はこれ彌陀の化身なり」と。しからば謂ふべし「又この文はこれ彌陀の直說なり」と。既に寫さんと欲せん者、もつぱら經法の如くせよといへり。この言誠なるか。仰いで本地を討ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱へ、念佛に憑あり。俯して垂迹を訪へば、專修念佛の導師なり。三昧正受の語、往生に疑ひなし。本迹異りと雖も、化導これ一なり。ここに貧道、昔この典を披閱して、粗素意を識り、立ろに、餘行を舍てて、ここに念佛に歸す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他唯念佛を縡とす。然れば則ち、希に津を問ふものには、示すに西方の通津をもつてし、適行を尋ぬる者には、誨ふるに念佛の別行をもつてす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は尠し。當に知るべし。淨土の敎、時機を叩きて、行運に當れり。念佛の行、水月を感じて、昇降を得たり。しかるに今圖らざるに仰を蒙る。辭謝するに地なし。仍つて今憖に、念佛の要文を集め、剰へ念佛の要義を述ぶ。唯命旨を顧て、不敏を顧ず。これ即ち無慚無愧の甚だしきなり。庶幾くば一たび高覽を經て後、壁底に埋めて、窓前に遺すことなかれ。恐くは破法の人をして、惡道に墮せしめんことを。

選擇本願念佛集　終

【雙卷經】無量壽經の別稱。上下雙卷なれば此名あり
【觀經】觀無量壽經の略稱。
【第一】初に雙卷經を釋す。
【一】四十八願を明す。
【法藏】阿彌陀佛の未だ佛とならざりし時の名。ダルマーカラ(Dharmākara)の譯。
【世自在王】ローケージヴァラージヤ、(Lokeśvararāja)の譯。又世饒王佛とも譯す。
【淨佛國土成就衆生】菩薩が佛道修行に起す理想にして、淸淨なる世界を構成せんとする大願を懷き、衆生を教化してその目的を達成するを云ふ。此文法華經信解品に出づ。
【無三惡趣】四十八願中の第一。國土に三惡趣なきの願。

和語燈錄　卷第一

三部經釋

『雙卷經』『觀經』『阿彌陀經』これを淨土三部經といふ。

【第一】『雙卷經』には、まづあみだほとけの四十八願をとき、のちに願成就をあかせり。

【一】その四十八願といふは、(一)法藏比丘、世自在王佛の御まへにして、菩提心をこして、淨佛國土成就衆生の願をたて給ふ。その四十八願に、あるひは無三惡趣ともたて、あるひは不更惡趣ともとき、あるひは悉皆金色ともいふは、みな第十八の願のためなり。

(二)その第十八願といは「もし我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺をとらじ」といへり。四十八願の中に、この願ことに勝たりとす。そのゆへは、かの國にもしむまるゝ衆生なくば、悉皆金色、無有好醜等の願もなにによてか成就せん。往生する衆生のあるにつきてこそ、身のいろも金色に好醜ある事もなく、五通をも具し、宿命をもさとるべけれ。

(三)これによて善導釋しての給はく『法藏比丘四十八願をたて給へるにも、若し我佛を得んに十方の衆生我が名號を稱して、我が國に生ぜんと願じ、下十念に至るまで、若し生ぜず

【不更惡趣】四十八願中の第二願。惡趣に生れざるの願。

【悉皆金色】四十八願中の第三願。生ずるもの悉く金色たらんとする願。

【第十八願】念佛往生の願にして四十八願の骨子。願王と稱せらる。

【無有好醜】四十八願中の第四願。國土に好醜なきを希む願。

【五通】五神通の略。五種の靈妙的能力。

【宿命】宿命通のこと。六神通の一。自他一切の過去世を知る通力。

【善導釋】觀經疏玄義分の文。

【上求菩提下化衆生】自利には進んで菩提を成就し、利他には下一切の衆生を化益せんとするもの。自利利他の圓滿なる成就を希む菩薩の發願。

ば正覺を取らじ。四十八願に一一にみなこの意あり」と釋し給へり。

(四)をよそ諸佛の願といふは、上求菩提下化衆生の心なり。仁王經にいはく「菩薩の願に二種あり。一は上求菩提、二は下化衆生なり。其上求菩提の本意は廣く衆生を濟度せんが爲めなり云々」しかればたゞ本意は、下化衆生の願にあり。いま彌陀如來の國土を成就し給ふも、衆生を引接せんがためなり。總じていづれのほとけも成佛已後は内證外用の功德濟度利生の方便みなふかくましまして、際限ある事なけれども、菩薩の道を行じ給ひし時の、善巧方便のちかひはこれまち〱なる事也。

(五)その中に阿彌陀如來は、因位の時、もはらわが名號を念ぜんものをむかへんとちかひ給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。濁世のわれらが依怙、末代の衆生の出離、これにあらずばなにをか期せんや。これによりて、かのほとけもみづから我建超世願とのべ給へり。「三世の諸佛も、いまだかくのごときの願をばをこし給はず。十方の菩薩もいまだこれらの願はましまさず。この願若し剋果せば、大千應に感動すべし。虚空の諸の天人はまさに珍妙の華を雨らすべし。」とちかひしかば、大地六種に震動し、天より花ふりて、なんぢまさに正覺なり給ふべしとつげたりき。法藏比丘いまだ成佛し給はずとも、この願うたがふべからず。いかにいはんや成佛已後十劫になり給へり。信ぜずばあるべからず。「彼の佛今現に世に在して成佛したまへり。當に知るべし。本誓の重願虚しからざることを。衆生稱念すれば必ず往生を得」と釋したまへるはこれなり。

【二】「諸の衆生ありて其の名號を聞き、信心歡喜して乃至一念し、至心に廻向して彼の國に生ぜんと願ずれば、即ち往生を得て不退轉に住せん。唯五逆と正法を誹謗するものとを除く文」これは即第十八の願成就の文なり。願には乃至十念ととくといへども、まさしく願成就の中には、一念にありとあかせり。

〔二〕又次に三輩往生の文あり。これは第十九の臨終現前の願成就の文なり。發菩提心等の業をもて三輩をわかつといへども、往生の業は通じてみな一向專念無量壽佛といへり。これすなはちかのほとけの本願なるがゆへ也。

〔三〕また「其佛の本願力は、名を聞きて往生せんと欲せば、皆悉く彼の國に到り、自ら不退轉を致す。」といふ文あり。漢朝に玄通律師といふものありき。小戒をたもてるものなり。遠行て野寺に宿したりけるに、隣房に人ありてこの文を誦す。玄通これをきゝて一兩遍誦してのち、をもひいだす事もなくてわすれにけり。そののちこの玄通律師戒をやぶれり。そのつみによて閻魔の廳にいたる時、閻魔法王の給はく「なんぢ佛法流布のところにむまれたりき。所學の法あらばすみやかにとくべし」とて、高座にのぼせ給ひき。その時玄通高座にのぼりておもひめぐらすに、すべて心におぼゆる事なし。野寺に宿してきゝし文あり。これを誦せんとおもひいでて「其佛本願力」といふ文を誦したりしかば、閻魔法王たまのかぶりをかたぶけて「これはこれ西方極樂の彌陀如來の功德をとく文なり」といひて、禮拜し給ひき。願力不思議なる事この文に見えたり。

【大乘經】廣く大乘の經典をさす。

【内證外用】内心の證りと外に表はれたる力用。

【善巧方便】善く巧みに衆生の機をはからひ、種種の方法を以て教化すること。

【兆載永劫】百萬を兆と云ひ十兆を載と云ふ。劫はカルパ(Kalpa)長時と譯す。

【我建超世願】無量壽經上に出づる頌。法藏比丘四十八願を發し、更にこの頌を說く。

【薩埵】サットヴ(Sattva)有情と譯す。生命あるもの。

【この願若し剋果せば】我建超世の願の最後の句。

【六種に震動】天地一切に感動すること。六種は東涌西沒、西涌東沒、南涌北沒、北涌南沒、邊涌中沒、中涌邊沒を云ふ。

【彼の佛今現に】此文は往生禮讚の釋なり。

【一】願成就を明す。

【諸の衆生ありて】此文は無量壽經下卷に在り。願成就の文と云ふ。

【不退轉】修道の過程に於て既に得たる功德を決して退失せざる位。アヴイヴアルテカ(Avivartika阿毘跋致)の譯。茲には極樂往生のものゝ處不退を云ふ。

【三輩】上輩中輩下輩の三。往生せんとする行者を修行の差別によりて分ちたるもの。

【玄通律師】この人の傳記は、戒珠傳にあれども、引用の本據は檢索し得ずと諸書に見ゆ。

【佛彌勒に】此文は無量壽經下卷に在り。

【彌勒】菩薩の名、マイトレーヤ

(四)「佛彌勒に語げたまはく、其れ、かの佛の名號をきくことを得ることありて、信心歡喜乃至一念せんに當に知るべし、この人大利を得たりとなす。卽ち是無上の功德を具足す文」彌勒菩薩にこの經を付屬し給ふには、乃至一念するをもて、大利無上の功德との給へり。經の大意これらの文にあきらかなるものなり。

【觀經】 次に『觀經』には、定善散善をときて念佛をもて阿難に付屬し給ふ。「汝好く是語を持て」といへるはこれなり。【一】第九の眞身觀に「光明、遍く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」といふ文あり。淸淨衆生の願は平等にして差別ある事なけれども無緣の衆生は利益をかうぶる事あたはず。このゆへに彌陀善逝平等の慈悲にもよほされて、光明あまねく十方世界をてらして、一切衆生にことごとく緣をむすばしめんがために、光明無量の願をたて給へり。第十二の願これなり。

(二)又名號をもて因として衆生を引接し給ふ事を、一切衆生にあまねくきかしめむがために、第十七の願に、十方世界の無量の諸佛、ことごとく咨嗟して、わが名を稱せずといはば正覺をとらじと誓給ひて、次に第十八の願に「乃至十念せんに若し生ぜずば正覺を取らじ」とたて給へり。これによて釋迦如來この土にしてとき給ふがごとく、十方にも、をのをの恒河沙のほとけましましておなじくこれをしめし給へるなり。しかれば光明の緣はあまねく十方世界をてらしてもらすことなく、又十方世界の無量の諸佛、みな名號を稱讚し給へば、きこえずといふところなし。「我佛道を成ずるに至らば名聲十方に超えん。究竟じ

(Maitreya) 慈氏と譯す。

【第二】 觀經を釋す。

【光明は徧く】 此文は觀經眞身觀に在り。

【定善散善】 定善は慮を凝して觀想する善業。散善は散亂心のまゝに修する善業。

【我佛道を】 此文は無量壽經上卷我建超世願の中にあり。

【阿難】 佛常侍の弟子。アーナンダ(Ananda) 歡喜と譯す。十大弟子の一、多聞第一の稱あり。

【眞身觀】 觀經十六觀中の第九觀、佛の眞身を觀ずる觀法。

【一】 光明徧照、濟度衆生を明す。

【善逝】 スガタ(Sugata)の譯。善く眞理の果上に至る意。佛の別號。

て聞こゆるところなくんば、誓つて正覺を成せず」とちかひ給ひしはこのゆへなり。しかれば光明の縁と、名號の因と和合せば、攝取不捨の益をかうぶらんことうたがふべからず。このゆへに『往生禮讃』の序にいはく「諸佛の所證は平等にして是一なれども若し願行を以て來し收むるに因縁なきに非ず。然るに彌陀世尊本深重の誓願を發し、光明名號を以て十方を攝化す」といへり。

(三)又この願ひさしく衆生を濟度せんがために、壽命無量の願をたて給へり。第十三の願これなり。惣じては光明無量の願は、横に一切衆生をひろく攝取せんがためなり。壽命無量の願は、竪に十方世界をひさしく利益せんがためなり。かくのごときの因縁和合すれば、攝取の光明の中に又化佛菩薩ましまして、この人を常に攝護して、百重千重に圍繞し給ふに、信心いよ〳〵増長し、衆苦こと〴〵く消滅す。

(四)又臨終の時ほとけみづから來迎し給ふに、もろ〳〵の邪業繫よくさふるものなし。これは衆生いのちをはる時にのぞみて、百苦きたりせめて、身心やすき事なく、惡縁ほかにひき、妄念うちにもよほして、境界自體當生の三種の愛心きをこる。第六天の魔王この時にあたりて、威勢をこしてもてさまたげをなす。かくのごときの種種のさはりをのぞかんがために、かならず臨終の時にはみづから菩薩聖衆に圍繞せられて、その人のまへに現ぜんとちかひ給へり。第十九の願これ也。これによて臨終の時いたれば、ほとけ來迎し給ふ。行者これを見たてまつりて、心に歡喜をなして、禪定にいるがごとくして、たちま

【二】三心を明す。

【斷善闡提】斷善も闡提も共に同じ。闡提は具に一闡提（イッチャンティカ）(Icchantika) 斷善根、信不具等と譯す。その本性として佛道を成じ得ざるもの。

ちに觀音の蓮臺に乘じて、安養の寶ちにいたる也。これらの益あるがゆへに「念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」といふなり。

【二】又この「經」に「三心を具するものは必ず彼國に生ず」ととけり。三心といは、一には至誠心。二には深心。三には廻向發願心なり。三心はまち／＼にわかれたりといへども、要をとり詮をえらんでこれをいへば、深心におさめたり。善導和尚釋しての給はく、「至といは眞なり。誠といは實なり。一切衆生の身口意業に修するところの解行、かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとす。ほかに賢善精進の相を現じて、うちに虚假をいだく事をえざれ」といへり。その解行といは、罪惡生死の凡夫、彌陀の本願によて、十聲一聲決定してむまると眞實に解て行ずるこれなり。ほかには本願を信ずる相を現じ、うちには疑心をいだく。これは不眞實の心なり。深心はふかく信ずる心也。決定してふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫なり。曠劫よりこのかたつねに流轉して出離の緣なしと信じ、決定してふかくこの阿彌陀如來、四十八願をもて衆生を攝取し給ふ事、うたがひなくおもんばかりなければ、かの願力に乘じてさだめて往生する事をうと信ずべしといへり。はじめにまづ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた出離の緣ある事なしと信ぜよといへるは、これすなはち斷善闡提のごとくなるもの也。かかる衆生の一念十念すれば、無始よりこのかたいまだいでざる生死の輪廻をいでて、かの極樂世界の不退の國土にむまるといふによりて信心はおこるべきなり。をよそほとけの別願の不思議はこれ凡心のはかるところにあら

ず。唯佛と佛とのみよくしり給へり。阿彌陀佛の名號をとなふるによて、五逆十惡ことごとくむまるといふ、別願の不思議のちからまします。たれかこれをうたがふべき。善導の『疏』にいはく、「あるひは人ありて、なんぢ衆生曠劫よりこのかた、をよび今生の身口意業に、一切の凡聖の身のうへにをいて、つぶさに十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等のつみをつくりて、いまだのぞきつくす事あたはず。しかもこれらのつみは三界惡道に繋屬す。いかんぞ一生の修福念佛をもて、すなはちかの無漏無生の國にいりて、ながく不退のくらゐを證悟する事をえんやといはゞ、いふべし。諸佛の教行はかず塵沙にこえたり。稟識の機縁隨情ひとつにあらず。たとへば世間の人のまなこに見つへく信じつべきがごときは、明よく暗を破し、空よく有をふくむ。地よく載養し、水よく生潤し、火よく成壞するがごとし。かくのごときらの事こと〴〵く待對の法となづく。すなはちみづから見るべし、千差萬別なり。いかにいはんや佛法不思議のちから、あに種種の益なからんや」といへり。極樂世界に水鳥樹林の微妙の法をさへづるは不思議なれども、これらはほとけの願力なればと信じて、なんぞたゞ第十八の乃至十念といふ願をのみうたがふべきや。惣じて佛說を信ぜば、此も佛說なり。かの花嚴の三無差別。般若の盡淨虛融。法花の諸法實相。涅槃の悉有佛性。たれか信ぜざらんや。かれも佛說なり。これも佛說也。いづれを信じ、いづれをか信ぜざらんや。

(三)それ三字の名號はすくなしといへども、如來所有の內證外用の功德、萬億恆沙の甚深の

【十惡】十惡業とも云ふ。殺生、偸盜、邪婬、(身三)妄語、綺語、惡口、兩舌(口四)貪欲、瞋恚、愚痴(意三)も云ふ。

【五逆】五逆罪とも云ふ。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血、

【四重】四重罪。殺生、偸盜、婬、妄語の四。

【破見】惡邪見、正見を破するもの。

【三無差別】心佛及衆生是三無差別の事。己界佛界衆生界の差別なき事。華嚴宗の思想を端的に表示す。

【盡淨虛融】般若經の思想を表示す、盡は一切の義、淨は清淨の義、虛融は空無の義、一切は皆空の意を表す。

【諸法實相】天台宗の思想を表示す天台は中道實相を以て本義とす。

【悉有佛性】一乘敎の思想を表示す。一切衆生悉有佛性を云ふ。

【普賢文殊】普賢は釋迦佛の右の脇士にして慈悲を表示す。サマンタバドラ（Samantabhadra）の譯。文殊は左の脇士にして智慧を表示す。マンジュシュリー（Mañjuśrī）の譯。

【地藏龍樹】地藏はクシテガルバ（Kṣitigarbha）の譯。龍樹はナーガールジュナ（Nāgārjuna）の譯。

【阿字本不生】密敎の根本義。本不生とは本來本有にして今始めて生じたるものに非ざる義。實在實有のもの。卽ち阿字は字の根本、音の根元なれば之を一切諸法の實相として觀ずるなり。

法門をこのうちにおさめたり。たれかこれをはかるべきや。「觀經」の玄義分にこの名號を釋していはく、「阿彌陀佛といは、これ天竺の正音、こゝには翻じて無量壽覺といふ。無量壽といはこれ法、覺といはこれ人。人法ならべてあらはす。かるがゆへに阿彌陀佛といふ。人法といは所觀の境也、これにつゐて依報あり正報あり」といへり。しかればはじめ彌陀如來、觀音勢至、普賢文殊、地藏龍樹、乃至彼の土の菩薩聲聞等にいたるまで、そなへ給へるところの事理の觀行、定散の功力、内證の智惠、外用の功德、みなことごとく三字の中におさまれり。されば極樂界にいづれの法門か、もれたるところあらん。

〔一〕しかるにこの三字の名號を正、諸宗をのをのわが宗に釋しいれたり。眞言には阿字本不生の義。四十二字を出生せり。一切の法は阿字をはなれる事なきがゆへに功德甚深の名號といへり。天台宗には空假中の三諦、正了緣の三因、法報應の三身、如來所有の功德、これをいでざるがゆへに功德莫大なりといへり。かくのごとく諸宗をのをのわが存するところの法につゐて、阿彌陀の三字を釋せり。いまこの宗の意は、眞言の阿字本不生の義も、天台の三諦一理の法も、三論の八不中道の旨も、法相の五重唯識の意も、惣じて森羅の萬法ひろくこれを攝すとならふ。極樂世界にもれたる法門なきがゆへに。ただしいま彌陀本願の意は、かくのごとくさとれとにはあらず。たゞふかく信心をいたしてとなふるものをむかへんとなり。耆婆扁鵲が萬病をいやすくすりは、もろもろの木、よろづの草をもて合

【空假中の三諦】天台宗にて宇宙觀に用ゐる語。諦とは眞實の義。萬有の實義に空假中の三義ありとす。空諦は現象の實體なく空なるに名け、假諦は現象の假法なるに名け、中諦は空假の二邊をはなるる眞理の中道に名く。

【正了緣の三義】天台宗にて法華經の意をかりて立つる三佛性の義を云ふ。一切衆生の具ふる眞如の理は正しく佛となるべき本性なれば、之を正因佛性と云ひ、眞如の理を照了する智慧を了因佛性と云ひ、眞如の理を證得せしむる修行を緣佛性と云ふ

【法報應の三身】佛身を三種に分ちたるもの。法身は眞理即佛身とするもの、報身は修行に酬ひられたる圓

藥せりといへども、病者これをさとりて、その藥木何分、その藥草何兩和合せりとしらず。しかれども是を服するに萬病こと〴〵くいゆるがごとし。たゞうらむらくはこのくすりを信ぜずして、わがやまひはきはめてをもし、いかゞこの藥にてはいゆる事あらんとうたがひて服せずんば、耆婆が醫術も、扁鵲が秘方も、むなしくしてその益あるべからざるがごとく、彌陀の名號もかくのごとし。それ煩惱惡業のやまひきはめてをもし。いかゞこの名號をとなへてむまるゝことあらんと、うたがひてこれを信ぜずば、彌陀の誓願、釋尊の所說むなしくして、そのしるしあるべからず。たゞあふぎて信ずべし。良藥をえて服さずして死することなかれ。崑崙の山にゆきて、玉をとらずしてかへり、栴檀のはやしにいりて枝をよぢずしていでなば後悔いかゞせん。みづからよく思量すべし。

(四)そも〳〵われら曠劫よりこのかた佛の出世にもあひけん。菩薩の化道にもあひけん。過去の諸佛も現在の如來もみなこれ宿世の父母也。多生の朋友なり。しかるにかれはすでに菩提を證し給へるに、われはなにによて生死にはとゞまれるぞと。はづべしはづべし。かなしむべしかなしむべし。本師釋迦如來の衆生大罪のやまにいり、邪見のはやしにかくれて、三業放逸に、六情縱蕩ならん者を、わが國土にとりをきて、教化度脫せしめむとちかひ給ひたりしは、そも〳〵いかにして、かゝる衆生をば、度脫せしめむとちかひたもふぞとたづぬれば、阿彌陀如來の因位無諍念王と申せし時、菩提心をこし、衆生をして生死を過度せしめんとちかひ給ひて、すなはち國をもくらゐをもすてゝ、攝取衆生の願をこ

し給ひしに、釋迦如來は其時寳海梵志と申て、無諍念王の臣下なりしが、同じく菩提心をおこして、われかならず穢土にして正覺をなりて、惡業の衆生を引導せんとちかひ給ひてこの願をこし給へる也。曠劫よりこのかた諸佛出世して、縁にしたがひ機をはかりて、をの〳〵衆生を化度し給ふ事、かず塵沙にすぎたり。あるひは大乘をとき、小乘をとき、あるひは實教をひろめ、權教をひろむ。有縁の機はみなこと〴〵くその益をう。

(五)ここに釋尊八相成道を五濁惡世にとなへて、放逸邪見の衆生の出離その期なきをあはれみて「これより西に極樂世界あり。佛まします。阿彌陀となづけたてまつる。この佛は「乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺を取らじ」とちかひ給ひて佛になり給へり。すみやかに念ぜよ。出離生死のみちをほしといへども、惡業煩惱の衆生の、とく生死をはなるゝ事、この門にすぎたるはなし」とをしへて、「ゆめ〳〵たがふ事なかれ。六方恒沙の諸佛も證誠し給ふなり」と、ねんごろにをしへ給ひて「われもしひさしく穢土にあらば、邪見放逸の衆生われをそしりわれをそむきて、かへりて惡道におちなん。濁世にいでたる事は本意たゞこの事を衆生にきかしめんがためなり」とて、阿難尊者に「なんぢよくこの事を遐代、流通せよ」とねんごろに約束しをきて、跋提河のほとり、沙羅林のもとにして、八十の春の天、二月十五の夜半に、頭北面西にして滅度に入給ひき。その時に日月ひかりをうしなひ、草木いろを變じ、龍神八部禽獸鳥類にいたるまで、天にあふぎてなき、地にふしてさけぶ。阿難目連等のもろ〳〵の大弟子等、悲泣のなみだをさへてあひ議していは

滿の佛身、應身は衆生救濟のために應現せる佛身。

【八不中道】三論の思想を表示す。八不とは不生、不滅、不去、不來、不一、不異、不斷、不常の八。諸法の實相は八不にして中道に在りとす。

【五重唯識】諸法唯識を觀ずるに淺より深に至り五重の觀法をなすもの。法相宗の思想を表示す。

【耆婆】(Jīvaka) ヂーヴカ　活命、能活等と譯す。釋尊當時印度に於ける名醫。釋迦及び頻婆娑羅王の病を療せり。佛に歸依し阿闍世王をして歸佛せしめしを以て有名なり。

【扁鵲】支那の名醫。姓は秦、名は越人。勃海郡鄭の人なり。

【六情】喜怒哀樂愛惡の感情。

【無諍念王】阿彌陀佛の過去世にて國王たりし時の名

【八相成道】釋尊がこの娑婆に生れて、衆生に隨順して一生の間に示現せる八種の相、降都兜天、托胎、降誕、出家、降魔、成道、說法、涅槃。

【遐代】遐は遠の意味。末代を云ふ。

【跋提河】中印度拘尸那揭羅に在る河。アジタヷテイの音(Ajitavati)譯。無勝と譯す。

【娑羅林】娑羅シヤーラ(Sala)樹の林。

【目連】目犍連の略稱。マウドガルヤーヤナ(Maudgalyayana)釋尊十大弟子の一。神通第一の稱あり。

【三藏】經律論の三藏に通じたる人

【多羅葉】多羅樹の葉、ターラ(Tala)重と譯す。

く「釋尊の恩になれたてまつりて、そこばくの春秋ををくりき。化緣こゝにつきて、黄金のはだへたちまちにへだたり給ひぬ。あるひはわれら世尊に問たてまつるに答へ給へる事もあり、あるひは釋尊みづから告給ふ事もありき。濟度利生の方便、いまはたれにむかひてか問たてまつるべき。すべからく如來の御ことばをしるしをきて未來にもつたへ、御かたみともせん」といひて、多羅葉をひろひて、こと〲く是をしるしをきしを、三藏たちこれを譯して唐土にひろめ本朝へつたへたまふ。諸宗に學するところの一代聖教これ也。

(六)しかるに阿彌陀如來、善導和尚となのりて、唐土にいでて「如來五濁に出現し、隨宜方便して群萠を化す。或は多聞にして得度すと說き、或は小解をもて三明を證すと說き、或は福惠雙に障を除くと教へ、或は禪念坐して思量せよと教ゆ。種種の法門皆解脫すれども、念佛して西方に行くに過ぐるものなし。上一形を盡し、下十念に至り三念五念まで佛來迎したまふ。直に彌陀の弘誓重きが爲に凡夫をして念ずれば即ち生ぜしむることを致す。」とのたまへり。釋尊出世の本懷、ただこの事にありといふべし。「自ら信じ人をして信ぜしむるは難が中に轉た更に難なり。大悲傳へて普く化すれば、眞に佛恩を報ずるとなす」といへば、釋尊の恩を報ずるも、また唯この念佛にありといふべし。もしこのたびむなしくすぎなば、出離いづれの時をか期せんとする。すみやかに信心をこして生死を過度すべし。

(七)次に廻向發願心といは、人ごとに具しつべき事なり。國土の快樂をきゝてたれかねがはざらんや。そも〱かの國土に九品の差別あり。われらいづれの品をか期すべき。善導和

【如來現に】此の文は法事讚下卷にあり。

【自ら信じ】此の文は往生禮讚に在り。

【三】九品の業を明す。

【九品】往生するものの行業によりて九種の差別を附せるもの、上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生。

尙の御意は極樂は是報土、彌陀は是報佛なり。されば未斷惑の凡夫は、すべてむまるべからずといへども、彌陀別願の不思議にて、罪惡生死の凡夫、一念十念してすなはちむまると釋し給へり。しかるを上古よりこのかた、おほく下品といふとも足ぬべしといひて上品をねがはず。これは惡業のをもきをそれて心を上品にかけざる也。もしそれ惡業によらば惣て往生すべからず。願力によてむまれなばなんぞ上品にすゝます事をかたしとせん。それ彌陀淨土をまうけ給事は、願力の成就するゆへなり。しかればこれ念佛の衆生のむまるべきくになり「乃至十念せんに、もし生せずば正覺を取らじ」とたて給ひて、此願によて感得し給ふところなるがゆへなり。

【三】今此『觀經』の九品の業をいはゞ、下品は五逆十惡の罪人、臨終の時はじめて善知識のすゝめによて、あるひは十聲、あるひは一聲、稱念してむまるゝ事をえたり。しかるにわれら罪業をもしといへども五逆をばつくらず、行業をろそかなりといへども一聲十聲にすぎたり。臨終よりさきに彌陀の誓願を聞得て、隨分に信心をいたす。されば下品まではくだるべからず。中品は小乘の持戒の行者、及世間の孝養父母仁義禮智信等の行人なり。この品には中々にむまれがたし。小乘の行人にもあらず。またたもちたる戒もなければわれらが分にあらず。上品は大乘の凡夫、菩提心等の行なり。菩提心は諸宗をのく其意え同じからず。淨土宗の意は、淨土にむまれんとねがふを菩提心といふ。又念佛はすなはちこれ大乘の行なり。無上功德なり。しからば上品往生は手をひくべからず。又本願

【第三】阿彌陀經を釋す。
【依正】依報正報の意。依報は國土、衣服、飲食等を云ひ、正報は肉體精神を云ふ。極樂の佛菩薩等は正報にして國土等は依報なり。

に乃至十念とたて給ひて、臨終現前の願に大衆に圍繞せられてその人のまへに現ぜんとたて給へり。中品は聲聞衆の來迎、下品の化佛の三尊、あるひは金蓮花等の來迎なり。しかるを大衆に圍繞せられて現ぜんとたて給へる本願の意趣は、上品の來迎をまうけ給へり。なんぞあながちにあひすまはんや。又善導和尚、三萬已上は上品上生の業との給へり。數遍によて上品にむまるべし。又三心につゐて九品あるべし。信心によて上品にむまるべしと見えたり。上品をねがふ事は、わが身のためにはあらず。かのくににむまれをはりて、かへりてとく衆生を化せんがためなり。これあにほとけの御意にかなはざらんや。

【第三】 次に『阿彌陀經』は、まづ極樂の依正の功德をとく。これ衆生の願樂の心をすゝめんがためなり。のちに往生の行をあかすに、少善根をもてはむまるゝ事をうべからず。阿彌陀佛の名號を執持して一日七日すれば往生する事をうとあかせり。衆生これを信ぜざらん事をそれて、六方にをの／＼恆河沙の諸佛まし／＼て、大千に舌相をのべて證誠し給へり。善導釋していはく、「この證によてむまるゝ事をえずば、六方如來の給へる舌、ひとたび口よりいでをはりて、ながくくちに還りいらずして、自然に壞爛せん」との給へり。しかれば是をうたがはんものは、彌陀の本願をうたがふのみにあらず、釋尊の所説をうたがふなり。釋尊の所説をうたがふは、六方恆沙の諸佛の所説をうたがふなり。すなはち是大千にのべ給へる舌相を壞爛する也。もし又是を信ぜば、ただ彌陀の本願を信ずるのみにあらず、釋尊の所説を信ずるなり。釋尊の所説を信ずるは、六方恆沙の諸佛の所説を信ず

【善導和尚のいはく】この文句あるは法事讃下卷、又は往生禮讃日中偈、後は法事讃下卷に在り。

【御誓言の書】一般に一枚起請文と云ひ、淨土の安心起行を一紙に至極せるものとして尊重せらる。和語燈錄の編者了惠上人は「これは御自筆の書なり、勢觀聖人にさづけられき」と註す。

ろ也。一切の諸佛を信ずるは、一切の法を信ずるになる。一切の法を信ずるは、一切の菩薩を信ずるになる。これすなはち一切の三寶を信ずるなり。この信ひろくして廣大の信心なり。善導和尚のいはく「凡夫疑見の執を除せんが爲に、皆舌相を舒べて、三千を覆ひ、共に七日名號を稱することを證す。」又「釋迦の言說の眞なることを表す。」「六方の如來舌を舒べて證す。專ら名號を稱すれば西方に至ると。彼に到れば華開き妙法を聞き、十地の願行自然に彰る。」「心心に念佛して疑を生ずること莫れ、六方の如來の證虛しからず。三業專心に雜亂なければ百寶の蓮華時に應じて見ゆ。」

御誓言の書

もろこしわが朝に、もろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず。ただ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して、うたがひなく往生するぞとおもひとりて、申すほかには別の子細候はず。ただし三心四修など申す事の候は、みな決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞと思うちにこもり候なり。このほかにおくふかき事を存ぜば、二尊の御あはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の御のりをよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずしてたゞ

【往生大要抄】この書はもと二巻なるべし。了惠上人註して曰く「この文に下巻あるべしとみゆるが、いづくにかくれて侍るにか、いまだたづねえず。もしたづねうる人あらばこれにつげ」と。

【一】總じて聖道淨土の二門を明す。

【二】聖道門を明す。

【花嚴阿含より】天台宗の教判に隨ひて大小乘諸經の說時をあぐ。即ち釋尊は初め華嚴をとき次に阿含を說き次に方等、般若、法華涅槃を說けり。所謂五時の教判なり。

【達磨】達磨宗即ち禪宗をさす。

【父母所生身速證大覺位】此語菩提心論に出づ。父母の生なるこの穢身のままにて速かに大覺を證るもの。

一向に念佛すべし。

往生大要抄

【一】いまわが淨土宗には、二門をたてゝ釋迦一代の說教をおさむるなり。いはゆる聖道門、淨土門なり。

【二】はじめ花嚴阿含より、をはり法花涅槃にいたるまで、大小乘の一切の諸經にとくところの、この娑婆世界にありながら、斷迷開悟のみちを聖道門とは申すなり。（一）是につきて大乘の聖道あり。小乘の聖道あり。大乘に二あり。即佛乘と菩薩乘と也。小乘に二あり即聲聞と緣覺との二乘なり。これをすべて四乘となづく。

（二）佛乘とは即身成佛の教なり。眞言、達磨、天台、花嚴等の四宗にあかすところなり。すなはち眞言宗には、父母所生身速證大覺位と申して、この身ながら、大日如來のくらいにのぼるとならふ也。佛心宗には、前佛後佛以心傳心とならひて、ただちに人の心をさしてほとけと申なり。かるがゆへに即心是佛の法となづけて成佛とは申さぬなり。この法は釋尊入滅の時『涅槃經』をときをはりてのち、たゞ一偈をもちて迦葉尊者に付囑し給へる法なり。天台宗には、煩惱即菩提、生死即涅槃と觀じて、觀心にてほとけになるとならふ也。八歲の龍女が南方無垢世界にして、すみやかに正覺をなりしその證なり。花嚴宗には、初

【佛心宗】禪宗を云ふ。

【迦葉】マハーカシャーパ(Mahākāśyapa)釋尊十大弟子の一。頭陀第一の稱あり。

【四弘誓願】菩薩の四種の大願。度斷知證を云ふ。

【六波羅蜜】六種の修行。波羅蜜(パーラミター Pāramita)は到彼岸、又は度と譯す。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六。

【阿僧祇】アサンクヤ(Asaṃkhya)無數と譯す。

【十二因緣】無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死。

【不淨數息】不淨觀と數息觀。不淨觀は衆生身の不淨なることを觀想する修法。數息觀は入出の息を觀じて散亂心を統治する修法。

發心時便成正覺とて、また即身成佛とならふなり。これらの宗にはみな即身頓證のむねをのぶれば、佛乘となづくる也。

(三)つぎに菩薩乘といは、歴劫修行成佛の敎なり。三論法相の二宗にならふところなり。すなはち三論宗には、八不中道の無相の觀に住して、しかも心には四弘誓願をおこし、身には六波羅蜜を行じて、三阿僧祇に菩薩の行を修してのちほとけになると申す也。法相宗には、五重唯識の觀に住して、しかも四弘をおこし、六度を行じて三祇劫をへて、佛になると申す也。これらを菩薩乘となづく。

(四)つぎに緣覺乘といは、飛花落葉を見て、ひとり諸法の無常をさとり、あるひは十二因緣を觀じて、ときは四生、をそきは百劫にさとりをひらくなり。

(五)つぎに聲聞乘といは、はじめ不淨數息を觀ずるより、をはり四諦の觀にいたるまで、ときは三生、をそきは六十劫に、四向三果のくらゐをへて、大阿羅漢の極位にいたる也。此二乘の道は、成實俱舍の兩宗にならふところ也。又聲聞につきて戒行をそなふべし。比丘は二百五十戒を受持し、比丘尼は五百戒を受持するなり。これを五篇七聚の戒となづくる也。又沙彌沙彌尼の十戒、式沙摩尼の六法、優婆塞優婆夷の五戒みなこれ律宗の中にあかすところ也。

(六)をよそこの四乘の聖道は大小乘をえらばず、われらが身にたへ、時にかなひたる事にてはなき也。もし聲聞のみちにをもむかば、二百五十戒たもちがたく、苦集滅道の觀成じが

たし。もし緣覺の觀をもとむとも、飛花落葉のさとり、十二因緣の觀、ともに心もをよばぬ事也。又菩薩の行にをゐては、三聚十重の戒、發得しがたく、四弘六度の願行成就しがたし。されば身子は六十劫まで修行して、乞眼の惡緣にあひて、たちまちに菩薩の廣大の心をひるがへしき。いはんや末法のこのごろをや。下根のわれらをや。たとひ卽身頓證の理を觀ずとも、眞言の入我我入、阿字本不生の觀、天台の三觀六卽中道實相の觀、花嚴宗の法界唯心の觀、佛心宗の卽心是佛の觀、理はふかく、解はあさし。かるがゆへに、末代の行者その證をうることきはめてかたし。このゆへに道綽禪師は聖道の一種は今時は證しがたしとのたまへり。すなはち『大集月藏經』をひきて、そのありさまをあかせり。こまかにのぶるにをよばず。

【三】つぎに淨土門は、まづこの娑婆世界をいとひすてゝ、いそぎてかの極樂淨土にむまれて、かのくににして佛道を行ずる也。しかればかつ〴〵淨土にいたるまでの願行をたてて、往生をとぐべき也。かの國にむまるゝ事は、すべて機の善惡をえらばず、ただほとけのちかひを信じ、信ぜざるによる。五逆十惡をつくれるものも、ただ一念十念に往生するは、すなはちこのことはり也。このゆへに道綽は「ただ淨土の一門のみありて、通入すべきみちなり」と釋し給へり。通じているべしといふにつきて、わたくしに意うるに二つの心あるべし。一にはひろく通じ、二にはとをく通ず。ひろく通ずといは、五逆の罪人をあげてなを往生の機におさむ。いはんや餘の輕罪をや。いかにいはんや善人をやと意えつれ

【四諦】苦諦集諦滅諦道諦。

【五篇七聚】戒律の總稱。一波羅夷、二僧殘、三波逸提、四提舍尼、五突吉羅を五篇と云ふ。以上の中僧殘の次に偸蘭遮を加へ、突吉羅を分ちて惡作と惡說との二としたるを七聚と云ふ。

【沙彌、沙彌尼】出家して修行の未だ熟せざる男を沙彌と云ひ、女を沙彌尼と云ふ。

【式沙摩尼】沙彌尼より比丘尼に至る二年間のものを云ふ。シクシャマーナー（Śikṣamāṇā）學法女と譯す。

【三聚十重】三聚は三聚淨戒、一攝律儀戒、二攝善法戒、三攝衆生戒。十重は十波羅夷。梵網經によれば、一不快意殺生、二不劫盜人物、三不無慈行欲、四不故

心妄語、五不酤酒罪緣、六不談他罪過、七不自讚毀他、八不慳生毀辱、九不瞋不受謝、十不謗三寶。

【身子】舍利弗のこと。シャーリプトラ(Śāriputra)佛十大弟子の一。智慧第一の稱あり。茲にあぐるものは舍利弗の本生譚なり。

【三】淨土門を明す。

【入我我入】佛即衆生の心境をいふ。如來の三業我に入り、我の三業如來に入り、我と如來と相即互融して隔てなきこと。

【三觀六即】三觀は空假中の三觀、六即は理即、名字即、觀行即、相似即、分眞即、究竟即の六、共に天台宗の思想を表はし、迷悟不二を說く。

【四】難行道易行道を明す。

ば、往生のうつはものにきらはるゝものなし。かるがゆへにひろく通ずといふ也。とをく通ずといは、末法萬年ののち法滅百歳まで、この教とゞまりて、その時きゝて、一念するみな往生すといへり。いはんや末法のなかをや。いかにいはんや正法像法をやと意得つれば、往生の時にもるゝ輩なし。かるがゆへにとをく通ずといふなり。しかればこの心生死をはなれんとおもはんものは、難證の聖道をすてゝ、易往の淨土をねがふべき也。

【四】又この聖道淨土をば、難行道易行道となづけたり。たとへをとりてこれをいふに、難行道とは、さかしきみちをかちよりゆかんがごとし。易行道とは、海路をふねよりゆくがごとしといへり。しかるに目しゐ足なえたらんものは、陸地にはむかふべからず。ただふねにのりてのみ、むかひのきしにはつくべきなり。しかるにこのごろのわれらは、智慧のまなこしゐ、行法のあしなえたるともがら也。聖道難行のさがしきみちには、すべてのぞみをたつべし。ただ彌陀本願のふねにのりてのみ、生死のうみをわたりて、極樂のきしにはつくべきなり。いまこのふねといは、すなはち彌陀の本願にたとふる也。其本願といは、四十八願也。そのなかに、第十八の願をもて、衆生の行とさだめたるなり。二門の大旨略してかくのごとし。聖道の一門をさしをきて、淨土の一門にいらんとおもはん人は、道綽善導の釋をもて、所依の三部經を習ふべきなり。さきには聖道淨土の二門を分別して淨土門にいるべきむねを申ひらきつ。いまは淨土の一門につきて、修行すべきやうを申すべし。

【五】心行相應を明す。

【五】それ淨土に往生せんとおもはば、心と行とのふたつ相應すべきなり。(一)かるがゆへに善導の釋に「ただしその行のみあるは、行すなはちひとりにして、またいたるところなし。ただその願のみあるは、願すなはちむなしくして、またいたるところなし。かならず願と行とあひたすけて、なすところみな剋す」といへり。をよそ往生のみにかぎらず。聖道門の得道をもとめんにも心と行とを具すべしといへり。發心修行となづくるこれなり。今此淨土宗に善導のごときは、安心起行となづけたり。

(二)まづその安心といは『觀無量壽經』にといていはく「若衆生ありてかのくににむまれむとねがはんものは、三種の心をこして卽往生すべし。なにをか三とする。一には至誠心。二には深心。三には廻向發願心也。三心を具するものはかならずかのくににむまる」といへり。善導和尙の『觀經の疏』ならびに『往生禮讚』の序に、此三心を釋し給へり。

(三)一に至誠心といは、まづ『往生禮讚』の文をいださば「一には至誠心。いはゆる身業にかのほとけを禮拜せんにも、口業にかのほとけを讚嘆稱揚せんにも、意業にかの佛を專念觀察せんにも、をよそ三業をこすには、かならず眞實をもちゐよ。かるがゆへに至誠心となづく」といへり。つぎに『觀經の疏』の文をいださば「一に至誠心といは、至といは、眞也、誠といは實なり。一切衆生の身口意業の所作の解行。かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとおもふ。外には賢善精進の相を現じて、內には虛假をいだく事なかれ。

善の三業をおこさばかならず眞實心の中になすべし。內外明闇をえらばず。みな眞實をもちゐよといへり。此二つの釋を、わたくしに料簡するに、至誠心といは眞實の心なり。その眞實といは內外相應の心也。身にふるまひ、口にいひ、意におもはん事、みな人めをかざる事なく、まことをあらはす也。しかるを人、つねにこの至誠心を、熾盛心と意得て、勇猛强盛の心をおこすを、至誠心と申すは、此釋の心にはたがふ也。文字もかはり、意もかはりたるものを、さればとてその猛利の心は、すべて至誠心をそむくと申すにはあらず。それは至誠心のうへの熾盛心にてこそあれ。眞實の至誠心を地にして、熾盛なるはすぐれ、熾盛ならぬはおとるにてある也。是につきて九品の差別までもこころうべき也。されば善導の『觀經の疏』に九品の文を釋する下に、一々の品ごとに、辨定三心以爲正因とさだめて「此三心は九品に通ずべし」と釋し給へり。惠心も是をひきて「禪師の釋のごときは、理九品に通ずべし」とこそはしるされたれ。此三心の中の至誠心なれば、至誠心すなはち九品に通ずべき也。

又至誠心は深心と廻向發願心とを體とす。この二をはなれては、なにによりてか、至誠心をあらはすべき。ひろくほかをたづぬべきにあらず。深心も廻向發願心もまことなるを至誠心とはなづくる也。三心すでに九品に通ずべしと意えてのうへには、その差別のあるやうをこころうるに、三心の淺深强弱によるべき也。かるがゆへに上品上生には、經に「精進勇猛なるがゆへに」ととき、釋には「日數すくなしといへども、作業はげしき

がゆへに」といへり。又上品中生をば「行業やゝよはくして」と釋し、上品下生をば、「行業こわからず」など釋せられたれば、三心につきて、こわきもよはきもあるべしとこそこころえられたれ。よはき三心具足したらん人は、くらゐこそさがらんずれ、なを往生はうたがふべからざる也。それに強盛の心をこさずば、至誠心かけて、ながく往生すべからずと意えて、みだりに身をもくだし、あまさへ人をもかろしむる人人の不便におぼゆる也。さらなり強盛の心のをこらんはめでたき事なり。善導の十德の中に、はじめの至誠念佛の德をいだすにも、一心に念佛してちからのつくるにあらざればやまず、乃至寒冷にもまたあせをながす、この相狀をもて至誠をあらはすなどあるなれば、たれ〳〵もさこそははげむべけれ。ただしこの定なるをのみ至誠心と意えて、是にたがはんをば至誠心かけたりといはんには、善導のごとく至誠心至極して、勇猛ならん人ばかりぞ往生はとぐべき。われらがごときの尫弱の心にては、いかが往生すべきと臆せられぬべき也。かれは別して善導一人の德をほむるにてこそあれ。これは通じて一切衆生の往生を決するにてあれば、たくらふべくもなき事也。所詮はただわれらがごときの凡夫、をの〳〵分につけて、強弱の眞實の心をこすを至誠心となづけたるとこそ、善導の釋の意は見えたれ。文につきてこまかに意うれば「外には賢善精進の相を現じ、內には虛假をいだくことなかれ」といふは內には愚にして、外には賢相を現し、內には惡をのみつくりて、外には善人の相を現し、うちには懈怠にして、ほかには精進の相を現ずるを、虛假とは申す也。外相の善惡

をばかへりみず、世間の毀誉をばわきまへず、内心に穢土をもいとひ浄土をもねがひ、悪をもとどめ、善をも修して、まめやかに佛の意にかなはん事をおもふを、眞實とは申也。眞實は虚假に對することば也。眞と假と對し、虚と實と對するゆへなり。

この眞實虚假につきてくはしく分別するに、四句の差別あるべし。一には外をかざりて内にはむなしき人。二には外をもかざらず内もむなしき人。三には外はむなしく見えて内はまことある人。四には外にもまことをあらはし内にもまことある人。かくのごときの四人の中には、前の二人をばともに虚假の行者といふべし。後の二人をばともに眞實の行者といふべし。しかればただ外相の賢愚善惡をばえらばず、内心の邪正迷悟によるべき也。をよそこの眞實の心は人ごとに具しがたく、事にふれてかけやすき心ばへなり。をろかにはかなしといいましめられたるやうもあることはり也。無始よりこのかた今身にいたるまで、おもひならはして、さしもひさしく心をはなれぬ名利の煩惱なれば、たたんとするにやすらかに離たきなりけりと、おもひゆるさるゝかたもあれども、又ゆるしはんべるべき事ならねば、わが心をかへりみて、誡たをすべき事なり。しかるにわが心の程もおもひしられ、人のうへをも見るに、この人目をかざる心ばへの、いかにも〳〵おもひはなれぬこそ、返す返す心うくかなしくおぼゆれ。この世ばかりをふかく執する人は、ただまなこのまへのほまれ、むなしき名をもあげんとおもはんをば、いふにたらぬ事にてをきつ。うき世をそむきて、まことのみちにをもむきたる人々の中にも、かへりてはかなくよしなき事かな

とおぼゆる事もある也。むかしこの世を執する心のふかゝりしなごりにて、ほど〳〵につけたる名利をふりすてたるばかりを、ありがたくいみじき事におもひて、やがてそれを、この世さまにも心のいろのうるさきにとりなしてさとりあさき世間の人の、心のそこをばしらず、うへにあらはるゝすがた事がらばかりを、たとかりいみじかるをのみ本意におもひて、ふかき山路をたづね、幽なるすみかをしむるまでも、ひとすぢに心のしづまらんためとしもおもはで、をのづからたづねきたらん人、もしはつたへきかん人のおもはん事をのみさきだてゝ、まがきのうち庭のこだち、菴室のしつらひ、道場の莊嚴など、たとへめでたく、心ぼそく物あはれならむ事がらをのみ、ひきかまへんと執するほどに、罪の事も、ほとけのおぼしめさん事をもかへりみず、人のそしりにならぬ樣をのみおもひいとなむ事よりほかにはおもひまじふる事もなくて、まことしく往生をねがふべきかたをば思もいれぬ事などのあるが、やがて至誠心かけて、往生せぬ心ばへにてある也。又世をそむきたる人こそ、中々ひじり名聞もありてさやうにもあれ、世にありながら往生をねがはん人は、此心は何ゆへにかあるべきと申す人のあるは、なをこまやかに心えざる也。世のほまれをおもひ、人めをかざる心はなに事にもわたる事なれば、ゆめまぼろしの榮花重職をおもふのみにはかぎらぬ事にてある也。中々在家の男女の身にて後世をおもひたるをば、心ある事のいみじくありがたきとこそは人も申す事なれば、それにつけて、外をかざりて人にいみじがられんとおもふ人のあらんもかたかるべくもなし。まして世をすてたる人などにむかひ

【譏嫌戒】具さには息世譏嫌戒といふ。世間の誹譏をやめんためにせるもの。義山の註に曰く「菩薩の譏嫌戒とは世のそしり、時にいむ事ありて修行のさはりともならんには爲すべきを止め爲すまじきをも爲すことあるを譏嫌戒を守るといふなり。（中略）菩薩の譏嫌戒は[illegible]は詩歌など作りて慰むことあるにや。

ては、さなからん心にも、あはれをしりがほにあひしらはんために、後世のおそろしさ、此世のいとはしさなんどは申すべきぞかし。又かく樣に申せば、ひとへにこの世の人めはいかにもありなんとて、人のそしりをもかへりみず、ほかをかざらねばとて、心のまゝにふるまふがよきと申すにてはなきなり。菩薩の譏嫌戒とて、人のそしりになりぬべき事をばなせそとこそいましめられたれ。さればはうにまかせてふるまへば、放逸とてわろき事にてあるなり。それに時にのぞみたる譏嫌戒のためばかりに、いさゝか人めをつゝむかたは、わざともさこそあるべき事を、人目をのみ執してまことのかたをもかへりみず、往生のさはりになるまでに、ひきたさるゝ事の返々もくちおしき也。譏嫌戒となづけて、やがて虚假になる事もありぬべし。眞實といひなして、あまり放逸なる事もありぬべし。これをかまへて、よく／＼意えとくべし。詞なをたらぬ心ちする也。

又此眞實につきて、自利の眞實利他の眞實あり。又三界六道の自他の依正をいとひすてて、かろしめいやしめんにも、阿彌陀佛の依正二報を、禮拜讃嘆憶念せんにも、をよそ厭離穢土欣求淨土の三業にわたりて、みな眞實なるべきむね、疏の文につぶさ也。その文しげくして、こと／＼く出すことあたはず。至誠心のありさま略してかくのごとし。

（四）二に深心といは、まづ「禮讃」の文にいはく「二には深心。すなはち眞實の信心なり。自身は是煩惱を具足せる凡夫なり。善根薄少にして、三界に流轉して、火宅をいでずと信知して、いま彌陀の本弘誓願の名號を稱する事、下十聲一聲にいたるまで、さだめて往生

する事をうと信知して、乃至一念もうたがふ心ある事なかれ。かるがゆへに深心となづく」といへり。
次に『觀經の疏』の文にいはく、「二に深心といは、すなはちこれ深信の心なり。又二種あり。一には決定して、ふかく自身は現に是罪惡生死の凡夫也。曠劫より此かた常沒常流轉して、出離の緣ある事なしと信ぜよ。二には決定してふかく彼阿彌陀佛の四十八願をもて、衆生を攝受し給ふ事うたがひなくおもんぱかりなければ、かの願力に乘じて、さだめて往生する事をうと信じ、又決定してふかく釋迦佛、この『觀經』の三福九品定散二善をときて、かのほとけの依正二報を證讚して、人をして欣慕せしめ給ふ事を信じ、又決定してふかく『彌陀經』の中に、十方恆沙の諸佛の、一切の凡夫決定してむまるゝ事をうと證勸し給へり。ねがはくは一切の行者、一心にただ佛語を信じて身命をかへりみず、決定して依行して、佛の捨しめ給はん事をば即すて、ほとけの行ぜしめ給はん事をば即行じ、ほとけの去しめ給はんところをば即され。これを佛教に隨順し、佛意に隨順すとなづけ、これを眞の佛弟子となづく。又深心を深信といは、決定して自身を建立して、教に順じて修行して、ながく疑錯をのぞきて、一切の別解別行、異學異見異執のために、退失に傾動せられざれ」といへり。
わたくしに此二つの釋を見るに、文に廣略あり。言に同異ありといへどもまづ二種の信心をたつる事は、そのおもむきこれひとつなり。すなはち二の信心といは、はじめにわ

が身は煩惱罪惡の凡夫也。火宅をいでず、出離の緣なしと信ぜよといひ、つぎには決定往生すべき身なりと信じて一念もうたがふべからず。人にもいひさまたげらるべからずなどいへる、前後のこと葉相違して、意得がたきに似たれども、心をとどめて是を案ずるに、はじめにはわが身のほどを信じ、のちにはほとけの願を信ずる也。ただしのちの信心を決定せしめんがために、はじめの信心をばあぐる也。そのゆへは、もし初のわが身を信ずる樣をあげずして、ただちに後のほとけのちかひばかりを信ずべきむねをいだしたらましかば、もろ〳〵の往生をねがはん人、雜行を修して本願をたのまざらんをばしばらくをく。まさしく彌陀の本願の念佛を修しながらも、なほ心にもし貪欲瞋恚の煩惱をもをこし、身にをのづから十惡破戒等の罪業をもをかす事あらば、みだりに自身を怯弱して、返りて本願を疑惑しなまし。まことに此彌陀の本願に、十聲一聲にいたるまで往生すといふ事は、おぼろげの人にてはあらじ。妄念をもをこさず、つみをもつくらぬ人の、甚深のさとりををこし、強盛の心をもちて申したる念佛にてぞあるらん。われらごときのえせものども、一念十念にてはよもあらじとこそおぼえんもにくからぬ事也。是は善導和尚、未來の衆生このうたがひををこさん事をかへりみて、此二種の信心をあげて、われらがごとき煩惱をも斷ぜず、罪惡をもつくれる凡夫なりとも、ふかく彌陀の本願を信じて念佛すれば、十聲一聲にいたるまで決定して往生するむねをば釋し給へる也。かくだに釋し給はざらましかば、われらが往生は不定にぞおぼえまし。あやうくおぼゆるにつけても、此釋のゝことに

【增上緣】彌陀の名號を稱ふれば多劫の罪を滅し、佛聖衆の來迎を得、煩惱邪業のよく礙るものなきが故に增上緣と云ふ。

【三賢十聖】修道中の菩薩を云ふ。十住、十行、十回向の菩薩を三賢と云ひ、十地の菩薩を十聖と云ふ。

心にそみておぼえはんべる也。されば此義を心えわかぬ人にこそあるめれ。ほとけの本願をばうたがはねども、わが心のわろければ往生はかなはじと申あひたるが、やがて本願をうたがふにて侍るなり。さやうに申したちなば、いかほどまでか佛の本願にかなはず。さほどの心こそ本願にはかなひたれとはしり侍るべき。それをわきまへざらんにとりては、煩惱を斷ぜざらんほどは、心のわろさはつきせぬ事にてこそあらんずれば、いまは往生してんとおもひたつ世はあるまじ。又煩惱を斷じてぞ、往生はすべきと申すになりなば、凡夫の往生といふ事はみなやぶれなん。すでに彌陀の本願力といふとも、煩惱罪惡の凡夫をば、いかでかたすけ給ふべき。えむかへ給はじ物をなど申すになるぞかし。佛の御ちからをばいかほどとしるぞ。それにすぎてほとけの願をうたがふ事はいかがあるべき。又ほとけにたちあひまいらするとがありなんと申すべき事にてこそあれ。すべてわが心の善惡をはからひて佛の願にかなひかなはざるを意得あはせん事は、佛智ならではかなふまじき事也。されば善導は『觀經の疏』の一のまきに、弘願を釋するに「一切善惡の凡夫むまるることをうる事は、阿彌陀佛の大願業力に乘じて增上緣とせずといふ事なし」といひをきて「ほとけの密意弘深にして教門さとりがたし。三賢十聖もはかりてうかがふところにあらず。いはんやわれ信外の輕毛なり。あへて旨趣を知んや」とこそは釋し給ひたれば、善導だにも十信にだにもいたらぬ身にて、いかでかほとけの御意をしるべきとこそは、おほせられたれば、ましてわれらが解にて、ほとけの本願をはからひしる事は、ゆめ／＼お

もひよろまじき事也。ただ心の善惡をもかへりみず、罪の輕重をもわきまへず、意に往生せんとおもひて口に南無阿彌陀佛ととなへば、こゑについて決定往生のおもひをなすべし。その決定によりて、すなはち往生の業はさだまる也。かく意えつればやすき也。往生は不定におもへばやがて不定なり。一定とおもへばやがて一定する事なり。

所詮は深信といは、かの佛の本願は、いかなる罪人をもすてず、ただ名號をとなふる事一聲までに、決定して往生すと、ふかくたのみて、すこしのうたがひもなきを申す也。『觀經』の下品下生を見るに「十惡五逆の罪人も、一念十念に往生す」ととかれたり。「十惡と五逆等と貪瞋と四重と偸僧と正法を謗ずと、未だ曾て慚愧して前の愆を悔いず」といへるは、往生の時の惡業をあかす「忽ち往生の善知識急に勸めて專ら彼の佛の名を稱せしむるに遇ふ。化佛菩薩聲を尋ねて到る。一念心を傾くれば寶蓮に入る」といへるは、臨終の時の行相をあかす也。又『雙卷經』のおくに「三寶滅盡の後の衆生乃至一念に往生す」ととかれたり。善導釋していはく「萬年にして三寶滅するに此經住すること百年。爾時一念を聞くもの皆當に彼に生ずることを得べし」といへり。此二つの意をもて、彌陀の本願のひろく攝し、とをくをよぶほどをばしるべき也。重をあげて輕をおさめ、惡人をあげて善人をおさめ、遠きをあげて近きをおさめ、後をあげて前をおさむるなるべし。まことに大悲誓願の深廣なる事たやすく言をもてのぶべからず。心をとどめておもふべき也。

抑、此ごろ末法にいれりといへども、いまだ百年にみたず。われら罪業をもしといへど

も、いまだ五逆をつくらず。しかればはるかに百年法滅ののちをすくひ給へり。いはんや此ごろをや。ひろく五逆極重のつみをすて給はず。いはんや十惡のわれらをや。ただ三心を具して、もはら名號を稱すべし。たとひ一念といふともみだりに本願をうたがふ事なかれ。たゞしかやうのことはりを申つればつみをもすて給はねば、心にまかせてつみをつくらんもくるしかるまじ。又一念にも一定往生すなれば、念佛はおほく申さずともありなんと、あしく意うる人のいできてつみをばゆるし、念佛をば制するやうに申しなすが、返返もあさましく候也。惡をすゝめ善をとどむる佛法はいかゞあるべき。されば善導は「貪瞋煩惱をきたしまじへざれ」といましめ、又「念念相續していのちのをはらんを期とせよ」とをしへ、又「日所作は五萬六萬乃至十萬など」とこそすゝめ給ひたれ。ただこれは大悲本願の一切を攝する、なを十惡五逆をもらさず、稱名念佛の餘行にすぐれたる、すでに一念十念にあらはれたるむねを信ぜよと申すにてこそあれ。かやうの事はあしく意うれば、いづかたもひが事になる也。つよく信ずるかたをすゝむれば邪見をこし、邪見ををこさせじとこしらふれば、信心つよからずなるが術なき事にて侍る也。かやうの分別は、此ついでには事ながければ、起行の下にてこまかに申ひらくべし。

又ひくところの疏の文を見るに、後の信心につゐて二つの心あり。即佛につゐてふかく信じ、經につゐてふかく信ずべきむねを釋し給へるにやと意得らるゝ也。まづほとけにつゐて信ずといは、一には彌陀の本願を信じ、二には釋迦の所說を信じ、三には十方恒沙

の證勸を信ずべき也。經につゐて信ずといは、一には『無量壽經』を信じ、二には『觀經』を信じ、三には『阿彌陀經』を信ずるなり。すなはちはじめに決定してふかく阿彌陀佛の四十八願といへる文は、彌陀を信じ、又『無量壽經』を信ずる也。つぎに又決定してふかく釋迦佛の『觀經』といへる文は、釋迦を信じ『觀經』を信ずるなり。つぎに決定してふかく『彌陀經』の中といへる文は、十方諸佛を信じ、又『阿彌陀經』を信ずる也。又つぎの文に、佛の捨しめ給はんをばすてよといふは、雜修雜行なり。ほとけの行ぜしめ給はん事をば行ぜよといふは專修正行也。ほとけの去しめたまはん事をばされといふは、異學異解雜緣動亂の處なり。善導の、みづからもさへ他の往生の正行をもさふと釋し給へる事、まことにをそるべき物なり。又佛教に隨順すといは、釋迦の御をしへにしたがひ、佛願に隨順すといは、彌陀の願にしたがふ也。佛意に隨順すといは、二尊の御意にかなふなり。いまの文の意はさきの文に、三部經を信ずべしといへるにたがはず。詮じてはただ雜修をすてゝ、專修を行ずるが、ほとけの御意にかなふとこそはきこえたれ。又つぎの文に、別解別行のためにやぶられざれといふは、解異に行異ならん人の、難じやぶらんにつゐて、念佛をもすて、往生をもうたがふ事なかれと申す也。さとりことなる人と申すは、天台法相等の諸宗の學生これなり。行ことなる人と申すは、眞言止觀等の一切の行者是なり。これらはみな聖道門の解行也。淨土門の解行にことなるがゆへに、別解別行とはなづけたり。かくのごときの人に、いひやぶらるまじきことはりは、此文のつぎにこま

かに釋し給へり。すなはち人につきて信をたて、行につきて信をたつといふ二の信をあげたり。はじめの人につきて信をたつるといへるこれなり。その文廣博にしてつぶさに出すことあたはず。しかれどもその義至要にしてまたすてがたきによりて、ことばを略し意をとりてそのをもむきをあかさば、解行不同の人ありて、經論の證據をひきて、一切の凡夫往生することをえずといはば、すなはちこたえていへ。なんぢがひくところの經論を信ぜざるにはあらず。みなこと〴〵くあふひで信ずといへども、さらになんぢが破をばうけず。そのゆへは、なんぢがひくところの經論と、わが信ずるところの經論と、すでに各別の法門なり。ほとけ此『觀經』『彌陀經』等をとき給ふ事、時も別に、ところも別に、對機も別に、利益も別なり。佛の說教は、機にしたがひ、時にしたがひて不同なり。かれは通じて人天菩薩の解行をとき、是は別して往生淨土の解行をとく。即佛の滅後の、五濁極增の一切の凡夫、決定して往生する事をうとき給へり。われいま一心に此佛敎によりて、決定して奉行す。たとひなんぢ百千萬億ありてむまれずといふとも、たゞわが往生の信心を増長し成就せんとこたへよといへり。又行者さらに難破の人にむかひてときていへ。なんぢよくきけ。われいまなんぢがために、さらに決定の信相をとかんといひて、はじめは地前菩薩及羅漢辟支佛等より、をはり化佛報佛までたてあげて、たとひ化佛報佛十方にみちみちて、をの〳〵ひかりをかゞやかし、したをいだして十方におほひて、一切の凡夫念佛して一定往生すといふ事は、ひが事なり。信ずべからずとの給はんに、われこれらの諸佛

の所說をきくとも、一念も疑退の心をおこして、かの國にむまるゝ事をえざらん事をおそれじ。なにをもってのゆへにとなれば、一佛は一切佛也、大慈悲同にしてすこしの差別なし。同體の大悲のゆへに、一佛の所化はすなはち是一切佛の化たり。こゝをもてまづ彌陀如來、「我が名號を稱して下十聲に至るまで若し生ぜずば正覺を取らじ」と願じて、その願成就してすでに佛になり給へり。又釋迦如來は、この五濁惡世にして、惡衆生惡見惡煩惱惡邪無信さかりなる時、彌陀の名號をほめ、衆生を勸勵して稱念すればかならず往生する事をうとゝき給へり。又十方の諸佛は、衆生の釋迦一佛の所說を信ぜざらん事をおそれて、すなはちともに同心同時にをの〳〵舌相を出して、あまねく三千世界におほひて、誠實のことばをとき給ふ。なんだち衆生、みな釋迦の所說所讚所證を信ずべし。一切の凡夫罪福の多少時節の久近をとはず、たゞよく上は百年をつくし、下は一日七日十聲一聲にいたるまで、心をひとつにしてもはら彌陀の名號を念ずれば、さだめて往生する事をうといふ事を信ずべし。かならずうたがふことなかれと證誠し給へり。かるがゆへに人につゐて信をたつといへり。かくのごときの一切諸佛の、一佛ものこらず同心に、あるひは願をおこし、あるひはその願をとき、あるひはその說を證して、一切の凡夫念佛して決定往生すべきむねをすゝめ給へるうへには、いかなるほとけの又きたりて往生すべからずとはの給ふべきぞといふことはりをもて、ほとけきたりての給ふともおどろくべからずとは信ずる也。ほとけなをしかり、いはんや地前地上の菩薩をや。いはんや小乘の羅漢をやと意えつれば、

まして凡夫のとかく申さんによりて、一念もうたがひおどろく心あるべからずとは申なり。おほかた此信心の樣を、人の意えわかぬとおぼゆる也。心のそみ〴〵と身のけもいよだち、なみだもおつるをのみ信のおこると申すはひが事にてある也。それは歡喜隨喜悲喜とぞ申べき。信といはうたがひに對する意にて、うたがひをのぞくを信とは申すべき也。みる事につけても、きく事につけても。その事一定さぞとおもひとりつる事は、人いかに申せども、不定におもひなす事はなきぞかし。これをこそ物を信ずるとは申せ、その信のうへに歡喜隨喜などもをこらんは、すぐれたるにてこそあるべけれ。たとへばとしごろ心のほどをもみとりて、そら事せぬたしかならん人ぞとたのみたらん人の、さま〴〵におそろしき誓言をたて、なをざりならずねんごろにちぎりをきたる事のあらんを、ふかくたのみてわすれずたもちて、心のそこにふかくたくはへたらんに、いと心の程もしらざらん人のそれなたのみそ。そら事をするぞとさま〴〵にいひさまたげんにつきて、すこしもかはる心はあるまじきぞかし。それがやうに彌陀の本願をもふかく信じて、いひやぶるべからず。いはんや一代の教主も付囑し給へるをや。いはんや十方の諸佛も證誠し給へるをやと意うべきにや。まことにことはりをきゝひらかざらんほどこそあらめ。ひとたびも是をきゝて、信をゝこしてんのちは、いかなる人とかくいふとも、なにかはみだるゝ心あるべきとこそおぼえ候へ。

つぎに行につゐて信をたつといふは、卽行に二つあり。一には正行。二には雜行な

りといへり。此二行につゐて、あるひは行相、あるひは得失、又ひろく義おほしといへども、しばらく略を存す。つぶさには下の起行の中にあかすべし。深心の大要をとるに是にあり。

【一】聖道をすてて淨土に歸すべきことを明す。
【上根上智】勝れたる機根(性質)の人、勝れたる智慧を持つ人。

和語燈録　卷第二

念佛往生要義抄

【一】それ念佛往生は、(二)十惡五逆をえらばず、迎接するに十聲一聲をもてす。聖道諸宗の成佛は上根上智をもととするゆへに聲聞菩薩を機とす。しかるに世すでに末法になり。人みな惡人なり。はやく修しがたき教を學せんよりは、行じやすき彌陀の名號をとなへて、このたび生死の家をいづべき也。

(三)ただしいづれの經論も、釋尊のときをき給へる經教なり。しかれば法華涅槃等の大乘經を修行して、ほとけになるになにのかたき事かあらん。それにとりてことに『法華經』は三世の諸佛もこの經によりてほとけになり、十方の如來もこの經によりて正覺をなり給ふ。しかるに『法華經』などをよみたてまつらんに、なにの不足かあらん。かやうに申す日はまことにさるべき事なれども、われらが器量はこの教にをよばざるなり。そのゆへは、法華には菩薩聲聞を機とするゆへに、われら凡夫はかなふべからずとおもふべき也。

(三)しかるに阿彌陀ほとけの本願は、末代のわれらがためにをこし給へる願なれば、利益いまの時に決定往生すべき也。わが身は女人なればとおもふ事なく、わが身は煩惱惡業の

【二】自力念佛他力念佛を明す。

【三】他力念佛を明す。

【四】自力念佛を明す。

身なればといふ事なかれ。もとより阿彌陀佛は罪惡深重の衆生の、三世の諸佛も十方の如來もすてさせ給ひたるわれらをむかへんと、ちかひ給ひける願にあひたてまつれり。往生うたがひなしとふかくをもひいれて、南無阿彌陀佛〱と申せば善人も惡人も、男子も女人も、十人は十人ながら百人は百人ながら、みな往生をとぐる也。

【二】問ていはく『稱名念佛申す人はみな往生すべしや』答ていはく『凡念佛に他力の念佛あり。自力の念佛あり。他力の念佛は往生すべし。自力の念佛は本より往生の志しにて申念佛にあらざれば、またく往生すべからず』

【三】問ていはく『その他力の樣いかむ』答ていはく『ただひとすぢに佛の本願を信じ、わが身の善惡をかへり見ず、決定往生せんとをもひて申すを他力の念佛といふ。たとへば麒麟の尾につきたる蠅の、ひとはねに千里をかけり、輪王の御ゆきにあひぬる卑夫の、一日に四天下をめぐるがごとし。これを他力と申す也。又巨なる石をふねにいれつれば、時のほどにむかひのきしにとづくがごとし。これはまたく石のちからにあらず。ふねのちからなり。それがやうにわれらがちからにてはなし。阿彌陀ほとけの御ちから也。これすなはち他力なり』

【四】問ていはく『自力といふはいかん』答ていはく『煩惱具足してわろき身をもて煩惱を斷じ、さとりをあらはして成佛すと意えて、晝夜にはげめども、無始より貪瞋具足の身なるがゆへに、ながく煩惱を斷ずる事かたきなり。かく斷じがたき無明煩惱を、三毒具足の

【五】聖人の念佛と在家の念佛とを明す。

心にて斷ぜんとする事、たとへば須彌を針にてくだき、大海を芥子のひさくにてくみつくさんがごとし。たとひはりにて須彌をくだき、芥子のひさくにて大海をくみつくすとも。われらが惡業煩惱の心にては、曠劫多生をふるとも、ほとけにならん事かたし。そのゆへは、念々歩々にをもひと思ふ事は、三途八難の業。ねてもさめても案じと案ずる事は、六趣四生のきづな也。かゝる身にては、いかでか修行學道をして成佛はすべきや。これを自力とは申す也。』

【五】問ていはく『聖人の申す念佛と。在家のものゝ申す念佛と勝劣いかむ』答ていはく『(一)聖人の念佛と世間者の念佛と、功德ひとしくして、またくかはりめあるべからず。

(二)疑ていはく「この條なを不審也。そのゆへは、女人にもちかづかず、不淨の食もせずして、申さん念佛はたとかるべし。朝夕に女境にむつれ、酒をのみ不淨食をして申さん念佛は、さだめておとるべし。功德いかでかひとしかるべきや」答ていはく「功德ひとしくして勝劣あるべからず。」そのゆへは、阿彌陀佛の本願のゆへをしらざるものゝ、かかるおかしきうたがひをばするなり。しかるゆへは、むかし阿彌陀佛、二百一十億の諸佛の淨土の、莊嚴寶樂等の誓願利益にいたるまで、世自在王佛の御まへにしてこれを見給ふに、われらごときの妄想顚倒の凡夫の淨土にむまるべき法のなき也。されば善導和尚釋していはく「一切の佛土皆嚴淨にして凡夫の亂想生じ難きを恐る」といへり。この文の心は一切の佛土はたへなれども亂想の凡夫はむまるゝ事なしと釋し給ふ也。をの〳〵の御身をはか

【三途八難】迷の世界の苦を云ふ。三途は火塗（地獄）血塗（畜生）刀塗（餓鬼）の三。八難は佛を見ず法を聞かざる難。在地獄、在畜生、在餓鬼（以上は苦劇しく法をきくを得ず）在長壽天、在北倶盧洲（以上は樂多くして法を求めず）盲聾瘖瘂、世智辯聰（世智ありて法をきかず）生佛前佛後。

【五辛】五種の辛味ある野菜、韮、薤、葱、蒜、薑。

らひて御らんずべきなり。そのゆへは、目には經をよみ、身には佛を禮拜すれども、心には思はし事のみおもはれて、一時もとどまる事なし。しかれば我らが身をもて、いかでか生死をはなるべき。かかりけるほどに曠劫よりこのかた三途八難をすみかとして、焔燃猛火に身をこがしていづる期なかりける也。かなしきかなや。善心はとし〴〵にしたがひてうすくなり。惡心は日々にしたがひていよ〳〵まさる。されば古人のいへる事あり。「煩惱は身にそへる影、さらむとすれどもさらず。菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられず」と。

（三）このゆへに阿彌陀ほとけ、五劫に思惟してたて給ひし深重の本願と申すは、善惡をへだてず、持戒破戒をきらはず、在家出家をもえらばず、有智無智をも論ぜず、平等の大悲をおこしてほとけになり給ひたれば、ただふかく本願を信じて念佛申さば、一念須臾のあひだに、阿彌陀ほとけの來迎にあづかるべき也。

（四）むまれてよりこのかた女人を目に見ず、酒肉五辛ながく斷じて、五戒十戒等かたくたもちてやむ事なき聖人も、念佛に不足のをもひなして、餘行をまじえ申さんにをきては、佛の來迎にあづからん事、千人が中に一人。萬人が中に五三人などや候はんずらん。それも善導和尚は千中無一とをほせられて候へば、いかがあるべく候はんとをぼえ候。をよそ阿彌陀佛の本願と申す事はやうもなく、わが心をすませとにもあらず、不淨の身をきよめよとにもあらず、ただねてもさめても、ひとすぢに御名をとなふる人をば、臨終にはかなら

【六】淨心の念佛と妄心の念佛とを明す。

【七】一聲の念佛と十聲の念佛とを明す。

ずきたりてむかへ給ふなるものをといふ心に住して申せば、一期のをはりには、佛の來迎にあづからん事うたがひあるべからず。わが身は女人なれば、又在家のものなればといふ事なく往生は一定とおぼしめすべき也。』

【六】問ていはく『心のすむ時の念佛と、妄心の中の念佛と、その勝劣いかむ』答ていはく。『その功德ひとしくしてあへて差別なし。疑ていはく「この條なほ不審なり。そのゆへは、心のすむ時の念佛は、餘念もなく一向極樂世界の事のみおもはれ、彌陀の本願のみ案ぜらるるがゆへに、まじふるものなければ、淸淨の念佛なり。心の散亂する時は、三業不調にして、口には名號をとなへ、手には念珠をまはすばかりにてはこれ不淨の念佛也。いかでかひとしるべき」答ていはく「このうたがひをなすは、いまだ本願のゆへをしらざるなり。阿彌陀佛は惡業の衆生をすくはんために、生死の大海に弘誓のふねをうかべ給へる也。たとへばおもき石、かろきあさからをひとつふねにいれて、むかひのきしにとづくがごとし。本願の殊勝なることは、いかなる衆生も、たゞ名號をとなふるほかは、別の事なき也」

【七】問ていはく『一聲の念佛と、十聲の念佛と、功德の勝劣いかむ』答ていはく『ただおなじ事也。疑ていはく「この事又不審なり。そのゆへは、一聲十聲すでにかずの多少あり。いかでかひとしかるべきや」答「一聲十聲と申す事は最後の時の事なり。死する時一聲申すものも往生す。十聲申すものも往生すといふ事なり。往生だにもひとしくば、功

【八】最後の念佛と平生の念佛とを明す。

【九】平生臨終の益を明す。

德なんぞ劣ならん。本願の文に「もし我佛を得たらんに十方の衆生、至心に信樂し、我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに若し生ぜずば正覺をとらじ」この文の意は、法藏比丘、われほとけになりたらん時、十方の衆生極樂にむまれんとおもひて、南無阿彌陀佛ともしは十聲、もしは一聲申さん衆生をむかへずば、ほとけにならじとちかひ給ふ。かるがゆへにかずの多少を論ぜず、往生の得分はをなじき也。本願の文顯然なり。なんぞうたがはんや。』

【八】問ていはく『最後の念佛と、平生の念佛といづれがすぐれたるや』答ていはく『ただをなじ事也。そのゆへは、平生の念佛、臨終の念佛とてなんのかはりめかあらん。平生の念佛の死ぬれば、臨終の念佛となり、臨終の念佛ののぶれば、平生の念佛となる也。難じていはく「最後の一念は百年の業にすぐれたりと見えたり」いかむ』答ていはく「このうたがひは、この文をしらざる難なり。いきのとどまる時の一念は、惡業こはくして善業にすぐれたり。善業こはくして惡業にすぐれたりといふ事也。ただしこの申す人は念佛者にてはなし。もとより惡人の沙汰をいふ事也。平生より念佛申て往生をねがふ人の事をば、ともかくもさらに沙汰にをよばぬ事也』』

【九】問ていはく『攝取の益をかうぶる事は、平生か臨終か。いかむ』答ていはく『平生の時なり。そのゆへは、往生の心まことにて、わが身をうたがふ事なくて來迎をまつ人は、この三心具足の念佛申す人なり。この三心具足しぬれば、かならず極樂にうまるといふ事は『觀經』の說なり。

【一〇】智者の念佛と愚者の念佛とを明す。

【一一】念佛をすすむ。

かかる心ざしある人を、阿彌陀佛は八萬四千の光明をはなちててらし給ふ也。平生の時てらしはじめて、最後まで捨給はぬなり。かるがゆへに不捨の誓約と申す也。』

【一〇】問ていはく『智者の念佛と愚者の念佛と、いづれも差別なしや』答ていはく『ほとけの本願にとつかは、すこしの差別もなし。そのゆへは阿彌陀佛ほとけになり給はざりしむかし、十方の衆生わが名をとなへば、乃至十聲までもむかへんと、ちかひをたて給ひけるは、智者をえらび、愚者をすてんとにはあらず。されば『五會法事讃』にいはく「多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず。但心を廻して多く念佛せしめば、能く瓦礫をして變じて金とならしむ」この文の意は、智者も愚者も、持戒も破戒も、ただ念佛申さばみな往生すといふ事也。此心に住して、わが身の善惡をかへりみず、ほとけの本願をたのみて念佛申すべき也。

【一一】此たび輪廻のきづなを、はなるゝ事、念佛にすぎたる事はあるべからず。このかきをきたるものをみて、そしり謗ぜんともがらも、かならず九品のうてなに緣をむすび、たがひに順逆の緣むなしからずして、一佛淨土のともたらむ。抑機をいへば、五逆重罪をえらばず、女人闡提をもすてず、行をいへば、一念十念をもてす。これによて五障三從をうらむべからず。この願をたのみ、この行をはげむべき也。念佛のちからにあらずば、善人なをむまれがたし。いはんや惡人をや。五念に五障を消し、三念に三從を滅して、一念に臨終の來迎をかうぶらんと、行住坐臥に名號をとなふべし。時處諸緣に此願をたのむべし。

【三心義】至誠心深心廻向發願心の三義を明す。

【一】廣く三心を明す。

【二】至誠心を明す。

あなかしこ〳〵。』

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛。

三心義

『觀無量壽經』には【一】「若し衆生ありて、彼の國に生ぜんと願じ、三種の心を發せば、すなはち往生す。何等をか三となす。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具するものは必ず彼の國に生ず」といへり『禮讃』には、三心を釋しをはりて「三心を具するもの必ず往生を得るなり。若し一心もかきぬれば即ち生ずることを得ず」といへり。しかれば三心を具すべきなり。

【二】一に至誠心といふは、眞實の心なり。身に禮拜を行じ、くちに名號をとなへ、心に相好をおもふ、みな眞實をもちひよ。すべてこれをいふに、穢土をいとひ淨土をねがひて、もろ〳〵の行業を修せんもの、みな眞實をもてつとむべし。是を勤修せんに、ほかには賢善精進の相を現じ、うちには愚惡懈怠の心をいだきて修するところの行業は、日夜十二時にひまなく、これを行ずとも往生をえず。ほかには愚惡懈怠のかたちをあらはし、うちには賢善精進のをもひに住してこれを修行するもの、一時一念なりとも、その行むなしからずかならず往生をう。これを至誠心となづく。

【三】深心を明す。

【三】二に深心といふは、ふかく信ずる心なり。是につゐて又二あり。(一)一にはわれはこれ罪惡不善の身、無始よりこのかた六道に輪廻して、出離の緣なしと信じ、二には罪人なりといへどもほとけの願力をもて强緣として、かならず往生を得と信ず。これにつゐて又二あり。一には人につきて信をたつ。二には行につきて信をたつ。

(二)人につきて信をたつといふは、出離生死のみちをほしといへども、大きにわかちて二あり。一には聖道門、二には淨土門なり。聖道門といふは、此娑婆世界にて煩惱を斷じ、菩提を證するみちなり。淨土門といふは、この娑婆世界をいとひ、かの極樂をねがひて、善根を修する門なり。二門ありといへども、聖道門をさしをきて淨土門に歸すべし。

しかるにもし人ありてをほく經論をひきて、罪惡の凡夫往生する事をえじといはん。このことばをききて退心をなさず。いよ〳〵信心をますべし。ゆへいかんとなれば、罪障の凡夫の淨土に往生すといふ事は、これ釋尊の誠言也。凡夫の妄執にあらず。われすでに佛の言を信じてふかく淨土を欣求す。たとひ諸佛菩薩きたりて、罪障の凡夫淨土にむまるべからずとの給ふとも、これを信ずべからず。ゆへいかんとなれば、菩薩は佛の弟子なり。もしまことにこれ菩薩ならば、佛說をそむくべからず。しかるにすでに佛說にたがひて、往生をえずとの給ふ。まことの菩薩にあらず。又佛はこれ同體の大悲なり。まことに佛ならば、釋迦の說にたがふべからず。しかればすなはち『阿彌陀經』に「一日七日彌陀の名號を念じて、かならずむまるゝ事をう」ととけり。これを六方恒沙の諸佛、釋迦佛におな

じく、これを證誠し給へり。しかるにいま釋迦の說にそむきて往生せずといふ。かるがゆへにしりぬ。これまことのほとけにあらず。天魔の變化なり。この義をもてのゆへに、佛菩薩の說なりとも信ずべからず。いかにいはんや餘說をや。

なんぢが執するところの經論大小ことなりといへども、みな佛果を期する穢土の修行、聖道門の意なり。われらが修するところは、正雜不同なれども、ともに極樂をねがふ。往生の行業。淨土門の意なり。聖道門はこれ汝が有緣の行。淨土門はこれわれらが有緣の行。これをもてかれを難ずべからず。かれをもてこれを難ずべからず。かくのごとく信ずるものは、就人立信となづく。

（三）つぎに行につきて信をたつといふは、往生極樂の行まち〳〵なりといへども二種をばいです。一には正行。二には雜行也。正行といふは、阿彌陀佛にをきて、したしき行なり。雜行といふは阿彌陀佛にをきてうとき行なり。まづ正行といふは、是につきて五あり。一にはいはく讀誦、いはゆる三部經をよむなり。二には觀察、いはゆる極樂の依正を觀ずる也。三には禮拜、いはゆる阿彌陀佛を禮拜する也。四には稱名、いはゆる彌陀の名號を稱する也。五には讃嘆供養。いはゆる阿彌陀佛を讃嘆し供養する也、この五をもてあはせて二とす。一には一心にもはら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近をとはず。念念にすてざる、これを正定業となづく。かのほとけの願に順ずるがゆへに。二にはさきの五が中に、第四の稱名をのぞひてほかの禮拜讀誦等をみな助業となづく。

【四】廻向發願心を明す。

【七箇條起請文】念佛往生の要法を明すに七箇條を以てす。故に此名あり。但し文中起請の意なきを以て、或は後人誤つて此名を附し以て書題とせるものに非ずやとの說あり。

【一】往生淨土の要法を明す。

つぎに雜行といふは、さきの五種の正助二業をのぞきて已外のもろ〱の讀誦大乘發菩提心持戒勸進等の一切の行なり。此正雜二行につきて五種の得失あり。一には親疎對。いはゆる正行は阿彌陀佛にしたしく雜行はうとし。二には近遠對。いはゆる正行は阿彌陀佛にちかく、雜行は阿彌陀佛にとをし。三には有間無間對。いはゆる正行はおもひを阿彌陀佛にかくるに無間也。雜行は思をかくるに間斷あり。四に廻向不廻向對。いはゆる正行は廻向をもちひざれどもをのづから往生の業となる。雜行は廻向せざる時は往生の業とならず。五には純雜對。いはゆる正行は純極樂の業也。雜行はしからず。十方の淨土乃至人天に通ずる業也。かくのごとく信ずるを就行立信となづく。

【四】三に廻向發願心といふは、過去をよび今生の身口意業に、修するところの一切の善根を眞實の心をもて極樂に廻向して往生を欣求する也。これを廻向發願心となづく。この三心を具しぬれば、かならず往生する也。

七箇條起請文

【一】をよそ往生淨土の人の要法は、おほしといへども、淨土宗の大事は、三心の法門にある也。「もし三心を具せざるものは、日夜十二時に、かうべの火をはらふがごとくにすれども、つひに往生をえず」といへり。極樂をねがはん人は、いかにもして三心のやうを心

【二】三心を明す。

えて念佛すべき也。

【二】三心といふは、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。（一）まづ至誠心といふは大師釋しての給はく「至といふは眞也。誠といふは實也」といへり。ただ眞實心を至誠心と善導はおほせられたる也。眞實といふはもろ／＼の虚假の心のなきをいふ也。虚假といふは貪瞋等の煩惱をおこして、正念をうしなふを虚假心と釋する也。すべてもろ／＼の煩惱のをこる事は、みなもと貪瞋を母として出生するなり。貪といふにつゐて喜足小欲の貪あり。不喜足大欲の貪あり。いま淨土宗に制するところは、不喜足大欲の貪煩惱也。まづ行者かやうの道理を心えて念佛すべき也。これが眞實の念佛にてある也。喜足小欲の貪はくるしからず。瞋煩惱も敬上慈下の心をやぶらずして、道理を心えんほど也。癡煩惱といふは、をろかなる心なり。此心をかしこくなすべき也。まづ生死をいとひ淨土をねがひて往生を大事といとなみてもろ／＼の家業を事とせざれば、癡煩惱なき也。少少の癡は往生のさはりにはならず。このほどに心えつれば、貪瞋等の虚假の心はうせて眞實心はやすくおこる也。これを淨土の菩提心といふなり。詮するところ、生死の報をかろしめ、念佛の一行をはげむがゆへに眞實心とはいふ也。

（二）二に深心といふは、ふかく念佛を信ずる心なり。ふかく念佛を信ずといふは、餘行なく一向に念佛になる也。もし餘行をかぬれば、深心かけたる行者といふ也。詮するところ、釋迦の淨土三部經はひとへに念佛の一行をとくと心え、彌陀の四十八願は、稱名の一行

【三】念佛と煩惱とを明す。

【四】餘佛餘敎を謗るまじきことを明す。

を本願とすと心えて、ふた心なく念佛するを、深心具足といふなり。

(三)三に廻向發願心といふは、無始よりこのかたの所作のもろ〳〵の善根を、ひとへに往生極樂といのる也。又つねに退する事なく念佛するを、廻向發願心といふなり。これは惠心の御義なり。此心ならば至誠心深心具足してのうへにつねに、念佛の數遍をなすべし。もし念佛退轉せば、廻向發願心かけたるもの也。

(四)淨土宗の人は、三心のやうをよく〳〵心えて念佛すべき也。三心の中に、ひとつもかけなば往生はかなふまじき也。三心具足しぬれば往生は無下にやすくなるなり。

【三】すべてわれらが輪廻生死のふるまひは、ただ貪瞋癡の煩惱の絆によりて也。貪瞋癡をこらば、なを惡趣へゆくべきまとひのをこりたるぞと意えて、是をとどむべき也。しかれどもいまだ煩惱具足のわれらなれば、かくは意えたれどもつねに煩惱はをこる也。をこれども煩惱をば心のまらう人とし、念佛をば心のあるじとしつれば、あながちに往生をばさへぬ也。煩惱を心のあるじとして念佛の心のまらう人とする事は、雜毒虛假の善にて往生にはきらはるゝ也。詮ずるところ、前念後念のあひだには、煩惱をまじふといふとも、かまへて南無阿彌陀佛の六字の中に、貪等の煩惱ををこすまじき也。

【四】一、われは阿彌陀佛をこそたのみたれ、念佛をこそ信じたれとて、諸佛菩薩の悲願をかろしめたてまつり、法華、般若等のめでたき經どもを、わろくおもひそしる事はゆめ〳〵あるべからず。よろづのほとけたちをそしり、もろ〳〵の聖教をうたがひそしりたらんず

るつみは、まづ阿彌陀佛の御心にかなふまじければ、念佛すとも悲願にもれん事は一定也。

【五】自力の念佛を廢し、他力の念佛を修すべきことを明す。

【五】一、つみをつくらじと身をつつしみてよからんとするは、阿彌陀ほとけの願をかろしむるにてこそあれ。又念佛をおほく申さんとて、日々に六萬遍などをくりゐたるは、他力をうたがふにてこそあれといふ事のおほくきこゆる。かやうのひが事ゆめ／＼もちふべからず。まづいづれのところにか、阿彌陀佛はつみつくれとすすめ給ひける。ひとへにわが身に惡をもとどめえず、つみのみつくりゐたるままに、かかるゆくゑほとりもなき虚言をたくみいだして、物もしらぬ男女のともがらを、すかしほらかして、罪業をすすめ、煩惱ををこさしむる事、返返天魔のたぐひなり。外道のしわざ也。往生極樂のあだかたきなりとおもふべし。又念佛のかずをおほく申すものを、自力をはげむといふ事、これ又ものもおぼえずあさましきひが事也。ただ一念二念をとなふとも、自力の心ならん人は、自力の念佛とすべし。千遍萬遍をとなふとも、百日千日よるひるはげみつとむとも、ひとへに願力をたのみ、他力をあふぎたらん人の念佛は、聲聲念々しかしながら他力の念佛にてあるべし。されば三心をこしたる人の念佛は、日々夜々時々剋々にとなふれども、しかしながら願力をあふぎ、他力をたのみたる心にてとなへゐたれば、かけてもふれても、自力の念佛とはいふべからず。

【六】三心を具足すべきことを明す。

【六】一、三心と申す事をしりたる人の念佛に、三心具足してあらん事は左右にをよばず、

【七】別時の念佛を修すべき事を明す。

つや〳〵三心の名をだにもしらぬ。無智のともがらの念佛には、よも三心は具し候はじ。三心かけば往生し候なんやと申す事、きはめたる不審にて候へども、これは阿彌陀ほとけの法藏菩薩のむかし五劫のあひだ、よるひる心をくだきて案じたて、成就させ給ひたる本願の三心なれば、あだ〳〵しくいふべき事にあらず。いかに無智ならん者もこれを具し、三心の名をしらぬものまでも、かならずそらに具せんずる樣を擇ばせ給ひたる三心なれば、阿彌陀佛をたのみたてまつりて、すこしもうたがふ心なくして、この名號をとなふれば、あみだほとけかならずわれをむかへて、極樂にゆかせ給ふときゝて、これをふかく信じて、すこしもうたがふ心なく、むかへさせ給へとおもひて念佛すれば、この心がすなはち三心具足の心にてあれば、たゞひらに信じてだにも念佛すれば、すゞろに三心はあるなり。さればこそよにあさましき一文不通のともがらのなかに、ひとすぢに念佛するものは、臨終正念にして、めでたき往生をするは、現に證據あらたなる事なれば、つゆちりもうたがふべからず、中々よくもしらぬ三心沙汰して、あしざまに心えたる人々は、臨終のわろくのみありあひたる、それにてたれ〳〵も心うべきなり。

【七】一、とき〴〵別時の念佛を修して、心をも身をもはげましとゝのへすゝむべき也。日日に六萬遍を申せば七萬遍をとなふればとて、たゞ在もいはれたる事にてはあれども、人の心ざまは、いたく日もなれ、耳もなれぬれば、いそ〳〵とすゝむ心もなく、あけくれ心いそがしき樣にてのみ、疎略になりゆく也。その心をためなをさん料に、時々別時の念佛

【八】臨終正念を期すべきことを明す。

はすべき也。しかれば善導和尚も、ねんごろにすゝめ給ひ、惠心の「往生要集」にもすゝめさせ給ひたる也。道場をもひきつくろひ、花香をもまいらせん事、ことにちからのたへむにしたがひてかざりまいらせて、わが身をもことにきよめて道場にいりて、あるひは三時あるひは六時などに念佛すべし。もし同行などあまたあらん時は、かはる〴〵いりて不斷念佛にも修すべし。かやうの事はをの〳〵ことがらにしたがひてはからふべし。さて善導のおほせられたるは、月の一日より八日にいたるまで、或は八日より十五日にいたるまで、或は十五日より二十三日にいたるまで、或は二十三日より晦日にいたるまでとおほせられたり。をの〳〵さしあはざらん時をはからひて、七日の別時をつねに修すべし。ゆめ〳〵すゞろ事ともいふものにすかされて、不善の心あるべからず。

【八】一、いかにも〳〵最後の正念を成就して、目には阿彌陀ほとけを見たてまつり、口には彌陀の名號をとなへ、心には聖衆の來迎をまちたてまつるべし。としごろ日ごろいみじく念佛の功をつみたりとも、臨終に惡縁にもあひ、あしき心もをこりぬるものならば順次の往生しはづして、一生二生なりとも、三生四生なりとも、生死のながれにしたがひてくろしからん事はくちをしき事ぞかし。されば善導和尚すゝめておほせられたる樣は「願はくば弟子等命終に臨む時乃至阿彌陀佛國に上品往生せしめたまへ」とあり。いよ〳〵臨終の正念はいのりもし、ねがふべき事也。臨終の正念をいのるは、彌陀の本願をたのまぬ者ぞなど申すは、善導には、いかほどまさりたる學生ぞとおもふべき也。あなあさまし、お

【九】常に念佛を修すべきことを明す。

【一〇】憍慢心を起すべからざることを明す。

そろし〳〵。

【九】一、念佛はつねにおこたらぬが、一定往生する事にてある也。されば善導すゝめての給はく「一たび發心已後は誓つて此生の畢るまで退轉有ることなく、唯淨土を以て期となせ」又云はく「一心に專ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる之を正定の業と名づく。彼の佛の願に順するが故に」といへり。かやうにすゝめまし〳〵たる事はあまたおほけれども、こと〴〵くにかきのせず。たとむべし、あふぐべし。さらにうたがふべからず。

【一〇】一、げに〳〵しく念佛を行じて、げに〳〵しき人になりぬれば、よろづの人を見るに、みなわが心にはをとりたり。あさましくわろければ、わが身のよきまゝには、ゆゝしき念佛者にてある物かな。たれ〳〵にもすぐれたりと思ふ也。この事をばよく〳〵意えてつゝしむべき也。世もひろし、人もおほければ、山の奥林の中にこもりゐて、人にもしられぬ念佛者の貴くめでたき、さすがにおほくあるを、わがきかずしらぬにてこそあれ。されば、われほど、の念佛者よもあらじと思ふはひが事也。大憍慢にてあれば、それをたよりにて、魔緣の付て、往生をさまたぐる也。さればわが身のいみじくて、つみをも滅し極樂へもまいらばこそあらめ、ひとへに阿彌陀佛の願力にてこそ煩惱をも罪業をもほろぼしうしなひて、かたじけなく彌陀ほとけの、てづからみづからむかへとりて、極樂へかへらせましますことなれ。さればわがちからにて往生する事ならばこそわれかしこしといふ慢心を

【一】末代の衆生は念佛往生を期すべきことを明す。

【鬪諍堅固】佛の滅後第五の五百年にして末法の世に入りて時次第に下り、諸の比丘は戒を持たず、我が法は勝れ、他の法は劣るとのしりて論爭し、鬪諍するが故にこの名あり。

ばをこさめ。若憍慢の心だにもをこりなば、たちどころに阿彌陀ほとけの願にはそむきぬるものなれば、彌陀も諸佛も護念し給はずなりぬれば、惡魔のためにもなやまさるゝ也。返々も憍慢の心をおこすべからず。あなかしこ〳〵。

念佛大意

【一】末代惡世の衆生、往生の心ざしをいださんにをきては、又他のつとめあるべからず。たゞ善導の釋につゐて、一向專修の念佛門にいるべきなり。しかるを一向に信をいたして、その門にいる人はきはめてありがたし。そのゆへにあるひは他の行に心をそめ、あるひは念佛の功德をもくせざるなるべし。つら〳〵これをおもふに、まことしく往生淨土の願、ふかき心をもはらにする人ありがたきゆへか、まづこの道理をよく〳〵意得べき也。すべて天台法相の經論聖教も、そのつとめをいたさんに、一つとしてあだなるべきにはあらず。たゞし佛道修行は、よく〳〵身をはかり、時をはかるべきなり。佛の滅後第四の五百年にだに、智惠をみがきて煩惱を斷ずる事かたく心をすまして禪定をえん事かたきがゆへに、人をほく念佛門にいりけり。すなはち、道綽善導等の、淨土宗の聖人この時の人なり。いはんやこのごろは、第五の五百年鬪諍堅固の時也。他の行法さらに成就せん事かたし。しかのみならず念佛にをきては、末法ののちなを利益あるべし。いはんやいまの世

は末法萬年のはじめ也。一念も彌陀を念ぜんに、なんぞ往生をとげざらんや。たとひわれらそのうつは物にあらずといふとも、末法のすへの衆生にはさらににるべからず。かつは又釋尊在世の時すら、即身成佛にをきては、龍女のほかはいとありがたし。たとひ又即身成佛までにあらずといふとも、この聖道門をこなひあひ給ひけん。菩薩聲聞たち、そのほかの權者ひじりたち、そののちの比丘比丘尼等、いまにいたるまで經論の學者、『法華經』の持者いくそばくぞや。これみな上根上智の人なり。こゝにわれらごときは、たとひ聖道をまなぶといふとも、かの人々にはさらにをよぶべからず。かくのごときの末代の衆生を、阿彌陀ほとけかねてさとり給ひて、五劫のあひだ思惟して、四十八願をおこし給へり。その中の第十八の願にいはく「十方の衆生、至心に信樂して、わが國にむまれんとねがひて乃至十念せんに、もしむまれずば、正覺をとらじ」とちかひ給ひて、すでに正覺をなり給へり。これを釋尊のとき給へる經、すなはち觀無量壽經等の三部經なり。しかればすなはち今日の我等ごときの衆生は、もはら念佛を行じて往生を期すべきものなり。たとひ惡業の衆生等、彌陀のちかひばかりに、なを信をいたさずといふとも、釋迦のこれを一々にとき給へる三部經、あにひとことばもむなしからんや。そのうへ又十方諸佛の證誠もただこの經に見えたり。他の行にをきては、かくのごときの證誠見えず。しかれば時もすぎ、身もこらふまじからん。禪定智惠を修せんよりは、利益現在して、しかもそこばくのほとけたち、證誠し給へる彌陀の名號を稱念すべき也。

【二】淨土門の深くして勝るることを明す。

【密嚴】大乘密嚴經に說く密嚴世界を云ふ。同經に云く「密嚴世界は諸佛の國に超え、星宿およぴ日月を遠離して無爲性の如く、微塵に同じからず」と。

【華嚴】蓮華藏世界を云ふ。毘盧遮那如來の淨土、華嚴の十佛攝化の境界なり。

【三】念佛の功德を明す。

【四】專修雜修を明す。

【二】又後世者の中に「極樂はあさく、彌陀はくだれり。期するところ密嚴華藏の世界なり」と、心をかくる人も侍るにや。それはなはだおほけなし。かの土は斷無明の菩薩のほかはいる事なし。又一向專修の念佛門にいりて、日別は三萬遍もしは五萬遍、六萬遍、乃至十萬遍など稱ふといふとも、これをつとめをはりなんのち、年來受持讀誦の功つもりたる諸經をもよみたてまつらでは、つみになるべきかと不審をなすともがらもあり。それはいかでかつみになるべきにては侍るべき。末代の衆生、その行成就しがたきによりて、まづ彌陀の願力に乘じて、念佛往生をとげてのち、淨土にて阿彌陀如來、觀音勢至にあひたてまつりて、もろ〳〵の聖教をも學し、さとりをもひらくべきなり。

【三】又末代の衆生念佛をもはらにすべき事、「その釋おほかる中に、『觀經の疏』の第三に、善導釋しての給はく、「自餘の衆行は是善と名くと雖も、若し念佛に比ぶれば、全く比校に非るなり。この故に諸經中處處に廣く念佛の功能を讃ず。『無量壽經』四十八願の中の如き、唯專らに彌陀の名號を念じて生ずることを得ることを明す。又十方恒沙の諸佛の證誠は虚しからざるなり。又此の經の定散の文中唯、專らに名號を念じて生ずることを得ることを標す。此例一に非ず。廣く念佛三昧を顯し竟んぬ」とあり。

【四】又善導の『往生禮讚』の中の專修雜修の文等にも「雜修のものは往生をうる事千が中に一二なをかたし。專修のものは百は即ち百ながらむまる」といへり。これらは何事もその門にいりなんには、一向にもはら他の心あるべからざるゆへなり。たとへば今生にも主

【五】一向專修には三心を具すべきことを明す。

君につかへ、人をあひたのむみち、他人に心ざしをわくると一向にあひたのむと、ひとしからざる事也。たゞし家ゆたかにして、のり物僮僕もかなひ、面々に心ざしをいたすちからもたへたるともがらは、かた〴〵に心ざしをわくといへども、その功むなしからず。かくのごときのちからにたへざるものは、所々をかぬるあひだ、身はつかるといへども、そのしるしをえがたし。一向に人一人をたのめば、まづしき者もかならずそのあはれみをうる也。すなはち末代惡世の無智の衆生はかのまづしき者のごとし。むかしの權者聖人は、家ゆたかなる衆生のごとし。しかれば無智の身をもて、智者の行をまなばんにをきては、貧しきものゝ得人をまなばんがごとく也。又なをたとへをとらば、たかき山の人もかよふべくもなからん。巖石を、ちからたへざらんもの、石のかど木の根にとりすがりてのぼらんとはげまんは、雜行を修して往生をねがはんがごとくなり。かの山のみねより、つよきつなをおろしたらんにすがりてのぼらんは、彌陀の願力をふかく信じて、一向に念佛をつとめて往生せんがごとくなるべし。

【五】又一向專修には、三心はことにをのづから具足すべき也。(一)三心といふは、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。至誠心といふは餘佛を禮せず彌陀を禮し、餘行を修せず彌陀を念じて、もはらにしてもはらならしむる也。深心といふは、彌陀の本願をふかく信じてわが身は無始よりこのかた罪惡生死の凡夫として生死をまぬかるべきみちなきを、彌陀の本願不可思議なるによりて、かの名號は一向に稱念して、うたがひをなす心な

ければ、一念のあひだに八十億劫の生死のつみを滅して、最後臨終の時、かならず彌陀の來迎にあづかるなり。廻向發願心といふは、自他の行を眞實の心の中に廻向發願する也。

(二)この三心一つもかけぬれば往生をとげがたし。しかれば他の行をまじへんによりて、罪になるべからずといへども、そのこゝろをはかり見るに、なほ念佛往生を不定におもひて、いさゝかのうたがひをのこして、他事をくはふるにて侍るべき也。又この三心の中に、至誠心をやう／＼に心えて、ことに誠を至すべきことを、かたく申しなすともがらも侍るにや。それは彌陀の本願の本意にもたがひて、信心はかけぬるにてあるべき也。いかに誠を至すといふともがらも、造惡の凡夫の身の、己がちからにて往生を成就せんほどのことはいかでか侍るべき。ただ本願の不思議にて往生はし侍るべけれ。さやうに誠もふかくよからん人のためには、かくあながちに不思議の本願をおこし給ふべきにあらず。この道理を存して、まことしく專修念佛の一行にいる人はよにありがたき也。されば曇鸞法師は智惠高遠なりといへども、四論の講説をすてゝひとへに往生の業を修して、一向にもはら彌陀を念じ、相續無間にして現に往生し給へり。道綽もまた講説をやめて念佛を修し、善導は雜修をきらひて專修をつとめ給ひき。又道綽禪師のすすめによりて并州の三縣の人、七歳已後一向に念佛を修せしといへり。しかれば、わが朝の末法の衆生、なんぞあながちに雜修をこのまむや。たゞすみやかに彌陀如來の願、釋迦如來の說、道綽善導の釋をまなぶべし。雜修をして極樂の果を不定にせんよりは、專修の業を行じて往生ののぞみを決定すべ

きなり。

(三)かの道綽善導等は、念佛門の人々なれば左右にをよぶべからず。法相宗にをきても、慈恩大師の『西方要決』にいはく、「末法萬年餘經悉く滅するに、彌陀の一教のみ物を利して偏へに增す」と釋し給へり。又おなじき書にいはく「三空九斷の文、十地五修の教、生期分に促り死路運ぶに非ず。如かず、多聞の廣業を息め、念佛の單修を專らにす」といへり。しかのみならず又『大聖竹林寺の記』にいはく、五臺山竹林寺の大講堂の中にして、普賢文殊東西に對座して、もろ〳〵の衆生のために妙法をとき給ふ時、法照禪師ひざまづきて文殊に問たてまつりき。「未來惡世の凡夫いづれの法をおこなひてか、ながく三界をいでて淨土にむまるゝ事をうべき」と。文殊こたへての給はく「往生淨土のはかりごと、彌陀の名號にすぎたるはなく、頓證菩提のみち、たゞ稱念の一門にあり。これによて釋迦一代の聖教に、おほくほむるところみな彌陀にあり。いかにいはんや未來惡世の凡夫をや」とこたへ給へり。かくのごときの要文等智者たちのをしへをみても、なを信心なくして、うけがたき人界に生れて、ゆきやすき淨土にいらざらん事、後悔なに事かこれにしかんや。

【六】しかるに當世專修念佛の行者にをゐて、もはら難をくはへてあざけりをなすともがら、おほくきこゆるにや。(二)これ又むかしの權者たち、かねてまづさとりしり給へる事也。善導の法事讃にいはく「世尊の說法、時將に了りなんとするとき、慇懃に彌陀の名を付屬す。

【三空九斷】此文は西方要決の末尾に出づ。されど取意にして文辭稍異る。

【三空】我空、法空、倶空（我法倶空）の三。

【九斷】九惑を斷ずるを名けて九斷と云ふ。

【十地】菩薩修行の階位、五十二位の中第四十一位より第五十位まで。修行すすみて動ぜず他を化益する位なり。

【五修】五重唯識をさす。

【五臺山】支那山西省に在り。古來佛教の靈山として名高し。

【竹林寺】唐の太宗太曆二年法照禪師の建創にかかる寺。

【六】念佛の謗難を廢して易往の念佛を明す。

【生盲闡提】佛の正法を疑ひ謗る者。生盲は生れつきの盲、闡提は一闡提（Icchantika）の略にて本來信不具の人を云ふ。

【忉利都率】忉利天と都率天のこと。

【慈尊】彌勒菩薩をさすマイトレーア（Maitreya）慈氏と譯す。都率天に在り。釋尊の滅後五十六億七千萬年の後この世に出でて衆生を化益すと云ふ。

【大通結緣の人】これは法華經に出づ。大通とは大通智勝佛のこと。三千塵點劫の昔出世して佛となる。その時、阿閦、彌陀、釋迦等の十六佛は在俗の王子なり。佛の法華經を說き給ふをきゝて信心領解して佛緣を結びしなり。

五濁增の時、多く疑謗し、道俗相嫌ひて、聞くことを用ゐず、修行することあるを見ては瞋毒を起し、方便破壞して、競ひて怨を生ず。かくの如きの生盲闡提の輩、頓敎を毀滅して永く沈淪す。大地微塵劫を超過すとも、未だ三途の身を離るゝことを得べからず。大衆同心に皆所有の破法罪の因緣を懺悔せよ」と云々

(二)又「平等覺經」にいはく「もし善男子善女人ありて、かくのごときらの淨土の法門をとくをきゝて、悲喜をなして身の毛いよだちてぬきいだすごとくなるは、しるべしこの人過去にすでに佛道をなしてきたれる也。もし又これをきくといふとも、すべて信樂せざらんにをきては、しるべし、この人ははじめて三惡道の中よりきたれる也」しかればかくのごときの謗難のともがらは、左右なき罪人のよしをしりて、論談にをよぶべからざる事也。

(三)又十善かたくたもたずして、忉利都率をねがはんは、きはめてかなひがたし。極樂は五逆のものも念佛によりてむまる。いはんや十惡にをいてはさはりとなるべからず。又慈尊の出世を期せんにも、五十六億七千萬歲いとまちどを也。いまだしらず、他方の淨土そのところ〴〵にかくのごときの本願あることを。極樂は彌陀の願力はなはだふかし。なんぞほかをもとむべき。

(四)又このたび佛法に緣をむすびて、三生四生に得脫せんとのぞみをかくるともがらあり。この願きはめて不定也。大通結緣の人、信樂懺愧のころものうらに一乘無價の玉をかけながら、隔生卽忘して三千塵點があひだ、六趣に輪廻せしにあらずや、たとひ又三生四生に

【一乘無價】 法華經授記品に曰く「人あり親友の家に至り酒に醉ひて臥せり。是時親友官事ありて當に行かんとし、無價の寶珠を以て其の衣裏に繋けて之に與へて去る。其人醉臥して都て覺知せず。起き已りて遊行して他の國に到る。衣食の爲の故に勤力艱難せり。後に於て親友此の人に過ひて、是の言を作す。咄なる哉。何ぞ衣食の爲に是の如くなる。我昔汝をして安樂を得しめんと欲して其年日月に於て無價の寶珠を以て汝が衣裏に繋ぐ。故に今現に在り。而るに汝知らず。汝今より此寶珠を以て常に意の如く乏くる所なからしむべし」と。法華一乘の思想を譬へしものなり。

必定得脫すべきにても、それをまちつけん輪廻のあひだのくるしみ、いとたへがたくまちどをなるべし。

【七】こゝにわれらこのたびはじめて人界の生をうけたるにもあらじ。(一)世々生々をへて、如來の教化にも、菩薩の弘經にも、いくばくかあひたてまつりけん。たゞ不信にして教化にもれきたれるなるべし。三世の諸佛十方の菩薩思へばみなこれむかしのとも也。釋迦も五百塵點のさき、彌陀も十劫成道のさきは、かたじけなく父母師弟ともたがひになり給ひけん。ほとけは前佛の教をうけ、善知識のをしへを信じて、はやく發心修行し給ひて、成佛してひさしくなり給にける。われらは信心おろかなるゆへに、いまに生死にとゞまれるなるべし。

(二)過去の輪轉をおもへば、未來も又かくのごとし。たとひ二乘の心をばをこすと云ども、菩提心をばをこしがたし。こゝをもて如來勝方便をたれて他力往生の法を教へ給へり。濁世の衆生自力をはげまさんには、百千萬劫難行苦行をいたすといふとも、その勤をよぶところにあらず。

(三)又かの聖道門は、よく清淨にしてそのうつはものにたれらん人のつとむべき行也。懈怠不信にしては中々行せざらんよりもつみとなるかたもありぬべし。念佛門にをいては、行住坐臥、ねてもさめても持念するにそのたよりありてとがなく、そのうつはものをきらはず。こと〲く往生の因となる事うたがひなし。されば

かの佛因中に弘誓を立つ
名を聞きて我を念ずれば總て來迎す
貧窮と富貴とを簡ばず
下智と高才とを簡ばず
多聞と持淨戒とを簡ばず
破戒と罪根の深きとを簡ばず
但心を廻して多く念佛せしめば
能く瓦礫をして變じて金とならしむ

といへり。

(四)又いみじき經論聖教も、最後臨終の時に至ては、智者といへどもその文を暗誦することあたはず。念佛にをいては、いのちをきはむるにいたるまで、稱念するに、そのわづらひなし。

(五)又諸のほとけの誓願のためしをひかんにも、藥師の十二の誓願には、不取正覺の願なく、千手の願は不取正覺とちかひ給へども、いまだ正覺をなり給はず。彌陀は不取正覺の願をこして、正覺をなりてすでに十劫を經給へり。かくのごときのちかひに信をいたさざらん人は、又他の法門をも信仰するにをよばず。しかれば返々も一向專修の念佛に信をいたして他の心なく、日夜朝暮行住坐臥にをこたる事なく、稱念すべき也。專修念佛をい

【三千塵點のあひだ】極めて永き間を云ふ。普通三千塵點劫と云ふ三千大千世界のあらゆるものを磨して墨となし、その一點づゝを一千國土毎に下して墨汁の盡きたる時、今迄に經過せしすべての世界を微塵にくだき、その一塵を一劫として數へたる總數を云ふ。

【七】自力をすてて念佛に歸すべきことを明す。

【かの佛の因中】五會法事讚の文。

【藥師】佛名。べーシャヂュヤグル(Bhesajyaguru)具には藥師瑠璃光と云ひ、東方淨瑠璃國に住する教主。十二の誓願を發して衆生の病患を救ひ、無明の宿痾を治す。

【千手】千手觀音のこと。二十七面千手千眼ありて衆生救濟を專らにす。

たすともがら、當世にも往生をとぐるきこえそのかずおほし。雜修の人にをいてはそのきこえきはめてありがたし。そも〳〵これを見聞ても、なをよこさまのひがゐんにいりて、物難せんとおもはんともがらは、さだめていよ〳〵いきどをりをなして、しからばむかしよりほとけのときをき給へる經論聖教、みなもて無益のいたづら物にてうせなんとするにこそなどあざけり申さんずらん。それは天台法相の本寺本山に修學をいとなみて名をもあげ、おほやけにもつかへて官位をものぞまんとおもはんにをいては左右にをよぶべからず。又上根利智の人はそのかぎりにあらず。この心をえてよく了簡する人はあやまりても聖道門をことにをもくするゆへと存ずべき也。

（六）しかるをなを念佛にあひかねてつとめをいたさん事は、聖道門を既に念佛の助行に用べきか、その條こそ返々聖道門をうしなふにては侍るめれ。たゞこの念佛門は、返々も他の心なく後世を思はんともがらの、よしなき僻胤にをもむきて、時をも身をもはからず、雜行を修して、このたびたま〳〵うけがたき人界にむまれて、さばかりあひがたき彌陀のちかひをすてゝ、復三途の舊里にかへりて、生死に輪轉して、多百千劫をへんかなしさを思ひしらぬ人のために申にて候也。さらば諸宗のいきどおりおもふべき事にはあらざる也。

【浄土宗略抄】この書は浄土宗の大要を明す。了恵上人の註にいはく「この書はかまくらの二位の禪尼の請によつてしるしてしるし進ぜらるゝ書也」と。

【一】廣く淨土に生ずべきことを明す。

【二】聖道淨土二門の教相を明す。

浄土宗略抄

【一】このたび生死をはなるゝみち、浄土にむまるゝにすぎたるはなし。浄土にむまるゝをこなひ、念佛にすぎたるはなし。

【二】おほよそうき世をいでて佛道にいるにおほくの門ありといへども、おほきにわかちて二門を出す。すなはち聖道門と浄土門と也。はじめに聖道門といは、此娑婆世界にありながら、まどひをたちさとりをひらく道也。これにつきて大乘の聖道あり、小乘の聖道あり。大乘に又二あり。すなはち佛乘と菩薩乘と也。小乘に又二あり。聲聞乘と緣覺乘と也。これらを總じて四乘となづく。ただしこれらはみな、このころのわれらが身にたへたる事にあらず。このゆへに道綽禪師は「聖道の一種は今時に證しがたし」との給へり。さればをの／＼のをこなふやうを申して詮なし。ただ聖道門は聞とをくしてさとりがたく、まどひやすくしてわが分にはおもひよらぬみちなりとおもひはなつべき也。

【三】つぎに浄土門といは、この娑婆世界をいとひすてゝいそぎて極楽にむまるゝ也。かの國にむまるゝ事は阿彌陀佛のちかひにて人の善悪をえらばず、ただほとけのちかひをたのみたのまざるによる也。このゆへに道綽は「浄土の一門のみありて通入すべきみちなり」とのたまへり。さればこのごろ生死をはなれんと思はむ人は、證しがたき聖道をすてゝ、ゆ

【三】難行易行二道の教相を明す。

きやすき淨土をねがふべき也。

【三】この聖道淨土をば難行道易行道となづけたり。(一)たとへをとりてこれをいふに、難行道はけはしきみちをかちにてゆくがごとし。易行道は海路をふねにのりてゆくがごとしといへり。あしなえ目しゐたらん人は、かかるみちにはむかふべからず。ただふねにのりてのみむかひのきしにはつくなり。しかるにこのごろのわれらは智恵のまなこしゐ、行法のあしなへたるともがら也。聖道難行のけはしきみちには、總じてのぞみをたつべし。ただ彌陀の本願のふねにのりて、生死のうみをわたり、極樂のきしにつくべき也。いまこのふねは、すなはち彌陀の本願にたとふる也。

(二)その本願といは、彌陀のむかしはじめて道心をこして、國王のくらゐをすてゝ出家して、ほとけになりて衆生をすくはんとおぼしめしゝ時、淨土をまうけむために、四十八願ををこし給ひし中に、第十八の願にいはく「もしわれほとけにならんに、十方の衆生、わがくににむまれんとねがひて、わが名號をとなふる事、下十聲にいたるまでわが願力に乘じて、もしむまれずば、われほとけにならじ」とちかひ給ひて、その願をこなひあらはして、いますでにほとけになりて十劫を經給へり。されば善導の釋には「かのほとけいま現に世にましまして成佛し給へり。まさにしるべし、本誓重願むなしからず、衆生稱念すれば、かならず往生する事を得」との給へり。このことはりをおもふに、彌陀の本願を信じて念佛申さん人は、往生うたがふべからず。よく〱このことはりを思ひときて、いかさ

【四】淨土の安心起行を明す。

【五】淨土の安心を明す。

【六】安心の中至誠心を明す。

まにもまづ阿彌陀佛のちかひをたのみて、ひとすぢに念佛を申して、ことさとりの人の、とかくいひさまたげむにつきて、ほとけのちかひをうたがふ心ゆめ〳〵あるべからず。

(三)かやうに心えて、さきの聖道門は、わが分にあらずと思ひすてゝ、この淨土門にいりて、ひとすぢにほとけのちかひをあふぎて、名號をとなふるを、淨土門の行者とは申す也。これを聖道淨土の二門と申すなり。

【四】つぎに淨土門にいりてをこなふべき行につきて申さば心と行と相應すべき也。すなはち安心起行となづく。

【五】その安心といは、心づかひのありさま也。すなはち「觀無量壽經」に説ていはく「もし衆生ありて、かのくににむまれんと願ずるものは、三種の心をこして、すなはち往生すべし。何等をか三とする。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。三心を具するものは、かならずかのくににむまる」といへり。

【六】善導和尚この三心を釋しての給はく「はじめの至誠心とは、至といは、眞也。誠とは實也。一切衆生の身口意業に修せんところの解行、かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとをもふ。外には賢善精進の相を現じて、内には虚假をいだく事を得ざれ。又内外明闇をきらはず、かならず眞實をもちゐるがゆへに至誠心となづく」といへり。ゆへに至誠心とかかれたるは、すなはち眞實の心を云なり。眞實といふは、身にふるまひ口にいひ心に思はん事も、内むなしくして外をかざる心なきをいふなり。詮じてはまことに穢土を

【七】安心の中深心を明す。

いとひ淨土をねがひて、外相と內心と相應すべき也。ほかにはかしこき相を現じて、うちには惡をつくり、外には精進の相を現じて、內には懈怠なる事なかれといふ意也。かるがゆへにほかには賢善精進の相を現じて、うちには虛假をいだく事なかれといへり。念佛を申さんにつゐて、人目には六萬七萬申すと披露してまことにはさ程も申さずや。又人のみるおりはたうとげにして、念佛申すよしをみえ、人もみぬところにては念佛申さずなどするやうなる心ばへ也。さればとて、わろからん事をもほかにあらはさんがよかるべき事にてはなし。ただ詮ずるところは、まめやかにほとけの御意にかなはん事をおもひて、內にまことをこして、外相をば機嫌にしたがふべき也。機嫌にしたがふがよき事なればとて、やがて內心のまことをもやぶるゝまでふるまはゞ、又至誠心かけたる心になりぬべし。たゞうちの心をまことにて、ほかをばとてもかくてもあるべき也。かるがゆへに至誠心となづく。

【七】二に深心といは、すなはち善導釋しての給はく「深心といは、ふかく信ずる心也。これに二つあり。一には決定して、わが身はこれ煩惱を具足せる罪惡生死の凡夫也。善根薄少にして、曠劫よりこのかたつねに三界に流轉して、出離の緣なしと、ふかく信ずべし。二には、ふかくかの阿彌陀佛、四十八願をもて衆生を攝取し給ふ。すなはち名號をとのふる事、下十聲にいたるまで、かのほとけの願力に乘じて、さだめて往生を得と信じて、乃至一念もうたがふ心なきがゆへに深心となづく。又深心といは、決定して心を建、佛の敎に順じて修行して、ながくうたがひをのぞきて、一切の別解別行、異學異見、異執のため

に違失傾動せられざれ」といへり。

(三) この釈の意は、はじめにわが身の程を信じて、のちにはほとけのちかひを信ずるなり。のちの信心のために、はじめの信をばあぐる也。そのゆへは、往生をねがはんもろ〳〵の人、弥陀の本願の念仏を申しながら、わが身に貪欲瞋恚の煩悩をもをこし、十悪破戒の罪悪をもつくるにおそれて、みだりにわが身をかろしめてかへりてほとけの本願をうたがふ。善導はかねてこのうたがひをかゞみて、二つの信心のやうをあげて、われらがごときの煩悩をもおこし、罪をもつくる凡夫なりとも、ふかく弥陀の本願をあふぎて念仏すれば、十声一声にいたるまで、決定して往生するむねを釈し給へり。まことにはじめのわが身を信ずる釈を釈し給はざりせば、われらが心ばへのありさまにては、いかに念仏申すともかのほとけの本願にかなひがたく、いま一念十念に往生するといふは、煩悩をもおこさず、つみをもつくらぬめでたき人にてこそあるらめ。われらごときのともがらにてはよもあらじなど、身の程思ひしられて、往生もたのみがたきまでおぼえなましに、この二つの信心を釈し給ひたる事は、いみじく身にしみておもふべき也。この釈を心えわけぬ人は、みなわが心のわろければ、往生はかなはじなどこそは申あひたれ、そのうたがひをなすは、やがて往生せぬ心ばへ也。此むねを意えて、ながくうたがふ心あるまじき也。心の善悪をもかへり見ず、つみの軽重をも沙汰せず。ただ口に南無阿弥陀仏と申せば、仏のちかひによりて、かならず往生するぞと、決定の心をおこすべき也。その決定の心によりて、往

生の業はさだまる也。往生は不定におもへば不定也。一定とおもへば一定する事也。詮じてはふかく佛のちかひをたのみて、いかなる過をもきらはず、一定むかへ給ぞと信じて、うたがふ心のなきを深心とは申候也。いかなるとがをもきらはねばとて、法にまかせてふるまふべきにはあらず。されば善導も不善の三業をば、眞實心の中にすつべし。善の三業をば、眞實心の中になすべしとこそは釋し給ひたれ。又善業にあらざるをば、うやまてこれをとをざかれ。又隨喜せざれなど釋し給ひたれば、心のをよばん程はつみをもをそれ、善にもすゝむべき事とこそは心えられたれ。たゞ彌陀の本誓の善惡をもきらはず、名號をとなふれば、かならずむかへ給ぞと信じ、名號の功德のいかなるとがをも除滅して、一念十念もかならず往生をうる事の、めでたき事をふかく信じて、うたがふ心一念もなかれといふ意也。又一念に往生すればとて、かならずしも一念にかぎるべからず。彌陀の本願の意は、名號をとなへん事、もしは百年にても、十二十年にても、もしは四五年にても、もしは一二年にても、もしは七日一日十聲一聲までも、信心をおこして南無阿彌陀佛と申せば、かならずむかへ給なり。惣じてこれをいへば、上は念佛申さんと思ひはじめたらんより、いのちをはるまでも申也。中は七日一日も申し、下は十聲一聲までも彌陀の願力なれば、かならず往生すべしと信じて、いくら程こそ本願なれとさだめず、一念までも定めて往生すと思ひて、退轉なくいのちをはらんまで申すべき也。

(三)又まめやかに往生の心ざしありて、彌陀の本願をたのみて念佛申さん人、臨終のわろき

事は、何事にかあるべき。そのゆへは、佛の來迎し給ふゆへは、行者の臨終正念のため也。それを意えぬ人は、みなわが臨終正念にて念佛申したらんおりそ、ほとけはむかへ給ふべきとのみ意えたるは、佛の本願を信ぜず、經の文を意えぬ也。『稱讚淨土經』には、慈悲をもて加へ祐けて心をしてみだらざらしめ給ふととかれたる也。たゞの時よく／＼申しをきたる念佛によりて、かならずほとけは來迎し給ふ也。佛のきたりて現じ給へるを見て、正念には住すと申すべき也。それにさきの念佛をばむなしく思ひなして、よしなき臨終正念をのみいのる人のおほくある、ゆゝしき僻胤の事也。されば佛の本願を信ぜん人は、かねて臨終をうたがふ心あるべからず。當時申さん念佛をぞ、いよ／＼心を至して申べき。いつかは佛の本願にも、臨終の時念佛申たらん人をのみ、むかへんとはたて給ひたる。臨終の念佛にて、往生すと申事は、もとは往生をもねがはずして、ひとへにつみをつくりたる惡人の、すでに死なんとする時、はじめて善知識のすゝめにあひて、念佛して往生すとこそ『觀經』にもとかれたれ。もとより念佛を信ぜん人は、臨終の沙汰をばあながちにすべき樣もなき事なり。佛の來迎一定ならず、臨終の正念は、また一定とこそはをもふべきことはりなれ。この意をよく／＼心をとゞめて、意うべき事なり。

(四)又別解別行の人に、やぶられざれといは、さとりことに、をこなひことならん人の、いはん事につきて、念佛をもすて、往生をもうたがふ心なかれといふ事也。さとりことなる人と申すは、天台法相等の八宗の學匠なり。行ことなる人と申すは、眞言止觀の一切の行

者也。これらは聖道門をならひをこなふ也。淨土門の解行には異なるがゆへに、別解別行となづくる也。又惣じておなじく念佛を申す人なれども、彌陀の本願をばたのまずして、自力をはげみて、念佛ばかりにてはいかゞ往生すべき。異なる功德をつくり、ことなる佛にもつかへて、ちからをあはせてこそ、往生程の大事をばとぐべけれ。たゞ阿彌陀佛ばかりにては、かなはじものをなどうたがひをなし、いひさまたげん人のあらんにも、げにもと思ひて、一念もうたがふ心なくて、いかなることはりをきくとも、往生決定の心をうしなふ事なかれと申す也。人にいひやぶらるまじきことはりを、善導こまかに釋し給へり。意をとりて申さば、たとひ佛ましまして、十方世界にあまねくみち〳〵て、光をかゞやかし舌をのべて、煩惱罪惡の凡夫、念佛して一定往生すといふ事ひが事なり、信ずべからずとの給ふとも、それによりて、一念もうたがふべからず。そのゆへは、佛はみな同心に衆生を引導し給に、すなはちまづ、阿彌陀佛淨土をまうけて、願をこしての給はく、「十方衆生わが國にむまれんとねがひて、わが名號をとなへんもの、もしむまれずば、正覺をとらじ」とちかひ給へるを、釋迦佛この世界にいでゝ、衆生のためにかの佛の願をとき給へり。六方恒沙の諸佛は、舌相を三千世界におほふて、虛言せぬ相を現じて、釋迦佛の彌陀の本願をほめて、一切衆生をすゝめて、かのほとけの名號をとなふれば、さだめて往生すとの給へるは、決定にしてうたがひなき事也。一切衆生みなこの事を信ずべしと證誠し給へり。かくのごとく一切諸佛一佛ものこらず、同心に一切凡夫念佛して、決定して往

【八】安心の中廻向發願心を明す。

生ずべきむねをすゝめ給へるうへには、いづれの佛の又往生せずとはの給ふべきぞといふことはりをもて、佛きたりての給ふともおどろくべからずとは申す也。佛なをしかり、いはむや菩薩聲聞緣覺をや。いかにいはんや凡夫をやと心えつれば、一度この念佛往生を信じてんのちは、いかなる人とかくいひさまたぐとも、うたがふ心あるべからずと申事なり。これを深心とは申すなり。

【八】三に廻向發願心とは、善導これを釋しての給はく、「過去をよび今生の、身口意業に修するところの、世出世の善根、をよび他の一切の凡聖の身口意業に修するところの世出世の善根を隨喜して、この自他所修の善根をもて、こと〳〵く眞實深心の中に廻向して、かのくにゝむまれんとねがふなり。かるがゆへに廻向發願心となづくる也。又廻向發願して、むまれんと願はむものは、かならず決定して、眞實心の中に廻向して、むまるゝ事をうる想をなす也。この心ふかくして、なをし金剛のごとくして、一切の異見異學、別解別行の人のために、動亂破壞せられざれ」といへり。この釋の意はまづわが身につきて、前世にもつくりとつくりたらん功德をみなこと〴〵く極樂に廻向して往生をねがふ也。わが身の功德のみならず、一切凡聖の功德をも廻向するなり。凡といは、凡夫のつくりたらん功德をも、聖といは、佛菩薩のつくり給はん功德をも、隨喜すればわが功德となるをもて、みな極樂に廻向して往生をねがふなり。詮ずるところ、往生をねがふよりほかに、異事をばねがふまじき也。わが身にも人の身にも、この界の果報をいのり、又おなじく後世の事な

れども、極樂ならぬ淨土にむまれんとねがひ、もしは人中天上にむまれんともねがひ、かくのごとくかれこれに廻向する事なかれと也。もしこのことはりを思ひさだめざらんさきに、この土の事をもいのり、あらぬかたへ廻向したらん功德をも、みなとり返して、いまは一すぢに極樂に廻向して往生せんとねがふべき也。一切の功德をみな極樂に廻向せよといへばとて、又念佛の外に、わざと功德をつくりあつめて廻向せよといふにはあらず。ただすぎぬるかたの功德をも、今は一向に極樂に廻向し、こののちなりともをのづからたよりにしたがひて僧をも供養し、人に物をもほどこしあたへたらんをも、つくらんにしたがひて、みな往生のために廻向すべしといふ意也。この心金剛のごとくして、あらぬさとりの人にをしへられて、かれこれに廻向する事なかれといふ也。金剛はいかにもやぶれぬものなれば、たとへにとりてこの心をもて廻向發願してむまると申也。

【九】三心を具するもの必ず往生すべきことを明す。

【九】三心のありさまあら〳〵かくのごとし。「この三心を具すればかならず往生す。もし一心もかけぬればむまるゝ事をえず」と、善導は釋し給ひたれば、もともこの心を具足すべき也。しかるにかやうに申たつる時は、別々にして事々しきやうなれども、意えとけばやすく具しぬべき心也。詮じてはまことの心ありて、ふかく佛のちかひをたのみて、往生をねがはんとする心なり。深き淺き事こそかはりめありとも、たれも往生をもとむる程の人は、さ程の心なき事やはあるべき。かやうの事は疎く思へば大事におぼえ、とりよりて沙汰すればさすがにやすき事也。かやうにこまかに沙汰し、しらぬ人も具しぬべく、又よく

よく知たる人も少る事ありぬべし。さればこそいやしくをろかなるものゝ中にも往生する事もあり。いみじくたとけなるひじりの中にも臨終わろく往生せぬもあり。されどもこれを具足すべき樣をもよく／＼意えわけて、わが意に具したりともしり、又少たりとも思はんをばかまへて／＼具足せんとはげむべきことなり。これを安心となづくる也。これぞ往生する心のありさまなり。これをよく／＼意えをくべきなり。

【一】淨土の起行を明す。

【一】次に起行といは、善導の御意によらば、往生の行おほしといへども、おほきにわかちて二とす。一には正行、二には雜行也。

【二】起行の中正行を明す。

【二】正行といは、これに又あまたの行あり。讀誦正行、觀察正行、禮拜正行、稱名正行、讃嘆供養正行、これらを五種の正行となづく。讃嘆と供養とを二行とわかつ時には、六種の正行とも申也。この正行につきて、ふさねて二とす。一には一心にもはら彌陀の名號をとなへて、行住坐臥によるひるわするゝ事なく、念々にすてざるを正定の業となづく。かのほとけの願に順ずるがゆへにといひて、念佛をもてまさしくさだめたる往生の業にたてゝ、もし禮誦等によるをば、なづけて助業とすといひて、念佛の外に阿彌陀佛を禮し、もしは三部經をよみ、もしは極樂のありさまを觀ずるも、讃嘆供養したてまつる事も、みな稱名念佛をたすけんがためなり。まさしくさだめたる往生の業は、たゞ念佛ばかりといふ也。

【三】起行の中雜行を明す。

【三】この正と助とをのぞきて外の諸行をば、布施をせんも、戒をたもたんも、精進ならん

【一三】雜行をすてて正行を修すべきことを明す。

も、禪定を修せんも、かくのごとくの六度萬行『法華經』をよみ、眞言をこなふ、もろもろのをこなひをば、こと〴〵くみな雜行となづく。

【一三】たゞ極樂に往生せんとおもはゞ、一向に稱名の正定業を修すべき也。これすなはち彌陀本願の行なるがゆへに、われらが自力にて生死をはなれぬべくば、かならずしも本願の行にかぎるべからずといへども、他力によらずば往生をとげがたきがゆへに、彌陀の本願のちからをかりて、一向に名號をとなへよと、善導はすゝめ給へる也。自力といは、わがちからをはげみて往生をもとむる也。他力といは、たゞ佛のちからをたのみたてまつる也。このゆへに正行を行ずるものをば、專修の行者といひ、雜行を行ずるをば、雜修の行者と申也。正行を修するは、心つねにかの國に親近して、憶念ひまなし。雜行を行ずるものは、心つねに間斷す。廻向してむまるゝ事をうべしといへども、疎雜の行となづくといひて、極樂にうとき行といへり。又專修のものは、十人は十人ながらむまれ、百人は百人ながらむまる。なにをもてのゆへに、外に雜緣なくして正念をうるがゆへに、彌陀の本願と相應するがゆへに、釋迦の敎に順ずるがゆへ也。雜修のものは、百人の中に一二人むまれ、千人の中に四五人むまる。なにをもてのゆへに、彌陀の本願と相應せざるがゆへに釋迦の敎に順ぜざるがゆへに、憶想間斷するがゆへに、名利と相應するがゆへに、自もさへ他の往生をもさふるがゆへにと釋し給ひたれば、善導を信じて淨土宗にいらん人は、一向に正行を修して、日々の所作に、一萬二萬乃至五萬六萬十萬をも、器量のた

【一四】餘行をまじへざることを明す。

へんにしたがひて、いくらなりともはげみて申すべきなりとこそ意えられたれ。それにこれをきゝながら、念佛の外に餘行をくはふる人のおほくあるは、意えられぬ事也。そのゆへは、善導のすゝめ給はぬ事をば、すこしなりともくはふべき道理ゆめ〳〵なき也。すゝめ給へる正行をだにも、なをものうき身にて、いまだすゝめ給はぬ雜行をくはふべき事は、まことしからぬかたもありぬべし。

【一四】又つみつくりたる人だにも往生すれば、まして功德なれば『法華經』などをよまんは、なにかはくるしかるべきなど申す人もあり。それらはむげにきたなき事也。往生をたすけばこそいみじからめ。さまたげにならぬばかりを、いみじき事とてくはへをこなはん事は、なにかは詮あるべき。惡をば、されば佛の御意にこのみてつくれとやすゝめ給へる。かまへてとゞめよとこそいましめ給へども、凡夫のならひ、當時のまよひにひかれて惡をつくる事はちからをよばぬ事なれば、慈悲ををこしてすて給はぬにてこそあれ。まことに惡をつくる人のやうに、餘行どもをくはへたからんは、ちからをよばず。たゞし經などをよまん事を、惡つくるにいひならべて、それもくるしからねば、ましてこれもなどといはんは不便の事也。ふかき御のりもあしく意うるものにあひぬれば、返りて物ならずあさましくかなしき事也。たゞあらぬさとりの人の、ともかくも申さん事をばきゝいれずして、すゝみぬべからん人をば誘すゝむべし。さとりたがひてあらぬさまならん人などに、論じあふ事などはゆめ〳〵あるまじき事也。たゞわが身一人まづよく〳〵往生をねがひて、念佛

【一五】念佛の功德を明す。

をはげみて、位たかく往生して、いそぎ返りきたりて、人々を引導せんとおもふべき也。

【一五】又善導の『往生禮讃』に、問ていはく「阿彌陀佛を稱念禮觀するに、現世にいかなる功德利益かある」答ていはく「阿彌陀佛をとなふる事一聲すれば、すなはち八十億劫の重罪を除滅す」又『十往生經』にいはく「もし衆生ありて、阿彌陀佛を念じて往生をねがふものは、かのほとけすなはち二十五の菩薩をつかはして、行者を護念し給ふ。もしは行、もしは坐、もしは住、もしは臥、もしはよる、もしはひる、一切の時、一切のところに、惡鬼惡神をしてそのたよりをえせしめ給はず」と。又『觀經』にいふごときは、「阿彌陀佛を稱念して、かのくにゝ往生せんとおもへば、かの佛すなはち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩をつかはして、行者を護念し給ふ。さきの二十五の菩薩と、百重千重の行者を圍繞して、行住坐臥をとはず、一切の時處に、もしはひる、もしはよる、つねに行者をはなれ給はず」と。又いはく「彌陀を念じて往生せんとおもふものは、つねに六方恒沙等の諸佛のために護念せらる。ゆへに護念經となづく。いますでにこの增上緣の、誓願のたのむべきあり。もろ／＼の佛子等、いかでか心をはげまさざらんや」といへり。かの文の意は彌陀の本願をふかく信じて、念佛して往生をねがふ人をば、彌陀佛よりはじめたてまつりて、十方の諸佛菩薩、觀音勢至無數の菩薩この人を圍繞して、行住坐臥、よるひるをもきらはず、かげのごとくにそひて、もろ／＼の横惱をなす惡鬼惡神のたよりをはらひのぞき給ひて、現世にはよこさまなるわづらひなく、安穩にして、命終の時は、極樂

世界へむかへ給ふ也。されば念佛を信じて往生をねがふ人は、ことさらに悪魔をはらはんために、よろづのほとけかみにいのりをもし、つゝしみをもする事は、なじかはあるべき。いはんや佛に歸し、法に歸し、僧に歸する人には、一切の神王、恒沙の鬼神を眷屬として、つねにこの人をまもり給ふといへり。しかればかくのごときの諸佛諸神、圍繞してまもり給はんうへは、又いづれの佛神かありてなやまし、さまたぐる事あらん。又宿業かぎりありて、うくべからんやまひは、いかなるもろ〳〵のほとけかみにいのるとも、それによるまじき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものぶる事あらば、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。いはんや又佛の御ちからは、念佛を信ずるものをば、轉重輕受といひて、宿業かぎりありて、をもくうくべきやまひをかろくうけさせ給ふ。いはんや非業をはらひ給はん事ましまさざらんや。されば念佛を信ずる人は、たとひいかなるやまひをうくれども、みなこれ宿業也。これよりもをもくこそうくべきに、ほとけの御ちからにて、これほどもうくるなりとこそは申す事なれ。われらが悪業深重なるを滅して、極樂に往生する程の大事をすらとげさせ給ふ。ましてこのよにいくほどならぬいのちをのべ、やまひをたすくるちからましまさざらんやと申事也。されば後生をいのり、本願をたのむ心もうすき人は、かくのごとく圍繞にも護念にもあづかる事なしとこそ善導はの給ひたれ。おなじく念佛すとも、ふかく信をおこして、穢土をいとひ極樂をねがふべき事也。かまへて心をとゞめて、このことはりをおもひほどきて、一向に信心を至して、つとめさせ給ふべき也。

かやうにこまかに申のべたるをば、わたくしのことばおほくして、あやまりあらんなど、あなづりおぼしめす事ゆめ／＼あるべからず。ひとへに善導の御ことばをまなび、ふるき文釋の意をぬきいだして申す事也。うたがひをなす心なくて、かまへて心をとどめて御らんじときて、意えさせ給ふべき也。あなかしこ／＼。この定に意えて、念佛申さんにすぎたる往生の義はあるまじき事にて候なり。

和語燈錄　巻第三

九條殿下の北政所へ進ずる御返事

【一】かしこまりて申あげ候。さては御念佛申させおはしまし候なるこそ、よにうれしく候へ。まことに往生の行には、念佛がめでたき事にて候也。そのゆへは、念佛は是彌陀本願の行なれば也。餘行は眞言止觀のたかき行なりといへども、彌陀の本願にあらず。又念佛は釋迦付屬の行なり。餘行は定散兩門のめでたき行なりといへども、釋尊是を付屬し給はず。又念佛は六方諸佛の證誠の行なり。餘行は顯密事理のやむごとなき行也といへども、諸佛これを證誠し給はず。此ゆへに、樣々の行おほしといへども、往生のみちにはひとへに念佛がすぐれたる事にて候なり。しかるを、往生のみちにうとき人の申すやうは、念佛は餘の眞言止觀の行にたえざるやすきまゝのつとめにてこそあれと申は、きはめたるひが事にて候也。そのゆへは、餘行をば彌陀の本願にあらずときらひすて、又餘行は釋尊の付屬にあらざればえらびとゞめ、又餘行は諸佛の證誠にあらざるをもてやめおさめて、いまはたゞ彌陀の本願にまかせ、釋尊の付屬により、諸佛の證誠にしたがひて、をろかなるわたくしのはからひをばやめて、これらのゆへつよき念佛の行を信じつとめて、

【九條殿下の北政所へ進ずる御返事】勅傳第十九卷に載す。
【九條殿下】藤原兼實公を云ふ。關白藤原忠通の第三子、久安四年生る。文治二年攝政、同五年太政大臣となり、建久二年關白となる。深く法然上人に歸依して淨土教を信じ、建仁二年剃髮して圓證と稱し、承元元年四月薨ず。家を九條と云ひ、世に月輪關白、又は月輪禪閤等と稱す。
【北政所】攝政關白の正妻にして宣下を蒙りたるもの。宣下なきものは稱せず。
【二】往生の業には念佛を本とすること。
【眞言止觀】眞言宗天台宗の意。
【惠心】惠心僧都源信。

【一】念佛は一向專修がめでたきこと。

【七難】火難、水難、羅刹難、刀杖難、鬼難、枷鎖難、冤賊難の稱。法華經に出づ。「七難消滅の法とは如何なるものをさすか古來判然せずと云へり。

【鎌倉の二位の禪尼に進ずる御返事】勅傳第二十五卷に載す。

【二位の禪尼】賴朝の後室、北條時政の女政子のこと。尼將軍とも稱せらる。建保六年十月十三日從二位に叙せらる。故に二位禪尼又は二品禪尼と號す。

往生をばいのるべしと申事にて候也。されば惠心の僧都の『往生要集』に「往生の業には念佛を本とす」と申たるは此意也。今はたゞ餘行をとゞめ給て、一向に念佛にならせ給ふべし。

【一】念佛にとりても、一向專修の念佛がめでたき事にて候也。そのむねは、三昧發得の善導和尚の『觀經の疏』にみえて候。されば『雙卷經』には『一向專念無量壽佛』ととき給ひて候。をよそ一向のことばは二向三向に對して、ひとへに餘の行をえらびすて、きらひのぞく意にて候なり。『往生要集』にも、諸行の中に念佛すぐれたるよし見えて候。又傳敎大師の七難消滅の法にも、念佛をつとむべしとみえて候。されば君達などのをいのりの料にも、念佛がめでたき事にて候。をよそ十方の諸佛、三界の天衆の擁護し給ふ行にて候へば、現世後生の御つとめ、何事かこれにすぎ候はん。いまはたゞ一向專修の但念佛にならせ給ふべく候。

鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事

【一】御文のやうくはしくうけ給候ぬ。さては念佛の功德は佛もときつくしがたしとの給ひて候。されば智惠第一の舍利弗、多聞第一の阿難も念佛の功德はしりがたしとの給て候ひし也。かくのごとく廣大の善根にて候へば、まして源空などは申つくすべくも候はず。

【一】念佛の功德は佛も說きつくし難きこと。

【二】念佛は有智無智を選ばざること。

源空、此朝にわたりて候聖教を隨分にひらき見候へども、淨土の敎文はわたりはてずとかんがへて候。わずかに震旦よりとりわたして候敎文をだにも、一年二年などには申つくすべくもおぼえ候はず。さりながらも、おほせをかうぶりて候へば、少々申のべ候べし。

【二】先念佛を信ぜざる人々候ひて申候なる事は、くまがへの入道、つのとの三郎などは無智のものなればこそ、餘行をばせさせずして、念佛ばかりをば、法然房はすゝめたれと申候なる事、きはまりなきひが事にて候。其ゆへは、念佛の行は本より有智無智をえらばず、彌陀のむかしちかひ給ひし本願は、あまねく十方世界の一切衆生のためなり。無智のためには念佛を願とし、有智のためには餘行を願とし給ふ事なし。されば有智無智、善人惡人、持戒破戒、貴も賤も、男も女もへだてず、若は佛の在世の衆生、若は佛の滅後の衆生、若は末法萬年の後三寶みなうせたる時の衆生迄も、たゞ念佛ばかりこそ、現當の祈禱とはなり候はめ。善導和尚は彌陀の化身にて、殊に一切衆生をあはれみ給ひて、諸の聖教をかんがへて、專修念佛をすゝめ給へるも、ひろく一切衆生のためにて候也。されば彌陀の本願により、善導の御心にしたがひて、念佛の一門をすゝめ候はんに、いかでか無智の人のみにかぎりて、有智の人をへだてゝ往生せさせじとはし候はんや。若しからば、彌陀の本願にもそむき、善導の御意にもかなふべからず。然ば此邊にまうで來て、往生の道をたづね候人には、有智無智を論ぜず、ひとへに專修念佛をすゝめ候なり。

【三】念佛を謗るものにかかはらず。專修すべきこと。
【修行する】この文五會法事讃にあり。
【生盲闡提】生盲は生れつきの盲、闡提は本性として信仰を有せざるもの。共に佛法を疑ひ信ぜざるものなり。
【頓教】速に證りを得る教。

【三】さやうに專修念佛を申候をとゞめんとつかまつる人は、先世に念佛三昧得道の法門をきかずして、後の世にさだめてまた三惡道にかへるべき者の、しかるべくてさやうに申也。そのゆへは聖教にひろくみえて候也。是卽「修行するをみては毒心をこし、方便してきをひてあだをなす、かくのごときの生盲闡提のともがらは、頓教を毀滅してながく沈淪す。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身をはなれん事を得べからず」ととき給へり。此文の意は、淨土をねがひ念佛を行ずる人を見ては、毒心をおこしひが事をたくみめぐらして、樣々の方便をなして、專修念佛の行をやぶり、あだをなして申とゞむる也。かくのごときの人は、むまれてより佛法のまなこしゐて、善根のたねをうしなへり。闡提のともがらなり。是彌陀の名號をとなへて、ながく生死をはなれて、常住の極樂に往生すべけれども、この教法をそしりほろぼすつみによりて、ながく三惡道にしづむ。かくのごときの人は、大地微塵劫をつくすとも、ながく三途の身をはなれんこと有べからずといふ也。しかれば則さやうにひが事を申さん人をば、かへりてあはれみ給ふべき也。左程の罪人の申さんによりて、專修念佛に懈怠をなし、念佛往生にうたがひをなし、不審をいたさん人は、いふにかひなき事にこそ候はめ。をよそ彌陀に緣あさく、往生の時いたらぬものは、きけども信ぜず、念佛の者をみては腹をたち、聲をきゝてはいかりをなして、あしき事なりなど申すは、すべて經論にも見へざる事を申にて候也。御意をえさせ給ひて、いかに申すとも、御心ばかりは御變改候べからず。あながちに信ぜざらん人をば、

【四】異解の人の善根は、念佛に結緣せしむべきこと。

【五】誦經造堂等も一概に要なしなど仰せられざること。

【六】念佛の中に一切の善根を藏すべきこと。

御すゝめ候べからず。佛なを力をよびたまはず、いかにいはんや凡夫のちからはをよぶまじく候。かゝる不信の衆生をも、過去の父母兄弟親類なりと思召候て、慈悲ををこして念佛申て、極樂の上品上生にまいりてさとりをひらき、すみやかに生死にかへりいりて、誹謗不信の人をも、むかへんとおぼしめすべき事にて候なり。此由を御意得候べきなり。

【四】一、異解の人の餘の善根を修せんには、財寶をあひ助成しておぼしめすべき樣は、我これ一向專修にて決定して往生すべき身なり。他人のとをきみちを、わが近き道に結緣せさせんとおぼしめすべき也。其うへ專修をさまたげ候はざらんは結緣せんにとがなし。一人一人の堂をつくり、佛を作り、經をかき、僧を供養せんをば、能々心をこたらずして信をおこして、かくのごとくの雜善根をも修せしめ給へと御すゝめ候べし。

【五】一、念佛の志をしらずして、此世のいのりに佛にも神にも申し、經をも誦しかき、堂をも作らば、それも先のごとくおぼしめすべく候。せめては後世のためにせばこそあらめ、其要なしなどをほせ候べからず。專修をさふる人にはあらざりけりと思召候べし。

【六】一、念佛を申す中に樣々の義候へども、只六字をとなふるばかりに一切はをさまりて候也。意には本願をたのみ、口には名號をとなへ、手には珠數をとり、つねに心にかくるがきはめたる決定の業にて候也。念佛の行は、本より行住坐臥時處諸緣をえらばず、身口の不淨をもきらはぬ行にて候へば、易行往生とは申候なり。但其中にも、心をきよくし

【七】異學異見の人をあなづらざること。

て申をば、第一の行と申候也。只淨土を心にかくれば心淨の行法にて候也。人をもかやうに御すゝめ候べし。さやうにつねに申させ給はんをばとかく申べき樣候はず。我身もしかるべくて此度往生すべしとおぼし召候べし。ゆめ〳〵此心能々つよくならせ給べし。

【七】一、念佛の行を信ぜぬ人にあひて論じ、又あらぬ行の人々にむかひて執論候べからず。あながちに別解異學の人を見て、あなづりそしる事候まじ。いよ〳〵重罪の人となさん事不便に候。をなじ心に極樂をねがひ、念佛を申さん人をば、たとひ卑賤の人なりとも父母師匠にもをとらずおぼしめすべし。今生の財寶のともしからんにも、ちからをくはへ給べし。またすこしも念佛に心をかけ候はんをば、能々すゝめたまふべく候。是も彌陀如來への御みやつかへと思召候べし。釋迦如來入滅よりこのかた、次第に小智小行になりて候に、我も我もと智惠ありがほに申す人々は過にて候べし、せめては錄內の經敎をだにも、きかずみず、いかにいはんや錄の外の經敎を見ざる人の智惠有がほに申すは、ゐのうちのかへるに似たり。隨分に震旦日本の聖敎を取あつめてひらきかんがへて候に、念佛を信ぜぬ人は先世に重罪をつくりて、地獄に久しく有て、又地獄へはやく歸るべき人なり。たとひ千佛世にいでゝ、念佛はまたく往生の業にあらずとをしへ給ふとも、信ずべからず。是は釋迦如來よりはじめて、恒河沙の佛の證誠し給へる事なればと思召て、御心ざし金剛よりもかたくして、一向專修は御變改候べからず。若論じ申さん人をばこれへつかはされて、たて申さんやうをきけと仰候べし。樣々の要文書しるしてまいらすべく

【要義問答】この書は何人か法然上人へ對面して尋ね申せしことを書きしるせるものならん。中に十三番の問答あり。

【五衰】天人の五衰といふ。天神が壽命盡きて命終せんとするときの五異相をいふ。之を五衰相と生ず。これに大小の二あり。大の五衰は衣服垢穢となる、頭上の華しぼむ。身體臭穢す。腋下汗流る、本座をたのしまず。小の五衰は樂聲起らず、身光忽滅す。浴水身に著す、境に着して捨てず、眼目しばしば瞬く。

【生老病死等】八苦の中六苦をあぐ。

候へども、ただこれにすぎ候まじ　又娑婆世界の人は、餘の淨土をねがはん事は、弓たくして天の鳥をとり、足なくしてたかき木ずゑのはなをおらんとせんがごとし。必、專修念佛は、現當のいのりと成候也。これも經の說にて候也。又御內の人々には、九品の業を、人にしたがひて、はじめをはりたへ候ひぬべきやうに御すゝめ候べし。あなかしこあなかしこ。

要義問答

まことに此身には道心のなき事と病ばかりやなげきにて候らん。世をいとなむ事なければ、四方に馳走せず、衣食ともにかけたりといへども、身命をおしむ心切ならねば、あながちにうれへとするにをよばず。心をやすくせん爲にも、捨候べき世にこそ候めれ。いはんや無常のかなしみは目の前にみてり。いづれの月日をかをはりの時に期せん。さかへあるものも久しからず。いのちあるものも又うれへあり。すべていとふべきは六道生死のさかひ、ねがふべきは淨土の菩提也。天上にむまれてたのしみにほこるといへども、五衰退沒のくるしみあり。人間にむまれて國王の身をうけて、一天下をしたがふといへども、生老病死、愛別離苦、怨憎會苦、一事もまぬかるゝ事なし。たとひこれらの苦なからんすら、三惡道に歸るをそれあり。心あらん人はいかゞいとはざるべき。うけがたき人界の生をう

けて、あひがたき佛教にあふ。此たび出離をもとめさせ給へ。』

【一】問『おほかたさこそ思ふ事にて候へども、か樣に仰らるゝこと葉につきて、左右なく出家をしたりとも、心に名利をはなれたる事もなく、無道心にて人に謗をなされん事いかがとをぼへ候。在家にありておほくの輪廻の業をまさんよりは、よき事にてや候べき。』

答『たはぶれにあさの衣をき、酒にゑひて出家をしたる人、みな佛道の因となりきと、舊き物にも書つたへられて候。『往生十因』と申す文には勝如聖人の父母ともに出家せし時、おとこはとし四十一、妻は三十三也。修行の僧をもて師としき。師ほめていはく、「衰老にもいたらず病患にものぞまず、今出家をもとむ是最上の善根也」とこそはいひけれ。釋迦如來當來導師の慈尊に付屬し給ふにも、破戒重惡のともがらなりといふとも、頭をそり衣をそめ袈裟をかけたらんものをば、みななんぢにつくとこそは仰られて候へ。されば破戒なりといへども三會得脫なをたのみあり。ある經の文には、在家の持戒には出家の破戒はすぐれたりとこそは申て候へ。誠に佛法流布の世にむまれて、出離の道をしりて、解脫幢相の衣をかたにかけ、釋氏につらなりて、佛法修行せざらんは、實にたからの山に入て、手をむなしくしてかへるためしなり。』

【二】問『誠に出家などしては、さすがに生死をはなれ、菩提にいたらん事をこそはいとなみ候べけれ。如何樣にかつとめ、いかやうにかねがひ候べき。』

答『『安樂集』に云。「大乘の聖教によるに二種の勝法あり。一には聖道、二には往生淨土

【一】出家在家のこと。

【往生十因】永觀の著。念佛には十因ありて往生することを說けるもの。勝如上人のことは十因中第一因のもとに出づ。

【慈尊】彌勒菩薩のこと。

【三會得脫】佛が三度大法會を開きて說法度生すること、龍華三會とも云ひ、五十六億七千萬年の末に於ける彌勒の成佛度生なり。初會の說法によりて阿羅漢を得るもの九十六億人、第二會には九十四億人、第三會には九十二億人あり、と云ふ。

【解脫幢相の衣】解脫幢相の袈裟ともいふ。幢相は旗の意にて事物を標示する具。衣は出離解脫の意を表はすもの。

【二】解脫の道は種種あること。

【六根】六種の機能。眼、耳、鼻、舌、身、意の六根。肉體と精神との總稱に用ふ。

【三密】身密、語密、意密の三。眞言の所立。

【三】凡夫は淨土往生を期すべきこと。

【永觀のいはく】往生十因の流通分の言なり。

也。」「穢土の中にしてやがて佛果をもとむるはみな聖道門也。諸法の實相を觀じて證をえんとし、法華三昧を行じて六根清淨をもとめ、三密の行法をこらして即身に成佛せんとおもひ、あるひは四道の果をもとめ、又三明六通をねがふ。これみな難行道也。往生淨土門といふは、まづ淨土へむまれて、かしこにてさとりをもひらき、佛にもならんとおもふ也。是をば易行道といふ。生死をはなるゝ道々おほし。いづれよりもいらせ給へ。」

【三】問「さてはわれらがごときのをろかなるものは、淨土の往生をねがひ候べきかいかん。」

答「安樂集」に云「聖道の一種は今の時には證じがたし。一には大聖をさる事はるかにとをきにより、二には理はふかくしてさとりはすくなきによる。此故に『大集月藏經』に云、我末法の時の中の、億々の衆生行をおこし道を修するに、いまだ一人もうる者あらじと。まさに今末法五濁惡世也。たゞ淨土の一門のみありて通入すべき道也。こゝをもて諸佛の大悲、淨土に歸せよとすゝめ給ふ。たとひ一形惡をつくるとも、たゞよく心をかけてまことをもはらにして、つねによく念佛せよ、一切のもろ〳〵のさはり自然にのぞこりて、さだめて往生をう。なんぞ思ひはからずして、さる心なきや」といへり。永觀のいはく「眞言止觀は理ふかくしてさとりがたく、三論法相は道かすかにしてまどひやすし」となど候。實に觀念にもたへず、行法にも得いたらざらん人は、淨土の往生をとげて一切の法門をもやすくさとらせ給はんは、よく候ひなんとおぼし候。」

【四】十方の淨土中西方を願ふべきこと。

【妙樂大師】湛然の謚號。支那常州の人。天台宗の碩學、智者大師の第五世。荊溪に居りしを以て荊溪大師とも稱す。茲に引用するところ弘決二の一の文。

【五】往生の行には二種あること。

【四】問『十方に淨土おほし。何れをかねがひ候べき。兜率の往生をねがふ人もおほく候。いかゞ思ひ定候べき。』

答『妙樂大師の給はく「諸教の讃するところ多く彌陀に在り。故に西方を以て一准となす」と。又顯密の教法の中に、もはら極樂をすゝむる事稱計べからず。惠心の『往生要集』に、十方に對して西方をすゝめ、兜率に對しておほくの勝劣をたて、難易相違の證據をもひけり。尋御覽ぜさせたまへ。極樂は此土に緣ふかし。彌陀は有緣の教主也。宿因のゆへ、本願のゆへあり。ただ西方をねがはせ給べきとぞおぼえ候。』

【五】問『さてはひとすぢに極樂をねがふべきにこそ候なれ。極樂をねがはんには、いづれの行かすぐれて候べき。』

答『善導釋しての給はく「行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。正の中に五種あり。一には禮拜の正行、二には讃嘆供養の正行、三には讀誦の正行、四には稱名の正行、五には觀察の正行也。一に禮拜の正行とは、禮せんには、卽かの佛を禮して、餘の禮をまじへざれ、二に讃嘆供養の正行とは、讃嘆せんには卽かの佛を讃嘆供養して、餘の讃嘆をまじへざれ。三に讀誦の正行とは、讀誦せんには『彌陀經』等の三部經を讀誦して、餘の讀誦をまじへざれ。四に稱名の正行とは、稱せんには卽かの佛を稱して、餘の稱名をまじへざれ。五に觀察の正行とは、憶念觀察せんにはかの土の二報莊嚴等を觀察して、餘の觀察をまじへざれ。此五種を往生の正行とす。此正行の中に又二あり、

【六八】餘行を修して往生を期するは難きこと。

一には正、二には助也。稱名をもて正とし、禮誦等をもて助業となづく。此正助二行をのぞきて、自餘の修善をばみな雜行となづく」又釋していはく、「自餘の衆善はみな善となづくといへども、念佛にたくらぶればまたく比校にあらず」とのたまへり。淨土をねがはせ給はゞ、一向に念佛をこそは申させたまはめ。」

【六八】問「餘行を修して往生せん事はかなひ候まじや。されども『法華經』に「即往安樂世界阿彌陀佛所」といひ、密教の中にも決定往生の眞言あり。諸教の中に淨土に往生すべき功力をとけり。又穢土の中にして佛果にいたるといふ、かたき徳をだに具せる教を修行してやすき往生極樂に廻向せば、佛果にかなふまでこそかたくも、往生はやすく候べきとこそおぼえ候へ。又をのづから聽聞などにうけ給はるにも、法花念佛はひとつ物と釋せられ候。ならべて修せんに、なにかくるしく候べき。」

答「『雙卷經』に、三輩往生の業をときて、ともに「一向專念無量壽佛」との給へり。『觀無量壽經』に、もろ〳〵の往生の行をあつめてとき給ふに、をはりに阿難に付屬し給ふ所には「なんぢ此語をたもて、此語をたもて、といふは無量壽佛の名をたもつなり」ととき給ふ。善導『觀經』を釋してのたまふに「定散兩門の益をとくといへども、佛の本願にのぞむれば、一向にもはら彌陀の名號を稱せしむるにあり」といふ。おなじき經の文に「一一の光明十方世界の念佛の衆生をてらして、攝取してすてたまはず」ととけり。善導釋しての給はく「餘の雜業のものをてらし攝取すといふ事をば論ぜず」と候。さればとて餘行

のものは、ふつとむまれずといふにはあらず。善導も廻向してむまるべしといへども、すべて疎雜の行となづくとこそはをほせられたれ。『往生要集』の序にも、「顯密の教法共文ひとつにあらず。事理の業因共行これおほし。利智精進の人はいまだかたしとせず。予がごときの頑魯の者あにたやすからんや。此ゆへに念佛の一門によりて、經論の要文をあつむ。是をひらき是を修するに、さとりやすく行じやすし」といふ。これらの證據あきらめつべし。教をえらぶにはあらず。機をはからふなり。我ちからにて生死をはなれん事、はげみがたくして、偏に他力の彌陀の本願をたのむ也。先德たちおもひはからひてこそは、道綽は聖道をすてゝ淨土の門にいり、善導は雜行をとゞめて一向に念佛して三昧をえ給ひき。淨土宗の祖師次第にあひつげり。今わづかに一兩をあぐ。この朝にも惠心永觀などいふ、自宗他宗の人師ひとへに念佛の一門をすゝめたまへり。專雜二修の義はじめて申にをよばず。淨土宗の文おほし。こまかに御覽ずべし。又卽身得道の行、往生極樂にをよばざらんやと候は、まことにいはれたるやうに候へども、いづれにも宗と申す事の候ぞかし。善導の『觀經の疏』には『般若經』のごときは、空慧をもて宗とし『維摩經』のごときは、不思議解脫をもて宗とす。今此『觀經』は觀佛三昧をもて宗とし、念佛三昧をもて宗とす」といへり。法花は、眞如實相平等の妙理を觀じて證をとり、現身に五品六根の位にもかなふ。これらをもて宗とす。又法花には、おほくの功力をあげて經をほむるついでに、「卽往安樂」ともいひ、又「卽往兜率天上」ともいふ。これは便宜の說也。往生をむねとするに

【七】浄土の法門の所依とする經論のこと。

【八】念佛の安心には三心を具すべきこと。

はあらず。眞言又かくのごとし。法花念佛一つなりといひて、ならべて修せよといはゞ、善導和尚は、法花維摩等を誦しき。浄土の一門にいりにしよりこのかた一向に念佛して、あへて餘の行をまじふる事なかりき。しかのみならず浄土宗の祖師あひついで、みな一向に名號を稱して、餘業をまじへざれとす〻む。これらを案じて專修の一行にいらせ給へと申すなり。

【七】問『浄土の法門に、まづ何々を見て心づき候なん。』

答『經には『雙卷』、『觀無量壽』、『小阿彌陀經』等、是を浄土三部經となづく。文には善導の『觀經の疏』、『六時禮讃』、『觀念法門』、道綽の『安樂集』、慈恩の『西方要決』、懷感の『群疑論』、天台の『十疑論』、わが朝の人師には惠心の『往生要集』などこそは、つねに人のみるものにて候へ。たゞし何を御覽ぜずとも、よく御意えありて念佛申させ給ひなんに、往生何事かうたがひ候べき。』

【八】問『さては念佛の安心をば、如何樣にかこころへ候べき。』

答『三心を具足せさせ給へ。その三心と申すは、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。一に至誠心といふは眞實の心也。善導釋しての給はく、「至といふは眞の義、誠といふは實の義、眞實の心の中に、此三界六道の自他の依正二報をいとひすて〻、三業に修するところの行業に、かならず眞實をもちひよ。外に賢善精進の相を現じて、内に虚假をいだくものは、日夜十二時につとめをこなふ事、かうべの火をはらふがごとくにすると

も、往生をえずと也。たゞ内外明闇をえらばず。眞實をもちゆるゆへに至誠心となづく。二に深心といふはふかき信也。決定してふかく信ぜよ。自身は現に是罪惡生死の凡夫也。曠劫よりこのかたつねに沒し、つねに流轉して出離の縁ある事なしと。又決定してふかく信ぜよ。彼阿彌陀佛、四十八願をもて衆生を攝受し給ふ。うたがひなくうらおもひなければ、かの願力に乘じてさだめて往生すと。あふぎねがはくば、佛のことばをばふかく信ぜよ。若一切の智者百千萬人きたりて、經論の證をひきて、一切の凡夫念佛して往生する事をえずといはんに、一念の疑退の心ををこすべからず。ただこたへていふべし。なんぢがひくところの經論はなんぢが有縁の教なり。わが信ずるところは、わが有縁の教なり。今ひく所の經論は菩薩人天等に通じてとけり。此『觀經』等の三部は、濁惡不善の凡夫のためにとき給ふ。しかればかの經をとき給ふ時は、所も別に、時も別に、對機も別に、利益も別なりき。今君が妨難をきくに、いよ／＼信心を增長す。若羅漢辟支佛初地十地の菩薩十方にみち、化佛報佛ひかりをかゞやかし、虛空にしたをはきてむまれずとの給はゞ、又こたへていふべし。一佛の說は一切佛の說におなじ。釋迦如來のとき給ふ教をあらためば、制し給ふところの殺生十惡等のつみをあらためて又をかすべしや。さきの佛そらごとし給はゞ、後の佛も又そらごとし給ふべし。おなじ事ならば、只しそめたる法をばあらためじといひて、ながく退する事なき、これを深心といふ也。三に廻向發願心といふは、一切の善根をこと／＼くみな廻向して、往生極樂のためとす。決定眞實の心のうちに廻向してむま

ころおもひをなす也。此心ふかく信ずる事金剛のごとくにして、一切の異見異學、別解別行人等に、動亂破壞せられざれ。いまさらに行者のために、一つのたとへをときは、外邪異見の難をふせがん。人ありて西にむかひて百里千里をゆくに、忽然として中路に二つの河あり。一つにはこれ火の河南にあり。二つにはこれ水の河北にあり。をの／＼廣さ百歩、ふかくしてそこなし。まさに水火の中間に一つの白き道あり。ひろさ四五寸ばかりなるべし。此道ひんがしのきしより西の岸にいたるまで長さ百歩、その水の波浪交過して道をうるほし、その火の燄亦きたりて道をやく。水火あひまじはりてつねにやむ事なし。此人すでに空曠のはるかなるところにいたるに人なくして、群賊惡獸あり。此人のひとりゆくをみて、きをひきたりてころさんとす。此人死をおそれてたゞちにはしりて西にむかふ。忽然として此大河をみるに、すなはち念言すらく「此河南北ともにほとりなし。中間に一つの白道をみる。きはめて狹少也。二つの岸あひさる事ちかしといへども、いかゞゆくべき。今日さだめて死せん事うたがひなし。まさに歸らんとおもへば、群賊惡獸やうやくきたりせまる。まさに南北にさりはしらんとおもへば、惡獸毒蟲きをひきたりて我にむかふ。まさに西にむかひて道をたづねてさらんとおもへば、復おそらくは此二つの河にをちぬべし」と。此時おそるゝ事いふべからず。即みづから思念すらく「われいまかへるとも死し、またさるとも死せん。一種として死をまぬかれざるものなり。われむしろ此道を尋ねてさきにむかひてさらん。すでに此みちあり。かならずわたるべし。」此思をなす時、東の岸にたちま

ちに人のすゝむる聲をきく。「きみたゞ決定して此道を尋ねてゆけ。かならず死の難なけん。もし住せば即死なん」と。又西の岸のうへに人ありてよばひていはく、「なんぢ一心にたゞ念じて、みちをたづねて直にすゝみて、疑怯退の心をなさざれ」と。あるひは一分二分ゆくに群賊等よばひていはく、「きみかへりきたれ。この道ははげしくあしき道なり。すぐる事をうべからず。死なん事うたがひなし。我等すべて惡心なし。」と。此人よばふこゑを聞といへどもかへりみず。直にすゝみて道を念じてゆくに、須臾にすなはち西の岸にいたりて、ながくもろ〳〵の難をはなる。善友あひむかひてよろこびやむ事なし。是はたとへ也。

次にたとへを合すといふは、東の岸といふは即此娑婆の火宅にたとふる也。西の岸といふは、即極樂寶國にたとふるなり。群賊惡獸いつはりしたしむといふは、即衆生の六根六識六塵五陰四大なり。人なき空迥の澤といふは、即つねに惡友にしたがひて、眞の善知識にあはざる也。水火の二河といふは、即衆生の貪愛は水のごとく、瞋恚は火のごとくなるにたとふる也。中間の白道四五寸といふは、即衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清淨の願往生の心を生ずる也。貪瞋こはきによるがゆへに、すなはち水火のごとしとたとふるなり。願心すくなきがゆへに、白道のごとしとたとふるなり。水波つねに道をうるほすといふは、愛心つねにをこりて善心を染汙する也。又火焰つねに道をやくといふは、瞋嫌の心よく功德の法財をやく也。人みちの上をゆきて直に西にむかふといふは、即もろ〳〵の行業をめぐらして直に西にむかふにたとふる也。東の岸に人のこゑありてすゝめやるをききて、道

【九】散心の念佛も皆往生すべきこと。

をたづねて直に西にすゝむといふは、卽釋迦すでに滅し給ひてのち、人見たてまつられざれども、なを教法ありてたづねつべし。是を聲のごとしとたとふる也。あるひはゆく事一分二分するに、群賊等よびかへすといふは、別解別行惡見人等みだりに見解をときあひ惑亂し、をよびみづから罪をつくりて退失するにたとふる也。西の岸のうへに人ありてよばふといふは、卽彌陀の願の意にたとふる也。須臾にすなはちにしの岸にいたりて、善友あひ見てよろこぶといふは、すなはち衆生ひさしく生死にしづみて曠劫に輪廻し、迷倒し、みづからまよひて解脫するによしなし。あふぎて釋迦發遣して西方にむかはしめ給ふことをかふぶり、又彌陀の悲心まねきよばひ給によりて、二尊の意に信順して、水火の二河をかへりみず、念々にわするゝ事なく、かの願力の道に乘じていのちをすてをはりてのち、かの國にむまるゝことをえて、ほとけをみたてまつりて、慶喜する事きはまりなからんにたとふる也。行者行住坐臥の三業に修するところ、晝夜時節を問ふことなくつねに此解をなし、此想ひをなすを廻向發願心といふ。又廻向といふは、かの國にむまれをはりて、大悲ををこして、生死にかへりいりて、衆生を教化するを廻向となづく、三心すでに具すれば、行として成ぜずといふ事なし。願行すでに成して、もしむまれずといはゞ、此ことはりある事なけん」と。已上善導の釋の文なり。」

【九】問「『阿彌陀經』の中には、「一心不亂」と候はこれ阿彌陀佛を稱申さん時、餘事を少もおもひませ候まじきにや。一聲念佛申さん程、物をおもひまぜざらん事はやすく候へば、

一念往生にはもるゝ人候はじと覺え候。又いのちのをはるを期として、餘念なからん事は、凡夫のあるまじきことなれば、往生すべき事とも思はれず。此義いかが心え候べき。』

答『善導此事を釋しての給はく、「ひとたび三心を具足してのち、みだれやぶれざる事金剛のごとくにて、いのちをはるを期とするを、なづけて一心といふ」と候。阿彌陀佛の本願の文に、「もし我佛を得たらんに十方の衆生至心に信樂し、我が國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺を取らじ」といふ。此文に至心といふは『觀經』にあかすところの三心の中の至誠心にあたれり。信樂といふは深心にあたれり。欲生我國は廻向發願心にあたれり。これらをふさねて、命をはるを期としてみだれぬを一心とは申す也。此心を具せんもの、もしは一日二日乃至十聲一聲、かならず往生する事をうといふ。いかでか凡夫の心に散亂なき事候べき。さればこそ易行道とは申す事にて候へ。『雙卷經』の文には「横に五惡趣を截ち惡趣自然に閉ぢて道に昇りて窮極無し往き易くして而も人なし」ととけり。まことにゆきやすきこと、是にすぎたるや候べき。劫をつみてむまるといはゞ、いのちもみじかく、身も堪ざらん人いかゞとおもふべきに、本願に乃至十念といひ、願成就の文に、乃至一念も彼佛を念じて至心に廻向すれば、卽かの國にむまるゝことをうといふ。造惡のものむまれずといはゞ『觀經』の文に「五逆の罪人むまる」ととく。もし世もくだり人の心もをろかなる時は、信心うすくしてむまれがたしといはゞ、『雙卷經』の文に「當來の世經道滅盡せんに我れ慈悲を以て哀愍してひとり此の經を留めて止住すること百歳なら

【多寶】佛名。昔ここを東方無量千萬億阿僧祇の世界を過ぎて東淨國あり。その國に住せし佛。法華經見塔品に出づ。

【四方四佛】東方阿閦佛、南方寶相佛、西方阿彌陀佛、北方微妙聲佛。但しこの四方四佛の證明は古來般若に見えず、金光明最勝王經ならんと云へり。

【一〇】行には四修を具すべきこと。

しめむ。この經に値はんものは意の所願に隨ひてみな得度すべし云々」その時の衆生は、三寶の名をだに聞くことなし。もろ〳〵の聖教は龍宮にかくれて一卷もとどまる物なし。ただ邪惡無信のさかりなる衆生のみありて、皆惡道に落ちぬべし。彌陀の本願をもく、釋迦の大悲ふかきゆへに、此敎をとどめ給へる事百年なり。いはんや此ごろは、これ末法の始也。萬年の後の衆生にをとらんや。かゝるがゆへに易往といふ。しかりといへども、此敎にあふ者はかたし。又をのづから聞といへども、信ずることかたきがゆへにしかも無人といふ。まことにことはりなるべし。『阿彌陀經』に「もしは一日、もしは二日乃至七日、名號を執持して一心不亂なれば、その人命終の時に、阿彌陀佛もろ〳〵の聖衆と現に其人のまへにましまして、をはる時心顚倒せずして、阿彌陀佛の極樂國土に往生する事をう」といふ。此事をときたもふ時に、釋迦一佛の所說を信ぜざらんことをそれて、六方の如來同心同時に、各廣長の舌相をいだして、あまねく三千大千世界におほひて、もしこの事虛言ならば、わが出すところの廣長の舌、やぶれたゞれて口にいる事あらじとちかひ給ひき。經文釋文あらは也。又大事を成じ給ひし時はみな證明ありき。法花をとき給ひし時は、多寶一佛證明し、般若をときたまひし時は、四方四佛證明し給ふ。しかりといへども一日七日の念佛のごとく證誠のさかりなる事はなし。ほとけも此事を實に大事におぼし召たるにこそ候めれ。』

【一〇】問『信心のやうはうけ給はりぬ。行の次第いかゞ候べき。』

答『四修をこそは本とする事にて候へ。一には長時修乃至四には無餘修也。一には長時修といふは、慈恩の『西方要決』にいはく、初發心より此かた、菩提に至るまで常に退轉なき也。善導は命のをはるを期として、誓て中止せざれといふ。二に恭敬修といは、極樂の佛法僧寶にをいて、つねに憶念して尊重をなす也。これ『往生要集』の意なり。又『要決』にいはく、恭敬修これにつきて五あり。一には有緣の聖人をうやまふ。二には有緣の像教をうやまふ。三には有緣の善知識をうやまふ。四には同緣の伴をうやまふ。五には三寶をうやまふ。一に有緣の聖人をうやまふといふは行住坐臥に西方にそむかず、涕唾便痢に西方にむかはざれといふ。二に有緣の像教をうやまふといふは、阿彌陀佛の像をつくりもかきもせよ、ひろくする事あたはずは、一佛二菩薩をつくれ、又教をうやまふといふは、『彌陀經』等を五色のふくろにいれてみづからもよみ、他にをしへてもよましめよ。像と經とを室のうちに安置して、六時に禮讃し、香花を供養すべし。三に有緣の善知識をうやまふといふは、淨土の教をのべんものをば、もしは千由旬よりこのかた、ならびに敬重し、親近供養すべし。別學のものをも、總じてうやまふ心をこすべし。もし憍慢をなさば、罪をうることきはまりなし。すゝみても衆生のために善知識と成て、かならず西方に歸する事をもちひよ。この火宅に住せば、退沒ありていでがたきがゆへ也。火界の修道ははなはだかたきゆへに西方に歸せしむ。彌陀の淨國は造惡の地なし。ひとたび往生をえつれば、三學自然に勝進して、萬行ならびにそなはるがゆへ也。四に同緣のともをうやまふといは、

おなじき業を修するもの也。みずからはさはりをもくして、獨業成ぜずといへども、かならずよきともによりてまさによく行をなす。あやうきをたすけ、あやうきをすくふ事、同伴の善縁也。ふかくあひたのみてをもんずべし。五に三寶をうやまふといふは、繪像木佛、三乘の教旨。聖僧菩薩、破戒ともがらまで、うやまひをこし、慢を生ずる事なかれ。木のかたぶきたるは、たをるゝにまがれるによるがごとし。事のさはりありて西にむかふにをよばずば、たゞ西にむかふおもひをなすべし。三に無間修といふは『要決』にいはく、つねに念佛して往生の心をなせ。一切の時にをいて心につねに思ひたたむべし。たとへば若人他に抄掠せられて、身下賤となりて艱辛をうく。たちまちに父母をおもひて本國にはしり歸らんと思ふ。ゆくべきはかりごといまだわきまへずして他郷にあり、日夜に思惟するくるしみたへしのぶべからず。時として父母をおもはずといふことなし。はかりごとすでになりて、すなはちかへり達する事をえて、父母に親近し、ほしきままに歡娯するがごとし。行者もまたしか也。むかし煩惱によりて善心を壞亂して、福智の珍財ならびにみな散失せり。ひさしく生死にしづみて、つねに魔王のやつことなりて、六道に驅馳せられてくるしみ身心をせむ。今善縁にあひて彌陀の慈父をきゝて、日夜に發心して往生をねがふ。まさに佛恩を念じて、報盡を期として、心につねに思ふべし。信心相續して餘業をまじへざれ。四に無餘修といふは『要決』にいはく、もはら極樂をもとめて、彌陀を禮念するなり。但諸餘の行業を雜起せざれ、所作の業は日別に念佛すべし。善導のの給はく、もはら

【二】他力往生には魔緣たよりを得べからざること。

【魔波旬】魔はマーラー(Mara)殺者、障と譯す。波旬はパーピーヤン(Papiyan)魔王名。

【三】一念に八十億劫の生死の罪を滅すること。

からの佛の名號を念じ、もはらかの佛をよびかの土の一切の聖衆等をほめて餘業をまじへざれ。專修のものは、百はすなはち百ながらむまれ、雜修のものは百が中にわづかに一二也。雜緣にちかづきぬればみづからもさへ他の往生の正行をもさふる也。我みづから諸方をみきくに、道俗の解行不同にして專雜こと也。ただ心をもはらになすは、十は即十ながらむまる。雜修のものは千が中に一つもえずといふ。又善導の御弟子釋しての給はく、西方淨土の業を修せんとおもはんものは、四修おつる事なく、三業まじはる事なくして、一切の諸願諸行を廢して、たゞ西方の一行一願を修せよとこそ候へ。』

【二】問『一切の善根は、魔王のためにさまたげらると。是はいかゞして對治し候べき。』

答『魔波旬といふ物は、衆生をたぶらかすものなり。一切の行業は、自力をたのむゆへ也。念佛の行者は、身をば罪惡生死の凡夫とおもへば、自力をたのむ事なくして、唯彌陀の願力に乘じて往生せんとねがふに、魔緣たよりをうる事なし。觀念をこらす人には、なを九境の魔事ありといふ。彌陀の一事にはもとより魔事なし。果人清淨なるがゆへにといへり。佛をたぶらかす魔緣なければ、念佛のものをばさまたぐべからず。他力をたのむによるがゆへ也。百丈の石を船にをきつれば、萬里の大海をすぐるがごとし。又念佛の行者のまへには、彌陀觀音等つねにきたり。二十五の菩薩百重千重に圍繞護念し給へば、魔緣たよりをうべからず。』

【三】問『阿彌陀佛を念ずるに、いかばかりのつみをか滅し候。』

【三】彌陀の色相を觀ぜず。專ら名號を稱すべきこと

【大胡太郎實秀へつかはす御返事】九卷傳五の末に出づ。但し、前言を略し、三心具足の狀以下をあぐ。

【大胡太郎實秀】勅傳廿五には上野國の御家人大胡小四郎隆義の子とあり。隆義は在京の吉水の禪室に參じて上人の勸化をうけしと云へども、その傳詳かならず。

【一】御返事中候消息のこと。

答「一念によく八十億劫の生死の罪を滅すといひ、又「但佛名と二菩薩名とを聞きて、無量劫の生死の罪を除く」など申候ぞかし。」

【三】問「念佛と申候は佛の色相を念じ候か。」

答『佛の色相光明を念ずるは觀佛三昧なり。報身を念じ、同體の佛性を觀ずるは、智あさく、心せばき我等が境界にあらず。善導の給はく「相を觀ぜずして、ただ名字を稱せよ。衆生さはりをもくして、觀成ずる事かたし。此ゆへに大聖あはれみをたれて稱名をもはらにすすめ給へり。心かすかにしてたましゐ十方にとびちるがゆへ也。」といへり。又本願の文を善導釋しての給はく「若し我成佛せんに十方の衆生我が國に生ぜんと願じて、我が名號を稱すれば、下十聲に至るまで我が願力に乘じて、若し生ぜずんば正覺を取らじ。彼の佛今現に世にまし／＼て成佛したまふ。當に知るべし、本誓の重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」とおほせられて候。とく／＼安樂淨土に、往生せさせおはしまして、彌陀觀音を師として、法花の眞如實相平等の妙理、般若の第一義空、眞言の即身成佛、一切の聖教、心のままにさとらせおはしますべし云云』

大胡太郎實秀へつかはす御返事

【一】さきの便にはさしあふ事候て、御返事こまかに申さず候ひき。さだめて不審におぼし

【二】三心を具足して往生すべきこと。

【三】至誠心のこと。

召候らんと思給候。さてはたづねおほせられ候し事ども、御文などにては、たやすく申ひらきがたき事にて候。あはれ京に久しく御逗留候し時、こまかに御沙汰候はましかば、よく候ひなまし。大方は念佛して往生すと申事ばかり、わづかに見および候。我心一つにふかく信じたるばかりにてこそ候へ。人までつまびらかに申きかせなどする程の身にて候はねば、まして立いりたる事共の、不審など、御文にて申ひらくべしともおほく候はねども、わづかにみをよび候程の事をはゞかりまいらせて、ともかくも御返事申候はざらんことのをそれにて候へば、心のをよぶ程は、かたのごとく申候はんと存候也。

【二】まづ三心具足して往生すと申候事は、實にその名目ばかりをうちきく時には、いかなる心を申やらんと事々しくおぼえ候ひぬべけれども、善導の御意にては、心えやすきことにて候也。かならずならひ沙汰せざらん無智の人、さとりなからん女人などの、え具せぬほどの心ばえにては候はぬ也。たゞまめやかに往生せんと思ひて、念佛申さん人は、自然に具足しぬべき心にて候物を。其ゆへは、三心と申すは『觀無量壽經』にとかれて候やうは、「もし衆生ありて、かの國にむまれんとねがはんものは、三種の心をこして、すなはち往生すべし。何等をか三とする。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。この三心を具するものは、かならずかのくににむまる」ととかれたり。

【三】しかるに善導和尚の御意によらば、はじめに至誠心といふは眞實の心也。眞實といふはいはく、内はむなしくして、外をかざる心のなきを申也。すなはち『觀經疏』に釋して

【四】深心のこと

いはく、「外には賢善精進の相を現じ、内には虚仮をいだく事をえざれ」といへり。この釋の心は、内はをろかにして、外にはかしこき人とおもはれんとふるまひ、内には惡をもつくり、外には善人のよしをしめし、内には懈怠の心を懐きて、外には精進の相を現ずるを眞實ならぬ心とは申也。外も内もありのままにて、かざる心のなきを至誠心となづくるにてこそ候なれ。」

【四】二に深心といふは、すなはちこれ深く信ずる心也。何事をふかく信ずるぞといふに、まづもろ／＼の煩惱を具足し、おほくのつみをつくりて、餘の善根などなからん凡夫、阿彌陀佛の大悲本願をあふぎて、その佛の名號をとなへて、もしは百年にてももしは四五十年にても、もしは十二十年にても、乃至一二年にてもあれ、すべて往生せんとおもひはじめたらん時よりして、最後臨終の時にいたるまで退轉せず、もしは七日一日、十聲一聲にても、をほくもすくなくも、稱名念佛の人は、決定して往生すべしと信じて、乃至一念もうたがふ心なきを深心とは申也。しかるにもろ／＼の往生をねがふ人、本願の名號をたもちながら、なを内に妄念のをこるをおそれ、外に餘善のすくなきによりても、ひとへにわが身をかろしめて、往生を不定におもはゞ、すでに本願をうたがふなり。されば善導は、はるかに未來の行者の、此うたがひをのこさん事をかがみて、其疑心をのぞきて決定の心をすすめむがために、煩惱を具足して罪業をつくり、善根すくなく智慧なからん凡夫、十聲一聲までの念佛によりて、決定して往生すべきことはりを、くはしく釋しをし

へ給へる也。たとひおほくの佛、空の中に充滿して光をはなち、舌をのべて、造罪の凡夫、念佛して往生すといふ事はひが事なり、信ずべからずとの給ふとも、それによりて一念もおどろきうたがふ心あるべからず。そのゆへは阿彌陀ほとけ、いまだ佛になり給はざりしむかし、もし我佛になりたらん時、十方の衆生、わが名號を十たびとなへ、一こゑもとなへむ、となふることかみ百年よりしも十聲一聲までも、もしわが國にむまれずといはば、われ佛にならじとちかひ給ひたりしに、その願むなしからずして、佛になりて、すでに久しくなり給へり。知るべしかの名號をとなへむ人はかならず往生すべしといふ事を。又釋迦佛、此娑婆世界にいで給ひて、一切衆生のために、かの彌陀の本願をときて、念佛往生をすすめ給へり。又六方恆沙の諸佛、をの〳〵廣長の舌をいだして、釋迦の念佛して往生すとき給ふは決定也。もろ〳〵の衆生ふかく信じてすこしもうたがふ心あるべからずと爾許の佛たちの一佛ものこらず、一味同心に證誠し給へり。すでに阿彌陀ほとけはその願をたて給ふ。釋迦ほとけはその願のむなしからざる事をときすすめ給ふ。六方恆沙の諸佛はその說の眞實なる事を證誠し給へり。このほかに又いづれの佛のこれらの諸佛にたがひて、凡夫念佛して往生せずとはの給ふべきぞといふことはりをもて、おほくのほとけ現じての給ふとも、それにおどろきて、さては念佛往生かなふまじきかと、信心をやぶり、疑心をこすべからず。いはんや菩薩たちの給はんをや。いはんや羅漢辟支等をやと釋し給ひて候也。いかにいはんや近來の凡夫のいひさまたげんをや。いかにめでたき人と申すと

【垂迹】本地に對する語。本體の佛菩薩ありて、それが衆生敎化のために此の世に出現し救濟の迹を垂るること。

【本地】垂迹に對する本體の佛菩薩を云ふ。

【五】廻向發願心のこと。

【六】三心の中一心も缺くべからざること。

も、善導和尚にまさりたてまつりて、往生の道をしりたらんこともありがたく候。又善導はただの凡夫にはあらず。卽阿彌陀佛の化身也。かの佛我本願をひろめて、あまねく一切衆生にしらしめて、決定して往生せさせん料に、かりに凡夫の人とむまれて、善導和尚といはれ給ふ也。いはばその敎は、佛說にてこそ候へ。いかにいはんや垂迹のかたにても、現身に念佛三昧をえて、まのあたり淨土の莊嚴を見、佛にむかひたてまつりて、ただちに佛のをしへをうけたまはりて、の給へる詞ども也。本地をおもふにも、垂迹をたずぬるにも、かたくあふひで信ずべし。さればたれも〳〵、煩惱のこきうすきをかへりみず、罪障のかろきおもきをも沙汰せず、ただ口に南無阿彌陀佛ととなへむこゑにつきて、決定往生のおもひをなすべし。その決定の心をやがて深心とはなづくる也。その深心を具しぬれば決定して往生する也。詮ずるところは、とにもかくにも念佛して往生すといふ事をふかく信じてうたがはぬを、深心とはなづけて候なり。

【五】三に廻向發願心といふは、是亦別の心には候はず。わが所修の行業を、一向に極樂に廻向して、往生をねがふ心也。

【六】かくのごときの三心を具して、かならず往生すべし。此心一つもかけぬれば往生せずと善導は釋し給へる也。たとひ眞實の心ありてうへをかざらずとも、佛の本願をうたがはば、すでに深心かけたる念佛也。たとひ疑心なくとも、外をかざりて內に實の心なくば、至誠心かけたる人なるべし。たとひこの二心を具して、かざる心も疑心もなくとも、極樂

【七】臨終の悪しきは三心具足せぬが爲めのこと。

にむまれむとおもふ心なくば、廻向發願心かけぬべし。三心を意えわかつ時には、かくのごとく別別なる樣なれども、詮ずるところは、眞實の心をこして、ふかく本願を信じて、往生をねがふ心を三心具足の心とは申也。誠に是ほどの心だにも具足せずしては、いかゞ往生ほどの大事をばとげ給ふべきや。此心は申せば又やすき事にて候也。これをかやうに意えしらねばとて、又え具足せぬ心にては候はぬ也。その名をだにもしらぬものも、この心をばそなへつべく候。又よく〳〵しりたらん人の中にも、そのまゝに具せぬも候ひぬべき心ばへにて候也。さればこそいふに甲斐なき人數ならぬものどもの中よりも、ただひらに念佛申すばかりにて、往生したりといふ事は、むかしより申つたへたる事にて候へ。それらはみなしらねども三心を具したる人にてありけりと意えらるる事にて候也。

【七】又年ごろ念佛申たる人の、臨終のわろき事の候は、さきに申つるやうに、うへばかりをかざりて、たうとき念佛者と人にいはれんとのみ思ひて、下にはふかく本願をも信ぜず。まめやかに往生をもねがはぬ人にてこそは候らめと意えられ候也。されば此三心を具せざるゆへに、臨終もわろく、往生もせぬ事にて候也としろしめすべき也。かく申候へば、さては往生は大事の事にこそとおぼしめす事ゆめ〳〵候まじき也。一定往生すべしと思ひとらぬ心を、やがて深心かけて往生せぬ心とは申候へば、いよ〳〵一定の往生とこそおぼしめすべき事にて候へ。まめやかに往生の心ざしありて、彌陀の本願をうたがはずして念佛を申さん人は、臨終のわろき事は大方は候まじき也。そのゆへは、佛の來迎し給ふ事

【八】往生の行には正行を修すべきこと。

は、もとより行者の臨終正念のために候也。それを意えぬ人は、みなわが臨終正念にて念佛申たらむ時に佛はむかへ給ふべき也とのみ意えて候は佛の願をも信ぜず、經の文をも意えぬ人にて候也。そのゆへは、『稱讃淨土經』にいはく「佛慈悲をもて加へ祐けて、心をしてみだらしめ給はず」ととかれて候へば、ただの時によく〳〵申をきたる念佛によりて、臨終にかならず佛は來迎し給ふべし。佛の來迎し給ふを見たてまつりて、行者正念に住すと申す義にて候也。しかるに、さきの念佛をむなしく思ひなして、よしなく臨終正念をのみいのる人などの候は、ゆゆしき僻胤にいりたる事にて候也。されぱほとけの本願を信ぜん人は、かねて臨終をうたがふ心あるべからずとこそおぼえ候へ。ただ當時申さん念佛をばいよ〳〵至心に申べきにて候。いつかは佛の本願にも、臨終の時念佛申たらむ人をのみ迎へんとはたて給ひて候。臨終の念佛にて往生すと申事は、日比往生をもねがはず、念佛をも申さずして、ひとへにつみをのみつくりたる惡人の、すでに死なんとする時に、はじめて善知識のすすめにあひて、念佛して往生すとこそ『觀經』にもとかれて候へ。もとよりの行者は、臨終の沙汰をばあながちにすべき樣は候はぬ也。佛の來迎一定ならば、臨終の正念も亦一定とおぼしめすべき也。此大意をもて、よく〳〵御心をとどめて意えさせ給ふべく候。

【八】又罪をつくりたる人だにも念佛して往生す。まして法花經などうちよみて、念佛申さんは、何かはくるしかるべきと人人の申候らん事は、京邊にもさやうに申候人々おほく

候へば、まことにさぞ候らん。それは餘宗の意にてこそ候らめ。よしあしをさだめ申べきに候はず。僻事と申さば、をそれあるかたおほく候。ただし淨土宗の意、善導の御釋には往生の行に大にわかちて二つとす。一には正行、二には雜行也。はじめに正行といふは、是にあまたの行あり。はじめに讀誦正行といふは、これは『無量壽經』、『觀經』、『阿彌陀經』等の三部經を讀誦する也。次に觀察正行といふは、これはかの國の依正二報のありさまを觀ずる也。次に禮拜正行といふは、これは阿彌陀ほとけを禮拜する也。次に稱名正行といふは、南無阿彌陀佛ととなふる也。次に讚嘆供養正行といふは、これは阿彌陀佛を讚嘆したてまつる也。これをさして五種の正行となづく。讚嘆と供養とを二つの行とする時は、六種の正行とも申也。此正行に付てふさねて二つとす。一には一心にもはら彌陀の名號をとなへたてまつりて、立居起臥、晝夜に忘るることなく、念々にすてざる者をこれを正定の業となづく。かの佛の本願に順ずるがゆへにと申て、念佛をもてまさしくさだめたる往生の業と立て候。もし禮誦等によるをば、なづけて助業とすと申て念佛のほかの禮拜讀誦讚嘆供養などをば、かの念佛をたすくる業と申て候也。さてこの正定業と助業とをのぞきて、そのほかのもろ〳〵の業をばみな雜行となづく。布施持戒忍辱精進等の六度萬行も『法花經』をもよみ、眞言をもをこなひ、かくのごとくのもろ〳〵の行をば、みなこと〴〵く雜行となづく。さきの正行を修するをば、專修の行者といひ、のちの雜行を修するをば、雜修の行者と申候也。この二行の得失を判ずるに、さきの正行を修

するには、心つねにかの國に親近して、憶念ひまなく、のちの雜行を行ずるには、心つねに間斷す。廻向してむまるる事をうべしといへども、すべて疎雜の行となづくといひて、極樂にうとき行といへり。又專修のものは、十人は十人ながらむまれ、百人は百人ながらむまる。何をもてのゆへに、外の雜緣なくして正念をうるがゆへに、彌陀の本願とあひ應ずるがゆへに、釋迦のをしへにたがはざるがゆへに、雜行のものは百人が中に一二人むまれ、千人が中に四五人むまる。何をもてのゆへに、雜緣亂動して正念をうしなふがゆへに、彌陀の本願と相應せざるがゆへに、釋迦のをしへと相違するがゆへに、諸佛の語にしたがはざるがゆへに、係念相續せざるがゆへに、憶念間斷するがゆへに、みづからも往生の業をさへ他の往生をもさふるがゆへになど釋せられて候めれば、善導和尚をふかく信じて、淨土宗にいらん人は、一向に正行を修すべしと申す事にてこそ候へ。そのうへは善導のをしへをそむきて餘行をくはへんと思はん人は、をの／＼ならひたる樣ともこそ候らめ。それをよしあしとはいかゞ申候べき。善導のすゝめ給へる行どもをさきて、すゝめ給はぬ行をすこしにてもくはふべき樣なしと申ことにてこそ候へ。すゝめ給へる正行ばかりだにもなを物うき身にて、いまだすゝめ給はぬ雜行を加へんことは、まことしからぬかたも候ぞかし。又つみをつくる人だにも念佛して往生す。まして善なれば「法花經」などをよまんは、何かくるしからんなど申候らんこそ、無下にきたなくおぼし候へ。往生をたすけばこそいみじくも候はめ。さまたげにならぬばかりを、いみじきこととてくはへをこなはんことは、な

【九】餘行の人をあなづりまじきこと。

にかは詮にて候べき。されば惡をば佛の心につくれとやすゝめさせ給ふ。かまへてとゞめよとこそいましめ給へども、凡夫のならひ當時のまよひにひかれて、惡をつくるは力をよばぬ事にてこそ候へ。まことに惡をつくる人の樣に、しかるべくて經もよみたく、餘行もくはへたからんことはちからをよばず。但『法花經』などをよまんことを、一言葉なりとも惡をつくらんことにいひならべて、それもくるしからねば、まして是はなど申すらんことこそ不便の事にて候へ。ふかき御のりもあしく意うる人にあひぬれば、かへりてものならずきこへ候ことこそ、あさましくおぼえ候へ。これをかやうに申候へば、餘行の人々ははらをたつことにて候へば、御心一つに意得て、ひろくちらさせ給まじく候。あらぬさとりの人のともかくも申候はん事をば、耳にききいれさせ給はで、ただ一筋に善導の御すゝめにしたがひて、いますこしも、一定往生する念佛の數遍を申そへんとおぼしめすべき事にて候也。餘行はたとひ往生のさはりとこそならずとも、不定の往生とはきこえて候めれば、一定往生の正行を修すべきにて候なり。正行のいとまを餘行にいれて、不定の往生の業をくはへん事は、且は損にては候はずや。よく〳〵意えさせ給ふべきことにて候也。

【九】たゞしかく申候へば、雜行をくわへん人は、ながく往生すまじなど申事にては候はず。いかさまにも餘行の人なりとも、すべて人をくだし人をそしる事は、ゆゝしきとがおもき事にて候也。よくよく御つゝしみ候て、雜行の人なればとて、あなづる御心候ま

じく候也。よかれあしかれ、人のうへのよしあしをばおもひいれぬがよき事にて候也。又心ざし本より此門にありて進みぬべからんをば、こしらへすゝめさせ給ふべく候。さとりたがひてあらぬさまならん人などに、論じあはせ給ふ事はあるまじき事にて候。よくよくならひしり給ひたる聖たちだにも、さやうの事をばつゝしみておはしましあひて候ぞ、まして殿原などの御身にては、一定僻事にて候はんずるに候。唯御身一つにまづよく〳〵往生をねがひて、念佛をはげませ給ひて、位たかき往生をとげて、いそぎ娑婆に還りて人をばみちびかせ給へ。かやうにくはしくかきつけて申候事も、返々はゞかりおもふ事にて候也。あなかしこ御披露候まじく候。あなかしこ〳〵

三月十四日　　　　源空

【大胡太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事】此狀は勅傳第廿五卷に在り。但し勅傳には實秀念佛の安心不審につき小屋原の蓮性を使者として上人に尋ねければ、上人眞觀房を執筆として書きつかはされける由見え、妻室の語なし。されどその文辭より推して妻室へ遣はされしものならんと古來の說多く一致す。

【一】御返事の消息をのぶること。

【二】の念佛は阿彌陀佛の本願なること。

和語燈錄　卷第四

大胡の太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事

【一】御文こまかにうけ給はり候ぬ。まづはるかなる程に、念佛の事きこしめさんがために、わざと御つかひ上せさせ給ひて候。念佛の御心ざしの程返々あはれに候。さてたづねおほせられて候念佛の事は、往生極樂のためには、いづれの行なりといへども、念佛にすぎたる事は候はぬ也。

【二】そのゆへは念佛はこれ彌陀の本願の行なるがゆへ也。本願といふは阿彌陀ほとけいまだほとけになり給はざりしむかし、法藏菩薩と申しゝいにしへ、ほとけの國土をきよめ衆生を成就せむがために、世自在王如來と申しゝほとけの御まへにして、四十八の大願ををこし給ひしその中に、一切衆生の往生のために一つの願をこし給へる、これを念佛往生の本願と申也。すなはち『無量壽經』の上卷にいはく「もし我佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂し我が國に生ぜんと願じて乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺を取らじ」已上善導和尙此願を釋しての給はく「若し我成佛せんに十方の衆生我が名號を稱して下十聲に至るまで、もし生ぜずば正覺を取らじ」と。彼の佛今現に世に在して成佛したまふ。當に

【二三】往生の行には念佛最もすぐること

知るべし。本誓の重願虚しからず衆生稱念すれば必ず往生を得と已」念佛といふは佛の法身を憶念するにもあらず。佛の相好を觀念するにもあらず。たゞ一心にもはら阿彌陀ほとけの名號を稱念する、これを念佛とは申也。かるがゆへに稱我名號とはいふ也。念佛の外の一切の行は、これ彌陀の本願にあらざるがゆへに、たとひめでたき行なりといへども、念佛にはおよばざる也。おほかたそのくにゝむまれんとおもはんものは、そのほとけのちかひにしたがふべき也。されば彌陀の淨土にむまれんとおもはんものは、彌陀の誓願にしたがふべき也。本願の念佛と、本願にあらざる餘行とさらにたくらぶべからず。かるがゆへに往生極樂のためには、念佛の行にすぎたる事は候はぬ也と申す也。往生にあらざる道には餘行又をの〳〵つかさどるかたあり。しかるに衆生の生死をはなるゝみち、ほとけのをしへさま〴〵におほく候へども、このごろの人の三界を出て生死をはなるゝみちは、ただ極樂に往生し候ばかり也。このむね聖教のおほきなることはり也。

【二三】次に極樂に往生するに、その行さま〳〵におほく候へども、われらが往生せん事念佛にあらずはかなひがたく候也。そのゆへは念佛はこれ佛の本願なるがゆへに、願力にすがりて往生する事はやすし。されば詮ずるところは、極樂にあらずば生死をはなるべからず、念佛にあらずば極樂へむまるべからざる者也。ふかくこのむねを信ぜさせ給ひて、一すぢに極樂をねがひ、一すぢに念佛して、このたびかならず生死をはなれんとおぼしめすべき也。又一々の願のをはりに「若し爾らずば正覺を取らじ」とちかひ給へり。しかるに阿彌

【四】彌陀の光明はひとり念佛の衆生を照し給ふこと。

陀佛ほとけになり給ひてよりこのかた、すでに十劫をへ給へり。まさにしるべし誓願むなしからず、みなこと〴〵く成就し給へることを。其中に念佛往生の願ひとりむなしかるべからず。しかれば衆生稱念するもの一人もむなしからず。みなかならず往生する事をう。もししからずばたれかほとけになり給へる事を信ずべきや。三寶滅盡の時なりといへども一念すればなを往生す。五逆重罪の人なりといへども十念すれば又往生す。いかにいはんや三寶の世に生れて、五逆をつくらざるわれら彌陀の名號をとなへんに往生うたがふべからず。いまこの願にあへる事は、まことにこれおぼろげの縁にあらず。よく〳〵よろこびおぼしめすべし。たとひ又あふといふとも、もし信ぜずばあはざるがごとし。いまふかくこの願を信ぜさせ給へり。往生疑おぼしめすべからず。必ふた心なく、よく〳〵御念佛候ひて、このたび生死をはなれ、極樂にむまれさせ給ふべし。

【四】又『觀無量壽經』にいはく、「一々の光明は遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨てたまはず已上」これは彌陀の光明たゞ念佛の衆生をてらして、餘の一切の行人をば照さずといふ也。但餘の行を行じても極樂をねがはゞ、ほとけのひかりてらして攝取し給ふべし。なんぞたゞ念佛のものばかりをえらびててらし給ふやとならば、善導和尚釋しての給はく、「彌陀の身色は金山の如く相好の光明は十方を照らしたまふ。唯念佛のみ行りて光攝を蒙る。當に知るべし、本願最も強と爲すを。」已上念佛はこれ彌陀本願の行なるがゆへに、成佛の光明かへりて本地の誓願をてらし給ふ也。餘行はこれ本願にあらざるがゆへに、彌陀の光

【五】念佛は釋尊付屬の行なること。

【六】六方の諸佛は念佛往生の義を證誠し給ふこと。

明らひててらし給はざる也。いま極樂をもとめん人は、本願の念佛を行じて、攝取のひかりにてらされんとおぼしめすべし。これにつけても念佛の大切に候。よく〳〵申せ給べし。

【五】又釋迦如來この經の中に、定散のもろ〳〵の行をときをはりて後に、まさしく阿難に付屬し給時に、上にとくところの定善の十三觀、散善の萬行をば付屬せずして、只念佛の一行を付屬し給へり。經に云「佛阿難に告げたまはく、汝よくこの語を持て、この語を持てとは即ち無量壽佛の名を持つなり」善導和尚この文を釋しての給はく「佛阿難に告げたまはく汝よくこの語を持てより已下は正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通することを明す。上來定散兩門の益をとくと雖も佛の本願に望むれば、意衆生をして一向に専らに彌陀の佛名を稱せしむるに在り」已上 これは定散のもろ〳〵の行は、彌陀の本願にあらず。故に釋迦如來往生の行を付屬し給ふに、餘の定善散善をば付屬せずして、念佛はこれ彌陀の本願なるがゆへに。まさしくえらびて本願の行を付屬し給へるなり。いま釋迦のをしへにしたがひて往生をもとめんもの、付屬の念佛を修して釋尊の御意にかなふべし。これにつけても又よく〳〵御念佛候て、ほとけの付屬にかなはせ給ふべし。

【六】又六方恒沙の諸佛、舌をのべて三千大千世界におほひて、もはらたゞ彌陀の名號をとなへて往生すといふは、これ眞實なりと證誠し給ふ也。これ又念佛は彌陀の本願なるが故に六方恒沙の諸佛是を證誠し給ふ也。餘の行は本願にあらざるがゆへに諸佛も證誠し給はざる也。これにつけても又よく〳〵御念佛せさせ給ひて、六方の諸佛の護念をかうぶらせ

【七】專修の念佛のみよく往生を得ること。

給べし。彌陀の本願釋尊の付屬、六方諸佛の護念、一々にむなしからず。このゆへに念佛の行は諸行にはすぐれたる也。

【七】又善導和尚はこれ彌陀の化身也。淨土の祖師おほしといへども、たゞひとへに善導によるに、往生の行おほしといへども、をほきにわかちて二とし給へり。一には專修、いはゆる念佛也。二には雜修いはゆる一切のもろ〳〵の行也。上にいふところの定散等これ也。『往生禮讃』に云「若し能く上の如く念々相續して畢命を期となせば、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。何を以ての故に。外の雜緣なく正念を得るが故に。佛の本願と相應するが故に。敎に違せざるが故に。佛語に隨順するが故に。若し專をすてゝ雜業を修せんと欲せば、百時希に一二を得、千時希に五三を得。何を以ての故に。雜緣亂動して正念を失ふが故に。佛の本願と相應せざるが故に。敎と相違するが故に。佛語に順せざるが故に。係念相續せざるが故に。憶想間斷するが故に」已上 これは專修と雜行との得失なり。得といふは往生する事をうるをいふ。いはゆる念佛するものは十人はすなはち十人ながら往生し、百人はすなはち百人ながら往生すといふこれ也。失といふはいはゆる往生の益をうしなへる也。雜修のものは百人が中にまれに一二人往生する事をえてその餘はむまれず千人が中にまれに五三人むまれて、その餘は又むまれず。專修のもののみみなむまるゝ事をうるは何のゆへぞ、阿彌陀佛の本願に相應するがゆへ也。釋迦如來のをしへに隨順せるがゆへ也。雜業のものゝむまるゝ事のすくなきはなにのゆへぞ。彌陀の本願にたがへるがゆへ也。釋

迦のをしへにしたがはざるがゆへ也。念佛して淨土をもとむるものは、二尊の御こころにふかくかなへり。雜を修して淨土をもとむるものは、二佛の御意にそむけり。善導和尚二行の得失を判ずる事はこれのみにあらず、觀經疏と申す文の中におほくの得失をあげたり。しげきがゆへにいださず。これをもてしりぬべし。をよそ念佛は、そしるものは地獄におちて多劫苦をうくる事きはまりなし。信ずるものは淨土に生れて永劫樂をうくる事きはまりなし。なを／＼いよ／＼信心をふかくして、ふた心なく念佛せさせ給ふべし。くはしき事は御文にはつくしがたく候。この御つかひ申候べし。

正月二十八日　　源空

【熊谷入道へつかはす御返事】勅傳第二十八卷に之と略同文のものあり、但し勅傳には津戸三郎入道尊願へ遣はす御文と在り。

【熊谷入道】熊谷次郎直實のこと。初め源賴朝の臣なりしが、安居院の聖覺法印につきて出離の要を聞き、黒谷の法然上人に師事して出家す。名を法力房蓮生と改め、後故鄉武州熊谷の鄉に歸り、承元二年九月十四日寂す。

熊谷入道へつかはす御返事

御文くはしくうけ給はり候ぬ。加樣にまめやかに大事におぼしめし候らん、返々ありがたく候。まことにこのたびかまへて往生しなむとおぼしめしきるべく候。うけがたき人身すでにうけたり。あひがたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂をねがふ心をこりたり。彌陀の本願ふかし。往生はたなごゝろにある也。ゆめ／＼御念佛をこたらず、決定往生のよしを存ぜさせ給ふべく候。何事もとゞめ候ぬ。

九月十六日　　源空

【津戸三郎入道へつかはす御返事】勅傳第二十八卷に錄載す。

【一】念佛は有智無智を簡ばざること。

津戸三郎入道へつかはす御返事

御文くはしくうけ給はり候ぬ。又たづねおほせられて候事ども、おほやうしるし申候。

【一】一、熊谷入道津戸の三郎は、無智のものなればこそ、但念佛をばすゝめたれ、有智の人には、かならずしも念佛にはかぎるべからずと申よしきこえて候らん、きはめたるひが事にて候。そのゆへは念佛の行は、もとより有智無智にかぎらず、彌陀のむかしちかひ給ひし本願も、あまねく一切衆生のため也。無智のためには念佛を願じ、有智のためには餘のふかき行を願じ給ふ事なし。十方衆生の爲に、ひろく有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、賢愚男女、もしはほとけの在世の衆生、もしはほとけの滅後のこのごろの衆生、もしは釋迦の末法萬年の後、三寶みなうせてのちの衆生までもみなこもれる也。

又善導和尚彌陀の化身として、專修念佛をすゝめ給へるも、ひろく一切衆生のためにすゝめて、無智の人にのみかぎる事は候はず。ひろき彌陀の本願をたのみ、あまねき善導のすゝめをひろめんもの、いかでか無智の人にかぎりて、有智の人をへだてんや。もししからば彌陀の本願にもそむき、善導の御意にもかなふべからず。さればこの邊にまふできて、往生のみちをとひたづね候人には、有智無智を論ぜず、みな念佛の行ばかりを申候也。

しかるに虛言を構へて、さやうに念佛を申とゞめんとするものは、さきの世に念佛三昧、

【修行有るものを】五會法事讃の文。

淨土の法門をきかず、のちの世に必ず三惡道にかへるべきものゝ、さやうの事をばたくみ申候事にて候也。そのよし經釋に見えて候也。「修行有るものを見ては瞋毒を起し、方便破壞して競ひて怨を生ず。かくの如き生盲闡提の輩は、頓教を毀滅して永く沈淪し大地微塵劫を超過するとも未だ三途の身を離るゝことを得ず」と申たる也。この文の意は、淨土をねがひ念佛を行ずるものを見ては、いかりをこし毒心をふかくして、はかりごとをめぐらし、さま〴〵の方便をなして、念佛の行をやぶり、あらそひてあだをなし、是をとゞめんとするなり。かくのごときの人は、むまれてよりこのかた、佛法の眼しゐて、ほとけのたねをうしなへる闡提のともがら也。この彌陀の名號をとなへて、ながき生死をたちまちにきり、常住の極樂に往生すといふ頓教の御法をそしりほろぼして、このつみによりて、ながく三惡道にしづむなり。かくのごとき人は、大地微塵劫をすぐとも、ながく三惡道の身をはなるゝ事をうべからずといへる也。さればさやうに虚言をたくみて申候らん人をば、かへりてあはれむべきものなり。さほどのものゝ申さんによりて、念佛にうたがひをなし、不信をこさんものは、いふにたらぬ程の事にてこそは候はめ。おほかた彌陀に緣あさく、往生に時いたらぬものは、きけども信ぜず、をこなふをみてははらをたて、いかりをふくみて、さまたげんとする事にて候也。その意をえて、いかに人申とも、御心ばかりはゆるがせ給ふべからず。あながちに信ぜざらんは、佛なをちからをよび給ふまじ。いかにいはんや凡夫はちからをよぶまじき事也。かゝる不信の衆生のために、慈悲をこし利益せん

【二】善根も念佛に結緣助成せしむるは妨げざること。

【三】念佛は行住坐臥時處諸緣をきらはぬこと。

【四】異解異學の人を輕しめず、專修念佛がめでたきこと。

と思はんにつけても、とく極樂へまいりてさとりをひらきて、生死にかへりて誹謗不信のものをもわたし、一切衆生をあまねく利益せんと思べき事にて候也。このよしを意えておはしますべし。

【二】一、一家の人々の善根に結緣助成せん事、この條左右にをよばず、もともしかるべき事に候。念佛の行をさまたぐる事をこそ、專修の行には制したる事にて候へ。人々のあるひは堂をつくり佛をつくり、經をもかき僧をも供養せんには、ちからをくはへ緣をむすばんが、念佛をさまたげ、專修をさふる程の事には候まじき也。

【三】一、念佛申させ給はんには、心をつねにかけて、口にわすれずとなふるがめでたき事にて候也。念佛の行は、もとより行住坐臥時處諸緣をきらはぬ行にて候へば、たとひ身もきたなく、口もきたなくとも、心をきよくしてわすれず申させ給はん事は、返々神妙に候。ひまなくさやうに申させ給はんこそ、返々ありがたくめでたく候へ、いかならんところ、いかならんときなりとも、わすれず申させ給はゞ、往生の業にかならずなり候はんずる也。この心なからん人には、をしへさせ給ふべし。いかならん時にも申されざらんをこそ、ねんじて申さばやとおもふべきに、申されんをねんじて申させ給はぬ事はいかでか候べき。ゆめ〳〵候まじ。たゞいかなるおりにもきらはず申させ給ふべし。

【四】一、念佛の行あながちに信ぜざらん人に論じあひ、又あらぬ行、ことさとりの人にむかひて、いたくしゐておほせらるゝ事候まじく候。異解異學の人を見てはこれを恭敬して、

かろしめあなどる事なかれと申たる事にて候也。されはおなじ心に、極樂をねがひ念佛を申さん人には、たとひ塵刹の外の人なりとも同行のおもひをなして、一佛淨土にむまれんとおもふべき事にて候也。阿彌陀佛に縁なく、極樂淨土にちぎりすくなく候はん人の、信もをこらず、ねがはしくもなく候はんにはちからをよばず、たゞ心にまかせていかならんをこなひもして、後生たすかりて、三惡道をはなるべき事を、人の心にしたがひてすゝめ給ふべき也。又さは候へども、ちりばかりもかなひぬべからん人には、阿彌陀ほとけをすすめ、極樂をねがはすべき也。いかに申すともこの世の人の、極樂にむまれて生死をはなれん事、念佛ならで極樂にむまるゝ事は候まじき事にて候也。このあひだのことをば、人の心にしたがひてはからふべきにて候なり。いかさまにも物をあらそふ事はゆめ／＼候まじき事に候。もしはそしり、もしは信ぜざらんものをば、ひさしく地獄にありて、又地獄へ還るべきものなりとよく／＼意えて、こわからでこしらへすゝむべきにて候。又もとおもひまいらせ候へども、いかなる人申とも、念佛の御心などたぢろきおぼしめす事有まじく候。たとひ千佛世にいでて、念佛は往生すべからずと、まのあたりをしへさせ給ふとも、これは釋迦彌陀よりはじめて、恆沙のほとけの證誠せさせ給ふ事なればとおぼしめして、心ざしを金剛よりもかたくして、このたびかならず阿彌陀ほとけの御まへゝ參らんずると、おぼしめすべき事にて候也。かくのごときの事かたはしを申さんに、御心え候て、わがため人のためにをこなはせたまふべし。

【眞觀】眞觀房感西のこと。感西は十九歳にして法然上人に師事し、常隨の弟子となりしが、正治元年師に先立ちて寂す。
【黑田の聖人につかはす御文】勅傳第二十一卷に載す世にこの文を小消息と稱して尊重す淨土の安心起行を明すに最も要を盡したるものなり。
【黑田の聖人】伊賀國名張郡黑田に住せる聖者。氏名詳かならず。
【法滅】末法萬年の後佛法滅盡すと云ふ説によるもの但し念佛は法滅後猶百年は存在して衆生を救濟すと經に在り。

九月十八日　眞觀承

黑田の聖人へつかはす御文

末代の衆生を往生極樂の機にあてゝみるに、行すくなしとてうたがふべからず。一念十念にたりぬべし。罪人なりとてうたがふべからず、罪根ふかきをもきらはず、時くだれりとてうたがふべからず。法滅已後の衆生なを往生すべし。いはんやこのごろをや。わが身わろしとてうたがふべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといへり。十方に淨土おほけれども、西方をねがふは、十惡五逆の衆生もむまるゝゆへ也。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは、三念五念にいたるまでみづから來りてむかへ給ふがゆへ也。諸行の中に念佛をもちゆるは、かのほとけの本願なるがゆへ也。今彌陀の本願に乘じて往生してんには、願として成ぜずといふ事あるべからず。本願に乘ずる事は、たゞ信心のふかきによるべし。うけがたき人身をうけて、あひがたき本願にあひて、をこしがたき道心をこして、はなれがたき輪廻のさとをはなれて、むまれがたき淨土に往生せん事は、よろこびの中のよろこび也。つみをば十惡五逆のものなをむまると信じて、小罪をもをかさじとおもふべし。罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからずと信じて無間に修すべし。一念なをむまる、いかにいはんや多念をや。阿彌陀佛は不取正覺の詞を成就して、

現にかのくににましませば、さだめていのちをはらん時には來迎し給はんずらん。釋尊はよきかなや、わがをしへにしたがひて、生死をはなれんとすと知見し給ふらん。六方諸佛はよろこばしきかな。われらが證誠を信じて、不退の淨土に往生せんとすとよろこび給ふらんと、天にあふぎ地にふしてよろこぶべし。このたび彌陀の本願にあへる事を、行住坐臥にも報ずべし、かのほとけの恩德を、たのみてもなをたのむべきは乃至十念の詞。信じてもなを信ずべきは必得往生の文なり。

越中國光明房へつかはす御返事

一念往生の義は、京中にも粗流布するよしうけ給はるところ也。をよそ言語道斷の事也。まことにほと〳〵御問にもをよぶべからざる事歟。「雙卷經」の中には、「乃至一念信心歡喜」といひ、又善導和尚の「疏」には「上一形を盡し下十聲一聲にいたるまでも、さだめて往生する事をうと信じて、乃至一念もうたがふ心なかれ」といへる。これらの文をあしく料簡するともがらの、かゝる大邪見に住して申候ところ也。乃至といひ下至といへるは、上一形をつくすをかねたる詞也。しかるをこのごろの愚癡無智のともがらの、おほく偏に十念一念なりと執して、上盡一形をすつる條、無慚無愧の事也。まことに十念一念までもほとけの大悲本願なをかならず引接し給ふ無上の功德なりと信じて、一期不退に行ずべき也。

【越中國光明房へつかはす御返事】勅傳第廿九卷に載す。

【光明房】この人の傳記詳かならず。

【一念往生】彌陀を稱する一念にて往生すと說き、多念を要せずとする說。

文證おほしといへどもこれを出すにをよばず、不足言の事也。こゝにかの邪見の人、この難をうけて答ていはく「わがいふところも、信を一念にとりて念ずべき也。しかりといひて又念佛すべからずとはいはずと云」ことばは尋常なるに似たれども、心は邪見をはなれず。しかるゆへは決定の信心をもて一念してのちは、又念ぜずといふとも、十惡五逆なをさはりをなさず。いはんや餘の小罪をやと信ずべき也といふ。このおもひに住せんものは、たとひ多念すといふとも、あにほとけの御意にかなはんや。いづれの經論いかなる人師の說ぞや。これひとへに懈怠無道心のいたり不當不善のたぐひの、ほしきまゝに惡をつくらんとおもひていひ出せる事なり。又念ぜずばその惡かの勝因をさへて、むしろ三途におちさらんや。かの一生造惡のものゝ、臨終に十念して往生するはこれ懺悔念佛のちからなり。この惡義には混亂すべからず。かれは懺悔の人也。これは邪見の人也。なを／＼不可說の事也。たとひ精進のものなりといふとも此義をきかばかならず懈怠になりなん。まれに持戒の人ありといふとも、この說を信ぜばすなはち無慚になりぬべし。をよそかくのごときの人は附佛法の外道也。師子身中のむし也。又うたがふらくは、天魔破旬のために、その正解をうばはれたるともがらの、もろ／＼の往生の人をさまたげんとするか。もともあやしむべし。ふかくをそるべし。こと／＼く筆端につくしがたし。あなかしこ／＼。

正如房へつかはす御文

【正如房へつかはす御文】勅傳第十九に載す。

正如房の御事こそ返々あさましく候へ。そののちは心ならずうときやうになりまいらせて、念佛の御信もいかゞとゆかしくおもひまいらせ候つれどもさしたる事も候はず。又申べきたよりも候はぬやうにて、思ながらなにとなくむなしくまかりすぎ候つるに、たゞれいならぬ御事、大事になどばかりうけ給はり候はんだにも、いま一度みまいらせたく、をはりまでの御念佛の事も、おぼつかなくこそおもひまいらせ候べきに、まして御心にかけてつねに御たづね候らんこそ、まことにあはれにも、心ぐるしくもおもひまいらせ候へ。左右なくうけ給はり候まゝにまいり候てみまいらせたく候へども、おもひきりてしばし出ありき候はで、念佛申候はゞやと思ひはじめたる事の候を、樣にこそよる事にて候へ。これをば退してもまいるべきにて候に、又思ひ候へば、詮じてはこの世の見參はとてもかくても候なん。屍ねを執するまどひにもなり候ひぬべし。たれとてもとまりはつべき身にも候はず。われも人も、たゞをくれさきだつかはりめにてこそ候へ。そのたえまを思ひ候も、又いつまでぞとさだめなきうへに、たとひ久しと申候とも、ゆめまぼろしいく程かは候べきなれば、たゞかまへて〳〵おなじ佛の國にまいりあひて、はちすの上にて、この世のいぶせさをもはるけ、ともに過去の因縁をもかたり、たがひに未來の化導をもたすけん事こそ、返々も詮にて候べきとはじめよりも申をき候しか。返々も本願をとりつめまいらせて、一念もうたがふ御心なく、一聲も南無阿彌陀佛と申せば、わが身はたとひいかに罪ふかくとも、佛の願力によりて、一定往生するぞとおぼしめして、よく〳〵一すぢに念佛し候べ

き也。われらが往生はゆめ〳〵わが身のよしあしきにはより候まじ。ひとへにほとけの御ちからばかりにて候べき也。わがちからばかりにては、いかにめでたき貴き人と申すとも、末法のこのごろ、たゞちに淨土にむまるゝ程の事はありがたくぞ候べき。

又佛の御ちからにて候はんには、いかに罪ふかくをろかにつたなき身なりとも、それにはより候まじ。たゞ佛の願力を信じ信ぜざるにぞより候べき。されば『觀無量壽經』にとかれて候は、むまれてよりこのかた念佛一遍も申さず、それならぬ善根もつや〳〵なくて、あさゆふものころし、ぬすみし、かくのごときのもろ〳〵のつみをのみつくりて、とし月ををくりゆけども、一念も懺悔の心もなくて、あかしくらしたるものゝ、をはりの時に、善知識のすゝむるにあひて、たゞ一聲南無阿彌陀佛と申したるによりて、五十億劫があひだ、生死にめぐるべき罪を滅して、化佛菩薩三尊の來迎にあづかりて、佛の名をとなふるがゆへに罪滅せり。われきたりてなんぢをむかふとほめられまいらせて、すなはちかの國に往生すと候。

又五逆罪と申て、現身に父をころし、母をころし、惡心をもて佛身をそこなひ、諸宗を破り、かくのごとくをもきつみをつくりて、一念懺悔の心もなからん。そのつみによりて無間地獄におちておほくの劫をおくりて苦をうくべからん者、をはりの時に善知識のすゝめによりて、南無阿彌陀佛と十聲となふるに、一聲にをの〳〵八十億劫が間生死にめぐるべき罪を滅して往生すとかれて候めれば、さほどの罪人だにも、たゞ十聲一聲の念佛にて

往生はし候へ。まことに佛の本願のちからならでは、いかでかさる事候べきともおぼえ候。

本願むなしからずといふ事は、これにても信じつべくこそ候へ。これはまさしき佛說にて候。佛の御言ばは一言もあやまらずと申候へば、たゞあふぎて信ずべきにて候。これをうたがはゞ佛の御そら事と申にもなりぬべく候。かへりては又そのつみも候ひぬべしとこそおぼえ候へ。ふかく信ぜさせ給ふべく候。さて往生させおはしますまじきやうにのみ申きかせまいらする人々の候らんこそ、返々あさましく心ぐるしく候へ。いかなる智者、めでたき人々おほせらるゝことも、それになおどろかせおはしまし候ぞ。をの〳〵のみちにはめでたく貴き人なりとも、さとりことに行ことなる人の申候事は、往生淨土のためには中々ゆゝしき退縁惡知識とも申ぬべき事どもにて候。只凡夫のはからひをばきゝいれさせおはしまさで、一すぢに佛の御ちかひをたのみまいらせおはしますべく候。さとりことなる人の、往生いひさまたげんによりて、一念もうたがふ心あるべからずといふことはりは、善導和尙のよく〳〵こまかにおほせられをきたる事にて候也。たとひおほくのほとけ空の中にみち〳〵て、ひかりをはなちしたをのべて、惡をつくりたる凡夫なりとも、一念してかならず往生すといふ事はひが事ぞ、信ずべからずとの給ふとも、それによりて一念もうたがふ心あるべからず。

そのゆへは阿彌陀佛のいまだ佛になり給はざりしむかし、はじめて道心をこし給ひし

時、われ佛になりたらんに、わが名をとなふる事、十聲一聲までせんもの、わが國にむまれずば、佛にならじとちかひ給ひたりし。その願むなしからず、すでに佛になり給へり。又釋迦佛この娑婆世界にいでて、一切衆生のためにかの本願をとき、念佛往生をすゝめ給へり。又六方恆沙の諸佛、この念佛して一定往生すと釋迦佛のとき給へるは決定なり。もろ〳〵の衆生一念もうたがふべからずと、あらゆる諸佛みなこと〳〵く證誠し給へり。すでに阿彌陀佛は願をたて、釋迦佛はその願をとき、六方諸佛はその說を證誠し給へるうへは、このほかになにほとけの又これらの諸佛にたがひて、凡夫往生せずとはの給ふべきぞといふことはりをもて、佛現じての給ふとも、それにおどろきて信心をやぶり、うたがふ心あるべからず。いはんや菩薩たちのの給はんをや。又辟支佛をやと、こま〳〵と善導は釋し給ひて候也。ましてこのごろの凡夫のいかに申候はんによりて、げにいかゞあらんずらんなど、不定におぼしめす御心ゆめ〳〵候まじく候。いかにめでたき人と申すとも、善導和尙にまさりて往生の道をしりたらん事もかたく候。善導は又凡夫にあらず阿彌陀佛の化身也。阿彌陀佛のわが本願をひろめて、衆生を往生せさせむ料にかりに人とむまれて、善導とは申候也。そのをしへは、申さば佛說にてこそ候へ。あなかしこ〳〵うたがひおぼしめすまじきにて候。

又はじめより佛の本願に、信をこさせおはしまして候し御心の程みまいらせ候に、なにしにかは往生はうたがひおぼしめし候べき。經にとかれて候ごときは、いまだ往生の

道しらぬ人にとりての事にて候。もとよりよく〳〵きこしめしたゝめて、そのうへ御念仏の功つもりたる事にて候はんには、かならず又臨終の善知識にあはせおはしまさずとも、往生は一定せさせおはしますべき事にてこそ候へ。中々あらぬさまなる人はあしく〳〵候ひなん。たゞいかならん人にても、尼女房なりとも、つねに御まへに候はん人に、念仏申させてきかせおはしまして、御心一つをつよくおぼしめして、たゞ中々一向に凡夫の善知識をおぼしめしすてゝ、仏を善知識にたのみまいらせ給ふべく候。もとより仏の来迎は臨終正念のためにて候也。それを人のみな臨終正念にて念仏申たるに、仏はむかへ給ふとのみ心えて候は、仏の願を信ぜず、経の文を信ぜぬにて候也。「称讃浄土経」には「慈悲をもてくはへたすけて心をしてみだらざらしめ給ふ」ととかれて候也。たゞの時によく〳〵申をきたる念仏によりて、仏は来迎し給ふ時に正念に住すと申すべきにて候也。たれも仏をたのむ心はすくなくして、よしなき凡夫の善知識をたのみ、さきの念仏をばむなしくおもひなして、臨終正念をのみいのる事どもにて候がゆゝしきひがゐんの事にて候也。これをよく〳〵御意え候て、つねに御目をふさぎ掌をあはせて、御心をしづめておぼしめすべく候。ねがはくは阿弥陀仏本願あやまたず、臨終の時かならずわがまへに現じて慈悲をもてくはへたすけて、正念に住せしめ給へと御心にもおぼしめし、口にも申させ給ふべく候。これにすぎたる事候まじ。心よくおぼしめす事の候まじき也。加様に念仏をかきこもりて申候はんなどおもひ候も、ひとへにわが身一つのためとのみはもとよりおもひ候はず、おり

しもこの御事をかくうけ給はり候ぬれば、いまよりは一念ものこさず、こと／＼くその往生の御たすけになさんとこそ廻向しまいらせ候はんずれば、かまへて／＼おぼしめすさまに、遂させまいらせ候はゞやとこそふかく念じまいらせ候へ。もしこの心ざしまことならば、いかでか又御たすけにもならで候べき。たのみおぼしめさるべきにて候。をほかたは申いで候ひし一ことばに、御心をとゞめさせおはします事も、この世一の事にて候はじとさきの世もゆかしく、あはれにこそおもひしらるゝ事にて候へば、うけ給はるごとくは、このたびまことにさきだゝせをはしますにても、又をもはずにさきだちまいらせ候事になるさだめなきにて候とも、つゐに一佛淨土にまいりあひまいらせ候はんはうたがひなくおぼえ候。ゆめまぼろしのこの世にていま一度などとおもひ申候事はとてもかくても候ひなん。これをば一すぢにおぼしめしすてゝ、いとゞもふかくねがふ御心をもまし、念佛をもはげましおはしまして、かしこにてまたんとをぼしめすべく候。返々もなを／＼往生をうたがふ御心候まじく候。

五逆十惡のをもき罪つくりたる惡人、なを十聲一聲の念佛によりて往生をし候はんに、まして罪つくらせおはします御事はなに事か候べき。たとひつくらせ候べきにても、いく程の事かは候べき。この經にとかれて候罪人にはいひくらぶべくやは候。それにまづ心ををこし出家をとげさせおはしまして、めでたき御のりにも緣をむすび、時にしたがひ日にしたがひて、善根のみこそはつもらせおはしますにて候らめ。そのうへふかく決定往生の法

【禪勝房にしめす御詞】勅傳に第四十五卷に禪勝房へ示されける御詞七箇條許りあり。但しこの詞と異る。

文を信じて、一向專修の念佛にいりて、一すじに彌陀の本願をたのみて、ひさしくならせおはしまして候。なに事にか一事も往生をうたがひおぼしめし候べき。專修の人は、百人は百人ながら十人は十人ながら往生すと、善導の給ひて候へば、ひとりそのかずにもれさせをはしますべきかはとこそおぼえ候へ。善導をもかこち、佛の本願をもせめまいらせ給ふべく候。心よはくばゆめ／＼をぼしめすまじく候。あなかしこ／＼。ことはりをや申ひらき候とおもひ候程に、よにおほくなり候ひぬる。さやうのおりふし骨なくやとおぼえ候へども、もしさすがのびたる御事にても又候らんえしり候はねば、このたび申候はではいつをかまち候べき。もしのどかにきかせおはしまして、一念も御心をすゝむるたよりにやなり候とおもひ候ばかりに、とゞめえ候はで、これほどこまかになり候ぬ。機嫌をしり候はねば、はからひがたくてわびしくこそ候へ。もし無下によはくならせおはしましたる御事にて候はゞ、これは事ながく候べく候。要をとりてつたへまいらせおはしますべく候。うけ給はり候まゝになにとなくあはれにおぼえ候てお返し又申候也。

禪勝房にしめす御詞

【一】阿彌陀佛は一念となふるを一度の往生にあてがひてをこし給へる本願也。かるがゆへに十念は十度むまるゝ功德也。一向專修の念佛者になる日よりして臨終の時にいたるまで

【禪勝房】遠江國岩田郡見付の里蓮華寺の住僧。初め天台宗なりしが後法然上人に歸して上洛し、大に淨業を修したりしが、晩年鄕里にかへり番匠となりて念佛を修せりと云ふ。

【一】一念は一度の往生にあてがひおかれしこと。

【二】念佛は生れつきのまゝにて申すべきこと。

【三】信と行とは一致すべきこと。勅傳第二十一卷にのす。

【四】念々ごとに往生の業を成ずべきこと。

【十二問答】この問答の問者は禪勝房或は隆寛律師なりと云ひ所傳判然せずと雖も十二問答中第三、第五、第六、第十、第十二の五問答は勅傳第四十五卷に禪勝房との問答として載す

申たる一期の念佛をとりあつめて、一度の往生はかならずする事也。

【二】又云、「念佛申す機はむまれつきのまゝにて申す也。さきの世の業によりて、今生の身をばうけたる事なれば、この世にてはえなをしあらためぬ事也。たとへば女人の男子にならばやとおもへども、今生のうちには男子とならざるがごとし。智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、慳貪者は慳貪ながら申す。一切の人みなかくのごとし、さればこそ阿彌陀ほとけは十方衆生とて、ひろく願をばをこしてましませ。」

【三】又云、「一念十念にて往生すといへばとて、念佛を疎相に申せば、信が行をさまたぐる也。念々不捨といへばとて、一念十念を不定におもへば、行が信をさまたぐる也。かるがゆへに信をば一念にむまるととりて行をば一形にはげむべし。」

【四】又云、「一念を不定におもふものは念々の念佛ごとに不信の念佛になる也。そのゆへは阿彌陀佛は一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば、念々ごとに往生の業となる也。」

十二問答

【一】問曰、「八宗九宗の外に、淨土宗をたつる事自由の條かなと餘宗の人の申候をば、いかゞ申し候べき」

答、「宗の名たつる事は、佛の說にあらず。みづから心ざすところの經敎につきて、その

【一】八宗九宗の外に淨土宗を立つること。

【二】法華眞言は雜行なること。

【三】他の善根を隨喜して往生の助業とすべきこと。

【四】淨土に九品の差別あること。

をしゆる義をさとりきはめて、宗の名をば判ずる事也。諸宗の習みなもてかくのごとし。いま淨土宗の名をたつる事は淨土の正依の經につきて、往生極樂の義をさとりきはめてをはします先達の、宗の名をばたて給へる也。宗のをこりをしらざるもの丶左樣の事を申し候也」

【二】問曰「法華眞言等をば、雜行にはいるべからずと人々の申候をばいかゞこたへ候べき」

答「惠心先德、一代聖教の要文をあつめて『往生要集』をつくり給へる中に十門をたつ。その第九の往生諸業門に法華眞言等の諸大乘經をいれ給へり。諸行と雜行と言異にして意おなじ。いまの難者は惠心の先德にまさるべからざるもの也」

【三】問曰、「餘佛餘經につきて、善根を修せん人に結緣助成し候はん事は雜行と申候べきか」

答「わが心彌陀ほとけの本願に乘じ決定往生の信をとるうへには、他の善根に結緣助成せん事は、また〳〵雜行になるべからず。わが往生の助業となるべき也。他の善根を隨喜讚嘆せよと釋し給へるをもて意うべき事也」

【四】問曰「極樂に九品の差別候御事は、阿彌陀ほとけのかまへさせ給へる事にて候やらん」

答「極樂の九品は彌陀の本願にあらず四十八願の中にもなし。これは釋尊の巧言也。善

【五】持戒の行者と破戒の行者との位の淺深のこと。

【六】高聲念佛のこと。

人惡人一所にむまるゝといはゞ、惡業のものども慢心をこすべきがゆへに九品の差別をあらせて、善人は上品にすゝみ、惡人は下品にくだると說給へる也。いそぎまいりてみるべし」

【五】問曰「持戒の行者の念佛の數遍のすくなく候はんと、破戒の行人の念佛の數遍のおほく候はんと、往生の後の位の淺深、いづれかすゝみ候べきや」

答「居てまします疊をさへての給はく、この疊のあるによりてこそ、やぶれたるか、やぶれざるかといふ事はあれ。つや／＼なからんたゝみをば、なにとか論ずべき。末法の中には持戒もなく破戒もなし。たゞ名字の比丘ばかりありと、傳敎大師の「末法燈明記」にかき給へるうへには、なにと持戒破戒の沙汰をばすべきぞ。かゝるひら凡夫のために、をこし給へる本願なればとて、いそぎ／＼名號を稱すべし」

【六】問曰「念佛の行者等、日別の所作にをいて、こゑをたてゝ申す人も候。又心に念じてかずをとる人も候。いづれかよく候べき」

答「それは口にてとなふるも名號、心にて念ずるも名號なれば、いづれも往生の業とはなるべし。たゞし佛の本願は、稱名の願なるがゆへに、聲をたてゝとなふべき也。このゆへに經には「聲をして絕えざらしめ十念を具足す」ととき、釋には「我が名號を稱し、下十聲に至る」との給へり。耳にきこゆる程は高聲念佛にとる也。さればとて機嫌をしらず、高聲なるべきにはあらず。地體は聲を出さんとおもふべき也」

【七】日課念佛相續のこと。

【八】十聲一聲のこと。

【九】本願の一念は臨終の機のためのこと。

【七】問曰「日別の念佛の數遍、相續にいる程はいかゞはからひ候べき」

答「善導の御釋によるに、一萬已上は相續にて候べし。但し一萬遍をもいそぎ申て、さてその日をくらさん事はあるべからず。一萬遍なりとも、一日一夜の所作とすべき也。總じては一食の間に三度ばかり思ひいださんは、よき相續にてあるべし。それは衆生の根性不同なれば、一準なるべからず。心ざしだにふかければ自然に相續はせらるゝ也」

【八】問曰「禮讃の深心の中には、十聲一聲必ず往生を得、乃至一念も疑心あることなし」と釋し、又「疏」の深心の中には「念々に捨てざる、是を正定の業と名づく」と釋し給へり。いづれかわが分には、おもひさだめ候べき」

答「十聲一聲の釋は念佛を信ずる樣、「念々に捨てざる」の釋は念佛を行ずる樣也。かるがゆへに信をば一念にむまるととりて、行をば一形にはげむべしとすゝめ給へる釋也。又大意は「一たび發心して已後は誓ひて此の生を畢るまで退轉あることなく、唯淨土を以て期となせ」の釋とすべき也」

【九】問曰「本願の一念は、尋常の機にも、臨終の機にもともに通じ候べきか」

答「一念の願はいのちつゞまりて、二念にをよばざる機のため也。尋常の機に通ずべくば、上盡一形の釋あるべからず。この釋をもて意うるに、かならずしも一念を本願といふべからず。「念々に捨てざる、是を正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に」と釋し給へり。この釋は數遍つもらんも、本願とはきこえたれば、たゞ本願にあふ機の遲速不同な

【一〇】自力他力差別のこと。

【一一】三心を具すべきこと。

れば、「上は一形を盡し下は一念に至る」とをこし給へる本願也と意うべき也。かるがゆへに念佛往生の願とこそ善導は釋し給へ」

【一〇】問曰、「自力他力の事はいかが意え候べき」

答、「源空は殿上へまいるべき器量にてはなけれども、上よりめせば二度までまいりたりき。これはわがまいるべきしなにてはなけれども、上の御ちから也。まして阿彌陀ほとけの御ちからにて、稱名の願にこたへて、來迎せさせ給はん事は、なんの不審かあるべき。わが身つみをもくて無智なれば、佛もいかにしてかすくひ給はんなどおもはんものは、つやつや佛の願をしらざるもの也。かゝる罪人どもを、やす〳〵とたすけすくはん料に、をこし給へる本願の名號をとなへながら、ちりばかりもうたがふ心はあるまじき也。十方衆生のことばの中に、有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人、三寶滅盡の後の百歳までの衆生みなこもる也。かの三寶滅盡の時の念佛者と、當時の御房達とくらぶれば當時の御房達は佛のごとし。かの時の人のいのちはたゞ十歳也。戒定惠の三學たゞ名をだにもきかず。總じていふばかりなきものともの、來迎にあづかるべき道理をしりながら、わが身のすてられまいらすべき樣をば、いかにしてか案じ出すべき。たゞ極樂のねがはしくもなく、念佛の申されざらん事のみぞ、往生のさはりにては有べけれ。かるがゆへに他力本願ともいひ、超世の悲願ともいふ也。」

【一一】問曰、「至誠等の三心を具し候べき樣をば、いかゞおもひさだめ候べき」

【三】三心を具するもの必ず往生すべきこと。

【十二箇條問答】この問は何人か判明せざるも、第一問によれば女人なるが如し。

【一】五障の身も念佛すれば往生すること。

【五障】女人の五種の障礙、一には轉輪聖王となることを得ず。二には梵天王となることを得ず。三には帝釋天となることを得ず。四には魔王となることを得ず。五には佛となることを得ず。

答ふ「三心を具する事は、たゞ別の樣なし。阿彌陀ほとけの本願に、わが名號を稱念せば、かならず來迎せんとおほせられたれば、引接せられまいらせんずるぞと、ふかく信じて心に念じ口に稱するにものうからず。すでに往生したる心地して、最後の一念にいたるまでたゆまざるものは、自然に三心は具足する也。又在家の者どもは、これ程までおもはざれども、たゞ念佛申す者は極樂にむまるなればとて、つねに念佛をだにも申せば、そらに三心は具足する也。さればこそいふにかひなきものどもの中にも、神妙なる往生をばする事にてあれ」

【三】問ていはく「臨終の一念は、百年の業にすぐれたりと申すは、平生の念佛の中に、臨終の一念ほどの念佛をば申いだし候まじく候やらん」

答ふ「三心具足の念佛は、おなじ事也。そのゆへは、觀經にいはく「三心を具するもの必ず彼の國に生ず」といへり。必の文字のあるゆへに臨終の一念とおなじ事也」

十二箇條問答

【一】問ていはく「念佛すれば往生すべしといふ事。耳なれたるやうにありながら、いかなるゆへともしらず。かやうの五障の身までもすてられぬ事ならば、こまかにをしへさせ給へ」

【二】智慧のありなしにて往生の定不定をば判じ難きこと。

答ていはく、「をよそ生死をいづる行一つにあらずといへども、まづ極樂に往生せんとねがへ、彌陀を念ぜよといふ事、釋迦一代の敎にあまねくすゝめ給へり。そのゆへは、阿彌陀佛本願をこして、わが名號を念ぜんもの、わが淨土にむまれずば、正覺をとらじとちかひて、すでに正覺をなり給ふゆへに、この名號をとなふるものはかならず往生する也。臨終の時もろ／＼の聖衆とともにきたりて、かならず迎接し給ふゆへに、惡業としてさふるものなく、魔緣としてさまたぐる事なし。男女貴賤をもえらばず。善人惡人をもわかたず。至心に彌陀を念ずるにむまれずといふ事なし。たとへばおもき石をふねにのせつればしづむ事なく、萬里のうみをわたるがごとし。罪業のおもき事は石のごとくなれども、本願のふねにのりぬれば生死のうみにしづむ事なく、かならず往生する也。ゆめ／＼わが身の罪業によりて本願の不思議をうたがはせ給ふべからず。これを他力の往生とは申也。自力にて生死をいでんとするには、煩惱惡業を斷じつくして淨土にもまいり菩提にもいたるとならふ。これは步よりけはしきみちをゆくがごとし」

【二】問ていはく、「罪業をもけれども、智惠の燈をもて煩惱のやみをはらふ事にて候なれば、かやうの愚癡の身には、つみをつくる事はかさなれども、つぐのふ事はなし。なにをもてこのつみをけすべしともおぼえず候はいかん」

答ていはく、「たゞ佛の御詞を信じてうたがひなければ、佛の御ちからにて往生する也。さきのたとへのごとく、ふねにのりぬれば、目しゐたるものも目あきたるものもともにゆ

【三】念佛の功力は汚濁を浄むること。
【浄摩尼珠】摩尼(Mani)は無垢、離垢等と譯す。浄く穢れなき寶珠を云ふ。
【四】念佛は數遍一遍の別を定め難きこと。

くがごとし。智恵のまなこある者も、佛を念ぜざれば願力にかなはず。愚癡のやみふかきものも念佛すれば願力に乘ずるなり。念佛する者をば彌陀の光明をはなちてつねにてらして捨給はねば、惡緣にあはずして、必臨終に正念をえて往生する也。さらにわが身の智惠のありなしによりて、往生の定不定をばさだむべからず。たゞ信心のふかゝるべき也」

【三】問ていはく、「世をそむきたる人は、ひとすぢに念佛すれば往生も得やすき事也。かやうの身には、あしたにもゆふべにも、いとなむ事は名聞、昨日も今日もおもふ事は利養也。かやうの身にて申さん念佛はいかゞ佛の御意にもかなひ候べきや」

答ていはく、「浄摩尼珠といふ珠をにごれる水に投れば、珠の用力にてその水きよくなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて、にごれる事かの水のごとくなれども、念佛の摩尼珠を投れば、心の水をのづからきよくなりて往生をうる事は、念佛のちから也。わが心をしづめ、このさわりをのぞきて、後念佛せよとにはあらず。たゞつねに念佛して、そのつみをば滅すべし。さればむかしより在家の人、おほく往生したるためしいくばくかおほき。心のしづかならざらんにつけても、よく〳〵佛力をたのみもはら念佛すべし」

【四】問ていはく、「念佛は數遍を申せとすゝむる人もあり。又さもなくともなど申人もあり。いづれにかしたがひ候べき」

答ていはく、「さとりもあり、ならふむねもありて申さん事は、その心のうちしりがたければ、さだめがたし。在家の人のつねに惡緣にのみしたしまれ、身には數遍を申さずして、

【五】念佛は念々相續が肝要のこと

【六】三心を具足すべきこと。

いたづらに日をくらし、むなしく夜をあかさん事、荒涼の事にや候はんずらん。凡夫は緣にしたがひて退しやすき物なれば、いかにも〳〵はげむべき事也。されば處々におほく念念相續してわすれざれといへり」

【五】問ていはく、「念々にわすれざる程の事は、わが身にかなひがたくおぼえ候へ。又手には念珠をとれども心にはそゞろ事をのみおもふ。この念佛は往生の業にはかなひがたくや候はんずらん。これをきらはれば、この身の往生は不定なるかたもありぬべし」

答ていはく、「念々にすてざれとをしゆる事は、人のほどにしたがひてすゝむる事なればわが身にとりて心のをよび、身のはげまん程は、心にはからはせ給ふべし。又念佛の時惡業のおもはるゝ事は一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念佛せば、ゆめ〳〵さはりとはなるべからず。たとへば親子の約束をなす人いさゝかそむく心あれども、さきの約束變改する程の心なければ、おなじ親子なるがごとし。念佛して往生せんと志して念佛を行ずるに、凡夫なるがゆへに貪瞋の煩惱おこるといへども、念佛往生の約束をひるがへさざれば、かならず往生する也。」

【六】問ていはく、「これ程にやすく往生せば、念佛するほどの人はみな往生すべきに、ねがふものもおほく、念ずるものもおほき中に、往生するものゝまれなるは、なにのゆへとか思ひ候べき」

答ていはく、「人の心は外にあらはるゝ事なければその邪正さだめがたしといへども、經

【七】念佛は勇猛ならずとも漸々に增進すべきこと。

には三心を具して往生すとみえて候めり。この心を具せざるがゆへに、念佛すれども往生を得ざる也。三心と申は、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。はじめに至誠心といふは眞實心也と釋して、內外とゝのほれる心也。何事をするにも、まことしき心なくては成ずる事なし。人なみ〳〵の心をもて、穢土のいとはしからぬをいとふよしをし、淨土のねがはしからぬをねがふ氣色をして、內外とゝのほらぬをきらひて、まことの志しをもて穢土をもいとひ淨土をもねがへとをしふる也。次に深心といふは佛の本願を信ずる心也。われは惡業煩惱の身なれども佛の願力にて、かならず往生するなりといふ道理をきゝてふかく信じて、つゆちりばかりもうたがはぬ心也。人おほくさまたげんとして是をにくみ、これをさへぎれども、これによりて心のはたらかざるをふかき信とは申也。次に廻向發願心といふは、わが修するところの行を廻向して、極樂にむまれんとねがふ心也。わが行のちから、わが心のいみじくて往生すべしとはおもはず。佛の願力のいみじくおはしますによりて、むまるべくもなきものも生るべしと信じて、いのちをはらば佛必ずきたりてむかへ給べしとおもふ心を、金剛の一切のものにやぶられざるがごとく、この心をふかく信じて臨終までもとほりぬれば、十人は十人ながらむまれ、百人は百人ながらむまるる也。されば この心なきものは、佛を念ずれども順次の往生をばとげず、遠緣とはなるべし。この心のをこりたる事はわが身にしるべし。人はしるべからず」

【七】問ていはく、「往生をねがはぬにはあらず、ねがふといへどもその心勇猛ならず。又念

佛を賤しと思ふにはあらず。行じながらをろそかにしてあかしくらし候へば、かゝる身なれば、いかにもこの三心具したりと申べくもなし。さればこのたびの往生をばおもひたえ候べきにや」

答ていはく「淨土をねがへどもはげしからず、念佛すれども心のゆるらかなる事をなげくは、往生の心ざしのなきにはあらず。心ざしのなき者はゆるらかなるをもなげかず、はげしからぬをもかなしまず、いそぐみちにはあしのをそきをなげく。いそがざるみちにはこれをなげかざるがごとし。又このめばをのづから發心すと申す事もあれば、漸々に增進してかならず往生すべし。日ごろ十惡五逆をつくれるものも、臨終にはじめて善知識にあひて往生する事あり。いはんや往生をねがひ、念佛を申してわが心のはげしからぬ事をなげかむ人をば、佛もあはれみ菩薩もまもりて、障りをのぞき知識にあひて往生をうべき也」

【八】念佛の行者常に心がくべきこと。

【八】問ていはく「念佛の行者はつねにいかやうにかおもひ候べき」

答ていはく「あるときには世間の無常なる事をおもひて、このよのいくほどなき事をしれある時には佛の本願をおもひて、かならずむかへ給へと申せ。ある時には人身のうけがたきことはりをおもひて、このたびむなしくやまん事をかなしめ。六道をめぐるに、人身をうる事は梵天より糸をくだして大海のそこなる針のあなをとをさんがごとしといへり。ある時はあひがたき佛法にあへり。このたび出離の業をうへずば、いつをか期すべきとお

もふべき也。ひとたび惡道に墮しぬれば、阿僧祇劫をふれども、三寶の御名をきかず。いかにいはんやふかく信ずる事をえんや。ある時にはわが身の宿善をよろこぶべし。かしこきもいやしきも人おほしといへども、佛法を信じ淨土をねがふものはまれ也。信ずるまでこそかたからめ、そしりにくみて惡道の因をのみつくる。しかるにこれを信じこれを貴びて、佛をたのみ往生を志す。これひとへに宿善のしからしむる也。たゞ今生のはげみにあらず。往生すべき期のいたれる也とたのもしくよろこぶべし。かやうの事をおりにしたがひ、事によりておもふべき也」

【九】信心をまもるべきこと。

【九】問ていはく「かやうの愚癡の身には聖教をもみず。惡緣のみおほし。いかなる方法をもてか、わが心をまもり、信心をもよほすべきや。」

答ていはく、「そのやう一つにあらず。あるひは人の苦にあふをみて三途の苦をおもひやれ。あるひは人のしぬるを見て無常のことはりをさとれ。あるひはつねに念佛してその心をはげませ。あるひはつねによき友にあひて心をはぢしめられよ。人の心はおほく惡緣によりてあしき心のをこる也。されば惡緣をばさり、善緣にちかづけといへり。これらの方法ひとしならず。時にしたがひてはからふべし。」

【一〇】餘善をきらひ念佛を修すべきこと。

【一〇】問ていはく、「念佛の外の餘善をば、往生の業にあらずとて修すべからずといふ事あり。これはしかるべしや」

答ていはく、「たとへば人のみちをゆくに、主人一人につきておほくの眷屬のゆくがごと

【一】悪業をつくらざること。

【二】悪をしのび念佛の功をつむべきこと。

し。往生の業の中に念佛は主人也。餘の善は眷屬也。しからば餘善をきらふまではあるべからず」

【一】問ていはく、「本願は惡人をきらはねばとて、このみて惡業をつくる事はしかるべしや」

答ていはく、「佛は惡人をすて給はねども、このみて惡をつくる事、これ佛の弟子にはあらず。一切の佛法に惡を制せずといふ事なし。惡を制するにかならずしもこれをとゞめ得ざるものは、念佛してそのつみを滅せよとすゝめたる也。わが身のたへねばとて、佛にとがをかけたてまつらん事はおほきなるあやまり也。わが身の惡をとゞむるにあたはずば、ほとけ慈悲をすて給はずして、このつみを滅してむかへ給へと申べし。つみをばたゞつくるべしといふ事は、すべて佛法にいはざるところ也。たとへば人のおやの一切の子をかなしむに其中によき子もあり、あしき子もあり、ともに慈悲をなすといへども、惡を行ずる子をば目をいからかし、杖をさゝげて、いましむるがごとし。佛の慈悲のあまねき事をききては、つみをつくれとおぼしめすといふおもひをなさば、佛の慈悲にももれぬべし。惡人までをもすて給はぬ本願としらんにつけては、いよ〳〵佛の知見をばはづべし。かなしむべし。父母の慈悲あればとて、父母のまへにて惡を行ぜんに、その父母よろこぶべしや。なげきながらすてず。あはれみながらにくむ也。佛も又もてかくのごとし」

【二】問ていはく、「凡夫は心に惡をおもはずといふ事なし。この惡を外にあらはさざるは佛をばはぢずして、人目をはゞかるといふ物なり。これは心のまゝにふるまふべしや」

答ていはく、一人の歸依を得むとおもひて、外をかざらんはとがあるかたもやあらん。悪をしのばんがために、たとひ心におもふとも、ほかまではあらはさじとおもひてをさへん事は、すなはち佛に慚る心也。とにもかくにも悪をしのびて、念佛の功をつむべき也。習ひさきよりあらざれば、臨終正念もかたし。常に臨終のおもひをなして、臥ごとに十念をとなふべし。さればねてもさめてもわするゝ事なかれといへり。おほかたは世間も出世も、道理はたがはぬ事にて候也。心ある人は、父母あはれみ、主君もはごくむにしたがひて悪事をばしりぞき、善事をばこのまんとおもへり。悪人をもすて給はぬ本願ときかんにも、まして善人をばいかばかりかよろこび給はんと思ふべき也。一念十念をもむかへ給ふときかば、いはんや百念千念をやとおもひて、心のをよび、身のはげまれん程ははげむべし。さればとてわが身の器量のかはらざらんをばしらず、佛の引接をばうたがふべからず。たとひ七八十のよはひを期すとも、おもへば夢のごとし。いはんや老少不定なれば、いつをかぎりとおもふべからず。さらに後を期する心あるべからず。たゞ一すぢに念佛すべしといふ事、そのいはれ一にあらず。

これを見むおり／＼ことにおもひいてて
南無阿彌陀佛とつねにとなへよ

和語燈録　卷第五

一百四十五箇條問答

【一】「一、ふるき堂塔を修理して候はんをば供養し候べきか」

答「かならず供養すべしといふ事も候はず。又供養して候はんもあしき事にも候はず。功徳にて候へば、又供養せねばとてつみをえ、あしき事と申にても候はず」

【二】「一、佛の開眼と供養とは一つ事にて候か」

答「開眼と供養とは別の事にて候べきを、おなじ事にしあひて候也。開眼と申すは、本體は佛師がまなこをいれひらきまいらせ候を申候也。これをば事の開眼と申候也。つぎに僧の佛眼の眞言をもてまなこをひらき、大日の眞言をもてほとけの一切の功徳を成就し候をば、理の開眼と申候也。つぎに供養といふは、ほとけに花香佛供、御あかしなどをもまいらせ、さらぬたからをもまいらせ候を供養とは申候也」

【三】「一、この眞如觀は志候べき事にて候か」

答「これは惠心のと申て候へども、いらぬ物にて候也。おほかた眞如觀は、われら衆生はえせぬ事にて候程に、往生のためには成べきともおもはれぬことにて候へば無益に

【一百四十五箇條問答】この問答の中勅傳第二十二卷には十九箇條を載録す。此の箇條の問は堂上方の女房達ならんとも稱せらる。折々の問に答へられしものを集録して百四十五箇條にせるものなり。

【一】堂塔供養のこと。

【二】佛の開眼供養のこと。

【佛眼の眞言】五眼具足萬德圓滿三身の印明を以て開眼する眞言宗の傳授也と云ふ。

【三】眞如觀のこと。

【眞如觀】惠心僧都の著一卷。眞如を觀察することを明す。

候」

【四】「一、又これに計算して候ところは何事もむなしと觀ぜよと申て候。空觀と申候はこれにて候な。されば觀じ候べきやうは、たとへばこの世のことを執著して、思ふまじきとをしへて候と見えて候へば、おほやう御らんのためにまいらせ候」

答「これはみな理觀とてかなはぬ事にて候也。僧のとしごろならひたるだにもえせず。まして女房などの、つや／＼案内もしらざらんは、いかにもかなふまじく候也。御たづねまでも無益にて候」

【五】「一、七佛の名號をとなふべき樣とて人のたびて候まゝに信じ候へば、つみはうせ候べきか。なに事もそれよりおほせ候御事はたのもしく候ひてかやうに申候」

答「これさなくとも候なん。念佛にこれらのつみのうせ候まじくはこそ候はめ」

【六】「一、一文の師をもをろそかに申候へば習ひたる物の冥加なしと申候はまことにて候か」

答「師のことばをろそかならず候。恩の中にふかき事これにすぎ候はず」

【七】「一、心を一つにして念じ候はゞ、心よくなをり候はずとも、何事ををこなひ候はずとも、念佛ばかりにて淨土へはまいり候べきか」

答「心のみだるゝはこの凡夫の習ひにて、ちからをよばぬ事にて候。たゞ心を一にして、よく御念佛せさせ給ひ候はゞ、そのつみを滅して往生せさせ給ふべき也。その妄念よりも

【四】理觀のこと この問は前文に空觀等のことを申したるものと見え「これに計算して」とあり。

【空觀】一切諸法の空なることを觀ずるもの。

【五】七佛名號のこと。

【七佛】過去七佛とも云ふ。過去の世に出現せる七佛。毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、俱那含佛、迦葉佛、釋迦佛。

【六】師恩のこと

【七】一心念佛のこと。

おもきつみも、念佛だに申候へばうせ候也」

【八】「一、經の陀羅尼は、灌頂の僧にうけ候べきか」

答「法花經のはくるしからず。灌頂の僧のうけさする陀羅尼は別の事に候。それはおぼしめしよらざれ」

【九】「一、『普賢經』に、佛の母を念ずべしと申候は」

答「いさおぼえず」

【一〇】「一、百日のうちの赤子の不淨かゝりたるは、物まうでにはゞかりありと申たるは」

答「百日のうちのあか子の不淨くるしからず。なにもきたなき物のつきて候はんはきたなくこそ候へ。赤子にかぎるまじ」

【一一】「一、念佛の百萬遍、百度申てかならず往生すと申て候に、いのちみじかくてはいかゞし候べき」

答「これもひが事に候。百度申てもし候。十念申てもし候。又一念にてもし候」

【一二】「一、『阿彌陀經』十萬卷よみ候べしと申て候はいかに」

答「これもよみつべからんにとりての事に候。たゞつとめをたかくつみ候はんれうにて候」

【一三】「一、日所作はかならずかずをきはめ候はずとも、かぞへられんにしたがひてかぞへ、念佛も申候べきか」

【八】陀羅尼のこと。

【陀羅尼】ダーラニー(Dhārani)總持、能持等と譯す。眞言を稱へて惡法を退散し善法を集め持たしめること

【灌頂】香水等を人の頂にそゝぎ、受戒傳法等に用ふる儀式。眞言宗にては傳法灌頂等と云ひ、是を行ふ僧を阿闍梨と稱す。

【九】普賢經のこと。

【一〇】物詣でのこと。

【一一】百萬遍念佛のこと。

【一二】阿彌陀經のこと。

【一三】日所作のこと。

【一四】にらきひるしゝ食ふこと。

【一五】六齋のこと

【六齋】六齋日のこと。一二三四五六の六ヶ月の八日十四日十五日廿三日廿九日卅日の稱この六日は四天王天下を按行する日なれば心身を淨むべしと云ふ。

【一六】服藥のこと

【一七】一生六齋のこと。

【一八】念佛の數のこと。

【一九】阿彌陀經讀誦のこと。

答「かずをさだめ候はねば懈怠になり候へば、かずをさだめたるがよき事にて候」

【一四】「一、にら、き、ひる、しゝをくひて香うせ候はずとも、つねに念佛は申候べきやらん」

答「念佛はなにゝもさはらぬ事にて候」

【一五】「一、六齋に齋をし候はんには、かねて精進をし、いかけをし、よき物をきてし候べきか」

答「かならずさ候はずとも候なん」

【一六】「一、一七日二七日など服藥し候はんに、六齋の日にあたりて候はんをばいかゞし候べき」

答「それちからをよばぬ事にて候。さればとて罪にては候まじ」

【一七】「一、六齋は一生すべく候か。何年すべく候ぞ」

答「それも御心によるべき事にて候。いくらすべしと申事は候はず」

【一八】「一、念佛をば日所作にいくらばかりあてゝか申候べき」

答「念佛のかずは一萬遍をはじめにて、二萬三萬五萬六萬、乃至十萬まで申候也。この中に、御心にまかせて、おぼしめし候はん程を申させおはしますべし」

【一九】「一、『阿彌陀經』をば一日に何卷ばかりあてゝかよみ候べき」

答「『阿彌陀經』はちかひて一生中に十萬卷をだにもよみまいらせ候ぬれば、決定して

【二〇】五色の糸のこと。

【五色の糸】青黄赤白黒の糸。茲には臨終の儀式に用ゐるものをさす。

【二一】法文反故のこと。

【二二】和尚阿闍梨のこと。

【二三】齋のこと。

往生すと、善導和尚のおほせられて候也。毎日に十五卷づゝよめば、二十年に十萬卷にみち候也。三十卷づゝよめば、十年にみち候也」

【二〇】「一、五色のいとはほとけにはひだりにとをほせ候き。わがてにはいづれのかたにていかゞひき候べき」

答「左右の手にてひかせ給ふべし」

【二一】「一、佛の名をもかき、貴き事をもかきて候をあだにせじとて、やき候は罪をうるに、誦文をしてやくと申候はいかゞ候べき」

答「さる反故やき候はんに何條の誦文か候べき。しかれどもやくは罪にて候。おほかたは法文をばうやまふ事にて候へば、たゞきよきところに埋ませ給ふべし」

【二二】「一、戒うけ候時和尚となり給へ。阿闍梨となり給へと申事の候。心え候はず。なにといふ事にて候ぞ」

答「和尚と申候は、まさしく戒うくる根本の師を申候也。阿闍梨と申候は戒をうくる時作法をいたす師にて候也。これをば羯磨阿闍梨と申候也」

【二三】「一、齋し候は功徳にて候やらん。かならずすべき事にて候やらん」

答「齋は功徳をうる事にて候也。六齋の御齋ぞさも候ひぬべき。又御大事にて御やまひなどもをこらせおはしましぬべく候はゞ、さなくともたゞ御念佛だにもよく／＼候はゞ、それにて生死をはなれ、淨土にも往生せさせおはしまさんずる事はこれによるべく候」

【二四】阿彌陀の定印のこと。

【二五】遠近のこと

【二六】臨終念佛のこと。

【二七】極樂には流轉なきこと。

【三界】欲界色界無色界の三。迷の世界を云ふ。

【二四】「一、臨終のおり、阿彌陀の定印などをならひて、五色の糸とひかへ候やらん。たださ候はずとも、左右の手にひかへ候やらん」

答「かならず定印をむすぶべきにても候はず。たゞ合掌を本體にてその中にひかへられ候べし」

【二五】「一、ちかくてかならずしも、見まいらせ候はねども、とをらかにてひかへ候やらん」

答「とをくも、ちかくも、便宜によるべく候。いかなるもくるしく候はず」

【二六】「一、かならず佛を見、糸をひかへ候はずとも、われは申さずとも、人の申さん念佛をきゝても、死候はゞ淨土には往生し候べきやらん」

答「かならず糸をひくといふ事候はず、佛にむかひまいらせねども、念佛だにもすれば往生し候也。又きゝてもし候。それはよく／＼信心ふかくての事に候」

【二七】「一、ながく生死をはなれ、三界にむまれじとおもひ候に、極樂の衆生となりても、又その緣つきぬればこの世にむまるゝと申候はまことにて候か。たとひ國王ともなり、天上にもむまれよ、たゞ三界をわかれんとおもひ候に、いかにつとめをこなひてか、還り候はざるべき」

答「これもろ／＼のひが事にて候。極樂へ一たびむまれ候ぬれば、ながくこの世にかへる事候はず。みな佛に成ことにて候也。たゞし人をみちびかんためには、ことさらに

【二八】持戒のこと
【二九】佛の薄のこと。
【三〇】所作を書くこと。
【三一】卷經のこと
【三二】經を頌つこと。
【三三】讀經のこと

還る事も候。されども生死にめぐる人にては候はず、三界をはなれ、極樂に往生するには、念佛にすぎたる事は候はぬ也。よく〳〵御念佛候べき也」

【二八】「一、女房の聽聞し候に、戒をたもたせ候をやぶり候はんずればとて、たもつとも申候はいかゞ候べき。たゞ聽聞の場にては、一時もたもつと申候がめでたき事と申候はまことにて候か」

答「これはくるしく候はず。たとひのちにやぶれ候とも、その時もたんとおもふ心にて、たもつと申すはよき事にて候」

【二九】「一、佛の薄をして又供養し候か」

答「さ候はずとも」

【三〇】「一、所作をかきて人にし入させ候はいかゞ候べき」

答「さなくとも候ひなむ」

【三一】「一、卷經を草子にたゝむは罪と申候はいかゞ候べき」

答「つみをえぬ事にて候」

【三二】「一、ほとけに具する經をとりはなちて人にもたぶはつみにて候か」

答「ひろむるは功德にて候」

【三三】「一、一部とある經一卷づゝとりはなちてよまんはつみにて候か」

答「つみにても候はず」

【三四】「一、ほとけに厨子をさしてすへまいらせては供養すべく候か」
答「一切あるまじ」
【三五】「一、不輕のごとく人をおがむ事し候べきか」
答「このごろの人のえ意えぬ事にて候也」
【三六】「一、七歳の子しにていみなしと申候はいかに」
答「佛教にはいみといふ事なし。世俗に申したらんやうに」
【三七】「一、佛ににかはを具し候がきたなく候。いかゞし候べき」
答「まことにきたなけれども、具せではかなふまじければ」
【三八】「一、尼の服藥し候はわろく候か」
答「やまひにくふはくるしからず。たゞはあしく候」
【三九】「一、父母のさきに死ぬるはつみと申候はいかに」
答「穢土のならひ、前後ちからなき事にて候」
【四〇】「一、いきてつくり候功徳はよく候か」
答「めでたし」
【四一】「一、人のまもりをえて候はんは供養し候べきか」
答「せずともくるしからず」
【四二】「一、わゝくに物くるゝはつみにて候か」

【三四】厨子のこと
【三五】人をおがむこと。
【不輕】常不輕菩薩。法華經に出づ。この菩薩は人を見れば必ず禮拜讃歎せりと云ふ。
【三六】忌みのこと
【三七】にかはのこと。
【三八】尼服藥のこと。
【三九】父母の先に死ぬこと。
【四〇】功徳を積むこと。
【四一】人のまもりをうること。
【まもり】祈禱等の守り。
【四二】わゝくのこと。

【わゝく】誑惑のなまり。人を誑かして世を渡る僧あり。之を誑惑法師と云ふ。これならむ。
【四三】經供養のこと。
【四四】經千部讀誦供養のこと。
【四五】懺悔のこと。
【四六】花香供養のこと。
【四七】經をうくること。
【四八】聽聞物詣でのこと。
【四九】神の後世のこと。
【五〇】說經師のこと。

答「つみにて候」
【四三】「一、經をして供養せずともくるしからず候か」
答「たゞよむべし」
【四四】「一、經千部よみては供養し候べきか」
答「さも候まじ」
【四五】「一、懺悔の事、幡や花鬘などかざり候べきか」
答「さらでも、たゞ一心ぞ大切に候」
【四六】「一、花香をほとけにまいらせ候事は」
答「曉は供養法にかならずまいらせ候。たゞは花瓶にさしちらしても供養すべし。香はかならずたくべし。便あしくばなくとも」
【四七】「一、經をば僧にうけ候べきか」
答「われとよみつべくば僧にうけずとも」
【四八】「一、聽聞ものまうではかならずし候べきか」
答「せずとも中々わろく候。しづかにたゞ御念佛候へ」
【四九】「一、神に後世申候事いかむ」
答「佛に申すにはすぐまじ」
【五〇】「一、說經師はつみふかく候歟。又妻にならんものもつみふかしと申候はまことに

【五一】麝香丁字のこと。
【五二】妻男に経を習ふこと。
【五三】還俗のものを憎むこと。
【五四】還俗の罪のこと。
【五五】精進のこと
【五六】歌よむこと
【五七】酒のむこと
【五八】魚鳥鹿のこと。

て候か」
答「本懐は功徳をうべく候に不信のはつみをえつべし。妻にならんものはつみ」
【五一】「一、麝香丁字をもち候はつみにて候か」
答「かをあつむるはつみ」
【五二】「一、尼、おとこに経ならふ事いかゞ候べき」
答「くるしからず」
【五三】「一、還俗のものに目を見あはせずと申候はまことにて候か」
答「さまでは候はず、いが事」
【五四】「一、還俗を心ならずして候はんは罪いかに」
答「あさく候」
【五五】「一、神佛へまいらんに、三日一日の精進、いづれかよく候」
答「信を本にす、いくかといふ不定なし。三日こそよく候はめ」
【五六】「一、歌よむはつみにて候か」
答「あながちにえ候はじ。ただし罪もえ、功徳にもなる」
【五七】「一、さけのむはつみにて候か」
答「まことにはのむべくもなけれども、この世のならひ」
【五八】「一、魚鳥鹿はかはり候か」

【五九】尼になること。

【六〇】佛つくりて經を具すること。

【六一】功德のこと

【六二】經と佛との供養のこと。

【六三】錫杖のこと【錫杖】普通僧の遊行する時に用ふる杖を云ふ。之をふる時は錫錫の音ありて諸虫逃れ、爲めに殺生の罪を免ると云ふ。茲には九條錫杖など云ふ頌文をさす。

【六四】いみの日物詣でのこと。

【六五】五逆十惡のこと。

【六六】臨終の善知識のこと。

答「たゞおなじ事」

【五九】「一、尼になりて百日精進はよく候か」

答「よし」

【六〇】「一、佛つくりて經はかならず具し候べきか」

答「かならず具すべしとも候はず。又具してもよし」

【六一】「一、功德は身のたふるほどゝ申候はまことにて候か」

答「沙汰にをよび候はず、ちからのたふるほど」

【六二】「一、經と佛とかならず一度にすべく候か」

答「さも候はず、ひとつゞゝも」

【六三】「一、錫杖はかならず誦すべきか」

答「さなくともそのいとまに念佛一遍も申べし。あま法師こそありく時むしのために誦し候へ」

【六四】「一、いみの日、物まうでし候はいかに」

答「くるしからず。本命日にも」

【六五】「一、五逆十惡、一念十念にほろび候か」

答「うたがひなく候」

【六六】「一、臨終に善知識にあひ候はずとも、日ごろの念佛にて往生はし候べきか」

【六七】誹謗正法のこと。
【六八】死人の髪そること。
【六九】妄念のこと
【七〇】臨終の物の具のこと。
【七一】五色の糸をいむこと。
【七二】楊枝及び帶のこと。
【七三】服藥のわたのこと。
【七四】よき物を着惡き處にゐること

答「善知識にあはずとも、臨終おもふ樣ならずとも念佛さへ申さば往生すべし」
【六七】「一、誹謗正法は五逆のつみにおほくまされりと申候はまことにて候か」
答「これはいと人のせぬ事にて候」
【六八】「一、死て候はんものゝかみはそり候べきか」
答「かならずさるまじ」
【六九】「一、心に妄念のいかにも思はれ候はいかゞし候べき」
答「たゞよく〳〵念佛を申させ給へ」
【七〇】「一、わがれうの臨終の物の具、まづ人にかし候はいかゞ候べき」
答「くるしからず」
【七一】「一、五色のいとをうむ事はいかゞ」
答「おさなきものにうます」
【七二】「一、節ある楊枝をばつかはず績帶青帶無文の帶するはいむと申候は」
答「くるしからず」
【七三】「一、服藥のわたはあらひ候はざらんはいかゞ候」
答「くるしからず」
【七四】「一、よき物をき、わろきところに居て、往生ねがひ候はいかゞ」
答「くるしからず、八戒齋の時こそさは候はめ」

【七五】「一、月のはゞかりの時經よみ候はいかゞ」

答「くるしみあるべしとも見えず候」

【七六】「一、申す事のかなひ候はぬに佛をうらみ申はいかゞ」

答「うらむべからず。緣により信のありなしによりて利生はあり。この世のちの世佛をたのむにはしかず」

【七七】「一、ひるしゝはいづれも七日にて候か。又しゝの干たるはいみふかしと申候はいかに」

答「ひるも香うせなばはゞかりなし。ししのひたるによりて忌ふかしといふ事はひが事」

【七八】「一、月のはゞかりのあひだ、神の料に經はくるしく候まじきか」

答「神やはゞかるらん。佛法にはいまず、陰陽師にとはせ給へ」

【七九】「一、子うみて佛神へまいる事、百日はゞかりと申候はまことにて候か」

答「それも佛法にはいまず」

【八〇】「一『法花經』一品よみさして魚くはずと申候はいかに」

答「くるしからず」

【八一】「一、ずゝもたず、かけおびかけずして經をうけ候事はいかに」

答「くるしからず」

【八二】「一、齋にまめあづきの御れうぐはせずと申候は、まことにて候か」

【七五】月のはゞかりのこと。

【七六】佛をうらむこと。

【七七】ひるしゝ食ふこと。

【七八】神佛に月のはゞかりのこと。【陰陽師】古代は官名にて陰陽寮に屬して卜筮を掌る者なりしが、後には一般に云ふ賣卜者をも稱するに至れり。

【七九】子をうみて佛神へ詣づること。

【八〇】法華經一品よみて魚くはざること。

【八一】珠數かけおびのこと。

【八二】齋御靈供のこと。

答「くるしからず」

【八三】「一、ねてもさめても、口あらはで念佛申候はんはいかゞ候べき」

答「くるしからず」

【八四】「一、信施をうくるはつみにて候か」

答「つとめしてくふ僧はくるしからず。せねばふかし」

【八五】「一、神のあたりの物くふはくちなはと申候はいかに」

答「禰宜神主はひとへにその身になるにこそ。さらぬがすこしくはんはおもからじ」

【八六】「一、僧の物くひ候もつみにて候か」

答「つみうるも候、えぬも候。佛のもの布加結縁の物くふはつみ」

【八七】「一、大佛天王寺などの邊に居て、僧の物くひて、後世とらんとし候人はつみか」

答「念佛だに申さばくるしからず」

【八八】「一、齋するあした御れうあまたにむかふはいかゞ候」

答「くるしからず」

【八九】「一、齋をつとめてみぞうついかに」

答「くるしからず」

【九〇】「一、戒をたもちてのち精進はいく日し候」

答「いくかも御心まかせ」

【八三】口あらはで念佛すること。

【八四】信施のこと

【八五】神のあたりのもの食ふこと。

【八六】僧物を食ふこと。

【八七】僧物を食ひて後世をとらんこと。

【八八】齋のこと。

【八九】齋をつとめて御衣うつこと。【みぞうつ】みぞは御衣なり。きぬたをうつと云ふが如し。

【九〇】精進のこと

【九一】聽聞の功德のこと。
【九二】念佛行者物詣でのこと。
【九三】物詣に念佛を廻向すること。
【九四】心ざさぬ魚のこと。
【心ざさぬ魚】自ら食はんが爲めに殺さざる魚。賣買の魚の如し。
【九五】服藥の際のずゝのこと。
【九六】千手藥師のこと。
【九七】六齋日ににらひる食ふこと。
【九八】齋の食ひ物のこと。

【九一】「一、聽聞は功德をえ候か」
答「功をえ候」
【九二】「一、念佛を行にしたるものが物まうではいかに」
答「くるしからず」
【九三】「一、物まうでして、經を廻向すべきに經をばよまで念佛を廻向する、くるしからずと申候はいかに」
答「くるしからず」
【九四】「一、わが心ざさぬ魚は殺生にては候はぬか」
答「それは殺生ならず」
【九五】「一、服藥のずゝはあらひ候べきか」
答「あらひあらはず、くるしからず」
【九六】「一、千手藥師はものいませ給ふと申いかに」
答「さる事なし」
【九七】「一、六齋ににらひるいかに」
答「めさゞらんはよく候」
【九八】「一、齋のくひ物はきよくし候べきか」
答「例の定行水も候まじ。かねて精進も候まじ。ひきいれも、たゞのおりのにて候

べし。齋の誦文も女房はせずとも、たゞ念佛を申させ給へ。さしたる事ありて、齋をかきたらば、いつの日にてもさせ給へ」

【九九】「一、三年おがみの事、し候べきか」

答「さらずとも候なん」

【一〇〇】「一、齋のさばには茶を具し候べきか。齋の生飯をば屋のうへにうちあげ候べきか。かはらけにとり候べきか。わがひきいれのさらにとり候べきか」

答「いづれも御心しだい」

【一〇一】「一、女のものねたむ事はつみにて候か」

答「世々に女となる果報にて、ことに心うき事也」

【一〇二】「一、出家し候はねども往生はし候か」

答「在家ながら往生する人おほし」

【一〇三】「一、五色の糸をあまたにきりて、人にたまはんはいかゞ候べき」

答「きるべからず」

【一〇四】「一、念佛を申候にはらのたつ心のさま〲に候。いかゞし候べき」

答「散亂の心、よにわろき事にて候。かまへて一心に申させ給へ」

【一〇五】「一、かみつけながら、おとこをんなの死候はいかに」

答「かみにより候はず。たゞ念佛と見えたり」

【九九】三年おがみのこと。

【一〇〇】齋の生飯のこと。

【一〇一】女のものねたむこと。

【一〇二】在家往生のこと。

【一〇三】五色の絲をきること。

【一〇四】散亂念佛のこと。

【一〇五】俗形の死者のこと。

【かみつけ】髮つけなり。俗形を云ふ。

【一〇六】尼の破戒のこと。
【一〇七】尼法師のかみをおほすこと。
【一〇八】經佛を賣ること。
【一〇九】人をうること。
【一一〇】精進のものいみのこと。
【一一一】さゐもんかくこと。【さゐもん】祭文のことか。願書などを神佛に捧げることならんと傳ふ
【一一二】酒のいみのこと。
【一一三】魚鳥くふこと。
【いかけ】翼讚に曰く「いかけはかかり湯の類なるべし。或は今の俗塩灰にて身を清むなど云ふ事ある。此類にや」と。

【一〇六】「一、尼の子うみ、おとこもつ事は五逆罪ほどゝ申、まことにて候か」
答「五逆ほどならねどもおもく見えて候」
【一〇七】「一、尼法師かみをおほす、つみにて候か」
答「三悪道の業にて候」
【一〇八】「一、經佛などうり候はつみにて候か」
答「つみふかく候」
【一〇九】「一、人をうり候もつみにて候か」
答「それもつみにて候」
【一一〇】「一、精進の時つめきらずと申。又女にかみそらせぬと申候。いかに」
答「みなひが事」
【一一一】「一、われも人もさゐもんかく、罪にて候か」
答「すごさざらんにはなにか罪にて候べき」
【一一二】「一、酒のいみ、七日と申候はまことにて候か」
答「さにて候。されどもやまひにはゆるされて候」
【一一三】「一、魚鳥くひては、いかけして、經はよみ候べきか」
答「いかけしてよむ本體にて候。せでよむは功德と罪とともに候。たゞしいかけせでも、よまぬよりはよむはよく候」

【一二四】「一、妻おとこ一つにて經よみ候はん事、いかけし候べきか」
答「これもおなじ事、本體はいかけしてよむべく候。念佛はせでもくるしからず。經はいかけしてよみ候べし。毎日よみ候とも」
【一二五】「一、大根柚はをこなひにはゞかり候と申はいかに」
答「はゞかりなし」
【一二六】「一、尼になりたる、かみいかゞし候べき」
答「經の料紙にすき、もしは佛の中にこそはこめ候へ」
【一二七】「一、尼法師の紺のきぬ著候はいかに」
答「よに罪うる事にて候」
【一二八】「一、物まうでし候はんに、男女かみあらひ、せめてはいたゞきあらふと申候はまことにて候か」
答「いづれもさる事候はず」
【一二九】「一、佛をうらむる事はあるまじき事にて候な」
答「いかさまにも佛をうらむる事なかれ。信あるものは大罪すら滅す。信なき者は小罪だにも滅せず。わが信のなき事をはづべし」
【一三〇】「一、八專に物まうでせずと申はまことにて候か」
答「さる事候はず。いつならんおりにも佛の耳にきかせ給はぬ事のなじか候べき」

【一二四】男女一つに經讀むこと。
【一二五】大根柚のこと。
【一二六】尼のかみのこと。
【一二七】尼の紺の衣著ること。
【一二八】物もうでに髪洗ふこと。
【一二九】佛をうらむこと。
【一三〇】八專のこと
【八專】佛教のいむ日なりと云ふ。八日、出曜經に出づ。

【一二一】灸治のこと

【一二二】ひるしゝくひて三年のうちに死したるもののゝこと。

【一二三】厄病出産にて死ぬこと。

【一二四】子の孝養のこと。

【一二五】産のいみのこと。

【一二六】沒後の佛經しをくこと。

【一二七】所作さしづのこと。

【一二一】「一、灸治の時物まうでせず。そのおりの著物もすつると申候は」

答「これも又きはめたるひが事にて候。たゞ灸治をいたはりてありきなどをせぬ事にてこそ候へ。灸治のいみある事候はず」

【一二二】「一、ひるしゝくひて、三年がうちに死候人は往生せずと申候はまことにて候やらん」

答「これ又きはめたるひが事にて候。臨終に五辛くひたる者をばよせずと申たる事は候へども、三年までいむ事はおほかた候はぬ也」

【一二三】「一、厄病やみて死ぬる者、子うみて死ぬる者はつみと申候はいかに」

答「それも念佛申せば往生し候」

【一二四】「一、子の孝養おやのするはうけずと申候はいかに」

答「ひが事なり」

【一二五】「一、産のいみいくかにて候ぞ。又いみもいくかにて候ぞ」

答「佛教にはいみといふ事候はず。世間には産は七日、又三十日と申げに候。いみも五十日と申す。御心まかせに候」

【一二六】「一、沒後の佛經しをく事は一定すべく候か」

答「一定にて候。すべく候」

【一二七】「一、所作かきてしいれ、かねてかゝんずるを、さしづ候はいかに」

【一二八】出家老若のこと。

【一二九】佛に花まいらすこと。

【一三〇】忌の者物詣りのこと。

【一三一】物詣でして道よりすること。

【一三二】齋の時の誦文のこと。

【一三三】女房の物ねたみのこと。

【一三四】桐のはいのこと。

【一三五】物詣での精進三日のこと。

答「しいるゝはくるしからず。かねては懈怠也」

【一二八】「一、出家はわかきとおひたるといづれか功徳にて候」

答「老ては功徳ばかりえ候。わかきはなをめでたく候」

【一二九】「一、佛に花まいらする誦文、御らんのためにまいらせ候」

答「これせんなし、念佛を申させ給へ」

【一三〇】「一、いみの者のものへまいり候事はあしく候か」

答「くるしからず」

【一三一】「一、物まうでしてかへさにわがもとへ返らぬ事はあしく候か。又魚鳥にやがてみだれ候事いかに」

答「熊野のほかはくるしからず」

【一三二】「一、齋のおりの誦文はかくし候べしと申候。御らんのためにまいらせ候」

答「齋のおりも、たゞ念佛を申させ給へ。女房は誦文せずとも」

【一三三】「一、女房の物ねたみの事、さればつみふかく候な」

答「たゞよく／＼一心に念佛を申させ給へ」

【一三四】「一、桐のはい、かみにつくるは、佛神に申事のかなはぬと申候はまことに候か」

答「そら事なり」

【一三五】「一、物へまいり候精進三日といふ日まいり候べきか。四日のつとめてか」

【一三六】物こもりのこと。
【一三七】ずゝのこと
【一三八】法師の罪のこと。
【一三九】現世祈禱のこと。

答「三日のつとめてまいる」

【一三六】「一、物こもりし候に、三日とおもひ候はんは四日になしていで、七日とおもひて候はんは八日になしていで候べきか」
答「それは世の人のせんように」

【一三七】「一、ずゝにさくらくり、いむと申候はいかに」
答「さる事候はず」

【一三八】「一、法師のつみはことにふかしと申候は」
答「とりわき候はず」

【一三九】「一、現世をいのり候にしるしの候はぬ人はいかに候ぞ」
答「現世をいのるに、しるしなしと申事、佛の御そらごとには候はず。わが心の說のごとくせぬによりてしるしなき事は候也。さればよくするにはみなしるしは候也。觀音を念ずるにも一心にすればしるし候。もし一心なければしるし候はず。むかしの緣あつき人は定業すらなを轉ず。むかしもいまも緣あさき人は、ちりばかりのくるしみにだにもしるしなしと申て候也。佛をうらみおぼしめすべからず。たゞこの世、のち世のために佛につかへんには、心を至し、實をはげむ事、この世もおもふ事かなひ、のちの世も淨土にむまるゝ事にて候也。しるしなくばわが心をはづべし。」

建仁元年十二月十四日、けざんにいりて、とひまいらする事

【一四〇】臨終の時の不淨のこと。

【一四〇】「一、臨終の時不淨のものゝ候には佛のむかへにわたらせ給ひたるも、かへらせ給ふと申候はまことにて候か」

答「佛のむかへにおはしますほどにては不淨のものありといふとも、なじかはかへらせ給べき。佛はきよききたなきの沙汰なし。たゞ念佛ぞよかるべき。きよくとも念佛申さゞらんには益なし。萬事をすてゝ念佛を申すべし。證據のみをほかり」

これは御文にてたづね申す。

【一四一】往生の爲に布施すること。

【一四一】「一、家のうちのものゝしたしきうときをきらはず。往生のためとをもひて、くひ物きものたまはんは佛に供養せんとをなじ事にて候か」

答「したしきうときをえらばず。往生のためとおぼしめして物たびおはしまさん。めでたき功徳にて候。御つかひによく〱申候ぬ」

【一四二】破戒の僧、愚癡の僧供養のこと。

【一四二】「一、破戒の僧、愚癡の僧、供養せんも功徳にて候か」

答「破戒の僧、愚癡の僧をすゑの世には佛のごとくたとむべきにて候也。この御つかひに申候ぬ。きこしめし候へ」

この御ことばは上人のまさしき御手也『あみだ經』のうらにをしたり。見參にいりてうけ給はる事。

【一四三】日所作にずずくること。

【一四三】「一、毎日の所作に六萬十萬の數遍を、ずゝをくりて申候はんと、二萬三萬をずゝをたしかにひとつづつ申候はんといづれかよく候べき」

【一四四】眞言の阿彌陀供養法のこと。

【一四五】廢惡修善の念佛と別意弘願の念佛とのこと。

【上人と明遍との問答】勅傳第十六卷に、上人天王寺新別所に御坐せし時僧都善光寺へ參詣のみぎり尋ね給ひし時の問答なりとあり。

答「凡夫のならひ、二萬三萬あつとも如法にはかなひがたからん。たゞ數遍のおほからんにはすぐべからず。名號を相續せんため也。かならずしもかずを要とするにはあらず。たゞつねに念佛せんがためなり。かずをさだめぬは懈怠の因緣なれば、數遍をすゝむるにて候」

【一四四】「一、眞言の阿彌陀の供養法は正行にて候べきか」

答「佛體は一つに似たれどもその意不同なり。眞言教の彌陀はこれ己心の如來、ほかをたずぬべからず。この教の彌陀はこれ法藏比丘の成佛也。西方におはしますゆへにその意おほきにことなり。」

【一四五】「一、つねに惡をとゞめ善をつくるべき事をおもほへて念佛申候はんと、たゞ本願をたのむばかりにて、念佛を申候はんといづれかよく候べき」

答「廢惡修善は諸佛の通戒なり。しかれども、當世のわれらは、みなそれにはそむきたる身なれば、たゞひとへに別意弘願のむねをふかく信じて、名號をとなへさせ給はんにすぎ候まじ。有智無智、持戒破戒をきらはず。阿彌陀ほとけは來迎し給事にて候なり。御意え候へ」

上人と明遍との問答

明遍問たてまつりての給はく「末代惡世のわれらがやうなる罪濁の凡夫、いかにしてか

【明遍】京都の人藤原通憲の子。幼にして奈良の敏覺明海につきて三論密教をうけ。後法然上人につきて念佛を修す。乃ち高野に入りて念佛し下山せざること三十年。元仁元年六月十五日寂。壽八十三。

生死をはなれ候べき」

上人答ての給はく「南無阿彌陀佛と申して極樂を期するばかりこそ、しえつべき事と存じて候へ」

(二)僧都のいはく「それは形の樣にさ候べきかと存じて候。それによりて決定をせん料に申つるに候。それに念佛は申候へども、心のちるをばいかゞし候べき」

上人答ていはく「それは源空もちからをよび候はず」

(三)僧都のいはく「さてそれをばいかゞし候べき」

上人のいはく「ちれども名を稱すれば、佛の願力に乘じて往生すべしとこそ意えて候へ。たゞ詮ずるところ、おほらかに念佛を申候が第一の事にて候也」

僧都のいはく「かう候々。これうけ給はりにまいりつるに候」と これより前後には、いさゝかも詞なくていでられにけり。

(四)上人又僧都退出の後、當座のひじりたちにかたりての給はく「欲界散地にむまれたるものはみな散心あり。たとへば人界の生をうけたる物の目鼻のあるがごとし。散心をすてゝ往生せんといはん事、そのことはりしかるべからず。散心ながら念佛申すものが往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ。この僧都の念佛申せども、心のちるをばいかゞすべきと不審せられつるこそ、いはれずおぼゆれ」と云云

諸人傳說の詞　御歌附

【一】隆寬律師のいはく『法然上人の給はく「源空も念佛の外に每日に『阿彌陀經』を三卷よみ候き。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。しかるにこの經に詮ずるところたゞ念佛申せとこそとかれて候へば、いまは一卷もよみ候はず。一向念佛を申候也」と隆寬（每日に阿彌陀經四十八卷よまれき）すなはち意えて、やがて『阿彌陀經』をさしをきて念佛三萬遍を申しき』（と進行集よりいでたり云云）

【二】乘願上人のいはく『ある人問ていはく「色相觀は『觀經』の說也。たとひ稱名の行人なりといふとも、これは觀ずべく候かいかん」上人答ての給はく「源空もはじめはさるいたずら事をしたりき。いまはしからず。但信の稱名也』と（授手印決答よりいでたり）

【三】又『人目をかざらずして往生の業を相續すれば、自然に三心は具足する也。たとへば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よく〳〵たちよりてみれば、あしまをわけてやどるなり。妄念のあしはしげけれども三心の月はやどる也。これは故上人のつねにたとへにおほせられし事也』と（かの二十八問答よりいでたり）

【四】『ある時又の給はく「あはれこのたびしおほせばやな」と。その時乘願申さく。上人だにもかやうに不定げなるおほせの候はんには、ましてその餘の人はいかゞ候べき」

【諸人傳說の詞】ここに載するもの勅傳數箇所に載錄あり。

【一】隆寬律師傳說の詞。阿彌陀經讀誦のこと。

【隆寬】京都の人小納言藤原資隆の三男、叡山の範源、慈圓に師事し、後東山の長樂寺に住す。法然上人に淨土宗をうけてより大に往生の業を弘通し、長樂寺流の一派をなす。後山門烽起の難に遭ひて相模に流され安貞元年十二月十三日寂す。壽八十。著書數種あり。勅傳四十四卷にくはし。

【二】乘願傳說の詞。色相觀のこと。

【乘願】宗源と云ふ。初め仁和寺にありしが、後眞言を學び更に法然上

人につきて淨業を修す。晩年清水寺竹谷に居る。建長三年七月三日寂、壽八十四。勅傳第四十三卷に出づ。

【三】同上。三心具足のこと。

【四】同上。決定信心のこと。勅傳第二十一卷にのす。

【五】信空傳說の詞。菩提心のこと。

【信空】法蓮房信空。左大辨行隆の子。十二歲にして叡山に登り、叡空に師事す。後法然上人に事へ、專ら淨業を事とす。安貞二年九月二日寂、

【六】同上。往生の業は稱名にて足ること。

【七】同上。持齋のこと。

と。その時上人うちわらひての給はく「蓮臺にのらんまではいかでかこのおもひはたえ候べき」と。（閑亭問答集よりいでたり）

【五】信空上人のいはく「ある時上人の給はく『淨土の人師おほしといへども、みな菩提心をすゝめて觀察を正とす。たゞ善導一師のみ菩提心なくして、觀察をもて稱名の助業と判ず。當世の人善導の意によらずばたやすく往生をうべからず。曇鸞道綽懷感等、みな相承の人師なりといへども、義にをいてはいまだかならずしも一準ならず。よく〳〵これを分別すべし』このむねをわきまへずば、往生の難易にをいて存知しがたき物也」と。

【六】ある時問ていはく「智惠のもし往生の要事となるべくば、正直におほせをかうぶりて、修學をいとなむべし。又たゞ稱名不足あるべからずばそのむねを存ずべく候。たゞいまのおほせを如來金言と存べく候」答ていはく「往生の業はこれ稱名といふ事、釋文分明也。有智無智をきらはずといふことはりまた顯然也。しかれば往生のためには稱名足ぬとす。學問をこのまんとおもはんよりは、たゞ一向念佛して往生をとぐべし。彌陀觀音勢至にあひたてまつらん時いづれの法文か達せざらん。かのくにの莊嚴、晝夜朝暮に甚深の法門をとく也。但し念佛往生のむねをしらざらん程はこれを學すべし。もしこれをしりなば、いくばくならざる智惠をもとめて、稱名のいとまをさまたぐべからず」

【七】ある時問ていはく「人おほく持齋をすゝむ。この條いかん」答ての給はく「尼法師の食の作法はもともしかるべしといへども、當世は機すでにをと

ろへたり。食すでに滅じたり。この分際をもて一食せば、心ひとへに食事をおもひて念佛しづかならじ。菩提心經にいはく「食菩提をさまたげず。心よく菩提をさまたぐ」といへり。そのうへは自身をあひはからふべきなり」と。

【八】ある時問ていはく「往生の業にをいてはおもひさだめをはりぬ。たゞし一期の身のありさまをばいかやうにか存じ候べき」

答ての給はく「僧の作法は大小の戒律あり。しかりといへども末法の僧これにしたがはず。源空これをいましむとも、たれの人かこれにしたがふべき。たゞ詮ずるところは念佛の相續するやうにあひはからふべし。往生のためには念佛すでに正業也。このむねをまもりてあひはげむべきなり」

【九】ある人問ていはく「つねに廢惡修善のむねを存じて念佛すると、つねに本願のむねをおもひて念佛するといづれかすぐれて候」

答ての給はく「廢惡修善はこれ諸佛の通誡なりといへども、當世のわれらことごとく違背せり。若し別意の弘願に乘ぜずば、生死をはなれがたきものか」

【一〇】ある人問ていはく「稱名の時心をほとけの相好にかけん事、いかやうにか候べき」

答ての給はく「しからず、たゞ若し我成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱して、下十聲に至るまで、若し生ぜずば正覺を取らじ。彼の佛今現に世に在して成佛したまふ。當に知るべし、本誓の重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得とおもふばかり也。わ

【八】同上。一期の間は念佛の相續するやうに計ふこと。

【九】同上。廢惡修善の念佛と弘願の念佛とのこと。前の一百四十五箇條問答の最後にも出づ。

【一〇】同上。稱名の時佛の相好を觀ずること。

【一】同上。善導の釋に安心を略せること。

【二】同上。日所作の妙法不如法のこと。

【三】同上。淨土門は愚癡にかへりて念佛すること。

れらが分際をもて、佛の相好を觀ずとも、さらに如說の觀にはあらじ。たゞふかく本願をたのみて、口に名號をとなふるこの一事のみ假令ならざる行也」

【一】ある人間ていはく「善導本願の文を釋し給ふに、至心信樂欲生我國の安心を略したまふ事、なに心かあるや」

答ての給はく「衆生稱念必得往生としりぬれば、自然に三心を具足するゆへに、このことはりをあらはさんがために略し給へる也」

【二】ある人間ていはく「毎日の所作に六萬十萬等の數遍をあてゝ不法なると、二萬三萬の數遍をあてゝ如法なると、いづれをか正とすべき」

答ての給はく「凡夫のならひ二萬三萬をあつといふとも、如法の義あるべからず。たゞ數遍のおほからんにしかず。詮ずるところ心をして相續せしめんがため也。かならずしもかずを沙汰するを要とするにはあらず。たゞ常念のためなり。數遍をさだめつるは懈怠の因緣なるがゆへに、數遍をすゝむる也」

【三】ある人間ていはく「上人の御房の申させたまふ御念佛は念々ごとにほとけの御意にあひかなひ候らんとおぼえ候。智者にてましませば、くはしく名號の功德をもしろしめし、あきらかに本願のやうをも御意得あるがゆへに」と。

答ての給はく「なんぢ本願を信ずる事まだしかりけり。彌陀如來の本願の名號は木こり、くさかり、なつみ、みづくみたぐひごときのものゝ內外ともにかけて、一文不通なるが、

【一四】念佛はまたく別の風情なきこと。勅傳第二十一卷に載す。

【一五】辨阿上人傳說の詞。愚擬の念佛。勅傳第二十一卷に載す。

【辨阿】聖光房辨長。辨阿彌陀佛略して辨阿と號す。淨土宗第二祖。筑前に生れ、七歲にして出家し、後比叡山に登りて天台を學す。建長八年吉水に法然上人を訪ひて淨土敎を得、筑後に善導寺を建立して大に淨業を弘通し、嘉禎四年二月廿九日寂す。壽七十七。

となふればかならずむまれなんと信じて、眞實に欣樂して、つねに念佛申を最上の機とす。もし智惠をもて生死をはなるべくば、源空なんぞ聖道門をすてゝこの淨土門におもむくべき。まさにしるべし。聖道の修行は智惠をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむまる」と　巳上信空上人の傳說なり　進行集よりいでたり

【四】信空上人又いはく「先師法然上人あさゆふをしへられし事也。念佛申にはまたく樣もなし。たゞ申せば極樂にむまるとしりて、心を至して申せばまいる事也。ものをしらぬうへに、道心もなく、いたづらにゆへなきことをいふ也。さいはん口にて、阿彌陀佛を一念十念にても申せかしと候ひし事也。又御往生の後、三井寺の住心房と申す學生、ひじりに、ゆめのうちに問れても、阿彌陀佛はまたく風情もなく、たゞ申す事也と答へられたりと。大谷の月忌の導師せらるとて、おほくの人の中にて說法にせられ候き」と　白川消息よりいでたり

【五】辨阿上人のいはく「故上人の給はく、われはこれ烏帽子もきざるおとこ也。十惡の法然房が念佛して往生せんといひて居たる也。又愚癡の法然房が念佛して往生せんといふ也。安房の助といふ一文不通の陰陽師が申す念佛と、源空が念佛とまたくかはりめなし」と　物語集にいでたり

【六】ある時問ていはく「上人の御念佛は智者にてましませば、われらが申す念佛にはまさりてぞおはしまし候らんとおもはれ候はひが事にて候やらん」

その時上人御氣色あしくなりておほせられていはく「さばかり申す事を用ひ給はぬ事よ。

もしわが申す念佛の樣風情ありて申候はゞ、毎日六萬遍のつとめむなしくなりて三惡道におち候はん。またくさる事候はず」と。まさしく御誓言候しかば、それより辨阿はいよ〳〵念佛の信心を思ひさだめたりき。同集

【一七】又人ごとに、上人つねにの給しは「一丈のほりをこへんとおもはん人は、一丈五尺をこへんとはげむべし。往生を期せん人は決定の信をとりてあひはげむべき也。ゆるくしてはかなふべからず」と。同集

【一八】又上人のの給はく「念佛往生と申す事はもろこしわが朝のもろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念佛にもあらず。又學問をして念佛の心をさとりとほして申す念佛にもあらず。たゞ極樂に往生せんがために南無阿彌陀佛と申てうたがひなく往生するぞとおもひとりて申すほかに別の事なし。たゞし三心ぞ四修ぞなど申す事の候は、みな南無阿彌陀佛にて決定して往生するぞとおもふうちにおさまれり。たゞ南無阿彌陀佛と申せば、決定して往生する事なりと信じとるべき也。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の御のりをよくよく學しきはめたる人なりとも、文字一もしらぬ愚癡鈍根の不覺の身になして、尼入道の無智のともがらにわが身をおなじくなして、智者のふるまひせずして、たゞ一向に南無阿彌陀佛と申てぞかなはんず」など。同集

【一九】又上人のの給はく「源空が目には、三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛なり」と　授手印にいでたり

【一六】同上。念佛には智者愚者の別なきこと、勅傳第十九卷に載す。

【一七】同上。決定の信心のこと。勅傳第二十一卷に載す。

【一八】同上。これは一枚起請文として本書第一卷に出す所と同樣なり。但し、辭句やゝ異る所あり。前に揭ぐる所は源智上人に與へ、今あぐるは聖光上人に與へられしものならむ。

【一九】同上。結歸一行の南無阿彌陀佛。勅傳第二十一卷にのす。

【二〇】同上。聖道の修行には耐へ得ざりしこと。勅傳第六卷に載す。

【二〇】又上人かたりての給はく「世の人はみな因緣ありて道心をばをこす也。いはゆる父母兄弟にわかれ、妻子朋友にはなるゝ等也。しかるに源空は、させる因緣もなくして法爾法然と道心ををこするゆへに、師匠名をさづけて法然となづけ給ひし也。されば出離の志しいたりてふかゝりしあいだ、もろ〳〵の敎法を信じて、もろ〳〵の行業を修す。をよそ佛敎おほしといへども、詮ずるところ戒定慧の三學をばすぎず。いはゆる小乘の戒定慧、大乘の戒定慧、顯敎の戒定慧、密敎の戒定慧なり。しかるにわがこの身は、戒行にをいて一戒をもたもたず、禪定にをいて一もこれをえず、智慧にをいて斷惑證果の正智をえず。これによて戒行の人師釋していはく「尸羅淸淨ならざれば三昧現前せず」といへり。又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし。たとふるにさるのごとし。まことに散亂してうごきやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なにによりてかをこらんや。もし無漏の智劔なくば、いかでか惡業煩惱のきづなをたゝむや。惡業煩惱の絆を斷ぜずば、何ぞ生死繫縛の身を解脫する事をえんや。かなしきかな〳〵。いかゞせん〳〵。こゝにわがごときは、すでに戒定慧の三學のうつはものにあらず。この三學の外にわが心に相應する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると、よろづの智者にもとめ、もろ〳〵の學者にとぶらひしに、をしゆる人もなく、しめすともがらもなし。しかるあひだなげき〳〵經藏にいり、かなしみ〳〵聖敎にむかひて、てづからみづからひらきてみしに、善導和尚の『觀經の疏』にいはく「一心に專ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる、

【二】禪勝房傳説の詞。踊躍歡喜なきものは漸々に修すべきこと。
【禪勝房】遠江の國蓮華寺の住僧前に註す。

是を正定の業と名く、彼の佛の願に順ずるが故に」といふ文を見得て後、われらがごときの無智の身は、ひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことはりをたのみて、念々不捨の稱名を修して決定往生の業因にそなふべし。たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく彌陀の弘願に順ぜり。順彼佛願故の文ふかくたましひにそみ、心にとゞめたる也。そののち惠心の先徳の『往生要集』の文をひらくに「往生之業には念佛を本となす」といひ。又惠心の『妙行業記』の文をみるに「往生之業には念佛を先となす」といへり。覺超僧都惠心僧都にとひての給はく「僧都所行の念佛はこれ事を行ずとやせん。これ理を行ずとやせん」と。惠心こたへての給はく「心萬境にさへぎる。こゝをもてわれたゞ稱名を行ずる也。往生の業には稱名もともたれり」。これによて一生の中の念佛、そのかずをかんがへたるに、二十倶胝遍也」との給へり。しかれば則ち源空は大唐の善導和尚のをしへにしたがひ、本朝の惠心の先徳のすゝめにまかせて、稱名念佛のつとめ、長日六萬遍也。死期やうやくちかづくによて、又一萬遍をくはへて長日七萬遍の行者なり」と徹選擇にいでたり

【二】禪勝房のいはく「上人おほせられてのたまはく、今度の生に念佛して、來迎にあづからんうれしさよとおもひて、踊躍歡喜の心のをこりたらん人は、自然に三心は具足したりとしるべし。念佛申ながら後世をなげく程の人は三心不具の人也。もし歡喜する心いまだをこらずば、漸々によろこびならふべし。又念佛の相續せられん人は、われ三心具したりとしるべし」念佛問答集にいでたり

【二二】同上。往生の得否はわが心に占ふべきこと。

【二三】同上。われ一人決定往生せんと期すべきこと。勅傳第二十一卷に載す。

【二四】同上。自身の罪惡を疑ひて往生を不定にすべからざること。勅傳第四十五卷に載す。

【二五】同上。本願の念佛には助さゝぬこと。勅傳第二十一卷に載す。

【二二】又いはく「往生の得否はわが心にうらなへ。その占の樣は、念佛だにもひまなく申されば、往生は決定としれ。もし疎相ならば順次の往生はかなふまじとしれ。この占をしてわが心をはげまし、三心の具すると具せざるとをもしるべし」同集

【二三】又いはく「たとひ念佛せんもの十人あらんが中に九人は臨終あしくて往生せずとも、われ一人は決定して念佛往生せんとおもふべし」同集

【二四】又いはく「自身の罪惡をうたがひて往生を不定に思はんはおほきなるあやまり也。さればとてふてかゝりてわろからんとにはあらず。本願の手ひろく、不思議なる道理を心えんがため也。されば念佛往生の義を、ふかくも、かたくも申さん人は、つや〳〵本願の義をしらざる人と心得べし。源空が身も、檢校別當どもが位にてぞ往生はせんずる。もとの法然房にては往生はえせじ。さればとしごろならひあつめたる智惠は、往生のためには要にもたつべからず。されどもならひたるかひには、かくのごとくしりたるはゞかりなき事也」同集

【二五】又いはく「本願の念佛にはひとりだちをせさせて助をさゝぬ也。助さす程の人は極樂の邊地にむまる。すけと申すは智惠をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念佛し、惡人は惡人ながら念佛して、たゞむまれつきのまゝにて念佛する人を念佛にすけさゝぬとは申す也。さりながらも惡をあらためて善人となりて念佛せん人はほとけの御意にかなふべし。かなはぬ物ゆへに、と

【二六】同上。法爾の道理のこと。勅傳第二十一卷にのす。

【二七】現世には念佛の申されんやうにすぐべきこと。勅傳第四十五卷に載す。

あらんかくあらんとおもひて、決定の心をこらぬ人は往生不定の人なるべし」同集

【二六】又いはく「法爾道理といふ事あり。ほのほはそらにのぼり、水はくだりさまにながる。菓子の中にすき物あり、あまき物あり。これらはみな法爾道理也。阿彌陀ほとけの本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、たゞ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾道理にてそなはるべきなり」同集

【二七】又いはく「現世をすぐべき樣は念佛の申されん樣にすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてゝ、これをとゞむべし。いはく「ひじりで申されずばめをまうけて申べし。妻をまうけて申されずばひじりにて申すべし。住所にて申されずば流行して申すべし。流行して申されずば家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば他人にたすけられて申べし。他人にたすけられて申されずば自力の衣食にて申べし。一人して申されずば同朋とともに申べし。共行して申されずば、一人籠居て申すべし。衣食住の三は念佛の助業也。これすなはち自身安穩にして念佛往生をとげんがためには、何事もみな念佛の助業也。三途へかへるべき事をする身をだにもすてがたければ、かへりみはぐゝむぞかし。まして往生程の大事をはげみて、念佛申さん身をば、いかにも〳〵はぐくみたすくべし。もし念佛の助業とおもはずして身を貪求するは三惡道の業となる。極樂往生の念佛申さんがために自身を貪求するは、往生の助業となるべきなり。萬事かくのごとし」と、同集

【一八】道遍傳說の詞。往生のためには念佛第一なること。

【道遍】澁谷七郎入道道遍のこと。上人常侍の弟子なり。勅傳第二十五卷に出づ。

【一九】上人の詠歌

【一八】沙彌道遍かたりていはく「故上人おほせられていはく、往生のためには念佛第一なり、學問すべからず。たゞし念佛往生を信ぜん程はこれを學すべし」いでたり　宗要集に

【一九】御歌

阿彌陀佛といふよりほかはつのくにの
　なにはの事もあしかりぬべし

千とせふるこまつのもとをすみかにて
　あみたほとけのむかへをそまつ

いけのみつ人のこころににたりけり
　にこりすむ事さためなけれは

むまれてはまつおもひてんふるさとに
　ちきりしとものふかきまことを

あみたふつと申すはかりをつとめにて
　淨土の莊嚴見るそうれしき

しはの戸にあけくれかかるしら雲を
　いつむらさきのいろとみなさん

露の身はここかしこにてきえぬとも

心はおなしはなのうてなそ

阿弥陀仏と十こゑとなへてまとろまん
なかきねふりになりもこそすれ

月かけのいたらぬさとはなけれとも
なかむる人のこゝろにそすむ

【登山狀】勅傳第三十二卷に載す。專修念佛の教四海に宣布せらるるや、南都北嶺の衆徒蜂起して念佛の興行をはばみしかば、法然上人は七箇條の起請文を山門につかはし、更に聖覺法印をして、念佛の大旨をとき、その弘通は諸宗のさまたげとならざることを叙述せしむ。世に之を登山狀と云ふ。

【一】佛教流布の世にあひて出離の緣なきことを悲しむ。

【四生】四種の出生。胎生、卵生、濕生、化生。

【鷲峰】耆闍崛山のこと。中天竺王舍城の東北に在る山。

【鶴林涅槃】鶴林は娑羅林なり。釋尊の入滅し給はんとする時、沙羅雙樹は色を變じ白色

拾遺和語燈錄　卷上

登山狀

【一】それ流浪三界のうち、いづれの界におもむきてか釋尊の出世にあはざりし。輪廻四生のあひだ、いづれの生をうけてか如來の說法をきかざりし。華嚴開講のむしろにもまじはらず、般若演說の座にもつらならず、鷲峯說法のにはにものぞまず、鶴林涅槃のみぎりにもいたらず。われ舍衛の三億の家にややどりけん、しらず地獄八熱のそこにやすみけん。はづべし〳〵、かなしむべし〳〵。まさにいま多生曠劫をへて、むまれがたき人界にむまれて、無量劫をくりて、あひがたき佛教にあへり。釋尊の在世にあはざる事はかなしみなりといへども、教法流布の世にあふ事を得たるは、是よろこび也。たとへば目しゐたる龜の、うき木のあなにあへるがごとし。わが朝に佛法流布せし事も、欽明天皇あめのしたをしろしめして、十三年みづのえ申のとし冬十月一日、はじめて佛法わたり給ひし。それよりさきには、如來の教法も流布せざりしかば、菩提の覺路いまだきかず、ここにわれらいかなる宿緣にこたへ、いかなる善業によりてか、佛法流布の時にむまれて、生死解脫のみちをきく事をえたる。しかるをいまあひがたくしてあふ事を得たり。いたづらにあかしく

となり恰も闇の宵なれば、れるが如くなれば、この名あり。

【舍衞の三億の家】舍衞國王舍城に九億の家あり。三億は佛を拜し、三億は佛の出世ありと聞き、三億は佛の名だにきかずと云ふ。今云ふ所は最後の三億の家なり。

【金谷の花】朗詠集に云く「金谷華に醉るの地、華は春毎に匂へども主歸らず。南樓に月を翫ぶの人、月は秋とともに期すれども身何れにか去らん」と。金谷は「石崇が家に金谷園あり。此園貴くして金を布て之を買ふ」と云ひ、又「苑に梅樹を植ければ金花苑とも云ふ」と。南樓は晋の庾亮が南樓を延てて月を翫べりと云ふ故事なり。

【かせき】鹿のこと。

らしてやみなんことをなしければ、或は金谷の花をもてあそびて、遲々たる春の日をむなしくくらし、或は南樓に月をあざけりて、漫々たる秋の夜をいたづらにあかす。或は千里の雲にはせて、山のかせぎをとりてとしをくり、あるいは萬里のなみにうかびて、うみのいろくづをとりて日をかさね、あるひは嚴寒にこほりをしのぎて世路をわたり、あるひは炎天にあせをのごひて利養をもとめ、あるひは妻子眷屬に纏はれて恩愛のきづなきりがたし。あるひは執敵怨類にあひて瞋恚のほむらやむ事なし。總じてかくのごとくして晝夜朝暮行住坐臥、時としてやむ事なし。たゞほしきまゝにあくまで三途八難の業をかさぬ。しかればある文には「一人一日の中に八億四千の念あり、念々の中の所作皆是三途業なり」といへり。かくのごとくして昨日もいたづらにくれぬ、今日も又むなしくあけぬ。いまいくたびかくらし、いくたびかあかさんとする。それあしたにひらくる榮花はゆふべの風にちりやすく、ゆふべにむすぶ命露はあしたの日にきえやすし。これをしらずしてつねにさかへん事を思ひ、これをさとらずして久しくあらん事をおもふ。しかるあひだ無常の風ひとたびふきて、有爲のつゆながくきえぬれば、これを曠野にすててこれをとをき山にをくる。かばねはつゐにこけのしたにうづもれ、たましゐはひとりたびのそらにまよふ。妻子眷屬は家にあれどもともなはず、七珍萬寶は藏にみてれども益もなし。たゞ身にしたがふものは後悔のなみだ也。つゐに閻魔の廳にいたりぬれば、つみに淺深をさだめ、業の輕重をかんがへらる。法王罪人にとひていはく、なんぢ佛法流布の世にむまれて、なんぞ修行せず

していたづらに歸りきたるやと。その時にはわれらいかゞこたへんとする。すみやかに出要をもとめて、むなしく三途に歸る事なかれ。

【一】そも〳〵一代諸敎のうち、顯宗密宗、大乘小乘、權敎實敎、論家釋家、部八宗にわかれ、義萬差につらなりて、あるひは萬法皆空の旨をとき、あるひは諸法實相の意をあかし、あるひは五性各別の義をたて、あるひは悉有佛性の理を談じ、宗々に究竟至極の義をあらそひ、各々に甚深正義の宗を論ず。みなこれ經論の實語也。抑又如來の金言也。あるひは機をとゝのへてこれをとき、あるひは時をかゞみてこれをしへ給へり。いづれかあさく何れかふかき。ともに是非をわきまへがたし。かれも敎、これも敎、たがひに偏執をいだく事なかれ。說のごとく修行せば、みなことごとく生死を過度すべし。法のごとく修行せば、ともにおなじく菩提を證得すべし。修せずしていたづらに是非を論ず。たとへば目しゐたる人の、いろの淺深を論じ、みゝしゐたる人の、こゑの好惡をいはんがごとし。たゞすべからく修行すべし。いづれも生死解脫のみち也。しかるにいまかれを學する人はこれをそねみ、これを誦する人はかれをそしる。愚鈍のものこれがためにまどひやすく、淺才の身是がためにわきまへがたし。たま〳〵一法におもむきて功をつまんとすれば、すなはち諸宗のあらそひたがひにきたる。ひろく諸敎にわたりて義を談ぜんとおもへば、一期のいのちくれやすし。かの蓬萊方丈瀛州といふなる三の山にこそ不死のくすりはありときけ、かれを服してまれ、いのちをのべて漸々に習

【いろくづ】魚類のこと。
【ある文】安樂集に淨度菩薩經なりと云ふ。
【一】釋尊一代の聖敎に萬差あり、今淨土門に歸するを明す。
【萬法皆空】般若經の思想。三論宗等を表はす。
【諸法實相】法華經の思想、天台宗を表はす。
【五性各別】唯識の思想。法相宗等を表はす。五性は無性有情種性、不定種性、聲聞決定種性、緣覺決定種性、菩薩決定種性の五。この五種は佛教に對する信不信等の性質をその本性として有するもの、先天的に差別ありと認むるなり。
【悉有佛性】涅槃經の思想を表はす。

【三】淨土門の行相を明す。

はばやと思へども、たづぬべきかたもおぼえず、もろこしに秦皇漢武ときこえし御門、これをきゝ、たづねにつかはしたりしかども、童男丱女、ふねのうちにして年月をおくりき。彭祖が七百歳の法、むかしがたりにていまの時につたへがたし。曇鸞法師と申しゝ人こそ、佛法のそこをきはめんと思ふに、人のいのちはあしたを期しがたしとて、佛法をならはんがために、長生の仙法をばつたへ給ひけれ。時に菩提流支と申す三藏まし〳〵き。曇鸞かの三藏の御まへにまうでて申し給ふやうは、「佛法の中に長生不死の法、この土の仙經にすぎたるありや」ととひ給ひければ、三藏地につばきをはきての給はく、「この方にいづくのところにか長生の法あらん、たとひ長年をえてしばらくしなずともつひに三有に輪廻す」との給ひてすなはち『觀無量壽經』をさづけて「大仙の法也、これによりて修行すればかならず生死を解脫すべし」との給ひき。曇鸞これをつたへて、たちどころに仙經を火にやきてすて、『觀無量壽經』によりて淨土の行を修し給ひき。そのゝち曇鸞道綽善導懷感少康等にいたるまで、このながれをつたへ給へり。そのみちをおもひて、いのちをのべて大仙の法をとらんとおもふに、道綽禪師の『安樂集』にも聖道淨土の二門をたて給ふは此の意なり。その聖道門といふは穢土にして煩惱を斷じて菩提にいたる也。淨土門といふは、淨土にむまれてかしこにして煩惱を斷じて菩提にいたるなり。

【三】いまこの淨土宗につゐてこれをいへば、又『觀經』にあかすところの業因一にあらず。三福九品十三定善、その行しな〴〵にわかれて、その業まち〳〵につらなれり。まづ定善

【六塵】色聲香味觸法の六境。この六境は心の對照にして種々欲望を誘導し、心をして汚濁せしむるが故に此名あり。

【四】念佛の功德を明す。

【雄俊】唐高僧傳二十四、瑞應傳等に出づ。

十三觀といふは、日想、水想、地想、寶樹、寶池、寶樓、花座、像想、眞身、觀音、勢至、普觀、雜觀是也。つぎに散善三福といふは、一には孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業、二には受持三歸、具足衆戒、不犯威儀、三には發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者也。九品はかの三福の業を開してその業因にあつ。つぶさには『觀經』にみえたり。總じて是をいへば、定散二善の中にもれたる往生の行はあるべからず。これによりて或はいづれにもあれ、たゞ有緣の行におもむきて功をかさねて、心のひかん法によりて行をはげまば、みなこと〴〵く往生をとぐべし。さらにうたがひをなす事なかれ。いましばらく自法につきてこれをいはゞまさにいま定善の觀門はかず〴〵つらなりて十三なり。散善の業因はまち〳〵にわかれて九品あり。その定善の門にいらんとすれば、すなはち、意馬あれて六塵の境にはせ、かの散善の門にのぞまんとすれば、又心猿あそんで十惡のえだにうつる。かれをしづめんとすれども得ず、これをとゞめんとすれどもあたはず。いま下三品の業因をみれば、十惡五逆の衆生、臨終に善知識にあひて、一聲十聲阿彌陀佛の名號をとなへて往生すとゝかれたり。これなんぞわれらが分にあらざらんや。

【四】かの釋の雄俊といひし人は、七度還俗の惡人也。いのちをはりてのち、獄卒閻魔の廳庭にゐてゆきて、「南閻浮提第一の惡人、七度還俗の雄俊、ゐでまいりはんべり」と申しければ、雄俊申していはく、「われ在生の時、『觀無量壽經』をみしかば五逆の罪人阿彌陀ほとけの名號を十聲となへて極樂に往生すと、まさしくとかれたり。われ七度還俗すといへど

【楞嚴の先德】惠心僧都源信のこと　惠心僧都は横川の首楞嚴院に住せるを以て此稱あり。

【五】淨土の要門弘願を明す。

も、いまだ五逆をばつくらず、善根すくなしといへども念佛十聲にすぎたり。雄俊もし地獄におちば、三世の諸佛妄語のつみにおちたまふべし」と高聲にさけびしかば、法王は理におれて、たまのかふりをかたふけてこれをおがみ、彌陀はちかひによりて、金蓮にのせてむかへ給ひき。いはんや七[illegible]にをよばざらんをや。いはんや一形念佛せんをや。男女貴賤行住坐臥をえらばず、時處諸縁を論せず、是を修するにかたからず、乃至臨終に往生を願求するにそのたよりをえたりと、楞嚴の先德のかきをき給へる、まことなるかなや。

【五】又善導和尚この『觀經』を釋しての給はく、「娑婆の化主、その請によるがゆへに、ひろく淨土の要門をひらき、安樂の能人、別意の弘願をあらはす。その要門といふは、すなはちこの『觀經』の定散二門これ也。定はすなはちおもひをやめてもて心をこらし、散はすなはち惡を廢して善を修す。この二行をめぐらして往生をもとめねがふ也。弘願といは『大經』にとくがごとし。一切善惡の凡夫のむまるゝ事をうるもの、みな阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣とせずといふ事なし。又ほとけの密意弘深にして、敎文さとりがたし。三賢十聖もはかりてうかゞふところにあらず。いはんやわれ信外の輕毛也。さらに旨趣をしらんや。あふひでおもんみれば、釋迦はこの方にして發遣し、彌陀はかのくにより來迎し給ふ。こゝにやりかしこによばふ、あにさらざるべけんや」といへり。しかれば定善散善弘願の三門をたて給へり。その弘願といふは、『大經』に云はく、「もしわれ佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して我が國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに若し生ぜずば正覺

を取らじ。唯五逆と正法を誹謗するものとを除く。」といへり。善導釋していはく、「もし我成佛せんに十方の衆生、我が名號を稱して、下十聲に至るまで、もし生ぜずば正覺を取らじ。彼の佛今現に世にまし／＼て成佛したまふ。當に知るべし、本誓の重願虛しからざることを。衆生稱念すれば必ず往生を得」云云。「觀經」の「定散兩門をときをはりて「佛阿難に告げたまはく、汝この語を持て、この語を持てとは卽ち無量壽佛の名を稱するなり」云云。これすなはちさきの弘願の心なり。又おなじき經の眞身觀には、「彌陀の身色は金山の如く、相好の光明は十方を照す。唯念佛のみありて光攝を蒙る、當に知るべし、本願最も强となすことを。」云云又これさきの弘願のゆへなり。「阿彌陀經」にいはく、「少善根福德の因緣を以て彼の國に生ずることを得べからず。若し善男子善女人、阿彌陀佛を說くをきゝて、名號を執持すること、もしは一日、もしは二日、乃至七日一心不亂ならんに、其人命終の時に臨みて、心顚倒せず、卽ち往生を得」云云。つぎの文に、六方にをの／＼恆河沙の佛まします、廣長の舌相を出して、あまねく三千大千世界におほひて、誠實の言なり、信ぜよと證誠し給へり。これ又さきの弘願のゆへ也。又「般舟三昧經」にいはく、「跋陀和菩薩、阿彌陀にとひていはく、いかなる法を行じてかかのくにゝむまるべきやと。阿彌陀佛の給はく、わがくにに來生せんとおもはんものはつねに我名を念じてやむ事なかれ、かくのごとくして、わが國に來生することをうとの給へり」これ又弘願のむねを、かのほとけみづからのたまへり。又五臺山の「大聖竹林寺の記」にいはく、「法照禪師、

【六八】念佛の弘通は諸宗を破壞せざることを明す。

清涼山にのぼりて大聖竹林寺にいたる。ここに二人の童子あり、一人をば善財といひ、一人をば難陀といふ。この二人の童子法照禅師をみちびきて寺のうちにいれて、漸々に講堂にいたりてみれば、普賢菩薩、無数の眷屬に圍繞せられて座し給へり。文殊師利は一萬の菩薩に圍繞せられて坐し給へり。法照禮してとひたてまつりていはく、「末法の凡夫はいづれの法をか修すべき、」文殊師利答へての給はく、「なんぢすでに念佛せよ、いままさしくこの時也」と。法照又とひて申さく、「まさにいづれの佛をか念ずべき」と。文殊又のたまはく、「この世界をすぎて西方に阿彌陀佛まします。かのほとけまさに願ふかくまします、なんぢまさに念ずべし」と。大聖文殊、法照禅師にまのあたりの給ひし事也。すべてひろくこれをいへば、諸教にあまねく修せしめたる法門也。つぶさにあぐるにいとまあらず。

【六八】しかるをこのごろ念佛のよにひろまりたるによりて、佛法うせなんとすと、諸宗の學者難破をいたすによりて、人おほく念佛の行を廢すときこゆ。いまだ心得ずはべり。佛法はこれ萬年也。うしなはむとおもふとも、佛法擁護の諸天善神まもり給ふゆへに、人のちからにてはかなふべからず。かの守屋の大臣が佛法を破滅せんとせしかども、法命いまだつきずして、いまにつたはるがごとし。いはんや無智の道俗、在家の男女のちからにて念佛を行ずるによりて、法相三論も隱沒し、天台華嚴も廢退する事なじかはあるべき。念佛を行ぜずしてゐたらばこのともがらは一宗をも興隆すべきかは、たゞいたづらに念佛の業を廢したるばかりにて、また／＼それ諸宗のなきるをもさぐるべからず。しかればこれお

ほきなる損にあらずや。諸宗のふかきながれをくむ南都北京の學者、兩部の大法をつたへたる本寺本山の禪徒百千萬の念佛世にひろまりたりとも、本宗をあらたむべきにあらず。又佛法うせなんとすとて念佛を廢せば、念佛はこれ佛法にあらずや。たとへば虎狼の害をにげて、獅子にむかひてはしらんがごとし。餘行を謗じ念佛を謗ぜん。おなじくこれ逆罪也。とらおほかみに害せられん、獅子に害せられんと、ともにかならず死すべし。これをも謗ずべからず、かれをもそねむべからず。ともにみた佛法也。たがひに偏執することなかれ。『像法決疑經』にいはく、『三學の行人たがひに毀謗して、地獄にいることときやのごとし』といへり。又『大論』にいはく、『自法を愛染するゆへに他人の法を毀呰すれば、持戒の行人なりといへども、地獄の苦をまぬかれず。』といへり。又善導和尚の給はく。

世尊說法の時將に了りなんとす
慇懃に彌陀の名を付屬す
五濁增の時疑謗多く
道俗相嫌ひて聞くことを用ゐず
修行あるものを見ては瞋毒を起し
方便破壞して競ひて怨を生ず
此の如き生盲闡提の輩
頓教を毀滅して永く沈淪し

【七】念佛は惡業をおそれずと云ふ者を破す。

【四十八輕】梵網經に說く四十八輕戒。

【十重】梵網經に說く十種の禁戒、十重禁戒と云ふ。

大地微塵劫を超過すとも
未だ三途の身を離るゝことを得ず。

といへり。念佛を修せんものは餘行をそしるべからず。そしらばすなはち彌陀の悲願にそむくべきゆへ也。餘行を修せん者は念佛をそしるべからず。又諸佛の本懷にたがふがゆへ也。しかるをいま世間の道俗のまへには、念佛の行をそしり、一向專念の族のうへには、諸餘の行をそしる。ともに我々偏執の心をもて義理をたて、たがひにそむく／＼是非のおもひに住して惡業をなす。あにこれ淨業にかなはむや。みなともに佛意にそむけり。

【七】つぎに念佛者のいはく、今念佛者、私の義をたてゝ、惡業をおそるゝは彌陀の本願を信ぜざる也、遍數をかさぬるは一念の往生をうたがふ也。行業をいへば一念十念にたりぬべし。しかるがゆへに罪惡をおそるべからず、罪業をいへば四重五逆なをむまるゝがゆへに、諸惡をはゞかるべからずといへり。この義またくしかるべからず。如來の說法にも見えず、淨土の釋にもあらず。もしかくのごとく信ぜんものは、總じては諸佛の御意にたがふべし。別しては彌陀の本願にかなふべからず。その五逆十惡の衆生の一念十念によりて、かのくにに往生すといふは、これ觀經のあきらかなる文也。たゞし五逆をつくりて十念をとなへよ、十惡をおかして一念を申せとすゝむるにはあらず。それ十重をたもちて十念をとなへよ、四十八輕をまもりて四十八願をたのめなど、心にふかくこひねがふところ也。およそいづれの行をもはらにすとも、心に戒行をたもちて浮囊をまもるがごとくにし、身の威儀

【八】一念十念の往生を明す。

に油鉢をかたぶけずば、行として成就せずといふ事なく、願として圓滿せずといふ事なし。しかるをわれら或は四重ををかし、あるひは十惡を行ず、かれもをかしこれも行ず。一人としてまことの戒行を具したる者はなし。諸惡莫作、衆善奉行は、三世の諸佛の通戒也。善を修するものは善趣の報をえ惡を行ずる者は惡道の果を感ずといふ。この因果の道理をきけども、きかざるがごとし。はじめていふにあたはず。しかれども分にしたがひて惡業をとゞめ、緣にふれて念佛を行じ、往生を期すべし。惡人をすてられずば、善人なんぞきらはん。つみをおそるゝは本願をうたがふと、この宗にまたく存ぜざるところ也。

【八】次に一念十念によりてかのくにゝ往生すといふは、釋尊の金言なり。「觀經」のあきらかなる文也。善導和尚の釋にいはく「下十聲に至る等定んで往生を得、乃至一念も疑心あることなし。故に深心と名く。」といへり。又いはく「行住坐臥、時節の久近を問はず、念念に捨てざる、是を正定の業と名く、彼の佛の願に順ずるが故に」といへり。しかれば信を一念にむまるととりて、行をば一形にはげむべしとすゝむる也。彌陀の本願を信じて念佛の功つもり、運心としひさしくば、なんぞ願力を信ぜずといふべきや。すべて薄地の凡夫、彌陀の淨土にむまれん事、他力にあらずばみな道たえたるべき事也。おほよそ十方世界の諸佛善逝、穢土の衆生を引導せんがためには、穢土にして正覺をとなへ、淨土の衆生を化せんがためには、淨土にして正覺をなり給ふに、阿彌陀佛は淨土にして正覺を成して、しかも穢土の衆生を引導せんといふ願をたて給へり。その穢土にして正覺をとな

ふれば、隨類應同の相をしめすがゆへに、いのちながからずしてとく涅槃にいりぬ。また淨土にして正覺すれば、報佛報土にして地上の大菩薩の所居也。未斷惑の凡夫は、たゞちにむまるゝ事あたはず。しかるをいま淨土を莊嚴し、佛道を修行するは、本意はもと造惡不善のともがらの、輪轉きはまりなからんを引導し、發心淺智のやからの、出離の期なからんをあはれまんがため也。もしその三賢を越し、十地をきはめたる、久行の聖人、深位の菩薩、六度萬行を具足し、諸波羅蜜を修行してむまるゝといはゞ、これ大悲の本意にあらず。この修因感果のことはりを、大慈大悲の御心のうちに思惟して、年序そらにつもりて、星霜五劫にをよべり。かくのごとく善巧方便をめぐらして思惟し給はく、「われ別願をもて淨土に居して、薄地底下の衆生を引導すべし。その衆生の業力によりてむまるゝといはゞかたかるべし。我須く衆生のために、永劫の修行をゝくり、僧祇の苦行をめぐらして、萬行萬善の果徳圓滿し、自覺覺他の覺行窮滿して、その成就せんところの萬德無漏の一切の功德をもて、わが名號として衆生にとなへしめん。衆生もしこれにをいて信をいたして稱念せば、わが願にこたへてむまるゝ事をうべし。名號をとなへばむまるべき別願をおこして、その願成就せば佛になるべきがゆへなり。この願もし滿足せずば、永劫をふともわれ正覺をとらじ。たゞし未來惡世の衆生憍慢懈怠にして、これにをいて信をおこす事かたかるべし。一佛二佛のとき給はんに、をそらくはうたがふ心をなさん事を。ねがはくばわれ十方の諸佛にことごとくこの願を稱揚せられたてまつらん」とちかひて、第十七の

願に、設し我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛悉く咨嗟して我名を稱せずば正覺を取らじ」とちかひ給ひて、つぎに第十八の願の、「乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺を取らじ」とちかひ給へり。そのむね無量の諸佛に稱揚せられたてまつらんとたて給へる願、すでに成就するゆへに、六方にをの〱恆河沙の佛ましまして、廣長の舌相を出して、あまねく三千大千世界におほひて、みなおなじくこの事をまことなりと證誠し給へり。善導これを釋しての給はく「もしこの證によりてむまるゝ事を得ずば、六方の諸佛ののべ給へる舌口よりいでをはりてのち、つゐに口に返りいらずして、自然にやぶれみだれん」との給へり。これを信ぜざらん者は、すなはち十方恆沙の諸佛の御したをやぶる也。よく〱信ずべし。一佛二佛の御舌をやぶらんだにもあり。いかにいはんや十方恆沙の諸佛をや。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身をはなるべからずとの給へり。彌陀の四十八願といは、無三惡趣、不更惡趣、乃至念佛往生等の願これなり。すべて四十八願の中に、いづれの願か一として成就し給はぬ願あるべき。願ごとに「正覺を取らじ」とちかひて、いますでに正覺をなり給へる故也。しかるを無三惡趣の願を信ぜずして、彼の國に惡道ありといふ者はなし。不更惡趣の願を信ぜずして、かのくにの衆生いのちをはりてのち、又惡道に返るといふ者はなし。悉皆金色の願を信ぜずして、かのくにの衆生は金色なるもあり、白色なるもありといふ者はなし。無有好醜の願を信ぜずして、かのくにの衆生は、かたちよきもあり、わろきもありといふ者はなし。乃至天眼天耳、光明、壽命、をよび得三法忍の願にいたるまで、

【九】行業法の要を明す。

これにをいてうたがひをなすものはいまだ侍らず。たゞ第十八の念佛往生の願ひとつをのみ信ずる也。もしこの願をうたがはゞ、餘の願をも信ずべからず。餘の願をも信ぜば、この一願をうたがふべけんや。法藏比丘、いまだほとけになり給はずといはゞこそ、これ謗法にたりなんかし。すでに又なり給へりといはゞ、いかでこの願をうたがふべきや。四十八願の彌陀如來は、正覺を十劫にとなへたまへり。六方恆沙の諸佛如來は舌相を三千世界にのべたまへり。たれかこれを信ぜざるべきや。觀經この信を釋しての給はく「化佛報佛、若は一、若は多、若は十方に遍じて、ひかりをかゞやかし、したをはきてあまねく十方におほひて、この事虚妄なりとの給はんにも、畢竟じて一念疑退の心をおこさじ」との給へり。しかるをいま行者たちは異學異見のためにたやすくこれをやぶらる。いかにいはんや報佛化佛の給はんをや。

【九】そも／＼この行をすてば、いづれの行にかおもむき給ふべき。智慧なければ、聖教をひらくにまなこくらし。財寶なければ布施を行ずるにちからなし。むかし波羅奈國に太子ありき、大施太子と申しき。貧人をあはれみて、くらをひらきて、もろ／＼のたからを出してあたへ給ふに、たからはつくれども、まづしき者はつくべからず。こゝに太子、うみのなかに如意寶珠ありときゝ、海にゆきてもとめて、まづしきたみにたからをあたへんとおもひて、龍宮にゆき給ふに、龍王おどろきあやしみて「おぼろげの人にはあらず」といひて、みづからむかひて、たからのゆかにすへたてまつり「はるかにきたり給へることゝ

ろざし、何事をもとめ給ふぞ」といへば、太子の給はく、「閻浮提の人まづしくてくるしむ事おほし、王のもとゞりの中の寶珠をこはんがためにきたる也」との給へば、王のいはく、「しからば七日こゝにとゞまりて、わが供養をうけ給へ、そののちたからをたてまつらん」といふ。太子七日をへてたまを得給ひぬ。龍神そこよりをくりたてまつる。すなはち本國のきしにいたりぬ。爰にもろ〳〵の龍神なげきてはいく「このたまは海中のたからなり。なをとり返してぞよかるべき」とさだむ。海神人になりて、太子の御まへにきたりていはく、「君世にまれなるたまをえ給へりときく。われに見せ給へ」といふ。太子これをみせ給ふに、うばひとりてうみへいりぬ。太子なげきてちかひていはく、「なんぢもしたまを返さずんば、うみをくみほさん」といふ。海神いでゝわらひていはく、「なんぢはもともをろかなる人かな、そらの日をばおとしもしてん、はやきせをばとゞめもしてん、うみのみづをばつくすべからず」といふ。太子の給はく「恩愛のたへがたきをもなをとゞめんと思ふ、生死のつくしがたきをも、なをつくさんとおもふ。いはんやうみの水おほしといふともかぎりあり、若この世にくみつくさずば、世々をへてもかならずくみつくさん」とちかひて貝のからをとりて、うみの水をくむ。ちかひの心まことなるが故に、もろ〳〵の天人こと〴〵くきたりて、あまのはごろものそでにつゝみて、鐵圍山のほかにくみをく。太子一度二度かいのからをもてくみ給ふに、海水十分が八分はうせぬ。龍王さはぎあはてゝ、わがすみかむなしくなりなんとすとわびて、たまを返したてまつる。太子これをとりて都

に返りて、もろ〳〵のたからをふらして、閻浮提のうちにたからをふらさゞるところなし。くろしきをしの堂で退せざりしかば、これを布施波羅蜜といふ。むかしの太子は、萬里のなみをしのぎて、龍王の如意寶珠を得給へり。いまのわれらは、二河の水火をわけて、彌陀本願の寶珠を得たり。かれは龍神のくれしがためにうばはれ。これは異學異見のためにうばはる。かれはかいのかいらをもて大海をくみしかば、六欲四禪の諸天きたりておなじくくみき。これは信心の手をもて疑惑の海をくまば、六方恒沙の諸佛きたりてくみし給ふべし。かれは大海の水やうやくつきしかば、龍宮のいらかあらはれて、如意寶珠を返しとりき。これは疑惑のなみことごとくつきなば、西方淨家のいらかあらはれて、本願の寶珠を返しとるべし。かれは返し取りて、閻浮提にして貧窮のたみをあはれみ、是は返しとりて極樂にむまれて、薄地のともがらをみちびくべし。ねがはくばもろ〳〵の行者、彌陀本願の寶珠をいまだうばひとられざらん者は、ふかく信心のそこにおさめよ。もしすなはちとられたらんものは、すみやかに深信の手をもて、疑惑のなみをくめ。たからをすてゝ、手をむなしくして歸る事なかれ。いかなる彌陀か、十念の悲願をおこして、十方の衆生を攝取し給ふ。いかなるわれらか、六字の名號をとなへて、三輩の往生をとげざらむ。永劫の修行は、これたれがためぞ。功を未來の衆生にゆづり給ふ。超世の悲願は、又なんの料ぞ。こゝろざしを末法のわれらにをくり給ふ。われらもし往生をとぐべからずといはば、ほとけあに正覺をなり給ふべしや。われらまた往生とげましや、われらが往生はほとけの正覺により、

【或人に示されける詞】或人とは何人か不詳なり。

【一】西方を思念すべきこと。

【とはこの時】厠に至るときのこと。

【二】念佛の功德をもて父母に孝養すべきこと。

佛の正覺は我らが往生による。若不生者のちかひこれをもてしろべし。不取正覺のことばかぎりあるをや。云々」

或人に示されける詞

【一】一、とはこの時西にむかふべからず。又西をうしろにすべからず。きたみなみにむかふべし。おほかたうちゐたらんにも、うちふさんにも、かならず西にむかふべし。もしゆゆしく便宜あしき事ありて、西をうしろにする事あらば、心のうちにわがうしろは西也。阿彌陀ほとけのおはしますかた也とおもへ。たゞいまあしざまにてむかはねども、心をだにも西方へやりつれば、そゞろに西にむかはで、極樂をおもはぬ人にくらぶればそれにまさる也。

【二】一、孝養の心をもてちゝはゝをおもくしおもはん人は、まづ阿彌陀ほとけにあづけまいらすべし。わが身の人となりて往生をねがひ念佛する事は、ひとへにわが父母のやしなひたてたればこそあれ。わが念佛し候功德をあはれみて、わが父母を極樂へむかへさせおはしまして、罪をも滅しましませとおもはゞ、かならず〳〵むかへとらせおはしまさんずる也。されば唐土に妙雲といひし尼は、おさなくして父母にをくれたりけるが、二十年ばかり念佛して、父母をいのりしかば、ともに地獄の苦をあらためて、極樂へまいり

【三】念佛往生を明す。

なりける也

【二】一、善導和尚の「往生禮讚」に、本願をひきていはく「若し我成佛せんに十方の衆生我が名號を稱して下十聲に至るまで、若し生ぜずば正覺を取らじ。彼の佛今現に世に在して成佛したまふ。當に知るべし、本誓の重願虚しからざることを。衆生稱念すれば必ず往生を得」この文をつねに、口にもとなへ、心にもうかべ、眼にもあてよ、阿彌陀佛すでに本願を成就し、極樂世界を莊嚴したてゝ、御目をみめぐらして、わが名をとなふる人やあると御らんじ、御みゝをかたぶけて、わが名を稱する者やあると、よるひるきこしめさるる也。されば一稱も一念も、阿彌陀佛にしられまいらせずといふ事なし。されば攝取の光明はわが身をすて給ふ事なく、臨終の來迎はむなしき事なき也。この文は四十八願の眼也、肝なり、神也。四十八字にむすびたる事はこの心へ也。よく／＼身をもきよめ手をもあらひて、ずゝをもとり袈裟をもかくべし。不淨の身にて持佛堂へ入べからず。この世の主君などをだにもうやまひをそるゝ事にてあるに、まして無上世尊のもろ／＼の大菩薩にもうやまはれ給へるに、われらが身にていかでかなのめにもあたりまいらすべき。一切の諸天もかうべをかたぶけ給ふ。いかにいはんや、われらが身をや。又つみをそるゝは本願をかろしむる也。身をつゝしみてよからんとするは自力をはげむたりといふ事は、ものもおぼえぬあさましきひが事也。ゆめ／＼みゝにもきゝいるべからず。つゆちりばかりもちゐまじき事也。はじめ淨土の三部經より唐土日本の人師の御作の中にもまたくなき事どもを、

心にまかせてわがおもふさまにわろからんとていひ出したる事也。一定三惡道におちんずる事也。一代聖教の中にふつとなき事也。五逆十惡の罪人の臨終の一念十念によりて來迎にあづかる事は、そのつみをくゐかなしみてたすけおはしませとおもひて念佛すれば、彌陀如來願力をおこして罪を滅し來迎しまします也。本願のまゝにかきてまいらせ候。このまゝに信じて御念佛候べし。かまへて／＼たうとき念佛者にておはしませ。あなかしこ／＼。

津戸三郎へつかはす御返事

【第一】御文くはしくうけ給り候ぬ。御所より念佛の事召問はれ候はんには、なじかはくはしき事をば申させ給ふべき。げにもいまだくはしくもならはせ給はぬ事にて候へば、專修雜修の間の事はくはしき沙汰候はずとも、いかやうなる事ぞと召問はれ候はゞ、法門のくはしきことはしり候はず。御京上の時うけ給はりわたりて、聖のもとへまかり候て、後世の事をばいかゞし候べき。在家のものなどの後生たすかるべき事は、何事か候らんと問候しかば、聖の申候し樣はおほかた生死をはなるゝみち、樣々におほく候へども、その中にこのごろの人の生死をいづる道は極樂に往生するよりほかには、こと道はかなひがたき事也。是ほとけの衆生をすゝめて、生死をいださせ給ふ一つの道也。しかるに極樂

【第一】勅傳第二十八巻に載す。津戸三郎爲守は上人の弟子淨勝房唯願房等と共に不斷念佛を行ひしが、或る人爲守は聖道の諸宗を誹謗すと時の將軍實朝に讒するものありしかば、その返答の義につき法然上人に問はれしを以て、上人は眞名假名を以て答へられたるものゝ即ち是なり。

に往生する行又樣々におほく候へども、その中に念佛して往生するより外にはこと行はかなひがたき事にてある也。そのゆへは、念佛はこれ彌陀の一切衆生のためにみづからちかひたまひたりし本願の行なれば、往生の業にとりては念佛にしく事はなし。されば往生せんとおもはゞ、念佛をこそはせめと申候き。いはんや又最下のものゝ法門をもしらず、智惠もなからんものは、念佛の外には何事をしてか往生すべきといふ事はなし。われをさなくより法門をならひたるものにてあるだにも、念佛より外には何事をかして生ずべしともおぼへず。たゞ念佛ばかりをして、彌陀の本願をたのみて、往生せんとのみおもひてある也。まして在家の人などは何事かあらんと申されしかば、ふかくそのむねをたのみて、念佛をばつかまつり候也と申させ給ふべし。

(三)又この念佛を申事は、たゞわが心より、彌陀の本願の行なりとさとりて申事にもあらず。唐の代に善導和尚と申候し人の往生の行業にをいて、専修雜修と申す二つの行をわかちてすゝめ給へる事也。専修といふは念佛也。雜修といふは念佛の外の行也。専修のものは百人は百人ながら往生し、雜修の者は千人が中にわづかに一二人ありといへる也。唐土に又信中と申者こそこのむねをしるして、専修淨業文といふ文をつくりて唐土の諸人をすゝめたり。その文はじやうせう房などのもとには候らん。それをもちてまいらせ給ふべし。又専修につきて五種の専修正行といふ事あり。この五種の正行につきて又正助二行をわかてり。正業といふは五種の中に第四の念佛也。助業といふはその外の四種の行也。い

ま決定して淨土に往生せんとおもはゞ、專雜二修の中には專修の敎によりて一向に念佛をすべし。正助二業の中には正業のすゝめによりて、ふた心なくたゞ第四の稱名念佛をすべしと申候しかば、くはしき旨ふかき意をばしり候はず。

(三)さては念佛はめでたき事にこそあなれと信じて申ばかりにて候。件の人の申候しは善導和尙と申人は、氏ある人にも候はず、阿彌陀ほとけの化身にておはしまし候なれば、をしへすゝめさせ候はんこと、よもひが事にては候はじと申されしを、ふかく信じて念佛はつかまつり候也。そのつくらせ給ひたる文どもおほく候なれども、文字もしり候はぬものにて候へば、たゞ意ばかりをきゝて後生やたすかり候、往生やし候とてとなへ申ほどに、ちかきものどもみうらやみ候て、少々申すものども候也と、これほどに申させ給ふべし。中々くはしく申させ給はゞ、あやまちもありなどして、あしき事もこそ候へとおぼえ候。樣々に難答をしるしてと候へども、時にのぞみてはいかなること葉どもか候はんずらん。書てまいらせ候はんもあしく候ぬべく候。たゞよく／＼御はからひ候て、早晩よきやうにこそははからはせ給ひ候はめ。

(四)又念佛申すべからずとおほせられ候とも、往生に心ざしあらん人はそれにはより候まじ。念佛よく／＼申せとおほせられ候とも、道心なからん者はそれにはより候まじ。とにかくにつけても、このたび往生しなんと人をばしらず、御身にかぎりてはおぼしめすべし。わざとはる／＼と人のぼさせ給ひて候こそ、返々下人も不便に候へ。なを／＼召し

問はれ候はん時には、これより百千申て候はん事は時にもかなひ候まじければ無益の事にて候。はからひてよきやうに、早晩にしたがひて申させ給はんに、よもひが事は候はじ。眞字假字にひろくかきてまいらせ候はんずる事は、にはかにすべきにても候はず。それは又中々あしき事にても候ひぬべし。たゞいと子細はしり候はず。これほどにきゝて申候なりと申させ給ひ候はんに、心候はん人はさりとも心え候ひなん。又道心なからん人はいかに道理百千萬にわかつともよも心え候はじ。殿は道理ふかくして、ひが事おはしまさぬ事にて候と申あひて候へば、これらほどにきこしめさむに念佛ひが事にてありけり。今はな申しそとおほせらるゝ事はよも候はじ。さらざらん人はいかにと申すとも、思とも、無益の事にてこそ候はんずれ。何事も御文にはつくしがたく候。あなかしこ／＼。

十月十八日

【第二】專修念佛につきての御消息なり。

第二 おぼつかなくおもひまいらせつる程に、このお文返々よろこびてうけ給はり候ぬ。さても專修念佛の人は、よにありがたき事にて候に、その一國に三十餘人まで候らんこそ、まめやかにあはれに候へ。京邊などのつねにきゝならひ、かたはらをもみならひ候ひぬべきところにて候だにも、おもひきりて專修念佛をする人は、ありがたき事にてこそ候に、道綽禪師の平州と申候ところにこそ、一向念佛の地にては候に、專修念佛三十餘人はよにありがたくおぼえ候。これひとへに御ちから、又熊谷の入道などのはからひにてこそ候なれ。それも時のいたりて往生すべき人のおほく候べきゆへにこそ候らめ。

緣なき事はわざと人のすゝめ候にだにも、かなはぬ事にて候に、子細もしらせ給はぬ人などのおほせられんによるべき事にても候はぬに、もとより機緣純熟して、時いたりたる事にて候へばこそ、さ程に專修の人などは候はめとをしはかられあはれにおぼえ候。ただし無智の人にこそ、機緣にしたがひて、念佛をばすゝむる事にてはあれと申候なる事は、もろ〳〵の僻事にて候。阿彌陀ほとけの御ちかひには、有智無智をもえらばず、持戒破戒をもきらはず、佛前佛後の衆生をもえらばず、在家出家の人をもきらはず、念佛往生の誓願は平等の慈悲に住して、をこしたまひたる事にて候へば、人をきらふ事はまたく候はぬなり。されば『觀無量壽經』には「佛心とは大慈悲是なり」ととき候也。善導和尙この文をうけて「この平等の慈悲をもてあまねく一切を攝す」と釋し給へり。一切のことばひろくしてもるゝ人候べからず。釋迦のすゝめ給も、惡人善人愚人智人ひとしく念佛すれば往生すとすゝめたまへる也。されば念佛往生の願は、これ彌陀如來の本地の誓願なり。餘の種々の行は本地のちかひにあらず。釋迦如來の種々の機緣にしたがひて、樣樣の行をとかせたまひたる事は、釋迦も世に出給ふ意は、彌陀の本願をとかんとおぼしめす御意にて候へども、衆生の機緣にしたがひてときたまふ日は、餘の種々の行をもとき給ふは是隨機の法也。佛の自の御心のそこには候はず。されば念佛は彌陀にも利生の本願、釋迦にも出世の本懷也。餘の種々の行には似ず候なり。これは無智のものなればといふべからず。又要文の事書てまいらせ候べし。又熊谷の入道の文は是へとりよせ候

【第三】法然上人御病悩の御消息なり。

て、なをすべき事の候へば、そのゝちかきてまいらせ候べし。なに事も御文に申つくすべくも候はず。のちの便宜に又々申候べし。

九月二十八日

【第四】まづきこしめすまゝにいそぎおほせられて候御心ざし申つくしがたく候。この例ならぬ事は、ことがらはむづかしき樣に候へども、當時大事にて、今日あす左右すべき事にてはさりながらも候はぬに、としごろの風のつもり、この正月より別時念佛を五十日申て候しに、いよ〳〵風をひき候て、二月の十日ごろよりすこし口のかはく樣におぼえ候しが、二月の二十日は五十日になり候しかば、それまでとおもひ候て、なをしゐて候し程に、その事がまさり候て、水などのむ事になり、又身のいたく候事などの候しが、今日までなやみもやみ候はず、ながびきて候へども、又たゞいまいかなるべしともおぼえぬ程の事にて候也。醫師の大事と申候へば、やいとをふたゝび湯にてゆで候。又樣々の唐のくすりたべなどして候氣にや、このほどはちりばかりよき樣なる事の候也。左右なくのぼるべきなど仰られて候こそ世にあはれに候へ。さ程とをく候程にはたとひいかなる事にても、のぼりなどし給候事はいかでか候べき。いづくにても念佛してたがひに往生し候ひなんこそ、めでたくながきはかり事にては候はめ。何事も御文にはつくしがたく候。又々申候べし。

四月二十六日

【或女房に示されける法語】勅傳第二十五卷に載す。或女房とは法性寺左京の太夫信實朝臣の伯母なりとあり。

【一】念佛行者安心のこと。

【二】三心と來迎とは九品に通ずべきこと。

【三】佛來迎のこと。

或女房に示されける法語

【一】念佛行者のぞんじ候べきやうは、後世をおそれ往生をねがひて念佛すれば、をはるときかならず來迎せさせ給よしをぞんじて、念佛申より外のことは候はず。三心と申候もふさねて申ときは、たゞ一の願心にて候なり。そのねがふ心のいつはらずかざらぬ方をば至誠心と申候。この心の實にて念佛すれば臨終にらいかうすといふことを一念もうたがはぬ方を深心とは申候。このうへわが身もかの土へむまれんとおもひ、行業をも往生のためと向るを廻向心とは申候なり。このゆへにねがふ心いつはらずしてげに往生せむとおもひ候へば、をのづから三心はぐそくすることにて候也。

【二】抑中品下生に來迎の候はぬことはあるまじければ、とかれぬにては候はず。九品往生にをの〱みなあるべきことの略せられてなき事も候也。善導の御心は三心も品々にわたりてあるべしとみえて候。品々ごとにおほくのこと候へども、三心と來迎とはかならずあるべきにて候なり。往生をねがはん行者はかならず三心ををこすべきにて候へば、上品上生にこれをときて、餘の品々をも是になずらへてしるべしとみえて候。

【三】又われら戒品のふねいかだもやぶれたれば、生死の大海をわたるべき縁も候はず。智慧のひかりもくもりて、生死のやみもてらしがたければ、聖道の得道にももれたるわれら

がためにほどこし給他力と申候は第十九の來迎の願にて候へば、文にみえず候とても、かたらず來迎はあるべきにて候也。ゆめ〳〵御うたがひ候べからず。あなかしこ〳〵。

源空

【念佛往生義】念佛往生の大要を明すものにして古來文體殊に勝れしものなりとの讃あり
【一】本願を信じて稱名するもの必ず往生することを明す。
【二】疑心を明す

拾遺和語燈錄 卷下

念佛往生義

【一】念佛往生と申事は、彌陀の本願にわが名號をとなへんもの、わが國にむまれずといはゞ、正覺をとらじと誓て、すでに正覺をなり給へるがゆへに、此名號をとなふる者は、かならず往生する事を得。このちかひをふかく信じて、乃至一念もうたがはざる者は、十人は十人ながらむまれ、百人は百人ながらむまる。

【二】念佛を修すといへどもうたがふ心あるものはむまれざるなり。(一)世間の人の疑に種々のゆへを出せり。或はわが身罪をもければたとひ念佛すとも往生すべからずとうたがひ、或は念佛すとも世間のいとなみひまなければ、往生すべからずとうたがひ、或は念佛すれども心猛利ならざれば往生すべからずとうたがふなり。これらは念佛の功能をしらずして、これらのうたがひをおこせり。

(二)罪障のをもければこそ、罪障を滅せんがために念佛をばつとむれ。罪障をもければ、念佛すとも往生すべからずとはうたがふべからず。たとへば病をもければ、藥をもちゆるがごとし。やまひ重ければとてくすりをもちひずば、その病いつかいへん。十惡五逆をつく

る者も知識のをしへによりて、一念十念するに往生すととけり。善導は「一聲稱念するにすなはち多劫のつみをのぞく」との給へり。しかれば罪障のをもきは念佛すとも往生すべからずとはうたがふべからず。又善根なければ此念佛を修して無上の功德をえんとす。餘の善根おほくばたとひ念佛せずともたのむかたもあるべし。しかれば「善導はわが身をば善根薄少なりと信じて本願をたのみ念佛せよ」とすゝめ給へり。經に「一たび名號をとなふるに大利を得」とす。又「すなはち無上の功德を得」ととけり。いかにいはんや念々相續せんをや。しかれば善根なければとて念佛往生をうたがふべからず。

又念佛すれども、心の猛利ならざる事は、末世の凡夫のなれるくせ也。その心の中に、又彌陀をたのむ心のなきにしもあらず。たとへば主君の恩をおもくする心はあれども、みやつかひする時、いさゝかものうき事のあるがごとし。ものうしといへども、恩をしる心のなきにはあらざるがごとし。念佛にだにも猛利ならずば、いづれの行にか猛利ならん。いづれも猛利ならざればとて、一生むなしくすぎば、そのをはりをいかん。たとひ猛利ならざるに似たれども、これを修せんとおもふ心あるは、こころざしのしるしなるべし。このめはをのづから發心すといふ事あり。功をつみ德をかさぬれば、時々猛利の心もいでくる也。さればはじめよりその心なければとてむなしくすぎば、生涯いたづらにくれなん事、後悔さきにたつべからず。なかんづく善導の御義には、散動の機をえらばざる也。しかれば猛利の心なければとて往生をうたがふべからず。

(三ノ三)又世間のいとなみひまなければこそ念佛の行をば修すべけれ。そのゆへは男女貴賤、行住坐臥をえらばず、時處諸緣を論せず。是を修するにかたしとせず。乃至臨終にもその便宜をえたる事念佛にはしかずといへり。餘の行はまことに世間忩々の中にしては修しがたし。念佛の行にかぎりては在家出家をえらばず、有智無智をいはず、稱念するにたよりあり、世間の事にさへられて、念佛往生をとげざるべからず。たゞし詮ずるところ無道心のいたすところ也。さればとて世間をすてざるものゆへ、世間にはゞかりて念佛せずば、わが身にたのむところなく、心のうちにつのるところなし。うけがたき人身をうけ、あひがたき佛法にあへり。無常念々にいたり、老少きはめて不定なり。やまひきたらん事かねてしらず。生死のちかづく事たれかおぼえん。もともいそぐべし。はげむべし。

【三】　三心を明す

【三】念佛に三心を具すといへるもこれらのことはりをばいでず。三心といは、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。至誠心とは眞實の心也。往生をねがひ念佛を修せんにも、心のそこより思ひたちて行ずるを至誠心といふ。心におもはざる事を外相ばかりにあらはすを虛假不實といふ也。心のうちに又ふたゝび生死の三界に返らじとおもひ、心のうちに淨土にむまれむと思ひて念佛すれば往生すべし。此ゆへに外にはその相も見えざるが往生する事あり。外にその相みゆれども往生せざるもあり。たゞ心につら〳〵有爲無常のありさまをおもひしりてこの身をいとひ、念佛を修すれば、自然に至誠心をば具する也。深心と云は信心也。わが身は罪惡生死の凡夫也と信じ、彌陀如來は本願をもて、か

ならず衆生を引接し給ふと信じてうたがはず、念佛せんものむまれずば正覺をとらじとちかひて、すでに正覺をなり給へば、稱念するものはかならず往生すと信ずれば、自然に深心をば具する也。廻向發願心といふは、修するところの善根を極樂に廻向して、かしこに生ぜんとねがふ心也。別の義あるべからず。三心といへる名は各別なるに似たれども、詮ずるところはたゞ一向專念といへる事あり。一すぢに彌陀をたのみ念佛を修して、餘の事をまじへざる也。そのゆへは壽命の長短といひ、果報の深淺といひ、みな宿業にこたへたる事をしらずして、いたづらに佛神にいのらんよりも、一すぢに彌陀をたのみてふた心なければ、不定業をば轉じ決定業をば來迎し給ふべし。無益のこの世をいのらんとて大事の後世をわするゝ事は、さらに本意にあらず、後世のために念佛を正定の業とすれば、是をさしをきて餘の行を修すべきにあらざれば、一向專念なれとはすゝむる也。たゞし念佛して往生するに不足なしといひて、惡業をもはゞからず行ずべき慈悲をも行ぜず。念佛をもはげまさゞらん事は、佛教のをきてに相違する也。たとへば父母の慈悲は、よき子をもあしき子をもはぐゝめども、よき子をばよろこび、あしき子をばなげくがごとし。佛は一切衆生をあはれみて、よきをもあしきをもわたし給へども、善人をみてはよろこび、惡人を見てはかなしみ給へる也。よき地によき種をまかんがごとし。かまへて善人にしてしかも念佛を修すべし。是を眞實に佛教にしたがふものといふ也。詮ずるところ、つねに念佛して往生に心をかけて、佛の引接を期してやまひにふし、死にをよぶべからんに、おどろく心なく往

生をのぞむべきなり。

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

東大寺十問答　俊乘房問

【一】一、問「釋迦一代の聖教をみな淨土宗におさめ候か、又三部經にかぎり候か」

答「八宗九宗みないづれをもわが宗の中にをさめて、聖道淨土の二門とはわかつ也。聖道門に大小あり、權實あり。淨土門に十方あり、西方あり、西方の門に雜行あり、正行あり。正行に助行あり、正定業あり。かくして聖道はかたし。淨土はやすしと釋しいるる也。宗をたつるをもむきをしらぬものゝ三部經にかぎるとはいふなり」

【二】二、問「正雜二行ともに本願にて候か」

答「念佛は本願也。十方三世の佛菩薩にすてられたるゑせ者をたすけんとて、五劫まで思惟し、六道の苦機にゆづり、是をたよりにてすくはんと支度し給へる本願の名號也。ゆめ〳〵雜行本願といふ者は佛の五智をうたがひて、邊地にとゞまり、見佛聞法の利益にもるゝ者也。是は誑惑の者の道心もなきが、山寺法師などにほめられんとて佛意をばかへりみずいひいだせる事なり」

【三】三、問「三心具足の念佛者は決定往生歟」

【東大寺十問答】問者は俊乘房重源なり。了惠上人註して曰く「建久二年三月十三日東大寺聖人源空上人に問ひ奉る御答なり」と。

【一】聖道淨土二門の教相のこと。

【二】正雜二行本願非本願のこと。

【五智】佛の智慧。法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の五。

【邊地】極樂の邊地にして疑惑のものの生るる處。遠く佛所を離れ、永く佛身を見ざる地。

【誑惑の者】わわく法師の類か。

【三心】三心具足の念佛のこと。

【四】念佛者念珠を持つべきこと。

【五】大佛の功德にては往生し難きこと。

答「決定往生する也。三心に智具の三心あり。行具の三心あり。智具の三心といふは諸宗修學の人の本宗の智をもては信をとりがたきを經論の明文を出し、解釋のをもむきをもて、念佛に信をとらしめんとてとき給へる也。行具の三心といふは一向に歸するは至誠心也。疑心なきは深心也。往生せんとおもふは廻向心也。かるがゆへに一向念佛してうたがふおもひなく往生せんと思ふは行具の三心也。五念門修も一向に信ずる者には自然に具する也」

【四】四、問「念佛せんにはかならず念珠をもたずともくるしかるまじく候か」

答「かならず念珠を持べき也。世間のうたをうたひ舞をまふすらその拍子にしたがふ也。念珠をばかせにて舌と手とをうごかす也。たゞし無明を斷ぜざらんものは妄念をこるべし。世間の客と主とのごとし。念珠を手にとる時は、妄念のかずをとらんとは約束せず、念佛のかずとらむとて念佛のあるじをすへつるうへは、念佛は主、妄念は客也。さればとて心の妄念をゆるされたるは過分の恩也。それにあまさへ口に様々の雜言をして、念珠をくりこしなどする事ゆゝしきひが事なり」

【五】五、問「此大佛かく仰ぎまいらせて候へば、この大佛のおはからひにて、浄土にもをくりつけさせ給ふべく候か」

答「此事沙汰の外の事也。三寶をたつるに三あり。一に一體三寶といふは法身の理のうへに三寶の名をたつる也。萬法みな法身より出生するがゆへ也。二に別相三寶といふは

【大佛】奈良東大寺の大佛。問者俊乘房重源は勅を奉じて大佛を再建せる上人なり。

【六】有智の無道心と無智の道心のこと。

【七】攝取不捨のこと。

【八】攝取の光明のこと。

十方の諸佛は佛寶也。その智惠をよび所說の經教は法寶也。三乘の弟子は僧寶也。三に住持三寶といふは畫像木像は佛寶也。かきつけたる經卷は法寶也。剃髮染衣は僧寶也。もし大佛むかへ給はゞ、三種三寶の次第みだるべし。そのゆへは、住持と別相と分別なければなり。又本尊は娑婆にとゞまりて、行者は西方にさらん事、存じの外の事也。たゞし淨土の佛のゆかしさに、そのかたちをつくりて、眞佛の思ひをなすは、功德をうる事也」

【六】六、問「有智の人のよのつねならんと、無智の人の外に道心ありとみえ候はんといづれすぐれ候べき」

答「有智のものゝ道心なからんは無智の人の道心あらんには千重萬重のをとり也。かるがゆへに無智の人の念佛は、本願なれば往生すべし。有智の者の道心なからんは、あるひは不淨說法をし、あるひは虛言妄談をして決定地獄にをつべし。たゞし無智の人の道心はひが事を實とをもひて、おそるまじき事をばをそれ、おそるべき事をばをそれぬ也。有智の人の道心あるは道をしりてやすくゆく也。盲目の人を明眼の人にくらべん事あさましき事也。道心おなじ事ならば、有智の人はなを無智の人に萬億倍すぐるべきなり。無智の人の道心はわびてがてらの事也」

【七】七、問「念佛申人はかならず攝取の益にあづかり候か」

答「しかなり」

【八】八、問「攝取の光明は一度てらしては、いつも不退なると申人の候は一定にて候か」

【九】十念一念平生臨終のこと。

【一〇】來迎の佛身のこと。

答「この事おほきたるひが事也。念佛のゆへにこそてらすひかりの、念佛退轉してのちはなにものをたよりにてゝらすべきぞ。さやうにてあるならば、念佛一遍申さぬものやはある。されども往生する者はすくなく、せざるものはおほきなり。現證たれかうたがはん」

【九】九、問「本願には十念、成就には一念と候は平生にて候か、臨終にて候か」

答「經文申候き。聖道にはさやうに一行を平生に修しつれば罪即時に滅して、のちに又相續せざれども成佛すといふ事あり。其はなを緣をむすばしめんとて、佛の方便してとき給へる事也。順次の義にはあらず。花嚴禪門眞言止觀などの至極甚深の法門こそさる事はあれ。これは衆生もとより懈怠のものなれば、一度申をきてのち、申さずとも往生するおもひに住して、數遍を退轉せん事はくちおしかるべし。十念は上盡一形に對する時の事也。をそく念佛にあひたらん人は、いのちつゞまりて百念にもをよばぬは十念也。十念にもをよばぬは一念也。此源空が衣もやきすてゝこそ、癡のゆかりを滅したるにてはあらめ。これがあらんかぎりは癡の滅したるにてはなき也。過去無始よりこのかた、罪業をもて成せる身もとのごとく、心もとの心ならば、なにをか業成し罪滅するしるしとすべき。罪滅する者は無生をう、無生をうる者は金色のはだへとなる。彌陀の願に金色となさんとちかはせ給へども、念佛申人たれか臨終以前に金色となる。たゞ物さかしからで一發心已後無有退轉の釋をあふひで臨終をまつべき也。」

【一〇】十、問「臨終の來迎は報佛にておはし候か」

【御消息】勅傳第二十二卷に載す。何人に遣はされしものか不詳なれども、文辭甚だ鄭重なるを以て或は月輪殿の北政所へ遣はされしものに非ずやとの說もあり。
【一】淨土結緣のめでたきこと。

答「念佛往生の人は報佛の迎にあづかる。雜行の人々往生するはかならず化佛の來迎にて候也。念佛もあるひは餘行をまじへ、あるひは疑心をいさゝかもまじふる者は化佛の來迎をみて、報佛をかくしたてまつるもの也」

御消息

【一】御文こまかにうけ給はり候ぬ。かやうに申候事の一分の御さとりをもそへ、往生の御心ざしもつよくなり候ぬべからんには、をそれをもはゞかりをもかへりみるべきにて候はず。いくたびも申たくこそ候へ。まことにわが身のいやしく、わが心のつたなきをばかへりみ候はず。たれ〳〵もみな人の、彌陀のちかひをたのみて、決定往生のみちにをもむけかしとこそおもひ候へども、人の心のさま〴〵にしてたゞ一すぢにゆめまぼろしのうき世ばかりのたのしみさかへをもとめて、すべてのちの世をもしらぬ人も候。又後世をそるべきことはりをおもひしりて、つとめをこなふ人につきても、かれ此に心をうごかして、一すぢに一行をたのまぬ人も候。又いづれの行にても、もとよりしはじめおもひそめつる事をば、いかなることはりをきけども本の執心をあらためぬ人も候。又けふはいみじく信をこして一すぢにをもむきぬとみゆる程に、うちすつる人も候。かくのみ候て、まことしく淨土の一門にいりて、念佛の一行をもはらにする人のありがたく候事は、わ

【二】淨土の安心起行のこと。

が身ひとつのなげきとこそ人しれず思ひ候へども、法によりて人によらぬことはりをうしなはぬ程の人も、ありがたき世にてをのづからすゝめこゝろみ候にも、われからのあなづらはしさに申いづることはりもすてらるゝにこそなど、おもひしらるゝ事にてのみ候か、心うくかなしく候て、是ゆへにいまひときはとく淨土にむまれて、さとりをひらきてのちいそぎ此世界に還りきたりて神通方便をもて、結縁の人をも、無縁のものをも、ほむるをもそしるをも、みなこと〴〵く念佛にすゝめいれて、淨土へむかへむとちかひをゝこしてのみこそ、當時の心をもなぐさむる事にて候に、此おほせにぞわが心ざしもしるしあるこゝろして、あまりにうれしく候へ。その儀にて候はゞおなじくは、まめやかにげにげにしく御沙汰候ひて、ゆくすゑもあやうからず、往生もたのもしき程におぼしめしさだめさせおはしますべく候。詮じては、人のはからひ申すべき事にても候はず。よく〳〵案じて御らん候へ。此事にすぎたる御大事何事かは候べき。此世の名聞利養は中々に申ならぶるも、いま〳〵しく候。やがてきのふ今日、まなこにさへぎり、みゝにみちたるはかなさにて候めれば、事あたらしく申たつるにをよばず、たゞ返々も御心をしづめておぼしめしはからふべく候。さきには聖道淨土の二門を心えわけて、淨土の一門にいらせおはしますべきよしを申候き。いまは淨土門につきてをこなふべき様を申べし。

【二】淨土に往生せんとおもはん人は、安心起行と申て、心と行と相應すべき也。

(一) その心といふは『觀無量壽經』に説ていはく「もし衆生ありて、かの國にむまれんと

ねがはん者は、三種の心をおこして即往生すべし。なにをか三つとする。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。三心を具せるものはかならずかの國にむまる」といへり。

（三）善導和尚此三心を釋していはく「一に至誠心といは至といは眞也。誠といは實也。一切衆生の身口意業に修せむところの解行、かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとおもふ。外には賢善精進の相を現じ、内には虚假をいだくことをえざれ。内外明闇をえらばず、かならず眞實をもちひよ。かるがゆへに至誠心となづく」といへり。此釋の意は、至誠心といふは眞實心也。その眞實といふは身にふるまひ、口にいひ、心におもはん事、みなまことの心を具すべき也。即内はむなしくして外をかざる心のなきをいふなり。此心はうき世をそむきて、まことのみちにおもむくとおぼしき人々の中によく／＼用意すべき心ばへにて候也。われも人も、いふばかりなきゆめの世を執する心のふか丶りしなごりにて、ほど／＼につきて名聞利養を、わづかにふりすてたるばかりを、ありがたくいみじき事にして、やがてそれを返りて又名聞にしなして、此世ざまにも心のたけのうるさきに、とりなしてさとりあさき世間の人の、心の中をばしらず、貴がりいみじかるを、是こそは本意なれとしえたる心ちして、みやこのほとりをかきはなれて、かすかなるすみかをたづぬるまでも、心のしづまらんためをばつぎにして、本尊道場の莊嚴、まがきのうちには、木立などの心ぼそく、ものあはれならんことがらを、人にみえきかれん事をのみ執ず

る程に、露ばかりの事も、人のそしりにならん事あらじといとなむ外より心におもひまじふる事もなきやうなる心のみして、佛のちかひをたのみ、往生をねがはんなどいふ事をば思ひいれず、沙汰もせぬことのやがて至誠心かけて往生もえせぬ心ばへにて候也。又かく申候へば、一途に此世の人目をばいかにもありなんとて、人のそしりをかへりみぬがよきぞと申にては候はず。たゞし時にのぞみ、譏嫌のために世間の人目をかへりみる事は候へども、それをたのみおもひいれて、往生のさはりになるかたをばかへりみぬ様にひきなされ候はん事の、返々もおろかにくちおしく候へば、御身にあたりても、御心えさせまいらせ候はんために申候也。此心につきて四句の不同あるべし。一には外相は貴げにて内心は貴からぬ人あり。二には外相も内心もともに貴からぬ人あり。三には外相は貴げもなくて内心は貴き人あり。四には外相も内心もともに貴き人あり。四人の中にさきの二人は、いまきらふところの至誠心かけたる人也。是を虚假の人となづくべし。のちの二人は至誠心具したる人也、是を眞實の行者となづくべし。されば詮ずるところは、たゞ内心にまことの心をおこして、外相はよくもあれ、あしくもあれ、とてもかくてもあるべきにやとおぼえ候也。おほかた此世をいとはん事も、極樂をねがはん事も、人目ばかりをおもはで、まことの心をおこすべきにて候也。これを至誠心と申候也。

(二)二に深心といふは、善導釋していはく「深心といふはすなはちこれふかく信ずる心なり。是に二種あり。一には決定してふかくわが身は是煩惱を具せる罪惡生死の凡夫也。善根薄

少にして、曠劫よりこのかたつねに三界に流轉して出離の緣なしと信ずべし。二にはふかくかの阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝取し給に、即名號を稱する事、下十聲一聲にいたるまで、かの願力に乘じて、さだめて往生する事をうと信じて、乃至一念もうたがふ心なきがゆへに深心となづく。又深信といふは、決定して心をたてゝ佛教にしたがひて修行して、ながくうたがひをのぞき、一切の別解別行、異學異見異執のために退失傾動せられざる也」といへり。此釋の意ははじめにはわが身の程を信じ、のちには佛の願を信ずる也。たゞし後の信を決定せんがために、はじめの信心をばあぐる也。そのゆへはもしはじめの信心をあげずして、のちの信心を出したらましかば、もろ〳〵の往生をねがはん人、たとひ本願の名號をばとなふとも、みづから心に貪欲瞋恚等の煩惱をもおこし、身に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事あらば、みだりにみづから身をひがめて、かへりて本願をうたがひ候ひなまし。いま此本願に十聲一聲までも往生すといふは、おぼろげの人にはあらじ。妄念もをこさず、罪もつくらず、めでたき人にてぞあるらん。わがごときのともがらの一念十念にてはよもあらじとぞおぼえまし。しかるを善導和尙、未來の衆生の此うたがひをのこさん事をかゞみて、此二種の信心をあげて、われらがごときいまだ煩惱をも斷ぜず、罪業をもつくる凡夫なりとも、ふかく彌陀の本願を信じて念佛すれば、一聲にいたるまで決定して往生するむねを釋し給へり。此釋のことに心にそみていみじくおぼへ候也。まことにかくだにも釋し給はざらましかば、われらが往生は不定にぞおぼえましとあ

やうくおぼえ候也。されば此義を心えわかぬ人やらん。わが心のわろければ往生はかなはじなどこそは申あひて候めれ。そのうたがひの、やがて往生せぬ心にて候けるものを、たゞ心のよきわろきをも返りみず、罪のかろきをもきをも沙汰せず、心に往生せんとおもひて、口に南無阿彌陀佛ととなへて、聲につきて決定往生のおもひをなすべし。その決定の心によりて、即往生の業はさだまる也。かく心うればうたがひなし。往生は不定とおもへばやがて不定也。一定とおもへば一定する事にて候也。されば詮じては、ふかく信ずる心と申候は、南無阿彌陀佛と申せば、その佛のちかひにていかなる身をもえらばず、いかなるとがをもきらはず、一定むかへ給ふぞとふかくたのみて、うたがふ心のすこしもなきを申候なり。又別解別行にやぶられざれと申候は、解ことに、行ことならん人のいはん事につゐて、念佛をもすて往生をもうたがふ事なかれと申候也。さとりことなる人と申すは、天台法相等の八宗の學生是也。行ことなる人と申すは眞言止觀等の一切の行者是なり。これらはみな聖道門の解行なり。淨土門の解行にことなるがゆへに、別解別行となづくるなり。あらぬさとりの人にいひやぶらるまじきことはりをば、善導こまかに釋し給ひて候へども、その文ひろくしてつぶさにひくにをよばず。心をとりて申さば、たとひ佛きたりてひかりをはなち、したをいだして煩惱罪惡の凡夫の念佛して一定往生すといふ事は、ひが事ぞ信ずべからずとの給とも、それによりて、一念もうたがふ心あるべからず。そのゆへは一切の佛はみなおなじ心に、衆生をばみちびき給ふ也。即まづ阿

彌陀如來願ををこしていはく「もしわれ佛になりたらんに、十方の衆生わが國にむまれんとねがひて、我が名號をとなふる事、下十聲にいたらんに、わが願力に乘じてもしむまれずば正覺をとらじ」とちかひ給て、その願成就してすでに佛になり給へり。しかるを釋迦ほとけ此世界にいでゝ衆生のために、かの佛の本願をとき給へり。又六方にをのをの恆河沙數の諸佛まし／＼て、一々に舌をのべて、三千世界におほふて、無虚妄の相を現じて、釋迦佛の彌陀の本願をほめて、一切衆生をすゝめて、かの佛の名號をとなふれば、さだめて往生すとき給へるは決定してうたがひなき事也。一切衆生みなこの事を信ずべしと證誠し給へり。かくのごときの一切の諸佛、一佛ものこらず、同心に一切の凡夫、念佛して決定して往生すべきむねをあるひは願をたて、あるひはその願をとき、あるひはその說を證してすゝめ給へるうへには、いかなる佛の又きたりて往生すべからずとはの給べきぞといふことはりの候ぞかし。このゆへに佛きたりての給ともおどろくべからずとは申候也。佛なをしかり、いはんや菩薩聲聞緣覺をや、いかにいはんや凡夫をやと意えつれば、一たびも此念佛往生の法門をきゝひらきて、信ををこしてんのちは、いかなる人とかく申とも、ながくうたがふ心あるべからずとこそをぼえ候へ。これを深心と申候也。

【三】三に廻向發願心といふは、善導釋していはく「過去及今生の身口意業に修するところの世出世の善根、をよび他の一切の凡聖の身口意業に修せんところの世出世の善根を隨喜して、此自他所修の善根をもて、こと／＼くみな眞實深信の心の中に廻向して、かの國にむま

れんとねがふ也。又廻向發願心といふはかならず決定眞實の心の中に廻向して、むまるゝ事をうるおもひをなせ。この心ふかく信じてなをし金剛のごとくにして、一切の異見異學別解別行の人のために動亂破壞せられざれ」といへり。此釋の意はまずわが身につきて、さきの世をよびこの世に、身にも口にも意にもつくりたらん功德をみなこと〳〵く極樂に廻向して往生をねがふ也。次に我身の功德のみならず。こと人のなしたらん功德をも、佛菩薩のつくらせ給ひたらん功德をも隨喜すれば、みな我功德となるをもて、こと〳〵く極樂に廻向して、往生をねがふ也。すべてわが身の事にても、此世の果報をもいのり、をなじくのちの世の事なりとも、極樂ならぬ餘の淨土にむまれんとも、もしは都率にむまれんとも、もしは人中天上にむまれんとも、たとひかくのごとく、かれにてもこれにても異事に廻向する事なくして、一向に極樂に往生せんと廻向すべき也。もしこのことはりをもをもひさだめつらんさきに、この世の事をもいのり、あらぬかたへも廻向したらん功德をも、みなとり返して往生の業になさんと廻向すべき也。一切の善根をみな極樂に廻向すべしと申せばとて、念佛に歸して一向に念佛申さん人の、ことさらに餘の功德をつくりあつめて、廻向せよとには候はず。過ぬるかたにつくりをきたらん功德をも、もし又こののちなりとも、をのづから便宜にしたがひて、念佛のほかの善を修する事のあらんをも、しかしながら往生の業に廻向すべしと申す事にて候也。此心金剛のごとくにして、別解別行の人にやぶられざれと申候は、さきにも申候つる樣に、ことさとりの人にをしへられて、か

れこれに廻向する事なかれと申候也。金剛はやぶれぬものにて候なれば、たとへにとりてこの心のやぶれぬ事も金剛のごとくなれと申候にやとおぼへ候。是を廻向發願心とは申候也。三心のありさまをろ〳〵申ひらき候ぬ。

【五】此三心を具しぬれば、かならず往生するなり。一心もかけぬればむまるゝ事をえずと善導は釋し給ひたれば、往生をねがはん人は最も此三心を具すべき也。しかるにかやうに申したるには別々にて事々しきやうなれども、意えとくにはさすがにやすく具しぬべき心にて候也。詮じてはたゞまことの心ありて、ふかく佛のちかひをたのみて、往生をねがはんずるにて候ぞかし。さればあさきふかきのかはりめこそ候へども、さほどの心はたれかをこさざらんとこそはおぼえ候へ。かやうの事はうとくをもふおりには、大事におぼえ候。とりよりて沙汰すれば、さすがにやすき事にて候也。よく〳〵心えとかせおはしますべく候。たゞしこの三心はその名をだにもしらぬ人も、そらに具して往生し、又こまかにならひ沙汰する人も返りて闕る事も候也。是につきても、四句の不同候べし。さは候へども又是を意えて、わが心には三心具したりとおぼえば心づよくもおぼえ、又具せずとおぼえば心をもはげまして、かまへて具せんとおもひしり候はんは、よくぞ候ひぬべければ、心のをよぶ程は申に候。このうへさのみはつくしがたく候へばとゞめ候ぬ。又この中におぼつかなく、おぼしめす事候はんをば、をのづから見參にいり候はん時申ひらくべく候。是ぞ往生すべき心ばへの沙汰にて候。これを安心とはなずけて候也。

【ある人のもとへつかはす御消息】ある人とは何人なるや詳かならず。

【熊谷の入道へつかはす御返事】勅傳第二十七卷に載す。

ある人のもとへつかはす御消息

念佛往生はいかにもしてさはりをいだし、難ぜんとすれども往生すまじき道理はをほかた候ぬ也。善根すくなしといはんとすれば、一念十念もるゝ事なし。罪障をもしといはんとすれば十惡五逆も往生をとぐ、人をきらはんといはんとすれば常沒流轉の凡夫をまさしきうつはものとせり。時くだれりといはんとすれば末法萬年のすゑ、法滅已後さかりなるべし。此法はいかにきらはんとすれどももるゝ事なし。たゞちからをよばざる事は惡人をも時をもえらばず攝取し給ふ佛なりと、ふかくたのみて、わが身をかへりみず、ひとすぢに佛の大願業力によりて、善惡の凡夫往生をうと信ぜずして、本願をうたがふばかりこそ、往生にはおほきなるさはりにて候へ。

一、いかさまにも候へ。末代の衆生は今生のいのりにもなり、まして後生の往生は念佛の外にはかなふまじく候。源空がわたくしに申事にてはあらず。聖教のおもてに、かゞみをかけたる事にて候へば御らんあるべく候也。

熊谷の入道へつかはす御返事

【御きんだちなどのかんだう】御公達などの勘當なり。

御文よろこびてうけ給はり候ぬ。まことにそのゝちはおぼつかなく候つるに、うれしくおほせられて候。但念佛の文かきてまいらせ候。御らん候べし。念佛の行は、かの佛の本願の行にて候。持戒誦經誦咒理觀等の行は、かの佛の本願にあらぬをこなひにて候へば、極樂をねがはん人は、まづかならず本願の念佛の行をつとめてのうへに、もし異をこなひをも念佛にしくはへ候はんとおもひ候はゞ、さもつかまつり候。又たゞ本願の念佛ばかりにても候べし。念佛をつかまつり候はで、たゞことをこなひばかりをして、極樂をねがひ候人は極樂へもえむまれ候はぬ事にて候よし、善導和尚のおほせられて候へば、但念佛が決定往生の業にては候也。善導和尚は、彌陀の化身にておはしまし候へば、それこそは一定にて候へと申にて候。又女犯と候は不婬戒の事にこそ候なれ。又御きんだちなどのかんだうと候は不瞋戒のことにこそ候なれ。されば持戒の行は佛の本願にあらぬ行なれば、たへたらんにしたがひてたもたせ給べく候。孝養の行も佛の本願にあらず。たへんにしたがひて、つとめさせおはしますべく候。又あかがねの阿字の事もをなじことに候。又さくぢやうの事も佛の本願にあらぬつとめにて候。とてもかくても候なん。又迎接の曼陀羅はたいせちにをはしまし候。それもつぎの事に候。たゞ念佛を三萬もしは五萬もしは六萬、一心に申させおはしまし候はんぞ、決定往生のをこなひにては候。こと善根は念佛のいとまあらはの事に候。六萬遍をだに申させ給はゞ、そのほかにはなに事をかはせさせおはしますべき。まめやかに一心に三萬五萬、念佛をつとめさせ給はゞ、

少々戒行やぶれさせをはしまし候とも、往生はそれにはより候まじきことに候。たゞしこの中に孝養の行は、佛の本願の行にては候はねども、八十九にておはしまし候なり。あひかまへてことしなどをぼまちまいらせさせおはしませかしとをぼえ候。あなかしこあなかしこ。

五月二日　　源空

【ある時の御返事】勅傳第二十七卷に載す。了惠上人註して曰く「これは熊谷入道念佛して、さまん〳〵の現瑞を感じたりけるを上人へ申あげたりける時の御返事なり」と。

ある時の御返事

をよそこの條こそ、とかく申にをよび候はず、めでたく候へ。往生をせさせ給ひたらんにはすぐれておぼえ候。死期しりて往生する人々は、入道どのにかぎらずおほく候。かやうに耳目をおどろかす事は、末代にはよも候はじ。むかしも道綽禪師ばかりこそ、おはしまし候へ。返々申ばかりなく候。たゞしなに事につけても、佛道には魔事と申す事のゆゝしき大事にて候なり。よく〳〵御用心候べきなり。かやうに不思議をしめすにつけても、たよりをうかゞふ事も候ひぬべきなり。めでたく候にしたがひて、いたはしくおぼえ候て、かやうに申候なり。よく〳〵御つゝしみ候て、ほとけにもいのりまいらせさせ給ふべく候。いつか御のぼり候べき。かまへて〳〵のぼらせおはしませかし。京の人人おほやうはみな信じて念佛をもいますこしいさみあひて候。是につけても、いよ〳〵す

【往生淨土用心】勅傳第二十三卷に載す。

【一】日所作のこと。

【二】宿善往生は假事なること。

すませ給ふべく候。あしざまにおぼしめすべからず候。なを〳〵めでたく候。あなかしこあなかしこ。

四月三日　源空

熊谷入道殿江

往生淨土用心

【一】一、毎日御所作、六萬遍めでたく候。うたがひの心だにも候はねば、十念一念も往生はし候へども、おほく申候へば上品にむまれ候。釋にも「上品の花臺に慈主を見る」到る者は皆念佛の多きに因ると候へば。

【二】一、宿善によりて往生すべしと人の申候らん、ひが事にては候はず。かりそめの此世の果報だにも、さきの世の罪、功徳によりてこゝくもあしくもむまるゝ事にて候へば、まして往生程の大事、かならず宿善によるべしと聖教にも候やらん。たゞし念佛往生は、宿善のなきにもより候はぬやらん。父母をころし、佛身よりちをあやしたるほどの罪人も臨終に十念申て往生すと『觀經』にも見えて候。しかるに宿善あつき善人はをしへ候はねども、悪にをそれ佛道に心すゝむ事にて候へば、五逆などはいかにも〳〵つくるまじき事にて候也。それに五逆の罪人、念佛十念にて往生をとげ候時に、宿善のなきにもよ

り候まじく候。されば經に「若し人多くの罪を造るに六字の名をきく事を得ば、火車自然に去り、華臺卽ち來迎し、極重惡人も他の方便なく唯彌陀を稱するのみにて極樂に生ずることを得。若し重業の障ありて淨土に生ずる因なきも、彌陀の願力に乘ぜば必ず安樂國に生ず」この文の意は若五逆をつくれりとも、彌陀の六字の名をきかば、火の車自然にさりて蓮臺きたりてむかふべし。又きはめてをもき罪人の、他の方便なからんも、彌陀をとなへたてまつらば、極樂にむまるべし。又もしをもきさはりありて、淨土にむまるべき因なくとも彌陀の願力に乘じなば、安樂國にむまるべしと候へば、たのもしく候。又善導の釋には、曠劫より此かた六道に輪廻して、出離の緣なからん常沒の衆生をむかへんがために、阿彌陀ほとけは佛になり給へりと候。その常沒の衆生と申候は、恒河のそこにしづみたるいきものゝ、身おほきにながくして、その河にはゞかりてえはたらかず、つねにしづみたるに、惡世の凡夫をたとへられて候。又凡夫と申、二の文字をば、狂醉のごとしと弘法大師釋し給へり。げにも凡夫の心は物ぐるひ、さけにゑいたるがごとくして、善惡につけて、おもひさだめたる事なく、一時に煩惱百たびまじはりて、善惡みだれやすければ、いづれの行なりとも、わがちからにては行じがたし。しかるに生死をはなれ、佛道にいるには、菩提心をこし、煩惱をつくして、三祇百劫、難行苦行してこそ、佛にはなるべきにて候に、五濁の凡夫、わがちからにては願行そなはる事かなひがたくて、六道四生にめぐり候也。彌陀如來この事をかなしみおぼしめして、法藏菩薩と申しゝいにしへ、

我等が行じがたき僧祇の苦行を、兆載永劫があひだ功をつみ、德をかさねて、阿彌陀ほとけになり給へり。一佛にそなへたまへる四智三身十力無畏等の一切の內證の功德、相好光明說法利生等の外用の功德、さまぐ\なるを、三字の名號の中におさめいれて、この名號を十聲一聲までもとなへん者を、かならずむかへん、もしむかへずばわれ佛にならじとちかひ給へるに、かの佛いま現に世にましく\て、佛になり給へり。名號をとなへん衆生往生うたがふべからずと善導もおほせられて候也。この樣をふかく信じて、念佛をこたらず申て、往生うたがはぬ人を他力を信じたるとは申候也。世間の事にも他力は候ぞかし。あしなえこしゐたる者のとをきみちをあゆまんとおもはんにかなはねば、船車にのりてやすくゆく事、これわがちからにあらず、乘物のちからなれば他力也。あさましき惡世の凡夫の諂曲の心にて、かまへつくりたるのり物にだにかゝる他力あり。まして五劫のあひだおぼしめしさだめたる本願他力のふねいかだに乘なば、生死の海をわたらん事うたがひおぼしめすべからず。しかのみならず、やまひをいやす草木、くろがねをとる磁石不思議の用力あり。又麝香はかうばしき用あり。犀の角は水をよせぬ力あり。これみな情なき草木、思をこさぬ獸なれども、もとより不思議の用力はかくのみこそ候へ。まして佛法不思議の用力ましまさざらんや。されば念佛は一聲に八十億劫のつみを滅する用あり。彌陀は惡業深重の者を來迎し給ふちからましますとおぼしめしとりて、宿善のありなしも沙汰せず、つみのふかきあさきも返りみず、たゞ名號となふるものゝ往生するぞと信じおぼ

しめすべく候。すべて破戒も持戒も、貧窮も福人も、上下の人をきらはず、たゞわが名號をだに念ぜば、いしかはらを變じて、金となさんがごとく來迎せんと御約束候也。法照禪師の「五會法事讃」にも、「彼の佛因中に弘誓を立つ。名をきゝて我を念ずればすべて來迎す。貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、但廻心して多く念佛せしめば、能く瓦礫をして金とならしむ」たゞ御ずゝをくらせおはしまして、御舌をだにもはたらかされず候はんはけたいにて候べし。たゞし善導の三縁の中の親縁を釋し給ふにも、衆生ほとけを禮すれば佛これをみ給ふ。衆生佛をとなふれば佛これをきゝ給ふ。衆生佛を念ずれば佛も衆生を念じ給ふ。かるがゆへに阿彌陀佛の三業と、行者の三業とかれこれひとつになりて、佛も衆生もおや子のごとくなるゆへに、親縁となづくと候めれば、御手にずゝをもたせ給ひて候はゞ、佛これを御らん候べし。御心に念佛申すぞかしとおぼしめし候はゞ、佛も衆生を念じ給ふべし。されば佛にみえまいらせて、念ぜられまいらする御身にてわたらせ給はんずる也。さればつねに御したのはたらくべきにて候也。三業相應のためにて候べし。三業とは身と口と意とを申候也。しかも佛の本願の稱名なるがゆへに、聲を本體とはおぼしめすべきにて候。さてわがみゝにきこゆる程に申候は高聲念佛のうちにて候なり。高聲は大佛をおがみ、念ずるは念佛のかずへもなど申げに候。いづれも往生の業にて候べく候。

【三】無言念佛のこと。

【四】百萬遍のこと。

【五】七分全得のこと。

【逆修】亡者の爲めにその冥福を修むること。

【三】一、御無言めでたく候。たゞし無言ならで申念佛は功德すくなしとおぼしめされんはあしく候。念佛をば金にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり、みづにいるるにも損ぜず候。かやうに念佛は妄念のをこる時申候へどもけがれず、物を申しまずるにもまぎれ候はず。そのよしを御意え候ながら御念佛の程は異ごとをまぜずして、いますこしも念佛のかずをそへんとおぼしめさんはさにて候。もしおぼしめしわすれて、ふと物などをおほせ候て、あなあさまし。いまはこの念佛むなしくなりぬとおぼしめす御事はゆめ〳〵候まじく候。いかやうにて申候とも往生の業にて候べく候。

【四】一、百萬遍の事。佛の願にては候はねども『小阿彌陀經』に「若一日、若二日、乃至七日念佛申人、極樂に生ずる」とゝかれて候へば、七日念佛申べきにて候。その七日の程のかずは百萬遍にあたり候よし、人師釋して候へば、百萬遍は七日申べきにて候へども、堪候はざらん人は、八日九日などにも申され候へかし。さればとて百萬遍申さざらん人のむまるまじきにては候はず。一念十念にてもむまれ候也。一念十念にてもむまれ候ほどの念佛とおもひ候うれしさに、百萬遍の功德をかさぬるにて候なり。

【五】一、七分全得の事。仰のまゝに申げに候。さてこそ逆修はする事にて候へ。さ候へばのちの世をとぶらひぬべき人候はん人も、それをたのまずして、われとはげみて念佛申して、いそぎ極樂へまいりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のまゝにむかへとらんとおもふべきにて候也。又當時日ごとの御念

【六八】本願を信ずべきこと。

佛をも、かつ〳〵廻向しまいらせられ候べし。なき人のために念佛を廻向し候へば、阿彌陀ほとけひかりをはなちて、地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へば、此三惡道にしづみて苦をうくる者、そのくるしみやすまりて、いのちをはりてのち解脱すべきにて候。「大經」にいはく「若し三途勤苦の處に在りて、此光明を見ば、皆休息を得て復苦惱なく、壽終の後は解脱を蒙る」といへり。

【六八】一、本願のうたがはしき事もなし。極樂のねがはしからぬにてはなけれども往生一定とおもひやられて、とくまいりたき心のあさゆふは、しみ〴〵ともおぼえずとおほせ候事、まことによからぬ御事にて候。淨土の法門をきけどもきかざるがごとくなるは、このたび三惡道よりいでゝ、つみいまだつきざるもの也と經にもとかれて候。又この世をいとふ御心うすくわたらせ給ふにて候。そのゆへは、西國へくだらんともおもはぬ人に、船をとらせて候はんに、ふねの水にうかぶ事なしとはうたがひ候はねども、當時さしているまじければ、いたくうれしくも候まじきぞかし。さてかたきの城などにこめられて候はんが、からくしてにげてまかり候はんみちに、おほきなる河海などの候て、わたるべきやうもなからんおりおやのもとよりふねをまうけてむかへにたびたらんは、さしあたりていかばかりかうれしく候べき。これがやうに、貪瞋煩惱のかたきにしばられて、三界の樊籠にこめられたるわれらを、彌陀悲母の御心ざしふかくして、名號の利劒をもちて生死のきづなをきり、本願の要船を苦海のなみにうかべて、かのきしにつけ給ふべしとおもひ候はんう

れしさは、歡喜のなみだたもとをしぼり、渇仰のおもひきもにそむべきにて候。せめては身の毛いよだつほどにおもふべきにて候を、のさにおぼしめし候はんは、ほいなく候へども、それもことはりにて候。つみつくる事こそをしへ候はねども、心にもそみておぼえ候へ。そのゆへは、無始より此かた六趣にめぐりし時も、かたちはかはれども心はかはらずして、いろ〳〵さま〴〵つくりならひて候へば、いまもうゐ〳〵しからずやすくはつくられ候へ。念佛申て往生せばやとおもふ事は、此たびはじめてわづかにきゝえたる事にて候へば、きとは信ぜられ候はぬ也。そのうへ人の心は頓機漸機とて二しなに候也。頓機はきゝてやがてさとる心にて候。漸機はやう〳〵さとる心にて候也。ものまうでなどをし候に、あしはやき人は一時にまいりつくところへ、あしをそきものは日ぐらしにもかなはぬ樣には候へども、まいる心だにも候へば、つゐにはとげ候やうに、ねがふ御心だにわたらせ給ひ候はゞ、とし月をかさねても、御信心もふかくならせおはしますべきにて候。

【七】臨終善知識のこと。

【七】一、日ごろ念佛申せども臨終に善知識にあはずは、往生しがたし。又やまひ大事にて心みだれば往生しがたしと申候はんはさもいはれて候へども、善導の御意にては極樂へまいらんと心ざして、おほくもすくなくも念佛申さん人のいのちつきん時は、阿彌陀ほとけ聖衆とゝもにきたりてむかへ給ふべしと候へば、日ごろだにも御念佛候はゞ、御臨終に善知識候はずとも、ほとけはむかへさせ給ふべきにて候。又善知識のちからにて往生すと

【斷末摩】臨終の苦をいふ。末摩とは梵語マルゲン(marman)之を支節又は死穴と譯す。生物の身中には必ずこの支節あり。若し他のもの之に觸るれば劇痛を起して必ず死す。人の死せんときこの劇痛を起す。即ち水火風の三大中その一が膨脹して末摩にふる。末摩にふるるが故に命をたつといふ。

申候事は『觀經』の下三品の事にて候。下品下生の人などこそ、ひごろ念佛も申候はず。往生の心も候はぬ逆罪の人の、臨終にはじめて善知識にあひて、十念具足して往生するにてこそ候へ。日ごろより他力の願力をたのみ、思惟の名號をとなへて、極樂へまいらんとおもひ候はん人は、善知識のちから候はずとも、佛は來迎したまふべきにて候。又かろきやまひをせんといのり候はん事も心かしこくは候へども、やまひもせで死候人もうるはしくをはる時には、斷末摩のくるしみとて、八萬の塵勞門より、無量のやまひ身をせめ候事、百千のほこつるぎにて、身をきりさくがごとし。さればまなこなきがごとくにして、みんとおもふ物をもみず、舌のねすくみていはんとおもふ事もいはれず候也。是は人間の八苦のうちの死苦にて候へば、本願を信じて往生をねがひ候はん行者も、此苦はのがれずして悶絶し候とも、息のたえん時は、阿彌陀ほとけのちからにて、正念になりて往生をし候べし。臨終はかみすぢきるがほどの事にて候へば、よそにて凡夫さだめがたく候。たゞ佛と行者との心にてしるべく候也。そのうへ三種の愛心をこり候ひぬれば魔緣たよりをえて正念をうしなひ候也。この愛心をば善知識のちからばかりにてはのぞきがたく候。阿彌陀ほとけの御ちからにてのぞかせ給ひ候べく候。諸邪業繫無能礙者、たのもしくおぼしめすべく候。又後世者とおぼしき人の申げに候は、まづ正念に住して、念佛申さん時に、佛來迎し給ふべしと申げに候へども『小阿彌陀經』には「諸の聖衆と與現に其の前に在す。是の人終る時心顚倒せず、即阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得」

【八】念佛相續のこと。

と候へば、人のいのちをはらんとする時、阿彌陀ほとけ聖衆とともに、目のまへにきたり給ひたらんを、まづみまいらせてのちに、心は顚倒せずして極樂にむまるべしとこそ心えて候へ。さればかろきやまひをせばや、善知識にあはゞやといのらせ給はんいとまにて、いま一返もやまひなき時念佛を申して、臨終には阿彌陀ほとけの來迎にあづかりて、三種の愛心をのぞき、正念になされまいらせて極樂にむまれんとおぼしめすべく候。さればとていたづらに候ぬべからん善知識にもむかはでをはらんとおぼしめすべきにては候はず。先德達のをしへにも、臨終の時に阿彌陀佛を西のかべに安置しまいらせて、病者そのまへに西むきにふして、善知識に念佛をすゝめられよとこそ候へば、それこそあらまほしき事にて候へ。たゞし人の死の緣は、かねておもふにもかなひ候はず。俄におほぢにてをはる事も候。又大小便利のところにてしぬる人も候。前業のがれがたくして太刀かたなにていのちをうしなひ、火にやけ水におぼれて、いのちをほろぼすたぐひおほく候へば、さやうにて死候とも、日ごろに念佛申て極樂へまいる心だにも候人ならば、息のたえん時に、阿彌陀、觀音勢至きたりむかへ給べしと信じおぼしめすべきにて候也。「往生要集」にも時所諸緣を論ぜず臨終に往生をもとめねがふに、その便宜をえたる事念佛にはしかずと候へばたのもしく候。

このよしをよみ申させ給ふべく候。八つの事しるしてまいらせ候。これはのちに御たづね候し御返しにて候。

【八】一、所作おほくあてがひてかゝんよりは、すくなく申さん、一念もむまるなればとお

【九】魚鳥をいむこと。

ほせの候事まことにさも候ひぬべし。たゞし「禮讃」の中には「十聲一聲定んで往生を得。乃至一念も疑心あることなし」と釋せられて候へども「散善」の文には「念々に捨てざる、是を正定の業と名く」と候へば、十聲、一聲にむまると信じて念々にわするゝ事なくとなふべきにて候。又「彌陀名號、相續して念ず」とも釋せられて候。さればあひついで念ずべきにて候。一食のあひだに三度ばかりおもひいでんはよき相續にて候。つねにだにおぼしめしいでさせ給ひ候はゞ、十萬六萬申させ給ひ候はずとも相續にて候ぬべけれども、人の心は當時みる事きく事にうつる物にて候へば、なにとなく御まぎれの中にはおぼしめしいでん事かたく候ぬべく候。御所作おほくあてゝ、つねにずゝをもたせ給ひ候はゞ、おぼしめしいで候ぬとおぼえ候。たとひ事のさわりありてかゞせおはしまして候とも、あさましやかぎつる事よとおぼしめし候はゞ、御心にかけられ候はんずるぞかし。とてもかくても御わすれ候はずば相續にて候べし。又かげて候はん御所作をつぎの日中いれられ候はん事さも候なん。それもあす申いれ候はんずればとて、御ゆだん候はんはあしく候。せめての事にてこそ候へ。御意えあるべく候。

【九】一、魚鳥に七箇日のいみの候なる事、さもや候らん。えみをよばず候。地體はいきとしいける物は過去のちゝはゝにて候なれば、くふべき事にて候はず。又臨終には酒魚鳥葱韮蒜などはいまれたる事にて候へば、やまひなどかぎりになりてはくふべき物にては候はねども、當時きとしぬばかりは候はぬやまひの月日つもり苦痛もしのびがたく候はん

には、ゆるされ候なんとおぼえ候。御身たゞしくて念佛申さんとおぼしめして御療治候べし。いのちをおしむは往生のさはりにて候。やまひばかりを療治はゆるされ候なんとおぼえ候。

二の事の御たづねしるしてまいらせ候。よく／＼よみ申させ給ふべく候。

【辨阿】浄土宗第二祖。聖光房辨長上人。辨阿彌陀佛と號す。辨阿はその略稱なり。筑前の人。七歳にして出家し十四歳にして得度す。次で比叡山に登り天台を學ぶ。後故山に歸りて講席を張りしが偶弟の死に遇ひいたく無常を感じ建久八年吉水に法然上人を尋ね淨土の教義をきく。爾來熱心なる念佛の行者となり、主として九州にその教演を業り、筑後に善導寺を建立して專修道場となす。嘉禎四年二月廿九日寂。壽七十七。

究竟大乘淨土門　諸行往生稱名勝
我闇萬行選佛名　往生淨土見尊體

末代念佛授手印　並序

作者　辨阿

夫れ以れば九品を術と爲すには稱名を以て先と爲し、八邊を極と爲さんには數遍を以て果と爲す。念佛とは、昔法藏菩薩大悲誓願の筏、今彌陀覺王濟度衆生の船なり。是則ち菩薩利益衆生の約束、是則ち如來平等利生の誠言なり。尤も憑しい哉。尤も貴なる哉。所以に弟子、昔は天台の門流を酌みて圓乘の法水に浴し、今は淨土の金池に望みて念佛の明月を翫ぶ。爰を以て四教三觀の明鏡は相傳を證眞法印に受け、三心五念の寶玉は禀承を源空上人に傳ふ。幸なる哉、相同、血脈を白骨に留め、口傳を耳底に納む。誠に以て口に唱ふる所は五萬六萬、誠に以て心に持つ所は四修三心なり。之に依て自行を專とするの時は口稱の數遍を以て正行と爲し、他を勸化するの日は稱名の多念を以て淨業と敎ふ。然と雖も上人往生の後、其義を水火に諍ひ、其論を蘭菊に致す。還て念佛の行を失し、空く淨土の業を廢す。悲しい哉悲しい哉、何爲ん、何爲ん。爰に貧道、齡已に七旬に及び

【證眞法印】天台宗の學匠。比叡山隆慧、永辨に惠心流檀那流の法系をうけ大藏經を閲讀すること十六遍、源平の亂を知らず後法然上人につきて淨土教をうく。寂年不詳。

【一】五種正行を明す。

餘命又幾ならず。惜まず愁へずして空しく止む可からず。之に依て肥州白河川の邊り往生院の内に於て、二十有餘の衆徒を結び、四十八の日夜を限りて別時の淨業を修し、如法の念佛を勤む。此間に於て徒に稱名の行を失はんことを惱み、空しく正行の勤を癈せんことを悲しみ、且つは然師報恩の爲め、且つは念佛興隆の爲め、弟子が昔の聞しことに任せ、沙門が相傳に依りて之を錄し留めて向後に貽る。仍て末代の疑を決せんが爲め、未來の證に備へんが爲に手印を以て證と爲して、筆記する所左の如し。

末代念佛授手印

末代念佛は淨土一宗の義を知りて、淨土一宗の行を修む。首尾次第條々の行の事。

【一】五種正行の事

一、讀誦正行の事

廣くは通じて三部經を讀誦すべし。別しては略して『阿彌陀經』を讀誦すべし。之に依りて上人在生の時『阿彌陀經』を長日三卷之を誦し御せり。一音に一部、和音に一部、唐音に一部。

一、觀察正行の事

行者の根機に依りて觀門の廣略を行ずべし。若し『觀經』に依らば十三觀を用ふべし。若し『觀念法門』に依らば總相別相の二觀を用ふべし。若し慧心先德の『往生要集』に依らば略して三種觀の中の一觀を以て之を用ふべし。其意趣行者の志に任す。

【二】正助二行を明す。

【文】善導の觀經疏散善義。

一、禮拜正行の事

禮拜に上中下有り。行者の根機に依るべし。但し多分は下根の禮之を用ふ。昔、上人在世の御時予に示して云はく「宇治の邊に住める行者有り、坐し乍ら禮拜を修して終に以て往生を得畢んぬ」と。

一、口稱正行の事

心には往生の念ひを志し、口には南無阿彌陀佛と稱す。

一、讃歎供養正行の事

若は二行と爲すべき歟。

一には讃歎正行。二には供養正行。

凡そ五種正行是の如し。但し一人具さに五種を行じ、若しは一種、二種、若しは三種四種、行者の根機に依るべし。

【二】正行助行二行分別の事

一、正行の事

心には三心を存し、口には南無阿彌陀佛と稱する也。此の宗の意此の行を以て第一の行と爲す。善導の御意は釋迦彌陀の御意を探りて、種々の往生行の中に此の口稱の一行を以て殊勝第一の行と爲す。

文に云はく「一心に專ら彌陀の名號を念じ行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨て

ざる者、是を正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に」と。

上人曰はく「此文を見得ての後、年來所修の雜行を捨てゝ一向專修の身と成りき」と。

此の文に就て種々の義有り。

一には『觀經』の三心の中の深心是也。

二には『往生論』の中に五念門を明す中の口業讃歎門是也。

論の文に曰はく「云何んが讃歎する。口業をもて讃歎し、彼の如來の名を稱す」と。文

三には四修の中、四修俱に口稱の意たりと雖も、其中に於て口稱は是れ無間修の意也。

四には三種行儀の中には何れの行儀にも通ずと雖も別して是れ尋常行儀の意也。

五には難易二道の中には易行道の意也。

一、助行の事

前の五種の中に口稱の外の四種は是れ口稱の爲めに助行と爲るが故に、正助兼行の人は口稱を以て正行と爲し、餘の四行を以て傍行と爲す。若し復口稱の一行を以て往生の行と爲し、助行を行ぜざるの人も有り。

【三】三心を明す

【三】念佛の行者必ず三心を具足すべき事。

『觀經』に曰はく「三種の心を發して卽便ち往生す。三心を具する者は必ず彼の國に生ず。」文

『禮讃』に云はく、「此三心を具すれば必ず往生することを得。若し一心も少ぬれば卽ち生ず

ることを得ず。」文

『觀經の疏』第四に云はく「三心を辨定して以て正因と爲す。」文

又云はく「三心既に具すれば行として成ぜざること無し。願行既に成じて若し生ぜずんば是の處り有ること無し。」文

『觀念法門』に云はく「三心を内因と爲し、三力を外縁と爲す。」文

上人の『選擇集』に云はく、「念佛の行者、必ず三心を具足すべきの文。私に云はく、引く所の三心とは是れ行者の至要也。極樂に生ぜんと欲する人は全く三心を具足すべき也。」文

淨影寺の惠遠大師の『觀經疏』に云はく、「修心往生とは心に三種有り、一には誠心、誠とは謂く實也。起行虛しからず、實心をもて去ることを求む。故に誠心と曰ふ。二には深心、信樂慇重にして彼の國に生ぜんと欲す。三には廻向發願の心、直爾に趣求する之を說きて願と爲す。善を挾んで趣求するを說きて廻向と爲す。」文

一、至誠心の事

四句有り

一向虛假心　外實内虛の人。一向の誑惑度世の人也。此の人は全く往生を得べからざる也。

一向眞實心　内外俱實の人也。是は淨土宗の行者也。決定往生の人也。

虛實俱具心　半實半虛の人也。若しは往生を得、若しは往生を得ず。是の人は不定の機也

非虛非實心　是れ世間尋常の人也。

次念佛に入るの後の四句。

多虚少實　疑慮の心は多く、往生の心は少し。決定して往生すべからず。

多實少虚　往生の心は多く、疑慮の心は少し。若しは往生すべし。

多少俱實　一向至誠心の念佛者也。決定往生の人也。

多少俱虚　一向、往生の心無きの人也。

次四句有り。

始虚終實　往生の人也。

始實終虚　往生を得ざるの人也。

始終俱實　決定往生の人也。

始終俱虚　決定して往生を得ざるの人也。

萬法に於て法毎に皆虚實の二心有り。之に依りて念佛の一法に於ても亦虚實の二心有り。今善導の御意は虚假心を捨て、眞實心を以て念佛を行じて往生を得。之を以て至誠心と名くる也。

問「本より至誠心を具するの人、念佛を申す間、今始めて誑惑度世の心に移り、名聞利養の爲に申す所の念佛、往生の因と成ると爲んや如何ん。」答「若し改悔心を起し、還りて至誠心に任せば尤も往生の因と成るべし。若し改悔せずんば往生の因と成る可からず。其の人々の意に依るべし。云々。」

問「至誠心に住する人、念佛を修するの間、他人の請に依りて念佛を申すの時、有所得の心に住して申す所の念佛、自身の爲に往生の因と成ると爲んや。爲當如何。」答「至誠心に住する人は、縱ひ有所得の心に住して念佛を申すと雖も往生を得べし。所以何んとなれば至誠心に住する人は中間に暫く有所得の心に住すと雖も、前後の心至誠心なるに依りて往生を得べし。況や復實に至誠心に住する人は、定んで以て改悔の心を發し、還つて復至誠心に住すべし」云云。但自今以後に於ては敎示する所なり。本とより至誠心に住する人、他人の爲に請用を受くる時、有所得の心を起すべからず。所以何んとなれば至誠心に住して念佛を修し、往生を志す人は、此れは是れ大乘の行者也。大乘とは自行化他を以て菩薩大乘の行と爲す。此の念佛を以て自他往生の功德に廻向すべし。是れ則ち第三の廻向發願心の義也。故に「普爲師僧父母同得往生」と云ひ、又「願共諸衆生」と云ふ。況や又大乘の意は初心の行より、化功、歸己と習ふ也。縱ひ請用の念佛なりと雖も、自他共に往生の因と成ぬべき也。若し然らずんば小乘の偏執自調自度の失を招かんか。」

問「若しは請用の時、若しは自行の時、美音を調へ、好聲を誘へ、高下を理ひ、長短を量り音曲を出して詠歌の如くに念佛を稱へ、舞遊の如くに高聲に唱ふるは是れ豈に虛假に非ずや。此時の念佛は至誠心を具すと爲んや。爲當如何。」答「至誠心に住するの人ならば此の如きの念佛も終に以て往生の因と成るべし。中間の心には暫く雜亂を出すと雖も、前後の心、至誠心に住するが故に。況や又大乘の行者慈悲利生の心に住して、聞法の人の往

生の爲にする。是の如く信有らん者、自他共に往生の因と成る。故に若しは勤進往生の心に住し、若しは聞法結緣の心に住せば、縱ひ詠歌の如く今[illegible]を[illegible]せんも、亦神妙ならんか。」

一、深心の事　信心を以て疑心を治す

此四句有り。

一向疑心　決定して往生を得ざるの人也。若しは又一分往生有らんか。

一向信心　決定往生の人也。

信疑俱心　不定往生の人也。若しは往生を得んか、若しは往生を得ざらんか。

非疑非信　一向往生の人に非ず。

又四句有り。

始疑終信　信入の人に就て也。

始信終疑　往生を得るの人也

始終俱信　往生を得ざるの人也。念佛退轉の人也。

始終俱疑　決定往生の人也。淨土宗に歎ふる所の念佛者也。

決定して往生の人に非ず。

問「信心具足の人、緣に觸れ境に對する時、若しは愛欲の心を起し、若しは罪業を造らば定んで以て吾が身の犯罪に依りて、還りて吾身を疑はん。其時深心有りと爲んや、復深心無しと爲んや如何。」答「師の云はく深心具足の人は吾が罪業に於て全く之を疑ふべからず。佛弟子は本より罪業を恐れ惡緣を去るべし。是の如く之を習ふと雖も煩惱所具の凡

【已所作の善】已につくりたる自他一切の善根。

夫なれば念ひの如くならず。此は是れ吾が身の科なり。此は是れ凡夫の習ひ、只是れ數々妄念を起し、數々罪業を犯す耳。然りと雖も本より信心を具するの人は中間に暫く妄念を起すと雖も、還つて復信心に住す。前後の信心に依りて、中間に暫く發す妄念は信心を失ふべからざる也。況や復、彌陀本願の他力は是の如きの衆生を引導したまふ。之に依りて自他の犯罪に於て、自他の念佛を疑ふべからざる也。但し或は聖道門の意に依り、或は淨土門の意に依りて念佛せん人々は、尤も罪を怖るべく、尤も惡を厭ふべし。之を怖れ、之を厭ふ上に念佛を修し、往生を欣ふの間、諸惡の心、諸罪の念ひ數々發起し、數々發動することは本より煩惱を具するの凡夫なれば、力及ばざる所なり。唯、佛の願力を信じて聞く本願往生の念佛を憑むべき也。惡煩惱の一法に於ては之を疑ふと雖ども、念佛の一法に於ては更に以て之を疑ふべからず。是を念佛往生と云ふ也」一

一、廻向發願心の事　廻向發願心を以て不廻向心を治する也。

廻向には行を兼ね
發願心は唯願なり

已所作の善を以て往生を得んと願ずる也。之を以て廻向と爲す也。未だ曾て善を作さず、唯心に往生を得んと願ず。之を以て發願と爲す也。而るに今、善導の御意は已所作の正助二行を以て決定往生の心を發す。之を以て名けて廻向發願心と爲す也。故に善導、釋して云はく「願行既に成じて若し生ぜずと云はゞ、是の處り有ること無し」文

故に上人云はく「淨土宗の意尊、念佛者を教化して初めて當宗に入らしめて、南無阿彌陀佛と稱する時三心を具す。其の心中に廻向發願心を納むる也。」上に依りて善導釋して云はく「南無とは歸命、亦是れ發願廻向の義」文

抑も此の宗の一大事は此三心也。弟子、上人在生の時、能く能く此の御教訓を蒙る。然師の云はく「三心之中、一心を具すれば必ず餘の二心を具する也。但し經と疏との文、一者、二者、三者と各別に置くは行者をして往生の心に於て、三種の心を發す事を知らしむる爲也。いはゆる念佛の行者、虛假心を發す者の爲には至誠心を用ゐて、其心を治せよと、其れに之を教ふる時、一には至誠心と置ける也。若し念佛の行者、疑惑の心を發す者の爲には深心を用ひて其心を治せよと其れに之を教ふるとき、二には深心と置ける也。若し念佛の行者、唯發願を以て往生を願ふ者の爲には、已所作の善を以て往生を願せしむ。其れに之を教ふる時、三には廻向發願心と置ける也。此の意を以て之を按ずるに、之に就て二種の三心有り。

一には横の三心　一心に三心を具する者、是れ横の三心也。

二には竪の三心　三心各別に一、二、三、の言を置く。是れ竪の三心也。

四句有り。

有願無行　宗の意に非ず。

無願有行　宗の意に非ず。

【四】五念門を明す。

有願有行　此れ淨土宗の意也。

無願無行　宗の意に非ず、一世の人也。

又四句有り。

西方廻願　此れ淨土宗の本意、念佛行者の廻願也。

餘事廻願　是は宗意に非ず、若しは壽命長遠を願ひ、若しは福を願ふ也。人々の所望各別也。

西方餘事倶廻願　是は半は宗意、半は宗意に非ず。又は往生を得んと願ひ、又は所望を得んと願ふ。

非西方廻願非餘事廻願　是れ世俗の輩也。

【四】善導の御意、淨土宗に入りて正助二行を修し、三心を具足するの人、必ず五念門を修すべき事。

『禮讃』に云はく、『觀經』に具に説くが如し。唯だ知るべし。又天親の『淨土論』に云ふが如きは、若し彼の國に生ぜんと願ずること有らん者は、勸めて五念門を修せしむ。五門若し具すれば定んで、往生することを得。　釋の意、前に依て已に三心を明し畢んぬ。今又、前に依つて五念門を明すことは、經の三心と論の五念門とを釋し合せ、經論、此の如く釋し合すとの意也。

『往生論』に曰はく、「若し善男子、善女人、五念門を修して行成就すれば、畢竟して安樂國に生ずることを得。」文

一、五念門とは

【五】四修を明す

一には禮拜門　身業
阿彌陀佛を禮拜したてまつる。
二には讃歎門　口業
阿彌陀佛を讃歎したてまつる。
三には觀察門　意業
淨土の依正二報を觀じたてまつる。
四には作願門　意業
晝夜一切の時、一切の處、極樂に生ぜんと願ず。
五には廻向門　意業
所作の善を以て淨土に廻向する也。

【五】淨土宗の意、三心五念の法を行ずるに必ず四修の法を具すべき事。
『禮讃』に云はく、「又勸めて四修の法を行ぜしめ、用ゐて、三心五念の行を策して、速に往生を得しむ。」文

四修とは
一には恭敬修　亦は恩重修と名く。憍慢の心を對治す。
『禮讃』に云はく、「彼の佛及び彼の一切の聖衆等を恭敬し禮拜す。」文
『西方要決』には恭敬修に五有り

一には有縁の聖人を敬ふ。行住坐臥に西方に背かず。
二には有縁の像經を敬ふ。一佛二菩薩の像を造り、尊經を鈔寫して恆に淨室に置く。
三には有縁の知識を敬ふ。淨土の教を宣ぶる人。
四には有縁の同伴を敬ふ。同修業の者。
五には住持の三寶を敬ふ。今の淺識の爲に大因縁と作る。

二には無餘修　雜起の心を對治す、是れ疑慮不定の心也。

『禮讃』に云はく「專ら彼の佛名を稱し、專念、專想、專禮、專讃して、餘業を雜へず。」文
『西方要決』に云はく「專ら極樂を求めて、彌陀を禮念す。但し諸餘の業行をば雜起せしめず。」文

三には無間修　懶惰懈怠の心を對治す。是れ勇猛精進の心也。

『禮讃』に云はく「相續して恭敬し、禮拜し、稱名し、讃歎し、憶念し、觀察し、廻向し、發願し、心々相續して餘業を以て來し間へず。」文
『西方要決』に云はく「常に念佛して、往生の心を作せ。一切の時に於て、心恆に想巧すべし。所以に精勤して倦まず、當に佛恩を念じて、報の盡るを期と爲して、心に恆に計念すべし。」文

四には長時修　退轉流動の心を對治す。

『禮讃』に云はく「畢命を期と爲して、誓ひて中止せざるは、即ち是れ長時修なり。」文

【六】三種行儀を明す。

「西方要決」に云はく、「初發心より菩提まで恆に淨因を作して終に退轉すること無し。」文

私に云はく、「修法修行に准例して、此の文意を得るに、誓ひて中止せざれとは不休息に三寶を勤修し奉り、其寶前に於て、香華を莊備し、大誓願を發して、往生の業を營むべき也。謂く、畢命を期と爲して此行に於ては永く以て退轉すべからず。若し此の旨に違せば永く以て三寶の冥助を蒙らず。必ず地獄の業と爲らんと」云々。

【六】三種行儀の事

一、尋常行儀

處に於ては淨不淨を簡ばず、身に於ては淨不淨を簡ばず、衣裳に於ては淨不淨を簡ばず、威儀に於ては行住坐臥を簡ばず、食に於ては淨不淨を簡ばず、時節に於ては久近を簡ばず。

一、別時行儀

處に於ては清淨道場、身に於ては沐浴清淨、衣裳に於ては清淨衣服、威儀に於ては常立常坐、食に於ては一食長齋、酒肉五辛の不淨を食ふべからず。時節に於ては若しは一日、若しは七日、十日、九十日。

一、臨終行儀

別時行儀を用ふべし。

三心 南無阿彌陀佛　五念 南無阿彌陀佛　四修 南無阿彌陀佛　三種行儀 南無阿彌陀佛

至誠心 南無阿彌陀佛　禮拜 南無阿彌陀佛　恭敬修 南無阿彌陀佛　尋常行儀 南無阿彌陀佛

【左手印】法然上人の左手の印。授の相なり。
【右手印】辨阿上人の右手の印。受の相なり。

深心　南無阿彌陀佛　讃歎　南無阿彌陀佛　長時修　南無阿彌陀佛　別時行儀　南無阿彌陀佛
廻向發願心　南無阿彌陀佛　作願　南無阿彌陀佛　無餘修　南無阿彌陀佛　臨終行儀　南無阿彌陀佛
觀察　南無阿彌陀佛　無間修　南無阿彌陀佛
廻向　南無阿彌陀佛

釋して曰はく「我が法然上人の言はく、善導の御釋を拜見するに、源空が目には三心も五念も四修も、皆倶に南無阿彌陀佛と見ゆる也と。」
于時安貞二年十一月二十八日申時
自筆を以て書す無からん時の形見にも　在御判

左手印
右手印
授手印　源空
辨阿
然阿

嘉禎第三歳卯月十日巳時　沙門辨阿　在御判

念佛往生淨土宗血脈相傳手次の事

日本

尊成天皇の御時、法然上人、善導の御義を伝へ、出して世間に流布せしむるの時、後白河の法皇御臨終の時、善知識を召御被れ、善知識の身を以て早く、太上法皇に一向専修の念仏を教授し奉り、三月十三日を以て崩御したまふ。件の時刻を以て終に以て往生を遂げ御畢んぬ。其後第十三年の御遠忌に当り、蓮華王院の内に於て、六時礼讃『浄土三部経』を勤修し、御追善に之を遂げたまふ。其れより後、華洛の諸人皆な浄土宗を以て専修を修す。爰に法然上人、浄土宗の義を以て弁阿に授く。今又弁阿、相承之義を私に勘文『徹選択集』を以て沙門、然阿に譲り与へ畢んぬ。之を聞かん人、慥に之を信じ、之を行じて往生を遂ぐべし。仍て後証を為するの為、手本を以てす。

于時嘉禎三年〈丁酉〉八月一日

法然上人口決沙門弁阿　在判

【向阿】名は證賢、向阿は號なり。安藝守武田時綱の子。甲府に生る。建久三年加冠して伊豆、甲斐駿河等の守たり。後三井の園城寺に出家し、京都の禮阿に淨土宗をうけ、淸淨華院に住す。和歌を好み文をよくす。貞和元年六月寂す。歸命本願鈔、西要鈔、父子相迎の三著は世に三部假名鈔として尊重せられ、特に文辭佳麗なるを以て名あり。

【一】法然上人の教を探ねて眞如堂に通夜す。

【六八超世の本願】彌陀の四十八願、特に世に超過せる大本願なるが故に超世の本願と云ふ。

【四重八重】四重は比丘の四波羅夷卽、殺生、偸盜、淫、妄語の四、八重は比丘尼の八波羅夷、比丘の四波羅

歸命本願鈔 上

向阿

【一】夫八萬隨情の教門はみな苦海をわたる船筏なりといへども、六八超世の本願のみひとりよく常沒をすくふ船師たり。是すなはち本師彌陀五劫思惟の誓約、永世の本誓、九品往生の方便なるものをや。しかあれば、四重八重のともがらことごとく、報佛化佛の來迎にあづかり、一稱一念のたぐひ、おなじく無漏無生の寶國にいたる。このゆゑに光明大師震旦にあらはれて、このおもむきをすゝめ、黒谷の上人我朝にいでゝ、このむねをひろめ給ひしより、このかた、教をうかゞひ行をもとむるもの四遠にみち、穢をいとひ淨をねがふやから一天にあまねくして、世のならはし人のことわざになりにしかば、大かたことはりまでは我も人もみゝなれたる事ぞかし。されども安心起行のありさまなんどこまやかにたづねうかがはんとすれば、諸方の智者たちそのをしへまち〳〵にして、往生の徑路ひとかたにおもひさだめがたし。このなかに、いづれもまさしき法然上人のすゝめ給ひけんおもむきならんと、おぼつかなけれども、面々に「われこそ黒谷の遺流なれ」と稱し、「これなん吉水の餘流なり」と號すれば、あまねくとぶらふにしたがひて、いとゞをろかなる心まよひぬべし。さのみよも上人のをしへのまち〳〵なりしにはあらじ。いかにも下愚の今案のみだりがは

寺に、摩[illegible]、八[illegible]、他[illegible]舉ふ[illegible]に頻[illegible]生[illegible]な[illegible]。

【光明大師】唐の善導大師。

【黒谷の上人】法然上人、法然上人は初め叡山黒谷に住せるを以て此名あり。

【同法】同教同行の人。

【各留半坐乘花葉】唐の法照の五會法事讚の文。「各半坐を留めて花葉に乘じ、我が閻浮同行の人を待つ。」

【待我閻浮同行人】同上五會法事讚の文。

【利物偏增】慈恩の西方要決の文。「末法萬年餘經悉く滅するに彌陀の一教物を利して偏へに增す。」

しきならんとをしはめられたり。

されはいかゞして相値の臧否をもあきらめ、法門の是非をもたゞさましなんど、さまざまおもひわづらひたるにも、あはれ心あらん人もがた、なげきあはせまほしきに、まことやそのいにしへ北白河のあたりにすみ侍りしころ、わりなくおもひいれたる同法のありしぞかし。對面などもかきたえておもひわすれにける。ゆくゑいかゞなりぬらんとおぼつかなくてたづねきゝ侍に、ほのかにそのすみかなんめりとおぼゆる所はあれども、見しにもあらずあれて庭のけしきもあとかすかなり。ちかきあたりにたちよりて、もしさる人やとたづぬれば「一その僧ははやこぞのこのごろにて侍しやらん、めでたく往生し給にき。そのゝちはけしかるあまのひとり出いるがはふしもたがはで侍にや」とかたる。さだめなき世はさる事なれども今さらあはれにおぼえて、「一佛淨土もいとゞいそがるゝ心ちすれば、むかしのなごりは花のうへにてもわすれじ物を、各留半坐乘花葉わがためにもぞのこすらん。待我閻浮同行人、その人かずにもれじかしとたのもしくおぼえて、臨終のありさまなどくはしくかたらふ程に、おぼえずして時うつりにけり、とみれば、日もやう／＼入なんとす。立かへらんみちもはるかなれば、いかゞはせましとおもひわづらふに、さてもけふは彌陀感應の日なり。たま／＼利物偏增のみぎりにちかし。事のついでなるは心やましけれどもをろかならぬ心ざしは佛しり給ひなんと思ひて、その夜は眞如堂にまうでゝ通夜し侍りぬ。

【眞如堂】京都吉田山の東、神樂岡に在り。

【二】修行僧と老僧との問答をきく。初に老僧時教相應の淨土門をとく。

【二】夜さしふけ、人うちしづまる程になりにしかば、青嵐のきをはらふひゞき、をのづから念佛衆生のこゑをそへ、晴月いらかをてらすかげ、そらに攝取不捨のひかりをます。心すごさもかぎりなきに、みちのくたびれとりそへて、しづかに念佛するとおもふ程に、さながらねぶりにけり。されどもたびねのとこ、うちとげがたく、おいの枕おどろきやすければ、程なくねざめてきけば、いつの程よりかまうでにけむ、僧二人なつかしく、ゐよりてうちかたらふをとすなり。一人はしきりにうちしはぶきたるこゑいとおいたり。をのれからもよにたうとく、思いれたる所さぞふかゝらむと見えたり。ちかくこのあたりよりまうでたる人なるべし。いまひとりは初發心のものなんめり。いづくよりの修行者にかあらむとおぼゆ。ねぶりにけるまに何事をかかたりけむとゆかしくきゝゐたれば、修行者のいはく、「本師一代の諸教は、機根の萬差に逗ずれども、末法萬年の利益は、念佛の一門にかぎれりといふ事、みなうけたまはりおよぶ所なり。しかはあれどもこの念佛の一行をもて決定往生すべきことはり、いかなるゆへとしりわかず。もとより一文不知の身なるうへ、はかばかしく知識のをしへをもうけたてまつらねば、つく／＼たちいる宿に侍り、今宵までもをよばぬうゐ／＼しさなれば、いづくをいかにと問申すべしともおぼえず。たゞをろかなる心をくみて、きゝやすきやうにをしへ給なんや」といへば、

老僧のいはく、「さやうの事は智者のわざなり、さらに愚老がわきまふべき所にあらず。申さむにつけて佛の知見もはゞかりあり。人のあざけりいかゞあらん。そのうへをのづか

【ほい】本意。

【調達】デーヴダッタ（Devadatta）提婆達多とも書く釋尊の從弟。斛飯王の子。初め歸佛して釋尊の教團に入りしが、後に反逆して阿闍世王と結び、釋尊を害せんとし、惡逆の大罪を犯せり。

らきゝをきたりし事も、ちかごろはいたくおいにほれてみなわすれぬらん。されどもたづね給ふ所のさりがたければ、心にのこりたらん事のかたはしをいさゝかきこえ侍らむ。いにしへ智者たちの申されしは、念佛して極樂に往生すといふ事、さらに別の子細なし。いかなる惡人なれどもたすけ給へと思て南無阿彌陀佛ととなふれば、佛の本願に乘じて必ずうまるゝ也。その願といふは四十八願の中の第十八の願に、「設我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂し我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺を取らじ」と説たまへるなり。この願をくはしく心うるに、機につきて心行あり、佛につきて誓願あるべし。そのなかに十方衆生といふは、まづ往生の機類をさだむ。善人も惡人もともにおさまるべけれども、大悲のほいをはかるに、もとも惡人をさきとすべし。至心信樂欲生我國といふは、往生の安心をあかす。くはしくいはゞ三心あるべし。要をとればたすけ給へともおもふ心にたりぬ。乃至十念といふは往生の起行をとく。彌陀の名號をとなへんこと、十こゑ一こゑまでもすてじとなり。若不生者不取正覺といふは誓願をたつ。その念佛せんもの生るまじくばわれ正覺をとらじといふなり。おほよそいづれの教にも機と心と行との三をあきらむるが諸宗の大事にては侍るなるに、かの聖道門のなかに五逆の調達をさして、三菩提の記莂をさづけしがごときは、まづは機をきらはぬ法なんめりとたのもしけれども、僧那を始心にむすび妙觀を十乘にこらさしむるにいたりては、發心修行、さらに下根のをよぶ所にあらざるがゆへに、つゐには機をえらぶ教になりぬ。されば無始生

【聖道門のなか】法華經提婆品をさす。

【三菩提の記莂】正覺を成就すべき豫言。三菩提は阿耨多羅三藐三菩提（Anuttarasamyaksambodhi）の略。無上正眞道、無上正等正覺等と譯す。佛のさとりをさす。記莂は又懸記とも云ひ、佛の豫言なり。

【僧那】梵語、弘誓と譯す。

死よりこのかた、さすが佛經にもこそあひつらめども、いまゝでなを流轉の凡夫たる事は、機根はつたなくして心行のをよびがたきによるなり。しかれば自力の出離はつや／＼思たえたることにて侍るに、いまこの淨土の教門、彌陀の本願をもて、我らが分にあてゝみれば、すでに極惡をすて給はぬうへは、もとよりつくろはずしてその機なり。又機のつたなきにつけてはをのづからたすけ給へとおもふ心もをこりぬべし。心にたすけ給へとだにもおもへば、はげまざるに申さるゝ念佛なり。はかなきこの世さまにつけてだにも、なげきある時のまぎらはしには、南無阿彌陀佛とこそいはるめれば、まして後の身をいかにとおもはん人は、わすれてもとなへつべくこそ侍れ。さればこの機と心と行とにてぞ、我らが生死をいでん事は、おげにたやすくなり侍りぬる。さるには又さしもたやすかるべくもなき往生を、これ程のぶんにてはいかゞとぞ、かへりてうたがはれぬべけれども、もし生れずば正覺をとらじとちかひ給ひけるうへは、ゆめ／＼卑下すべくもなかりけり。をのが力にて生るればこそ身の程をもかへりみめ。佛の願力によるべからんにはいかさまにてこそかなはめなどはおもふまじき事ぞかし。されば善導大師の「若し我成佛せんに十方の衆生我國に生ぜんと願じて我名號を稱し下十聲に至るまで我願力に乘じて、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と釋し給ひて、乘我願力のことばをそへられたる事は、これ程につたなき機のわづかなる心行は、さらに物のようにたつべくもなきよは／＼しさなれども、さしもねんごろにむまれしめんとおぼしめす佛の御心ざしの力にとりたてられて、その本願に乘ずるが

【おほけなき】身のほどをかへりみぬ事。

【三】十方衆生の句に就て、弥陀の御願は十悪五逆の輩をも捨てたまはぬかとの問答なり。

【墨衣】僧形のこと。

【自俗】在家俗人のこと。

ゆへに往生するなりといふ事をあらはさんとなるべし。しかるをよのつねの人のおもはくは、かひなくたゞ言のかずをし、わが行の功にて、むまれんずるやうに心得て、ひたすら我身のちからとのみはげむこそ、おほけなき事にて侍れ。さる程はすゞろに心得まふ〻くにおぼえ往生もうたがはしげなり。これしかしながら他力のいはれをおもひわかぬゆへ也。

【三】又仏行者とひていはく、「弥陀のたのめ十方衆生といふは悪人をもて本とすべしとのたまはせつれば、その義にまうしものはおもきまことなるめりときめやかにおぼしけれども、たちかへりてわが身のありさまをおもひとくには、なをうたがはしのこゝろざしにおもはる。それゆへには、かやうにすがたは墨衣なりといへどもこゝろは自俗よりもにごれり。あやまりて出家のかたちにかりて後世証惑のはかりごととし、沙門の名をけがすみて名聞利養のなかだちとせり。これ無力のいたる時なり、助諸よりもこゝみあらぬかし。たゞ〳〵うちしすまる時は、又妄念にてこゝろにきはれて、念仏はたゞ口ばかりなり。あまりなるには人はよもこれ程もあらじ。わが身ばかりのくせにこそとまでおぼゆるにも、かゝらん身のありさまやはすこしひきかへてこそ、十方衆生のうちにもいらめとおぼゆるは、ひがごとに侍るをや。」といへば、

老僧のいはく「あな事あたらし、ひたすらにごりにそみたるよりも、中々なきうかびでは、つみおほき事ぞとはしり給はずや。されば在家の十悪は下品上生にうまるれども、出家の

【たとひ】貴ひ也。

彼土は下品中生とこそとかれたれ。すべてこのごろのありさまは道もなしなべてにごり、人もおなじくつたなければ、よきもあしきもたゞいふといはぬとにてこそあれ。こゝろのうちをくらべたらは、いく程のけぢめ侍らじかし。たとへばそれはともかくもあれ、まづこの阿彌陀佛を諸佛にこえてたとひたてまつる事は、何ゆへとかしりたまふ。さしもの十悪五逆の機をわづかに一念十念の功にてたすけ給ふ誓のならびなきかたよりこそ、諸佛のほまれをもあげて一代の教にもほめられ給ふ事にて侍れ。されはその本願のをこりは、三世の諸佛にもすてられ、十方の淨土にも入られぬものゝ、惡をこのみつみをつくる事はあらき劔よりもはげしく、とき惡よりもしげくして、さだめて惡道におちなんとするをあはれまんがために、こゝろを五劫の思惟につくし、身を兆載の修行にくだきてたて給へるちかひなれば、誓へる願ぞかし。それをばたゞ身のうへとおもはるゝ。しかしながら我らがためにこそ侍るめれ。かゝるいたづらものゝためなればとて諸佛はうらめしくすて給にしを、われただにもとてかたじけなく、彌陀ひとりあはれみ給ふゆへにこそ、五逆謗法の罪を從つ。心平無上道に至らん。此の願成就せずんば、誓ひて正覺をとらじ、とは誓ひ給しなり。されば本願にはわく所なく、總じて十方衆生とこそときたれ、いつかは惡人をのみといはれたるや。そのうへはたゞまづ善人は善人ながら、惡人は惡人ながら、ありのまゝにておさまるべしとこそ心えられたれ。つたなかりし心のもちやう、わろかりし身のふるまひを、あらためてのちたのむべくば、善人をのみすくふ本願と申すべき。さではなにをもてか世にこえたるう

かひのしるしとせん。たゞしゑらぶところはわが國にうまれんと思て、名號をとなへんものをと侍れば、往生のねがはしからざらんこゝろと、念佛におもむかざらん心とをぞ、いかほどもあらためずしては叶まじかんめる。このゆへに法照禪師は「彼佛因中に弘誓を立つ。名を聞いて我を念ぜば總て來迎す。貧窮と富貴とを簡ばず、智と高才とを簡ばず、多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、但心を迴して多く念佛せしめば能く瓦礫をして變じて金と成らしむ。」と釋して、持戒も破戒も、とてもかくても機のよしあしはさらにもいはずたゞ往生のこゝろざしにて南無阿彌陀佛と申さんのみ、本願にはかなふべしといへり。抑三世の諸佛いづれか多聞淨戒をほめ、破戒罪根をすて給はざるや。われら無始よりこのかた、六道の貧里にまよひて、福智の珍財をうしなへる事は、諸佛こそりて惡をやめ、つみをとゞめよとのみいましめ給ひしをきてにかなはざりしによりて、かなしく慈悲の父母にすてられて、あぢきなく流轉のみなし子となりにしゆへなり。しかるを彌陀の本願にも又多聞淨戒をえらびとり、破戒罪根をえらびすてたまふ事ならましかばいかゞはせん。かゝるつたなき身にはおもひたえたる往生にてぞあるべきに、いまこの釋の中に「多聞と持淨戒とを簡ばず破戒と罪根の深きとを簡ばず」とて、たゞおなじ詞にいひすてられたるこそ、ことにみゝにたちてたうとく、本願の人によらぬほどもかたじけなくおぼえて、よろこびのなみだもふかくにこぼれにけれ。又法然上人の鍛冶往生、番匠往生とのたまひけんも、たゞもとの身がらをあらためずとも念佛せば往生すべしといふ心なる

【人能念佛】法事讚の文。「人能く佛を念ずれば佛還りて念じたまふ。專ら心に佛を想へば、佛人を知りたまふ。一切心を回して安樂に向へば、即ち眞金功德の身を見たてまつる」

【籠々常在行人前】法事讚の文。「淨土の莊嚴諸の聖衆、籠々として常に行人の前に在り」

【終時從佛坐金蓮】同上。「行者見已りて心歡喜し、終る時佛に從ひて金蓮に坐す。」

【永觀】京都の人源國經の子、出家して禪林寺深觀の弟子となり、三論華嚴を學び、後淨土教に歸す。天永二年十一月寂。壽七十九。著往生十因一卷等あり。

「我身もし」往生十因の文なり。

べし。かくてぞげに本願もひしとわが物におぼえて、彌陀も諸佛にこえてたのもしかんめるを、人ごとに女はあまにもなり、おとこは法師にもなりて在家のちりにもけがされず、妄念のにごりをもすましてぞ、佛の御こゝろにはかなはんずるとおもへるほどに、いまのわが身は本願のよそなる物になりぬ。かくてはあたら念佛もいたづら物なる心地にて、佛もうと〳〵とおぼゆれば、人能念佛佛還念のしたしきおもひもなく、をのれとおざかるこゝろのへだてに、籠々常在行人前のちかきたのみもなし。かゝる念佛にてはつみもきえがたく、ほとけのむかへもいかゞあらん。されば終時從佛坐金蓮のほいもながくたがひぬべし。あさましかるべき事ぞかし。さしも佛のかたよりは、いかさまならんをもすてじとおぼしめされたるを、こなたよりかゝるつみある身なればと、なまざかしき心のおにこそ中々身のあだにては侍れ。たゞひたすらにたのまましかば、よろづのとがはゆるし給なんかし。おもはずに心をきばみたるは、この世さまにもにくき事なり。いたくわろからんにつけてこそ、いとゞたすけ給へとは思ふべけれ。されば永觀も、「我身もし持戒精進ならば、なんぞかならずしも彌陀をのみたのまむ。破戒懈怠の身なればこそ十念往生の願をたのむなり」との給へり。そのほかの人はまして、さこそたのみ侍るべけれ。たゞしかゝればとて本願をたのまん人はとがをあらためず、つみをおそれず、といふにはあらず。罪人は往生すれども罪業は往生のさはりなり。身をばはなげすべからず、つみをばおそるべし。このいはれをよく〳〵心え給はせよ。たとへば人のおやのとがある子をあはれむ、をかすところを、い

【わろ〱】惡女をいふ。

【五濁】五つのけがらはしきこと。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁

まにあざるにあらず。いましむれども又すつる事なきがごとし。彌陀の本願罪人をすくふ、つみをにくまざるにはあらず。にくみながらすて給はざるこそわりなき慈悲にては侍るめれ。されはそのおもむきを心えてふみきはん人ぞ、わろ〱も佛の御心にはたがひ侍るべき。法然上人の御をしへには、十惡五逆も往生すと信じて、すこしのつみをもをかさじとおもへ、重罪なをうまる、いはんや小罪をやと、の給へり。十惡五逆も往生すと信ぜよといふはにくみながらすて給はぬ御心をしるなり。すこしのつみをもをかさじと思へといふは、すてねどもにくみ給事をつゝしまんためなり。にくみながらすてたまはずとしりぬれば、重罪なりともうまれん事うたがひなし。すてねどもにくみ給ぞかしとしりて、つみをおそるゝ時は、いはんや小罪をやと、いよ〱たのもしげにもにくみてすて給はぬ超世の悲願かひなかるべし。我らなにをかたのみとせん。すてたまはねばとてつゝしまずばあまりにあやにくなるこゝろなり。かゝらんなが〱しさをぞ、佛もかへりてうと見給ふべき。されはとて、つみをこと〴〵くやめてこそといはんも、又ふせいすぎたり。なにとしても五濁の凡夫のくせなれば、四儀の作罪とゞまるべきにあらず。たとひわづかにきよき心をおこせども水にゑがくごとし、貪瞋のなみ、みなぎりきたりてしばらくもやむ事なし。すでに煩惱のみなもとをたゝず、いかでか罪業のながれをやめん。たゞわろしとしりあさましとおもふ心ばせまでを中にてこそあれ。ねんじかねてあやまりたらんおりはそれぞかし。たすけ給へ南無阿彌陀佛とおもふべかんめるも、かゝるを隨犯隨懺の念佛とはいふなり。

【誓ひて】法事讃の文。

罪垢こと〴〵くきえて身つねに清淨ならん。臨終の時罪人惡人の名をあらためて、來迎のほとけ善男善女とほめ給ふべし。さてもな、これほどに福薄因疎の機、識劣行淺の身としてすみやかにあとを娑婆にとをざかり、心を淨域にすましめん事はひたすら他力本願の御恩ぞかし。多生曠劫にも、いかでか報じたてまつらむ「誓ひて彌陀の安養界に到り、還りて穢國に來り人天を度せん。願はくば我慈悲に際限なく、長時長劫に慈恩を報せん。」さらではいかゞ』とうちくどかれたるけしき、いかにつれなからん心も、げにとはさすがおもはれぬべうこそ。

歸命本願鈔 中

向阿

【一】上卷の問答には機類を決し、此卷には心と行とを沙汰す。初めに三心のやうを示す

【一】往生を志す人問ていはく、本願に「至心に信樂して我が國に生ぜんと欲す」といふは、ひろくいへば三心なり。略してとればたすけ給へる一念にたりぬ、との給へるその三心とはいかなる心にて候ぞ。など三心なくてたすけ給へとおもふ一念にはたるべからん。くはしくかたらひ給なんや」といへば、

答ていはく「よくとひ給たり。すゝみても申たかりつるに、これなん往生の大事にて侍べし。そのゆへは經には三心をぐするもの、かならずかの國にうまるとあり、釋には、もし一心もかけぬればうまるゝ事をえずといひて、そのおもむきいるがせなるまじきごとくみえたり。されば念佛するものゝ中に往生をとげぬが侍るは、一心もかけにけるにこそ。三をぐしたらんものゝうまれぬはあるまじき事なり。その三心といふは一には至誠心、二には深信、三には廻向發願心。一には至誠心といふは、眞實の心と釋して虚假の心をいましめたり。念佛せんにまことしき心ありて、いつはる心なかれとなり。たとへば人の心にはさまでもおもはぬ事なれども、ことばにはおもふよしにいふをまことなきいつはりとは申すやうに、念佛せん人の心も、このなずらへにしられぬべし。心のうちには往生の事までも思

ひいれずながら、なべてこのごろの世のしきなるを、いかゞうたてうとおもひて申人も侍るらむ。もしは父母のすてがたきまゝには、世わたるはしにとりなしてとなふるものもありぬべし。これらはみな、心は名利のかたにおもむきて、行は往生を心ざすよしなり。かゝるは虚假にいつはれる念佛なるべし。たゞ心に往生がしたければくちに南無阿彌陀佛と申さるゝこそ眞實にまことなる念佛にては侍れ。たとへば何事もかざりたる世のなかに人のゆのほしき水のほしきといふのみぞいつはらぬ事にて侍らむ。いさゝかにてもほしき心のなきほどは、こはれぬ事にてあれば、そのほしき心にこきうすきはありとも、こふことばはみなまことなるべし。後世にむけても、かくこそありたけれ。すこしにても往生がげにしたくおぼえて南無阿彌陀佛ととなへんは、そのねがふ心にふかきあさきはありとも、申さん念佛はみなまことなるべし。こゝろざしふかくば上品に生れ、あさくば下品にこそくだるともみな往生の時のうちには入ぬる也。その下品にうまるゝ類のまことは、よにやすき事なるべし。ゆめ〳〵往生をかたくはおもふべからず。されども人の心すなほならぬより、やすき念佛にくせもつきぬることそ返々ほいなくおぼゆれ。人ごとにつくろはぬ心にて、たゞありに申す念佛ならばみな往生はしてんかし。凡夫のならひなれば、この世さまの事こそあらめ、往生の方ばかりはねんじてさな侍りそかし。

二に深信といふは、ふかく信する心なりと釋して、往生をうたがひそといましむる也。これにつきて二の信あり。一には、自信は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつ

【うら〳〵】遅々の意。

【極佛】至極の佛の位。

【へる心】謙遜の心。

ねに沒しつねに流轉して、出離の緣あることなしと信じ、二にはかの阿彌陀佛、四十八願をもて、衆生を攝取したまへば、うたがひなく、うらおもひなく、かの願力に乘じて、さだめて往生することをえんと信ぜよといへり。いまこの二の信のおもむきは、苦海常沒の身にして出離の緣もなき我らぞかしと、ひたすら自力のかけたる事をしらせて、されども彌陀の本願によりてうたがひなく往生せんことのうれしさよと、うら〳〵と他力に思ひつかせむとなり。たとへば世のなかのならひも、さこそあれ。かなしくかずにもあらぬ身となりぬればこそ、わびてはすゞろに世もしたはしく人のなさけも、ことにうれしく、おぼゆるやうに、わが身の罪惡深重なることをよく〳〵おもひしりてこそ、かゝるをすてぬ本願ときかんも、いとゞかたじけなくはおぼえぬべけれ。かの聖道の修行におもむく人は、初心より極佛の思をなすゆへに、凡身のあなうらにとゞこほらず、佛祖のいたゞきをこえんとおもへり。されば自身即佛とおごりて他力本願をおとしめたり。この淨土の出離をもとむるものは、鈍根無智の機なるがゆへに、緣を本願にからずしては、運を叢方につくしがたし。これによりて身を出離の緣なきものとくだしはてゝ、たのみを超世の願にかくる心をおこさしむる也。たとへばよの中の人のありさまも、あやしきしばのいほりにすめども、あるじとなる時はをごるけしきあり。いみじき玉のうてなにまうでても、やつことなるおりはへる心あるがごとし。我人にしたがふと、我人をしたがふるとは、その心もち、かはることなり。聖道淨土の修行の用心のたがひめは、これになずらへてしりぬべ

【おほすがた】大體なり。

し。されば往生を期せん人は、かへすがへすおこのきなく、身のほどをしり給へとよ。さもげにわろき身ぞかしな。おもひと思ふ事は、のちの身のあた、なしとなすことはこの世のいとなみ、惡をなす時は寢食もなをわすれ、善をなす時は起居みなわづらはし。かゝるあさましきとがは身ながらもさすがにおぼゆらん。出離の縁なき身とはあらがふところなかるべし。三惡の火坑あしにまかせていりなんとす。永劫の苦果なにとかせんとするや。しかるに彌陀如來、かやうのつたなきものをたすけんために本願をおこし給ふによりて、わづかに一世の勤苦をもてながく九品の快樂をうけん事はかぎりなき悅ぞかし。あやうしな、この本願にあはざらましかば、かなしくからきめは見てまし物をと、うしろめたき心のあたの、身をはなれぬにつけても、本願のかたうどのことにたのもしくおぼえ侍ぞとよ。

三に迴向發願心といふは別の子細なし。たゞ申す念佛を極樂に迴向してまめやかに往生せんとねがふをいふ也。さて／＼かやうにくはしく申わけは中々事おほくしてかへりて詮なるべきところやかくれぬらん。たゞ三心のおほすがたは、まことしく本願信じて往生せばやと思へとにて侍なり。又詮するところ三心とは本願をたのむこゝろにて侍れば、佛たすけ給へと思ふ心だにもあれば、三心はおのづからその中におさまるべきなり。しかるゆへは罪おほき身のあさましければ、佛ならではいかでとおぼゆるにつけてこそたすけ給へともおもはるれば、深信もこれにこもれり。そのたすけ給へとおもふ心には露のいつはりもなきぞかし。それをこそ至誠心とも申せ、このたすけ給へと思ふは、やがて迴向發願心

【いし／＼の事】しな／＼の意なり。

にて侍也。あまりにつたなくなりて、心のいたりすくなき身には、極細いし／＼の事までも猶おもひわきがたかんめれば、それにつけてもわづかにたすけ給へとばかりこそおもひえつべき心にては侍れ。これ程の事は又たれかおもはでもあらんなればみな往生はしつべくこそあれ。三心のゆくゑもしらぬ、あやしのものわらはべなどの、往生する心づかひはみなこのつらにてこそ侍らめ。たゞし三心こそ／＼とならひしりたる人も、念佛うち申てゐたるつねの心づかひは、たゞたすけ給へとおもたるゝなんめり。

されば阿彌陀佛をたのみたてまつりて、往生をねがふほどの人は、智慧あるも智慧なきもおちつく所はみなひとしき心もち也。さてこそ念佛の功徳をうる事も、往生のほいをとぐる事も智者なればとてもまさらず、愚者なればとてもおとらず、かしこきもおろかなるもおなじく佛のむかへにあづかり、たかきもいやしきも、ともに花のうてなにはのぼるらめ。おほかた三心はかならずしもならひておこすべき物にあらず。たゞ往生だにもしたくなりぬれば、おのづからぐする事にて侍也。されば智者の往生せぬもあり、愚者の往生をするもあり。これみなしると、しらざるとにはよらず。ねがふと、ねがはざるとのゆへなり。さて／＼かやうにあまりたやすき事にて侍るほどに、人ごとにかへりてはまことしからず思て、さすが往生ほどの大事をとげむには、いかにも智慧もふかく、さとりもあらん心にて申さん念佛をぞ、佛もうけひき給べき。たゞたすけ給へとばかりはかろ／＼しと、事たらぬげに思あひたり。かやうのうたがひはげにもと、おぼゆるやうなれども、もとより彌陀

【たとひよく〳〵】法然上人の一枚起請文の文。

の不顧は愚智無智のものゝためなるにさやうに智慧才學あらん心をと、ちかはれては、人をわかぬ利益ありなんや。又聖道門の心は、智慧をきはめて生死をいで、淨土門の心の愚癡にかへりて往生をとぐるゆへに、自力をもて生死をいでんみちにぞゆゝしく、智慧才學あらん心も大切なるべき。他力にすがりて往生をとぐるかたにては中々ただたすけ給へとおもふが肝要にて侍也。されば法然上人は一念佛を信せん人は、たとひ一代の法をよくよく學すとも、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせずしてただ一向に念佛すべし」との給へり。たとへば人に身をまかせて世をわたらんものは、いかにぞへかしこく、心すくよかなりとも、人をたのむ程にては、われはがほならんはにくき心なるべし。ましてその身にとる所なからんはをのが徳うちおもひしりて、かゝるいたづらものに、いさゝかのなさけをものこさるゝはありがたき心ざしかなと、おもひいれて、心たがはぬあやまりしいでたる時も、うらゝかにうちむかひ、あさましとわびゐたるむざうさには、よくにくかりぬべきとがなれどもさながらつみゆるさるゝやうに、いまの世の衆生はたとひ智者學生なりとも、そのちからにて生死をいでん事のかなはずして、他力本願をたのむとならばかひなき才をさりともと、をのがちからありがほならんよりは中々ただひたすらたすけ給へとにてこそあるべけれ。いはんや智慧のとる所もなく、貪瞋癡のあさましさのみおほからん身には、いよ〳〵さりとてはとうちたのみたてまつらん心にぞ、佛もよろづはおもひゆるし給べき。さればかゝるをろかなる身にてはいかゞと思ふより佛にはとをざかり、わ

【のき】離るる也。

ろきにつけても、さりとてはたすけ給へと思ふより佛にはちかづきたてまつるなり。本願により、のきのさかひはこの心の、すゝみしりぞくあはひにて侍べし。すなはち善導大師の「南無とは即ち是歸命」との給へるも、南無といふは、たすけ給へといふことばと釋する也。そのことばのしたに三心あるべければ亦是發願迴向之義ともいふなるべし。「阿彌陀佛とは即ち是其行」とは助け給ふべき本願の名號なればなり。しかれば南無阿彌陀佛ととなふるは、たすけ給へ阿彌陀佛といふことばなり。いふことばに思ふ心はあらはるゝゆへに、南無阿彌陀佛ととなふることばに、たすけ給へ阿彌陀佛とおもふ心ありとしられたり。これによりて十こゑ佛をねんずれば、十願十行ありといへり。「此の義を以ての故に必ず往生を得」との給へば、たのもしかるべき事ぞかし。されば、としてもかくしても、つみふかき身のかこつかたには、たすけ給へとにてあるべき也。世にこえたる御慈悲なればとおもふのみこそ、又なくたのもしき事にては侍るめれ。さて〱このごろの學生たちの中に、かく罪人をすてぬ本願の心やすき事を申たてんとて罪をはゞかるまじきやうにいひなさるゝ人おほし。さればとて、つみをよき物といはんとにてはよも侍らじなれども、ひが〱しからん機はきゝあやまりぬべきぞかし。さればすゑ〲には、邪見なる義どももきこゆるにや、返々あさましき事也。すべて罪をかへりみぬものは身のわろき事をしらず、身のわろき事をわすれぬれば、又たすけ給へとおもふ心もなし。たすけ給へと思ふ心をすゝめんためにも、ことに罪業をおそるべき也。本願にほこりてつみを心やすくおもはん人は、は

じめは信心のあるににたりとも、のちにはたすけ給への心もなくなるべし。よく〱ようい あるべき事をや。又人のつねにうたがひあひたるやうは、たとへば智恵才學はいらずもあれ、おなじくたすけ給へと思ふとも、骨髓にとほりて、ふかゝらんこそ往生をもせめ、我らが心はさまでもなし。たゞかたのやうなる心ざしにては、かなふべしともおぼえず。又しらず。佛もさ程によは〱しからん心なりとも、すてじとまではちかはれずもやなんどおもひあへり。かやうのうたがひはひたすらにくからざれども、さりとては佛の本願はさるをもすてじとちかはれたらんには、そのうへをなをよもとはいかゞうたがうべき。凡夫のぶんざいの心はつよくとても何程の事かあらん。とても佛の御ちからにてうまるべくば、をのがちからはよはくとてもそれによるべからず。わが心ざしのつよからんよりは、佛の願力のつよからんこそたのもしかるべきに、わが心ざしのよはければとて佛もいかゞとあやぶむは、願力をいやしむになるぞかし。たゞかまへてをのがちからのよはからんにつけても、いとゞ佛の御ちからをたのむべき也。又いかによは〱しからん心ざしまでもすてらるまじき事はうたがひやは侍る。そのゆへは、すでに機をさだむる時いたりて、をもき五逆までをおさめ、行を願ずる時はいたりてすくなき一念までをたてたり。心をとらん時いかゞ又、いたりてよはき心ざしまでをもおさめられざらん。いはんや、つみふかき機ならば、心もしたがひてをろかに、行あさきものならば心ざしもをのづからうすかるべきいはれにてこそあれ。しかあるに機と行とのつたなきをすくはんための本願に心はふか

【てづつ】不可也、なすことのはかゆかぬ意。

【二】顯文の中の乃至十念の四字に就て問答す。

からんずと、ちかはれたらんは、あたら本願のよきかたはなるべし。ましてや五劫まで思惟し給けむ誓願の、きはめてづつなる事をば仰るべき。かやうのことはりをもて思ふに、いかにあさき心ざしたりともいつはりなくたすけ給へと、たゞにも思ふならば、往生にふそくはあるべからず。おほよそ生死をいづる事のかたきにはあらず、信心する事のかたかりしゆへに、過去遠々、生死塵々たりし身の、このたび彌陀の本願にあひて、わづかにたすけ給へと思ふばかりの心をおこして往生のほいをとげん事は、ひとへに願力の御ちからぞかし。かゝるみのりをきゝえつるむかしのなくひ、うれしくとぞ、と宿因おもひつゞけて、悲喜こもごもながれ氣なり。

【二】修行者又とひていはく、「本願すでに乃至十念とちかはれたれば、十聲一聲までもすてられず、かならず往生すべしとの給ひつるは、よにたのもしく侍れども、いかにも、なをそれ程の念佛のさだめて往生の業となるべしともおぼえず。まして妄念うちおこしながら申す念佛は物のかずならじとおもはるゝはいかゞ侍るべき」。

老僧のいはく、「これは御身ひとつのうたがひにしもあらじ。なべて人ごとに思あへる事なんめり。本願のおもむきをよくもしらざるゆへに、かゝるなまざかしき心もおこるなるべし。佛すでに一念十念までもうまれしめんとちかひ給ふ。その願むなしからずばいかでか往生をとげざらん。たゞこゑを本願にまかせて名號をとなふべきなり。これによりて法然上人は、「たれも〳〵煩惱のうすくあつきをもかへりみず、罪業のふかきあさきをも

【六塵】心の對象となる客塵。色、聲、香、味、觸、法の六境は心を惱亂せしむるが故に六塵と云ふ。【三毒】貪、瞋、痴の三種の煩惱。身心を害壞するが故に三毒と云ふ。

いふべからず。たゞ南無阿彌陀佛と申て、こゝろにつきて決定往生の思をなせ」との給へり。そのゆへは往生せんとおもひたちて南無阿彌陀佛と一體となへはじめぬるが、一念をもかならずうまれしめんとちかひ給ふ本願のなかにおさまりこむるより、十こゑになれば十念をもといふ願におさまり、一期中ぬれば一形をもといふ願におさまる也。されば我らはしどけなくとなへゐたれども、佛は一こゑもきこしめしすごさず。みな「若し生ぜずば正覺を取らじ」といふ本願のなかにうけとり給て、佛力守護すれば六塵のぬす人にもおかすめられず、三毒の火にもやかれずして一念より一形にいたるまで、みな決定往生の業となる也。「是を正定の業と名く、彼の佛願に順ずるが故に」と釋する、この心なるべし。こゝろにつきて決定往生の思をなせといふ、げにもいはれたり。罪障よりも業障よりも、南無阿彌陀佛ととなふるこゑにすぎたる往生のしるしやは侍るべき。かまへてたゞとかくのうら思なく、ま心に念佛して本願にあづけたてまつり給へ。いのちをはらん時、佛たしかに迎接したまはすべし。それをこそ最後の念佛にもし侍らんずれば、臨終の十念は佛の御はからひにて攝違あるべからず。かやうにうしろめたからぬ無盡の父母にて、心やすくうしろみ給ふうへは、南無阿彌陀佛ととなへてよろづは佛にまかせたてまつるべし。さてこそ念佛のこゝろをば緑子の哭することゑのごとしとも釋したれ。たとへばみなさなき子のあしてもたゝず、物もえいはぬは、うへたるにもさむきにも、たゞ聲をかこちてなくよりほかの事なし。母そのこゑをきゝぬれば、かならずゆきてたすく。うへたるらんとおもへばむねをひらきてちぶさ

とふくめ、さむかるらんと思へばふところにいれてはだへをあたゝむ。さればうへをやすめさむさをやむるはひたすら母のちからにあり　われ二なくはかりごとにては侍ふやうに、我らが身の智慧の心もさかしからず。ほかあしでもたゝぬ事はをさなき子よりもまたをろかなれども、ますます、ありはてぬ世もあぢきなく、なほをさなき子よりもかなしければ、たすけ給へと佛をかこちて、南無阿彌陀佛ととなふる外はほかはげみえたるかたなし。佛とのこゑをきこしめすに、一子の慈悲いかでかやすき事をえん。されば穢土をいで淨土にうまれん事は、しかしながら佛の御ちから也。たすけ給へと思て名號をとなふるのみぞおのれはげむ所なる。化佛菩薩來到、たのもし慈悲の父母なれば、たゞかまへておさなき子の母をよばふおもひをなしてこゝにをかせて來迎をまつべし。あなかしこ、こざかしき心ありて往生をうたがふ事なかれ。又いかに妄念に申まじへたる念佛も往生の定業となる也。そのゆへはもとより煩惱具足の機の、妄念とゞまりがたかるべしとは、佛もおぼしめしまうけたるらん。そのうへにおこされたる本願なれば、にごれる念佛をいたとにてはよも侍らじ。されば中路の白道も、なみをふみてあゆむべしとこそみえたれ。いはんや人ごとにその日の營趣にとりむかふよりは、まづいかにも往生の思ひより申そめらるゝ事なれば、念々の念佛はみな、もとのやくそくにかへりて、はじめの心ざしにをさまりぬ。又しどけなく申ちらしたる念佛なれども、のちにかならずとりあつめて極樂に廻向する思あり。この時、妄念はをのづからえらびすてられ、念佛は悉くえらびとられて、けがるゝ

【あまさへ】剰へ。

【樂天のことば】樂天は唐の白居易頌千決疑鈔に曰く「予年七十二復事吟哦看經費眼力作福畏弊波何以度心眼一聲阿彌陀行也阿彌陀坐也、阿彌陀縱饒忙似鐵不廢阿彌陀日暮而途遠吾生巳蹉跎」

所なく、みな清淨の因となる也。されば、かまへて口ばかりにもあれ、となへをくべき也。をはりに廻向せん時、心ざしとひとつになるべきがゆへに、妄念とゝもにても申たらん念佛のつゐにいたづらなる事はゆめ／＼侍るまじ。水火の二河をかへりみず、念々にわすれざれといふこの心なるべし。又せめて千遍萬遍申しつゞけぬに、妄念おこりて心ぜはしくば、中々一念十念づゝなりとも、つねにとなへて給へかし。妄念はよも侍らじ。たとへば河をわたる時は、水のたえまをまつ事なし。たゞそのながるゝうへをふめば、あまさへあしのしたの水おせかるゝやうに、われら煩惱の泥ふかくして、妄念のながれやむ事なけれども、南無阿彌陀佛と申せば、かへりてこゑのしたの妄念はをのづからやむ也。かやうに申つけぬる念佛は、妄念をこそさきたぐれ、妄念にさまたげらるゝ事はなきなり。わざとやめんとすれば、妄念いよ／＼たえず。をこらばをこれとうちすてゝ、妄念をかへりみず申すが手にて侍る也。さるを世のまぎれのひまなさに、念佛が申されぬなんどいふ人は、たゞ往生の心ざしのなきゆへに、せめての事とこそおぼゆれ。かならずしも千遍萬遍申つゞけたるのみやは、往生の功なるべき。一念十念づゝなりとも、本願はよもきらひ給はじ。すゝをとりたるがいみじきにしもあらじ。とてもかくても申とこそ詮にて侍るべけれ。されば樂天のことばには、「たちても阿彌陀、ゐても阿彌陀、たとひいそがはしき事、きるににたれども、一聲の阿彌陀はすたれず」といへり。すでに先賢の故實也。さらに後學の存知にあらず。すべからく一聲の阿彌陀をたもちて、よろしく九品の無生忍を證すべし。およそ稱佛一号

【正座十劫】法藏菩薩因位成就し正覺をとりてより十劫を經たること。法事讃の文。

【貪亂の濤】淨土論註の文。

【淨摩尼珠】清淨なる寶珠。

【きは】際限。

空の間、すみやかに妄念の雲をはらふ。正座十劫の月、をのづから信樂の露にうかぶ、げにたれか往生をとげざらんと、まめやかにたのもしくこそ覺ゆれ。又貪亂の濤には、至極無生清淨寶珠の名號といへり。たとへば淨摩尼珠といふたまを、にごれる水に入れば水たちまちにすむなるやうに、名號のたまをくちのうちにふくみぬれば妄念のつみのにごりすみて、心の水きよくなりぬ。一念に八十億劫の生死のつみを滅すといへるも、かゝるゆへなるべし。さて〳〵かやうに一念も往生にふそくなき事をきゝて、かならずしも數遍をはげまずともなんど申すやからも侍るやらん。それは本願をあしく心得たる人也。法然上人の御すゝめには、信を一念にとりて行を多念にはげめ、一念なを生ず、いはんや多念をや」との給へり。一念もうまるゝとは本願を信ずるやうをいふ。多念にはげめとは起行をすゝむる力を申也。一念も往生すと信ずるによりて、多念はげまざるは信の行をさまたげたる也。多念はげめとゝすゝむるによりて一念をかろしむるは、行の信をさまたげたる也。すべからく安心をば、かまへてやはらかにとりて、起行をばいか程もこはくはげむべきなり。一念功たへにして往生決定ならば、いよ〳〵多念をこそはげむべけれ。たゞしはげめとすゝむるにつきて、いか程までといふきはゝあるべからず。たゞ身のたへ心のをよばん程なるべし。その中に毎日百遍が身にたへたるもあるべし。千遍がこゝろのをよぶもあるべし。乃至三萬六萬も機にしたがひてはげみえんまで也。在家の人はまぎるゝなかにはげみえん程、出家の人はのどかならんにつけてはげみえん程、又いたづらなるいとまにを

【かたましき】姦。心のねぢけたること。

こたらじばやとはおもへども、などやらんわすられんはちからなき懈怠の機なればそれもはげみて思ひいだされんほど也。すべて人によりて事ことなるべし。さらにひとつらにはあるべからず。機にしたがひて行の多少はともかくもあれ、いづれもその心ざしのいつはりなからんまでを身のぶんとすべし。おほかたは「行住坐臥を簡ばず、時處諸縁を論ぜず。」と侍れば、時をきらはず所をいはず緣によらず。たゞたちゐおきふしにとなふべし。念佛に無礙といふ事はあるべからず。いか樣も申ざうやまふにて侍らん。さてももとよりをこたりがちなりし身のいとゞ老につかれ、やまふにくたびれて、しばしおきゐる事だにもかなはずなりぬ。まして威儀をうるはしくする事はまれなり。たゞいつとなくおびとき、なれふしながら猶さりともと出離を期する事は、淨土の一門ならで又いづれの教にかあるや。かゝるにつけてもすゞろに本願がかたじけなくおぼえ、念佛がたうとく侍るぞとよ。さればとてあなかしこ、かなはぬべからん心を、ゆるしはすぐすべからず、いかにもやすきに事をよするはかたましきがいたす所ならんかし」とをしはかりもようにくかりぬべくや。

歸命本願鈔 下

向阿

【一】上卷と中卷とに本願の文をわけて體と心と行との問答あり。今更に詳しく問答す。

【二】往生行者又問ていはく、『本願のなかの體と心と行と別々に、心なく我らがつたなき願にかなへりといふ事、あきらかにうけ給はりひらきぬ。このぶんにて往生をとげん事は「若し生ぜずば正覺を取らじ」とちかひたまふ佛の願力に乘ずるゆへ也とのたまはせつるいはれはさもらとおぼゆるやうなれども、たをひしとも心えとかれ侍らぬ』といへば、

老僧のいはく『人ごとにみなそのしきにて侍るぞとよ。凡夫の往生は本願に乘ずるゆへとまでは、たれ／＼もみゝなれてぞ侍らんなれども、まさしく願に乘ずとはいかやうなるすぢといふ事を、おもひときたるはまれならんかし。よろづたゞ人の心のまことなきゆへに、しりがほにたにもなりぬればたりぬと思て、さしもとひきはめんとはせざんめるを、かくねんごろに尋ね給ふこそげに往生の心ざしもおはするにこそとありがたく覺ゆれ。さればいかほどもくはしくきこゆべし。まづ「若し生ぜずば正覺を取らじ」とは、かゝるつたなきものなりとも南無阿彌陀佛ととなへば、かならずわがくにゝ生ぜしめんとねがふ、この心ざしのちからむなしくして、もしうまるまじくば佛にならじと也。これにつきてそのつたなきものなりとも念佛せばかまへて生しめんとねがふを願とはいひ、生るまじくば佛に

【若し我】往生禮讃の文。

【ちかごと】誓言

ならじとちかごとし給を誓とは申也。いまこの誓願は彌陀如來いまだ佛になりたまはざりしいにしへ、法藏比丘と申しゝとき、一切衆生を平等にあはれみ給ふ御慈悲のあまり、「わがねがひのまゝに衆生往生すべくばわれも佛にならん、そのうまるゝ事かなふまじくばたゞもろともにしづみこそせめ衆生をすてゝ我ひとり佛にならん事、さらにのぞむ所にあらず」。あやまて、衆生だにもたすかるべくば、假令身を諸の苦毒の中に沈むとも我精進を行じて忍びて終に悔いずとまで、身にかへてかなしみおぼしめされし誓に、さしも一大事の正覺をかけてちかひ給へる本願なり。されば念佛せんもの生ぜしめんといふ御ねがひかなふべくば、その御ちかごとにむくひてをのづから佛になりたまはんずらん。御ねがひむなしくして我ら念佛すとも、うまるまじくば、又との御ちかごとにむくひて、よも佛にはなり給はじたれば、法藏比丘の成佛が我らが往生せんずるしるしにてはあるべき也。これによりて善導大師は「若し我成佛せんに十方の衆生、我が名號を稱して下十聲に至るまで、若し生ぜずば正覺を取らじ、彼の佛今現に世に在して成佛したまふ。當に知るべし。本誓の重願虚しからず。衆生稱念して必ず往生を得ることを」と釋して、かの佛いま現に成佛し給ひぬ。さきにしるべし。うまるまじくば正覺とらじとたて給ひしちかごとのをもさにおへて、うまれしめんとおぼしめす御ねがひむなしからずして、あれに稱念せばかならず往生すべしといふ事をとの給へり。されば衆生の往生すべきにより一佛は正覺をとり、佛の正覺なり給によりて、衆生は往生をすべき也。このゆへに念佛申さんもの、往生せん

【孟宗】晋の人字は恭武、病母の意により厳冬に筍を得たるを以て名高し。呉志、先賢傳等に見ゆ。
【たかんな】筍。

することは、はやすでに本願成就して正覚なり給ひし時より、ゆるぎなくさだまりてしかば、我らをみちびき給ふべき佛の御方便は、もとよりしたゝめまうけられたるを、たゞ衆生のかたよりあやぶみて、身を本願にまかせかねたる心のたまさかしさにこそ、けふまで往生もとげてとほりぬれ、いまよりにても心をかすたのみをかけば、やがて本願には乘ずべし。本願にだにも乘じたらば、又いのちをはらん時かの國に生ぜん事いさゝかもうたがひあるべからず。それにつきては、本願に乘じて往生すといふことはりをこそよく／＼心にわくべけれ。たとへば孟宗といひしものゝおやは、たかんなをあいしけるなるべし。ある冬のころせちにこれをねがひけるに、時しもあれ心づきなしとおぼえぬべけれども、孝養の心ざしねんごろなる子なりければ、雪いたくふりつみて、あるべうもなき竹のなかにむかひゐて、せめての事になきゐたるほどに、とみれば、さるべきところよりもなをあざやかなるたかんな、時のまにをひいでたりけり、ふしぎなりける事ぞかし。つら／＼この事をおもふに、かぎりありて、をのれとをふべきところならば、夏のすゑざまをこそまつべけれ、これはしかしながら孟宗がねがふ心のせちなりしかば、そのねがひむなしからずしてかなひしゆへに、をふべくもなき時なれども心たらずをひにける也。まめやかにねんごろなるねがひのかなはぬ事は侍らぬにこそ。彌陀の本願もかくのごとし。我らがうまるべくもなき事は、雪のうちのたかんなのをふべくもなきににたれども、深重の慈悲よりおこりてねんごろなりし本願なれば、念佛せんもの、かまへてわが國にうまれしめんとねがはれし。その御ね

【楚毒】 荊楚の痛苦なり。

かれむなしからずしてかなふゆへに、となふるものことごとくうまるゝ事は、弘誓がねが
ひのせちなりしによりて、たえんなるをひしがごとし。かゝるを本願に乗じて往生すとは
なづくる也。されば仏の御ねがひのかなひぬることそ、返々我らがよろこびにては侍れ。か
の弘誓がねがひによりしたがんな、種よく片時に極苦をうかちてをひき。弥陀の本願たる
念仏のいかでか一念に重障をはらひてうまれざらん。我らが往生すべき支度をば、弥陀本
願にかまへてたてられたり。南無阿弥陀仏と申さば仏なにともはからひたまはんずらん。
わがちからにてすましき往生なれば、たにの心ぐるしきところもある。たゞしたがんなを
ねがひし所にあらぬ草木はをひず。念仏をと、ちかふ仏なれば、称名にあらずばうまれが
たし、をのづからうまるゝ事をうれどももゝにひとつといへり。これにつけてもいよいよ
一すぢに念仏して、仏の御ねがひ物になるべき也。しかれば御すさに往生せんと思て南無
阿弥陀仏ととなへんものをとねがひ給よ。我又往生せんと思ひて南無阿弥陀仏ととなふ。
わが思ひ仏のねがひにいさゝかもたがはねば、すなはち仏の御ねがひ、もはら我身のうへ
にあたれり。もしうまれずばと侍れば、かならずうまれんずなにの罪障かあらん。ふかく
決定の思をなすべし。ゆめゆめうたがふ心あるべからず。こまかにこのことはりをあんず
れば、よろこびのなみだかへりてかたしむ。いたづらに無量無数劫の生死をへて、いまゝ
で常没常流転の凡夫たるだにもくやしきに、なを又有漏の波浪にたゞよひて、このすゑに
無窮に楚毒をのまん事は、あさましかるべき事たるを、いまこの本願にあひぬるのみこそ、

【呑鉤の魚】大悲前に出づ。釣針を呑める魚。

まめやかに多生のおもひいでにて侍り。呑鉤の魚は水にある時ひさしからずといふ事あり。ふかくこれをよろこぶべし。たとへばうえたる魚のゑをもとむる、つりをえつればすなはちのみぬ。をのがいのちはあるにもあらず。いまはさだめてひさしからじ。わづかに水にある程、はかなくよろこぶけしきあれども、いまにくやしかるべきがごとく、われらがひさしく流轉のなみにつかれて、出離のゑにうえたりし身の、たま〱名號のつりをえてのみぬ。苦海にあらん事いまいくばくぞや。わづかにいのちのつきざらん程、わすれずとなへんとするはくるしきににたれども、前念にいのちをはらば後念にすなはち往生せん、永劫の快樂こゝろよきにあらずや。物うきことをわすれてねんごろに念佛すべし。おほよそ本願はさをのごとし。名號はつりににたり。衆生の南無阿彌陀佛ととなふるは魚のゑをのみぬるにことならず。さればすでに大悲の漁人、本願のさをよりたれたる、名號のつりをふくみて生死の深淵をいでん事さら〱うたがひあるべからず。さをにかけたるつりは、のむほどのうをゝえずといふことなし。本願にたれたる名號なれば、となへんほどのものゝうまれぬはあるべからず。ゑをもとめてつりをのむまでは、わづかに魚のわざなれども、つりをかまへて魚をうる事はさながら人のちからにあり。往生をねがひて名號をとなふるはいさゝか衆生のわざなれども、本願をかまへて衆生をみちびくはこと〲く佛のちからにあり。極惡の機のたすけ給へと思て南無阿彌陀佛と申すは、機もつたなく心もをろかに行もいやしけれどもこ、れをわづかにゑをもとめつりをふくむほどのなかだちとして、一若し

【二】修行者上来の說法によりて安心落居すと雖もます／＼信を決せんが爲に相傳の源をたづぬ。

【聖覺法印】藤原道憲の孫、比叡山の靜嚴につきて出家す。後法然上人の弟子となる。法談に巧なるを以て名高く、又文章をよくす。嘉禎元年三月五日寂。

生ぜずば正覺を取らじ」とちかひ給ふ本願にすがりなば、さだめて往生せん事を、魚のいのちをつりにまかせたるになずらへてみむ、かゝるを他力に乘じて往生すとはならふ也。されぱこの名號のつりをのみぬるこそ返々たのもしくおぼゆれ。極樂ならではいづくへかまかり侍らん。なにもげに期といふ事がありけるぞかし。このたびが生死のかぎりにて侍りけるよといひあへず、ことばもなみだにとゞこほるけしき、ことはりにいりたゝぬ身なれどもたのもしくたうとくおぼゆ。

【二】修行者又いはく「このちかごろ、こゝかしこ、まどひありきしほどに、げには事のはしばしはたづねとぶらふかたもこそ侍りしかども、おほくは經釋にもあはぬ義どもにて、いと心えぬ事のみ也。されば安心もたちがたく、起行もすゝましからざりけるに、しかるべうこよひこまやかなる御をしへにあづかりて、往生のみちたどらず思さだめ侍りぬるは、さながら大聖の方便にこそと、よろこびのなみだことばにさきだつ。さても、いにしへの智者のをしへとかやきゝ侍りつるは、たれ人の事にかあるらん。それまではいかでもありぬべけれども、又なかれをくみてみなもとをたづぬるならひは、ゆかしかるべき事にこそ」といへば、

老僧のいはく「とりわき一人につたへたる身にはあらず、法然上人の御弟子の中に、智者學生といはれし人々をば、もうさまこそとぶらひ侍りしか。なかにもみみにとまりておぼゆるは、聖覺法印の法然上人の第三年の御佛事に、當伽藍にして道俗をあつめて七日百萬

遍の念佛をすゝめられし結縁の衆徒に一心の法門を申されて、をはりに「もしこの法門わが大師法然のおほせられしに、いさゝかもたがひ侍らば、當寺の本尊現在照罰し給へ」と、あたしことばに一生までちかごとをたて、たゞこれをふしんに思ふほどなれば、眞實の學生にとなるべしと申されしにこそ、さては聖光ひじりは、聖人になるほどのたしかなる智者にておはするにこそと、やむごとなくおぼえしかば、いかにしてかのひじりにたいめんして安心起行なんど、こまかにたづねうかゞはゞやとおもひしかども、こしたへぬ老のあゆみなれば、みちはゆかぬあらましのみにてやみにき。まことにいたはりし事なれども、よし〳〵たとひ九州にとゞまりて談話を西海のなみにへだつとも、「一念いくばくならざれば」、同宿を寶池の月に期せんと思ひなぐさみてすぎにしほどに、かのひじりのかゝれたる「[illegible]心要集」に、「[illegible]行門」なんどいふ物をかしかば、のせらるゝ所の義、さらに聖光のことばにたがはず。おなじくへあれいさゝかも上人の御義をおやまたんはとて、さまざま[illegible]をかきのせられたりしをひらき見てよめることこそ、誠の[illegible]に[illegible]のごとくによろこびもうらみもいまだきらなりしか。その時どもはいくらもよの中に侍るなれども、たれ〳〵もかまへてたづね見給へ。このひじりたちは、その身がらの人にすぐれて、智者道心者にておはせしも、さる事にて法然上人の御義をたがへずとて給ひしらんごとか、ことにたのもしくたうとくおぼゆる也。されば勢觀房の聖光ひじりへつかはされしせうそこにも「當世京邊の念佛の義みなもて濁亂、しかるに御邊一人、正流を相傳、ことに隨喜し入候」とかゝれたりき。か

【ちかごと】誓言。

【聖光房】淨土宗第二祖聖光房辨長上人。

【こしたへぬ】腰堪へぬ也。

【勢觀房】平師盛の子、重盛の孫、十三歳にして法然上人の弟子となり、十八年間常隨す。法然上人滅度の際、佛像等の附屬を受け、知恩院を創す。曆仁元年十二月寂。壽五十六。

【せうそこ】消息

【法蓮房】信空。左大辨行隆の子。黒谷叡空に入り後法然上人の弟子となる。安貞二年九月寂。

【正信房】湛空、左大臣實能の孫雄寳二尊院を開く。建長五年七月寂。壽七十八。

【頴川】許由が堯の位をゆづらんとするを避けて耳を洗ひたりといふ。

の勢觀房はとしひさしく上人につかへたてまつりて法門の聽聞もみゝふりたりしひじり也。その消息はまのあたり見侍りき。まさしき自筆の狀にて侍りし也。又法蓮房正信房なんどにたづねうけ給はりしもみな相傳の正義とて申されしはことばも一つに心もかはらざりき。そのほか京都にはやりたる義どもをばさらに上人の御をしへにあらず、まめやかに頴川ちかくは、みゝもあらひぬべしとぞ、この上足たちはかたられ侍りし。かやうにあるひはあまねくその人にむかひ、或はくはしくその書をひらきて、相傳の流をたゞしあきらめて、黑谷の正義をばきゝをきしかども、天性もとよりかたくなゝるに、老耄いよ／＼をろそか也。才もなく智もなし、はぢつべしいたみつべし。かたはらいたく申さでぞあるべきをたづね給ふ心ざしねんごろなれば、をのづから利益も侍らんに、わたくしおりともおもひてきゝをきしはし／＼をあら／＼かたりきこゑぬる。まどかならんものはあざけりなん。法門のことはりをわきまへざるがゆへに、かしこからん人はかろしむべからず。智者のことばをつたへたるがゆへに、よく／＼きゝとゞめ給へ。ゆめ／＼いるがせになしたまはせそ。かやうに申すはをこなる狂言なりや。されども法門にあやまりあるなしは法然上人のあそばしをかれたる物ども世にかくれなく侍り。又さきに申つるひじりたちのことばゞ、きゝとゞめたる人もこゝかしこにおほくのこりたれば、かれをひらきこれをとぶらはんにしられぬべし。としよりのくりごとし侍るほどに、夜もはやあけがたになりぬらん、身もひゑむねもわびしければ、さのみは申つくしがたし。この一夜の物語をもて、かの九品の往生をきた

【三】[illegible]人のこと[illegible]本書を[illegible]。

【獵者】獵師のこと。

【二尊】阿彌陀佛と釋迦牟尼佛。

ん」といひすてゝたゝれぬ。

【三】この修行者こそ[illegible]なく[illegible]ん。心の中におもふ事を[illegible]あるべし。なをもしたひていはんとにや、[illegible]でつ[illegible]いでぬ。そのありさまゆかしくて、愚僧も又たちいでゝみれば、あけ[illegible]の[illegible]おくして、ゆくゑむなしく見うしなひぬ。ねんなしとあきれゐたるほどに、[illegible]あけ、きりも[illegible]にしかば佛にいとま申てまかんで侍りにき。抑安心起行[illegible]ねれば、[illegible]行いたづらにほどこす。[illegible]師[illegible]をこれずばあるべからず。これによりて、としごろいかゞして[illegible]上人の[illegible]をうけて、凡夫往生の[illegible]を、さきらめきしと[illegible]しに、[illegible]なしくすぎし月日のわすれ、またよきぬる身のよはひ、[illegible]しきりにおもりもてゆく、[illegible]のひつじ心ならずあゆみをいそぐ。たちかへるべきみちならねば、ゆくさきのみちおづくらん、二[illegible]へらされば[illegible]に[illegible]す、一念[illegible]せばすなはち輪廻に[illegible]せん。いたづらにつもとなり、[illegible]とならんずる身ゆのみならずみて、かたしくこほりにむせて、ほのをになせばんずるたましひとおもへば見ざるは後のくらさきにたゝぬなげきもいまの[illegible]ぞかし後の世のさりともとおぼゆるたのみもなければ、命のをはりもたどろにおそろしかりしほどに、かぎりなく[illegible]にうれへ申てしにろしたらむ[illegible]のあたり[illegible]師のをしへをきゝてはるかに上人の素意をしりぬるにこそ、臨終も心やすく、往生もうたがひなくおぼえぬれ。かの韋提希の[illegible]に[illegible]せし時、釋迦そらに住して、二尊の教法を蒙りし、むかしの佛化になずらへて、この修行者の智識にあひし日、愚僧みぎりにのぞんで一宗の祖訓をさとる。いまの得益を

おもふに、まことにこれ多生の大慶也。いかでか又小縁の宿因ならんや。たゞしうらむるところは一旦にむなしくわかれて再會しばらく、へだゝりぬる事をたゞみゝにとゞまることばのみぞ、いまは心にのこるかたみならん。さしもありがたきおもひいでの、跡なくわすれなんはほいなかるべければ、その一夜の閑談をあつめてこの三卷の記錄とす。としてもかくしても、たゞ身をまかせてたのめ、本願たすけ給ふべしとのみきゝしかば、歸命本願鈔とやなづくべからむ。

歸命本願鈔　終

【一】清涼寺に参籠してひじりにあふ。
【清涼寺】山城国嵯峨に在り、釈迦堂と称す。
【黄昏】黄なる[illegible]
[illegible]

西要鈔　上

向阿

【一】すぎにしやよひの廿日あまりのころ、いさゝかおもふ事侍りて、清涼寺に参籠の事侍りき。み堂のかたすみにこもり侍れば、よもすがらめでたき御のあはれ、たとへましきものなし。[illegible]いとふかし。たにものゝ西隣にすみにけれ。日ごろなげよりも、たゞひとへに念仏称をまうさるゝ。おりにしたがへば念仏をきこえ、身にふれては物がなしくまぎれて、じ日とおもふもいとほどなく、とよればかりのほどのにしてなりにしかば、ことに心をおさめてとなへんとするに、更たけ化しづかにして、佛前に人をれさるほどに、あいらかたることさして「南無阿弥陀仏大慈大悲」とたのうとく聞するやとすなり。げにそ更に到りていたすといとてきく心までかゝるまでとされわたりぬ。いかなる人ならんとゆかしきに、とばかりありて「弥陀一仏は此方にしておはす」と、しめやかにうち説せられたることをきけば、その御時、あけがたのきりのまよひにあくるゆかしくて、やみにしれひじりなりけり。そのゝちはたゞ浄土の要義ともを聞しけるに、うれしくもと由緒の内までにしるされ見つるかな。これやげに仏の直くちそれるぎりならんと、ことにたのもしくおぼゆ。とよみはいかでいみじき事ども法門し侍らん。法師ひきくといへども、たゞくをまちてかならずなる。あはれさかしくと

【釈迦の御まへ】行基の歌、婆羅門僧正との問答の歌なり。拾遺和歌集第廿に云く一南天竺より東大寺供養にあひに菩提がなぎさにつきたりける時よめる。霊山の釈迦のみまへにちぎりてし眞如くちせずあひ見つるかな一

【洪鐘】善導大師觀經疏序分義に曰く一洪鐘響くと雖も必ず扣くをまちて方に鳴る。大聖慈を垂れたまふに必ず請をまちて當に說く一

【一】安心の問答[illegible]

ひて人もあらば、いかにもいはず、ただへたまはむ。さりとてさてはえあるまじければ、につかはしからずとも、てづからやたづねきこえんとさだめられたるほどに、あの御つぼねよりとて、これにこそまうでこもりて侍れ。御所作のひまにたちいりたまへなんやと、せうそこすれば、やゝしばしありてわたり給ひ、對面たゞにはあらじ。しかるべきついでに又所得し侍りたりとうれしくて、やをらかたつかたによりゐつゝきけば、さるべきおとこのこゑして、つねに讃歎にもきこゆべくもまひ給へなざる、たゞすゞろならぬ身にて山ふかき叢すまひ、はるばるとはきおよびたちがたく、耳にそへては文分ににきなくなりて、いと尊き法門の清談もうときゝ侍り、さればとて世書の文字をのすれたるにはあらねども、つたなく禪庭の小師にかはされたる、いかに心をとなくをしはかり給へ、世間に生まれよりもはげしといへば、常にとこ願ひさそれにもあづかりたきに、たまかのたでう、まれにもたちいりたまはぬ、はきこえもしつゝぬ鐘なれども、かへうつ人をばすゝみすてゝふ侍るらんかし。このたびの問答はことに本懷なり。いはけなきものこゑの、あまたしたてまうできたるをも、つみかろめ侍りなんず。

【二】「抑彌陀の本願は、惡人をもとして攝し、衆生の根機、善惡おなじく攝すといふ事、たびたびうけたまはりぬるに、それにつきて五逆の惡人もえらばれず、一念の稱名もすてられずときくまでは、佛願まことにさだまれるらんとうたがひなく、わが分ももれじとたのもしき程に、信心具足して三業念佛にて往生はすれといふおり、されど我身には、それ

やいなやしおらんとあやぶまれて、往生もなを一定ともおぼえねば、心も今ひときはうきたちのうちおさへしきに、としてゝ本願のあやまりなければとおもひなせども、それも安心のうへにこそと、たちかへり／＼うかれねたるをば、いづかたにつきてか落居し侍るべきと、とへば、返こたへていはく、「いまうけたまはるそうは、すでにおこりたる信心を、心からおもひさまされたるにこそ。物のゆくゑしらぬとて、いとうたてう侍るかた。まづその體のわろきをも、行のすくなきをも、すてゝは本願といふまでをきゝて、うたがはしからぬかたのもしくおぼすらんをこそ、すなはち信心とは申せ。そのほかには、さらになにとか、もとめ給はん。いかに十悪五逆一念十念もときけども、さはいへどたはやすくはあらじをなんど、本願をおすめうたがひて、たゞとくもえおぼえぬこそ、信心のなきにてはあれ。おほかたこのごろは念佛の法門みゝなれてあら／＼しく願力をよもとまでうたがふ人は、上にきこえなり。されば、われたすけ佛の誓願などきくおり、さすがたのもしと心うごかぬものやはある。それをすなはち信心とだにもしらざしかば、往生はかやすく、おもひかためなんを、このうへにいまひときは、おこらんする事のやうに、もてなやむ程に、たま／＼たのもしくおぼえつる心をさへ、思ひさまして、はては信なきなげきをする、これいさゝかのおもむきをあしく心えたるゆへなるべし。よく思ひ給ひわくべき事になんありといはるれば、げにあしくこそ心え侍りにけれ。日ごろはたゞ佛願はうたがはしからねども、わが信心やいかにとおぼえつるより、決定往生の思もをさへられて、心

【三】安心の問答
第二、本願もいたく心にそまず往生もく決定と思はれぬはいかなるゆゑにやの問に答ふ。

やましかりつるに、その本願のたのもしきかすなはち信心なるべからんには、さらになにをかわづらはむ。物のいはれしらぬは、げにやすかるべきみちにも、とゞこほるならひなり。いかにたれ／＼の御身にも、かゝる事のみおほかるらん。これやめん／＼におぼつかなからむ心のうち、申し給ひあへ」、とすゝめられて、

【二】いとさかしげなるをとこのこゝにて「本願のいはれ三心のやうなどは、思ひやひがめたるらむはしらず、心ばかりはおぼつかなからぬ所作にて、いまはさせるうたがひありともおぼえ侍らぬを、しかも又本願もいたく心にもそまず、往生も決定ともおもはれぬは、いかなるゆへにかと案じてみるに、物のいはれを心えたればうたがひははれぬ、安心がうるはしくもおこらねば、一定ともおぼえぬなんめりとしりぬ。さる程に、あけくれ、この三心をかみもてさばくれども、いまだそのかひありて思ひえたる事も侍らぬがなげかしき」

といへば、

聖のいはく、「これは道心の人のつねにある事なり。おほかた本願のいはれをきゝわくまではやすけれども、さてひしとおもひつく事はかたきを、それはくはしく心得てしかばと、うちやりて、まづいとゞしくわが身に三心はぐしたりやとあてがひてみるに、なじかはさうなくおこりもせん。さるほどに、てもとこたへてもおぼえねば、いとゞあさましと、つきせぬ心あつかひにとゞこほりあへる、これもどかしきわざなり。まづ安心を、すゝめんとおぼさば、しばしたゞ三心ざたをさしをきて、うちかたふき阿彌陀仏とけのたうとき事ど

もを思しめし給へば、さすが人木石にあらざればみな心あり、げにまことしく世にこえたる悲願なときゝもひつゝけれに、たれかはたのもしとおもはざらん、たのもしとただにも思ひしらぬれば往生はしつべくおぼゆるものぞ。さてのちも心をさだめて見給へ、三心はいとよく具足し侍りなん。たとへばつかはたりしつはものゝ、脳のすゝめ事をきゝて喜ふされわたりしがごとく佛力のいみじき事をきくより、決定往生の安心はすゝむおもはれなりされば御まへて、いくたびも不審のたのもしかるべきいはれをもきゝもし案じもしたまへ。かくてやうやうなれもてゆかば、自然に心にたのみ侍るべし。われの愛由のしたくりの行をうかつは、いましたがら淸徹のいたす所ぞかし。この願の誠がたみに信ずるさん事も又論はいふでもなかしからん。ただ物はいさゝかなれども、つねに功をつむただ故に侍る也。すべて人の心のならひとして、なるればその物になる事は、これのみにしもあらざんめり。

【四】又女のこゝろにて、往生は一期の大事にて、またひしなをすべき事にもあらねば、かまへてと、びんぎの相聞をもすごさず、心にかけて思ひなれぬるしるしに、いまはだいじさりともと、たのもしくはおぼえながら、さすがはれ〲とはなくて、又いかなるおりやらんは、さてもいかゞときものゝつぶるゝ事もあるは、なほうたがひのゝこりたるにや、罪も心なをきそとこそ侍るなるに」といへば、

答へていはく「いまだしてみぬ往生のいかゞとおぼつかなからでもあらむ。又かまへてとおぼゆる事は心ゆるびず、あつかはしきまゝに、ふとむねつぶるゝ事も思ひいづるならひな

【四】安心の問答第三、女人信心の決定せざるなげきに答ふ。
【びんぎ】便宜。

【五】安心の問答。第四、女人の信心の弱きを歎ふるに答ふ。

【ひげ】卑下。

りこれはいさゝかもきもすぎて、おもほしとがむべからず。すべていかなるものもすてられずといふを、本願(ほんぐわん)にあてゝあやぶむこそうるはしきうたがひにては侍(はべ)れ。佛(ほとけ)のちかひをばひしとたのみながら、されば往生はしたんやと、わが身(み)のうへにあてがふを、なをはれ〳〵ともおぼえぬはうたがひとまでいはるべき事(こと)にあらず。さしも、かしこかりし智者(ちしや)だにも、いはにも樹はときゝておぼつかなさをはるけ、むかへのはうすを見てこそと、いぶかしさをのこされければ、まして、そのほかの人(ひと)は、夢(ゆめ)のつげをもえず、来迎(らいかう)のけしきをも見ざらんほどは、さらにいふにもたらず。わづかにきゝてさてはとおもふ事(こと)を見て、げにもといはむやうには、いかゞなぞらへ侍(はべ)るべき」

【五】又(また)おいらかなる涙(なんだ)のこゑにて「としもつもるにしたがひては、さすが佛のことはりも、しりはてらるゝけして、おのれにはみなきならひ、おほくきゝあきぬるかずには、たれとてもあるまじき身ぞかしとおもふあさましさに、なにとなく[illegible]は申したれども、つや〳〵往生の心(こゝろ)ざしは、げに〳〵しくも侍らず、たゞそこはかとなき事(こと)のみ心のうちにはひきはへて稱名(しようみやう)を[illegible]ふ事(こと)はたきさかたなり。さればとて人(ひと)まねなれとはおぼえねど、かゝるはいかにもねがふ心(こゝろ)のうすければこそとあさましくて、さりともとおもふも、ふけけなきたのみにやと、つねはひげせられ侍(はべ)る」といへば、

答(こた)へて云(い)はく「往生(わうじやう)のみちはひけするこそさはりなれ。いさゝかも心ざしのうすきに、とゞこほる事(こと)はあるべくもなし。そこはかとなき心(こゝろ)とは貪欲なんどの妄念にや、これ又凡

夫のくせにて、さらに思ひたゆむまじくなん侍り。すべてなにかもさもあらばあれ、ゆめゆめにかくまじき事なり。もとより願心の淺深、妄念の多少によりてすゝみしりぞくみちならばこそ、たゞ本願のちからにてすゝる往生なれば、なじか機分にわづらひ給はん。これがために善導大師ひとつのたとへをもて、くはしく安心のぶんざいを釋せられたり。それをだにも、こまかにきこえなば、いぶかしさはなごりなくはるけ給ひなん。そのおもむきは、

たとへば人ありて、にしにむかひて、ゆくさきを見れば、

これはわれらが極樂をねがふにたとふ。

みなみにひの河もえ、

これはわれらが瞋恚の心にたとふ。

きたに水の河ながれたる、

これはわれらを貪欲の心にたとふ。

なかをわたりて、いさゝかのしろきみちあり。

これはわれらが貪瞋煩惱のひまもなきなかに、まれまれ往生をねがふ心のおこるにたとふ。

その二の河のおほきさは、そこもなく又ほとりもなし。

これはわれらが貪瞋のをびたゞしく、ふかくけはしきにたとふ。

このしろきみちのひろさは、わずかに四五寸ばかりなり。

【なみ】妄念をたとふ。

これはわれらが往生をねがふ心のよはく、すくなきにたとふ。

あしふみたてんほどだにも、あるかなきかのみちなれば、たゞをしなべて河とのみみえたり。つや〳〵わたりえつべき心ちもせず。いはんやなみはひまもなくたつ。みちはいつとなくうづもれがちなり。いづくをか、あしにもまかせん。いかでかわたらんとも、おもひよりける。わたらばさだめてしぬべしと、おくしはてゝゐたれば、

これは貪瞋のふかきにくらぶれば、願心はさらに、あるにもあらず。まして妄念のひまなきに、さまたげられて、往生の心ざしたゆみがちなれば、いづかたにつけても、いとゞかなはじと、おそれ、ひげせらるゝにたとふ。

ひんがしのきしに人のこゑありて、たゞそのみちをわたりてゆけ。くるしくばあらじとすゝめ、

これは釋迦のをしへの往生をすゝむるにたとふ。

にしのきしよりは又たゞきたれ、われよく汝をまぼれば、みちはせくとも、水火の河にはおとすまじきぞと、よばふをとするなり。

これは彌陀の本願ちからをくはへてわれらが往生をたすけ給ふにたとふ。

これをきゝてさらばとおもひたつ。みちはあやうけれども、ひたすら釋迦こゝにやり、彌陀かしこによばふしるべばかりをたのみにて、二つの河をかへりみずわたるほどに、

これは心ざしあさく貪瞋ふかければいかでか往生をとけんと、ふつに思ひきりぬれども、ひとへ

に群賊のをしへに、たのみをかけ、彌陀の本願に身をまかせて、妄念のしげきをかへりみず、願心のよはきをあやぶまず、たゞ念佛のあしをいそがすにたとふ。

げにもれい〳〵と二尊の給ひければ、ことなくて、にしのきしにつきぬ、よろこびきはまりなし。

これは[illegible]、極樂にうまれて、たのしみ[illegible]にたとふ。

とこそ侍るめれ。このたとへの心は、我身のほどをはかるには、罪惡のこはさといひ、願心のよはさといひ、かた〴〵のぞみたえたれども、かゝるをもすてぬ願ときくたのもしさばかりにこそ、さては往生も定めたりとは見えたれ。さらにとのが心ざしのよくまさへりみよとはをしへぬものを、人ごとにまづわが心ねをきばしり見て、そのうへに本願をたのまんずる事と思ひあへる。これ二河の譬のおもむきにはそむきたり。されば、たゞこゝろざしのよはきにめをかけず、これにつけてもいよ〳〵本願をたのみ妄念のしげきをかへりみず、ちりみだれてあつねに念佛すべきなり。われよく道を[illegible]ると侍るが、心をすければ、わが心もは、さまでなくとも、たゞたのむ心こそすゝみたけれ。すでに十惡五逆の機、四五十の心ざし、一念十念の行、みな本願にのるにたれり。たれかさすが、このほどらひにかなはざらん。ゆめ〳〵わが身をおろそかに思ひて、往生のみちに、とどこほるべからず。

【六八】又いとわかき女のこえにて問て云はく「つゐのみちは人ごとにのがれぬならひなれば、

【六】安心の問答第五。女人念佛を申せども死をおそるるは信心の決定せざる故なるかの問に答ふ。

【つゐのみち】命終のこと。

【いはけなく】子供らしく。

【七】安心の問答第六。女人五障につきて信心の決定せざるに答ふ。

【いつつのさはり】五障、輪王、梵王、帝釋、魔王、佛身の五になることを得ざる女人の障礙

かなはざらん事を、いはけなく、さのみ、なにかとはおもはねども、いまはのきはのをしはかりは、よにけうとくすさまじきやうにて、などかしなでもすむ往生ならぬと、あさはかなる事さへおもはるゝは、心ざしもなく信もおこらぬにてや侍るらむ。げに往生がしたくて、うたがひなからんに、なにかはかくもおぼえん」といへば、

聖のいはく「この事はひさしく、いのちををしくし、死をおそりたまひぬるくせにて、いかに信ふかく心ざしあらむ人もきとは、えおもひたえずまじき事にて侍り。又それに、さはるまじき不顧なれば、なにかは往生をあやぶまん。そのうへ本意の素懐ちかづかば、なにとせずとも、をのづからよろづをわすれ侍りなむ。さりながら、ようゐはつねにあるべき事ぞ、古人の、死はねふるがごとしといひし、いと心やすき理なり也。」

【七】又なまさかしけなる女のこゝろにて、「彌陀のちかひは誠にこそ、むらなき御慈悲といへに、人により事ことには、よもとたのもしけれども、女の身はことにいつゝのさはりとかや、をもくて、いみじかるべき事にはみなきらひすてられたりときけば、まして往生なんどたやすかるべしともおぼえず。それはた、げにも身にしられたる事おほし。はかなくかたちをつくろふわざだにも、かゞみの心はづかしきまで、つみふかきかたは、こよなくおのこどもよりもまさり侍るべし。すべてかず／＼思ひあつめたる、心のうちをきこえつくしたらば、たうとき御心ちには、いかばかりうとましくも思ひ給へられん。たゞなをも不審などやげにおもほしはなたざらんとはおもへども、一定往生すべしとまではおぼえず」と

いへば、

答ていはく「まことに五障の身はさらなることなれども、又ゆめ〳〵九品ののぞみはひげし給ふべきにあらず。そのゆへは、まづ第十八の願に、十方衆生乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺をとらじとたてられし、その十方衆生の中には男子も女人もみなもらさずをさめられたり。されば男子往生すべくば女人又往生すべし。なじかおなじ本願にのれる機の、ひとりはゆき、ひとりはとまるいはれあらむ。そのうへ女性はさはりおほければ、しゐてもや、なをうたがはむとて、又第三十五の願に、とりわき女人を往生せしめんとちかはれたり。つら〳〵これをおもふに、うちまかせては、えらびこそすてられまし物を、男子とともに願ぜられたるだにもありがたきに、あまさへ女人をばねんごろにふたゝびまでちかはれたる、御慈悲のこまやかさこそ、まめやかによろこびもかなしみもあいなかばなれ。よく〳〵つみふかき身なればこそ、返々は願ぜられたるらめとおもふはかなしけれども、又往生のやすき事は本願に乘ずるゆへなれば、いくたびもちかはれたらむこそ、よろこびにてはあるべけれ。すでに男子は一の願に乘ずるを女人はかさねて二の願に乘じぬれば、他力いよ〳〵つよくなりぬ。往生なにのあやぶみかあらん。中々女の身こそ、そねましきまでうらやましけれ。さるを女人なればとひげせんやは、むげにさまあしきうたがひなるべし。たとひ又おのづから信をとりたるよしなるも、からうじて、男子のつらにたのみをかけて、さしもとりわき、いまひとときはとたて給へるちかひまでをば、つや〳〵さらに思ひもしら

【八】安心の問答
第七、一念多念に
つきての疑問に答
ふ。

ず。これらたてはいなき事になん侍り。かまへてをんな心はかたくなに、わが身ひとつの本願ぞかしと思ひいれて、そばめも見ず、ふか〳〵と、たのみたてまつるべきたり。さても千劫萬劫をふとも、あらためがたき女の身の、わづかなる一念十念によりてたやすく往生をとげんきざみ、すみやかに男子とならん事、それいくばくのよろこびぞや。まめやかに本願の世にこえたる德は、これにてことにあらはれたり。さる御慈悲は又なにゝむけてもと、いとゞ男子の往生さへ、心やすくなぞらへしられぬ。

【八】又男のこゝろにて問ていはく「一念もまめやかに不足なき事ならば、なじかはさのみ多念にとなへよとはいはむ。これをおもふに、いかにも一念もといふは、たゞことはりばかりにて、げには多念にはげみてすべき往生なるにや。」

答ていはく「かやうにゆる〳〵おしへ念にすゝむる、みなそのいはれ侍り。たとへばきみ臣を愛するには仁をもてし、臣きみにつかふるには忠をもてするがごとく、佛はいつくしみ、ふかくませば、一念をもすてじとちかはれたり。機は忠あるべければ、多念にはげめとすゝむるぞかし。しかれどもつみふかき身のならひは物うくてをこたるおりあり。まぎれてわするゝ時あり。わづかに心にははげまばやと、おもひむけたれども、うるはしく身に、つとめうる事はかたし。さればおもたちては、たゞ乃至十念の本願が、たのむところの詮何となりて、往生の入眼をばする物を、あやまりて一念はいはればかりか、多念やまことならむとの給ひつる、返々、さかさまなるうたがひなり。たゞし、たとひはげみえずとも、

【開導】彼は北の國、此は南の國。

【九】安心の問答第八。自力他力の問に答ふ。

かまへてとはなを行すべきなり。かくて最後の一念にと思ふ心ざし、佛の一念をもとをぼしめす御心ざしに相應しなば、臨終來迎にひとしく、往生のみちもそらに通じ侍りなん。すでに心ざしかなふ時は、臨終も同時たりといへば、などか發心ざしかなはんとき、淨穢も隔たらざらん。いはんやつねにとなへんにいたりては、いよ〳〵佛にむかふべし。これによりて善導大師は、衆生ほとけを念ずれば、佛も衆生を念じ給ふゆへに、佛と衆生としたしき縁あり」と釋し給へり。いまさる佛の衆生を念じ給ふとは、このとなふることをきこしめすごとに、かならずめぐみにてされよと照覧し給ふなるべし。さしもきこゑがたき凡夫の思ひだにも、念力はほしいたき物にでてとほるなるに、まして佛の御心ざし、さらにおきへ〳〵と念じ給はむ。いまさらなにか疑し侍るべき。これをおもふに、いとゞ往生はさうゐあらじと、たのもしくとぞおぼゆれ。かゝるにつけても、ます〳〵名號をとなへて、佛にもつねに念ぜられたてまつるべし。そのうへ多念をはげむあまりにこそ、おのづから一念もおなしからずと思ふ信心もおこれ。十聲一聲もといふに、うちゆるびて、あまり懈怠になりぬれば、はてはさりとものたのみも、なくなる事にて侍り。」

【九】又問ていはく、「一念といひ多念とすゝむるいはれ、あきらかにうけ給はりひらきぬ。たゞしかく多念にはげまんと思ひなば、また自力の心とはなり侍るまじきにや。」

答て云はく、「自力他力の法門は、こゝろ龍樹の論釋よりいでゝ、ことば曇鸞の釋義にあり。そのをもむきをみるに穢土にありながら不退にいたるみちを自力といひ、淨土にゆき

【西谷の上人のの給ひける】和語燈錄第四、登山状に示す詞の中にあり。

【二〇】安心の問答第二。本願の尊きことを常に思はれぬ安心問答のなげきに答ふ。

て衆生にかなふ門を他力となづけたり。そのほかに、またく聖道に念佛おほく申すを自力ときらはたる文なし。しかるををろかなる學者、經釋にもなき事をつくりいでゝ、みだりにをのが心をほしきまゝにする。これさたのほか、さらにもちゐるにたらず。詮するところ南無阿彌陀佛ととなふるは、たすけ給へ阿彌陀ほとけといふ義なれば、しば／＼念ずるは、還す／＼他力をかこつにてこそあれ。いか程となへなば自力にはなり侍らむ。されば念佛するをば、をさなき子の、ふかきあなにおちて父母をさけびよばふにたとへたり。それいかによばふとも、をのがこゑちからにてはあがらぬや。たゞきこえてたすけられん事をのみこそおもふらめ。稱名行の用意これになぞらへてしりぬべし。いかに稱念にはげむとも、をのがちからにてはかなふまじければ、たゞいくたびも彌陀にうれへきこえて、他力の往生をとげんとなり。いはんや又一聲一念をかろしめて、無間長時にもとなへばこそ自力の心ともきらはれめ。一念なを往生に不足なし。まして多念つとめたらんはと思てはげまんは、いづくぞ他力の信心にそむくべき。されば西谷の上人の給ひけるは、佛すでに一こゑもわが名をとなへんものをば、かならずわが國に生ぜしめんとちかはれたれば、たとひたゞ一遍の念佛ばかりにても、なを一度の往生をばとげぬべし。まして一晝夜の念佛をとりあつめてなどか一度の往生をせざらんとこそ侍りけれ。」

【二〇】又おとこのこゑにて聞ていはく、「さすが、ひたすら念佛に信なき身とはおぼえねど、しかも本願のたうとき事なんども、つねにも思ひいでられねばいかゞし侍るべき。」

【かゝる】 あゝこ

（三）惟て、まことに信心は、たえずすゝむべきものになん侍り。すべて事の心、世さつたはかたく、凡のいねつねになれたれば、悪縁はいとへどもおこりやすく、善心はねがへどもしりぞきやすきゆへに、いかにもさでうらそむば、やがて取いとをまれる事侍るべし。しかるに信心をもまをすはし、ひとつにあらざれども、ことにたよりとえたる縁になあり。一には師にしたがひてたうとき行をせよ、二には聖教にむかひてそのことはりをあきらむ、三には信心あるともにそひてつねに後世物がたりすゝ、四にはこゝろをたてゝしづかに念仏申す、五にはわが身のありさまに心をかけて、たすわざの、みなつみなる事をおもひしれば、かゝるをも、すて給はぬふしぎさまと、いよいよ本願に信心をすゝむなり。これらはいづれもみな善縁なりといへども、大かた行は信によりてすゝみ、信は行によりてすゝむ物なれば、むまへて、たゞ念仏をもて心をもよほすべきなり。閑思無爲にして専心に念仏するに、稱名をとなふるすみぬればいかにも信心うごかずといふ事なし。信心もよをされたちぬれば、又稱名へりていきまし。さる程に信と行とたがひにたすけられて、往生の業いよいよすゝむゆへに、かたがたたくみなる故實にて侍るなり。」

西要鈔　下

向阿

【二】安心の問答第十。心念聲念につきて答ふ。

【二】又問て云はく、行住に心に念ずるも口にとなふるもみな本願にかなふべしや。そのなかには、いづれかすぐれて侍らん。

答て云はく、高祖大師、上尽一形下至一念と釈し給ひて、みな本願におさめられたり。されば往生のためは、いづれも不足あるべからず、しかあれどもおなじくは聲にたてゝとなへんことよろしかるべし。それにつきて又わがみゝにきこゆるをば、軽聲念仏とて、かろきこゑとはいへり。たぞらふるに人のみゝに、きこゆる程ならんは高聲念仏のうちなるべし。これに十の徳ありととけり。一に聲たかければ、ねぶりさきにはさこえ侍らじ。その中にとりわき要なるは、まづ三途の苦をやむといふ徳ことに大切なり。すべて地獄餓鬼畜生は、みないづれもたとしへなきくるしみなるを、たゞめにみればこそあれ、すかにもきゝもすれば身もいたき程なり。心あらん人はいかでか悲心にたへん。いはんやそのなかの衆生はいづれかわが父母にあらざる。いまくるしみにかゝるむくひ、なにゝかよりし。しかしながら、子をおもふふみちよりこそ、なかきやみにも、まよひきぬらめ。これをおもふにいとゞなげかし。いかでかせめて、片時のくるしみをもたすけて、しばし心をもやすめさせたてまつらばとお

【男女貴賤】心地觀經の偈の文。

【遵式法師】宋の台州寧海の人、初め律部を學び、後天台宗に入る。明道元年十月十日寂、壽六十九。

【禪林】永觀律師をさす。

【圓悟法師】晉の惠遠のこと。釋文は念佛三昧の詩序に出づ。

もへども、「男女貴賤にあらざれば輪廻たし。輪廻を見ざれば厭すべきこと難し」と。かたはぬちからのみかなしきに、いまこの念佛のこゑにそのくるしみのやむらんこそ、たのもしくうれしけれ。又には睡をも散さむとて、高聲に念佛すれば妄念やみて心みだれぬ德あり。これにより遵式法師の念佛の方法をしるすには、「大聲をたしかにとなへて、高聲にはやくよばへ」といへり。又諸佛歡喜すと云ふ德ことにたうとし。念佛をばよろづの佛みなによりて、ほいとし給ふゆへに高聲に稱すればいよ／＼きゝて隨喜し給ふ。さればとなふるたびには、いまいかに、よろこび給ふらんとおもひやられて、ことにたのもしくおぼゆるなり。このほか禪林十の德をくはへて、きくもの滅罪すと釋せり。これ、げにもゆゝしき利益なるべし。さしも見る世には、つみふかげたるもののみおほくて、あはれ惡道のすもりやとかはゆきに、さるはつや／＼後世とだにもいはねば、いかに罪業もいとゞ心のまゝにつもるらん。せめてとなへだにもきかせたらば、すこしのつみはきえなんかし。これはかりなき事にあらずや。そのうへわが身のつみを滅するに、又重々の益あり。圓悟法師の釋に、「自然に玄音の心を叩くを覺す、聽けば則ち塵累每に消え滯情融朗たり」といへる心は、みづから聲をあげてとなふるこゑ、かへりてわがみゝにいれば、心たゝきうごかされて、たうとしときく。きけばすなはち罪業もつれに滅し、むせびたる妄念もうちはらはれて、むねもあき心もゆる／＼となりぬと釋するなり。げに稱名は、さる物にてこそあんめるを、これまでとなへ心みて、念佛のきゝしりたる人はいとまれなり。なによりも

【一二】安心の問答第十一。念珠をもつことにつきてのよしあしに答ふ。

【飛錫禪師】唐の草堂寺の沙門、釋文は念佛三昧寶王論に出づ。

身づからとなへて、みづからきけば、きくにもきえ、となふるにもきえて、一こゑ佛を稱するに、二たびつみを滅すらん巨益こそ、返す返へす甘心せられておぼゆれ。かゝるを塵果つねにきゆともかけるなり。まことに天下の稀妙にあらずば、なに物か功これとひとしきならむ。かくのごとくの徳おほし。かまへてこゑにたてゝ念佛し給へ。たゞし塵緣をはからひて、人のそしりをばはぶくべく侍り。」

【一二】又さきのわかき女のこゑして問て云はく、「世にしたがひ、人にまじろふならひはうちたえ、念珠もつ事もかなはねば、かぎりある數返をば、あしたの程に申はてゝ、このゝちはわすれず、心にかけんとおもふは、猶そらくなるにて侍るか。」

答て云はく、「よくぞかくまでも、おもひ給へらるゝ、これは、ねんごろなるにこそ侍れ。おほかた法然上人は、數返をばかまへて一日一夜にしはつべき事ぞとの給ひけるとかや。それも詮は、つねに心をかけさせんためなれば、いまの用意、さらにくるしく侍るまじ。たゞし念珠は、念佛のもよほしにて、もたずばいかにも、わすられやせむ。しかるに飛錫禪師の釋をみればめづらしきずゝこそ侍れ。世の人多く水精木槵等を以て數珠と爲す、吾は則ち出入の息を以て念珠と爲し佛の名號を稱す。之を出息に隨へば大なる特情あるは、安ぞ一息の虛らずして後世に屬する者を論んや、」といへる、これいと人の思ひよらぬ心ばせなり。げに水精木槵子などは手にもたるもわづらはしいでいるいきをずゝにして、南無阿彌陀佛とあゑきゐたらん程に、たくみなる事こそ、あるまじけれ。ねぶらば念佛をふ

【三】安心問答第十二。念佛の功德の廣大なるを云ふ。

くみていれなんず。きのふ又つぎてとなふべし。いきにつれたる、念佛なればこそ、數遍なじおわづらはん。まづつみにいきとまらば、念佛とともにをはりなんず。げにもなにゝよりてか後世にうつらん事をおそれん。かたがた心やすきずゝにこそあんめれ。これにてかまへて申ならふべきぞや。」

【三】又はじめさるべきかしありつる問の端にて問て云はく、「凡そ不可思議といふかたは、なにゝもすぎてたのもしく候へども、なとやらん南無阿彌陀佛と申ばかりは、餘の行よりも、むげにかろがろしくて、いく程の功德なるべしともおぼえ候はねば、さだめておもひひがめたらんか、くはしくは因緣をたて給へ。よろしく信心をさゝさん。」

答て云はく、「さるなり。彌陀の名號をば『無量壽經』には卽ち是れ無上の功德を具足す、ときて、これよりはさらにかみなしとほめ、『稱讃淨土經』には無量無邊、不可思議功德とのべて、はかりもなくほとりもなしといへり。いまこの名號の、ひとり大善なる事はもと、法藏菩薩の五劫思惟のたくみ、彌陀如來の不思議成就のちからよりおこりて、もはら福薄因淺のともがらを大乘善根のさかひにみちびかんための方便なり。されば まづ菩薩かたじけなく罪惡の衆生にかはりて、身命をおしまず難行苦行し、萬善まどかにつとめもて、つゐに佛になり給ひにしのち、あらゆる因行果德を、ことごとく名號の中におさめて、のこりなく衆生にゆづり給ひぬ。これによりてその名號をとなふれば、おさまるところの功德、みな衆生のくちのうちにながれいりて、さながらおのが物となるゆゑに、念佛の行者

【六賊】心の對象たる色聲香味觸法の六境は善法を傷ふが故に賊に譬ふ

の功德は、またく彌陀とひとしくしてことなることなし。まことに佛かゝるはかりごとをめぐらし給はずば、いかでかをろかなるわれらたやすく大善をえんや。抑佛果圓滿の御身には、萬德ひとつもかけず、これをつかねたる名號なれば、又いづれの善根かおさまらざらむ。一々の諸善は、たゞわづかに、その中の小分にこそあたりたれ。念佛にをよばん事、さらにはしたてゝもかなひがたし。しかれば名號は一念なれども、滅罪生善の功おほきに、諸行はちからをつくせども、除障獲益の用すくなし。かるがゆへに阿彌陀經には餘行をば少善根とおとしめて、かの國にうまれがたしととき、名號をば大善根とほめて、往生する事やすしといへり。さるを人ごとに無上の名號をばみだりにかろしめ、無下の諸善をばはかへりてをもくする、これ返す〴〵僻案なり。すでに土塊をつみて泰山のたかき事をなせり。はやく積礫をすてゝ玉淵のふかきをうかゞへと思ふ。さても無始よりこのかた、六賊のためにかすめられて、一善をだにもたくはへざりつる身の、いかでかゝる遁世の本願にあひて、大善の名號をきゝえつらん。これしかしながら大慈大悲の善巧、釋迦彌陀の佛恩なり。たとひほねをくだきてもたやすく報じつくさんや。すべからく、身のたへん程となへて、むくひたてまつるべし。それ又いかにいみじくとも、たもちがたくば、いかゞせましに、萬善をつかねて六字につゞめたれば、名號は稱しやすくして功德ははかりがたし。されば無上の寶聚、もとめざるにおのづからえたり。往生の業因、たやすくして又たりぬ。あはれ雜善の功すくなくして、行じがたきにはにぬ物かな、をろかなるわれらがためには、げに

【良驥】千里をかける名馬の名。
【良樂】王良伯樂を謂ふ。よく馬を知る名人。
【一四】安心の問答第十三、攝取不捨の問に答ふ。

かくこそたくみ給ふべけれ。これまでも佛の御心ざしのせめてなれば、おぼしのこす事もたきなりけりと、かたじけなくこそ侍るを、とたふるが事やすきによりておもひかろめんは、なげに物のこゝろをえぬなるべし。良驥が良樂にいばえしは、これしると、しらざるとなり。いつかやせたるを見ていきをひの驥なるをいやしみし。凡愚の佳名をとなふるも又しるとしらざるとなり。なじかやすきによりて徳のひでたるをかろしめん。いとをろかなりや」と、色代もなくはづかしめきこえらる。

【一四】又さきの老らかなりつる女のをとにて、「念佛申ものをば、阿彌陀ほとけのひかりをもて攝取してすて給はぬとかやうけ給はる。その攝取不捨とは、いかなるいはれにてか侍る。物のいひしとも心をえぬは、たうとさもいますこしをろそかにて」といへば、

答て云はく、「この法門は經釋のなかにも、いみじき事に申て侍り。まことによくきこしめしゝり給ふべし。まづ攝取不捨とは、阿彌陀佛光明をもて、はるかに念佛のものをてらして、ひかりの中にをさめとりて、すて給はずといふ事なり。ちかごろあるひじり、これをいぶかしき事にして、いかなるいはれならんと、佛にいのり申たりければ、ゆめのうちに本尊みてをのべて、かのひじりのうでをとらへて、やゝしばしもて攝取不捨とはかゝるをいふなりと、しめされたりけるとなん、きゝつたへ侍る。それにてげにもよく心えられたり。たとへば光明の、みてをのべて行者の身をかゝへもて、ながくすて給はぬいはれなるべし。これも又例の御慈悲のふかさは、こまやかにこそ、おもひかまへられたれ。

【一五】第十四、安心の問答
攝取不捨み光明の功德につきて答ふ。

すでに平生のあひだは、本願をもてかならずうまれよとまぼり、臨終の時はみづからきたりて、むかへとり給ふうへは、かたがた往生のみちのあやうかるべきにあらねども、さすがなをこなたのきしにあるを、心やすからずと見給ひて、はるかに光のなかにさしこめて、時のまもてをはなたじとし給ふなり。されば一たび光明のなかに、おさめとられなんに、ながくすてらるゝ事はあるまじければ、往生こそいとゞうちかためておぼゆれ。いけらむ程は光のなかにこもりゐて、いのちをはらば花のうへにうつろひなんず。すべて平生より臨終まで、心ぐるしからぬみちづたひたり。さればかまへてつねに光明のなかにある心ちをしてま心に念佛し給ひあへ。」

【一五】又云はく、「物はいか程もこまやかにこそきくべかりけれ。さしもあやうげなりつる、二河のたとへのおもひやりも、この不捨の光のたのもしさには、いまひときは、人にてをひかれたらんやうにて、みちのほそさもいとゞ心ぐるしからず思ひわたりぬ。さればこの光明のかくまでたうとき事にて侍りけるよ。なを又いかなる利益かとおくゆかしくおぼゆるは三垢消滅すとかやいふなる事を、ちとみゝにふれてしやうにて一といへば、聖のいはく、「さる事侍り。この攝取の光明にてらさるゝものは貪瞋癡の三垢ことごとく消滅すととけり。そのいはれは、たとへば日のひかりは火の玉よりいでたれば、物をかはかし、月のひかりは水の玉よりいでたれば、物をうるほす用あるがごとく、いまこの光明は、佛の無貪、無瞋、無癡の三善根よりいでたれば、衆生の貪欲、瞋恚、愚癡の三毒を

【二三】安心の問答第十五、臨終正念のこと

【ほれたる】生死の境周旋せず、惘然失念せるをいふ

けす徳あり。又いかにふる雪も、かたへの空に日かげたえぬ程は、かつ〴〵きえて、つもりあへぬやうに妄念しば〳〵しげけれども、ひかり不断にてらせば、罪障かつ〴〵滅してさらにしばしもつもる事なし。おほよそこれらの利益は、みな阿弥陀仏の衆生をあはれみて、そのつみを滅してたすけんがために、願をたて行をおこして、かゝる不思議の光をえ給へるゆへなり。しかるにこの光明は、たゞし念仏のものをのみ摂取すといへば、われらすでに名をとなふ。ひかりのさだめててらすらん。名をとなへて無上の功徳をうれば、浄土の業ふそくあるべからず。ひかりにふれて無量の罪悪を滅すれば、往生のみちなにのさはりかあるらん。まことに光明名号のちからにあらずは、いかでか滅罪生善のすみやかなる事をえん。これひとへに大悲願力の方便、他力本願の御恩なり。しづかにおもへばよろこびにたへたり。などか身をくだきてもむくひん心なきや。

【二三】又おとゝのことにて云はく、「すべて人の臨終ほどに物の大事なることこそ侍らね。あるいは正念もなくなりて一向にほれたるもあり、あるいは苦痛にせめられて萬事をわすれたるもあり。かゝるありさまどもを見れば、そゞろに身の上もおそろしくて、もし最後の十念もかなはでばし、をはらばいかゞせん。聖衆の来迎もあひまじばかりにてややみなんと、きもつぶらはしく侍る」といへば、

答て云はく、「この御不審は臨終の早晩によりて引摂の有無はさだまらんずる事と思ひ給へるよな。いまだ来迎の本願をたてられしおもむきをこそ心え給はざりけれ。おほかた臨

【四魔】五陰魔、煩惱魔、死魔、天魔。
【三途】地獄餓鬼畜生の三道。

終正念をのがちからにてはげみえんずることゝおもへらんは、さだめて相違し侍りなん。なべて人の最後には病苦のかなしきのみならず、死苦さへくはゝりてたへがたきうへに、つくりをきたる罪業はめん／＼にきをひおこりて、まづわが懷をむくへとせめ、われまづ惡道へひかんとあらそふ。四魔又ちからをおこして、かまへて三途におとさんとさまたぐれば、一かたならぬさはりに、病者正念をうしなひて、いよ／＼顚倒をます。この時にあたりては、いかにすともつや／＼をのが心もをよぶまじく、人のちからもかなふまじき事なり。しかあれども阿彌陀ほとけかゝるおりふしを御覽じたすけんとてかならず聖衆とともに來迎せんとちかはれてしゆへに、臨終期いたれば、かひ／″＼しく誓約時をたがへず、そのまへに現じ、慈悲をもて、くはへたすけ給へば、心さらにみだるゝことなく、佛の威力つよければ、罪業のちからにもあらそひかちて、四魔さかひをへだて、三途ほそをとづる物なり。されば、臨終正念はひとへに聖衆の來迎のちからにより、聖衆來迎は又平生の念佛の功にあらんずる事と心をえて、いか樣もたゞいまの念佛をくり返しかならずむかへ給へと、佛にきこえをき給へ。さしもおほな／＼、たてられたる本願なれば、あひなたのみなる事はよも侍らじ。この世の事も一大事とおもふはさこそあれ。まことしき人にかねてよくやくそくしをきぬれば、おもひそうけて、その期は中々心やすきやうに、病者はいかに苦痛もあり狂亂もせよ。佛はたしかに日ごろのちぎりをおぼしわするまじければ、もとのちかひあやまらず、さだめて來迎し給ふべし。來迎ちかづかばおのづからくるしみ

【一七】第十六。性かたくななる人の安心に答ふ。

【一八】第十七。安心の問答 佛に妄語なきこと。

もかろみ、心もたゞしくなりて、十念のぞみのごとく、往生さうゐあるべからず。されば佛智あやまりたふらんに、なにかをはりをあやまたん。これぞげにつかのうへにもかけぬべきこと、心やすげにの給ひしらす。

【一七】又明のこゑして、「わが身は、性かたくなにして、心をろかにして物のいはれなんど、こまやかにきゝわくまでも侍らねば、不審いしく〳〵の事も、なをたちいりたるやうにて、中々是非にまよひぬべく侍り、いかさやすく〳〵と心えられて、往生のためもしかりぬべき事、ひとはしうけ給はりとゞめて、最後の安心にし侍らん」といへば、

答て云はく、「その事に侍り。さやうの人の御ためは、たゞ念佛申せば往生すとは、まさしく佛のの給ひたる御ことばなれば、『ゆめそらごとあるまじき事ぞ』といふいはれが心えやすくて、しかも思ひえつべきことはりにては侍るなり。このひとはしをだにも、ひしと信じ給ひたらば、よろづのうたがひもはれて、往生の安心さらにふそく侍らじ」といはるれば、

【一八】又云はく、「まことにこれはわれらがぶんにかなひたる心もちにて侍り。たゞしもとより佛の妄語し給ふべしとは存ぜねども、なを往生は一定ともおぼえ侍らぬ」といへば、

答て云はく、「などやさはおもひ給ふ。佛語がまことなるべからんには、往生の不定なるべきいひはなき物を。盲者は明眼のみちびくにしたがふがごとく、凡夫は、まよひふかくして因果のことはりにくらければたゞさとれる佛の御をしへによりてこそ、つみつくれば

【揚傑】宋の人禪宗淨土教を學ぶ。
【夫惡業】十疑論の序の文。

【孤山】宋の智圓釋文は西資抄にあり。

地獄におつなんどいふことはりをも信じあひたるに、いかなれば念佛申て往生すととかれたるのみか、とりわきさしもうたがはしき事にても侍るらん。されば揚傑がことばに「それ惡業を造りて苦趣に入る、彌陀を念じて極樂に生る。二種皆佛言なり、世人地獄に墮するを憂へて、而も往生を疑ふ者亦惑はずや」といへり。げにこのいはれをもて、かまへて決定とおもひふせ給へ。いはんや彌陀の本願をときあらはす事は、たゞ釋尊ひとりの御ことばにあらず。十方恒沙の諸佛もことごとく證人にたちて、いま念佛すれば往生すといふことはまことなり、うたがふべからずと同時にしたをのべて、同音に證誠し給ひき。さしもいつはりおほき人のことばだにも、あまたになればたのまるゝ事にてこそあれ。まして佛語、虚妄ならねば、たとひ釋迦一佛の說ならんすら、かろしむべきにあらざるを、諸佛さへ又一同にまことのことばをのべ給ひけん、その會の儀式みる心ちして、身のけもよだち、たうとくこそおぼゆれ。これをきゝながら、いかゞさはいさゝかの不審をものこし侍るべき。はやく三千の長舌に往生のうたがひをすてゝ、六字の口稱に決定の信をおこし給へ。そのうへかやうに諸佛こぞりて、一大事とし給ふ稱名なれば、往生に他力をくはへらるゝ事又ひとつにあらず。いはゆる彌陀の本願のちから、かしこよりよばひてむかへ、釋迦の勸進のちから、こゝよりいだしたてゝつかはし、諸佛の證誠のちから、傍よりまぼりてをくる。この三のちからをあはせて、念佛のひとつをたすくるゆへに、惡業にうまるゝ事もともやすし。されば、孤山の釋に「大海を度るに既に巨船を得、仍て良導あ

【一九】安心の問答
第十八。疑心邊地の問に答ふ。

りて加ふるに便風を以てすれば必ず能く速かに彼岸に到るが如し」といへり。たとへば、彌陀本願をたてゝ、しづめるをすくふはふねのごとし、釋迦慈悲をもて、まよへるをみちびきやるは、わたしもりにおなじ。諸佛護念して淨土へをくりとゞくるは風のたよりをえたるにゝたり。いまは南無阿彌陀佛のこゑをほにあげて、生死のうみをわたらんこと、さらに逗留あるべからず。かくのごとく諸佛はからひあはせて、よろづの事そなはりたる縁にあひながら、なをあやぶみて穢土にとゞまらんはげにたれがとがぞ。さらにうらみどころこそ侍るまじけれ。せめてもつみのくゐをしにぞ、しゐてもうたがはしかるらん。いとおしくこそ」とかなしみくどき給ふ。

【一九】又、おとこのこゑして問て云はく「疑心あるは邊地にうまるとかやうけたまはる。いかなる事にて侍るぞや。」

答て云はく「邊地は極樂のうち、九品のほかのかたほとりなり。かしこにうまるゝ心もちは、かゝる罪業ふかき身はをのづからつみにてきたふほど、功德をもおほくつとめえたらんはさらなり。わづかなる一念十念にて往生せん事、いかに本願いみじくともよくかたかるべしと、佛力をかろしめうたがへるもの、この邊地にうまれて、五百歳はなのなかにはらまれて、見佛聞法せずとみえたり。おほよそ事のいはれは、佛智不思議にして、ちいさき功德をも大になし、をもき惡業をもかろくなす功あれば、重罪を一念に滅して往生を九品にとげん事あやしむべきにあらず。されば古人のまよへる者、うたがひをそのあひ

【二〇】安心の問答第十九。懈慢國の問に答ふ。

【二一】安心の問答第二十。安心も起行もなきものの人につきて結緣をとく。

だにをく。まづ佛よくしたまはざらんやといへるもこのゆへなり。さるをおろかなる心にて佛力をかろしめたてまつるとがつねにすぎたり。むくひさだめて惡道にこそあるべきに、大悲世にこえてなを邊地までもゆるさるらん、佛恩まめやかにありがたし。ましてひたすら本願を信じたらん身の、なにごとにもらされたてまつりなんと、いとゞたのもしくおぼえて」と、いはるれば、

【二〇】又問て云はく「懈慢國とかやいふなるは、いづこに侍る所ぞ。いかなるものゝ、かしこへは、うまるゝにかあらん。」

答て云はく「懈慢は安養のほか娑婆にちかき國なり。これは往生をせばやなどはいひながら、心ちもよは〳〵とうきて、佛につきても、行につきても、ひしとひとかたに思ひかためたるけもなきものが、まづこゝまでうまれきてのち、そのいのちをはれば、かならず極樂へつたふ所なり。これ程なをざりなる心ざしだにも、なをかくちか〴〵と、ゆきよりぬるぞかし。さすがかまへてと、とりたてねがひもとめん人の、なじかはとゞこほるみち侍らんと思へば、いとゞすゝましくて」とあれば、

【二一】又問て云はく「いさゝか極樂に心をかけ、念佛をくちにふるゝよしなるものゝ、安心もかけ、起行もとげずして、なほ邊地懈慢にもをよばざらんは、つゐにさてなにとなり侍らんずるぞや。」

答て云はく「さるものはその係念をはたしとげさせんとちかはれたる本願があれば、た

【三二】本書の結。

とひつぎの生にこそかなはずとも、[illegible]くらずして三生にはかならず往生を得るべし。つらつら佛の心をおもふに、衆生のものをあはれむ心ざしねんごろにませば、本願、人をすくふ心ばせてこまやかなり。機の上下をもらさじと、くらゐに九品をわかたれたるのみならず、佛智をうたがふとがありて、九品に入がたきものをば邊地をまうけておさへ、極楽の執心よはくして、邊地までもをよばぬものをば、懈慢をかまへてみちびかる。かやうにもるゝものはあらせじと、すきまなき御方便なれば、さすがなにとすとも、このうちにはづるゝ事はあるまじきを、なを又それまでもかなはずして、もし穢土にとゞまる衆生もあらば、とくしてほいをとげさせんとまで、ちかはれたる御慈悲のいたりのふかきこそ、なのめならずおぼゆれ。しかあればいまの世に念佛申あひたる人はみないづかたにつけても流轉ひさしかるまじき身となりぬるなり。さしも生死はるばるとして、出離いつとしも、なかりし身のわづかに一念の縁をきざして、三生にのぞみをとげんすら、なほ過分の利益なるべきに、あまさへ来迎を終焉のゆふべにまち、往生を順次のあしたに期する、これ曠劫の大慶中々いふにもすぎたり。まことに願力のふしぎにあらずば、いかでかかゝるおほけなきたのみをかけん。げに思ひとけば悲喜もこもごもにながれ、いひつゞくれば佛恩もいまさらにこそおぼゆれ。たゞしかゝる悲願にあまへて、心ざしゆるらかにはあるべからず。くらゐを上品にあてがひて、心行を急にすべきものなり。」

【三二】かやうに群疑はしおほくして、數篇事をつくさるゝ程に、東窓あかつきいたりて西戸

に月のこれり。「さらばやう〳〵まかりいで侍りなん。いと興にのりぬべきみちたり」といはるれば、面々に、げにもさのみはいかゞとなごりおほくてやみぬ。凡はからざる両度聞法の得益は、これしかしながら二尊遣迎の方便なり。すでに化風あふぎてたびかさなりぬ。いまは疑霧はれてのこる事なし。されどもうらむらくは日にそへて老の心ほれもてゆけばいかにも程へんまゝにわすられぬべし。これがために又かの要篇をあつめてこの両巻にしるす。よろしく先聞にそなへて、つねに一具とせむとなり。

西要鈔巻

【一】父子相迎の恩愛をのぶ。
【四生の群品】一切の衆生と云ふに同じ。四生とは生物の生る形體に四種の異りあるを云ふ。胎生卵生濕生化生の四。一切の生物は此四種の中必ず何れかに屬す。
【佛乘の性】佛となるべき性能。佛性と云ふに等し。
【十號】佛の十號若くは如來の十號と稱するもの。如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊。
【かりつかひ】驅使。
【五欲】色、聲、香、味、觸の五境は心をして貪愛を生ぜしむるが故に五欲といふ。
【淨刹の四德】淨土に於ける四種の功德、常樂我淨。

父子相迎　上

向阿

【一】夫四生の群品いまだいやしとせず。みなをのづから佛乘の性をうけたり。十號の尊位なんぞのぞまざらん。たれかもとより法王の御子にあらざるや。しかあれどもわれらひとたび自家をまどひいでゝ、ながく他鄉にとらはれてしよりこのかた魔王譜代のやつことして、六道縱横にかりつかひにしかば、身つたなくして姓をも名をもいはず、心をろかにして父をも母をもおもはずなりぬ。あやまて名利のひとやを迷境のなかにかまへ、恩愛のきづなを妄緣のうへにむすびぬるのちは、安養を本國ときけどもゆめ〳〵かへらん心もなく、彌陀を慈父といへども、つや〳〵なつかしきおもひもなし。たゞ穢土の五欲をまたなき寶にして、淨刹の四德をないがしろにせり。これひとへに倒見めをくるめかし、著想こゝろをゑはすによりてなり。しづかにこれを思へば心驚悲歎にたえず。はやくこれをこしらへて、父子相迎せしめんとおもふ。これがために塵鄉にとゞこほるまよひをいさめて、佛國をこふる心をすゝめん。

【二】そのまよひ百端なりといへども、ことにをろかなるは四倒にあり。

(一)一にはきはめて不淨なる身をきよしとおもふ。これははなはだをろかなり。しらんとおも

【四倒】四種の顛倒したる思想。
【なづき】脳。
【青黛】青きまゆずみ。
【紅粉】頬につくる紅。

はゞをのが身のうちをさぐり見よ。ながくみじかきほね、ふし／＼をつぎあつめたるに、ふとくほそきすぢそのつぎめつぎめをくさりあやつりて、それにあかきしゝむらをまとひ、うへにしろきかはをはれり。からべにはなづきをいれていたゞき、はらにははらわたをつゝみてかゝへたり。いづくかひとつとしてきよき所ある。たとひ海水をかたぶけてあらふとも、いかでか清潔なる事をえむ。とりたてゝいはねばこそあれ、おもひとけばさもあれながらきたなき身をせめてもまよへるあまりに、ことさらきよき物とのみおもひなして、をのれなりなるけがらはしさをだにも心うつくしう、わすれはてたるに、いとゞ青黛まゆをかき、紅粉おもてをかざりて、つや／＼もとのおもかげもなく、いろどりなしぬれば、こはわれかの心おごりに、うちをくかゞみもなごりおしくおもふ。ましてよその人めは、ひたまよひなり。このあやまり罪をなす事ふかし。いかでしておぼらかされぬ事あらん。つかのうちにすまぬばかりぞ人みなきつねの媚をなせり。野外にをかざる程、かばねよく人の心をとらかす。なんぞかりのまゆずみをみてまことのしゝむらをわすれたる。わづかにうちむかふいろにめをとゞめて、皮ひとへのしたをおもひもやらぬ心のいたりのみじかさこそをろかなれ。心にくきところあらば、たゞ野ばらにゆきてしにかばねのふせるを見よ。四支肪脹して、虫うみしるをはみてむぐめき、五臓爛壊して鳥はらわたをつかみてあらそふ。これなんさながらありのまゝなるすがたなり。愛著の心なをいかゞおもふ。てをもふれ、身にもちかづけなんや。むしをもそねみからすをもねたみなんや。さしもはなやかに

【仙方のゆき】仙人の藥方に降雪とて白くする法ありといふ。
【粉】白粉の類。
【あおみつしみ】青黴のこと、五體腐爛して青くただれたるさま。
【妓爐のけぶり】妓女のたく香爐。屍のくさきことはそのけぶりにてもまぎれがたかるべしとなり。
【先賢】九相の詩の作者をさす。或は東坡の作なりといふ。
【されたるからうべ】暴れたる髑髏。
【汝等臭屍】善導大師の往生禮讃無常偈の文。
【此の人皮に】善導大師の法事讃の文。

にほひふかゝりしも、さらにをのがいろかにはあらざりけり。いまはたとひ仙方のゆき、粉をほどこすとも、このあおみつしみたるいろをばうづみがたし。又妓爐のけぶり、薫をゆづるとも、このくさく、けがらはしきかは、まがふべからず。たゞみるものはめをふさぎはなをおほひてのみさる。うたていつしかなるこゝろがはりかな。戀んなみだのいろは、おもひをく心のみしほれて、野ばらの露ほども、こけのしたまでは、かゝらぬなさけなりけりと、かばねもし、たもとにすがりてなきをらば、なつかしかりしなごりともなく、いかゞ身のけもよだちて、をそろしからむ。先賢の紅粉翠黛は、たゞうすきかはをいろどり、男女の婬樂はたがひにくさきかばねをいだくといひけんも、いまこそ思ひあはすべけれ。いきてもしにてもおなじ不淨なるに、などかなましきを愛し、かれたるをにくむ。樵夫のみちをゆくとてされたるからうべをみて、いゑにゆきてをのがめの、かしらをさぐりてすこしもたがはずと、ひとりごちけるがふつにおもひすてにけるはうらやましき心もちなり。あはれなどわれも人もかゝる心のおこらざるらん、さしもほとけの「汝等臭屍を抱きて臥すなかれ。種々の不淨を假に人と名く。」とはをしめ給へるに、せめては我身ばかりをこそ、かゝへもふさめあたりさびしとなげくまでは、あまりうたてきまよひざまなり。されば善導大師は「此の人皮に髑骨を裹むに誑はされて三途に自ら入りて悔ふべからず。」との給へり。げにたがはぬ馬のほねに、人のかわをきせたらんぞかし。これをえさらぬほだしとして、いかにぞのちの世のうきめをみんとするや。よく思ひつゞけて心すみやかにおどろ

【三界は安きこと】法華經の文。

【原憲】字は子思、魯の人、孔子の弟子、清貧にして道を樂しめり。

【もゝつゞり】百結、幾つもつゞりあはせたる衣裳。

【顏氏】名は回、孔子の弟子顏淵。貧にして一簞一瓢の裡に道を樂しみ亞聖と稱せらる。

くべし。

二には苦を棄て樂をもとめ、これ又きはめてつたなし。三界は安きことなし、猶ほ火宅の如しといへば、いづこも心とゞめて、ゆるらかなるべき所にはあらねども、ことに人間はめのまへなれば、みるにおもひのとるかたき事おほし。その憂苦しげかるべけれども、たゞいひもてゆけば身心を根元としておこれり。身に生・老・病・死あり。いづれかくるしみにあらざる。心に貪瞋癡あり。ことごとくわづらひをなせり。その身のくるしみのなかに、生苦はしゝむらをけづるがごとし。いたみなけともいはけなくして物いはざれば父母はたゞよろこびていだきもてあそぶ。死苦はつぎめをたつににたり。かなしみさけめどもたましゐさりてかたらざれば、妻子はなげゝども、さらにかくまでともしらず。病苦はいたましけれどもしなぬ事もあればとおもふになげきとせず。老苦はすさまじけれどもいのちのながきにかへてよろこびとす。たゞすこしもなぐさまるゝ方あれば、おほくのくるしみをわすれたり。たまたま病死の身をおかさん事をおもひしるかとすれば、又衣食のいのちをさゝへんたよりをもとむる間に、凉燠をむかへては身のうへのころものおりにしたがはぬをなげき、朝夕をふては口のうちの食の時にかなはぬをかなしむまゝに、はかりなき紡績の耕耘をくわへ、稼穡の劬勞をそへて、いとゞおほきなるくるしみとなりぬ。たゞ雲をき風をすきてもあられねば、一生つゐに世わたるみちに、たふれふしなんこそあぢきなけれ。せめてうへをやすめ、さむさをやむるまでならば、原憲がもゝつゞり、顏氏がひとひさご、

もとめんもやすく、さでもたりぬべきを、このうへになを過分をこのむは、みな要なき心のあやにくなり。そのおこりを思へば吾我したがふを愛し、そむくをいかり、驕慢のをろかなる心、たかくあがりたちぬるより、やう／＼むねのうちわづらはしくして、そのおもひやすめがたし。ねんじかねて心のゆくにまかすれば、つゐに名利のそのにはしりいでゝ、はやおほきなるなげきのはしにつきぬ。いまはわづらひのほのをけすべからざれば、朝につかへて名をのぞみ、市におしりて利をもとめ、心のせむるにまかせて身のつかるゝ事をわすれたり。このうへのくるしみは、ふでのしたにもいかゞしるしあへん。すべてはさもかず／＼に、うたてう心に物のかたは[illegible]ぞかし。あるはあるにつけてうれへ、なきはなきにつけてうれふ。もとむるよりうるにいたるまで、わづらひたらずといふ事なし。このおほくのわづらひにかへて、いさゝかの幸をおもふ、まことに小利大損なり。識者これわらひつべし。いはんやなきはうれへのかろむにてこそあれ、あるおほきことの累にてはなき物を、つや／＼無利の勤苦なり。狂酔それにくきざらんや。たとへばをもきをになひてかたをかゆるくるしみ、なをのこらざるにあらず。さらに名利の重擔をたけすてすよりは、いかでかうれへなき事をえん。さてもなにほどの名利なればか、父子のみかくまでくるしさにたへてはもとむべからん。たゞゆへもなくひたおもむきにまよへるなるべし。この小隠遁士にうまれては、たとひ帝たらんすらよろこぶべきにたらず。轉輪王にならぶれば、なをし乞丐人のごとしといへり。ましてかれにつかふるつらにだにもかずまへらるべき身の程な

らぬに、われはときそくばあるも、なげにあなづらはしき心なり。天仙のつまはじきして、はづかしめかなしむらん。げにことはりにもすぎたり。されどもはぢなく心のかさなきものは、ほど〳〵につけて、それがしの家人なんどいふを、かへりていみじき名聞にして、たま〳〵うへなきみちにいる。佛の御子をば非人なりとおとしめ、身をいたづらになしぬともどく。これおかしきゑいごきたり。いざしらずたれをか非人といはん。はぢがましき世に、ふればふをぞあないたづらとはみる。あはれわづかなる名利のために、はかりなく心ぐるしからんよりは、ひたぶるにたゞ世をすてねかし。さてぞ思ふ事もあるまじかんめる。つたなからん人のもどきをば、なじかすこしもいたみとせむ。そしるもそしらるゝもともにつゐにはすてゝゆく身の、かばねのうへには、おとしむるきずものこらばのこれ、それをはゞかる心こそ、かへりて後世のはぢとはなるめれば、すてぬはすつるにてありけるもあたら身ぞかし、のちの世もはたたのもしからんにやはしかん。いかにもすてゝこそのひとことばは、よくきゝすぐしがたくこそおぼゆれ、たゞこのすつといふ文字が、まことのみちののりにてはあるを、人ごとにまたびかねて、やすかるべき世にくるしみあひたり。せんずるところ、よろづのわづらひは心ひとつよりおこれるゆへに、世をすつといふはたゞこゝろをすつるなり。心にだにもぬを見せずして、あやにくなるおもひをとりたてねば、世にもさしたる事なく、名利もいたづら物になりぬ。かくてのぞみたえなむのちの身はいづくにいかにとさすらふとも、なにのわづらひかあらん。ひとへに世をもはなれず、

【古德】弘法大師のこと。蕩逸昏迷の文は性靈集に出づ。

【羅刹刀を擎げ】般舟讃の文。

【泥梨】地獄のこと。ナラカ(Naraka)の音譯。

又世にも着せず、そのこゝろを雲にし、その心を水にせんは、中々大隱のあとをふにてこそあらめ。たゞしこれはかしこからむ人のふるまひえつべきわざなり。にぶきものはさだめて、あしかりなむ緣にあはゞ、いかにも心おさめがたき事おほかるべし。居逆のきざや塵中のよもぎ、好惡なにゝかよるやといへば、さすが世ばなれたらんすまゐは、おのづから、あはれすゝむたよりもあるべきぞかし。それなをとげがたくしてはたちかへり、日夕に營々として衣食の獄につながれ、遠近にわしりをふて名利のあなに墮す。ましてかへりみる所もなからむ身の、おちつかん行するは、おもひきうけたりや。かの古德のことばに、「蕩逸昏迷にして口腹を營む、死に去り死に去りて灰塵と爲る、生れゆき、生れゆきて咲ひて又哭す、東に打たれ西に打ちて惣て是れ由る。」といへる。げにみゝいたきいさめのつゐなれども、なをうちおどろかぬ心のつれなさは、いまこそおもふことなくわらふとも、とざまかうざまにうたれん時、いがばかりか悲しからん「羅刹刀を擎げ心眼を刺す、皆心眼に由て泥梨に墮す、」とて、くろがねのひしはまづむねとまなことをさす。これおほくはめに見、心におもひてのみ、つみをつくりしゆへなり。さもぞ身と心とはうとましう、この世のみならぬ、くるしみのうつは物なりける。これを後悔なきさきに、いかゞさはいとひすてずばあらむ。

(三)三には無常を常と思ふ。これ又いたりてあやまれり。おほかた三界はみな生者必滅のことはりをなげく。なかにも閻浮はことに老少不定のならひをそへたり。すでにこのなげき

【古人】弘法大師のこと。「何ぞ忍ばん」の文は性霊集に出づ。

【只今之事】唐の劉禹錫の詩句、和漢朗詠に出づ。

をかされたる所にうまれて、いとゞあやうかるべき身をうけながら、いかでかつねに、わかれはつることとかりもなむ。されば後生におそれて、無常をかへりみるに、おいたる者なく、死もすみやかなり、駒のあしいそがはしく、ひつじのあゆみあはたゞしければ、しばしともいひあへずすぎすぎおはげにさそはれて、わかれぢのとほざかりゆくもなごりおしけれどもちからなく、あけくれは月日にかはられて、おなじまゝにそむとはいなれば、心ならず、上たしみきける、しらぬまきなむこそいとほしけれ。古人のいはく「何ぞ忍ばん、明天のことゝ、謗ぞて、人の頭陀を奪ふ、不分別頭陀非ばりて人をして嗟嘆せしむ」となげきしことにりなり。これをとをみおなるものは、たゞうはのそらにのみ、あけぬくれぬと過て、つゆつゆ身のうへにをくりむなしふる時とはしらず、悲しげき世にまぎれくらしては、めぐりくる月日をだにもたなわすれにけり。只今の事の眼前を遁りて過ぐるを、哀しき老の枕上より紅しをといひけむに、たゞるつれなきものゝきゝしれにこそ、げにおくよろづの事のおちふれゆくにつけても、などおのが身もしらとおもひたてらふる心たたるらむ。いかにもさかさまにゆかぬ月日なれば、老はつゐにのがれはつまじき物なり。いはむや又無常おいをまたず、殺鬼わかきをゆるさねば、いのちのかぎりのさだめなさこそ、いとゞたのみなくおぼゆれ、つくづくと光陰のめぐるをはかりにして、やうやく露命のつゞまる事をしるに、けふもはやくれぬ、けふのいのちはしたがひて減じぬ。のこるいのちいまいくばくぞ、あすまではありもやすらん、しらずなにとまれ、あけぬくれぬとつゞまりもてゆかんほどに、

【寒山】天台山寒巖に隱居せるを以て寒山子といふ。まことは氏も名もなく郷も知れず。風狂の隱士にして拾得と共に名高し。常に破れたる衣をまとひ、樺皮を冠とし大なる木履をはきて遊遨す。寒山詩一卷の著あり。

つゐにいまはの日なからめや。あはれいづれの日、いづれの時、いかなるやまひにかふし、いかさまにしてしぬべき身にかあるらん。無常ときをいはされば、けふかこの日にあたらんもかたかるべきにあらずかし。すぎぬればこそ心やすけれ。日ごとにさしあやうき身を、人ごとにわかきにほこりては、おいたるをわらひて、そのあざけりのわれにかへらんことをしらず、老たるを見てはいとゞわかきをたのみて無常のいきもをのれをおやかぬ事をわすれたり。さればかならずおいてまつべきいのちとやおもふ。人をみるにもおほくはわかくてしぬる世にこそあんめれ。そのあまたのかずにもれん事、はたゞくかたかるべし。かの寒山もこれをいひてこそ「昨來て親友を訪ふに太半黃泉に入る、今朝孤影に對して不覺の淚雙び垂る」ともかなしみけれ。げにしづかにおもひつゞくればなみだがちなり。きのふまでをとづれこしともも、はやなかばをすぎてゆめになりぬ。けさはたゞわがかげひとりたちならべり。これもいつまでか身にそはんとする。けふはわれ人をさきだてゝ哀傷す。いつかまた人われにをくれて哀傷せん。人をもあはれとみる。身をもあはれとおもふ。としてもかくしてもながるればふかくのなみだふたゝびおちゝるともいひけるなり。すべて老たるは生者必滅なればとてのがれず、わかきは老少不定なればとてとゞまらず。貴上うきたちて臭下なければやし。いづれにつけてもありにつべき世とこそみえね。わづかにこのめのまへの哀傷だに、なをゆびもおりあへず。ましてみゝのよそなる無常さへかずもしりがたかるらん。よな〳〵おもひをいたましむるけぶり、ならびてはたてどしたふる雨な

し。あさな／＼たもとをうるほす露、すゑ葉にてはきゆれども、もとのしづくとならぬやはある。その東岱前後のたましひ、かばねをすてゝいづちへかさる。雲となり雨となりにけん。ゆくゑもしらず、北邙新舊のほね、たましひをはなれていくばくかのこる。つちとなり、はいとなりてあとかたもなし。せめてそのぬしこそあらめ、なきあとのしるしに殘るそとばだにもたがためとかく、もじさへ、かすかにきえたるこそかなしけれ。それもかたなくくちぬれば、「古墓何れの世の人ぞ姓と名とを知らず。」と、ゆききの人のくちずさみになりゆく身のはてこそはかなく、あぢきなききはまりなれ。これをよそにきくおり、さすがあはれといはぬはなけれども、をのが身のうへになしては、さらにおもひもよらぬげなり。かくなんしりがほにして、しらぬ心のなまざかしきこそをしへどころもなくしあつかひたれ。いにしへ佛弟子の、死人をくりすてたる野のなかにまぎれありきけるを、何事し給ふにかとゝへば、こゝろのひがみにあらそひかねて、證人をとめ侍るとなむいひけるは、せめても思ひかねたるしわざなるべし。かくしてもげにつれなきこゝろをばいさむべきにや、さてすこしも無常思ひしりなむは、はかりなき世のなぐさみかた。よしやいつまでの身ぞとおもはましかば、なじかはさのみの人わろさもあらむ。又ゆゝしきなげき、それへのやるかたぞかし。あはれ佛の御はからひにても、一期こゝろに無常わすれず、くちに念佛をやまぬ身にしあらば、いかばかり世のありさま、もどかしうすみたる心のうちならん。これなむ久なくあらまほしき心なり。ねがはくば、かまへて佛もわれをそゝのかし

【東岱】支那にて死人を送る山の名。東に在るが故に東岱といふ。文集第十對酒の詩に云く「賢愚共に零落し、貴賤同じく埋沒す。東岱前後の魂、北邙新舊の骨」と。

【北邙】支那にて死人を送る北の山の名。

【古墓】唐の白樂天の詩句。白氏文集第二に出づ。

【なまざかしき】なまものしり。

【忽爾として】善導大師の法事讃の文。

給へ。たとひいかに智解むねにみちたれども、無常をしらざるをば、なを道心なき人とこそいふめれば、いつゝの縛なしと、はづかしめられんも、心うきかたわにあらずや。よくおもひわきて、くやしからずはからふべし。かぞふれば、むげに程なき一期を、あぢきなくかなはぬ世にかゝづらひゐて、そこらのとしをいたづらになしぬることこそあたらしけれ。いまはのこりの月日をば、いかにもして後世のいとまになすべき物を、「忽爾として無常苦來り逼り、精神錯亂して始めて驚忙す、萬事の家生皆捨離して專心に發願して西方に向ふ」といふとをきおもんぱかり、いかゞなからん。門には無我を我と執する、これ又まよひのきわまれるなり。しばしたゞ身にこゝろのよりゐたるを、かりにわれといひならはしたるにてこそあれ。さらにさでありはつべき物にはあらず。たとへば心はとまりをつたふみちゆき人ににたり。つねに六道をめぐりてあともさだめず。身はひと夜をあかすたびねのとこのごとし。わづかに一期が程たましゐをやどすばかりなり。生涯つき、報命をはりぬれば、心はゆきて冥途のかぜにさすらひ、身はとゞまりて郊原の露にくちぬ。つゐになににむかひてか、われといふすがたを見ん。これ諸法は皆こと〴〵くむなしきゆへに、もとよりかく無我なるものぞといふ事をあらはしはてぬるなり。この道理をみるに、つや〳〵われとも、わがものとも執すべき世にこそあらざりけれ。すべて身受心法ひとつとして、愛着あるまじきことはり、あら〳〵いひつゞくるにかくのごとし。かやうに心をえなば、さすが人木石にあらず。いかゞげにもと思ひおどろく。すこしの甘心なからん。しかはあり

【古賢】善導大師のこと。
【獨生獨死】無量壽經の文。
【世人薄俗】無量壽經の文。
【たんだきて】拱くこと也。こまぬく。
【刀山火湯】地獄のこと。

とも、淨樂常我はひさしく顚倒したれぬるまよひにて、きとひるがへさん事かたかるべし。もし佛門にあとをかくして、ひたすら世のうきめみぬ身となりたらば、をのづから山のかせぎもなれやしなましとおぼゆれども、それ又かげとゞめらるゝほだしおほければ、思きるほどのこゝろざしもえなし、たにかとやすらはんまに思ひまうけぬ心ちして、とりあへずあはてゆかん。のちの世のくらきより、くらきにいらん、たゞよはしさこそいかにすべしともおぼえずかなしけれ。生前にして業にまかせてはしる、業にしたがひて深坑に墮せんと傷嘆せし古賢の家におちて、重苦におすぼられなんのちは、智識のよくおしへける物をよくゆともさらにかひあるべからず。自業自得のちからなければ、主君たのもしとてもたすくまじ、妻子いとおしとてもかはるまじ、たゞ人は人、われはわれなる、獨生獨死、獨去獨來のみちこそ、おもひやるも心ぼそかるへけれ。後世とても他人なるまじければなにともならばなれとは、えおもひはなつまじかんめり。されども「世人薄俗にして不急の事を爭ふ」とときて、今生のいとなみのいのちあらばと、ゆるかるべきをばあしをそらにして急にし、後生のいでたちのいまもしなばと急なるべきをば、てをたんだきてゆるくする。これかしこしとやせん、をろかなりとやせむ、さしもうけがたくして、うしなひやすき人身を、いたづらはしく、なにともなきゆめのうちの事にのみくるしめて、つゐにげに〳〵しきながき世のおもひいで、ひとつもなくてやみなんあさましさよ。この世こそかく思ふやうならざらめ、のちの世をさへむなしう二世不得の身となして、ながく刀山火湯にたゞ

【いざ去りなん】善導大師の觀經疏定善義の文。

よひゐたらんは、いふにすぎたり。なのめに毛をき、角をいたゞきたるたぐひとなりても、たやすくそのすがたをあらためむ事かたかるべし。たとへば又おのづからふたゝび人身をうる時はあるべくとも、淨土の法門、彌陀の本願を、きゝえん事は、さらに難中之難無過此難とゝけり。しかるにいまたま〳〵頓教菩提の門ひらけて、超絶易往のみち通ずる時にあへり。父子あいむかへて、本家にかへらん日、けふにあらずばいつとか期せん。はやすでに安養の本家をわれらがために莊嚴して、彌陀慈父の本願、こゝろもとなくまち給ふなり。これをきゝながら、いかゞさはなをいそがではありける。「いざ去なん魔郷には停るべからず、曠劫よりこのかた流轉して六道盡く皆經たり、到る所餘樂なく唯愁歎の聲のみを聞く、此の生平を畢つて後彼の涅槃の城に入らん」と。いざなはるゝ智識のことばをしるべとして、さらばたゞちに西路に歸しなばやと、思ひたつにつきて、つら〳〵身のありさまを案じつゞくれば、又かた〴〵、とゞこほりぬべきうたがひあり。一には、凡夫のための本願とはいへども、さだめてわれらやうのつみうどをば、さりとてはのなをざりがてらにおもひ給ふべし。さではいかにも往生のほいとげがたくやあらん。二には、たとへば惡人往生すべくとも、こゝろざしをはこび、こゑをかさねて、返々懇望せんにぞ、佛もみゝにきゝいれたまはん。これらのいぶかしさのはるけざらん程は、まことしく極樂のねがはしき心も、おこりがたかりぬべければ、いかゞして疑網を患海にたち、法船を彼岸によそはんと、くはしく教門をうかゞひみるに、まづ一には決定して深く信ず。自身は現

に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなし」と釈するは、彌陀の本願、もはらかゝる悪人を本として、おこされたりとさだむるなり。これ罪業をつくるがにくからざるにはあらねども、たちまちに悪趣におちなん事のいとおしければ、諸佛もしかねたまへる十悪五逆の機をたやすく往生せさせむるに、大悲の至極をあらはして、佛も世にこえたる高名とおぼすなるべし。されば、むねとわろきものが、たのみて本願の名をもあげたてまつるべきにてこそあるを、かへりてつみふかき身はいかがとあやぶむをば、さぞほとけもおもはずに見給ふらん。願ひとをもらさねば、人々分あり疑ふべからず」といへり。むらなきちかひ、たれかをのがぶんにあらずとせん。二には決定して深く信ず、彼の阿彌陀佛四十八願をもて衆生を摂受したまふ、疑なく慮りなく彼の願力に乗じて定んで往生を得る。」と釈するは、をのがちからはともかうもあれ、たゞ他力のつよきにひかされて、たのまばかならず往生すべしといふなり。これまた彌陀の本願かぎりなく、衆生を一子にかなしみ給ふゆへになをざりならず、いかゞしてわがくにゝ生ぜしめんとおぼしめす、御こゝろざしのせちなるちからにすくはれて、常没無縁の機なれども、すみやかに往生ののぞみをとぐるならん。すでにかくまでほとけの御かたよりすすみて懇望し給ふ事なれば、たとひ一念なりともいかでか御みゝにたゝぬやうはありける。にはかなる十こゑ一こゑに、とりあへす来迎し給ふをもてよく心もとなくまちうけ給ひけるほどをば、はかりたてまつりなむかし。かやうにこまぐ〵とほとけの御こゝろざしを思

【魚母子を念持す】智度論に云く、「菩薩諸佛の爲に念ぜられずば善根朽壞す。魚の子母に念ぜられずば、則ち爛壞して生ぜざるが如し。」と。

しりぬれば、往生もうたがひなく、本願もまめやかにかたじけなくて、魚母子を念持するいはれさへ、おもひあはするかたにはあはれにもそひ、たうとくこそおぼゆれ。げに、さしもをろかなるいをだにも、子をうみをきてのち、母わすれずそれを念ずれば、そのこゝろざしまぼりとなりて子ひとつもくちず、みな魚となるとこそいふめれば、まして阿彌陀ほとけの一子の慈悲ふかく衆生をあはれみたまひて、よしいかに機つたなく行すくなくとも、たゞわれをたのまむものにだにもあらば、かまへてわがくにゝうまれよと、あさからずねんじたまふ。その御こゝろざしにひかされて、などかはわれら往生する事をえざらん。ほとけのおほきなる願力いをのわづかなる念力にをとらめや。母をおもはざるいをの子、なを水なきさはにくちず、父を念ずる一子いかでか愛河のながれにしづまん。われすでに佛を稱念す、ほとけ又われを還念したまふべし。かたちかれんとき父子相迎せばいのちをはらんのち本家にかへらざらんや。たゞ身のつたなきにつけても、いとゞこゝろをかたぶけて願をあふぐ、南無阿彌陀佛かならずたすけ給へ。

父子相迎　下

向阿

【一】抑法藏五劫思惟して、父子あひあはん願をおこし、彌陀十劫に覺をとなへて、父子あひむかへむちからをまうけ給ひにしよりこのかた、四十八願ねんごろに、わがまよひ子やあるとよばひ給へども、二十五有のうちいづくにこそ、こゝにありとこたふるをともなかりつるほど、こひかなしみたまふ御心、さぞやるかたもなくおぼしけむ。しかるにわれらいま本家を思ひいでゝ、はじめて父の名をよばひたちぬ。この南無阿彌陀佛のこゑをきこしめしつけぬるよろこび、又をき所なくおぼしめすべし。さればぞ十萬億土のみちをなかにして毎日に千返まで行者のところにはきたり給らん。やうこそかはれ、かしこきさとりある心までも、なを子をおもふみちにはまよふなりけり。この御慈悲のあはれかたじけなきを思ひしらんには、いかほどかほとけもなつかしう。往生も心もとなかるべきにつきしみぬる心のくせは、まよひなをはるけがたくて、たま／＼思つくるおり、うちおどろかるゝもたゞいはればかりにて、緣にあふ時はことはりをだにもなをわすれはてぬ。いふぢにはつかれをかへりみぬならひなれども、極樂のかへさはむげに念佛のあしも、やすらひがちなり。この心ざしをろそかさには、往生もたちかへりあやぶましかりぬべけれども、さすが南無阿彌

【一】阿彌陀佛の量なき慈悲をのぶ

【法藏五劫】法藏は阿彌陀佛の未だ佛とならざりし時の比丘の名。その時五劫の間衆生救濟のために思惟せることを言ふ。

【彌陀十劫】法藏比丘が成佛して阿彌陀佛となりてより今に至る間を十劫となす。

【二十五有】迷界の有情を二十五に分類せるもの。

陀佛をおこたりはつるほどの身にしあらねば、こゑをたづねん、かこつかたのなかるべきにもあらず。さらにおもはぬをだにしたふはおやの慈悲なれば、ましていさゝかもたすけ給へとねんじきこえん子をすつるみちありなんや。これおもひつゞくるおりぞ、げに往生もうちとけて心やすく、本願もうらなくたのもしくおぼゆる。たとひいかにいゑのいぬつねになれたりとも、願力をかたらうどにて、名號のつゑをとりなんに、すこしもなにのおそれかあらん。さりながら妄執はにくきものぞ、よもとは思へども、たゞこれにむきてはいかほどもようい、ふかゝらんにしかじ。ことに臨終もちかくなりぬれば、八苦あひやくところなれども、なにとなう世もなごりおしく、六賊いつはりしたしむ友なれども、すゞろに人もなつかしくて、よろづとりそへたる心ぼそさに、のがれぬみちもすまはしければ、業繋はいとゞちからえてひく。火坑はすでにあしのしたにのぞみにたり。引接すこしものびば、たゞちに泥梨にいりなんとす。あやうしなどはいふにもすぎたり。

【二】こはいかゞせんとかなしきに、彌陀慈父の大悲かぎりなくおどろきさはぎたまひて、菩薩聖衆もしづ心なく、來迎の儀、ときをいそがしませば、まづそのせちなる御心ざしのちからさきだちて、行者の身をたすくるゆへに病苦うすらぎ正念あきらかになりて、倒われ心みだるゝ事なければ、鳧鐘かつ〴〵うちおどろかして、口稱やゝをとづれたちぬ。稱名こゑすみてしづかに十念をとなふるほど、終時合掌作香烟、にほひは異香にまがひつゝ、香烟直注彌陀佛、けぶりや紫雲となりぬらん。紫雲までにかゝる、毫光うつろひて

【八苦】生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦。

【二】彌陀の依正二報を讃ず。

【鳧鐘】鐘のこと鳧は鐘をいる匠の名なりと云ふ。

【終時合掌】法事讃の文。

【香烟直】法事讃の文。

【四八】三十二相

【六通】六種の神通力。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意足通、漏盡通。

【烏瑟】具には烏瑟膩沙といふ。佛頂のこと。

【毫光】白毫相の光。

紅艶をそへ、音樂のきをめぐる。旋風ともなひて音韻をます。彌陀照臨してひかり室にみち、聖衆羅列してかげにはにしく、梵音うてなをよせ、芳香かうべをなでたまふ。よそをひもめづらしく、にほひもなつかしければ、靈儀にめうつりして穢土のなごりもおぼえず。花臺に心すゝみて、往生のほかはよろづをわすれたり。すでに草菴にいきとゞまりぬとみれば、すなはち蓮臺にあなうらをむすびぬ。歡喜いはんかたなし。不覺にして佛を禮す。そのかうべをかたぶくるほどはなをこの界にあり。めをあげてみればはやかのくにゝいれり。他鄕と自家とたゞ一念をさかひ、脫苦と得樂とはづかに刹那をへだてたるに、いつしか紫磨黃金のはだへ、忍辱のころもにかゞやき、環釧寶冠のかざり、解脫の瓔珞にはへたり。四八よそほひいつくしく、六通さとりあきらかなれば、いかなる大會にさしいづとも、かたへはづかしかるまじきさまなり。すなはち蓮臺よりおりてやうやく佛所にすゝまんとすれば、雜厠間錯の寶地、あしのふみどころもおぼえず。大海塵沙の佛會行路もうゐ〳〵しき心ちするに、觀音勢至まし〳〵てたのもしくみちしるべし給はんと、まづ瓔珞細輭のころもをきせて、威儀うるはしくかいつくろふ。これさしもはれ〴〵しき大會の初參なれば、心ことにいだしたて給なるべし。この法侶にたづさへられて、ほとけの御まへにまうでたれば、烏瑟こまやかにして、蒼天よりもみどりに、毫光あきらかにして皓月よりもしろし。丹菓青蓮のいろ萬字千輪の文すべて淸淨慈門の感ずるところなれば、見者無厭の御すがた也。めしばらくもすてず、頭頂に禮敬し彌陀の心水をうけて、如來の性海に歸す。

【父子相迎へて】善導大師の般舟讃の偈文。前後をとりて合せて引く。

【五衰】一に衣裳に垢つく。二に頭の花しぼむ。三に腋下汗ながる。四に身臭く穢し。五に本座を樂しまず。

さても、「父子相迎へて大會に入りて、即ち六道苦辛の事を問ふ。或は所得人天の報あり、飢餓困苦して體に瘡を生ず。爾時彌陀及び大衆子の苦を說くを聞いて皆傷歎す、彌陀諸佛子に告げてのたまはく、自ら作りて自ら受く。他を怨むる莫れ。彌陀諸佛子に告げてのたまはく極樂彼の三界に何如ぞ。新往化生倶に報へんと欲するも合掌悲咽して言ふこと能はず。」と釋する、その時の儀式こそいひつゞくるもあはれにかなしけれ。わかれしとしふりて、あふ日あらたなれば、さぞうらみもいまだわすれがたく、よろこびもことさらにいますらめども、終焉はとりあへざりしかば、さながらむせびてすぎたまひにけるならん。すでに父子あひむかへて大會にいりぬれば、いまは佛も御心おちゐて、さま〳〵かたじけなき事かたらひつくし給なるに、さしも心ぐるしう思ひやりし、流轉のほどの苦樂いかゞありしととひ給へば、むかしおぼゆるさとりありて、こしかたなごりなく、おもひつゞくるに、地獄は劇苦ひまなくしてひさし。鬼畜は苦報をもくしていやし。人間には八苦のけぶりたえず。天上には五衰の露かはかず。三界みな苦にしていづくもやすき事なかりきと思ひいづるも心うげに申ゐたれば、ことばごとにむねにたつこゝちし給ふべし。ほとけをはじめたてまつりて、ならびゐ給へる菩薩たちまで、すぎにしかばともいはず、いまある事のやうにかなしみあひ給へり。やゝよくなきたまひて、又それなんをのが心からうけしくるしみなり。人を怨むる事なかれとなぐさめうけたまはるにも、いまさらくやしき流轉なるに、いまはかくなん。よくしえ給ひたりとや。この極樂とかの三界と、いづれにてありなんと

【陶隱居】陶弘景字は通明といふ。齊の高祖に事へて諸王の侍讀となり永明十年退きて句曲の茅山に居し、華館を建てて自ら陽隱居と號せり。

【五妙の境】五官の世界、色聲香味觸の五境。

とひ給ふは、せめてもうれしさのかぎりにこそと、いとゞ佛恩のみかなしうて、ただむせかへる涙にことばもなし。これあまりなる御なずらへ也。中々なにとかは申もわかん。淨穢ことのほかにして、雲泥なをろかし。まして何れかなどは、いかゞ思ひもよるべき。願智たくみにかざりて依正ならびたければ、くに泥洹のごとくして、たのしみ四徳をきはめたり。

一には常にしてながく無常をはなれたるゆへに、かずかぎりなくながきいのち、佛とひとしくして、おいもやまひもせぬ身なれば、よはひいつもさかりなり。かの陶隱居が仙方をとぶらへば延齢なをいくばくならざる事をそしる。この無量壽の淨域にのぞめば、長生のつゐになかばならざることをよろこぶ。まことに慚愧して、地につばきはき、悲喜なみだながるゝもことはりなり。

二には樂のみにして、くるしみはその名をだにもきかず。三惡のみちあとたえたれば、後の世のをそろしかるべきもなく、五妙の境こゝろにまかせたれば、この身のたのしみも又つくべからず。これを教門になぞらへて思ひやりけんは、さらにかずにもあらざりけり。げにぞはじめて佛會にいりて未曾有なる事をえたる。いへばことばもたらず、思へば心もをよばず。たゞ物ごとにたぐひなくめづらしければ、國界あまねくゆかしくて、はるかに佛會をうかゞひゆくに、聖衆よそ〳〵たづさへゐて、かつ〴〵寶林寶樹會にいらしむ。みれば七寶をみがきて、七重たがひにいろへたるうへき、ひかりをつらねてたちならぶかげ、をのがなみ〳〵みだりがはしからず、枝には春秋をならべて花もありこのみもあり。葉に

【三忍】音響忍、柔順忍、無生法忍。

は紫色をまじへて、あを葉にもにたりもみぢにもにたり。この寶花寶葉のたへなるだにもあるに、長風やゝ林をつたひてすぐれば音樂ほのかにこずえをわたりてゆくこゑ妙法をとく。きけば無生を證す。又八功德池のほとりにのぞみて、百寶池渠會をみれば、七寶のきし八德のなみにあらはれて、いとゞあざやかにうつろふかげを、をのがいろがほにすみなせる水のそこも、くまなくいさぎよきに、青黃赤白のはちすさへ、ひかりをうかべてさきみだれたれば、いとゞ蓮花の大衆も莊嚴をそへて、花にあそぶ人天は九品のすがたあらたに、なみにたはぶるゝ菩薩は十地のかげたけたり。みぎはにには鳧鴈鴛鴦むらがりゐて、たへなるのりをなきつれたるこゑ、哀婉雅亮にしてことに人の心をおこすたよりなり。これはみな爲引他方凡聖類のたくみ、故佛現此不思議の御しわざなるべし。又寶樓宮殿會にいりて、凡聖まじはり坐するに、かたちに善惡なく、しなに貴賤あることなし。これみな彌陀法王、住持のともがら、正覺淨花、化生の衆なれば、おなじく佛をもて父とし、はちすをもて母とし、さきにうまれたるを兄とし、のちにうまれたるを弟として、ともに法乳一味のしたしみあれば、はゞかりなくもろ／＼の上善の人とともに一處に會することをえたり。さしもいまゝで人のやつこに、なを身をまかせたりしほどのいやしさに、いつしか觀音勢至にかたをならべ、普賢文殊にひざをくみたてまつる。これ過分の面目なんどはいふにやをよぶ。ひかりにふれて三忍をうるもはたありがたき利益ぞかし。又大衆無生法食會にまじはりて、飯食經行すれば、七寶のはちおのづからまへにありて、百味の飲食そのなかに現

【かれいひ】乾飯の義、餉。

【四種威儀】行住坐臥の四威儀なり この文は般舟讃に出づ。

す。いまだもちゐざれどもみゐにすなはちあきぬ。いにしへは一兩の褐衣、一餐のかれいひだにもなをもとめがたく、えがたかりしに、いま衣食自然にして身をやすくし、たましゐをやしなへば、さらにうれへわづらふことなし。たゞなすわざとては、あしたにちりしく花をひろひもて、はるかに他方十萬億の佛にたむけ、かへさに無量百千三昧をうるいとなみばかりなり。又神通にのりて虛空會にのぼれば、寶殿身にしたがひてそらのなかにとぶ。雲路の徘徊風情きはまりがたし。花雲そびきてかけはしとなれば、聖衆そでをつらねてわたり、香風ふきて樂をなせば、飛天たもとをひるがへしてまふ。面々に通をとばしてをのがじし遊戲快樂するありさま、とり〳〵にあやしくたへなり。すべていづこそ、なをざりがてらに見すぎぬべき心ちもなく、わづかに半日を七世になずらへしはさらなり。なを多劫も一念とおぼえぬべきまで、こゝもなごりおしくかしこも又ゆかしくて、やすらへば心もとなく、すぐればあしもいそがれぬ。すゝみしりぞきに思ひわづらひては、いかで身をもあまたにわけてしがなとおぼゆれば、「四種の威儀常に定にあり、三昧を出でずして神通を作す、一々の神通佛會に到り、會々に法を聽きて無生を證す。」とて、しづかに禪定にありながら、おほくの身を變化し、處會の佛會にわかちやりて、會々に法をきかしむ。その面々にきくところは、かへりて身ひとつのさとりとなる。これことなる逍遙のきはまりなり。

三には眞我あらはれて、法身まどかなれば、われといふおもひのまことある速證無生の

【或は語り】般舟讃に出づ。

身をえて、かりの身を、われはと思ひしまよひもながくはれぬ。四には、淨くして内外たまのごとくなるはたへ、紫金のいろをおびて、ひかり月日よりなをあきらけし。これすなはちけがらはしき父母の精血をもちゐず。たゞいさぎよき蓮花よりおのづから化生せるゆへに、虚薄の身かろくして、たちゐも心にさはらざれば、むなしうしてなきににたり。この淨德きわまらざるを自然虚無之身、無極之體とゝけり。おほよそ常樂我淨みなたのしみなれば、行住坐臥つねに心をよろこばしむ。くに、春秋冬夏なく、そらに晝夜昏曉なし。たゞいつもさむからずあつからず。よるともいはずひるともいはねば、逍遙ときをまたずして、遊戲しばしもたゆることなし。しかあるにつけては、「或は語り或は咲ひて身心樂み、即ち閻浮同行人を憶ふ。各誓願を發して遙に加被す。專注莫退して盡く須く來るべし。」とて、あはれ心ざしふかゝりしむかしのともと、これをもろともにたのしまゝしかばと、事ひとつたらぬ心ちすれば、かまへて念佛退轉せで、とくこゝにきたれとのみ祈念すらんは、はかりなき往生のかたうどかな。むらなきあはれみも、緣あるをまづするならひなれば、さこそは心もとなくまたるらめ。」寶池のはちすに坐するにもわが身はかたはらにより ゐて半座をいたづらにのこすなるは、よくわりなき心ざしにこそ。人にはかりなるちぎりをも、ひとつはちすにとぞいふべかりける。さてこの界に念佛するものいできぬれば、かならずかしこにひとつのはちす生ず。念佛をこたらざれば花ひゞにひらけ、すたるれば又むなしくしぼむ。ひらくるおりは聖衆こぞりて往生ちかづきぬとよろこび、しぼむおりは流轉の

【清淨大海】般舟讃に出づ。

【四種威儀】法事讃に出づ。

【微塵故業】般舟讃の文。

びぬとかなしみいます。大悲のかぎりなさはいかばかりげにおもひ給ふらむ。されぱたまたも一人をもまちえては、清淨大海無生衆、新往生者皆稱讃といへり。かまへて念佛申たちなん人は、華かひ〳〵しくひらけて、つゐにむかへのはちすとなるやうに心すべし。さていたづらにかれなんは、ねんなくうれはしき事ぞかし。たゞしそれをいたまざらんほどの人は、なにのなげきかあらむ。さきだちてまつ心にこそ、あやなくことにほいなかるらめ。いとゞ神通自在の身とさへなりて、衆生の世々に恩深かりし事も今のやうにおぼえ、父母の長夜に迷ふありさまもまのあたりみる。妻子の三途のくるしみにさけぶこゑをきゝ、眷屬の八熱のほのほにむせぶ心をもしる。何事につけてこそ思ひのどむべきかたもなければ、しばしも極樂に逗留せんや。いそぎて穢國に還來し、無爲解脱のちからをはげまして、有海沈沒のともがらをすくひ、ともに一佛土の華のうへによぢ、おなじく安養界の月のもとにあそぶ。このおりぞすこし大悲も心やすかるらむ。又かく利他ひまなけれども自利もさまたげられず。樂おほけれども道もすたるゝ事なし。「四種の威儀常に佛を見る、行來進止神通に駕す。六識縱横自然に悟る、未だ思量一念の功德を藉らず。」とて、たちゐに佛をみたてまつれば見佛の役たえず。ゆくもかへるも神通にのれば、聞法のみちになづまず。俗諦森羅の萬像につきて眞空冥寂の一理をあらはすに、六識縱横にさとれども思量一念の功をもからず。さばかり壁觀あなうらをとかず。功夫こゝろざしをゆるくせざりしかども、繩床むなしくうけて、心地はつゐにひらけざりしに、いま微塵故業隨智滅、不覺轉

入眞如門といふ。道の自然なる事まことにふしぎなるをや。すでに自行化他そなはりにたり。いまは因圓果滿はるかなるまじければ、一生補處のゆふべ法王子の佳名をふるひ、三身究竟のあかつき、佛種性の貴姓をあらはさん事、ひさしかるべからず。一切彌陀安養國元來是我法王家といへば、このとき十方淨土の依正は我性本來の家父なりけりとさとらむ。極樂をすゝむるほいこれにあり。往生の正路まめやかにたへなるかな。これすなはち法藏行因のむなしからずして、彌陀覺體のいたすところ、衆生ほとけを禮すれば、父子相迎するによりてなり。雲漢若なし、うきゝにのりてなにかせん。華臺たのしみあり、本願に乗ぜんにはしかじ。ことばを心あらむともがらによす、ゆめ／＼まよひをひるがへして本家にかへれ。

父子相迎　終

【一生補處】菩薩の最もすすみたる位にて今一生を經れば次には佛となるものなり。

【雲漢】天の川のこと。

【八功德池】八種の功德を有する極樂の池。八功德とは澄淨、清冷、甘美、輕輭、潤澤、安和、除患、增益。

【七重寶樹】七重に行列する寶樹。極樂の莊嚴の一なり。

【金山王】須彌山を周りて七重の金山あり。その最もすぐれたるものの謂なり。

來迎和讃

攝取不捨の光明は　念する所を照すなり
觀音勢至の來迎は　聲を尋ねてむかふなり
娑婆界をば厭ふべし　厭はゞ苦海を渡りなん
安養界をば願ふべし　願はゞ淨土に生るべし
草の庵のしづかにて　八功德池に心すみ
ゆうべの嵐音なくて　七重寶樹にいたるなり
臨命終のときいたり　正念違はで西にむき
頭を傾ぶけ手を合せ　愈々淨土を欣求せん
きけば西方界のそら　伎樂歌詠ほのかなり
見れば緑の山の端に　光雲遙に輝やけり
此時身心やすくして　念佛三昧現前し
毫光わが身を照して　無始の罪障消滅す
光雲やうやく近づきて　瞻仰すれば彌陀尊
相好圓滿し給ひて　金山王のごとくなり

【白毫】佛の三十二相の一。眉間にありて光明を放つ。

【紫磨金】紫金とも紫磨金色ともいふ。紫色を帶びたる黄金にして閻浮檀金のこと。

大悲高くあらはれて　晴の天にみどりなり
白毫みぎにめぐりて　眉の間にかゞやけり
管絃歌舞のぼさつは　雲に袖をひるがへし
持幡供華の莊嚴は　風に任せて亂れたり
觀音勢至諸菩薩　光の中にみちみてり
各々威德あらはれて　各々行者をほめ給ふ
眼にみてる慈悲の色　落る涙もとゞまらず
耳に聞ゆる法のこゑ　歡喜の心いくばくぞ
頭上に紫雲たなびきて　草の戸ぼそに立廻り
恆沙の衆會諸ともに　前後左右に下り給ふ
庵のうへに諸化佛　星をつらねて影向し
苔の庭には諸聖衆　光を並べて長跪せり
伎樂の菩薩も此時に　踊躍歡喜やすからず
絲竹のしらべ雲を分け　御御裝ほひ地を照す
ときに大悲觀世音　漸やく歩みちかづきて
紫磨金の身をまげて　蓮臺かたぶけ寄せ給ふ
次に勢至大菩薩　聖衆同時に讃嘆し

大定智慧の手を延て　行者の頭をなで給ふ
遂に引接したまひて　金蓮臺にのせたまふ
輪廻生死のふるき里　此時永くへだゝりぬ
すなはち金蓮臺に乘り　佛の後にしたがひて
須臾の間を經るほどに　安養淨土に往生す
昔しは大悲の利益を　僅かに傳へ聞しかど
今は彌陀の引接を　心の儘にかうむれり
然るに彌陀の淨土は　快樂不退の所にて
壽命も無量に長ければ　樂しみ盡る事ぞなき
三十二相そなはりて　莊嚴端正殊妙なり
六通三明さとりにて　心のごとく自在なり
上は有頂の雲のうへ　下は無間の底までも
苦海の群類盡く　利益あまねく施せり
ねがはくば彌陀觀音　行者の誓ひを愍念し
大悲誓願あやまたず　來迎引接たれたまへ
ねがはくば此功德を　普く衆生に施して

【六通三明】六通は六神通とも云ひ六種の通力なり。天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六。三明は三達とも云ひ三種の智慧なり。宿住智證明（過去のことに通達す）死生智證明（未來のことに通達す）漏盡智證明（現在のことに通達す）この三は六通の中の宿命、天眼、漏盡の三通に當る。

同じく心を起しつゝ　安樂國に往生せん。

來迎和讃終

【本地】垂迹に對する語、垂迹即ち佛菩薩が衆生教化の爲にこの世にあらはれしに對して、その佛菩薩の眞實身を本地といふ。

【大勢至】彌陀三尊の一。右脇の菩薩にして彌陀の智慧を表示す。

【時國】法然上人の父、漆の時國なり。

【台嶺】比叡山延暦寺をさす。

【皇圓】天台宗の名僧、初め椙生の皇覺に師事し、功德院に住せり。時人肥後の皇圓阿闍梨とよべり。

【叡空】法然上人の師、慈眼といふ。比叡山西塔黒谷に住す。大原の良忍上人に淨土教をうく

圓光大師和讃

上

淨土の法門我國に
弘通の祖師の中に猶
撰擇本願念佛を
弘めたまふは大師なり
仰で本地をたづぬれば
かたじけなくも大勢至
攝取衆生の智門より
あとを此土にたれ給ふ
受生のもとは時國の
家に花してあらかじめ
瑠璃を示し誕生の
庭には紫雲たなびきて
二ばたかゝるむくの木の
梢は四方に名も高き
勢至丸と自稱して
嚴父の別に世をいとひ
十五のはるは台嶺の
皇圓闍梨を師と頼み
落髪受戒したまひて
法華止觀を習學し
十八歳の秋のころ
名利はづれし黒谷に
うつりたまひて叡空の
窗にまなびの[illegible]くれと
一代藏經五かへり
室にいたりて善導の

【■■】■■■■■■■■の■■■■■■■■■■

【月の■■定殿下】関白藤原兼実のこと。藤原忠通の子。文治二年摂政となり同五年太政大臣となる。建久七年[illegible]上人の教に[illegible]浄土念仏の信者となれり。【大原に集會】大原問答をいふ。

[illegible]にはじめて心づき
[illegible]
とりすゝて吉水の
[illegible]となり
[illegible]つゝ
[illegible]にとまりては
たをさかりなる[illegible]門に
[illegible]の
[illegible]に[illegible]
あるひはたけき武士の
[illegible]往生の
化にしたがはば[illegible]者もたし
一[illegible]大原に[illegible]して
[illegible]行[illegible]行を[illegible]し
[illegible]の[illegible]をほどこせば
おたちをみれば法然坊
[illegible]の上人と

[illegible]
[illegible]行に
[illegible]をこらす[illegible]あるは
[illegible]の[illegible]
[illegible]とかや
[illegible]をひて
人々[illegible]白川
[illegible]をはじめ[illegible]の
ほとけのごとく[illegible]し給ふ
[illegible]
あ上[illegible]せば[illegible]しなべて
[illegible]は
[illegible]に
[illegible]のあふぎすみやかに
[illegible]し
[illegible]をたとへ[illegible]陀如来
[illegible]よりぐ／＼の

叡山谷に花開で
今此山にのつすやと
有智の高僧こと〴〵く
およそ本願念佛の
擇法眼にあらはたり
一ふたならぬ流通は
普賢大士も来現し
龍神も堂にこて守護をなす
感じて後に明徹にも
經疏を照しあるは文
地よりはなれて跡をふみ
しかのみならずこのあたり
より〳〵見佛したまへり
化他の利益も日にあつく
天魔やきほひ起りけん
遠流の宣旨くだるにも
ほいとしれども果さぬを

十方諸佛の證誠を
すゝろに流涙合掌し
みな円寂となりたまふ
源空は大勢至の
化人浄土のはじめより
選擇讃誦の道場に
又は讚歎の諸佛に
すでに念佛三昧を
御まなじりの光明に
月輪殿の縁上に
頭光を現じたまひにき
浄土の聖教開板し
自行のかゝるのみならず
なりもてゆけば悪はすゝむ
讃歎稱名をおどろかし
邊鄙の化導は何とるの
おもへばこれも機縁と

【二祖對面】法然上人が夢中にて半金色の善導大師に對面せることをいふ。

すゝむ舟出のゆく〳〵も　所々の化益ぞたぐひなき。

下

かねてほどなき勅免は　佛法守護の諸天神
夢のさとしのあればなり　されど縉紳しばしはと
柴の扉のあけくれと　勝尾の寺にしづかなる
稱名感通あればにや　善導大師さらにまた
爰に現じて宗門の　深秘をつたへたまふなる
二祖對面の眞影も　うつすが如くのこります
あとぞ末世のふしぎなる　終に建暦元年の
仲冬歸洛ましまして　あくる睦月の始より
日來の所勞増氣して　こもごも奇瑞現ぜしを
わが往生は實にこれ　一切衆生の爲にして
ねぶつの信をとらしめん　瑞相なるぞとのたまひぬ
すべて頽のとしよりも　耳目不明になりたまふ
さるにかぎりのちかき今　二根むかしにひとしくて

【慈覺大師】字を圓仁といふ。下野の人。最澄の弟子にして圓頓戒を相承す。

【舜昌】勅修法然上人行狀畫圖の作者。

長時不斷の稱名も
二十五日の巳にいたり
午の刻にいたりては
慈覺大師の御袈裟を
光明遍照十方の
音聲盡きてやゝ後も
およそ十ぺんあまりなり
支干もともに壬申の
正にをはりに近ふして
あらはしたまふ遺訓の
一枚起請と世に稱す
くちぬ滅後の德たかく
舜昌著述の傳記には
そひつゝ叅備せしとかや
光照大士とおくり名の
のちさかんなる光より
圓光大師と贈號し

二十三日のあしたより
高聲無間體を責む
御聲やうやくかすかにて
めしつゝ頭北面西に
文をとなへて化したまふ
唇舌御名に動くこと
壽算八十のそれのみか
世尊の滅に符合せり
勢觀坊の懇請に
昔は累代の龜鑑にて
化縁花鳥に盡ぬれど
後伏見の院の勅を得て
おなじ御門の宸翰も
後柏原の御代に先
それだにあるを幾年の
さらに元祿年中に
又五百年の御忌の日は

勅會の儀式おごそかに　圓頓戒を[illegible]
加へたまふぞたふとき　されど世に[illegible]
法をつたへて末の代の　下根に應じて易行の
念佛門をひらかれし　稱名をたれか仰がざらん。
南無圓光東漸大師

愚要鈔　巻上

南紀總持寺沙門　明秀　撰

【一】問「今の阿彌陀佛衆生往生の本願をば如何様に起し、如何様に成じ玉へるや。」

答「彼の阿彌陀佛、法藏比丘の昔、四十八願を立て玉へり。其四十八願の中にも殊に、第十八の願が正本願なり。其願に云く、『設我得佛、十方の衆生、至心に信樂して我國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに若し生ぜずば正覺を取らじ』文此願の意は、十方一切の善惡の衆生深く信心をいたして、安養國に往生せんと思ひて、乃至十念、我名號を稱せんに、若し往生せずば我も成佛すべからずとなり。是の如く願じ畢りて、即ち斯の願、若し剋果せば大千感動すべし。虚空の諸の天人當に珍妙の華を雨すべし」と誓願し玉ふ時に虚空より告て云く、「時に應じて普地六種に震動し、天より妙華を雨して以て其上に散ず。自然の音樂空中に讚じて言く、決定して必ず無上正覺を成ずべし」と」。是によりて兆載永劫の間、六度の萬行を遂て、此萬行の功德を第十八の願の六字の名號の中に此を納めて、行業酬因の報身報土と正覺を成じ玉へり。此故に念佛往生の本願成就するよりして、極樂の寶國も成じ、法藏の正覺も成ずるなり。故に善導和尚の云く、「彼佛今現に世に在して成佛し玉ふ。當に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」已上此文

【一】阿彌陀佛の衆生往生の本願を明す。
【斯の願】無量壽經上の偈文。
【大千感動】大千世界の一切のものが感動すること。
【時に應じて】無量壽經上の文。
【普地六種に震動】大地が感激して六種に震動すること。六種とは東涌西沒、西涌東沒、南涌北沒、北涌南沒、中涌邊沒、邊涌中沒の六。
【兆載永劫】極めて永き年月をいふ。兆載は數量の名。百萬を兆といひ、十萬兆を載といふ。永劫は極長の期間。
【六度の萬行】一切の修行。六度とは六波羅蜜のことで、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種の修行。この中に一切の修行が總括されるといふ。

【善導和尚の云く】觀經の疏の文。

【一】一心を明す。

【三界唯一】華嚴は法界縁起を稱へ三界は唯我一心にして此の心の外に別の諸法なしといふ。曰く「三界唯一心心外無別法」と。

【三諦一理】天台宗は空諦假諦中諦の三諦をとき而もこの三諦圓融して一理に歸すと稱す。

【阿字本不生】眞言宗は一切諸法の根源大日如來の種子として阿字の一字に本不生をとく。

【五重唯識】法相宗は萬法唯識を觀ずるに五種を以てす。麁より細に至るもの。

【直指單傳】禪宗は學問修行又は經文等によらず、直に自心の本性を觀ずる以心傳心の教なり。故に「直指人心見性成佛」といふ。

を以て知るべし。他力本願に歸して一心に稱念せば往生すべき事決定也。實に生死の海を離れ、菩提の妙果に至りたき志あらん人は自他宗の諍ふ心をやめ、兎角の妄想なげすてて偏に本願を憑み專に歸依を盡すべし。」

【二】問『一心に稱念せよと云ふ一心は如何樣の心ぞや。』

答。一心と云ふに付て諸宗の心まちまちなり。謂る華嚴の三界唯一の一心、天台の三諦一理の一心、眞言の阿字不生の一心、三論の八不中道の一心、法相の五重唯識の一心、禪門の直指單傳の一心、是等は皆な聖道門に、沙汰せらるゝ不思議微妙の一心にして、起惡造罪の凡夫の境界には非る也。今淨土宗に云ふ所の一心とは『觀經』には至誠心、深心、廻向發願心と說く。『彌陀經』には是を促めて一心不亂と明す是れ也。然れば則ち『觀經』に三心と說くを善導和尚は慇懃に廣く釋し玉へり。然りと雖も所詮して是を心得る時は、只僞りかざる心を打ち捨てゝ實の心を起して、深く本願を信じて畢命に至るまで遂に退轉なきを三心とは云ふ。是を又一心と云ふ時は、三心が歸命發願の處に極りて、決定往生の位に安住するより外に別の心なきを一心とは說く也。皆な人の、是れより西方に極樂と云て、不退の淨土あり、其土に彌陀、觀音等の無量の聖衆在す。是は殊に目出度貴き淨土なりと說くを聞て、是をば實と信じながら、我が往生には疑をいたす。是は甚だ愚かなり。既に罪惡生死の凡夫、決定往生すべしと云ふ虛空より告を蒙て、法藏菩薩も正覺を成じて阿彌陀佛と顯れ、依正二報の莊嚴悉く成じたるをや。然に十聲一聲等の稱念に

【依正二報】依報正報の二。正報とは正しく因に報いられし肉體精神を云ひ、依報とは正報に附依して報いられし果報にして草木國土等をいふ。

【三】至心信樂の信心を明す。

【仰信解了】仰信解信ともいふ。仰いで信ずるものと理解して信ずるものとなり。

【梨將軍】前漢の將軍李廣の故事。

よりて必ず生ずべしと云も佛說なり。極樂の二報莊嚴殊勝に成じたりと云も佛說なり。何ぞ一方の佛說をば信じ、一方の佛說をば疑ふ可きか。返す返すも超諸佛刹の極樂國土在すと聞き、最尊第一の阿彌陀佛在すと聞かば、やがて我が往生は決定と信ずべし。即ち極樂の寶國も彌陀の正覺も既に成就して在すが、正しき我等衆生の往生の決定したる支證にてあればなり。」

【三】問「今勸むる所の信心は仰信解了の中には何れぞや。」

答「是は常の仰信、解了信と云ふ位の信心には非ず。即ち本願に成ずる所の至心信樂の信心なり。凡そ仰信と云ふは實體の無き事なり。例せば梨將軍が射る矢の堅石に立つは虎と信ぜしにより、綱臣が炎天に江河を渡るは氷と思ひしによりて也。石と知り、水と知りての後は、都て其態が叶はざる也。次に解了の信と云ふは、各々の宗教に達して信解する事也。然に今是は恆河沙の諸佛の同心に誠實と證誠し玉ふ本願成就の往生を實の如くに信ずる故に仰信の位とも云ひ難し。亦教門の道をとをりて成ずべき事に非れば解了の信とも云ひ難し。故に今、淨土宗の意は解信仰信の外に別して、善知識の開示を受て即ち是を信ずるを、聖力冥加の證得と云ふ也。喩へば人の病患を受たる時、名醫に値て自身の病相を語れば、醫師其病相を、能く能く分別して、藥を與へ灸をおろす。時に病者此藥は何なる藥種を何兩何分に合せたりと云ふ事をも知らず、此灸效しは何の腧膂よりとをりたる效と云ふ事をも辨へず、只醫師の教る分を聞て信じて其藥を服し、其効を貴み灸ぬれば

【四】知識の指示を分別することを明す。

【大小】大乘教小乘教の略。

【權實】權教實教の略。權教は方便の教、實教は究竟眞實の教。

【顯密】顯教密教の略。眞言宗の教判に眞言宗の教を密教と云ひ、あらはに説ける佛教、これは眞言宗以外の諸宗を指す。顯教は眞言宗以外の諸宗、密教とも云ひ眞言宗を密教とす。

【禪教】禪と教、禪は佛心を傳ふる教外別傳、不立文字の宗、教は佛の言教によりて立てられたる教にして禪宗以外の宗旨をいふ。

其病苦たをりて、身心安樂に成るたり。今の念佛往生の道も亦是の如し。教の明を經て、然して後に信ずべき事にも非ず。又實情の假相を以て、動詮に信ずべき事にも非ず。是は唯造罪障重の凡夫善知識の指授の下にて直に往生の益を蒙りて上上人の位に居するを他力の信心とは云ふ也。」

【四】問『善知識の指示を分別して信ずるには是れ明了の信に非ずや。』

答『知識の指示に付て教門證道の二つあり。先づ教門とは諸宗に向ては大小、權實、顯密、禪教等の位を簡別し、淨宗に向ては難行易行、聖道淨土、自力他力、十方西方等の境を了別す。是れ等は大經門に開く淺義の智也。次に證道とは往生は唯た願力不思議と示して、決定せしむる計り也。然らば則ち、此指示を蒙りて、師資一味の實信に歸入しての上には直に念ずるも、口に唱ふるも、身に禮するも、さながら佛讃、併往生の業也。此の位に安住して終に動轉なき位を一心に專ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥、時節の久近を問はず念念に捨てざる、是を正定の業と名く。彼佛願に順ずるが故に一と稱し玉へり。但し此一道に於ては左右無く、人に示すべからず。今此他力の要法は、殊に難信の法たる故に、機縁も未だ熟せず、往生の時も猶を至らざる人、是を聞けば還て憎嫉を生じて破法の罪に陷する也。謗法の咎永く惡道に沈淪して出る期なき事、諸教、淨教同く其誡、淺からず。加樣の謂れによりて別解別行の人には深く穩をいたして而も竊かに退けと頁へ玉ひたり。別解別行の人に近けば主にも知られずして自然に往生の道に迷ふ也。然れば往生を志し、願力

【五】在家の人異學異見の學人にあふことの可否を明す。
【當位即妙】其位のまゝそのものが妙境なるをいふ。
【色身實相】色身のまゝまが實相なること。色身は四大五塵等の色法よりなれる身、即ち肉體身なり。
【慧心僧都】源信。父は卜部正親、大和葛木郡の人、幼にして父を喪ひ、後比叡山に登りて慈慧に師事し、横川の慧心院に隱居し著作に從事す。深く淨土教を信じ往生要集等の著あり、寛仁元年六月十日寂（壽七十六）。

を信じ玉はん俗人等は返す返すも自他宗の教文の施設にもたづさはらず、異學異執の智者學匠にも交らず、我が身心の善惡にも取り合はず只一味に稱名念佛して、臨終の音樂をまち、速に聖衆の來迎をあふぎ玉ふ計りなるべし」。

【五】問『在家の身に於ては教義を簡び、法門を決定す可きことは誠に以て枝葉なりとす。然に別解別行の人にとをざかれ、身の是非をみざれと云ふ事は意得ず覺へたり。其故は縦ひ異學異見の人にて有りとも發心得道の聖人にて在すならば最も縁をも結ぶべき事にて有り。又我が身の進退に付ては縦ひ念佛を申す身なりとも、あやまりひがみをば改めなをすべき事に覺へたり。然に是等を制するは何事ぞや』。

答『彼の諸宗の聖人等は皆是れ必ず權者の假示たるべし。然らば彼此倶に隔り住すまじき也。然に往生の行人は是れ憂苦の外に淨土を明し、穢身の外に彌陀を求る迷情常沒の凡夫也。此機が彼等の高位に混ひ住して、當位即妙の談を聞き色身實相の義を解せば、意必ず亂ずべし。貪求財色の凡夫の上に於ては縦ひ清心を起し眞理を觀ずとも水に畫き、氷をちりばむるが如くにて其跡と云ふ事都て無き也。故に只本願の正意に打ち任せて、諸佛の證誠に打憑て一心に稱念すべしと勸る也。慧心僧都の云く「國土豐に民厚く、佛法更に昌なり。樂しき事を數て曰く、安穩無苦の城には念佛一つの力にて、此等の事を成す可し。萬づの事を抛捨てゝ彌陀を念じ奉んと云々」。此文の意は、世間出世の萬法を束て以て六字の名號と成し玉へる、不可思議の功徳なる故に、此一行を以て現世の息災をも成就し

【六】淨土宗は大乘の名義を知らず大乘の佛法に非ずと云ふ論者の非を明す。

【別圓差別】華嚴宗にて一代の佛教を分くる中別教一乘と同教一乘とに區別するものを云ふ。

後生の成佛をも滿足するによりて、是を除災の醫術にもたとへ、無礙の寶珠にも喩へたり。努しく是を輕しめ疑はん。實に煩惱具足の凡夫たらん人は、最も此一法を仰ぐべし。煩惱即菩提は智者の前の事なり。愚昧の境界には非ず。故に『般舟讃』に云く、「貪瞋は即是輪廻の業なり、煩惱豈に是れ無生の門ならんや。此貪瞋火燒の苦を驗れば、走て彌陀國に入らんには如かず。」已上

【六】問、淨土宗のは大乘の法門を學すと云へどもいまだ大乘の名義を知らず。然る故は惡趣の外に淨土を願ひ、凡夫の外に佛を信じ、或は自力他力の取捨を判じ、難行、易行の是非を論ずるをば、何として大乘の佛法とは云べきと云ふ人あり。其謂れ有るやらん。」

答、「自他宗の邪正を諍ひ、經教の勝劣を辯へん事は立宗歎法の常の沙汰也。是は聰明利智の前の沙汰也。今加樣に申さるゝ人は兼て諸宗の奥義を窺ひ得たる人にて在すやらん。又纔に自宗の所解計りにて推度せらるゝ分にて有るやらん。おぼつかなく存ずる也。但し今是は大乘とも定められよ、小乘とも判ぜられよ、淨土宗の意は左樣の事には取り合はず、唯だ本願不思議の一大事を守る計り也。其上へ常途の智解の方よりは、何と批判せらるゝとも當るまじき也。『觀經』の心地よりは、又何れの位と定ても違ふまじき事也。此故に淨土宗の意は他宗に對して是非の諍ひを申さぬ也。然れども難行易行を分け、穢土淨土を別る事共を以て大乘に非ずと抑へらるゝ言の面は幼稚の至りに聞へたり。若し佛法に差別を論じ、取捨を立するを以て大乘に非ずと云はゞ華嚴の別圓差別、天台の四教權實、眞言の

【四敎權實】天台宗にて一代の佛敎を藏敎、通敎、別敎、圓敎の四に分別し、圓敎を實とし、他を權とするをいふ。
【遮情表德】眞言にて一代の敎說を遮情門と表德門とに分別するをいふ。
【禪敎】禪宗にて一代の佛敎を禪と敎とに別つをいふ。
【大論】龍樹菩薩造大智度論のこと。
【十疑】天台大師著淨土十疑論のこと。

遮情表德、達磨の禪敎、皆是れ大乘にあらずと云ふ可き也。凡そ大乘とは宗宗の所談の趣、各各に替ると雖ども、大意を取て一往是を云はゞ『維摩經』に云く、「諸佛の國と及び衆生と空なりと知ると雖も常に淨土を修して、諸の群生を敎化す」と。『大論』の三十八に云く、「若し諸法都て空ならば、此品の中に往生を說くべからず。何ぞ智有ん者の前後相違せん。若し生死の相實に有ならば云何が諸法畢竟空と言ん。但だ諸法の中の愛著、邪見、顚倒を除んが爲の故に畢竟空と說く。後世を破らんが爲に說くにはあらず。汝天眼無が故に後世を疑ひて自ら罪惡に陷んと、是罪業の因緣を遮するが故に、種種の往生を說く。佛法は有にも著せず、無にも著せず、有無にも亦著せず、非有、非無にも亦著せず、不著にも亦著せず。是の如の人は則ち難を容れず。」已上『十疑』に云く、「問ふ諸法の體空にして本來、無生平等寂滅なり。今乃ち此を捨て彼を求て、西方の阿彌陀の淨土に生ずる豈に理に乖かざらんや」と。又、『經』に云く、「若し淨土を求めば、先づ其心を淨めよ、心淨きが故に即ち佛土淨し。」此、云何んが通釋せん。答、汝ぢ若し西方彌陀の淨土を求るは即ち是れ此を捨て彼を求むるなり、理に中らずと言はば汝ぢ此に住することを執して西方を求めずんば則是れ彼を捨てゝ此に著す。此れ還て病を成す、理に中らざる也。又轉計して、我れ亦、彼に生ずることを求めず、亦此に住することを求めずと云はゞ、此れ則、斷滅の見なり。智者は熾然として淨土に生ずることを求るに生體不可得なりと達す。即是れ眞に無生を見る也。此を心淨きが故に即ち佛土淨しと謂ふ。愚者は生の爲に縛せられて、生を聞ては即、生の解を作し、無生を聞ては即、無生の解を作す。生即是れ無生、無生即是れ

生なることを知らず。此理に達せずして、横に相是非して、他の求生淨土を嗔る、幾許の愆ぞや。此れ則、謗法の罪人、邪見の外道也。略抄『名疏』に云く、「世に邪見異定の人有て、但心佛有ることのみを信じて、諸佛神力の加被を信ぜず。」已上 此等の文の如くんば穢土の外に淨土を信じ、心の外に佛を貴ばゞ、大乘の題目をだにも知らずと云て人を嘲けり玉はんとすれば、其嘲けり還て自らひきをれ玉ふと覺へたり。今、擧る所の文に、既に天眼無き故に後世を疑て、自ら罪惡に陷らんと欲すと明し、彼を捨て此に著す。還て病と成ず、理に中らずと云へる也。但し彼人の意には此等は諸經論の文なれば其は本より然る可し。今破する所は淨土三部經に付て淨土宗の所解を指すぞと仰せられん。其は實最も爾なり。諸教、淨教其心大に替りたる事なり。彼は本有理性の一道に付て、或は萬像森然と明し、或は眞空冥寂と談ず。此は始成正覺の極樂往生に付て和會廢立等の重々を沙汰せり。然らば則ち、諸經、三經と廢立する時は往生の一法を諸經には方便に勸め、三經には眞實に明すと判ずれども、『觀經』の深意より會通して見る時は、諸經諸宗に說く所の往生成佛は皆今の願力成就の上の事也。此の和會廢立の二重は、玄義の第六門に委悉也。爾ば諸經論の文は淨宗の所解に非ずと抑へらるゝは一片の局義と覺へたり。所詮是は唯だ咎もなき念佛往生の教法に咎をかけ、疵を求て本願の深法を破滅せんと巧み玉ふと聞へたり。若し强ちに破滅する事を求め玉はゞ、先づ淨教の深奧を能く能くうかがひ得て、以て然して後に破滅し玉ふべし。其時は妨礙あるまじき也。只推量の分計りにて破滅し玉はゞ恐くは謗法の罪に沈

【和會廢立】和會は諸經論の相違を同和會通すること廢立は非を廢し是を立つること。

【七】大乘の宿緣なき人は淨土を願ひ大乘の宿緣ある人は大乘を學すべしと云ふ說の可否を明す。

【本覺】本來の覺體にして宇宙の眞理たる眞如を云ふ。

【垢凡直往】垢穢の凡夫が直に往生すること。

【二乘】小乘の聲聞乘と緣覺乘を云ふ。

【見思の惑】見惑思惑といふ。見惑は四諦の理に迷ふ煩惱、五利使五鈍使の十あり。思惑は五根五塵の事に對して迷ふ煩惱にして貪瞋癡慢の四あり。

み玉ひぬべし。仰ぎ願くば誠に生死を厭ひ、解脫を求る志しあらん人々は先づ我が身の涯分を能く能くかへりみて意を無智無善に放下して、只ほれ〴〵と本願を憑み玉ふべし。憖に小智は未得謂得未證已證の我々に落て永く惡趣の苦果を免れざる也。」

【七】問「大乘の宿習なからん人は先づ念佛を信行して極樂往生を願ふべし。幸に大乘の宿熏あらん人は大乘に任て修行すべし。時刻到來せば本覺の處に至るべしと勸る人あり云何が有る可きや。」

答「加樣に申さるる人は、淨土の法門をば扱ひかね、定め煩らはるると聞へたり。此宗は是れ大乘の頓敎なる事前に云が如し。但し大乘とは雖も、諸宗の大乘には替りたる超世の本願の大乘也。頓敎とは沙汰すれども、常途の頓には勝れたる垢凡直往の頓敎なり。故に善導和尚は先づ諸敎の漸頓二敎を擧て、其外に『般舟讚』に云く、『觀經』『彌陀經』等に說くは、即是頓敎菩提藏」と釋し玉へり。此故に諸宗の智力を以ては、批判せらるまじき事なれば、諸宗よりして淨敎を難じ煩らはるゝは尤も道理也。但し扱ひ餘し玉ひなば、其分にて閣れて然る可き事なるを、左右なく小乘の所期に擬せらるゝ人ありける也。此等の解は中々、言に足らざる也。何れの小乘の界外の淨土を悟り佛智の內證に達するや。二乘は纔に見思の惑を斷じて塵沙無明の無量の惑煩惱有る事を未だ知らざるが故に三賢十地にさへ至らず。況や妙覺の極地に及んや。況や超世の別意を窺はんや。存知なき佛法を押て義定せらるるは、專ら人情のみにして都て佛意を憚かり玉はずと覺へたり。去るに至りて

【塵沙無明】塵沙は塵の如く沙の如き多數なる事物を知らぬ煩惱にして法相宗にては所知障と云ふ。無明は根本的の煩惱にして非有非空の理に迷ひ中道を障礙するもの。

【三賢十地】菩薩修行の階位五十二位の中第十一位より第五十位に至る迄の位。十住、十行、十回向、十地。

【妙覺】菩薩修行の階位五十二位の位にして圓滿究竟せる佛位。

は、自宗の御證據とても心にくゝは存せぬ也。然るに今、此淨土宗とは阿彌陀佛の因位の時、三世の諸佛淨土の善惡を攝集して、六字の名號と成して、以て是を根源とす。是れより一代の佛法を開き給へり。故に聖道淨土自力他力と云も、諸教諸佛彌陀と云も唯一行の上の具德にして都て別法には非る也。世間出世の一切の萬法、皆此藥の一種の報土より開き出すと說き、八萬の諸聖教は皆是、阿彌陀なりと明す。皆此意也。爾ば知る可し、淨土宗と云は必しも聖道宗に對したる別宗には非る也。本願念佛の根源に約して、且く淨土宗とは號したれども、實は八萬法宗にて有り。此方よりは、孔孟老莊等の興行する儒道の家とも謂る可し。小乘權門の不了義の說にも同ずべし。乃至華嚴禪門眞言止觀等も全く別法には非る也。何樣に得玉ひたる上より念佛小乘と申さるゝやらん。若し其御意たらば本も仰せらるゝ處なり。若し只闇推の御巧みの分ならば、恐くは未だ道と謂を得ざる歟。云々

次に適々大乘の宿習あらん者は大乘に任せて修行せよと云ふ事は是珍しからぬ事なり。縱へば一切の生類に於て色々の形をうけ、樣々の形をうけ樣々の翔をなすは、皆是れ宿習の催す所なれば、今更人の勸めなすべき事に非ず。聖道淨土の佛法も亦爾也、其宿因に酬て或は自力の功を積て即身の本果を期する人も有り。又願體の强力に歸して、頓成の覺殿に到る人も有り。是れ皆、酬因にひかるゝ趣きともなる故に、必しも此を改て彼を行ずべし。彼を閣て此を信ずべしなんどと云ふ可き事には非ず。去り乍ら二種の勝法の道理を聊か分別するに、貪求財色の凡夫の境界に於ては自力の開悟は甚だ難し。他力の果益は即ち

【八】佛は凡夫往生の敎のみを說かず、自力難行の敎を說ける理由をあかす。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌツタラサミヤクサンボデイ（Anuttarasamyaksambodh）無上正等正覺と譯す。佛のさとりをいふ。

【傍依經傍依論】正依經正依論に對する語、即ち宗の根本依憑とする經又は論にあらずして附屬的に依憑とする經典論藏をいふ。

成ず。故に前來の法匠多く願力に託して速に正覺を成じ玉ひき。上古の賢哲、既に自力を以ては出離の道に思ひ煩ひ玉ひたり。況や末世の凡夫僧をや。況や道俗尼女等をや。但し是は他力の敎法の機を簡ばず、時を論せずして開悟得脱の速疾なる事を申す計り也。然らば則ち、本有無相の極理と他力念佛の往生とは二つの道なり。何ぞ念佛往生を大乘の實體に非ずと云ふ可きや。大乘に於て往生成佛の二道あり。成佛は聖道門、往生は淨土門なり。此二門は喩へば鳥の二翅、車の兩輪の如くにて一方、枝葉とは謂る可からず。故に淨土宗には聖道、淨土の二種の勝法を立てゝ、廣く諸宗の佛法を輕しめ申す事なき也。」

【八】問「諸佛の大悲は偏に重苦の者を憐愍して出世し玉へり。若し爾ば初より只一向に凡夫相應の他力易行の法を說て極樂往生を勸め玉ふべし。然に凡夫の境界に非る難解難入の自力の敎法を無量無邊に開て、發阿耨多羅三藐三菩提心とのみ敎へ玉ふは何なる謂れぞや。」

答「常樣の人の存知には、自力成佛を開く諸大乘の經は、最上利根の聖人の爲め、他力往生を勸る三部經は薄地底下の凡夫の爲と云ふ分に思て置きたり。其は傍依經、傍依論等に明す誘引の分齊なり。今、淨土正依の『觀無量壽經』の實義は諸敎の成佛も、淨敎の往生も俱に皆、常沒苦障の凡夫の上に成じ玉ひたる他力大悲なる事を顯す也。然る故は今の阿彌陀佛は自覺覺他を滿足して持玉へる佛也。自覺と云ふは萬德成就の三身門の方也、覺他と云は、四十八願酬因の行願の方也。其自覺成佛の方を一代の諸經と開き、覺他往生の方を淨土三部經と說く也。是則、一代に勸る位の阿耨多羅三藐三菩提は今本願力の上

【三身】佛の三種の身、法身と報身と應身となり。

【執我慢學】己れに執著し我慢なる人。

【酬因感果】修行の因に酬ひられてその結果を得ること。

【頻婆娑羅王】摩掲陀國の王ビンビサーラ(Bimbisāra)影堅と譯す。佛に歸依して竹林精舍を供養せり、後太子阿闍世の爲に獄中に弑せらる。

【韋提希】頻婆娑羅王の后、ヴィデーヒ(Vaidehi)勝身、思惟等と譯す。觀經の中心人物なり。

【檀越】ダーナパテ(Danapati)施主と譯す。

より論義するぞと云ふ事をば、淨土三部經に說へ、又三經に歸して他力往生する事は彼の菩提心より入るぞと云ふ事をば一代諸經に明きたり。凡夫は皆業の凡夫の上に於ては如說く諸法に歸して成佛の本願にも達し、淨土の往生をも遂ん事は甚だ叶ふ可からず。故に先づ彼の自力の解行を閣て、觀無量壽經に歸して願力成就の行を聞き、開く所に往生も成佛も遂に成ずるを即便往生とも即身成佛とも說く也。然れば自身の自力修行の時は極て難く覺たかりつる往生成佛が、今他力本願の上へより、皆やすく成ずる故に往生も成佛も俱に他力易行と申す也。然らば則ち、今の他力易行の法門は難信の法門たる故に執我慢學の人、左右なく是を聞かば必ず信ずる事難かるべし。是によりて佛、先づ酬因感果の道に懸けて、自力の解行を勸め開き玉へり。又彼に化示の權者は如法に修して開悟す。實凡の劣機は得脫に叶はずして生死は淨かに厭ひ難く佛法復欣ひ難しと悲歎す。是の如く歎き悲む機を待て、今此淨土の教法をば說し玉へり。是の如く歎き悲む機とは頻婆娑羅王の后、韋提希夫人是れ也。然るに夫人、大王と俱に釋迦如來の檀越として、色々五百車を每日佛所に施入し奉りて、生身の說法を恣に聽聞し、一心の開悟を意を盡して修行す。然と雖も、是れ本性が煩惱罪重の凡夫なる故に、煩惱即菩提の法門は纔に口言には解すれども、身心は開けず。諸法實相の妙理は、耳か聽聞にはふるれども、境智は尚、各別也。此故に煩惱惡業に障へられて、還て故の如く心想羸劣の凡惑たり。此時、夫人身にあたりて此土の得道、難解難入なる事を思ひ知て、娑婆の得道、總じて頓に捨て今は一向に、佛意の大

【永觀】文章博士源[illegible]の子、十一歲京[illegible]禪林寺の深觀につきて出家し、後奈良東大寺に遊び、三十歲光明山に入りて淨土教を修し、後禪林寺に道し長承元年十一月二日寂、壽八十二。

【九】諸宗の先達殆んど淨土によりて安心を決定せることを明す。

悲に打ち任せ奉りて、唯願くば世尊我が爲に廣く憂惱なき處を說き玉へ、我當に往生すべしと請じて淨土の出離を願ふ。爰に如來喜で、他力易往の密意を開き、凡夫の證徑を顯し玉ふ者也。是則、自力修行の得道に叶はざる末代一切衆生の爲に成じ玉ふ所の、頓に生死を超る本願不思議を韋提希夫人に應て顯す也。是を淨教の根源とす。凡そ諸宗の學道は名利の價に募るよし患ひ永劫等の罪に見へたり。今の他力の教法は名に非ず利に非す、爾らば實に厭ひ悲しむ後世者に非るよりんば是を信じ、是に歸する事あるべからず。此の故に如來、左右なく是を顯はさずして、當機を待ち時を待て此の要法を說き玉へり。爾らば何ぞ

【九】問、諸宗の先達、大略皆本宗本宗の當體にて發明し、證悟し玉ひたり。爾らば何ぞ教の即身成佛の義皆本願他力の教行より成ずると云ふ可きや。

答、『大經』、『[illegible]經』等の如くば三世諸佛、皆な彌陀に依て正覺を成じ、十方の薩埵、悉く願力に酬へて往生を遂げ玉へり。爾ば知る可し、一切の佛菩薩、皆な願力覺他の上より、自覺の功德を成じて自覺、覺他、覺行窮滿の如來とは顯れ玉ふたる也。是の如く窮滿の如來、或は三乘の形を現じ、或は凡夫僧の化を示し、乃至種種の應容を施して六道群類を救ひ玉へり。是を以て思ふに諸宗の先達と申すも皆な滿足大悲の如來、垂迹して弘法利生の化益を示し玉ふなるべし。然則、本迹は異なれども自覺、覺他、窮滿の悟證は替り玉ふべからず。故に知るべし、諸宗の高祖必ず皆、覺他大悲の上よりして自宗の本源には達し玉ふべき者也。但し彼の末學の人々は、宗々の元祖、曾ていまだ其旨を宣べず、

【南嶽大師】天台宗第二祖慧思。支那豫州武津の人。姓は李氏、梁の承聖三年慧文に就きて法華三昧をさとる。大建二年南嶽に入り住すること八年、大建九年寂、壽六十三。

其言を吐かずと云て、定て尙を此義を用ひまじき也。其れは初心の執見なるべし。深悟の先達、何ぞ此道理を昧ひ玉はん。然と雖ども、眞如一實の宗旨を立てらるゝ前よりは、諸教淨教、自力他力等の差別あるべからず。纔いちたむことありて淨土往生なんどの事を沙汰せらるゝとも傍依の分、方便の位には談せらるべし。眞實の一道行る處をば都て言には出さるまじき也。若し其處を少も言に顯しなば、法に差別が出來て宗旨の眼が瞬すべし。故に釋尊も自力の所行を勸め玉ふ一代教の間は、他力無生の一實をば深く内證に祕密して、言教には出し玉はざる者也。去れば世間佛法共に云ふ可き事をば云ふ可し。云ふまじき事をば云ふまじき也。故に弘法大師の云く「確者の曰く、若し然らば前來の法匠、何ぞ斯の言を吐かざる咎、達人の業を捉る事、機の深淺に隨ふ賢者の默は時を待ち人を待つ、吾れ未だ知らず、蓋し言ふ可きを言はざるか、言ふまじければ言はざるか。言ふまじきを之を言へらん失、智人聞はり玉はんのみ」已上 然則、是の如く他力往生の一實の道ある事を内心に證して持ち玉ふ。故に諸宗の先達の中に老後に及では、覺他の願體に歸して、極樂往生を遂げ玉ふ人多し。謂る天台宗には南嶽大師の發願の文に云く「願ば我れ命終に神亂れず正念に安樂國に往生して、面に彌陀聖衆に値ひ奉て、十地を修行して、常樂を證せん。」又『靈應傳』の中に天台大師の御臨終の相を記して云く「端坐して御手を出して机の上の御經を乞ひ玉ふ。卽『法華經』を進するに題を開て、是妙法蓮華本迹二門、其理甚だ遠く解し難く入り難し。且く置いて論ぜざれ。速かに西方に詣り佛に値ひて開悟せん。と

【慈覺大師】圓仁下野の人。初め大慈寺にありしが後比叡山に登り最澄に師事す。承和五年入唐して密教を傳ふ。貞觀六年正月十三日寂。壽七十一。

【智證大師】圓珍三井寺の中興。讃岐の人。十四歲比叡山に登り義眞に師事し仁壽三年入唐、天安二年歸朝す。貞和十年天台座主となり、寛平三年十月廿九日寂。壽七十八。

【一行阿闍梨】唐の鉅鹿の人。姓は張、名は遂、善無畏金剛智に密教をうく。開元十五年寂。壽四十五。

【道範】和泉の人。十四歲出家して高野山の明任に師事し眞言宗を學ぶ。建長四年寂。壽六十九。著作多し。

【一〇】信心と稱名とを明す。

唱へ玉ふて、又尚を机上の御經を乞玉ふに、御給持意得て『觀無量壽經』を參すれば、題を開て、四十八願莊嚴淨土華池寶閣往き易きも人無し、火車相現ずれども改悔すれば尚生ず。況や戒定慧薫修の人をや。と唱へ玉ひき。」又傳教大師の『法華略頌』の文に云く「願はくば我彌陀尊の四十八願弘誓の願力に歸依したてまつらん。乃至終らんと欲する時に臨みて心亂れず、最後十念必ず成就せん。彌陀觀音大勢至、說の如く修行し、乘じて引接したまはん。」上已「又同き日、所作の文に云く「無始已來の無量罪、今世に犯す所の極重罪、日日夜夜作す所の罪、念念步步犯す所の罪、念佛の威力もて皆消滅し命終のとき決定して、極樂に生ぜん。」上已」又、慈覺大師の傳に云く「彌陀佛を稱念して貞觀七年入滅す、春秋七十一。」上已」又、智證大師の傳に云く「合眼安坐念佛懇至、常よりも増して寛平三年十月二十九日に御入滅、春秋七十八云云」乃至、慈仁、覺運、源信、覺超等の諸德、皆、念佛往生の人なり。眞言宗には一行阿闍梨、臨終の行儀を造て、普く安養の淨土を勸め玉へり。又弘法大師の「御入定の記」に云く「人命の無常なること猶、蜉蝣の如し、悠悠たる寂室に彌陀を念ず、」上已」道範の「祕密念佛鈔」に云く「眞言止觀の行人多く彌陀稱名の行に依べし。」上已」華嚴宗には元曉大師、三論宗には淨影大師、嘉祥大師、法相宗には慈恩大師等也。是等の先蹤を以て思ふに實に出離を遂ん事は他力の願海に非ずんば有る可からずと覺へたり。」

【一〇】問『信心だにも心に退轉なくば必しも口に名號を唱へずとも苦からざらんや。』

答「本願に至心信樂欲生我國乃至十念と誓ひ玉へり。即、至心信樂欲生我國とは能信の安心なり。乃至十念とは正覺の行體なり、是則、十方の衆生眞實の信心をいたして我が名號を稱念せよとの勅宣なり。縱ひ願信たりと云とも若し起行なくば行缺の德有る可からず。又縱ひ起行は熾盛たりと云とも若し信心なくば願入の德有るべからず。必ず信心起行、相應する時、往生の業成就する道理なり。故に善導和尚の云く、「但其行のみ有るは行即孤にして亦た所至無し、但其願のみ有るは願即ち虛にして亦た所至無し。要ず須く願行相扶て所作皆剋すべし」已上。但し是れは機情の功力をば剋すべしと云事には非ず。本より願體は成じて有る願行相扶けて所作皆剋する也。我等衆生の方には、善知識より此道理をしめされて領解し信得する計り也。但し是の如く領得する信心も佛力成就の智德なり。都て一切の正覺修善、皆悉く他力成就の不思議なるべし。故に必に信ずる時、自ら聲に唱へられ、聲に唱る時、又自ら心に信心を起する也。故に正覺の行體、衆生の安心を離れ玉はず。又衆生の安心、十念の法體を離れ有らず、是を彼此の二體、相捨離せずと明し、願行具足すれば必ず往生を得と釋する也。但し此安心に付て二種の信心あり。即ち深心の御釋の中に云く、「一には決定して深く信ず。自身は現に是罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた常に沒し常に流轉して出離の緣あることなしと。二には決定して深く信ず。彼の阿彌陀佛の四十八願、衆生を攝受して疑なく慮なく彼の願力に乘して定んで往生を得と」已上」始の御釋は凡夫の機情の分齊を思ひ知らせ玉ふ。後の御釋は佛の願力の不思議を信知せし

【無漏無生】無漏は煩惱の穢れなきこと。無生は生滅變化なきこと。共に變化せざる絕對の境界。

【三昧發得の導師】善導大師をさす。

【五乘齊入】五乘とは人乘（人間）天乘（天神）聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘を云ふ。この五乘のもの彌陀の願力によりて齊しく眞實報土の極樂に入らしむることをいふ。

め玉ふ也。但し所詮は後の信心を決定せしめんがために始の信心をばあぐる也。若し先づ機情の分齊を思ひ知らせずして只後の願力を信ずる事計りをあげなば未來の凡夫疑て云ふべし、今十聲一聲等の名號を以て法報高妙の極樂に往生させんと誓ひ玉ふは十地三賢等の聖人、或は持戒清淨の大德等の爲なるべし。惑障深重の凡夫は、云何として無漏無生の寶國に往生せん。故に我等凡夫の爲の本願にては、有る可からずと錯る可し。然るに善導和尚末代の衆生の此を疑はんをかんがみ玉ひて、此二種の信心を與へ、偏に煩惱具足の凡夫の爲の本願ぞと、深く信ぜしめ玉ふ也。或人の云く、必しも阿彌陀佛の本願を疑ひ奉る事はなけれども、獨身の有樣をはかりみるに、日夜朝暮の愛憎違順の境のみにおかされて、喜怒怨親の念止む事なし。適ま念佛を申し、清心を起すと雖も異念妄心競起して失此法財の凡心たり。かくては如何として本願には相應すべきと歎き惱む事あり。加樣の枝葉に取り合ひて、意を煩はす人は此二種の信心の御釋をは用ひざる也。三昧發得の導師の御釋を用ひざらん程の人は佛說なりとも信ずまじき也。若し喜怒愛憎の念を失ひ、發僞惡口の罪を止て、後に相應すべき本願ならんには我等凡夫の境界としては都て叶まじき、煩惱の凡夫にて有り乍ら煩惱を留んとせん事は血を以て血を洗ひ、火を以て火を消んとするが如くにて、增することはあるとも、うすらぎうする事は有る可からず。故に我身の善惡をば一向に打ち捨てゝ唯本願に歸すべし。然るに今の阿彌陀佛の本願は加樣の惑業止む事なき重罪の凡夫を本として乃至極善の聖人迄も五乘齊入と成じたる故に超世の願とは名く

【二】麁心懈怠のものも不斷念佛は雜行にあらざることを明す。

り玉ふなり。此道理を是の如く分明に信知して、造惡造罪の時も攝取の光中に居したりと思て名號を稱すべし。清心修善の時も願力の莊嚴に乘したりと信じて、往生を領ずべし。返々も此の二種の御釋を胸の中に持て行住坐臥に、六時の中に西に心を傾けて往生の信心を增長し成就すべし。」

【二】問、麁心懈怠の凡夫云何として精進に信樂し無間に稱念すべき。然に長時不斷と勸むるは還て雜行に成ると覺へたり。如何。

答、我等衆生の機力より三業を勵し功力をいたすならば、雜行道の佛法と云て退き、不相應の修行と思て避む可き歟。既に是は他力の往生也。本願の密意なり。其旨前の二種の信心の御釋に分明也。然らば則ち、此他力不思議の往生を遂し得ての上には、彼願體の力として三業無間に信行すること、隨緣等一なるべし。喩へば世間の人の中に萬に亘りて斟酌深き人有り。然れども彼人酒をのみぬれば、酒の醉ふに隨て心に興を催し、口に歌をもうたひ、身に舞をまふ。是れ其主の本性のなすに非ず、只是れ酒の所以也。今、他力往生も亦然也。彼願力に乘ずれば、定んで往生を得と領解して、心中に納めて持ちぬれば、自ら攝取の光明に照され奉て身心悅豫する故に、意には決定の信心を催し、口には酬因の名號を唱へ、身には往生の禮拜をいたす。是則、身口意の所修は各々に替ると雖ども得益の體は只一色の願力往生也。是を念聲是一と釋す。念聲是一とは是れ三業是一也。三業是一とは三業唯南無阿彌陀佛也。是を願力往生の體とは云也。故に知るべし、

【五陰の穢身】五陰は又五蘊とも云ひ物質と精神とを構成するもの。色、受、想、行、識の五によりてつくらるる人間の肉體精神は穢多く煩惱に支配さるるが故に穢身といふ。

五陰の穢身は未だ娑婆に有りて、諸の苦惱に觸るゝと云へども、心法は正念に願成の覺體に住して、聖衆俱會の樂にほこると證し得て持たるを卽便往生とは云也。然に諸宗の意は、顯密權實等の樣々の替は有と雖ども、皆同く先敎文の義理を解了して、其上に事理の觀行を修練して、行時滿る時、證道を得、三昧を成ずる也。故に是等は皆機情の精誠を盡し、一心の本元を磨て成就する佛法也。但し禪門の家には文義を窺ふ事をば敎者の沙汰ぞと簡び除けて、其外に以心傳心と云ひ、直指人身と立る也。然れども其れも未生已前の面目有る事を所期として、勇猛强盛に心地を凝して是を守るは時尅到來して本分の田地に契當する也。是を以て能く自ら思量すべし。加樣の修行は麁惡障重の我等凡夫の上には曾て叶ふまじき難行道也。故に『選擇集』安樂集』を引て云く、「其聖道の一種は、今時に證し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由り、二には理深く解微なるに由る。乃至若し大乘に據らば眞如實相第一義空、曾て未だ心を措ず。若し小乘を論せば見諦修道に修入して、乃至那含羅漢、五下を斷じ五上を除く。道俗を問ふこと無し。未だ其分有らず、縱ひ人天の果報あるも、皆五戒十善の爲に能く此報を招く。然に持ち得る者は甚だ希なり。若し起惡造罪を論ぜば何ぞ暴風駛雨に異ならん」已上 然に今の他力往生は全分衆生の三業の功力を借らずして、偏に願力より成じ與へ玉へる得益なり。我等今佛力を以て、此道理を聞き得て、卽ち定得往生の信心が成就する處を念々不捨者とも憶念不斷とも明す也。故に三業無間に稱念すれども身に疲倦もなく心に厭足もなし。唯長時不斷の他力往生也。是を

易が中の往の法、頓が中の頓成の益とは申す也。』

【三】問「聖道門に於て、大小漸頓等の不同あり。其中に華嚴門、眞言止觀等は是れ至極大乘の頓教なり。故に全く煩惱菩提の差異を見ず、生死煩惱の是非を云はず、善惡邪正等の當體、當體をさながら元來法爾の不思議と悟る迄也。何ぞ是を歴劫迂廻の教門に屬して、難行道と稱するや。』

答『聖道門を同く難行道の佛法と云へばとて妄に彼の埒を破するには非ず。凡そ聖道門に大小二乘あり。先づ大乘とは是に亦二つあり。謂る佛乘、菩薩乘也。次に小乘とは是に亦二つあり。謂る聲聞乘、緣覺乘なり。是を四乘とは云へり。倶に是は此娑婆世界の内に於て斷迷開悟し、捨劣得勝するなり。

先づ佛乘とは眞言、天台、華嚴、達磨等に學ぶ所の即身成佛の理是也。即ち眞言宗には從本已來無去鎭住滿月之宮と云て、一切の凡聖同く此處に住し、皆實際に居して、各各法界普門の德を以て、能く自心の衆生を度す。凡聖貴賤全く是法身也。密嚴華藏、即ち我身也と習へり。次に天台宗の意は、十界三千の依正は天然の法體圓融の自性也。阿鼻の依正は極聖の自心に處すれば釋迦、大日とても貴むべきに非ずと云て、無始色身本是理性妙境妙智と談ずるなり。次に華嚴宗には初發心時便成正覺と云て、初發心の當位、即ち三世の如來と等しきが故に萬法圓融して各々即身成佛ぞと習ふ也。次に禪門の意は、前佛後佛以心傳心と云ひ、直に此心を指て、即身即佛と名くる故に、成佛とは云はざる也。是等

【二】聖道諸宗を難行道と稱することを明す。

【歴劫迂廻】三祇百大劫の修行を經て成佛する漸教の法門。頓教に對しその道迂廻なるが故に此名あり。

【密嚴華藏】密嚴世界と蓮華藏世界。密嚴淨土は三無漏の因を修して殊勝三昧に入りたる者の遊戲する世界にして密嚴經に說く淨土なり。蓮華藏世界は盧舍那佛の嚴淨せし淨土なり。

【阿鼻】アビーチ(Avici)阿鼻地獄のこと、無間地獄と譯す。八熱地獄の最下。

【八不中道】一切の否定をあらはす。一切を否定せる無相に中道の眞理ありとするものの八不とは不生不滅不去不來不一不異不斷不常を云ふ。
【四弘誓願】諸佛菩薩の起す四種の大誓願。衆生無邊誓願度、煩惱無數誓願斷、法門無盡誓願知、無上菩提誓願證の四。
【三僧祇】三阿僧祇劫の異稱。三無數劫なり。菩薩が佛果を得るまでの年次をいふ。
【五篇七聚】戒律の總稱。五篇とは波羅夷罪、僧殘罪、波逸提罪、提舍尼罪、突吉羅罪の五、七聚は五篇の中に偸蘭遮罪を加へ突吉羅を突吉羅と惡說との二に分ちて七種とす。

の宗は皆即身頓悟の旨を談ずる故に、同く佛乘と號するなり。
次に菩薩乘とは萬劫修功して不退を證する故なり。是は三論、法相の二宗に學する也。謂る三論宗には八不中道の無相の觀に住して、而も心には四弘誓願を起し、身には六波羅蜜を行じて三僧祇の間、菩薩の行を修して成佛すと習ふ也。法相宗には五重唯識の觀に住して、而も四弘を起し、六度を行じて三祇劫を經て成佛すと申す也。故に是を同く漸教と名くる也。
次に緣覺乘とは獨り飛花落葉を觀じて、諸法の無常を解り或は十二因緣を觀じて、三世兩重の因果を知る。疾きは四生を經、遲きは百劫を經て悟を開く。次に聲聞乘とは初め不淨觀より、終り四諦の行相まで悉く是を觀じて、疾きは三生を經、遲きは六十劫を經て、大阿羅漢の極位に至る也。此二乘の道は、成實俱舍の兩宗に學する也。又此聲聞乘に付て、戒行戒律を備へたり。謂る比丘は二百五十戒を受持し、比丘尼は五百戒を受持す。是を五篇七聚の戒と名く。又沙彌、沙彌尼の戒、式沙摩尼の六法、優婆塞、優婆夷の五戒、皆是れ律宗の中に明す處なり。然らば則ち、此四乘の道は俱に是れ、我等凡夫の有に非ず。又今の時節に背きたり。其故は、若し小乘の道に趣かんとすれば二百五十戒、持し難し、苦集滅道行じ難し。飛花落葉十二因緣都て及び難し。又、大乘の道を求んとすれば三聚十重の戒行發得し難く、四弘六度の願行又叶ひ難し。又即身頓證の理觀に於ては眞言の入我我入の觀、天台の三觀六即の觀、華嚴の法界唯心の觀、禪門の元來即是の觀、此等

【式沙摩尼の六法】シクシャマーナ(Śikṣamāṇā)沙彌尼より比丘尼に至る二年間に修學する六種の戒法。畜生の生命を殺さず、四錢を盜まず、摩觸せず、小妄語せず、非時食せず、飲酒せず。

【三聚十重】三聚淨戒と十重戒。三聚淨戒とは攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒の三。十重戒は殺戒、盜戒、婬戒、妄語戒、酤酒戒、說四衆過戒、自讚毀他戒、慳惜加毀戒、瞋心不受悔戒、謗三寶戒の十。

【入我我入】如來の三密我に入り我が三業如來に入り如來の三密と衆生の三業と彼此相應し互入し以て一切諸佛の功德を吾身に具足するをいふ。

は何れも教法の理は極て甚深にして機根は至て闇劣也。故に末代の衆生の爲には、何れも何れも修し難く、成じ難き佛法也。故に彼聖道門を總て難行道と稱する也。實に東大寺の永觀律師の云く、「眞言止觀の行は道幽にして迷ひ易く、三論法相の教は理奥くして悟り難し、勇猛精進にあらずんば何ぞ之を修せん、聰明利智にあらずんば誰か之を學せん。」已上然るに今淨土宗に沙汰する位の念佛往生と云ふ事は常の人の思ひ寄りたる分には非ず。是は彼の阿彌陀佛の十劫正覺の昔し、願力に成就し玉ひたる無生也。實に道心ありて佛果を求ん人は淨土の善知識に遇て急ぎ往生の一大事を辨し玉ふべき者也。」

【一三】問、今の他力往生をば唯專らに名號を念じて生ずることを得と標すと明し玉ふ。故に唯南無阿彌陀佛の一行を稱念するより外は都て他事あるべからずと覺へたり。然を又、三心四修五念門と云ふ事を擧て是を往生の業とせよと勸め玉ふは何なる謂ぞや。」

答、三心四修五念門と云ふは是れ能入の智慧、名號得生と云は是れ所入の無生也。然る故は三心四修五念門とは所詮は是れ安心、起行、作業の三つ也。此の三つは必ず聖道、淨土の佛法にも亘り、世間の諸事にもあるべき事なり。先づ目前の小事の一つを以て餘の一切を知るべし。謂る世間に人の茶を立つるが如し。茶は是れ安心の體なり。湯水を以て立つるは是れ起行なり。總雜の鹽梅を能くするは是れ作業なり。縱ひ茶ありとも立る義なくば無用なるべし。縱ひ又茶と湯水とを合せて立る事はありとも若し鹽梅あしくば何なる名茶なりとも本味失する故に睡りを醒し、心を澄す徳はあるべからず。佛法も亦是の如し。

【一三】三心四修五念を往生の業とすることを明す。

【泥梨】ナラカ（Naraka）地獄のこと。

【西山上人】浄土宗西山派の開祖、善惠房證空上人、俗姓源氏、加賀守親季の長男、十四歳吉水の法然上人の室に入り、浄土宗を相承す。法然上人の選擇集を撰述する時にその勘文の任に當り、正治元年師に代りて同書を兼實公に講ず。寳治元年十一月廿六日寂。壽七十一。勅諡して鑑智國師と多し。

【八講】法華八講のこと。法華經八巻を八人に分ちて八座に講誦供養する法會。

往生の安心といふものは本より願力に成し定りたる無生の體なり。是を我等が身器に移し置くは茶を天目に入たるが如し。此安心の體を三業門に翔ひ顯すは、湯水を以て茶を立るが如し。異念妄心の交らずして、安心起行相應して彼此の三業相捨離せずと成ずるは茶の鹽梅のよきが如し。即是れ作業也。往生だに定まりぬれば必ず三業の起行には出る也、但し三業の起行をばなすとも若し我心に邪念を起す事有らば安心の體を振舞には非ざるべし爾らば助業の起行とは云ふ可からず。唯だ是れ雜毒の善をば勵まし、輪廻の業を營むにて有る可し。安心なき起行は行ずるに隨て、憍慢增ずる故に彌々、泥梨に沈む也、三業起行多憍慢と釋するは、此位の起行の事なるべし。然らば所詮は安心起行相應する處の志を作業とはする也、故に此安心起行作業の三つは、譬へば一輪三足の如くにて、何れも愚かなる事はなけれども、殊には作業が大事なり、されば西山上人、叡山の文殊樓を再興有りて其の供養に八講をおこなはしめ玉ひき。時に、上人傍にて御聽聞ありて後ち門弟等に語りての玉はく「當世の佛法者は自宗他宗倶に安心起行をば形の如く存知して翔へども作業をば知らず、面々能々修行用心して敢て怱せにし玉ふ事なかれ云云」夫れ作業とは一心專念の正定業なり。此正定業より安心起行をば成就するなり。作業なき安心起行は、唯願唯行にして倶に所至なし、其故は若し起行なき安心は隣家に殊勝の財あることを聞いて纔に耳を肥す計りにて半錢も自分には有らざるが如し。又安心闕けたる起行は氷雪を組んで塔と崇め、劇き風の中に一燈をかゝぐる如くにして何れも何れも勞して功なし。愚なる狗の

【一四】三心、四修、三念につきて一々の義を明す。

蹤を追ふに似たる也。然るを作業の志より安心起行互に助て共に他力易行の往益と成する也。さあればと云て又安心起行は劣りたり。作業は勝れたりとは思ふ可からず。他力安心の魂を自力三業には翔ひ顯す。故に安心起行は本體なり。作業は是を成就する用心の功也。即ち金輪の三足の如くにて全く闕く可からず。然らば則ち、是の如く用心起行して無生の本家に安堵したる位を念佛三昧とは云へり。此位に居したる位にては、南無阿彌陀佛の一行より外には三心五念と云ふ色もなし。觀法觀念と云ふ形もなし。都て一切の分別を捨離して唯、南無阿彌陀佛の一行に成り歸る迄也、此處を一向專念他力往生とは云へり。是れ則ち前の三心四修五念と云ふ、觀佛三昧の智門より此の處には歸きて、名號得生とは定まりたり。但し此位は、是れ自證の往生也。又化他の大悲に趣く時は三業の起行門に立ち出でて、前の三心四修五念門を自らも勵み、他人にも敎て行ぜしむる也。故に此安心起行作業の三つは、無生の一行を定むる智慧門ともなり。利他の大悲に趣く起行門とも成る者也。故に是れ尤も至要なれば是を往生の業とは勸る也』

【一四】問『三心、四修、三念、其の一一の義如何』

答『三心は是れ往生安心也。是をば『觀經』に明したり。謂る一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心、三心を具する者は、必ず彼國に生ず』已上。殊に憑もしきは、必の語也。此文の如くば、一毫の惑を斷せずとも、此の三心を具足して無疑無慮の信心だにも立しなば、必定して彼報身の土に往生して、速に八萬四千の相好を備へ、内證外用の悟りを開く可き

事、實なるを以ての故に「三心既に具せば行として成ぜざるなし。願行既に成じて若し生ぜずば是處あることなし」と釋し玉ひたり。誠に凡夫相應の法體、過分至極の巨益とも申せば涙も留らず、我等今、受け難き人界の生を受る上に、剰へかゝる微妙不思議の教に遇ひ奉りて易々と生死を離るゝ事、人間に生じての思ひ出、何事か之に如ん。哀なる哉、適ま此身を受け乍ら此法に歸せず、信ぜずして虚く死する人は、實に是れ寶の山に入て手を空くして歸るなるべし。故に三心の謂れを能々意得て此度の往生を成就すべし。

一に至誠心とは是れ眞實心なり。卽ち自力の心を捨て他力に歸したる心なり。他力の佛果に歸しぬれば彼の自正覺の眞實心卽ち我等衆生の眞實心と成じ極れり。然るに衆生の方の自力の心、貪瞋邪僞の體とする故に縦ひ三業を起して、頭燃をはらふが如くに安心起行を勵すとも永く眞實ならざる故に是をば此は必ず不可と簡て、阿彌陀佛の因中成就の眞實心に歸せしめ玉ふ時、我等が雜毒虚僞の心、卽ち他力の眞實心に成り返る。故に知るべし、今是は彼阿彌陀佛より衆生の上に至りたる眞の心なるを以て、至誠心と名くる也。二に深心とは前の他力眞實の心の體、卽ち別願酬因の念佛三昧の位に極りて決定往生の信心成就する心也。三に廻向心とは前の二心の時、自力雜善と簡び捨つる定散の諸善を今は他力往生する衆機の體と轉して寶名號所持の眞實の善と廻向發願する心也矣。但し三心とは擧げたれども所詮して是を意得るに上の三心は倶に所歸の法體、今の一心は是れ能歸の願心にて能歸所歸、都合して南無阿彌陀佛の一行と證得したる位を一心不亂とは申したり。故

に唯是れ願行具足の一心なれども始中終を意得ずしては他力往生の心とは顯れまじき故に『觀經』には是を三心と開く也。

次に五念門とは是れ往生の起行なり。是を『淨土論』には出したり。謂る禮拜、讃歎、觀察、作願、廻向なり。是則ち香華燈明等の種々の供物を備て、彼の阿彌陀佛及び依正二報の種種の莊嚴を身業に專ら禮拜し、口業に專ら讃歎し、意業に專ら觀察して、三業四威儀を論ぜず、修する處の功德の中に專ら願生の想をなすべし。又此等の功德を請取て、法界の衆生も同く、極樂に往生すべしと平等に廻向するなり。但し又此の一一の門の中に上の三心と云ふ安心をもたずば、縱ひ彌陀を禮拜し、恭敬し、極樂を讃歎、觀察すとも皆な雜行なるべし。上の安心を以て行ずるとき、往生の起行とはなるぞと云て、五門既に具ぬれば定で往生を得。一一の門、上の三心と合して、隨て業行を起せば多少を問はず、皆眞實の業と名くと釋し玉へり。

次に四修とは恭敬修、無餘修、無間修、長時修なり。是れ往生の作業也。即、上の安心起行の體に於て慇重の志を盡して刹那も餘念なく、間斷なく畢命迄なしとぐるを作業と云ふ。是又前の茶を立る喩の如し。即ち茶は安心の體なり。立つるは起行也。然らば此茶も立るに付て、先叮嚀の志を起すは恭敬修の義なり。茶を立るのみに意を入るゝは無餘修の義なり。少も意をやすめざるは無間修の義なり。鹽梅口味を等分に立てとぐるは長時修の義なり。今是も願力所成の往生の體を自の心中に證し納めて持ぬればやがて恭敬

慇重の志を以て、畢命の時に至るまで聊も餘念なく退轉なく、此證得往生の體を憶念し、稱禮するを親近憶念不斷無間と成じたる他力の四修とは云へり。故に此時正く安心起行作業一致に極りて速に無生を證する位を、行四修法用策三心五念之行速得往生と釋し玉へり。

【一五】安心起行作業の一致の相を明す。

【一五】問「安心起行作業一致に成ずと云ふ。其一致の色如何。」

答「我等が意に一向專念と證得すとは雖も、未だ此穢身につゝまれて、此穢土にある程は諸境緣に引かされて身心無窮に擾亂す。其亂起、亂滅するに隨て其儘只、他力往生と信知して、南無阿彌陀佛と稱するを一致の處とは云ふ也。さあればとて諸宗に煩惱卽菩提と解し、當位卽妙と明す樣なる事には非ず。今是は愚惡造罪の凡夫の上に成じたる他力大悲の往生なり。故に善惡の緣に隨ひ、順逆の境に引かれて、身心色々に散動するは皆是機根の本性、流轉の形也。此の如く當體當體に各指南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と成じたる故に、惡心起らん時も只其儘にて本願を貴むべし。善法の催さん時も又、其儘の往生を信ずべし。是を念々稱名常懺悔とは釋し玉ふ也。若し先づ心をきよめ錯りをなをして、然して後に念佛申して往生すべしと云ふ事ならば、何の世にか我等が意の正路にはなるべきや。人の命の迅速なることは一息を待たざる習也、邪僻を改めんとする內に命空く終りなば、又徒に輪廻すべし。故に自らの賢愚邪正に取り合はずして、唯本願の成じたるに打任せて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と稱念するを卽便往生とは云ふ也。此位までは三心五

【一六】文殊般若の智慧と觀經の普賢念佛とを會通す。

ぞと云ふ上助業もなし、作意觀察といふ事もなし、唯だ念佛專一に念佛往生定なり。故に實相相好と三心九念四修を、一、粹一、專一して此一事に一致して一行三昧に修する位には、『文殊般若經』の一行三昧を明す　乃ち心を一佛に係て、相貌を觀ぜずして、專ら名字を稱すれば卽ち念の中に於て、彼の阿彌陀佛及び一切佛等を見ることを得といふ文を引用して隨力の義意を顯し給へり。然に心を一佛に係くとは係は歸なり、一佛は彌陀なり。故に係心一佛と云は是れ至心歸命阿彌陀佛の意なるべし。是れ則ち、三心四修九念は三心九念に歸りて、三心九念は文三心に歸る也。此三心をば文殊識心の一心に納て、『是の如く至心に聲をして絶えざらしめ十念を具足して南無阿彌陀佛を稱す』と說けり。此至心とは卽ち本願の至心信樂の至心なり。故に是れ隨情の功力も有無を離れたる他力不思議の稱名なり。此稱名を、彼の經に應して專稱名字とは說れたり。彼の『文殊般若經』とは有無不二の位の無相三昧を說たる經なり。有相とは散善なり。無相とは定善なり。爾らば彼の經、卽ち『觀經』の意に准じて定散の外、三輩の外の正定業と云ふ意を一行三昧を明す。心を一佛に係けて、相貌を觀ぜず專ら名號を稱すとは明したり。是れ則ち、一代の經教を他力超世の淨土に等しく一種の佛法と聞會する意なり。委くは觀念法門等に見へたり。」

【一六】問「彼の『文殊般若經』は般若の智慧を宗とせり。故に無相三昧の一行を本意として此の實相の妙理に至らしめんとするに方便に有相の名字をば勸る也。然るを彼一乘實相の外に他力眞實の妙行有る事を顯して專稱名字とは說ぞと云は、自由の至りと覺へたり如何。」

答、何れの宗も諸法を一法と見る時は我が家々の心地よりして開會する習ひ也。謂ゆる法相に唯識を體と所する意よりは一法として、唯識の所變に非ずと云ふ事なし。天台に一乘を宗と談ずる位よりしては、三乘五乘さながら一佛乘也。眞言の家よりは一切皆三密の行相也。禪門の眼よりは、萬法自ら直指見性の道也。今觀經宗の證得よりしては、一代悉く彌陀超世の願意を說き、凡夫直往の祕要を宣るなるべし。但し聖道門の會通の義と觀經宗の會通の意と、其意遙大に隔れり。聖道門は諸宗異なりと雖も、所詮の時、一理一實に歸めて、悉く一切行對の差別なし。故に聖教萬差所詮一理と云ひ、修行各門得道不二と明す也。此時は、尤も有相の名字を以て方便として、終に實相の一理に歸すべし。是は『文殊經』の當體の義なり。次に淨土の教相には聖道淨土の旨を亂らずして二種の實法と判ずる也。其故は今の宗に佛は往生成佛の二通を兼して、自覺、覺他、覺行、窮滿と通じ玉ふたる佛也。然に此覺他とは、我等が往生したる別願成就の方也。自覺とは、又我等が成佛する總願成就の方なり。是の如く成就し窮滿して、持玉へる一佛の上の二德を聖道淨土の兩門と開き、諸經、三經の二道と分つる也。然らば則ち、是の如く二門二道に分別して選て捨て、是を會通する時は、諸經は自覺成佛の位を宗として、而も意に別に往生の方を解了し、『觀經』は覺他往生を以て體として裏に自覺成佛の方を存す。此時は彼の『文殊經』が無相離念の觀行の妙理を體とするは、覺行窮滿する自覺成佛の方也。又專稱名字と明すは、覺行窮滿する覺他往生の方也。故に『文殊經』の當體の義は實

相も名字も遂に體名の一理に歸して全く別法なし。觀經宗の意よりは彼の實體の法理の外に、專稱名字を他力願實の別意の法と名る也。爾らば知るべし、同じ『文殊經』の文なれども『文殊經』の當體の專稱名字と『往生禮讚』に入眼し玉ふ時の專稱名字とは、藥の如く自體、體他の二行に構る可し。既に是れ善導和尚の『觀經』の宗意に合會して、引標し玉へる也。故に彼の體名の理體と專稱名字とを往生成佛の兩實兩益に判して、但に彌陀一佛の具徳と會通す。是れ即ち正覺の本意、諸佛證誠の極要也。豈に自由の義と言ふ可きや』

愚要鈔　卷中

南紀總持寺沙門　明秀　撰

【一】問『上來の法門は大略宗旨に立ち入りたる深奥の義共にて、在俗尼女等の爲には不相應に覺へたり。若し是等の義理を一々に領解する事叶はずば往生も不可にて有るべき也。若し爾らば濁世の肝要を本とする他力往生の教文とは云ひ難し。如何』

答『淨土の教法に付て能聽能傳の二つあり。能聽とは得益、能傳とは流通也』是を阿難尊者と韋提希夫人とに屬して得益流通と二段に説き分けられたり。然るに韋提は『觀經』所説を一々に聽聞して而も文中の名號、得生の方を領解して自の往生を證得する計り也。阿難は又自ら往生を證る上に今一重未來流通の方を作する故に、觀門の面を一々に聽持して總て忘失する事なし。然らば則ち佛在世の時、是の如き能聽能傳の二德を二人に標定して置き玉ふは、則ち末世の說聽も偏ら是に准ぜよとにてあり。而らば末末世に於ても出家の身たらん程の人は、佛法を能く稽學して、自らも益を蒙し、他の爲にも法命を相續すべし。持戒破戒を云はず、上代末世を論ぜず、剃髪染衣の形は、皆是れ大師釋尊の御弟子也。又三寶隨一の僧寶也。三寶とは、譬へば佛寶は醫師の如し、法寶は醫藥の如し、僧寶は看病人の如し。此三寶實は別相と顯れ、或は一體と成りて濁惡生死の病人をたすく

【一】宗旨の深義を領解するは他力の易行に非るや否やを明す。

【阿難】佛の十大弟子の一人。多聞第一の稱あり。アーナンダ(Ānanda)慶喜と譯す。釋尊の從弟にして常侍の弟子なり。

【韋提希】頻婆娑羅王の后。ヴイデーヒー(Vaidehī)勝身等と譯す。王子阿闍世の爲めに七重の牢獄に幽閉せらる。佛、爲に觀無量壽經を說けり。

【觀門】教門に對する語。卽ち教相に對して實踐的方面の修行をいふ。

【一體別相】一體の三寶、別相の三寶の意。一體の三寶とは又同體三寶とも云ひ、三寶の一々に三寶の義あるもの。別相三寶は又化相の三寶とも云ひ、諸佛の三身を佛寶とし、六度の法門を法寶とし、三乘等を僧寶とするもの。

【住持の三寶】佛滅後に住持するもの、三寶の說明は本文にも詳し。

【六根】眼耳鼻舌身意の六根をいふ。根は最も作用をなす機能なり。

【教門觀門】佛教を二大別せるもの。教門は教相學にして、義理を究むるもの、觀門は修道にして實踐躬行を本旨とするもの。佛教は畢竟この二門を出でず。

る也。然るに今此末世には、一體別相より住持の三寶が利益あり。住持の三寶とは繪像、木像等は佛寶也。大小三乘の經卷は法寶也。一切の出家の僧は僧寶也。又此三寶は身口意の三業の如くにて、何れもをろかなる事はなけれども、先ず佛寶が大切也。其故は、此娑婆の衆生は、諸根の中に耳根が利根なり。故に口南の金說を耳より聞取りて意にさとりを開く也。然るに繪像木像等は默然として在す。經卷には口說なし。若しくは僧がおりて佛寶、法寶の謂れを委しく分別する時、衆生は是を聞きて成佛得道の解を生ずる故に、僧は是れ衆生の無上の福田也と稱せり。然らば須らく僧は必ず佛法を修行して、如來の遺法を相續すべき事也。殊に淨土の教文は、行功を積たずして輙ち聞く位にて、即ち往生の益を得る不思議の奇蹟なる故に、是非遵行すべき法門にてあり。然らば則ち末世衆生に知らせられん人は聖道淨土のさかひ、自力他力のかはり、教門觀門等の道どもを能く能く習ひ得て、以て四重の疑網を除いで、他力往生の智解を未來永々に留めて、末世の利益を成すべし。無智の人々の爲には宗義の建立、法門の義理等も所用なり。次に世俗の家業を能とする在家俗人等は、善知識の門下を覺るに付けて、其經文章句の義理の方をば闕て、偏に往生の安心の方を以て、捨て名號を稱念するより外は、都て餘事を交へ玉ふべからず。其安心とは『觀經』の三心也。但し常樣の人々のをもらくは、三心の樣を分明に意得取りて持たる人は往生す。知らざる者は、往生すべからずと得たり。然るに其三心と云ふは、正しき大事の法門なれば、能く學を極めずしては、しらるまじきと也。此故に我

【四威儀】行住坐臥の四種。

【二】信心決定せるも猶忽然として煩惱起るは如何にすべきかを明す。

【六塵】心の對象となる客觀。眼識の對境たる色境、耳識の對境たる聲境乃至鼻識舌識身識意識の對境たる香境、味境、觸境、法境をいふ。この六境は心をして煩惱を起さしむるが故に六塵と名く。

等ごときの在家の身には、曾て叶ふまじきことぞと云て、念佛往生に退屈をなす事あり。此義閑か也。三心と云は、是れ宗旨の眼、往生の大事にて有る故に、宗家の大師も言の面をばくれ〴〵とねんごろに釋し玉ひたり。然れども心得る所の所詮の道理は極めて易き事也。唯專ら決定往生と信じて稱名念佛する心、則ち是れ三心なり。謂ゆる他力の覺體に歸して三業眞實になるは至誠心なり。願力不思議の名號往生と決定するは深心なり。心を偏に極樂世界に置て彼の聖衆、莊嚴、遊戯、快樂するは迴向心なり。故に所詮は只眞實に往生を信じて一心に專ら念佛申する人は三心の名をも知らされども、自然に三心は具足す。故に三業の四威儀、直に唯南無阿彌陀佛の一行になりかへりたる位の人を決定往生の人とは申す也。愚痴の往生と云は此位の事也。然らば則ち數文の義理を學する智者も、自證の時は此位に出るなり。故に智者も愚者も在家も出家も往生の益、唯同く一向專念の處に極る也。」

【二】問『是の如き甚深の法藏を聽聞して、信心肝に銘じて他力往生決定す。然る處に其の意忽然と又本の方へかへりて六塵の境にはせちる。是をば如何すべきや。』

答『法門の義理を一々に聞了して本願名號の處に居きながら、又我が心に取り合ひて見こそあれ、角こそあれなむどと惱むは猶且是れ願力往生の信心の金剛の如くに決定せざる所以なり。然るに他力往生の處に居しての上には都て我が方の信不信の念慮にも意を止めず、往不往の行相にも目をつかはずして、唯偏へに三業さながら南無阿彌陀佛にて有

【含藏識】第八阿賴耶（Alaya）識のこと。又藏識と云ふ。これは萬有の生起を阿賴耶識の一元に求めしものにて阿賴耶唯心論の主張するところなり。「唯識論」、「起信論」、「楞伽經」等皆阿賴耶唯心論なれども、その取る所各小異あり。玆に含藏識といふは善惡一切の種子を含藏する識の意なり。

るべし。」抑々我が心と云ふ者は、我が身の爲には大敵也。曠劫より已來、無量生死の苦患を受くることは罪を造りて與へたる人もなし。修する所の自らの業を作たる族もなし。但是れ心の所爲也。外は質直柔和なる貌にて、内の邪僞欺騙なる者此心に過ぎたる者なし。我が身を思ふよしをして寒きには衣服をきせんとて色々に是を誘へ、渇したるに食味を與へんとて種々に是を調へ、或は色に耽て樂み、或は財を愛して喜をなす。是の如き種々にいつはりしたしみて、終には惡道に墮在せしむる也。但し知らず、地體より我が心の我に怨をなさんと思ひけるやらむ。又愚癡の心よりして只目前の事をのみいとなみて、當來の果報をわきまへざるやらん。兎角にたのもしからぬ心なり。日比より我が讎となる心ぞと知て置くときは、今更うつくしぼれたるも、還て猶ほ彌々をそろしくこそあれ、適々値ひ難き他力不思議の佛法に値て、三業の功に依らざる不思議名號の處に至らんとすれば、いかにも住みなれたる處に我をとゞめんと思ふやらむ、他力と云ふも、信心を發し狹分を勵してこそなどゝをしはからひして、特なき不圖に符を付するは、只此心なり。さる時に所詮心より外の異學異見もなし。心より外の群賊、惡獸もなし。故に返々も、我が心のよしあしを早く打捨てゝ、偏に他力往生の南無阿彌陀佛の處に安住すべし、但し諸宗の佛法は我心を以て體として、遂に我が心の一法に習ひ極まる也。故に先づ心に付て、重々を差別する也。謂る木石等の年を經て精靈あるをも心と云て汚栗駄心と名づく。又有情の類の思量分別するをも心と云て、質多心と名くる、凡夫の我心と思ひたるは此位也。又含藏識あ

【末那】マナ(Manas) 識は第七識にして意識と譯す。末那は思量の義にして前六識の所依となる。
【菴摩羅】アマラ(Amara) 第九識にして清淨なる識とし、阿頼耶より別立す。
【三細六麁】起信論に詳述せらる。三細は阿頼耶識が根本無明の力によりて初めて能動する三種の相なり。六麁は迷の因果を六相に分てるもの

り。是れ第八識也。無明法性和合する處なる故に含藏識と名く。梵語には阿頼耶と云ふ。又染汚意あり。第七識也。梵語には末那と名く、此二を權教の中に明す。實大乘には、此上に第九識を立てたり、梵語には菴摩羅と云ふ。此には清淨無垢に名く。是れ衆生の本心也。則ち迷倒の境に染せられざる故に、清淨無垢と云也。又「釋摩訶衍論」には一心に於て眞如生滅の二門を分つ、則ち忽然として無明の一念おこる故に、世間出世の相を見る。是を生滅門と名く。此生滅門の中に三細六麁あり、三細とは業相、轉相、現相也。此三は第八識の分也。此中に業相、轉相と云ふ所は心とはいへども、未だ能所分別には非ず。第三の現相の時始めて、眼耳等の六根及び山河草木等の境、出生して色心の二法わかりたり。是により六麁を生ず、六麁とは、一には智相、謂る心法に心王心數をわかち、色法に顯色形色等をわきまふ。然れども此智相の分には色心の二法に付て、未だ執著を生ぜず。二には相續相謂る前の分別の念相續してやまざる也。此智相相續の二は、第七識の分也。三には執取相謂る境界に付いて執著を生ずる也。四には計名字相謂る善法に名言を安じて、是は貴し、是は賤し、是は佛法、是は世法なるなどゝ云ふ計著をおこす也。執著計名の二相は第六識の分也。五には起業相、謂る六識の執著によりては善惡の業をつくる也。六には業繫相、謂る善惡の業によりて或は四惡趣に沈沒し、或は人天に輪廻する事也。然らば則ち諸宗に、是の如き種々に心體を沙汰すれども、今、淨土宗には、唯指六識色強の位に於て、衆生散動識劇しく、猿猴の心六塵に遍く暫くも息に由なしと釋す。此散動の

【三】觀經所說の念佛の安心を明す。

心精は則ち『觀經』の三心に轉入して、他力往生の理に居して、其上より九識本有の妙心をば成ずべし。行者正覺の願力に歸せざらむ程は、只頓悟頓機の觀心にて有るべし。但し此義は實業の凡夫に約して云ふ所也。二利の德を成ずる權者聖人に於ては何ぞ自力の得道を難しとせん耶」

【三】問『我等が本心は地體法性靈覺の心なれば、理事ともに捨て﹅取り合ふまじきことは其理聞えたる也。但し今『觀經』に入て、領得する所の三種の心をば「三心とは行者の至要也。能く用心して敢て退轉せしむること勿れ」と釋し玉ふ。然らば我も此心をば正直に指南して上人に持つべき事と覺へたり、如何」

答『觀經』の三心は是れ往生したる眞實心なれば、正念現前に執持すべき事は勿論なり。但し三心の體を正路に指南せんとする心は是れ何なる物にて有るやらむ。若し日來の我心を以て我見として往生の心を守護せふと云ふ事すらんと心元無く覺へたり。世間に諸人の他力往生と云ふ事を解るはよろしきやうに沙汰せらるれども、實に我心をすて﹅機情を離れ玉へるは希也。是は所詮が心地の融通の熟せざるによりて、動もすればこざかしき心を起して信心力も深く、行業もこはくてこそ往生をば遂ぐずれなむど﹅云て三業の功をつのり玉へり。然るに今『觀經』に明す所の三心とは、是は彼の阿彌陀佛の四十八願の中の第十八の願に、至心に信樂して我國に生ぜんと欲すと誓ひ玉へり。至心とは至誠心、信樂とは深心、我國に生ぜんと欲すとは廻向發願心也。此三心を成就せんが爲に、兆載永劫の

【弘願】彌陀如來法藏比丘の昔に起したまへる大誓願をいふ。

間、六度の萬行を選り玉へり。故に知んぬ、此萬行をば自の正覺の御爲には非ず、偏に我等衆生の往生の爲めに行じ玉へり。

抑々其六度の萬行とは、或は自ら身の肉を割いて、鷹の餌をかひ、或は頭をたへて法を求め、或は皮肉を剝る〻に忍辱の行をやぶらず。此の如き等の行を無量億劫に行じて三大僧祇劫を送り玉ふに、刹那の間も思召し忘る〻事なく、只念念に衆生往生、衆生往生と誓願して修行し玉ひたる故に、六度萬行は前の四十八願に極まり、四十八願は亦第十八の願に極まり、第十八の願は至心に信樂して我國に生ぜんと欲すと云ふ衆生の三心に極まり、衆生の三心は又南無の一心に極まりて、此一心の處に居して正覺を成じ玉ひたる報身彌陀佛なる故に、一心に彌陀の名號を念じ行住坐臥時節の久近を問はず念念に捨てざる者是を正定之業と名く。彼の佛の願に順ずるが故と釋し玉ひたり、故に一心專念と云ふも、念念に捨てざる者と云ふも皆是れ本願成就の文也。是れ則ち別意の弘願と釋顯の修行と一致して眞實心と成したる往生の心體也。然るを機情の力より是を指南せよと云ふは不圖にあやうき處もあり、たらざる處もありて守護を致し、信力をこさえんと思ふならん、縱ひさやうにありとも我心の行功は、佛果の上への助成とはなるべからず、其上、今此往生の本願の既に成就し決定したる事實、成就の經文重々たり、諸佛の證誠同心たり。故に唯佛に一向專念の所に安住してあられん計りなるべし。既に我と云はれつる者は本國に攝取せられ奉りて一心專念名號得生の位になりたる上には、何なる心細ほ別にありて

【四】安心起行の相を明す。

【善巧方便】諸佛が衆生救濟の爲めに善く巧みに手段を講ずること。

決定往生と落居したる心の爲の後見となるべきや。但し助業の起行門と二重の時は、識情の三業にかへりて止惡修善に挑げみ、如說如法に對治して正定業の安心を助成すべし。其時は他力往生したる歡喜の心より修行する故に、雜善雜行の位にはおちざる也。然らば則ち今安心の位の時は願力得生の心より外に行て餘の念慮のなきを念佛の如くの他力安心の人と申す也。

【四】問ふ。「即便往生と爾稱する位にて念々に捨てざる者にあらん人は別して助業の起行を勵ますずともにてあるべきや。」又我必ず助業に出でずして叶ふまじき事にて行るや。」答ふ。「安心門、起行門と二重に立れば遠く隔たりたる事には非ず。今、問に云へる、念々に捨てざる者の處にあることと也。然る時は、一心專念の他力往生にとづきぬれば、即ち歡喜の心が起れるぞ、其歡喜の心のもよほすよりして、佛の內證、外用の功德を意に喜び、口に讚し身に禮して彼佛恩を報ずる也。斯々我等凡夫の流來生死を思ひ計るに、曠劫無數より已來、冥より冥に入り、苦より苦に沈みて、都て出離解脫の因緣あることなし。先業既に是の如し。當來も何ぞ輪廻の終りあらん。然るに是の如き三世の諸佛の善巧方便に捨てられ十方淨土の悲心招喚にはなれたる極惡最下の衆生の爲に、阿彌陀佛深重の大願を起し、僧祇の苦行を送りて、あらゆる定散の萬行を此惡逆の衆生の上に南無阿彌陀佛の一行と成し、極めてやすく〳〵と生死を離れ極樂に往生せしめて吾が御身も別願酬因の報身如來とは正覺を成し玉ふ。嗚呼希奇なるかなや。是の如く成就し玉へる不可思議の名願

にあらずんば我等凡夫は縱ひ千萬恒沙等の劫を經とも如何として、此娑婆生死の身を離れんや。但し又此の如く微妙深重の悲願は在すとも、若し釋尊出世して是を說き顯し玉はずば、是にあひ是をしること有るべからず。然る處に釋迦諸佛の大悲、過去久遠劫より已來、我等衆生の我我執著の強きを色々調養調熟して今此願力成就の南無阿彌陀佛の位に送り屆け玉へる廣大の恩德共何の世にか報じ盡し奉るべき。故に「觀念法門」に云く、「若しは佛在世、若しは佛滅後の一切の造罪の凡夫、但心を迴して阿彌陀佛を念じて淨土に生ぜんと願ぜば、上百年を盡し、下七日一日十聲三聲一聲等に至るまで、命終らんと欲する時、佛聖衆と共に自ら來り迎接して、卽ち往生を得しむ。上は六方等の佛の舒舌の如し、定んで凡夫の爲に證を作す。罪滅して生ずることを得、若し此證に依て生ずることを得ずんば六方の諸佛の舒舌一たび口より出でゝ已後、終に口に還り入らずして自然に壞爛せん已上。」又云く、「一切の往生人等若し此語を聞かば、則ち聲に應じて悲みて涙を雨らし、連劫累劫に身を粉にし骨を碎きて佛恩の由來を報謝して佛の本心に稱へん。豈敢て更に毛髮も憚る心あらんや已上」此等の文を以て明に知るべし、旣に彌陀は衆生往生の大願を成就し玉ふ。釋迦は種々方便して此處に送り屆け玉ふ。諸佛は同心に證誠して、信心を決定せしめ玉ふ。故に證得往生の人は此同體の大悲を能々思ひ知て、隨分に修行して廣大の佛恩をも報謝し法界の衆生にも迴向すべし。佛恩と云方を忘れぬれば自然に他力往生の方が失して安心起行共に自力難行の位に落る也。爾らば所詮は助業と云は他力安心の

【五】臨終善惡の相につきて往生の定不定を明す

色を三業に顯はす也、然らば他の佛は從果降因の一法にて而も是を本願往生の處に催く時は他力安心と云はれ、機の三業に修する時は自力起行と云はるゝ故に唯他力往生の一法の體を以て、仰望歸命にも備へ、以報の安生にも廻向するなるべし、然に安心と起行とは一にして而も離れず離れずして而も二也、然らば安心の上には起行を行ふべき事なり、随ふ又自利行の諸業の能作土業報内證外用の功德莊嚴となり、八萬四千の相好色身と顯るべき者也」

【五】問「縱ひ信心決定したる一向專修の念佛の行者なりとも臨終の時四百四病に侵されて意の他力の安心をも忘じ、口に本願の名號をも唱へずして其儘死ぬ人には、往生如何有るべきやらん。」

答「臨終の善惡の相は邪正輙く辨じ難き事也。世間の事法本より定相なし。善に似て善ならぬ事あり。又善なる事あり。惡に似て惡ならぬ事あり、又惡なる事あり。臨終の相も亦是の如し。是に色々の心あるべし。或は其相は、正念に住してあれども見聞の人に信心をやぶらせ、疑謗を生ぜさせんが爲に、天魔の所見として最後の相を惡見する事もあるべし。又平生の安心の錯によりてなほいまだ輪廻すべき故に臨終の相の惡き事もあるべし。或は又安心は正路にして日來にたがはざれども無始已來の惡業つもりきはまりて只今皆悉くはたし盡す故に、末期の體の惡しき事もあるべし。又臨終の相の貴きに付ても前の如く多くの謂れあるべし。或は一向專修の位には歸すと云へども、他力の信心よはきが

【戒定慧解脱解脱智見】これを五分法身といふ。戒は身の惡を防ぐこと。定は心の散亂を靜めること。慧は惑を去り理をさとること。解脱は智慧によりて惑を斷じ去りて涅槃に入ること。解脱智見は我が解脱したることを認むる智慧のこと。

故に、なほ先業に引かれて人中天上に生を受くべき故に臨終の相の貴きも有るべし。經の中に人天に生ずべき人の臨終の相を說て云く「病中に人に對して惡念を起さず、世間に著相をなさず。病苦も輕く、心念も亂れずして佛菩薩の名字を唱へて端座合掌して正念に終ると云ふ」又安心正念なるによりて正しく三業の威儀に預りて遂に極樂に往生する故に終焉の相の貴くあるべし。故に臨終の相は善惡共に凡慮を以ては、其是非定め難き事也。但し決定深心の證得往生の人は臨終の正相には障礙せらるべからず。然るに善惡の相は平生臨終共に猶凡情の上にうかべる假相也。宿業厚き人は生の時も死の時も同じく善者の相を示す。又宿業の輕き人は自然に臨終の色を顯す。其中に多くは、魔が障碍を以て臨としたる凡夫なる故に、生生世世に流轉の根機たり。就中此世の臨終は、未來際まで知識の事を爲しとせむる事なくして皆ことはたし難す。故に縱更今の臨終が死苦重かるべし。然れども證得往生の心地は是等の假相に障へられずして遂に極樂の實關に往生すべし。故に經に云く「諸の惡業を以て而して自ら纏縛す、此の如きの罪人命終を以ての故に、地獄に墮すべし。命終らんと欲する時、地獄の衆火一時に倶に至る。善知識は大慈悲を以て爲に阿彌陀佛の十力威德を說き、廣く彼の佛の光明神力を說き、亦戒定慧解脱解脱智見を讃するに遇ひぬ。此人聞き已て乃ち化佛菩薩此人を把攝して、一念の頃の如くに即ち往生することを得已」又釋に云く「地獄猛火眼前に現じ、冷汗流出し、手に空を把る。是の如きの相善知識か能く救はん。宿是れ知識彌陀の恩なり。手に香爐を執て懺悔を教へて、教へて合掌し

て彌陀を念ぜしむ。二尊の哀愍救苦を蒙り左右輔助の三尊現前せり。化佛菩薩衆を率ゐて來て我故に華を持て汝を迎へて來ると云ふ。行者佛の光明を見て歡喜し、即ち七寶の蓮華の上に坐し、佛に從つて須臾に寶國に至る。到れば即ち直ちに寶池の中に入り、七日に華開けて佛を見ることを得。觀音大勢至光を以て照し音へば眼目明朗にして心得悟す。合掌して始めて菩提心を發す」已上但し是は未だ他力の教法にあはざる罪人始めて臨終の時念佛申して往生する事には非ず。未だ佛法にあはざる罪人の臨終の時かやうに苦痛逼迫して死門に入らんずる砌りには、如何として始めて阿彌陀佛の內證外用の功德を一一に聽聞して心中の領解もたち、信仰も起るべき。然るに今此は日來平生の時善知識の所說を聞て、二尊一致と證得せし安心正定業の功が臨終の斷苦にさえられず、速に往生する不思議をほむる經釋也。返々も平生の時、他力往生の安心を能々決定して行住坐臥、晝夜寤寐に念念に稱名して、常に懺悔すべき也。有る人の云く「縱ひ深く本願を憑で、一形の間念佛を申すとも、若し臨終の惡しくば、是れ墮地獄の相也。極樂の往生には非ず」と云。此義、今の經釋には相違せり。爾らば何れの經文、何れの師の釋によりてかやうの義をば申さるゝやらん。但し傍依經等は初重の往生を明す故に、さやうに判じたる文も有るべきか。今『觀經』の玄旨に居して證得往生したる人は自力の功を捨て、三業の執をはなれ、一向專念の好人なる故に、機情の上に浮める善惡動靜等の假相には都て染せらるまじき也。然るを臨終の假相を以て往生の得否を定めらるゝは、若し『觀經』の九品に擧る念

【野干】狐のこと。或は狐に似たる獸なりともいふ。

【六八】臨終の時の善知識を明す。

【善知識】正法を教へて人をして佛道に入らしむる高德の人をいふ。

佛の行者を常樣の分に思ひなさるゝやらんとうたてしく存ずる也。然るに今の阿彌陀佛は唯偏へに一切衆生の流轉生死する心法を極樂の寶國には往生せしめんと誓ひて色體にうかむ假相をば、穢身と倶に此穢土にすたるべき者なる間に、先業先世に打ち任せてをき玉へり。宿因の業道色々なるに隨て、現在の相及び臨終の相亦種々なるべし。現在の相とは謂る形容に好醜の不同あり。福德厚薄の差別あり。壽命に長短の果あり。種性に貴賤の色あり。是等也。末期の相とは、或は重苦に侵されて死するもあり、又正念に住して終るもあり、水火に溺れて滅するもあり、野干に觸れて損するもあり。劍戟の爲めに害せらるゝもあり。然れども證得往生の正定業の體は是の如き等の一生涯の假相にはひかれずして、正念に往生する也。但し聞ゆる有相の凡夫、往生の信念を生ぜしむる方便の爲には、又同くは心身倶に貴く終らんは尤も然るべき因緣なる故に、願はくば弟子等、命終の時に臨んで心顚倒せず。心錯亂せず。心失念せず、身心に諸の苦痛無く、身心快樂にして禪定に入るが如く、聖衆現前したまへ、佛の本願に乘じて阿彌陀佛國に上品往生せしめ玉へと發願する也。故に一準には執すべからざる也。」

【六八】問「臨終の時は必ず念佛を勸め玉へる善知識有るべき事やらん。又なくとも苦しかるまじやらん。」

答「善知識とは是れ他力の安心決定したる證得往生の人なり。又本人も此位の人也。然ば是は同意の人なる故に尤も善知識從して念佛を勸め玉はんに遇ふべき事なるべし。是

【發遣來迎二尊一致】釋迦が彌陀經によりて極樂を說き、衆生をして安養の淨土に送り遣はすことを發遣といひ、彌陀佛が極樂より娑婆に來りて念佛の衆生を極樂へ迎へ導くことを來迎といふ。この釋迦と彌陀との二尊が念佛の一法によりて衆生を救濟するを二尊一致といふ。

則ち平生の時は他力の信心を教へて往生を證得せしむる發遣の知識也。臨終の時は又知識行共是の口稱を勸めて極樂淨土へ送り屆くる來迎の位の知識也。然らば臨終の時は必ず善知識を請じて相共に念佛して臨終に修むべき也。但し上に云が如く、貴賤賢愚等によらず、在家出家等は先業に、ひかれてさま／＼なる事なれば、其間に望みては善知識にあひたてまつらんと思ふとも叶はざる事也。然るに臨終の時の知識を請すべしと云ふ善知識は此れ病人と他人にて行せば、同じく一處に居して此病人臨終の儀式を唯今來りて、速に極樂の上品に到ることをもろともに喜びて助成とも成り互へかしと云ふ意趣にてこそあれども、又はましまさずとも苦しからざる事也。既に平生の時節の善知識に値ひ奉りて發遣來迎二尊一致と證得せし也。其二尊一致と云ふ一致の體は、即ち南無阿彌陀佛の一行也。此一行を安心に望る時は發遣の佛語也。往生に約する時は、來迎の佛體也。故に南無阿彌陀佛と稱念する則ち發遣の釋迦來迎の彌陀なるべし。是の如く證得しての已後は亦無數の化佛菩薩及び二十五の菩薩等、觀音勢至と共に行住坐臥晝夜十二時に守護して横病横死の難を除いて、正念に往生す。觀念法門に『十往生經』を引て云く「一衆生有りて阿彌陀佛を念じて、往生を願ずれば、彼の佛即ち二十五菩薩を遣して、行者を擁護せしめ、若しは行、若しは坐、若しは住、若しは臥、若しは晝、若しは夜、一切時、一切處に惡鬼惡神をして、其便を得しめざる也」已上 又經を引きて云く「若し阿彌陀佛を稱し禮念して、彼國に往生せんと願ずれば、彼佛即ち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩を遣し

【二十五菩薩】阿彌陀佛の眷屬にして念佛の衆生を擁護せんが爲に常に阿彌陀佛と共に來迎し給ふものなりと云ふ。觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、陀羅尼、白象王、虚空藏、德藏、寶藏、金藏、光明王、金剛藏、山海慧、華嚴王、日照王、月光王、衆寶王、三昧王、獅子吼、定自在王、大威德、大自在王、無邊身の菩薩。

て行者を護念せしむ。復前の二十五菩薩と百重千重に行者を圍遶して行住坐臥一切の時處若しは晝、若しは夜を問はず、常に行者を離れたまはずと、今既に斯の勝益の憑むべき有り。願はくば諸の行者、各須く至心に往を求むべしと已。又第十八願を引て云く一夜の佛今現に世に在して成佛し玉へり。當に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得と已。又「彌陀經」を引て云く「若し衆生有て阿彌陀佛を説くを聞かば、即ち應に名號を執持すべし。若しは一日、若しは二日、乃至七日、一心に佛を稱して不亂なれば、命終んと欲する時、阿彌陀佛、諸の聖衆と與に現じて其前に在す。此人終る時、心顛倒せずして、即ち彼國に往生することを得と已。又云く「若し佛を稱して往生すれば六方恒河沙等の諸佛の爲に護念せらる、故に護念經と名く。今既に此增上の憑むべき有り。諸の佛子等何ぞ意を勵して去かざらんや已」

今此等の文の意を思ふに所謂十方恒沙の諸佛、我等衆生に於ては初發心の時は、誓願證誠して往生の安心を成就せしめ玉ふ上、數々に一期の間に加被護念して正念に住せしめ玉ふ。最後臨終の時は來迎引接して極樂に送り附け玉ふ。故に一切衆生の往生極樂の始中終は唯偏へに阿彌陀佛の誓願の本願に隨ひ玉ひたる恒沙の諸佛の大悲より成たり。是則ち諸佛は發遣の知識、彌陀は來迎の行體也。衆生の往生は此二尊の恩力より外は、却て別の指南有るべからず。但し是の如きの希奇の法味も、今の善知識より示され得たる事なれば、其恩謝徳の爲めには晝夜等一に粉骨をさゝぐべき也。返々も平生の時の歸命が大事也。若し平

【七】淨土宗に現世祈禱の法ありや否やを明す。

【僧伽藍】僧伽藍摩の略稱。サンガーラーマ(Samgharama)衆園、僧房と譯す。寺院のこと。

【檀越】ダーナパテ(Danapati)施主と譯す。布施を行ふ人。

【陰陽師】卜筮を司る人。初めは陰陽寮の役人なりしが、後には一般の占者に用ゐらる。

生の證得を期待にをもむかば、縱ひ臨終の時善知識に遇ふとも、順次の往生は叶ふまじき也。平生の安心だにも正路なれば、其正路の法則を知識なる故に、臨終の時善知識は在さずとも苦しかるまじき事也。但し『觀經』の九品に下三品の悪人臨終の時、善知識に遇て往生すと説くは、是れ下輩に遇て平生の即便往生を顯す故に、臨終に獄火を感ずと説けり、獄火を感ずると説く事は苦の果のきはまりたる處を出して、其極悪の機の上に南無阿彌陀佛と成じたる願力不思議を顯す甚深の説相なり。委は略て知るべし。」

【七】問。諸宗には國家の災難をやめ、自他の苦厄を除く祈禱の秘法と云ふ事あり、今淨土宗にさやうの法はなきや。

答。諸宗淨土宗は自力他力の淨土こそはかはりたれども、佛法を紹隆して衆生の迷闇をまぬかれしめんとする、其は同うする也。然らば淨土宗にも佛法の爲には、一天平安萬民和樂といのる也。但し代末世にくだりたる所以にやらん、當世の作法を見るに、自他宗倶に佛法をば輕くして世間を重く信じ玉へり。此故に佛法の爲と號して、僧侶及檀越等を息災安全と祈り玉へども、自然と世上の名利に成り、其趣き世間の陰陽師等の意の様になれり。又檀門の方は本より、公私共に世俗の息災のみに住して、僧侶の方へも偏へに其分の志をいたさるゝ、又僧衆の方にも、皆各經をよみ陀羅尼をみてゝ、唯現世の榮花をのみ懇切に祈る程に、家々の佛法の一大事をば打忘るゝ故に、師檀共に一向に佛法はすたりて見へたり。哀れ此利養の名譽の意をひきかへて、佛法擁護の爲めに、天下泰平、國土

【內空外空勝義空】一切萬象の空なることを表はす。內空とは內身の空なること、外空とは外境即ち客觀の空なること。勝義空とは眞理たる涅槃の空なるをいふ。

豐饒と行じ玉はゞ、佛神も定で納受し玉ふべき者を。但しかやうに申すもなほ佛道と祈禱とを二法に分別する故に、未だ眞實の祈禱の法とは言ひ難し。大乘眞實の秘法と云ふは則ち般若畢竟皆空の處也。其處には生老病死の相もなし、災殃苦厄の難もなし。貧窮下賤の憂もなし。怨敵憎愛の隔もなし。異論喧嘩の諍もなし、都て內空外空勝義皆空也。故に此處、則ち是れ眞實の福壽增長の秘法、除災與樂の妙術なり。但し此義は諸宗に談ぜらるる眞如實相の極理也。然るに今淨土宗の意は、淨穢二土を分ちて、捨身得生の義を立つる也。但し亦到彼常樂と現身證得との二重の位あり。先づ到彼常樂とは、此娑婆は是れ樂苦充滿の在所、生老病死の世界なれば、大聖釋尊も穢土の風をば遁れ玉はず、然らば何にと心をいたし精を盡して祈り願ふとも、天災を息め短命を轉ずる事は叶ふまじき世界なり、故に三界の火宅を厭ひ出でゝ無爲常住の寶國に生じて究竟解脫の三昧を成ずべしと云ふ。故に淨土宗には專念得生の一法を立てゝ別に今生を祈る法をば明さゞる也。次に現身證得とは是は淨穢一體と解し、現身無生と證す。是は則ち歸命の義なり、歸命とは心を轉ずること也。謂ゆる極樂世界の依正二報も十方諸佛の大慈大悲も唯偏へに煩惱運轉の我等衆生の上に南無阿彌陀佛と顯し無量壽と成じたる處に轉成したる位を延年轉壽長命安樂と釋し、無災由處斷不退爲明良と明す也。明に知るべし、此處、則ち眞實の祈禱成就の砌り、萬民快樂の處なり。故に專念名號の外に別に祈禱の法と云ふをたてず、唯南無阿彌陀佛の一行を今生の證得に約しても現世安穩の處と言ひ、後生の果益に望ても不老不死の法と名

【八】念佛の妙用に萬善を執持することを明す。

【無生忍】無生法忍の略。生滅變化を離れたる眞如實相の法を體得して動かざる位をいふ。

く、然るに機根の上に於ては即便宜得の二の色行りと云へども、得生の行體は唯名號の一法なるを以て一向專念と說き一實の法と稱する也。」

【八】問「善導和尚の『法事讃』に云く「又願はくは行者各念佛行道し、及び諸功德等を迴らして、當今の施主及び同行の諸人法界の衆生に施し、今より以後大涅槃に至るまで萬善扶持し、福を合修し、俱に上で行の僧機を離れん、六方の諸佛護念し、淨土の聖衆心に攝受乃至春秋多夏四大常に安く、罪滅し福成して俱に淨土に生れん已」と。然らば稱名念佛の外に持戒讀誦等の諸の功德をも往生の法に回すと見へたり。何ぞ專ら名號の外に、更に所修の法なしと云ふや。」

答「西山上人の云く「念佛一行を修するも、諸種雜行なる人有るべし、萬行を修むるも專修正行なる人有るべしと云へ、其れ專念名號とは證得往生する安心正定業の體なり、正定業とは今阿彌陀佛の我等衆生の上に於て、建立成就し一體し、自覺覺他覺滿して稱我名號と成じたる南無阿彌陀佛の一行也。故に此處に正覺往生の分別もなし、淨土穢土の相貌も見へず、諸行念佛の差異もたゝず、正定雜行の色々もわかたず。都て恒沙萬法唯南無阿彌陀佛の一法一行と證し、如此たる處を「豁然として大悟し無生忍を得」と說けり。是の如く成じたる願力、不思議の正定業の處より機情の上にかへりて修行する時、或は持戒・禮拜等を行じ、或は讀誦讚嘆等を勵まし、或は息慮凝心に觀じ、又は世間の五常十善をも扶持ふ。乃至詩歌管絃のあそび、狂言綺語等のたはぶれ迄も、皆是れ悉く此一法の處よ

【化身】佛菩薩が衆生救濟のために假にこの世にあらはれたる形をいふ。

り行じ出したる起行の體なり。是を安心正定業の上の助業の修行と云ふ也。是れ則ち諸教に善惡の萬法は一心より顯はれたりと云ふに似たり。但し彼は我性本有の理具をさして一心の本元として是より顯し出でたる十界の依正恒沙の妙體と云へり。今是は信心決定の安心正定業の所より行じ顯す定散の萬行なり。故に聖道淨土の佛法が風情は相似ると云へども、義理は自力他力、自覺覺他と大いにかはりたる事也。此處が淨土宗の別傳の眼にてあり。諸宗の意は、且く宗々に不同有りと云へども、佛法が究竟する時は皆同じく不思議不可得の眞元にきはまりて、全く二法なし。是迄が、諸宗の本意の至極なり。爰に唐の善導和尚は、是三昧發得の人師、阿彌陀佛の化身にて在す。然るに『觀經』の要義を出して古今の諸師の邪義を楷定せんと思食て、釋迦彌陀及び諸佛に證誠を請じて證をこひ玉ふに依りて、感應時至り一々の靈瑞あらはるゝ。就中毎夜の夢中に、一僧來りて『觀經』の奥旨を示し玉ふ。是を玄義の楷定と名く。則ち大小乘の諸宗の智慧の位には非ず。是れ正しき彌陀智願海と說く、唯佛與佛の別願也。是の如きの未聞希有の智慧を以て淨土を特じ玉ふに、聖道門の諸宗をば總じて以て依心起行の佛法と立て置きて、其外に覺他の眞宗を建立して、『觀經』『彌陀經』等を說く、即ち是れ頓教、菩提藏と釋す。是れ佛法の中の不思議希奇の上の極要なり。故に諸宗よりは一代を絶對微妙の一種の佛法と判ず、淨土宗よりは一代を聖道淨土の二種の勝法と判ず。然らば即ち聖道門の人は、萬法一如の眼を開きての上には何事をなしふるまへども邪路にはをちず。其如く淨土宗の人も、證得

【九】安心の了不によりて行の方に得失のありや否やを明す。

【廢立傍正助正】この語選擇集に出づ。

衆生の上の助業には何の行業を修しても、同じく一味の大願を成ずる也、されば衆生の上人は顯密大行業を建立して以て是を自行化他の助業とし玉ふ。又叡山上人は東寺山門の兩派の眞言をきはめて而日三時の供養法をおこたり玉はず。乃至代々の上人皆各々異義意樂の法を修して兼ねて同じく願求往生の素懐を遂げ玉ひき。然るに今時の人々は理観を修し、念佛を申し玉ふとは云へども、大略聖道門の廢立に留る間、此は自力の我執を離れず。故に此分にては縦ひ念佛の一行のみを修するとも雑修雑行の位と成りて十三の失に落つべし。是れ則ち行の方には本と得失なし。衆生の領解する安心の了不に隨て正雑二行俱に雑行となりて失に屬し、又正雑二行俱に正行となり、得失を成ず、然れば諸教に雑行の得失は一心の修行に依ると云ふに似たり、西山上人の御意はかやうの道理にて在すか。

【九】問『安心の了不に隨て行の方に得失の出来する事は何意也。但し『選擇集』及び『往生禮讃』を見るに雑法に於て得失のかはりあることをば、先づ行の當體にて撰して、扨て其相應の正行を取て、今時の衆生には與へ玉ふと覺へたり。何ぞ行の方には得失なしと云ふや。』

答『和尚宗家の佛法に於て廢立傍正助正の三重の位あり。謂る廢立の重にては先づ所解の行體を判ず。傍正の位にては能解の安心を定む。助正の位にては前の心行を三業にかけてふるまふ也。抑浄土の章疏に『選擇集』と『根疏』と『具疏』とあり。則ち是れ廢立等の三重を明す也。

『選擇集』は阿彌陀佛因位の時、三世諸佛の內證に持ち玉へる密意の大悲を選び取て、衆生往生の六字名號と成就し玉ひたる事を、南無阿彌陀佛往生の業は念佛を先とすと擧げて此功能を十六章段と釋し玉ひたる、是れ正しき阿彌陀佛の超世本願の本意を顯し定むる『大經』の上の法門也。故に重重の廢立を立て、念佛の一行の選擇正往の易行なる事を明す也。

次に『本疏』には『觀經』に付て偏正の重を釋して機情の安心の方を顯す。是れ則ち『大經』の時自力難行と云て廢捨しつる定散の萬行を『觀經』の時は、一切衆生の機根の色になして、是を九品の不同に說き、八十一品に分け、無量品に開き、而も此機に各〻一一名號の行體を證得させて、彼悉く他力往生と成じたる後を『觀經』の說たまはく、一切の衆生は根性同じからず上中下有り、其根性に隨ひて、皆阿彌陀佛の名を念ぜんことを勸む、其人命終らんと欲する時、佛聖衆と與に自ら來り、迎接して盡く往生を得しむ」と明し玉へり。是れ則ち證得往生の安心の體を釋する也。

次に『具疏』には『阿彌陀經』に付て助正の重を釋す。則ち上の傍正の重にて、諸善と念佛と都合して、機法一體して證得したる即便往生の安心の色を、今此助正の重にては又行門にをもむいて、機情の三福に退を作し顯す也。然らば則ち『觀經』の安心の重の時の大小權實等の萬の機行及び世間有漏の善までも悉く機根の膚となりかへりて、是が各々正覺の行體を執持して、一行其足の南無阿彌陀佛と證得す。是れ則ち一人が上にもつ萬德の色なるべし。然らば一人が上に於て定心の時も南無阿彌陀佛、散心の時も南無阿彌陀佛、世善

の時も、臨終の時も、乃至億々の劫に至る迄も、皆各々南無阿彌陀佛と成じたり。人々皆是の如くなる故に、一業生として往生にもれたる者なし。是を「一切善惡の凡夫生ずることを得る者、皆阿彌陀佛の大願業力に乘じて、増上縁と爲ずといふことなき也」と釋し玉ひたり。然るに助正の時是の如く證得したる安心の體を助正の時迄にかけてふるまふ故に、何れの法を行じ、何れの行を修するとも、直首の助業にて一行もむなしからず。

故に明にしるべし、今此廢立等の三重の位を竭ての上に、證得往生したる人は、唯一行を修するも、萬善をはげむも、精進に行ずるも、懈怠に修むも、皆眞實の正行なり。若し此三重の路に至らずして、一向專修の廢立に留まらん人は、縱へ念佛の一行を修するとも自力難縁の雜行なるべし。況や諸善をや、況や懈怠をや。臨終に至て、疑惑の生に落つる故に『往生禮讚』には「一雜を修して至心ならざれば千中無一なり」と嘆き、或は「雜修の人は萬に一も生ぜず」と誡め玉へり。此故に『選擇集』『往生禮讚』は、同じく行の當體にて難易得失を判ずと云へども、其のをもむき廢立と助正とにかはれり。然る故に『選擇』は先づ本願成就の行體を顯す故に、行の當體にて難易勝劣を判じて以て彌陀如來餘行を以て往生の本願とせず、唯念佛の一行を以て往生の本願として既に此願を成就し玉ふと釋せり、次に『往生禮讚』は『本疏』の安心より起行に出づる始なり。故に起行の行に得失正雜の出來する事は、是れ行者の安心の邪正によると云て、已下の起行を此禮讚にてさだむる也。然らば則ち此法門の所詮は、先づ本願所成の行體を顯して、此行體を衆生の心内に

【一〇】念佛の外の一切の行業を制するは安心を決定せしめんが爲にして、行業の體を制するには非ることを明す。

移して、證得往生の安心となす。其安心の色を亦三業門にかけて修行す。是を『選擇』『本疏』『其疏』と二重に釋し顯す也。』

【一〇】問『助正の重の行儀には極樂の依正二報にかぎりて五種の正行と出したり。五種の正行とは謂ゆる阿彌陀佛を禮讃し、淨土の三部經を讀誦し、彼國の二報莊嚴を觀察し、彌陀の名號を稱念し、淨土の不思議を讃歎す。其旨觀行立信の御釋に委細なり。然るを諸經諸佛等に亘りて、意樂に隨て行ずるに相違なしと云ふ。其意如何。』

答『聖道淨土の佛法異なりと云へども、何れも皆、其宗宗の肝に達したる人の前よりは、世間出世の萬法萬行に於て全く差別を見ず、自他を分けず、されば大唐の曇鸞法師已下の祖師等は念佛門に歸して西方の行を弘め玉ひしかども、別して宗門をも威儀をさため玉はず。是れ則ち今の念佛三昧は三世の諸佛内證の本懷、八萬の聖敎の至極の祕要たる故に、暫く別に名乘るべき宗もなし、別にふるまふべき威儀もなき故なり。又日本に渡りて後も、暫くの程はさだまれる宗旨も法門もなかりし也。然る處に高倉院の御宇に黑谷の法然上人始めて別宗を立てゝ淨土宗と號して、行儀には善導の五種の正行を定め、威儀には菩薩律を守らしめ玉へり。然らば則ち此の如く別して宗義法則を定め玉へる上人の御素意をはかり思ふに上代は皆人上根上智にして能く諸法實相の道に契當せらるゝ間、諸宗及び小乘外道の法をも兼學し、乃至世のことわざ迄も稱ふに歸て正道のさはりとはならざりき。然るに代末世に及ぶに隨て人の意をとろひくだりて、今は既に貪求財色の凡夫たり。さありな

から引籠して學問を勤むほどの根機は今もあり。さやうの人は大方機辨才覺は上古の先達にも相似たりと云へども、内外典の修業に於ては、其道を大いにおはるべし。昔の先達は皆道の志し深く任せし故に、今は勤行の隙なれば、今は行道の時なればなど云て、休息を致し、由斷をなす事なし。修行に勤する時も、食所に通る時も、内外典を談し、茶を飲み、亦同修行にゆく時も一大事をはわすれ給はず。又詩をつくり歌をよみ、花を賞め月にうそふく等のありさま迄も皆菩提の資とたし玉へり。然るにかやうの先達に事をよせて、今この佛法の用心も道心もなき人の居所をかざり、珍寶をあいし草花に催しながら、是等も卽ち佛法たりと云ふは實に是れ天魔外道の見なるべし。然るに在俗に生を受くる人は皆名聞利養を故に、在家の中に適々佛法を信ずる人も、大略に世俗の名利におちゆく、又出家の人の佛法を學するも、偏に寺家の名譽を望むのみになり、是と云ふも心地の大事を修行し、練磨することのなきによつて、學解のまさるに隨て我慢も邪見もかさなる故也。されば聊かも人に勝るゝ樣なる學解あれば、はや滿足の思をなして、其意の邪僻なるをもかへりみず、其行狀の卑賤なるをも憚からずして、三業をほしひまゝにす。故に學德還りて輪廻生死の業因となる也。此故に法門の義理を論議し決定する詞の面は、上古の先達におとらぬやうに聞ゆれども、其本心は、たゞ愚惡賤劣の凡夫とかはりめなし。悲しい哉。縱ひ鈍劣にしてやがて證を得る程の事こそなくとも、などか常樣の愚人よりも人情我執のやはらぐ分野なかるらん。然らば則ち上人は末世の根機の此の如く狹劣なるをば、皆悉く往

生の障りと制して、善導和尚の五種の正行を以て、行儀作法と定め玉へり。是れ則ち前に云へるが如く、有相執著の凡夫は當座當座の所爲所作に滞りて深く禁制を存する故に、異類の行儀を振舞ひ、世上の家業をいとなむ時は、必ず宗旨の本意をば忘れぬべし。是によりて堅く自餘の雜行を制して偏へに極樂往生の行業を勸むるなり。然らば知るべし、自餘の行業の當體を往生のさはりと云ふには非ず、自餘の行業をなすによりて行者の意に往生の正行を錯失するなり。故に唯行者の安心を專になさしめんが爲に、餘の一切の行業をば制するなり。實に行業の當體を制するには非ず。此故に同類の五種の外に、又異類の助業と出して廣く諸宗の行儀を勸め玉へり。此は是れ念佛の行者能く自らの智分をはかりみて、同類異類に任せて行ぜよとの御釋なるのみ。但し、善導大師の五種の正行、と云ふも、極樂の一土にかぎりたる行儀の樣には見へたれども、實には一切の萬行を此五種につゞめ玉ひたり。謂る初の禮拜正行を行ずるに、先づ、釋迦一佛の淨土の一切三寶を禮讃す。次には十方の諸佛の微塵刹土の一切三寶を禮讃す。第三よりして正しく西方極樂の彌陀を禮讃し奉る也。次の讀誦正行を修するにも八萬四千の修多羅藏顯密の經論、並に過現未の一切の三寶を請し、又普天率土の一切の冥衆を請じて發露涕泣して一切の惡障を懺悔して『彌陀經』を讀誦する也。次の觀察正行を修するにも『壽經』『觀經』等の修多羅の經を引て而も稱名の一行を成ずるなり。次の讃嘆正行の時も他の有縁の教行、自らの有縁の要法に於て讃毀を生ずることなかれと云て一代の教法を皆他力易往の資糧とな

【一】道心を明す。

【菩提薩埵】ボデイサットヷ（Bodhisattva）覺有情と譯す。さとりたる人の意。

して願はくば無量の樂に往生せん、願はくば無量の樂に往生せんと讃嘆し歡喜する也」明に知るべし、此五種の正行に漏れたる行法はなし。故に上人は是を開合に顯して、同類異類と判じ玉へり。是れ則ち娑婆得道の難行の法を指極樂成佛の易行の益と轉成して、極樂を以て諸佛灌頂の道場と落居する助正の法門也云云。」

【一】問「道心と云へるはいかやうに心を發すことぞや。」

答「道と云ふは漢語なり。梵語には菩提薩埵と云ひ、略しては菩薩と云ふ也。然れば在家出家異れども、道心を發す人をば菩薩と名づくる也。但し道心に種々の差別あり。然れども要を取るに三重あり。謂ゆる不調と相應と眞實と也。則ち善導和尚の至誠心の御釋の意也。初に不調の道心とは、是は身口意の三業各異なる事なり。若し人無常迅速の理りを思ひ知りて、偏へに世間の名利を捨てゝ深く山林に居して瀧の音、松の風に意をすまして、極樂淨土の目出度き事を思ひやる事なり。然れども心地の妄想未だ止まざる人は情我執尚あり。是によりて此遁世の姿が、やがて自然に名聞となり、尋ねても來り、聞いても及ばん人のいさゝかも嘲りなく、有難く、やさしくおもふやうにと云ふ方へ意がひかるゝ間、やゝもすれば姿をも紙の衾、墨の衣にやつし、住家をも間墻の内庭の木立ち、菴室のすまひ、佛前の香華等、實にものあはれにしつらひなさんとのみ思ふ程に、まめやかに意をしづめて經をよみ、念佛を申して生死を離れんと云ふ思ひは次になる也。又加樣の理り聞いて有る俗人の云く「家を遁れ出でゝ山居しながら、さやうにてあるは名聞にて還つてあし

【六賊】心をして煩惱を起さしむる外境、色境、聲境、香境、味境、觸境、法境の六をいふ。

き事なる間、我は中々妻子と同じく家にありて、往生を願ひ、菩提を求めん」と云ふは、此義は甚だ錯り也。若し俗體の位にて佛道を修行せば、世の毀をいとひ、褒を望む名聞は起るまじきやらん。然るに褒を喜び、毀をいかる、是れ愛恚なり。故に是れ貪瞋也。今の時の衆生に於て此煩惱のなからんや。但し彼の、跡を山林にかくす人は世間をわしり、妻子をはごくむ様なる著心なし。故に縱ひ人のほまれを望む事ありとも、其は佛法の見解なれば、人をして信を起さしむる方便ともなりぬべし。在家の人の愛見は、偏へに是れ世の爲、眷屬の爲めなれば、何事をなすとも皆輪廻生死の業因なり。縱ひ一段淸心を起す事あれ共、たゞ水に畫くが如し。何ぞ彼の遁世の人に比校せん。眞實に生死を離れたき志あらむ人は、はやく世間を去り、妻子を捨てゝ獨り閑處に居して一大事を勵み玉ふべし。但し人の機根まち〳〵なりと云へども、大にわかりて三類あり、謂る上中下也。上根の人は妻子を帶し、家に有て佛道を行ずべし。中根の人は妻子をば帶せずして而も衣食住には依て出離を求むべし。下根の人は萬事を捨てゝ往生を願ふべし。然るに前の二類の人は上中の差別はありと云へども、少欲不著の機根なる故に、妻子珍寶も佛道修行の障りとはならざるべし。後の下品の一類は著相簡別の劣機なる故に、一切を捨離せしむるなり。今時の衆生皆此下機の流類なるべし。能く〳〵自ら思量し玉ふべし。但し是は山に籠りて道心を起す人も家に在りて出離を求むる人も倶に未だ内心虛假にしてもつ故に、修する所の解行皆六賊煩惱に害失せられて出離の緣とはならず、かやうのありさまどもを「外に賢善精進之

【十四】往生十四のこと。

相を現じ、内に虚假を懐き貪瞋邪偽奸詐百端、悪性侵め難き事、蛇蝎に同じければ、三業を起すと雖も名けて雜毒の善となす。亦虚假の行と名け眞實業と名けず」と釋し玉ふ。是を不調の道心とは云ふ也。但し此不調の道心をおこす人が又相應の道心をも、眞實の道心をも起す習ひなる故に、悉く種々の道心の爲の前方便となる方よりは、此不調の道心も大切たり。今嫌ふ所は此調の分にとゞまりて、是を至極の道心と思たる習執にてあり。知るべし。

次に相應の道心とは前の外相の眞實を内心へも移して勇猛精進に苦の勞を厭はず、樂の無爲を欣ぶ事也。永觀禪師の『十因』に云く「一切の時處に一心に稱念して小善に依て大事を退せざれ、值ひ難くして一たび遇へり。豈身命を惜んや。」小緣とは、今生一世の内の喜怒怨讎等の雜縁也。譬ば或は盜賊水火の爲におかしうばはるゝ事も有るべし、或は惡性愚人の爲めに罵詈打擲せらるゝ事も有るべし、或は重病違行の爲に苦みなやむ事も有るべし、又或は智德行德の名譽を施す事もあるべし、或は門葉等に歸敬せらるゝ事も有るべし、或は失錯誹謗の恥辱に沈む事もあるべし。加様の禍福違順等は倶に皆是れ夢の内のたはぶれ、風の前の燈なる故に是等を小縁とはの玉へり。然るに心中に道心のなき愚人は、是等の妄縁にとらかされて逆の境にあふ時は瞋恚をおこし、又は悲嘆にしづみて、出離の大事を失す。順の境にふるゝ時は嗜愛に著し、或は名利にほこりて佛道の直路を昧ます。是に由て今になを流轉生死の凡夫たり。然らば則ち順逆の境縁は障地獄の因に非ず。

【二三】口稱の名號と心證の往生とを明す。

惡道の境によりて起す所の貪欲の心則ち是惡趣流轉の業因也。今は則ち加樣のことはりを思ひ知て、加樣の小縁と妄想にひかれずして、三業を一心に制して二六時中に專ら名號を稱念し、安養を欣求するを、三業相應の道心とは云ふ也。但し是も猶ほ機情の功に留りて自力の三業を勵ます故に、此位を「たとひ身心を苦勵して日夜十二時に急に走り急に作すこと頭燃を灸ふが如くなるも、衆て、雜毒の善と名く。此雜毒の行を迴して彼の佛の淨土に生ぜんことを求めんと欲せば、此れ必ず不可なり」と嫌ひ玉へり。自力の心は心體の三毒なり。此毒の心體より行ずる行なる故に、行業眞實なれば、其れに隨て惡毒も亦强盛なり。故に今三業相應して懇懃樣に行ずるを雜毒の善と禁じ玉ふ也。次に眞實の道心とは機情の功によらざる佛力成就の眞實心なり。故に是は他力の衆生の方には、縱ひ行忘淺深等の差別あるとも、覺他圓滿の法體は不斷無間の信心なり。然るを、つねさまの念佛の行者は心念もしづまりて行業勇猛なる時は、我にも道心も行力もある故に、必ず往生すべしと云ふ慢心を起す。又世縁の爲におかされて心行も退轉する時は、かくては輪廻をまぬかるべからずと云ふ怖畏をいだく。此怖畏と高慢とにさへられて、他力の道心に迷へり、然るに、他力成就の處には怖畏、高慢、退息、昇沈等の色はなし。偏へに是れ因中に眞實の發心不顧不思議の一行なり。故に努々機情の是非に取り合はずして他力無生の處に安住して名號を稱念するを他力眞實の道心とは云ふなり。」

【二三】問「口に唱ふる行體と、心に證する往生とは、一とやする、二とやする。」

答「一に似て而も二なり、二に似て亦而も一なり。夫れ心に證る往生と云ふは、行者の證得にて、發願の安心なり。口に唱ふる名號と云ふは趣向の稱行にて正覺の行體なり。是れ則ち衆生稱念すれば必ず往生を得と願じたる位の願行なる故に、發願の安心と云ふも、願行具足の位の發願正覺の行體と云ふも、願行具足の位の行體にて、唯願唯行の分には非ず。然らば則ち心に證する位は、南無の歸命心に極りたる發願の安心なる故に、未だ色形には見へず、口に出して唱ふる時、名號不二の六字の行體とは顯るゝ也。此の如く、聲に出して稱する時、正くは心口相應す。此の心口相應の時を則ち念聲是一と云ひ、是れ亦願行具足の義なるべし。然るに證得の位の願行具足の南無阿彌陀佛は安心の位なる故に傍正の重の法門也。口稱の位の願行具足の南無阿彌陀佛は趣行の體なる故に助正の重の證得也。但し加樣に云ふも尚ほ義理の路を定むる敎相の分別也。今安心の色を聲にうつして稱するが、正しき願行具足したる他力往生の卽體なり。『觀經』の下下品に是の如く至心に聲をして絕へざらしめ十念を具足し南無阿彌陀佛を稱せしむと說くは則ち此位なるべし。故に正覺と往生と一種に成じたる姿を南無阿彌陀佛とは唱へ出す也。然れば此南無阿彌陀佛の六字の名號を佛果に望る時は正覺の體、衆生に約する時は往生の體なり。但し此の如く分別するも尚ほ是れ義理の敎相なり。遂の極體は唯南無阿彌陀佛と稱する聲の三也。此位を言語も心形も倶に滅する愚癡の往生と云ふ也。然るを世間の人皆愚癡の衆生の往生と云へる詞ばかりを聞て、一向に黑白をもわきまへざる茶摘、草刈等

【八難處】佛を見ず法をきくことを得ざる八種の難處。一には地獄にあるの難、二には畜生に在るの難、三には餓鬼に在るの難。以上の三は苦劇しくして法をきくことを得ず、四には長壽天に在るの難、五には北鬱單越洲に在るの難、以上の二は樂しみ多くして法をきくことを求めず。六には盲聾瘖瘂の難、七には世智辯聽の難これは世智ありて法を求めず。八には佛前佛後の難。

【一三】解明の解は往生の實體なるや否やを明す。

の類の様に思ひたり。さやうの族は都て聖道淨土の佛法の神力の及ばざる八難處の機根也。加様の類には只普く功德を廻向して遠く緣をむすばしむるより外は別の計略なき也。然るに今言ふ所は淨教を發起する韋提希夫人を始めとして、乃至九品の萬機皆『觀經』の所說の卽便當得の二の往生を一種に極めて、衆生稱名すれば必ず往生するを得と大悟する位を愚癡の往生とは云ふなり、但し言忘慮絕する處に於ては、得名を呼ぶべきにはあらざれども、聖道門に自證の正智と云ふに對して愚癡の往生と云て諸宗淨土宗の證道の趣きをかゆる也。卽に世間出世の二種の善根なき、唯惡を作すことのみを知るものの上に成じ極り玉ひたる願力不思議の往生なり。故に或師の云く、聖道の佛法は平生に成佛す、淨土の佛法は愚癡に極りて往生すと云云。但し此處は則ち極樂往生の卽體なる方よりは智者とも號し、上上人とも讃ずる也。是れ則ち所詮は三業の往生を倶に口業の位になして南無阿彌陀佛と唱へ出す稱名の聲、則ち現身往生の實體なる故に、化佛菩薩讃を垂れて判り一念傾くれば心寶蓮に入ると讃ずる也」

【一三】問『觀經』の下品下生の文を見るに「善知識に遇へば、種々に安慰して爲に妙法を說き、敎へて念佛せしむ。此人、苦に逼られて念佛するに遑あらず。善友告げて言く、汝若し念ずること能はずんば應に無量壽佛を稱すべし、是の如く至心に聲をして絕えざらしめば、十念を具足し南無阿彌陀佛と稱す」と說けり。此文の如くならば、意業の念佛に至らしめんが爲の前方便に、口稱の名號をば勸ると覺へたり。故に諸師は一散稱を唱ふるは

専念を勤さんが爲」と釋せり。然るを何ぞ稱名の願、即ち往生の業願と決定するや。答　上來の法門其の趣は斯の如く也。今の阿彌陀佛、因位の誓願を立て、他佛の諸行を超り玉ふ事は、諸佛の實行教化もかなはず、八萬の教法方便もおよばざる惡業深重の衆生をして、やすく／＼と極樂に往生させて無上菩提に到らしめんと也。其故に極樂の依正二報、種々の莊嚴光明及び十方三世の諸佛正覺の功德等悉く南無阿彌陀佛の六字の名號に納めて、以て此名號を衆生が稱念する所に與う衆生の往生を成ずべしと誓て、既に其本願を發して正覺を唱へ玉ふ事を、四十八願に、一々誓じて言く「若し我佛を得たらんに十方の衆生我が名號を稱へ、我が國に生ぜんと願せば、下十念に至るまで若し生ぜずんば正覺を取らじ」、今既に成佛す、即ち是れ酬因の身なり」と。「當に知るべし、衆生の三心は南無の發願に極り、極樂の依正は阿彌陀佛の行德に備りて、而も名號佛に歸行具足の南無阿彌陀佛の六字の名號と顯し玉ひたり。其南無阿彌陀佛の六字の名號の體、正くは三業の中には口稱に出る時顯るなり。並に自力三業の念を離て、三業門の外の他力成就の名號にうつらしむる事を「善知識は種種に安慰して爲に妙法を說き、教へて念佛せしむ。此人苦に逼られて念佛するに遑あらず、善友告げて言く、汝若し念ずる能はずば、應に無量壽佛を稱すべし。是の如く至心に聲をして絶えざらしめば十念を具足して南無阿彌陀佛と稱す」と説けり。是れ則ち此の如きの願力不思議の名號と云ふ事を口稱にかけて繼して置てさて而も又是を意にも念じ、身にも禮し、又口にも稱する位を念聲是一と明

す。是又三業是一の義なり。此故に經文が聲をして絕えざらしむと云ひながら、やがて是をおさへて十念を具足すとは說けり。是の如く念聲是一と成じたる名體不二の名號なるを以ての故に、稱名の念即往生の實體とは云ふ也。故に『往生禮讚』に『阿彌陀經』を引て云く「若し衆生ありて阿彌陀佛を說くを聞かば即ち應に名號を執持すべし。若しは一日、若しは二日乃至七日、一心に佛を稱して不亂なれば、命終らんと欲する時、阿彌陀佛諸の聖衆と與に現に其前に在す。此人終る時心顛倒せずして即ち彼國に往生することを得。佛舍利弗に告げたまはく、我此利を見るが故に、是言を說く、若し衆生ありて是說を聞かん者は應に願を發して、彼國に生ぜんと願ずべし」次に下に說て云く、東方の如恒沙等の諸佛南西北方及び上下一一の方の如恒沙等の諸佛、各々本國に於て其舌相を出し、遍く三千大千世界に覆て誠實の言を說き玉ふ。汝等衆生皆應に是の一切諸佛所護念經を信ずべし」已上此文を以て明かに知るべし。『觀經』の意は衆生が口に稱するとも、他力名號の願意に念ずるとも、他力名號の體に、念聲是一の南無阿彌陀佛なる體に、念佛をも口稱をも、同じく恒沙の諸佛眞實證誠と證誠し玉へり。何ぞ『觀經』の念佛に、方便眞實の二筋のあるべきや。但し諸師は觀察に心を傾け、彌陀に向を觀すと云へども、三藏の權立の佛にて未だ『觀經』の眞意には落らず。是に依て『觀經』の稱名念佛を、自力の三業の功分にならひいれて、以て意念と口稱とを眞實方便に分別せらるゝ也。此義は是れ聖道諸宗の方には相應す。淨土宗の『觀經』の意には相違するのみ。返々も淨土を信じて往生

【五體】全身の總稱。兩手、兩膝、頭のこと。五體を地に投ずるは印度にては最敬禮なり。

【三四】三心具足せば三業無間の稱名の要なきや否やを明す。

を期せん人は、善導和尚の御證道を能々相傳して、持て三業相應して、音聲出して常に名號を稱じ玉ふべし。然らば則ち意に極樂往生を忘れずして、阿彌陀佛を念ずるは意業也、身に合掌禮敬して西方をそむかざるは身業なり。口に舌を動かし聲を出して、名を稱するは口業なり。或時は五體を地に投じて、偏へに稱念し、或時は合掌を額にあてゝ、專ら念に進ますべし、是を決定往生の念佛の行者、眞報佛恩の人中の上上人と申す也。然るに當世の念佛の行者の中に、舌口をば動せども聲をば出さゞるもあり。或は念珠をば執れども願ばかりなるもあり、是等は因緣ある故に、心口も願行も相應せず、豈に成就する事あらんや。」

【四】問「觀經」には「三種の心を發して卽便往生す」と說く、是を善導和尙は「三心既に具せば、行として成ぜざる無し。願行既に成じて若し生ぜずばこの處有ることなし」と釋し玉へり。此經釋の如くならば三心を起す處にやがて行體そなはる故に、願行具足して卽ち往生を成ずと覺へたり。何ぞ三業無間の稱念の起行を勸るや。

答「此事豈に前にいはざるや。今三業の起行を明せばと云て、必ずしも心念口稱の功力をつのりて是を以て往生すべしと云には非ず。今是は證得往生の色を顯す也。其證得とは、凡夫の往生は唯他力ぞと領解する事也。今の阿彌陀佛因位の時「十方の衆生至心に信樂して我國に生ぜんと欲し乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と誓て則ち果成には我等衆生の三業の上に來り極りて、三業唯南無阿彌陀佛と成じ玉ひたる故に、名に

極りたる名體不二の正覺なり。是を「彼此の三業は相捨離せず、故に親縁と名くる也。」と釋し玉へり。但稱念禮念共に同じく名に極りたる正覺の色を南無阿彌陀佛の六字の名號ぞとは正しくは聲に出して稱する時顯るゝ也。此の如く口稱の上にて顯れて扨てそれより三業即ち他力名號の體と云ふ位にはなりかへる也。然らば則ち此の如き三業さながら六字の名號と云ふ位に成り歸りて後は、何ぞ餘縁にひかれ餘縁にうつらむ。既に「唯專らに彌陀の名號を念ずれば生ずることを得」と明すと云ひ、「唯專らに名號を念じて生ずることを得」と標すと釋したり。然らば佛法は此唯專の二字に極りたり。安心の時は願力に約して唯專なるべし。起行の時は三業に觸して唯專なるべし。例せば「阿含經」に六力を明すに似たり、六力とは謂ゆる、小兒は泣を力とし、女人は瞋嫉を力とし、國王は憍慢を力とし、諸佛は慈悲を力とし、菩薩は忍辱を力とし、比丘は戒行を力とす。其樣に往生淨土の人は名號を力として、三業唯專に證得の色をのみふるまふ也。但し其翔の色、意業に隨て一準に非ず、或は跡を深谷に隱して專に稱念する人もあり。或は大悲を法界に施して他力を導く人もあり、或は一切の所作所爲を、其儘に修行する人もあり。但し是の如きの證得のありさまを機情にもつ時をば助業の起行と云ひ、願行に置く時をば正定業の安心と云ふ。此兩重は喩へば兩手兩眼の如し。又天地日月の如くにして何れも眞實なる故に「本疏」にては「身口意業の修する所の解行必ず須く眞實心中に作すべし」と釋し「具疏」にては「凡そ三業を起すところ必ず須らく眞實なるべし」と明したり。此の如

【問一五】娑婆の外に極樂を立つることを明す。

く彼の國の依報正報は眞實にして而も一體に具し其の德をば、是れ五念門に具し釈れば定んで往生を得。此の門、上の三心と合す、隨つて三業を起すに其の心を問はず、悉く眞實の業と成り、と謂ふたり。前の如く安心起行相應する時は、彼此の三業相離せざるの義、願行具足すれば必ず往生するを得るの意にては有る也。然らば則ち安心の時は稱名念佛の期ひ、即ち發得せる往生の因なれば、此外に別に爾する往生なし。故に往生の因の三業の所作とは云ふべからず。起行の時は三業の修行をば、或は撥無にすれども、或は此界に趣向する故に、是も自身の往生の爲にはせず、故に安心起行の機りはあれども、現生に現身證得の望なる事を一三心具足に似せば何とも三心具せざる無く、願行既に成じて若し生ぜずんば、是の處有ることなし。」と謂へる是れ其の意也。」

【一五】問ふ、娑婆往生とは外に極樂に對する所の往生ありと云はゞ、極樂國土と云ひて直に娑婆の外に建てられたるはいかにてぞ。」

答ふ「此は古德の詞にも引かれて大旨を述べたる下品下生無るに淨土の正依經に三部經とは云へども往生の安心をば正しくは「觀經」に敎へたり。故に宗家の大師は先づ「觀經」にて、宗義を立てゝ其れより「大經」「彌陀經」をも會し玉へり。夫れ「觀經」の發起は韋提希夫人なり。彼の夫人は既に此土人聖の益にも漏れ、諸佛の淨土へも叶はずして「我今極樂世界に生ぜんことを樂ふ」と選び取て以て彌陀淨土より宗義を立て顯して淨土宗と號するなり。故に正しくは娑婆の外に極樂淨土あり、念佛の行者捨命の時、彼國に到るべ

き事は實なり。然らば則ち加様に宗旨を立て置きて、扨て是に付て即便當得の二の往生の位ある事を分別すべし。

抑、今の阿彌陀佛の四十八願を見るに、先づ自ら正覺の國土の莊嚴事を一一に願し立て、是を成就し玉ふ時は、依正二報倶に悉く我等衆生の上に極めて稱我名號の位の報身報土と顯し玉ひたり。然らば我等衆生の三業に登て南無阿彌陀佛と信知し稱念する時が、即ち彼佛の依正を攝し、國土の莊嚴を見るにてあり、是を佛の悲願の成就とも、佛凡不二の名號とも申す也。此道理を此の如く只今我が心中に證しておちたる位を、即便往生とは云ふ。是れ他力往生の正體也。但し是は心法の證得にて、色體は尚ほ未だ生死の穢身なり。故に此平生の位をば、一念花開に譬じて即ち理し、證得して往生す」と譯し玉ふ。但し臨終に至りたらん時は、此穢身をば此穢土に捨て置きて、正しく證得の心法ばかり聖衆來迎に預りて彼國に至るべし、此位を當得往生と云へり。又此證得の心法、彼國に到り終りなば、やがて八萬四千の相好の身となるべし。是をば淨土成佛と云ふ也。然らば平生に修する所の安心起行の二は、是れ臨終の往生と淨土の成佛とを違なく信知し、安住したる處なり。故に平生の安心を直に能く證得して座をなせば、畢命の時の往生成佛も自ら成ずべし。有漏の穢身に付ては臨終平生の前後あり。其になぞらへて、即便往生當得往生と云ひ、色をば云ひかゆるとも、心法の證得の方は本同じく、願行具足の南無阿彌陀佛にてあり。此位を臨終平生一同とも云ひ、即便當得一往とも談ずるなり。然らば何ぞ一往の證得往生

より外に又別に期する所の往生かあらん。返々も『觀經』の意は平生の證得往生を肝要とする故に、善導和尚は『大經』の四十八願をも、『觀經』の定散二門をも『彌陀經』の諸佛證誠をも、皆同じく即便往生の位に極めて以て、此義を懸に釋し下りて、終に三心既に具はり、行成ぜざる無く、願行既に成りて若し生ぜずんば、是處あること無しと結成し玉ひたり。宗家の御釋廣多なりと云へども、何れも此三心の意趣を明し玉ふ也。其三心とは、所詮は我等衆生の極樂往生は偏へに願力の不思議より成就する故に、都て自力三業の功は一分も入らずと領解して、永く機情の執をうしなひはてて、一向に他力往生の心法になりかへりたるを、金剛の如くの安心とは云ふ也。此安心の體が則ち臨終の時は聖衆の來迎に預りて、彼極樂淨土に往生して、總て十力四無畏等の內證の功德相好光明等の外用の莊嚴悉く備りて、速かに報身成佛して、然して後又濟度衆生の爲に穢國に趣くべし。然らば則ち平生の時の他力證得の心法が臨終の時、極樂に往生して淨土成佛する故に、我等が出離得脫は平生の即便往生より化度衆生の翔まで、皆悉く願力成就の不思議と深く信知して持ちたるを淨土宗とは申すなり。」

【一六】問『觀經』の說相を見るに九品の衆生、願力に乘じて極樂に往生すとは云へども、尚ほ華にふくまれて六劫、十二大劫の間、見佛聞法せずと說けり。何ぞ彼に生じてやがて成佛すと云ふや。』

答『即便當得と云ふ二の往生は、俱に衆生の方に證る得益也。然るに即便往生と云ふは

【十力】佛の有する十種の智力。處非處智力。業異熟智力。靜慮解脫等持等至智力。根上下智力。種種勝解智力。種種界智力。遍處行智力。宿住隨念智力。宿住生死智力。漏盡智力。

【四無畏】佛の有する四種の德力。即ち說法の時に畏怖なきをいふ。又四無所畏とも云ふ。正等覺無所畏。說漏永盡無所畏。說障法無所畏。說出苦道無所畏。

【一六】華合華開の不同を明す。

所解の法體に望めて、正定業の實體を顯す念佛三昧の位なり。故に此位にては華合華開の沙汰は有るべからず。當得往生と云ふは能解の衆生に對して、衆機の方を顯す觀佛三昧の位なり。此位にて華合華開の不同を說く也。則ち華合は往生の形、華開は成佛の色也。但し衆機の差別を顯す觀佛門の位に付て「本疏」と「具疏」との替りあるべし。謂る「本疏」の時は華合華開倶に今生の證得に望めて、華合は往生の安心、華開は助業の起行と意を得る也。其故は、先づ安心と云ふは心法の證得なる故に、心法は往生したりと云へども、色法は未だ生死の穢胎なり。故に「往生を得と雖も華を含みて未た合掌を發さず、能々として胎に處るに喩ふ」と云て往生して華にふくまるゝと云ふは、證得の心法の有漏の穢胎にはらまるる如くぞと喩へたり。然れども心法は既に往生して無苦無惱なる故に、「內に法樂を受けて微苦無し」と釋する也。故に證得往生の安心の位を華合の障と云ふ也。次に起行と云ふは證得往生の安心の色を機情の三業にふるまひ顯す也。即ち身業には合掌、禮拜して一切の三寶を供養恭敬す。口業には淨土の依正二報の種々の功德を讚嘆稱揚す。意業には又淨土の依正二報相好光明等を觀心觀察す、是則ち見佛聞法歷事供養の意なる故に助業の起行を華開の位と云ふなり。但し見佛聞法とは云へども猶ほ是れ平生の證得なれば、未だ眞佛眞法をば見聞せざるのみ。次に「具疏」の時は、華開は倶に淨土成佛の時の事と意得る也。其故は、念佛の行者は正しく臨終の時、有待の穢身をば此穢土に捨て置きて、心法ひとり淨土に生じて華中にあり。願力に乘じて彼には生ずと云へども、尙ほ機方の意

業の輕重により宿善の厚薄に隨て華開に遲疾の不同あり。」華開已後に三賢十地等の階級あり。但し是の如き等の次位劫數等は、是娑婆界の時日をおふて數ふる也。此故に上品中生の人の華開已後の得益の時を釋して云く「時七日を逕て即時無生を得、七日と言は恐らくは此間の七日なり。彼の國の七日を指すにはあらざる也。此間に七日を逕るは、彼の處には即ち是れ一念須臾の間也。應に知るべし」已上應に知るべしとは六劫、十二劫の時節も、大小僧祇の階次も、是に准じて知れとの御語と覺へたり。爾らば是等は娑婆世界の劫數に望めては、長遠なるに似たれども、極樂世界の榮華にほこりて、時日のうつるも覺へず。故に三大劫も大小僧祇も彈指刹那の間也。此故に釋に云く「微塵の故業、智に隨つて滅し、覺えず眞如の門に轉入し、大小僧祇恒沙劫も亦彈指須臾の間の如し」已上然らば則ち今生證得の時は、華台華開は安心起行に替ると云へども、倶に證得の位なる故に、皆即便往生の分なるべし。又捨身即生の時は、華合華開は往生成佛と分れども、即成正覺の位の往生なれば、倶に淨土成佛の攝なるべし。故に『本疏』『具疏』に望めて二義ありと云へども、二義倶に往生成佛同時に應じたる事也。既に文前の御釋が九品往生の處を志して「唯心に勤むべし。法を奉じて命を畢るを期と爲し、此穢身を捨つれば即ち彼の法性の常樂を證す」と定めたり。何ぞ往生成佛の中間に於て長遠の時劫を隔つると云ふべきや。』

【一】還來穢國度衆生の義を明す。
【穢國】穢土ともいふ。この娑婆世界をさす。
【還來穢國度衆生】極樂に往生せる人が再びこの娑婆世界に還り來りて迷ひの衆生を救濟することをいふ。
【化迹】化身垂迹の略佛菩薩が衆生救濟のために假にあらはれたる身をいふ。
【能化の巧】佛菩薩の善巧方便のこと。卽ち衆生救濟の爲に講ずるよき手段。

愚要鈔　卷下

南紀總持寺沙門　明秀　撰

【一】問「極樂に往生し成佛したる人は、やがて又穢國に還來して衆生を濟度すべき由上來に聞へたり。然るに十方無量の世界より極樂に往生する衆生、日夜十二時に無量無數にして三世に退轉なしと說けり。爾らばそれにしたがひて還來穢國度衆生の人も、又無量恒沙にましますべし。然れども當世のありさまを見るに佛法を興行して、衆をひく人は多けれども、是ぞ還來穢國の化迹賢とおぼしくて、其效まします樣なる人はなし。若し十方より往生するもの無量なりとは說たれども、實に往生する人のまれなるや、又皆往生はすれども、度衆生のために生死にかへることのまれなるや。」

答「物の邪正金鑰のごとし。是非のことはり誰か輙く辨へん。爾らば何なる效をもて眞正の體とさだめん。虛空を飛行し、照光を放つことを效と云はんとすれば、鳥禽蟲類に此德あり。大地をくゞり、水上をゆくことを效とせんとすれば、黿鼉蛇魚に此能あり。宿報をしり、來業をさとるを效とさだめんとすれば、小乘外道に此通あり。天災をやめ病惱をいやすことを效とあがめんとすれば、陰陽醫師に此業あり。爾らば如何樣なることを效として、導師の賢愚を判ぜんや。夫れ人の機根無量なるに隨て、能化の巧又無窮なり。或は

【六根六情】六根は身心の六種の機能。眼根、耳根、香根、鼻根、香根、身根、意根の六。六情は六種の感情、喜、怒、哀、樂、愛、惡の六。

知識師匠と顯れて、教道をたるゝ時もあり。或は親子師檀となりて、芳志を致す時もあり。或は王臣長者等と現じて、憐愍を垂るゝ事もあり。或は奴婢僕從乃至妻子牛馬等となりて、助成を加ふる事もあり。是即普賢の恒順衆生の誓、觀音の應爲即現の願の如し。是れ皆、逆來機關、度人天の姿なるべし。然らば此等のありさまどもこそ、正き佛法の效にてはあれ。何ぞ此外にめづらしきしるしのあるべき。但し善知識の利益方便の爲なれば物の時宜にしたがひて、例に替りたる珍らしき奇特をほどこさんも、くるしからぬことなれども、末世の凡人はさやうの行様を見ぬれば、頓て心をくるはすゆゑに、佛法には指して希有の事をばもちゐず、只常の趣にかはらざるが佛法の效にてはあるなり。然らば即ち剛強難化の衆生を濟度し玉へる佛菩薩の善巧無窮なりと云へども、違順の二より外はなし。即違逆の縁をいたしては、厭離生死の心をおこさせ、又順和の色を施しては、欣求菩提の念を勸む。此二事、有情非情にわたり、六根六情にみちて無量無邊なり。但し此中に於て、生生世世の惡執にもよほされて、愛憎の縁に逢ふ事もあるべし。又還來濟度の方便に示されて、怨親の境にふるゝこともあるべし。凡夫の翳眼としては、其差異辨じ難し。爾らば何として、還來の善知識のおゝしともまれなりとも言ふべき。所詮後世を思はん人は、唯意をほげほげともちなして、違の境に對せん時は穢土を厭へと敎る出離の良縁と信ずべし。順の境に共せん時は、菩提に進めとしめす成佛の導師と敬ふべし。是の如く、行住坐臥に用心して、厭欣の道心をおこさば、一法として出離得脱の指南にあらずと云ふものあるべから

【二】極樂に往生すれども、十方の衆生は減せず、彌陀の佛國又增さざることを明す。

【佛界の四聖】聲聞界、緣覺界、菩薩界、佛界の聖者をいふ。

【生界の六凡】地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界の凡夫をいふ。

す。然るをやゝもすれば、境界の上ばかりを批判するほどに、自の心中暗くして、生死の長夜にまよふなり。

【二】問。「晝夜十二時に、十方の世界より極樂に往生する衆生、驟き雨の如くにて無量無數なりと說く如くならば、げには少々も、衆生界は減ずべき道理にてあるに、先づ此間の內に於て凡そ見及び聞及ぶほどの世界の衆生は、唯同じ樣にて其跡もたえぬは、何なる謂れぞや。」

答。「是れ佛法世法の不思議なり。無量の衆生一時に往生し、成佛すといへども、衆生界も減ぜず、佛界も增せざること、譬へば大海の衆流を納むに增減なきが如し。但し此の不增不減の法門について諸宗の意不同也。天台宗には、無明法性の二つ法爾として同時に元來よりあり。是を佛界生界と云ふ。即佛界に四聖、生界に六凡、都合して十界也。此の十界に又各々に十界を具足させて、十界互具の即身成佛と云て、是を佛界生界に不增不減と談ずるなり。眞言宗には三諦を出す。一には滅するにしたがひて衆生出來す。二には黑色白色の頓漸あり。白は成佛すれども黑は成佛せず。故に減ぜず。三には諸法常住の故に增減なし。是は東寺の義なり。法相宗には理には增減なし、事には增減ありといへり。律宗には前佛の衆はおゝし、度衆生をゝき故に後佛の衆はすくなし。衆生減ずるが故に。」已上

今淨土宗の意は四十八願成就して、穢土の衆生の極樂に往生するについて、彌陀の願

しも修行の間なく、往生する衆生も、修道の間なき所を增減なしとは釋するなり。但し一念一時の中に、無量の衆生皆往生すと云て、一念の中前なく後なしと釋する方もあり。或は又「彼國土に於て求むる者千萬、得る者一二なし」と云ふ釋もあり。是等は何なる相違ぞと云ふに、本願力が「諸佛如來は是法界身、一切衆生の心想の中に入る」と成じたる方よりは、十方衆生悉く同時に往生すと說く也。又機情の不同に望むる時は、正くは善知識に逢て三心を發すもの往生するなり。然らば知るべし、本願の大悲は人天畜類等に成ずと雖ども、正くは人天に生ぜずしては佛法には逢べからず。然るに人身をうくること甚だ難し、人身をうくることはあれども、佛法に逢こと又難し、佛法に逢とは云へども、本願の敎法に遇こと又難し。本願の敎法には逢事あれども、他力の信心決定すること又難し。是の如く希なる方を指して求むる者は千萬なれども、得る者は一二もなしと釋する也。然れども無量無邊の世界の恒沙塵數の衆生なる故に、多少こそあるとも、往生する衆生は三世常住に退轉あるまじき也。

　然るに他力大悲の相續に際限なき故に、衆生の往生も退轉なし。又流轉生死の衆生が際限なきによりて、本願力も間斷無し。往生に彌陀の願力と衆生の往生とが終につきざる所を「十方の衆生未だ皆て滅せず、彌陀の佛國亦增すことなし」と釋せり。是の如きの廣大長遠の本願なればこそ、正覺をも國土をも、無量壽とは成し玉ひたれ。諸佛は或は淨土に居し、或は穢土に出でゝ、化他の大道を施すと雖ども、本覺の上の化用にて、結緣の分な

【授記】佛が記別を授くること、記別とは佛が修行者の未來の證果を一一區別して豫言すること。
【三】三世の諸佛彌陀によりて正覺を成じ玉ふことを明す。

る故に、終に皆涅槃に入り、本覺に歸して化他の利益が止む故に、佛界の功德が減じて流轉の衆生界が增ずる也。然るに今の阿彌陀佛は、始本倶に他力本願の始覺に極めて覺他窮滿と成じ玉ひたる無量壽の報身報土なる故に、佛界の利益も衆生界の往生も、倶に終盡の期なく、增減の失なし。故に超世の本願とは名け玉ふなり云云。又云、錦宗に「始本不二にして十界成佛す」とは言すれども、實には始覺の修行が大事なる故に、本有の佛界顯れ難し。是によりて今の阿彌陀佛覺他の誓願を選擇して、始本倶に超世本願の始覺に極て、自覺覺他覺行窮滿し玉へる報身報土なる故に、十界が其の我等衆生、正くは極樂に往生して後にて成佛得道すべし。但し、十界成佛すとは雖も、十界の形をば失はず、內證に具足してもつ故に、還來穢國の時は、其世界世界に隨て、各々其形を顯して、其衆生を濟度するなり。然るに淨土成佛の時は佛界は表となり、生界は裏となりて、而も增減なし。還來穢國の時は、生界が表となり、佛界は裏となりて又增減なし。即ち是れ極樂往生の上の不增不減なる故に、自覺覺他覺行窮滿して、十界成佛すること顯し。故に三世の諸佛等しく皆極樂に來到して、授記作佛し玉ふ也、然るに先の義は極樂往生についての不增不減の位、後の義は淨土成佛についての不增不減の位なり。是れ即ち、二義倶に願力成就の上の事也。是れ又傍正・助正の重にも當るべき歟。」

【三】問「三世の諸佛彌陀に依て正覺を成じ玉ふと云ふは、如何なる意ぞや。」

答「三世の諸佛各々四弘の誓願を起し、六度の修行を送り給ふ。是は倶に自覺本性の功

【正智聖人】深き智を有して修行の階位を積み極めたる聖人。

修諸佛同道の利益なり。又他力往生の別意あり。是は彌陀大悲の密法たり。卽ち惡逆深重の凡夫を始めとして、深悟滿地の聖人に至るまで、平等に願力を以て速疾に出離解脫せしめんとの別願なり。此別願を成就し玉ふ時、滿足大悲の如來とは云はれ玉へり。然れとも、是は普通の佛法の大道理には遙に替りたる希奇深重の大悲なる故に、左右なくは成じ難きこと也。然るを今の阿彌陀佛十劫正覺の昔、一切の諸佛の別意を選擇して四十八願と立てゝ、其上に兆載永劫の間、六度の萬行を造りて、總別俱に別願に極めて、四十八願一一の願に我が名號を稱すと言へば、卽ち是れ酬因の身なり」と正覺を成じ玉ふ時、一切の諸佛の誓願を一々成就して、皆悉く自覺覺他覺行窮滿の如來とは顯れ玉ふ也。當に知べし、彌陀如來諸佛の別意を選集して、先づ稱我名號と正覺を成じ玉ふ方よりは、諸佛に對して、彌陀一佛の出世の本願と云ふべし。又此六字の名號が、諸佛內證の密意なる方よりは、三自門の佛教に對して、諸佛同心の出世の本願と云ふべし。然らば則ち前の義は能成の如來に望て、諸佛は未成覺他、彌陀は已成窮滿と云て、我建超世願と廢立す。後の義は所成の覺體に望て、諸佛讚嘆の不可思議の功德と會通す。此の二の道理を取り合て以て「三世の諸佛阿彌陀佛と念ずるに依りて等正覺を成ず」と說たる也。然らば阿彌陀佛を念ずると云ふは、南無阿彌陀佛を念ずるなり。南無阿彌陀佛を念ずると云ふは、衆生往生を念ずる也。今彼の西方の阿彌陀佛を先達として、一切の諸佛此願を成就し玉ふ。其成就とは、卽ち諸佛同體の大悲、亂想不善の我等衆生の上に極りて、願行具足の六字の名號と顯し玉ふ位

【四】成佛十劫正覺の阿彌陀佛を明す。

【伽耶始成】釋尊が伽耶(Gaya)に於て始めて正覺を得たるをいふ。伽耶は摩掲陀國パトナの西南六十二哩の地にあり。釋尊はこの地より南方六哩半計りの地に於て成道せり。

を、「諸佛如來は是法界身、一切衆生の心想の中に入る。是故に汝等心に佛を想ふ時乃至是心佛と作り是心是佛なり」と明す也。故に知るべし、三世の諸佛彌陀に依て正覺を成ずと云ふ意は、唯三世の諸佛衆生の往生に依て、正覺を成じ玉ふにてあり。是れ善導一師の御證道也。敢て斷簡すべからずと云云。

次に此法門につひて、ある義には、十劫正覺の彌陀に依て、十劫已後の三世の諸佛正覺を成ずと云へり。又ある義には、彌陀に本迹二門あり。其本門の彌陀に依て、三世の諸佛正覺を成ずと云へり。是等は常途の道理より沙汰せらるゝとおぼえたり。如何となれば、或は十劫已前の諸佛には手をつけざる故に、或は諸佛によらるゝ彌陀を無始本有の佛と云ふ故に云云。」

【四】問『阿彌陀佛の正覺を成じ玉へる時節をば、成佛已來今に於て十劫と說く時に、釋尊出世の時代までの十劫と聞えたり。爾らば是は大中小の中には、何れの劫と定むべきや。』

答『今觀經宗の意は直ちに本願不思議の所を顯して、往生の一大事を示すのみを所用とする故に、斷證の次位時劫の遠近等の事をば、諸教の性相にゆづりをきて、此家には沙汰せざる也。抑々一切の諸佛にをの〳〵本迹二門まします。本門とは無始本有の佛性なり。迹門とは今日の釋迦の伽耶始成の如し、此伽耶始成の當體即ち久遠實成の古佛と冥合する時を、三身滿德の如來とは申すなり。然に今の彌陀は、此諸佛道同の位の本迹をば、倶に本門の所攝として此上に別願縮滿の正覺を成じ玉ふ。是を他力不思議の迹門とす。

【三身滿德】法身、報身、應身の三身が圓滿に具足したる佛德をいふ。

【五】能讚所讚の諸佛を明す。

然らば即ち前の不離一體の本門と今の十劫正覺の迹門とを取り合せて、阿彌陀佛の不離一門とす。而も本迹に對よりて謂はれ、本は迹より尊ずる所なる故に、迹門も本門に一つにして寂滅已來の正覺なるべし。然を十劫と云ふ、十に義理の意あり。是は時分なり。是れ即ち佛の正覺と衆生の往生とが但時に成じて、滿足したる處を十劫とは説きたる也。諸佛も皆本迹不二にして、正覺を成じ玉ふとは雖も、共れにたゞ、自證佛果の位にて、いまだ衆生大悲の方は成せざる故に、滿足の如來と申すべからず。今の阿彌陀佛の正覺は諸佛通同の三身滿德をも皆成の覺體に歸めて、以て衆生の往生の上に南無阿彌陀佛と顯に結ひたる故に、此南無阿彌陀佛の六字の名號が、衆生往生の體にてもあれ。彌陀正覺の體にてもあり、諸佛正覺の體にてもあり、是れ正しき三世諸佛出世せずんば終ひて正覺を成ぜじの願成就の體也。故に十劫と云は往生と正覺と一時に成就し、圓滿したる謂なる故に、十劫正覺とは但は南無阿彌陀佛正覺にてあるべし。是れ即ち本門につれてきはめる、皆成の覺體の方を番々出世の諸佛面々に、十劫正覺十劫正覺と說き玉ふ。故に過去に聞く人も十劫の昔の往生正覺と聞得し、現在に聞く人も十劫の昔の往生正覺と領解す。未來に聞かん人も亦復是の如し。故に是は芥子盤石劫の數によせて沙汰する位の劫に非れば、釋尊出世の時代までを數へて、十劫と說玉ふには非る也。」

【五】問『三世の諸佛彌陀に依て正覺を成ずる時は、衆生往生に極りて南無阿彌陀佛と顯るゝと云はゞ、諸佛皆所詮の體となり玉ふと聞へたり。爾らば此時は、何なる諸佛の又別

にをしまして、誠實誠實とは能詮し玉ふや。」

答「其旨は凡そ上來に顯れたり。一切の諸佛に各々三身同證の方あり。覺他窮滿の密意あり。三身同證とは各々に出世して衆生を敎化し玉へる口密說法の方なり。但し佛々出世しては必ず先づ聖道敎に約て、偏に自力得道を勸て眞如の理を顯し、次には淨土門に來て、來迎の敎を開て願力得生を敎ふ。然らば則ち願力得生と云も諸佛內證の密意なり。來迎の敎門と云も諸佛能詮の佛語なり。然を其願力往生の方を阿彌陀佛の德として、來迎の行儀と顯して、念佛三昧の位とす。能詮の佛言の方を出世の諸佛の德として、發遣の敎門と開て念佛三昧の位とす。故に諸佛は能詮の化儀を面として、而も內證に穢身來迎の德を持つ。彌陀は穢身來迎の行を旨として、又內證に諸佛能詮の化を具す。何を以て知るとなれば、『阿彌陀經』に阿彌陀佛の事を明すに、始には「十萬億佛土を過ぎて世界あり。名けて極樂といふ。其土に佛有り。阿彌陀と號す」と云て、所證の行儀に順せども、弘通の段に於ては又能詮の化儀の位に說きかへたり。又諸佛をも證誠の段にては、能證の位にあくれども、流通に至ては皆同く我が不可思議の功德を、稱讚すと名け玉ふと說き玉ひたり。明に知るべし、彌陀諸佛と云は一佛の上の報化の二德、一法の上の開合の至實なり。即開すれば定散二善十六觀門にて、諸佛能詮の觀佛三昧の位也。合すれば其是十念口稱南無阿彌陀佛にて、所詮の佛體念佛三昧の位なり、是れ定散の二法、念佛の一門なり。佛々に於て此二德ましまして、而も二德倶に、觀想の我等衆生の上に來り、極りて一心に圓融して

【六】今時の衆生往生の安心を領解すべき法を明す。

【王宮耆闍】王宮は王舍城、耆闍は耆闍崛山。

淨土に往生するを體となすと述し玉ふ。故に自覺覺他覺行窮滿の如來とは申すなり。」

【六】問『佛出世し給はざる今の時の衆生は正き能説の教主には値ひ奉らず。爾らば如何として往生の安心を實の如くには領解し決定すべきや。』

答『此事をば韋提希夫人、釋尊に問ひ奉つれり。『觀經』に云「一時に韋提希佛に白して言さく、世尊、我が如きは今佛力を以ての故に彼國土を見たてまつる。若し佛滅後、諸の衆生等は濁惡不善にして五苦に逼らるむ。云何が當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべき已」如來卽ち此請問を答て、正宗十六觀と説玉へり。此佛答の定散を、善導和尚玄義の第五の門に料簡し玉ふに、能説は如來、所説は定散と云て、教主と法門とを、二にはわけ玉へども、意は唯だ教主も所説の位に極りて、見説一同と成ずる『觀經』の法門なる故に「所説を明にし定散二善十六觀門」と釋して、所説を聞くが即ち、諸佛を見るにてはあるぞとの玉へり。加樣に料簡し玉へる意も、此『觀經』は王宮、耆闍の兩會の正説が都合する時、必ず一部の義は成就する也。然る故は王宮の時は、能説は如來、能聽は阿難なり。耆闍會の時は又、能説は阿難、能聽は如來なり。然るに今此教文とは、四十八願の中の第十七の諸佛咨嗟の本願に酬て、三世の諸佛の内證外用の功德も、極樂の依正二報の莊嚴も皆悉く所説の位に成じ極りたる故に、所説を聞く處に即ち、一切の如來をも、極樂の莊嚴をも見て、無生の益を證す。此故に、是を見説一同の異方便の教とは云ふ也。是と云ふも此經は、教主の方に今始めてたくみ出し玉ひたる、私の智德に非ず。本より願體に二尊

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌツタラサミヤクサンボデ (Anuttarasamyak sambodhi) 無上正等正覺と譯す。佛の極まりなき無上のさとりをいふ。

【澆季】末世に同じ。

一教と成じ玉ひたる、諸佛誠實の佛語、聖力冥加の解了也。此道理を能く證得して、異方便の智惠になり、歸りたる人にてだにもありなば、いつの時如何なる人のなにと説とも錯は有べからず。此道理を顯さんと王宮、耆闍の兩會に於て、能聽能説を打羣へて、如來の說き玉ふにも、阿難の說くにも、所說の體には勝劣なき事を明す也。但し阿難の傳說に錯りなしと云事は、「觀經」に限らず一代の說教同く然也。但し諸經は皆自力得道を勸る故に、必ず教行證の次第を經るなり。其次第とは顯示に於て漸頓顯密等の不同はあれども、何れも先づ教の場をとほりて、其上に修行を送りて、其修行の功力を以て、證道をば得るなり。故に「華嚴經」に云く、「若し人多聞行と雖も若し修行せずば不聞と同じ」已上。然るに阿難に錯りなしと云ふも、佛教相承の事迹なり。行證は佛に及ぶべからず。故に又「法華經」に云く「爾時、佛阿難に告げたまはく、汝來世に於て當に佛と作ることを得べし」已上。又云「我と阿難とは等しく空王佛の所に於て同時に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に勤めて精進なり。是故に我已に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。而に阿難は我法を護持し、亦た將來の諸佛の法藏を護り、諸の菩薩衆を教化し成就す」已上。阿難は既に行證たらずして、成佛の則、延たるを以て知べし。未來永々に於て佛教を習ふ人の中に、教の如くに教を習ふ人は希なるべし。設ひ教の如くに教をならひとづくることありとも、其上の行を勵ます人は又希なるべし。縱ひ又修行をば、形の如くになすとも、理を證ずる程に行ぜん人は都てあるべからず。故に自力得道の佛法は世澆季に

【七】念佛門には安心起行作業を至要とし教行證の次第を經ざることを明す。

くだるにしたがひて、説聽共に錯り多かるべし。然るに今此『觀經』は、地體本願に教行證同く教の位に極めて、見證一同と成じたる、佛音の所説なる故に、所説を聞く所に即ち報身報土を見顯して、無生忍を證する也。故に經に云ふ『是語を說きたまふとき、韋提希、五百の侍女とともに佛の所說をきゝ、時に應じて即ち極樂世界の廣長の相を見る。佛身及び二菩薩を見ることを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて廓然大悟して無生忍を得已』。既に衆生の方の因行の功もなくして、出離得脫の果徳を蒙る故にこそ、諸教にかはる他力不思議の頓教とは申す也。此故に、在世の阿難の如くにも、未來の知識の傳ふるにも、教行證倶に錯り有べからず。此故に『觀經』にかぎりて、如來の在世に、阿難傳說して、佛と阿難とを一位せしめて、雙標二意と釋するは、未來の衆生と一位せしむる意也。然らば淨土の教法は耳を具て聞く德だにもありなば、何れの時の衆生も必ず往生は成ずべし。故に『萬年三寶滅するとき、此經住すること百年、爾時一念を聞くもの、皆當に彼に生ずることを得べし』と釋せり。然らば知るべし、『觀經』の所說に値ひて決定往生と信知する處が、即ち諸佛にもあひ、彌陀にもあふにてある也。」

【七】問『往生禮讃』に安心起行作業を舉て、其中の起行を釋して云はく『五門既に具しぬれば定で往生を得。一一の門、上の三心と合して隨て業行を起せば多少を問はず、皆眞實の業と名く』已上。此釋の意は、安心起行和合する時、必ず往生の一事をば成ずるぞと也。然るに助業の起行は、佛恩報謝衆生利益の爲にして、自の往生の爲に非ずとは雖も、此の

【世饒王佛】世自在王佛に同じ。ローケーシュヷララージャブッダ(Lokesvararaja-Buddha)一切法に於て自在を得、世を利益する佛なるが故に此名あり。

如く助業の起行なくば、往生は不可と明す時はまはりては唯だ自の往生の爲の起行になると覺へたり。若し爾らば、淨土宗にも教行證の次位は有るべし、如何。」

答「本より三心四修五念は往生を成ずる安心起行作業なれば、此中に、一も闕ては叶ふまじきこと勿論なり。上に云がごとく、安心と云は法體の功能なり。起行と云は機情の功力なり。作業と云は前の安心、起行の二門を成ずる慇重の志也。故に「四修の法を行ぜしめて用て三心五念の行を策にして速に往生を得しむ」と釋し玉へり。是即深心正定業の志を以て安心をも證得し起行をも勤修して、速に往生を得るぞと云ふ意なる時に、安心起行の二門は尤も往生の至要なり。譬へば鳥は兩翼を以て虛空をかけり、車は二輪を備へて千里をゆくが如く、我等衆生は必ず安心起行の二德を以て、當に涅槃の城には至るべきもの也耳。然に今釋尊所說の『觀經』に値て、願力所成の往生を聞開て、我等が心中に二尊一致と證し、納めてもつ時即歡喜の心が起りて、大悲深重の佛恩が思ひ知らるゝ故に、如說如法に行じて、速劫果劫の重恩を報じ奉る。是を助業の起行とは云ふ也。佛恩報謝の志を起す、是が他力證得の色にてはあり、聖道教の佛法は往生も成佛も皆機情の功力を以て成ずる故に、遂には佛恩を報ずべき道理はなし。然に今是は彼の阿彌陀佛衆生往生の爲に、世饒王佛の所とに於て、四十八願を起して其上に、兆載永劫の間、難行苦行して總別俱に遂に衆生往生に極りて、南無阿彌陀佛と成じ玉ふ。又釋迦諸佛は番々に出世して種々の方便を以て、無量阿僧祇劫より以來た一切衆生を調養調熟して今此の他力不

【八苦】生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦。【五苦】八苦の中の五種、通常前の五を數ふ。

恩徳の至極の名號に造りとゞけ玉ふ。是の如く、彌陀如來の慈悲大悲の恩力に依て、世間出世の善根倶にたき難知作意の我等凡夫、即ち生死の火宅を出でて、速かに清淨高妙の極樂に往生して、無上菩提を成就することは是れ未曾有の不思議也。加樣の道理を只今我等が心中に領解し會得する所に、即ち肌をたゝき、涙がふりて廣大深重の恩德が徹著信樂せらるゝ故に、知恩報德に命をも捨ち、命をもよみて大悲の本意に隨順し、信する也。若し此の如く佛恩の由來を思ひ知ることゝなくば、領解する所の往生は、他力とは會得せざるになる也。故に今云ふにはげます起行は、他力往生を會得したる其色にてあるなり。然らば則ちも決定往生の他力安心と、此處修習の自力起行とが、相應して往生、成佛俱に達する處を一左門既に具しぬれば定んで往生することを得。一々の門上の三心と合して隨って業行を起せば多少を問はず皆眞實の業と名く」と釋し玉へり。明に知るべし、今此起行は、報を聞く位に、即ち往生を決じ勵してをいて、其他力往生を、喜びほむるふるまひにてある故に、自の往生の爲の修行とは云ふべからず。然らば何ぞ諸教の樣に教行證の次第を經と云ふべきや。西山上人の云く「淨土宗には教聞證と次第す」と云。此意は教を聞て、即發願す。發願する所に行體を見るなり。是も意は嘆前の義と異なき也。所謂自證をば教の位にて成じぬ。又化他に趣て起行をはげまして、此化度衆生を以て、還て佛恩報謝に備ふる也。故に善導和尙の云く「此娑婆生死の身の八苦五苦三惡道の苦等を、捨んことを得んと欲して、聞て即ち信行せん者には身命を惜まずして急で爲に之を說け、若し一人も苦を

【八】佛恩報謝の起行に就て諸善と念佛との勝劣を明す。

捨てゝ生死を出ることを得しめば是を眞に佛恩を報ずと名づく云云。』
【八】問「佛恩報謝の起行には、諸善と念佛と勝劣何れぞや。」
答『衆聖の本心に相應するふるまひは、何事も皆佛恩報謝の修行なるべし。其本心に叶ふ事とは決定往生の安心を分明に證得して、其證得往生の體を即ち機情の三業にかけて「願くば諸の衆生と共に安樂國に往生せんと行ずるを、即諸佛本願の意に稱ふと釋せり」然に今の阿彌陀佛に總別二種の功德まします。別願とは即ち四十八願同く衆生の往生に限りて、南無阿彌陀佛と成じ玉へる覺他正覺の體也。總願とは兆載永劫の修行に願て、自正覺成じ玉へる無量壽佛の體也。但し今の阿彌陀佛は總別倶に別願に顯して、願行具足の南無阿彌陀佛と成ずる覺他大悲の方を面として、自覺修性の三身門の功德をば裏に存して持玉へり。又諸佛は各自正覺の三身門の功德を面にふるまふて、覺他所成の南無阿彌陀佛の方をば、内證に隱してもち玉へり。但し自正覺の三身門の功德の方について廢立傍正助正の三重の位あり。謂る一には諸佛三身門の功德は皆是れ聖道門の修法にて、自力難行道なれば、我等凡夫の行に非ずと、簡て彼阿彌陀佛の覺他攝生の利益、名號に歸するを、廢立の重とは云なり。二には又彼の三身門の修法を、皆悉く「一願」の本誓の所說と改めかへして、名號得生を證じ明す淨土の要門定散と會通するを傍正の重と云なり。三には前の傍正の重にて、他力の往生を證得して、其安心正定業の上より、自力三業門の起行に出でゝ、法報應の三身の功德を如法如說に修行して、是を以て法界衆生往

【九】一向專修の行者は戒相を守る要なきや否やを明す。

往生極樂と廻向するを、助正の兼とは言なり。今此の助正の兼について助業の念佛正定業の念佛あり。正定業の念佛とは、自覺覺他倶に覺他に極りて即便往生と成ずる位の、南無阿彌陀佛也。助業の念佛とは諸善隨一の諸佛同道の位の名號なり。是即ち一切の諸佛の内證外用の自利利他の功徳も、恒沙塵數の無量無邊の教文も、則ち大悲の覺他往生に極まる時は、唯圓行具足の南無阿彌陀佛の一法一行となりて、全く二法對待の差別あるべからず。又此一種の行儀が自覺隨緣の功徳に出る時は、念佛諸善定善散善聞佛法等とわかり、或は理智行の三門、戒定慧の三學、六度の萬行乃至恒沙無量の功徳と續るべし。故に此開合橫竪の二は、倶に諸佛諸聖の本意也。入門次第の時こそ、暫く教文に淺深をたて、功徳に正傍を分れども、所詮の一法に達して、正定業の安心決定したる其上より助業の起行に立ち出でゝ、自力三業に修行する時は、諸善念佛定善散善等、其利益皆等同なるべし。然らば則此時は、一善一行を修するも、萬行圓備の功徳、長時不斷に行ずるも、悉地成就の善根にて皆等しく淨土成佛すべき眞實の因業となる也。前に出す「五門既に具しぬれば定んで往生を得。一一の門上の三心と合して隨つて業行を起せば多少を問はず皆眞實の業と名く」の釋は即ち此意なり。故に決定往生の安心の上の助業の時は、意樂に任せ、時宜に隨ひて念佛諸善何れをなりとも行ずべし。此故に選擇には廣く異類の助業を出したり。其旨前に云ふが如し。知る可し。

【九】問「一向專修の念佛の行者は、戒相をば護るべからずと云ふ人あり。此謂れあるべき

や。」

答「加樣に申さるゝ人は釋家の御證道について安心起行の分ちあることを能く分別してをいて、戒行無益ときらはるゝやらむ。若し爾らば左樣に云ふべき方もあるべし。然る故は佛法廣しと云へども、戒定慧の三學をば出でず。此三學も覺他の大悲に歸する時は、南無阿彌陀佛の一法なり。故に『觀經』の下輩の人戒定慧の證法を聞て、彌陀名號と證得せり。是れ即ち諸佛三身門の隨緣八萬の教行を、皆『觀經』の要門定散の位に說きかへして、觀佛三昧の所詮と顯す。又此定散二善十六觀法は、遂に念佛三昧の一行に、落居する所を聞て、罪人既に彌陀の名號を聞て即ち罪を除くこと多劫なりと領解す。是の如く一切の萬法は唯南無阿彌陀佛の一體ぞと得て持ちたる他力往生の安心の當體にては、何ぞ別に戒相を守り、觀法をこらし、惠解を開くと云ふことのあらん。行住坐臥の四威儀造次顚沛の模樣さながら頓行具足すれば、必ず往生を得る位なる所を「一心に專ら彌陀の名號を念じて行住坐臥時節の久近を問はず念念に捨てざる者是を正定之業と名く」と釋するなり。然れども、又三業の起行門にかへりて、衆生をも利し佛恩をも報ぜん時は、事相の律儀に居して專ら戒相を守るべし。聖道淨土俱に佛法は持戒を以て體とす。就中淨土の佛法の實義は、安心起行俱に皆戒體に極るなり。其故は此宗の意は、厭穢欣淨を以て宗の體とす。厭穢欣淨とは是れ止惡修善也。戒行亦是れ止惡修善也。然らば則ち安心の時は自力三業の我々執着を捨て覺他窮滿の南無阿彌陀佛に歸する所、即ち是れ止惡修善なり。故に是を戒行の

【和上】師には或は和上をさけ受戒の時の師なり。
【一得永不失】大乘の戒は一度戒體を發得すれば再び退失することなきをいふ。
【得無生】無生法忍を得ること。
【上品懺悔の起請文】[illegible]に出す[illegible]に出づ。

斷とす。されば一戒には持戒一と云ふ利益あり。即ち戒に[illegible]が如く持戒作法に止悪修善の故に、或は又或は持と云て行ずるとは云はず。即ち和上の示す所を聞て心中に能く持と領納してより後は、或る[illegible]事なきを以て、一得永不失の金剛寶戒と名く、[illegible]善知識の戒を[illegible]して、[illegible]生して[illegible]上には持時不斷の[illegible]なる語に、[illegible]說に[illegible]しぬれば行として成ぜざるなし」と釋せり。然れば安心の時は往生の[illegible]道の[illegible]ら[illegible]なれば、[illegible]に戒相を守ると云ふ事有る可からず。又三業の[illegible]行にかへる時は浄土[illegible]の位に居して、心を極樂淨土に寄し、身を娑婆世界に遁しめて、[illegible]はしば諸の衆生と共に安樂國に往生せんと行ずる故に、[illegible]に戒相を守りて行ずべきなり。故に[illegible]上人も[illegible]の起請文に云く、「一、念佛門に於ては戒行を[illegible]と雖も專ら[illegible]肉を[illegible]心を[illegible]し其を守る人をば總て[illegible]と名づけ、[illegible]を持つ[illegible]をば[illegible]行と[illegible]する事を[illegible]可し。」又同師の『金剛寶戒章』に云く「戒を受けざれば人と名づけず、但だ是れ畜生也。況や比丘比丘尼の名を得んや、故に諸佛祖の遺偈として之を受持せば更に[illegible]行と[illegible]らず云云」然らば則ち清淨にして戒を[illegible]者乃ち正法を聞くことを獲と說く、時に知るべし。今生に[illegible]力不思議の正法に遇ふとは、[illegible]作生の[illegible]力の[illegible]なり。[illegible]を報すべし。[illegible]を忘るゝによりて、[illegible]上[illegible]下等の一切の法則はみだりに破りゆく也。[illegible]らば何ぞ畜生と異ならん。但し[illegible]立[illegible]正助正の三[illegible]を以て安心起行の[illegible]道を得たる人の前には、捨るも取るも相違有べからず。さもなき常[illegible]の人の[illegible]として念佛の行者は、戒相を守るべからずと云

はんは例式の本願誇りなるべし。早く耳をあらひ、目をふさぎて、速かに誹謗すべし。」と云ふ人あり、其謂れあるべきや。」

【一二】問ふ、自他宗にわたりて相互に謗法の是非を指して高論に及ぶことは無益たりと云ふ人あり、其謂れあるべきや。」

答ふ、高論とは是れ邪を破り正を顕す所詮なり。何ぞ無益と云ふべきや。故に佛在世よりこのかた、皆問答往復して、其正義を建立し玉へり。但し諸宗各其所を專らとして餘教を傾とす。爾る天竺には護法清辯の空有の諍ひ、震旦には南北教家の難質の異論、我が朝には、弘仁の代には律の大小を諍ぜられ、天暦の御宇に諸宗の浅深をしらべらるゝ。是れ即ち其風儀は、驕慢偏執に住して諍論するに似たれども、意は偏に興隆佛法のため、利生方便のたくみなれば、諸菩薩も是を随喜し、諸天善神も影向して論場の眠をさまし給へり。されば昔三井寺の大阿闍梨の御房坊ありしに、慧心の僧都来て是に尋ね玉ひき。阿闍梨の言給はく、「此間かゝる事に患になやまされて行法既に退転しぬ。」かくて言くをはりなば必ず地獄に堕在すべしとおなしみ玉ふ。時に僧都さては地獄と云ふ所の侍るやとかたり玉ふ。此言を聞として、阿闍梨は地獄の有る旨を云玉ふ、僧都は地獄のなき由を立て玉ふ。さる程に阿闍梨病の床よりをきなほりて、問詰往復両三時ばかりに及べり。時に天井に声ありて云く、「あなありがたや、かゝる貴き行や、承ると思て參じ侍る所に、此間はさることもましまさずしてありつるに、唯今此論のいみじき事を聴聞申す事のうれしさよ、今はいとま申してまかりかへりなむ」と云ふ。さて其時よりやがて阿闍梨の御心地さは〳〵となを

【一〇】一向專修の行者自他宗の是非を論義することの是非を問す。

【護法】唯識十大論師の一人、ダルマパーラ（Dharmapāla）南印度ダラヴィダ（Dravida）国のカーンチープラ（Kāñcīpura）の大臣の子、出家して那爛陀に帰り、世親の有宗系をつぎ清辯と空有の大論争を演ず。寿三十二にて寂す。

【清辯】印度の人、バーヴァヴィヴェーカ（Bhāvaviveka）龍樹提婆の空宗をつぎて護法の有宗と論諍せり。

【一三】慈恩大師、支那唐の人、玄奘三蔵の弟子となり法相宗を弘む。

【一四】伝教大師最澄、入唐して天台を学び、帰りて大に天台宗を宣揚せり。

【布袋和尚】支那明州奉化縣の人。名は契此。後梁貞明二年三月明州嶽林寺に寂す。

り玉ひぬ。此れは是れ古へ智行習ありし人々の一念の執心によりて魔道に落ち玉へるが佛法のことはりを眼て心地の妄執をとらけん爲に、久修練行智徳高貴の處に來て問ひ玉へるなり。故に問答對決はこれ衆生の惡見を對治して、無上の直道を成就する破邪顯正の利劍也。何ぞ論義無益と云ふべきや。但し世、澆季に及ぶに隨ひて學者我慢諍に趣く故に、能破所破倶に邪執よりをこり、正論非論只喧嘩に屬せり。然るに叡山の惠心の僧都東大寺の永觀律師等の此道は、代も直に人の心もうるはしかりけるやらん、惠心の「往生要集」には三重の問答を起して十念の勝業を弘め、永觀の「十因」には普賢觀音の悲願を擧へ、勝如教信が往蹤を引て念佛の勝れたる由を讃む。而る其比諸宗の人々は、惠學林をなし、禪定水をたたふ。若し念佛、虚妄の法ならば、其時破滅せらるべし。然れども其時の人々は、彼等の章疏の邊を分明に開き見て佛法の正理にまかせらるゝ故に、皆是を信伏し玉ひき。是によりて念佛の利益安全に紹隆せり。然るに近代の學者達は佛法を私の邪執に引き落して、人情に任せらるゝ間、黑谷の上人の念佛興行已來は南都北嶺の大衆等、丹府をこがすあまりに讒言を捧げて念佛往生の法を破却せんとすること度々に及べり。是偏に三毒内にもよほし、四魔外にあらはるゝ故なり。是の如きの砌には邪神亂入し佛菩薩遠離し玉ふ故に、愚癡の情を以ては論義都て無益なり。されば加樣のありさまを鑒て天歷已後は諸宗の對論を停止せられき。是れ則ち口には佛法を論談すれども、心には人我情識を存する間、佛法還て輪廻生死の業因となる也。故に布袋和尚云く、「喧嘩鬪諍して論義益

無し」又黑谷の上人の云はく、「無智の身を以て有智の人に對して諍論を致さることを停止すべし云云。」加樣の趣の方よりして、論義無益とは申さるゝらん、其義ならば尤も然るべし云云。」

【二】問「大乘の奧義を學する人なりとも、若我我の見に落て自證勝他の思をなさん人は尙惡趣に輪廻すべきや。」

答「我我の見とは是れ人我法我なり。淨土には是を自力執情の見と云ふ。故に聖道淨土俱に此見に住するをば、外道と名けて、佛法とは云はざる也。但し世に上代末世を論じ、人に利根鈍根を判ずることは一往然なりと云へども、必ず上代の人なればとて、悉く利智精進に有るべきに非ず。何ぞ偏ちに上代をうらやむべき。然に上代末世は外に非ず。唯學者の一心にあるべし。縱ひ末世の代なりとも道に志深くして身命を惜まず、急進に觀まさば必ず悟を開くべし。故に濁世の中なりとも、眞如の本法に契當して、其上に化他方便に出る時、無著の中に假に著を立てゝ法に是非をあらそひ、機に利鈍を分ることとあるべし。此は是れ學者をして佛法の眞理に至らしめんとする善知識の手段なれば、我我の見には似たれども愚人の見には大いに替るべし。大乘の法を學て中道一實の妙理を言語にはさやづれども、但だ心地の妄想さめずして人我法我をたくましくするを愚人と名くるなり。然るに眞如妙智の所に自他彼此のわかちもなし。賢愚利鈍のかはりもなし。頭頭物物の當位さながら常住妙法なり。故に不輕菩薩は一切の天魔、外道、惡人、善人皆同じく禮拜し

【二】大乘の學人我々の見を起して自證勝他の思をなさば惡趣に輪廻すべきや否やを明にす。

【我我の見】玆に人我法我なりと釋す。共に常一主宰の實體ありと執するもの。人我は衆生に永遠不滅の我ありとするもの、法我は一切諸法を實在なりとするもの。

【不輕菩薩】常不輕菩薩の略。法華經に出づ。

ての玉はく、「我説く汝等を護ふ、唯し法を讃せされし所以何となれば汝等は菩薩の道を行ずればなりと云云。」此位に至りたる人を智者の道人とは申すなり。されなくして只深く我我の見に著して佛法に向ひ、自他にわたりて名聞利養を存せしは佛法にはあらず。何ぞ生死を離れん。故に善導和尚の云く、「口には布空を説けども、心には偏を行ふ。是非人我、山岳の如し。此の如きの人には近づくべからず。近づけば即ち長劫の苦に沈溺す」已上。但し是の如き等の著相は、皆是れ實有の凡夫の本性なり。然らば只今我等が如として、此の著心をとらけんとせば、氷を以て氷をとらけんとするが如くなるべし。豈能く著相離けて眞空寂寞ならんや。故に『安樂集』に云く、「若し身不退に居しては去、穢悪の衆生を化せんが爲の故に、能く染に處るに染せられず。憂に逢ふに變せられず。鵝鴨の水に入るに、水濕すこと能はざるが如し。此の如きの人等は、能く穢に處して苦を拔くに堪へたり。若し是れ實の凡夫ならば唯恐らくは自行未だ立せず、苦に逢はば即ち變じなん。彼を濟はんと欲せば、相與に倶に沒すべし。喩へば雞を逼めて水に入るゝがごとし。豈に能く濕はざらんや。是故に、『智度論』に云く、若し凡夫發心して即ち穢土に在りて衆生を救濟せんと願ずるをば聖意許し玉はず。何の意ぞ然るとならば、龍樹菩薩の釋に云く、譬へば四十里の氷如し一人有りて一升の熱湯を以て之に投ずるに、當時は少しく減ずるに似たれども、若し夜を經て明に至りぬれば、乃ち餘の者よりも高きが如し。凡夫此に在りて發心して苦を救ふも、亦復是の如し。貪瞋の境界違順多きを以ての故に、自ら煩惱を起して返て悪道に墮る故也」已上。」

【二】念佛の行者は持戒、犯戒、道心無道心を區別して自他の是非を論ずまじきことを明す

此文を以て明に知るべし、實業の凡夫の爲には、娑婆の得道は都て難解難入なり。此不相應の難行を閣いて、先づ本願易往の道に入て極樂に往生して、彼にて不退を證し眞理を開くべし。本より著相憍慢の輩ら、起惡造罪の者の爲に起し玉ひたる本願なり。委くは上に云ふが如し、爰に當世の異學異執の族ら、多く淨土の佛法を嘲て云く、「當意卽妙の元意をしらずして遙く聖力を賴み、遂に他方を望むは愚也」と云。此嘲り返て自の上に極ると覺へたり。其故は適々大乘の佛法に趣かるゝ事は、是れ有難き結緣也。爾らば、同じくは機法を校量して以て相應の佛法を行じて疾く無生の本際に叶ひ玉へかしともどかしく存ずる也。是と云も所詮道の「心」の實在ざるによりて自の涯分をはかり玉はず、是をばかしこき御意と申すべきやらん。貪求財色の凡夫として或は自直に卽身の道に至らんと求むるもあり。或は他に從て極樂に生じて悟を開かんと趣くもあり。賢愚何れとやすゐ。智者ことはり玉はん耳。所詮は加樣の事を申すも我我執著の衆生に於ては本願不思議の强力に非ざるよりは永く生死を離るまじき事を顯さんと也云云。」

【二】問『近來の念佛の行者の中に吾は持戒也、吾には道心有と云て他人の破戒をあなづり、無道心をそしることあり。是は苦しからざる事やらん。』

答『道心と云ひ持戒と云ふ事は委細に上に云ふが如し。今淨土宗の意は彼の阿彌陀佛十方衆生平等往生と誓て卽ち一切衆生の上に念佛往生と成就し玉ひたる所をさして持戒とも號し、道心とも云ふなり。然らば何ぞ戒に持犯をわけ道心に有無を論じて自他の是非を

【眞空和上】眞空は信空の誤。法蓮房信空のこと。とのこと勅傳第三十七卷に見ゆ。

見るべき。本より[illegible]の僧には、自他の相なければ是非を説くべき様はなし。此位に相應する人を一向専修の念佛の行者とは云ふ。此外に持戒道心と云て別に有るべからず。其上、僧の威儀の作法に准じても、他の非を見ることは努々あるまじき事なり。故に『涅槃經』に云く、「末法の時の人、俗の形となりながら左右の手に男女を携へて酒肆にひたる者あるべし、然れども我が弟子と稱して衣鉢を受けたる故に、漸々に増進して終に必ず成佛すべしと云々。」是文の如くば、縦ひ破戒無慚の僧尼なりとも、そしるべきに非ず。故に『西方要決』に云く、「僧寶とは破戒無慚の流に等心に敬を起して慢想を生ずること勿れ」已上。然るを他人の過を説くは是れ第六の重を犯するに非ずや。故に黒谷の上人の云く、「破戒を嗤るは還て破戒也。無道心を嗤るは倍無道心也。更に道心無きが故に矣。」眞の念佛の行者は只非を放下すべき道理の身なり。其故は、淨土の行法は名に非ず、利に非ず、唯極樂往生の一道を期するばかりなり。故に眞實に菩提を求る人の歸する佛法なり。されば東大寺の永觀律師は春秋四十二の御時三論宗の學徒を遁れて孤山の麓に居を卜て自行化他念佛往生を以て絆とす。法然上人は承安五年の春御年四十三にして叡山の名峰を隱れて吉水に籠居して淨土の法を弘め玉ふ。其時眞空和上法然上人の御前に詣て申し玉はく、「古來の先徳に皆遺跡在ます、而るに今一宇の精舍なし、御入滅の後は何れの處を御遺跡とすべきや」。上人の言はく、「跡を一廟に卜れば遺法周ねからず、念佛三昧の興行は愚老が一期の勸化なれば賤男賤女が柴の戸、海人漁人の蓬の苫屋に至る迄も念佛を修せん砌が

【空也】京都の人幼にして尾張國分寺に入り自ら空也と稱す。遊化を好み天下を遊行す。天祿三年九月十五日寂。壽七十。

【二】淨土の教獨り遁世の宗なりや否やを明す。

予が遺跡にてあるべしと云。是偏へに着心を遁れ名聞を離て出要の路を專にせんと也。吾朝の念佛の法は、凡そ上宮太子の御時代より流布すとは雖も、正しく佛法の一道を定で淨土宗を立することは法然上人の御興行なり。當に空也惠心等の高德多く在すと雖も、法然上人を以て始祖とす。爾らば末代の念佛の行者は皆上人の流を汲むなるべし。其流れを汲み乍ら、何にして世に交りて自他の是非を見るべきや、故に念佛の行者たらん人は唯萬事倶に捨てゝ一向專念の位に成り歸り住ふべし。是の如く一向專念と得たる自證の上に化他の大悲に出でゝ他を誘引せんとする時は、折に隨て或は褒ていさませ、或は恥てかなしまする。是等は皆知識の善巧方便なれば、褒貶倶に讃にはおつべからず。故に法然上人の云く、一佛性を見る大乘修學の人は讃毀時に依る云云。若し此位に居して他の破戒無道心をそしり嘲はんはくるしかるまじきなり。」

【二】問「諸宗專ら皆出世の佛法を習ふ故に皆同じく遁世の義なるべし。何ぞ取り分け淨土を遁世の宗と云ふや。」

答「世法をすつるに三重あり。一には世間佛法、二には聖道淨土、三には他佛出離方なり。一は世間佛法とは聖道淨土の諸宗同じく先づ人天の世法を捨てゝ出離解脱の佛法に歸するなり。又佛法に入るについて宗々の趣、各々に替れり。或は小乘の見を離びて大乘の法に移るもあり。三乘の權を出でゝ一乘の實に居するもあり。遮情の門を去て表德の實に安ずるもあり。教文の情を擲て自己の面目を守るもあり。然れば眞言止觀華嚴禪門等の諸宗に

【笠置の解脱上人】貞慶のこと。左少辨藤原貞憲の子。興福寺覺憲につきて法相を學び、廿九歳にして山城笠置寺に隱る。建保元年寂。壽五十九。解脱上人はその諡號なり。

は有をもすて、無をもすて、亦有亦無をもすて非有非無をもすつ。都て世法佛法にもあらざる不有常住の處に至る故に是れ大遁世の義なるべし。遁世とは一切の妄想をのがるゝことゝ也。妄想とは先は家業の世務たり。總じて云ふ時は小乘外道乃至三乘の階次迄も皆是れ妄想なるべし。然るに凡聖未分の所に到着したる人は是等の妄執を遁るゝ故に即身即佛とも云ひ、直入如來地とも讃ずる也。但し末代劣根の凡夫に於ては、此悟を得ること永く叶ふまじきなり。下劣の情を以て高位の佛法を學すれば、佛法返て凡情の高慢となりて名利の價に募るなり。上代の事は知らず、末世の有様を聞及ぶに皆出離の要法をば修行せらるゝ樣なれども、志は只偏へに官位階級にあり。故に永觀律師の『往生十因』に云く、「眞言止觀の行は道幽にして迷ひ易く、三論法相の教は理奥うして悟り難し。唯精進の者にあらずんば何ぞ之を修せん。聰明利智の者にあらずんば誰か之を學せん。權家顯定して、其營を賜ひ、學徒競望して、其欲を増す。三密の行に暗くして忝くも遍照の位に登り、毀戒の質を飾て、詐て持律の職に居す」已。又笠置の解脱上人の云く「遁世大乘を學すれども無上の法寶を費して還て名利の價を募り、世間の妙樂を稽めても猶煩惱の毒を増す。出離の指南徒に生死の海に沈み、菩提の明月空しく妄執の雲に隱れぬ」已。是等の語を以て知るべし。濁世の凡夫僧に於ては縱ひ大乘の眞理を學するとも遁世の義はなき也。

二に聖道淨土とは我等著相の凡夫は自力自己を以ては得道叶はざる故に、即ち聖道門を捨てゝ淨土に歸して佛願力を賴む也。然るに聖道門には座を起たずして能く成り佛事を一

切すと謗じて、娑婆の外、我身の外に別に佛法を立てず、此位にて、彼の未得謂證の人々念佛の行者を愚癡闇鈍と哂へり。總じて世間に皆人自然に淨土宗は賤劣の者、念佛は不吉の行と思ひたり、是れ實に世を遁れ名利を離れたる行儀なれば也。故に實に潤分をはかりて菩提を求むる人にあらざるよりは淨土を信伏すること有るべからず。されば黒谷の上人の云く、「予遁世の當初より、衰老の中比に至て竊に一代の教文を披て倩出離の要義を案するに、顯に付き、密に付き、解情容易からず、事と云ひ理と云ひ、修行成就し難し。一實圓融の密の内には即身是佛の妙觀に疲れ、三密同體の床の上には現世速證の果位を失す。然る間棄し潤分を量りて淨土を願ひ、他力を憑て名號を稱す。誠に往生極樂の教行は直至道場の目足也。有智無智誰か歸せざらん。弘願他力の淨業は諸佛讃揚の本心也。高僧碩德都て讃ぜず云云」既に諸宗を兼學して智慧第一と稱美せられ玉ふ上人、現世の證入叶ひ難しと云て願力不思議の道に歸し玉へり。是正しき世の名利を遁れたる遁世の義なるべし。

三に捨情歸力とは前に聖道をすてゝ淨土に歸すると云ふは尚是れ捨るも歸するも機情のあつかひなる故に宗門の方は自力他力とわかりたれども心法の方は未だわからず。心法わからざる時は佛法も亦わかり難かるべし。故に前には先づ佛法を聖道淨土自力他力と配立しておきぬ。今は亦往生の安心を定むる也。抑、我等が心法につゐて三重の習あり。一には不生不滅の佛性、二には不生不滅の凡心、三には了別歸命の觀心也。前の一は聖道門の意、後の二は淨土門の意也。日來聖道門の時は本有常住の即心佛性とならひしを、今淨

【一四】念佛の行者は住所をかざり、衣服を調へまじきことを明す。

土教の時はそれを引き返して無始流轉の惑障凡夫と發起して、此機の上に乘彼願力定得往生と成じ玉ふと信知する時、願行具足の南無の願心とはなり定まる也。故に此時は我等が三業を以て名號を稱念し、往生を證得すとは雖も、皆是佛願力成就の姿にて、自力の功にはあらず。是を三業の外の他力安心の證得往生とは云ふ也。然らば則ち總じて先づ世間有漏の果報をすてゝ佛法の道に入る。又佛法の中に於て聖道門の難行を捨てゝ淨土の易行に歸す。又淨土門の中について自力三業の功をすてゝ一向專念の處に至る故に淨土宗の意は世間出世の一切を捨離して他力名號の位に居するを以て世を遁れたる念佛の行者とは云ふ也。此土に一切會通の法門あり。其旨は上來に顯れたり云云」

【一四】問「念佛の行者の居處をかざり衣服を調ふる事は往生の障となるべきや」

答「總じて諸宗に亘りて佛法修行の人には在家の事をば皆俗塵妄想と云ひて堅く禁ぜられたり。彼の悉達太子の如きは七寶莊嚴の王宮を出で珍奇殊特の妙衣をすてゝ麁弊を著し山窟に居して道を行じて、其後自ら相好莊嚴の御身となりて靈山淨土に在して妙法を說き玉ひき。一切の僧尼は皆是れ大師釋尊の御弟子也。何ぞ師の先蹤に准ぜざるべき。道眼ひらけての已後に於ては本より煩惱菩提の差異もなく、生死涅槃の分別もなし。一切善惡平等實相也。未だ此位に至らざらん人は、深岸に薄氷をふみ風方に來火を防ぐが如く用心して佛道を行ずべし。古人の云く、「居所は只風雨を禦ぎ、衣食は只身命を支ふ云云。」就中念佛の行者は著相深重の凡夫也。若し世情の業についていろへかざることあらば心必ず其

にひかれ留りて、一大事は次になるべき歟。此故に唯萬事倶にすてよとはすゝめられたる也。但し樂生の意樂區なれば、増進佛道も亦緣によるべし。或は山水石木に意を慰めて往生の信心を増長する事もあるべし。或は詩歌管絃に眠をさまして、稱名念佛の功をかさぬる事もあるべし。或は草衣山林に跡をかくして聖衆の來迎を急ぐ人もあるべし。此の如き等の隨緣發心の義無量也。故に住處衣服等を飾るによりて意偏へに安養の本家にすゝむならば尤も然るべき調へなるべし。但し末世に生を受くる人は皆宿福うすき凡夫なり、此故に、聊かの事に付てもやゝもすれば着をなし慢を起して意變ずること雲の如し。然れば當世の模樣に居處を尋常に構へ、法衣を貴く調ふるも大略は世情の人目をからるゝ分賤と邪推に及ぶのみ也。若し心根も左樣の方へゆくならば大なる往生の障り也。努々恐れ玉ふべし。されば黒谷の上人、善導和尚の外現賢善精進の相、內懷虛假の釋を受けて言玉はく「若し夫れ外を翻じて內に蓄へば祇に出要に備ふべし。乃至、若し夫れ內を翻じて外に播さば亦出要に足るべし云云。」此釋の意は、內には厭離穢土欣求淨土の眞實心を正念堅固に持て、外は愚惡虛假にあれと也。是れ則ち人間の名利を離れ檀越の信施を貪らんが爲めに、外をば不善にふるまはしめ玉ふ也。但し又時に隨ひ機に臨みて內外共に賢善精進にふるまへと云ふ意も此釋にあるべし。然れども、外相外儀の所をば是非共に打ち捨てゝおいて唯偏へに他力眞實心に住して無漏常住の極樂を欣慕するを念佛の行者の安心とは云ふ也。嗚呼慶しい哉、我等終焉の暮には必ず聖衆の來迎に預りて極樂の寶國に往生すべし。其時

【三明六通】三明は宿命明、天眼明、漏盡明の三、六通は天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通の六。

【一五】念佛の行者の佛神に詣づることの可否を明す。

は衆寶莊嚴の大宮に住し、相好光明の莊嚴を飾し、三明六通の智を開て永く法性の虚空にあそばんこと、思へば身心融液して觀喜の涙留り難し、何ぞあへてあだにも穢土不淨の住處衣食等を嗜み愛せん。」

【一六】問『一向專修の念佛の行者は佛神に參詣すべからずと云ふ人あり。左樣の謂れあるべきや。』

答『善知識の攝化は所被機情の色に隨て一准にあるべからず。或は經說を擧して悉地をあをげと勸むる事もあるべし。或は神社に詣でて道心を祈れと教ふる事もあるべし。或は閑處に居して一心を調へよと示す事もあるべし。或は衆事を捨てゝ彌陀佛を念ぜよと授くる事もあるべし。是等は皆隨類得方の一片なり。未だ本意には當るべからず。されば凡そ經論を學するに文義意の三の趣きあり。謂る文の如くに義を解する事あり。文の外に義を取ることあり。義の外に意を詮ずる事あり。而れば一文に衆義を含み、一義に多意を存ずべし。故に『安樂集』に『涅槃經』を引て云く、『一名に無量の義あり、一義に無量の名あり』と。要ず須く偏く衆典を寀にして方に都の旨を曉るべし。小乘俗書の文を案じて義を舉るが如きには非ず已。然らば則ち『大經』には一向專念と說き、『觀經』には繫念一處と說き『彌陀經』には執持名號と明す、此文の意は凡夫聖人得果の徑をも十方淨土の往生をも難解難入と簡て意を偏へに西方極樂に懸て彌陀の名號を念ぜよと也。既に淨土穢土の一切の勝劣を雜行雜善と云て廢捨する上は何ぞ諸佛諸神に向て諸餘の善業を修すべきや。但し今

引く所の三經の文、其相同き樣なれども、其趣各各に替れり。謂ゆる大經の意は、先づ念佛の一行を選擇して以て得生正因の行體と顯し定んとすれば、大小顯密事理定散等の善行を悉く廢して一向專稱彌陀佛名と定立す。故に『選擇集』に云く「稱名念佛は是れ彼佛の本願の行也。故に之を修する者は、彼佛の願に乘じて必ず往生を得、自餘の諸善をば悉く雜行と名く已上。」爾らば定散の萬行を雜行と號する事は、必ずしもにくみ厭ふ分には非ず。所詮の一法を顯さん爲に、暫らく餘法をのぞくる也。例せば『法華經』に「十方佛土の中唯一乘法のみありて二なく亦三なし。佛方便說を除く」と云ふが如し。法華は是れ開會の意なり。何ぞ前前の權を悉く嫌ひはてんや。次に『觀經』の意は彼の『大經』にて一向專念と選び取りて持たる一行一法の功能を讚め顯す也。故に其功能を顯さんとて正宗の初に先づ「繫念一處相於西方」と擧げてをけり。其西方とは、超世の別願に酬て成じたる別所求の極樂也。其別願とは、三世の諸佛の悲他の密意を選擇して、以て極樂國土に三惡道あらば正覺とらじ、極樂國土に生じたる人天復三惡道にかへらば正覺とらじ等と云大願を四十八立て、其上に兆載永劫の間、六度の萬行をおくりて其萬行を亦四十八願に極め、四十八願を亦第十八の念佛往生の本願に極めて、名號酬因の報身報土と成じ玉へり。爾らば知るべし、一切の諸佛の他力の大悲を集て以て極樂の依正二報とは成就し玉ふ故に、繫念一處相於西方と擧げて、其極樂の種種の莊嚴をほめたる其中の寶樹の天蓋の內に、恒沙の淨土の一切の佛事、穢土の中の無量の相貌悉く顯現す。故に經に云く「寶蓋

円明にして内に三千の理、依正二報の明を照し、悉皆浄土背く恋の中に現じて、照顧にの人天般見せすと云ふことを無し。回り又正観を説くには「無量寿仏八萬四千の光明あり、一一の光明、遍く十方の世界を照して念仏の衆生を摂取し捨てたまはず」、但當に憶想して心眼をして見しむべし。此事を見る者は、即ち十方一切諸仏を見たてまつる。見たてまつるを以ての故に念仏三昧と名づく」と。今の無量寿仏の微妙不除の光明とは是れ阿弥陀仏の成就して成親し玉ふ所の三世の諸仏の華厳大道の南無阿弥陀仏也。故に是光明を悟るが即ち諸仏を見る道理にてあるを以ての故に、諸仏を見る位を念仏三昧と説く也。然るに光明を見ると云ふは諸仏の正の依我等衆生の上に南無阿弥陀仏と成じ玉ひたりと悟る事也。成し玉ふとは三業に南無阿弥陀仏と称念する即ち是を光明を見るとも説き、諸仏を見るとも明す也。故に此光明は常光にあらず、是れ智慧光なり。然らば則ち是の行者一切の浄土一切の諸仏を、他力大悲の一位の位になし極めて、是を繋念一縁と設き、念仏第一と云て、諸の我等衆生の上に南無阿弥陀仏と極め正ひたり。是を以て明に知るべし、此南無阿弥陀仏と成したる往生の両には、諸仏諸菩薩、天曲地祇、三宝世間浄一物として漏るゝ所あるべからず。故に諸の聞法の人は即来迎し、往生臥に音大幸土の明王冥衆、十方三世の諸仏菩薩に顕に何をなか「値を避ぶる也。爾らば佛神には念誦するも有しから事、念誦せざるも何の言にもなし、何ぞ一片に念誦せざれといましめんや。是も角も意に任せて自在なるべき事なり。

次に『阿彌陀經』の意は佛果菩提の因行に出づべき事を明す也。然るに助業の行は必ず安心正定業の所より出づるもの也。故に前の『觀經』にて定めつる證得往生の安心を全體の如く決定してそれより正定業の稱行には讓れとて正助二業の體を執持名號一心不亂と轉て置て助業の依止とする也。然るに助業の時は三業の自力に墮りて背道の正道にかはらず。而念佛はげみても念佛に任ずる故にややもすれば雜行雜修の位に至つる也。然るを前念の安心より後念する時、一念一行もむなしからず、正定實の功德となる故に、正定業を以て助業の依止とする也。然るに助業の想行とは、此等を分別の開象ゐる所の三寶諸神の大悲應を佛讚し稱する行依也。外に三世の諸佛菩薩を分別『觀經』の念佛往生の位に至りはんと欲して諸種の類根に感で漸々に正直にして各々慈行當行し給ふこと無數の徳なり。故に『法事讚』の上に云く「誰って道場の眾等に告す、各各心を誠めて佛救に寄して願を叩いて歸命して本師釋迦佛世尊の諸の化導を禮したてまつる。佛に歸依する所以は、佛法是れ衆生の大悲之の飲水是れ出界上の資糧たり」此世往を計れば、發動を離ることを覺ふるとも無し。殷しこ質の經には曰く、「一一の言説關佛正より聽り諸法に示るまで專心に法を求めて障を顧みず、世に身世行して皆で求法或は人の語め讀ぬるに遇て此身分張するを可し、或は自ら身を割いて師の命を這べ、或は千頭を捨てゝ以て法を求め、或は千釘を打つて句を求め、或は身血を割して以て法を寫ひ、或は妻子を捨てゝ以て三寶に充し、或は善巧方便を設けて、化して獸魚と作りて用

【六畜】馬、牛、羊、犬、豕、鷄。

して畜生を調し、且群類を離れしむ。或は父母の師と作りて以て國土に上り、或は百家と作りて種々の方便を以て衆生を攝めんが爲に堕落し、或は四衆を護ることを祈りて、或は外道を調ることを以て佛道の利を說く。彼我の差別何ぞ異ならん。三寶の威力を皆と與に相讚し、遂に道を以て、始めて佛道に入ることを得しむる佛と說く。乃ち道場の聖衆各衛護の心を起さしめ、遂に佛家に生じて、淨土に往生せしむることを說く。哀なるかな、世間衆生は無學を法として輪廻に流轉として徒勞の苦惱を忍び、又、畜生の身に苦行すと雖も小果を望み、等しく歸依を以て道場に歸して菩提に趣かしめんことを欲し給ふ。已上此の如き等の諸佛の方便も衆生に縁しくもかづいて佛道の邦をむすばんとを作して種々に利をやはらげ淨土に交りて、應の意樂にしたがひ玉へり。當に知るべし、伊勢天照太神、熊野三所權現等皆是れ佛菩薩の應現也。故に弘法大師伊勢太神宮に御參詣ありし時の御告の前に云く、「前は是れ日來の秘密、垂迹は是れ如來の三密、如來の垂迹と云ふ」と。爾らば知るべし、如來の三密一體の垂迹の佛國も假りに神明と顯はれて而も本迹和合し、眞佛相應して未來の二世を利し、又、一切衆生に現世安穩後生善處と說くは是れ也。「故に眼助鳥獸助より出來た佛を衆生諸佛の因縁を受け結縁を受けて今此本願の正覺にはとりつきたり、何ぞ千足を並べて迷妄をなさざるべき。しかのみならず世間の有情非情貴賤男女牛馬六畜等に至るまで、恩をうけずと云ふ事はなし。故に經に云く、「有情輪廻して六道に生ずること猶し車輪の始終無きが如し。或は父母と爲り、男女と爲

【四恩】父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩。

り、生生世世に互に恩あり」已。「最も止悪修善にはげまして、「上三寶に獻じ、中四恩に報じ、下三塗に及ぶまで皆佛道を成ぜし」と廻向すべし。然ば中俗行門にかへらん時は殊に神明の本意に冥合すべし。止悪修善の道理の正直なる處、即ち神慮にある故也。されば伊勢太神宮に詣するに内外の清淨あり、謂ゆる外の清淨とは精進潔齋にして身を穢惡に觸れざる也。内の清淨とは胸の中に名利の望をおかさざる也。若し是の如き内外を清淨になさずば、縱ひ日日夜夜に參詣して幣帛神明をさゝげ、經兇法樂を致すとも都て納受し玉ふべからずと御託宣の詞に見へたり。加様の神慮を顯し玉ふやらん宮だちの風情も處がらの樣も信心肝に銘ぜり。殊に内宮の有様を見奉るに御川邊にみなぎりて山林清淨を浮め、石巌滑く苔むして古木重々につらなれり。誠に是れ靈山淨土の寶儀もかくやと思ひやられたり。さて御社壇の姿を拜するに垂跡をもたゝらめずして、かたさがりなる山そばに立てられたり。御寶殿の上も茅ぶきにして檜もすぐなり。鳥居の柱木もそらず、御供の米もたゞ三升つく也。是則ち名利の思を離れたる正直の頭にやどらんとの御本誓を萬人に示し玉ふ表示かと感涙をもよほす也。諸神の冥慮皆是の如くに在すべし。故に本迹は權實と排り玉へども、化道の所は全く是れ一也。是はこれ阿彌陀佛の自證化他の方ぞ三世の諸佛と顯はれ、日本國の諸神とまみへて、國王を守護し、萬民を成就せしめ玉へり。此故に法會の砌には必ず神分と云て神明を勸請申すこと、是れ自他宗の法則也。故に殊に念佛の行者の爲には參詣し、或は禮拜して歸依渴仰し奉るべき事也。されば法然上人は建暦二年壬申正

月二日に御老病づきて同じき二十五日に御臨終ありき。同二十二日の夜半に賀茂の大明神御來臨ありて上人を訪ねて言はく「御病惱さぞ苦しく在すらん、さて一大事をばいかゞ定め玉ふや」と問ひ玉へば、上人「一選擇本願念佛と定め候」と答へ玉へば、「さては目出たく候」とて良久御物語ありて忽然として還御ありき。是を以て知るべし、諸神念佛往生の道を守護し玉ふことを。何ぞ念佛の行者の諸の神祇冥衆を厭ひ玉ふべきや。但し今此三經の意に依て三部の義理に達したる人の前には、佛神には諂ずべからずと禁むるも又諂ずべしと勸るも、又佛神と云て外にあるべからずと證ずるも共に違ふべからず。さもなき愚人の情として佛神に祈誓をおし留る事は大なる錯也。當世の念佛申し玉ふ在俗の衆の中に、此見をなす人多し。佛神に諂し、餘法を行ずる事を簡ぶのみにあらず、世間の禁忌をも恐れざれ。祝言をもおこなはざれ。淨不淨をも顧みざれと云ひ、或は又先祖の塔婆位牌なんどゝ云ふ效も無益と嫌ひて萬を恣にふるまへり。加様の趣ども經釋の面に見へず、若したゞ本性のなす所敗と嫌はれて否こそふられ候へ。但し左様の道理のなきには非ず、凡そ禁忌、祝言、吉凶、禍福等と云ふ事は皆迹門の時の沙汰なり。本門壽量の處よりは生死涅槃猶し昨の夢の如しと簡て眞空冥寂の所に至る也、又淨土宗の現身證得の南無阿彌陀佛の處にも是等の差別あるべからず。諸神も皆此所に和合し玉ふ故に、深く生死を忌み玉へり。但し生死を忌むとは、必ずしも生死の處を忌むに非ず。生に執して喜び死に執して歎く、其着心をいみ玉へり。故に聖道門の方には、生死去來等の相は皆是れ本空の上

に浮める假の作用と知りて是に著することなかれと云へり。淨土宗の意には生死變滅の相は是れ娑婆流轉の形也と知りて穢土を厭ひ離れよと云ふなり。爾らば知るべし、聖道淨土共に都て生死の相には著する事勿れとの御神慮なるべし。但し卽便往生の處には全く差別の色あるべからず。たゞ南無阿彌陀佛の一法なりと識するは正定業の安心の時の事なり。此上に助業の起行に遇る時は、一切に亙りて如法如律に翔ふ故に、處に隨ひ、時に隨ひ機に隨ひて其路を破らず、其風にさかはず、行ひ勵むを眞實の念佛の行者とは申す也。而るに我等衆生は旣に生を神國にうけ、哀れみを和光に蒙れり。尤も垂迹の方便に任せ奉りて禁忌を恐れ罪障を懺悔すべし。然らば則ち安心正定業の位は第三業の法儞にて無相無着なれば禁忌なし。助業の修行の時は機情の三業にかへる故に、諸事に亙りて著相多し。此時は又攝取不捨の行體も自發隨緣の抑止にくだりて、衆生の惡業を忌み玉ふ。故に諸神も同じく是を忌み玉へり。夫れ禁忌と云へるは佛神に隔てられ奉る事なり。卽ち衆生の心水に著相の波起る時は生と佛と異なり、慚愧懺悔の底清き時は佛月影をたれ玉へり。是を以て知るべし。我意に惡業うかまん時は佛神に忌を蒙ると知りて卽ち立ち所に懺悔を致すべき也。今の時の念佛申し玉へる在俗の人々の有樣を見るに愛著深くましますやらん。妻子財寶等のゆたかなる時は喜び失滅する時はけしからずにこれをかなしみ玉へり。故に神明の忌み玉へる内外の不淨とは是著相也。著相とは卽ち愚癡也。故に聖德太子の『明眼論』に云く、「凡夫見前の不淨の如きは酒肉五辛を食して宿を歷ず、婬欲を行して淨水に浴

せず、是を以て不淨と爲す、此は是れ智者愚者通用の威儀也。是の如きの不淨を以て法衣を著し、佛室に入りて說法すと云はゞ、是の處あること無し。聖知見の不淨には然らず、愚癡を以て不淨の中の大不淨と爲す、是故に愚癡に十種あり云云。」返々も安心起行のわかち能々分別し玉ふべし已上。」

愚要鈔終

昭和三年八月五日印刷
昭和三年八月十五日發行

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部第三卷

不許複製

編集者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興會
代表者 井滋廣三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社 東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村山太郎 • 製本所 岡山保孝

東京市赤門前
山喜房佛書林
振替東京一九〇〇
電話小石五三六一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 4264